

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第134集

# 夏本遺跡発掘調査報告書

(2013.6/5)

国道45号大槌バイパス関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団  
埋蔵文化財センター

夏本遺跡発掘調査報告書正誤表

頁	行	等	誤	正
35	10		中期後葉	中期中葉
60	2		波線	沈線
70	6		小形	小型
77	3		粗整土器	粗製土器
78	5		指定	推定
102	下8		底面	床面
107	15		上がり示すが、	上かりを示すが、
110	16		器27.5cm	器高27.5cm
110	下12		器を持つ。	器高を持つ。
136	2		本遺の	本遺構の
140	13		57cm	5.7cm
143	7		鍛冶	鍛冶
149	下4		平形	円形
150	6		全くないや	全くないことや
151	4		粘土で	粘土を
153	8		底と	底部と
156	下15		粗掘りの中の	粗掘り中の
157	6		合形状	台形状
159	8		断面形	台形状
159	下5		跡線	路線
164	4		地文RL	地文はRL
166	11		下線部	下端部
169	下2		加土	加工
185	下10		Ⅱ群3類針器	Ⅱ群3類土器
186	5		同形	円形
187	5~6		2類期5棟、3類期3棟、末葉期6棟となる。	1類後半期5棟、2類期3棟、3類期6棟となる。
187	下15		石囲炉となっている。	石囲炉1となっている。
187	下3~2		掘り込み上	掘り込み式
191	下9		降帯	隆帯
191	下2		3類土器	2類土器
199	1		本遺跡は・・・遺跡である・・・	本遺構は・・・遺構である・・・
207	下4		土師群	土器群
214	下15		複合遺跡	複合遺跡
214	下5		No.1(486)	No.1(400)

図版目次

第29図から第133図まで頁数1繰り下げ

例 第29図 AI 8住居跡出土遺物(1) ..... 45 ..... 44

# 夏本遺跡発掘調査報告書

国道45号大槌バイパス関連遺跡発掘調査

## 序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,300箇所にあぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発にともなう社会資本の充実も重要な一施策であります。特に幹線道路網の整備は、産業経済開発の大動脈として、多方面から期待されるところであります。

このような埋蔵文化財の保護、保存と開発との調和も今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告の大槌町夏本遺跡は、大槌川左岸の山麓斜面に立地し、昭和62年の発掘調査によって縄文・弥生・奈良・平安時代の集落跡であることが明らかになりました。また、平安時代の鍛冶炉跡の発見は、沿岸部の製鉄史を解明するうえで貴重な資料になるものであります。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成にご協力、ご援助を賜りました建設省東北地方建設局三陸国道工事事務所、大槌町教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より謝意を表します。

昭和63年11月

財団法人 岩手県文化振興事業団  
理事長 中 村 直

## 例 言

1. 本報告書は岩手県<sup>かみへい</sup>上閉伊郡<sup>おおつち</sup>大槌町第24地割字夏本48ほかに所在する<sup>なつもと</sup>夏本遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
2. 本遺跡の岩手県遺跡登録台帳の遺跡番号と調査略号は、次のとおりである。  
遺跡番号 MG 53-1008 調査略号 NM-87
3. 本遺跡の調査は、国道45号改良工事に伴う緊急発掘調査である。調査は建設省東北地方建設局三陸国道工事事務所と岩手県教育委員会事務局との協議に基づき、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
4. 調査面積は5,300 m<sup>2</sup>である。発掘調査は昭和62年4月7日～6月30日、室内整理は昭和62年11月1日～昭和63年3月31日に実施した。
5. 発掘調査は、高橋与右エ門・酒井宗孝が担当した。
6. 出土品の鑑定及び分析は、次の方々に依頼した。(敬称略)  
石器・石製品の材質鑑定 佐藤二郎(佐藤地質工学研究所)  
動物遺存体の鑑定・計測 佐藤正彦(陸前高田市立博物館)  
熊谷 賢(東北学院大学)  
鉄製品・鉄滓の分析・保存処理 大槌町文化財保護審議委員会  
赤沼英男(岩手県立博物館)
8. 発掘調査において、次の機関の協力を得た。  
大槌町・大槌町教育委員会
9. 発掘調査や整理・報告書の作成には、次の方々の協力・指導をいただいた。(敬称略)  
草間俊一(岩手県立盛岡短期大学)、桜井清彦・高橋龍三郎(早稲田大学)、沢館栄吉・花石公夫(大槌町文化財保護審議委員会)、船木義勝・小林 克(秋田県埋蔵文化財センター)、成田滋彦・畠山 昇・坂本洋一・岡田康博(青森県埋蔵文化財調査センター)高橋信雄・熊谷常正・佐々木清文(岩手県文化振興事業団博物館)、武田将男・高橋憲太郎・鎌田裕二(宮古市教育委員会)
10. 野外調査では、白沢次男氏をはじめとする大槌町の方々の協力をいただいた。
11. 本書の執筆は、次のとおりである。  
Iを昆野 靖、II～Vを高橋与右エ門と酒井宗孝が分担し、文末に氏名を記した。
12. 本遺跡で出土した遺物及び調査資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

# 本文目次

序	
例言	
I 調査に至る経過	1
II 遺跡の立地と環境	3
1. 地形と地質	3
2. 周辺の遺跡	4
III 調査の方法と整理	11
1. 調査の方法	11
2. 整理	12
IV 検出された遺構と遺物	14
1. 縄文時代の遺構と遺構内出土遺物	14
(1) 竪穴住居跡	14
(2) 土坑	90
2. 弥生時代の遺構と遺構内出土遺物	102
(1) 竪穴住居跡	102
3. 古代以降の遺構と遺構内出土遺物	107
(1) 竪穴住居跡	107
(2) 住居跡状遺構・工房跡	129
(3) 土坑	148
(4) 溝状遺構	161
4. 遺構外出土遺物	162
(1) 縄文土器	162
(2) 弥生土器	166
(3) 石器	166
(4) 古代の土器	167
(5) 鉄製品	168
(6) 鞆の羽口・鉄滓	171
(7) 中世の遺物	171

V	まとめ	185
1.	縄文時代	185
(1)	遺構	185
(2)	遺物	190
2.	弥生時代	194
(1)	遺構	194
(2)	遺物	194
3.	古代	195
(1)	遺構	195
(2)	遺物	202
4.	中・近世	210
VI	鑑定・分析	212
1.	夏本遺跡出土の鉄滓等について	212
2.	夏本遺跡出土鉄器の金属学的解析について	214
3.	夏本遺跡出土の動物遺存体について	220

## 図 版 目 次

第1図	遺跡位置図	1	第15図	AC 6 住居跡出土遺物	24
第2図	大槌バイパスと遺跡の位置	2	第16図	AD 5 住居跡	25
第3図	土層断面柱状図	4	第17図	AD 5 住居跡出土遺物(1)	27
第4図	遺構配置図	5	第18図	同(2)	28
第5図	遺跡分布図	9	第19図	同(3)	29
第6図	グリット配置図	11	第20図	AE 6 住居跡	30
第7図	AA 2 住居跡	14	第21図	AE 6 住居跡出土遺物	32
第8図	AA 2 住居跡出土遺物	16	第22図	AE 8 住居跡	33
第9図	AB 3 住居跡	17	第23図	AE 8 住居跡出土遺物	34
第10図	AB 3 住居跡出土遺物	18	第24図	AF 7 住居跡	36
第11図	AC 4 住居跡	19	第25図	AF 7 住居跡出土遺物	36
第12図	AC 4 住居跡出土遺物	21	第26図	AI 5 住居跡	37
第13図	AC 6-1 住居跡	22	第27図	AI 5 住居跡出土遺物	38
第14図	AC 6-2 住居跡	23	第28図	AI 8 住居跡	41

第29図	AI 8 住居跡出土遺物(1)	45	第61図	BF 6 住居跡(2)	84
第30図	同(2)	46	第62図	BF 6 住居跡出土遺物(1)	85
第31図	同(3)	47	第63図	同(2)	86
第32図	同(4)	48	第64図	BG 12・BH 13 住居跡	88
第33図	同(5)	49	第65図	BG 12 住居跡出土遺物	90
第34図	同(6)	50	第66図	BH 13 住居跡出土遺物	91
第35図	同(7)	51	第67図	AC 4 土坑	91
第36図	AJ 5 住居跡(1)	53	第68図	AC 4 土坑出土遺物	92
第37図	同(2)	54	第69図	AF 4 土坑	93
第38図	AJ 5 住居跡出土遺物	54	第70図	AF 4 土坑出土遺物	93
第39図	AK 10 住居跡	56	第71図	AG 3 土坑	94
第40図	AK 10 住居跡出土遺物(1)	58	第72図	AG 3 土坑出土遺物(1)	96
第41図	同(2)	59	第73図	同(2)	97
第42図	同(3)	60	第74図	同(3)	98
第43図	同(4)	61	第75図	同(4)	99
第44図	AM 8 住居跡	62	第76図	同(5)	100
第45図	AM 8 住居跡出土遺物	63	第77図	AI 3 土坑	101
第46図	BA 2 住居跡(1)	65	第78図	AI 3 土坑出土遺物	102
第47図	同(2)	66	第79図	AD 8 住居跡出土遺物(1)	104
第48図	BA 2 住居跡出土遺物(1)	67	第80図	AD 8 住居跡(1)	105
第49図	同(2)	68	第81図	AD 8 住居跡出土遺物(2)	107
第50図	BA 14 住居跡	69	第82図	AA 3 住居跡(1)	109
第51図	BA 14 住居跡出土遺物	70	第83図	同(2)	110
第52図	BB 6 住居跡	71	第84図	AA 3 住居跡出土遺物(1)	112
第53図	BB 6 住居跡出土遺物	73	第85図	同(2)	113
第54図	BC 5-1 住居跡	74	第86図	同(3)	114
第55図	BC 5-2 住居跡	76	第87図	AB 6 住居跡(1)	116
第56図	BC 5 住居跡出土遺物(1)	77	第88図	同(2)	117
第57図	同(2)	78	第89図	AB 6 住居跡出土遺物	118
第58図	BD 3 住居跡	80	第90図	AE 7 住居跡	119
第59図	BD 3 住居跡出土遺物	81	第91図	AE 7 住居跡出土遺物(1)	121
第60図	BF 6・BF 7 住居跡(1)	83	第92図	同(2)	121

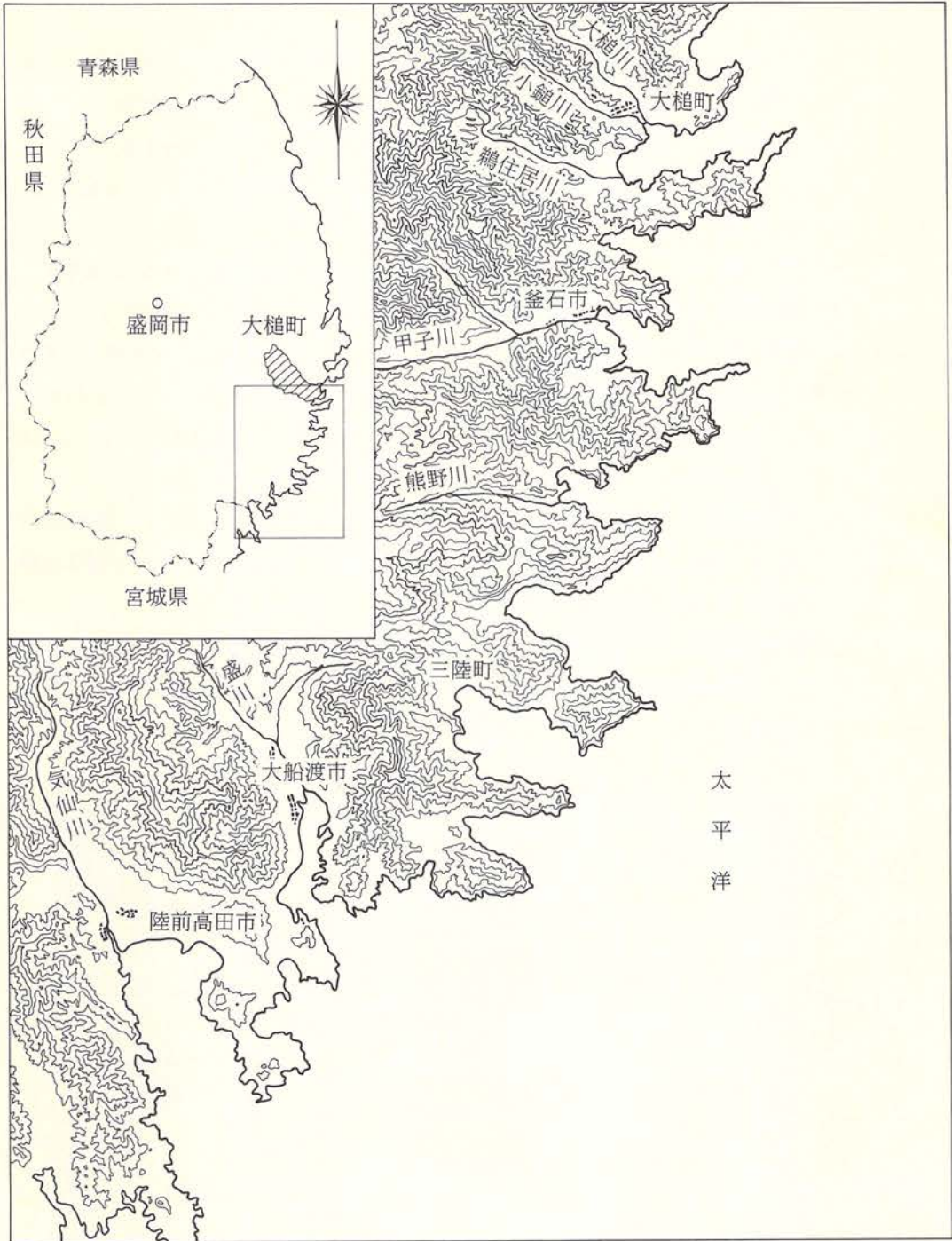


第93図	AJ 9 住居跡	122	第124図	AL 10 土坑出土遺物	157
第94図	AJ 9 住居跡出土遺物	124	第125図	AM 6 土坑	157
第95図	AK 4 住居跡(1)	125	第126図	AM 6 土坑出土遺物	158
第96図	同(2)	127	第127図	AM 7 土坑	158
第97図	AK 4 住居跡出土遺物	129	第128図	AM 7 土坑出土遺物	159
第98図	AJ 6 住居跡状遺構出土遺物	131	第129図	BA 2 土坑	161
第99図	AH 5・AI 7・AJ 6・AJ 7 住居跡状遺構	133	第130図	BF 11 土坑	161
第100図	AJ 7 住居跡状遺構出土遺物	135	第131図	BH 11 土坑出土遺物	161
第101図	AL 8 住居跡状遺構出土遺物	137	第132図	BH 11 土坑	162
第102図	AL 9 住居跡状遺構出土遺物	138	第133図	AK 8 溝状遺構	162
第103図	AL 9 住居跡状遺構	139	第134図	遺構外出土遺物(縄文土器)	172
第104図	BB 12 住居跡状遺構	142	第135図	遺構外出土遺物(縄文土器)	173
第105図	BB 12 住居跡状遺構出土遺物	142	第136図	遺構外出土遺物(縄文土器)	174
第106図	BE 5 住居跡状遺構	143	第137図	遺構外出土遺物(縄文土器)	175
第107図	BE 5 住居跡状遺構出土遺物	144	第138図	遺構外出土遺物(縄文土器)	176
第108図	BF 12 工房跡	145	第139図	遺構外出土遺物(縄文土器)	177
第109図	BF 12 工房跡出土遺物(1)	148	第140図	遺構外出土遺物(縄文土器)	178
第110図	同(2)	149	第141図	遺構外出土遺物(弥生土器)	179
第111図	AC 7 土坑	150	第142図	遺構外出土遺物 (土師器・須恵器・陶磁器)	180
第112図	AC 7 土坑出土遺物	150	第143図	遺構外出土遺物(鉄器)	181
第113図	AD 4 土坑	150	第144図	遺構外出土遺物(鉄器)	182
第114図	AE 4 土坑	151	第145図	遺構外出土遺物(石器)	183
第115図	AE 5 土坑	152	第146図	遺構外出土遺物(石器・羽口)	184
第116図	AE 5 土坑出土遺物	152	第147図	縄文土器集成図	193
第117図	AG 7 土坑	152	第148図	奈良時代の土師器器形分類図	206
第118図	AG 7 土坑出土遺物	153			
第119図	AH 4 土坑	154	表	石器・石製品計測法	226
第120図	AH 4 土坑出土遺物	154			
第121図	AI 9 土坑	155			
第122図	AL 6 土坑	155			
第123図	AL 10 土坑	156			

## 写真图版目次

<p>写真图版 1 空中写真 .....231</p> <p>    // 2 空中写真 .....232</p> <p>    // 3 基本土層 .....233</p> <p>    // 4 AA 2・AA 3 住居跡 .....234</p> <p>    // 5 AC 4 住居跡 .....235</p> <p>    // 6 AC 6-1 住居跡 .....236</p> <p>    // 7 AC 6-2 住居跡 .....237</p> <p>    // 8 AD 5 住居跡 .....238</p> <p>    // 9 AE 6 住居跡 .....239</p> <p>    // 10 AE 8 住居跡 .....240</p> <p>    // 11 AF 7 住居跡 .....241</p> <p>    // 12 AI 5 住居跡 .....242</p> <p>    // 13 AI 8 住居跡 .....243</p> <p>    // 14 AJ 5 住居跡 .....244</p> <p>    // 15 AK 10 住居跡 .....245</p> <p>    // 16 AM 8 住居跡 .....246</p> <p>    // 17 BA 2 住居跡 .....247</p> <p>    // 18 BA 14 住居跡 .....248</p> <p>    // 19 BB 6 住居跡 .....249</p> <p>    // 20 BC 5-1 住居跡 .....250</p> <p>    // 21 BC 5-2 住居跡 .....251</p> <p>    // 22 BD 3 住居跡 .....252</p> <p>    // 23 BF 6 住居跡 .....253</p> <p>    // 24 BF 6・BF 7 住居跡 .....254</p> <p>    // 25 BG 12-1・2、BH 13 住居跡 ...255</p> <p>    // 26 BG 12-1 住居跡・AC 4 土坑 ...256</p> <p>    // 27 AF 4・AG 3・AI 3 土坑 ...257</p> <p>    // 28 AD 8 住居跡 .....258</p> <p>    // 29 AA 3 住居跡 .....259</p>	<p>写真图版30 AA 3 住居跡 .....260</p> <p>    // 31 AB 6 住居跡 .....261</p> <p>    // 32 AB 6 住居跡 .....262</p> <p>    // 33 AE 7 住居跡 .....263</p> <p>    // 34 AJ 9 住居跡 .....264</p> <p>    // 35 AK 4 住居跡 .....265</p> <p>    // 36 AK 4 住居跡 .....266</p> <p>    // 37 AH 6・AI 7 住居跡状遺構 .....267</p> <p>    // 38 AJ 6 住居跡状遺構 .....268</p> <p>    // 39 AJ 7 住居跡状遺構 .....269</p> <p>    // 40 AL 8 住居跡状遺構 .....270</p> <p>    // 41 AL 9 住居跡状遺構 .....271</p> <p>    // 42 BB 12・BE 5 住居跡状遺構 ...272</p> <p>    // 43 BE 5 住居跡状遺構・BF 12         工房跡 .....273</p> <p>    // 44 BF 12 工房跡 .....274</p> <p>    // 45 BF 12 工房跡 .....275</p> <p>    // 46 AC 7・AD 4 土坑 .....276</p> <p>    // 47 AE 4・AE 5・AG 7 土坑 ...277</p> <p>    // 48 AH 4・AI 9 土坑 .....278</p> <p>    // 49 AL 6・AL 10・AM 6 土坑         .....279</p> <p>    // 50 AM 6・AM 7 土坑 .....280</p> <p>    // 51 BA 2・BF 11・BH 11 土坑 ...281</p> <p>    // 52 AK 8 溝状遺構 .....282</p> <p>    // 53 出土遺物(AA 2・AB 3 住居         跡).....283</p> <p>    // 54 出土遺物(AB 3・AC 4・AC 6         住居跡).....284</p>
--	--

写真図版55	出土遺物(AD 5 住居跡) …285	写真図版77	出土遺物(AA 3 住居跡) …307
//	56 出土遺物(AD 5 住居跡) …286	//	78 出土遺物(AB 6・AE 7 住居跡)……………308
//	57 出土遺物(AE 6・AE 8 住居跡)……………287	//	79 出土遺物(AJ 9・AK 4 住居跡)……………309
//	58 出土遺物(AF 7・AI 8 住居跡)……………288	//	80 出土遺物(AK 4 住居跡・AJ 6・AJ 7 住居跡状遺構) ……310
//	59 出土遺物(AI 8 住居跡) ……289	//	81 出土遺物(AL 9・BB 12・BF 5 住居跡状遺構・BF 12 工房跡)……………311
//	60 出土遺物(AI 8 住居跡) ……290	//	82 出土遺物(BF 12 工房跡) ……312
//	61 出土遺物(AI 8 住居跡) ……291	//	83 出土遺物(BF 12 工房跡・AE 5・AC 7・AG 7・AH 4・AL 10・AM 6 土坑) ……313
//	62 出土遺物(AI 8 住居跡) ……292	//	84 出土遺物(AM 7・BH 11 土坑)……………314
//	63 出土遺物(AI 8・AJ 5・AK 10 住居跡) ……293	//	85 遺構外出土遺物(縄文土器) ……315
//	64 出土遺物(AK 10 住居跡) ……294	//	86 遺構外出土遺物(縄文土器) ……316
//	65 出土遺物(AK 10 住居跡) ……295	//	87 遺構外出土遺物(縄文土器) ……317
//	66 出土遺物(AK 10・AM 8・BA 2 住居跡) ……296	//	88 遺構外出土遺物(縄文土器) ……318
//	67 出土遺物(BA 2・BA 14 住居跡)……………297	//	89 遺構外出土遺物(縄文土器) ……319
//	68 出土遺物(BA 14・BB 6 住居跡)……………298	//	90 遺構外出土遺物(弥生土器) ……320
//	69 出土遺物(BC 5 住居跡) ……299	//	91 遺構外出土遺物(土師器・須恵器・陶磁器)……………321
//	70 出土遺物(BD 3・BF 6 住居跡)……………300	//	92 遺構外出土遺物(鉄製品) ……322
//	71 出土遺物(BF 6・BG 12・BH 13 住居跡) ……301	//	93 遺構外出土遺物(鉄製品) ……323
//	72 出土遺物(AC 4・AF 4・AG 3 土坑) ……302	//	94 遺構外出土遺物(石器) ……324
//	73 出土遺物(AG 3 土坑) ……303	//	95 遺構外出土遺物(羽口・鉄滓) ……325
//	74 出土遺物(AG 3 土坑) ……304		
//	75 出土遺物(AI 5 土坑・AD 8 住居跡)……………305		
//	76 出土遺物(AA 3 住居跡) ……306		



第1図 遺跡位置図

## I 調査に至る経過

一般国道45号は、仙台市から陸中海岸沿いを北上して青森市に至る総延長509.8kmの路線である。上閉伊郡大槌町においては唯一の主要幹線道路であるが、近年の交通量の増大に伴う機能低下のため、昭和52年に大槌バイパスの建設が検討され、昭和54年に路線が決定された。バイパスの起点となる大槌町小槌第27地割から終点の大槌町大槌第27地割まで、総延長3.4km、幅員12mであり、昭和56年から事業に着手された。

これに関連する埋蔵文化財の取扱いについては、建設省東北地方建設局三陸国道工事事務所と岩手県教育委員会との間で協議され、昭和57年6月25日付け「建東陸国調第69号」による分布調査の依頼をうけて、県教育委員会文化課は昭和57年10月25日に遺跡の分布調査を実施した。その結果、周知の遺跡である大槌城跡、夏本遺跡等を確認し、同年11月8日付け「教文第421号」により回答した。これをもとにさらに両者間で協議され、夏本遺跡については工事計画に沿って発掘調査することとなった。

その後、県教育委員会は三陸国道工事事務所長あての昭和61年8月20日付け「教文第291号」により、昭和62年度における開発事業に伴う発掘調査について照会し、該当する夏本遺跡について現地確認を実施した。

これにより県教育委員会文化課は、夏本遺跡の調査を昭和62年度における岩手県振興事業団の委託事業とし、当埋蔵文化財センターは昭和62年4月6日付けの委託契約により調査に着手することとなった。



第2図 大槌バイパスと遺跡の位置

## II 遺跡の立地と環境

### 1. 地形と地質

夏本遺跡は、大槌町役場の北約 1.2 km に位置する。今回調査の対象となった地域は、北緯 39° 21'50"、東経 141°54'41"付近で、国土地理院発行の 5 万分の 1 地形図では「大槌」(NJ-54-13-4) の図幅に含まれる。大槌町は北上山地中央部の東端にあり、南は釜石市、西は遠野市・川井村、北は山田町と接している。

岩手県の面積の 3 分の 2 を占める北上山地は、青森県八戸市付近から宮城県牡鹿半島まで、南北約 250 km、東西最大 80 km の紡錘形の広がりをもつ。古世層・中世層とこれを貫くように介在する花崗岩類から構成され、準平原化した老年期山地が再隆起したもので、緩やかな丸味をおびた尾根が連なる。最高峰は、ほぼ中央部に位置する早池峰山 (1914 m) である。東縁は太平洋に接し、山塊と海とが織りなす風光明媚な環境は、「陸中海岸」として国立公園の指定を受けている。このうち、宮古～気仙沼間は大小の湾と岬が複雑に入り組み、典型的なリアス海岸地形を呈し、その規模は日本最大である。各岬は 300～400 m の定高性を示し、湾頭にはいずれも河川が流入して、小さな沖積地を形成している。沿岸地方の各市町村は、この沖積地に立地し、大槌町の市街地も大槌川、小槌川による沖積地に形成されている。この地域では海岸段丘、河岸段丘とも発達が悪く、海岸段丘は霞露ヶ岳半島の一部に観察されるにすぎず、河岸段丘も大槌川、小槌川の中～上流部に小規模なものが分布し、氾濫原もごく狭い。下流部には、両側の山地からの沢によって形成された小規模な崖錐性扇状地がいくつか見られる。

夏本遺跡は、大槌川左岸の山地縁辺部に発達した崖錐性扇状地に立地する。背後の山地は小鯨山 (458 m) の尾根線に続き、扇状地はこの山地に源をもつ小さな沢が形成したものである。

調査区の中央部東側には標高 30 m 前後の尾根が張り出し、調査の便宜上この尾根を境として、調査区を A、B2 地区に分けた。

A 区は、中央部に南流する小枝ヶ沢によって形成された扇状地の扇央及び扇側部で、標高は 4～9 m である。小枝ヶ沢は通常は涸れ沢であるが、降雨時には氾濫をくり返し、たびたび流路を変え、現在は A 区のほぼ中央部に位置している。この沢の西側では、扇状地堆積物が 2 m を越え、遺構・遺物は検出されなかった。遺構の集中区は、沢の東側の扇側部で、縄文時代の竪穴住居跡 14 棟、土坑 4 基、弥生時代の竪穴住居跡 1 棟、古代の竪穴住居跡 5 棟、住居跡状遺構 6 棟、土坑 6 基、近世の墓墳 11 基、時期不明の土坑 5 基が検出された。なお、沢底部分は大槌町教育委員会が追加調査を行い、縄文時代の竪穴住居跡 2 棟を検出している。

B 区は、尾根の東側に形成された埋積谷部のごく小さな崖錐性扇状地の扇頂部である。調査

の結果、中央部西側に細い沢筋が確認された。標高は 17～20 m である。沢の両側から縄文時代の竪穴住居跡 11 棟、古代の工房跡 1 棟、時期不明の住居跡状遺構 2 棟、土坑 3 基が検出された。両調査区を含む遺跡の大部分は畑地及び果樹園である。

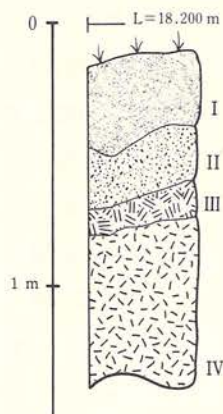
第 3 図は B 区の深掘土層断面図であり、これを基本層序とした。

第 I 層 黒褐色土(層厚 25～35 cm) 耕作土を主体とし、斜面上位ではいくぶん薄くなる。全体に粘板岩の細礫を含む。

第 II 層 黒色土(層厚 15～25 cm) 粘板岩の細礫及び中・小礫を含む。沢の周辺部ではこの下位に黒褐色～黒色土を挟み、A 区では 1 m 以上の層厚をもつ地区もある。縄文～古代の遺物を多く包含する。

第 III 層 褐色土(層厚 10～21 cm) 粘板岩の小・中礫を含む。斬移層的層相を示す。縄文土器片を包含するが、量は少ない。

第 IV 層 黄褐色土(層厚不明) 粘板岩の小・中礫を含む。無遺物層で、B 区で検出された住居跡の床面を構成する。当土層上面が最終の遺構検出面である。



第 3 図 土層断面柱状図

なお、A 区で検出された土坑の壁面及び底面の観察では、IV 層の下位には礫を含まない黄褐色の粘性土の堆積が認められた。また、尾根部のカット面には粘板岩が露出し、これが当地区の基盤をなすものと考えられる。(酒井)

〈参考・引用文献〉

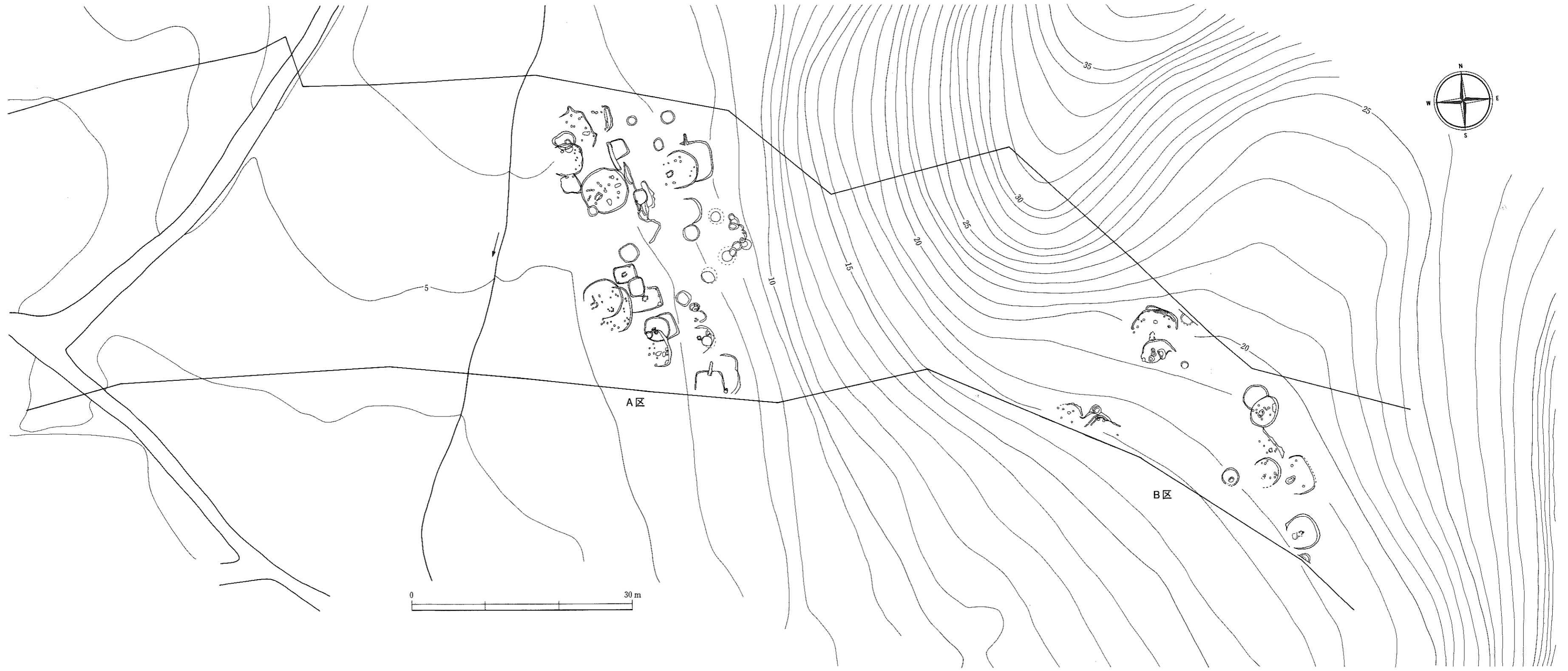
- (1) 岡崎セツ子他 (1974)：北上山系開発地域土地分類基本調査(大槌・霞露ヶ岳) 岩手県
- (2) 吉川虎雄他 (1973)：新編日本地形論、東京大学出版会
- (3) 貝塚爽平他 (1985)：日本の平野と海岸、「日本の自然 4」 岩波書店

## 2. 周辺の遺跡

第 5 図には図幅の関係で大槌町の一部と南に隣接する釜石北部の鶴住居・箱崎半島に位置する遺跡を含め 40 箇所の遺跡を示しているが、大槌町全域には 48 箇所、釜石市の図幅中分に 18 箇所が存在する。

大槌町内の遺跡分布をみると、大槌川沿い 19 箇所、小釜川沿い 9 箇所、海岸部 9 箇所に分かれて位置し、つぎに先の地域区分ごとに時代や時期についてみるとその立地の特徴が分る。

大槌川沿いの 19 箇所は縄文土器を出土する遺跡が 10 箇所知られており、さらにこれらは縄



第4图 遺構配置図



文時代であるが時期不明 2 箇所、中期 3 箇所、後期 3 箇所、晩期 5 箇所に細分され、縄文時代の重複遺跡 1 箇所、古代と重複する遺跡 2 箇所、洞穴遺跡 1 箇所を含む。これらの遺跡は段丘面の形成がみられない下流部では丘陵裾部の緩斜面と低丘陵地の頂上部等に、中～上流部では小規模な段丘面と丘陵裾部の緩斜面に立地する。時期的には晩期が多く、早・前期が少ないという特徴があり、当夏本遺跡と同じ中期の遺跡も少ない。弥生時代の遺跡は 1 箇所のみで谷起島式土器が出土している。立地は縄文時代のそれと同様である。土師器・須恵器を出土した遺跡は 4 箇所であるが、奈良時代か平安時代かは不明であり、3 箇所は縄文時代の遺跡と重複し、立地は縄文時代と同じ地形面である。この時代の遺跡の特徴として製鉄や鍛冶に伴うと推定される鉄滓や鞆の羽口等を共伴する例が多いことで、夏本・櫓沢・門脇沢があげられる。当地域には鉄滓や鞆の羽口を出土する場所が多く知られており、時代は不明であるが留意する必要がある。奈良・平安時代の古代の遺跡は 3 箇所であるが、内 2 箇所は縄文時代の遺跡と重複する。中世城館は大槌城を含め 7 箇所が知られ、約 2 km に 1 箇所の城館が立地することになり、中世の開発と集落の成立・発展を知る上で貴重な示唆を与えている。特に金沢地区は地名が示すように金の採掘を行った場所として良く知られ、集落の発生と採掘が開始された時期は全く無縁とは考えられず、むしろ、密接な関わりをもつと推察される。

小鍬川沿いの 9 箇所は縄文時代 8 箇所、古代 1 箇所に分けられる。縄文時代のうち時期を特定できるのは 4 箇所のみで、他は早期 1 箇所、前期 1 箇所、中期 1 箇所、後期 4 箇所、晩期 1 箇所となり、2 遺跡は各時期と重複する。本地域は大槌川沿いと異なり、段丘面がほとんど観察されないことから、丘陵地の裾部緩斜面に張り付くような状況を示す。当流域の遺跡は大槌川のそれに比較して数が少なく、これは川幅が狭く古期沖積段丘面や洪積段丘面がほとんど観察されないことと裾野が全体的にやや傾斜が強く遺跡の立地に適地が少いことに起因するものであろう。また、現在集落も少なく開発が進んでいないことから、知られていない遺跡が多くある可能性も考えられる。そのほか、古代の土師器を出土した遺跡が 1 箇所知られている。弥生時代の遺跡と中世城館は現在のところ確認されていない。

海岸部の 9 箇所には縄文時代の遺跡が 8 箇所あり、この中に早期 2 箇所、前期 3 箇所、中期 4 箇所、後期 2 箇所、晩期 1 箇所、時期不明 2 箇所が含まれ、2 遺跡は各時期と重複している。弥生時代と古代の遺跡は知られておらず、中世城館が 1 箇所である。これらは汀線が断崖絶壁ではない砂浜の地点の段丘上に立地する。

その他に当町には江戸時代の遺跡が 11 箇所あり、この中には幕末に沿岸警備のために設置された砲台場跡、古墓や経塚といった宗教遺跡が含まれる。

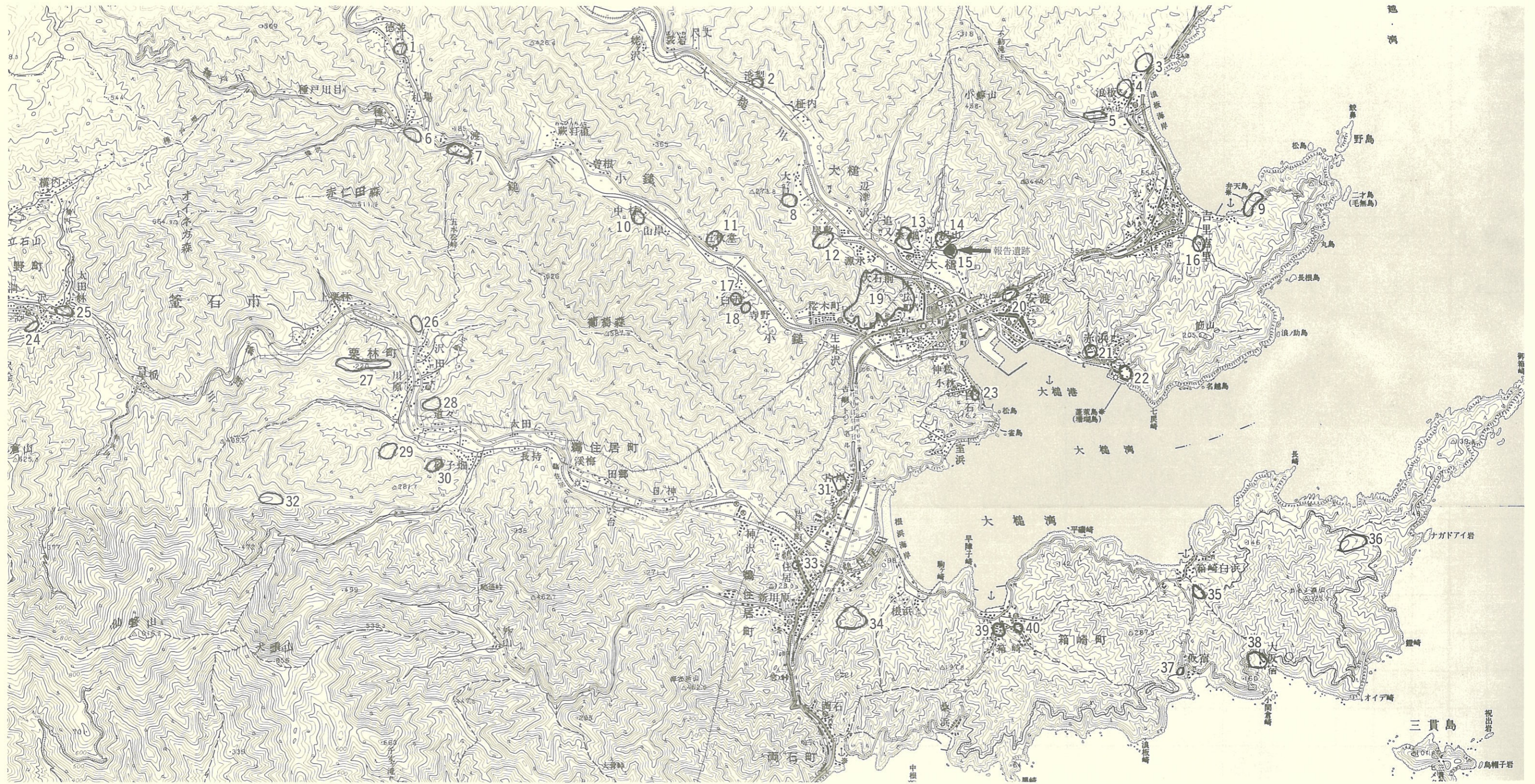
以上の遺跡に対する発掘調査は、大ケ口の櫓沢遺跡が昭和 27 年 5 月 3 日～5 日に東北大学の伊東信雄氏・法政大学の板沢武雄氏によって調査され、製鉄に関わる遺跡として報告されたの

が最初で、その後、<sup>きりぎり</sup>吉里吉里の<sup>きりぎり</sup>崎山弁天遺跡が岩手大学の草間俊一氏によって昭和46年6月1日～10日、同48年11月4日～8日、同54年12月10日～同55年3月31日の3回に亘る調査が行われ、縄文時代早期～晩期の各時期に及ぶ大遺跡であるという大きな成果を上げた。中世の大槌は、大槌城を居城とした遠野阿曾沼氏の一族大槌孫八郎によって統治されていたと言われているが、その大槌城跡は菅原弘太郎氏によって昭和58年10月16～19日、高橋正之氏によって昭和61年11月21～23日の2回発掘調査されている。また、本報告の夏本遺跡の隣接地は大槌町教育委員会によって昭和62年7月21日～9月12日に調査され、縄文時代中期の住居跡が検出されている。

(高橋)

周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡名	種別	遺物・遺構等	備考	No.	遺跡名	種別	遺物・遺構等	備考
1	徳並	集落地	縄文(早・中・後・晩期)	壊滅	21	赤浜II	集落跡	縄文土器	
2	渋梨	散布地	縄文(後・晩期)、石棒	〃	22	赤浜I	散布地	縄文(中期)、石器	壊滅
3	松磯	貝塚	縄文(前・中期)、骨角器		23	白石	〃	縄文(後期)	
4	浪板	散布地	縄文(中期)	壊滅	24	沢楡	〃	縄文(早・中・後・晩期)、石器	
5	角地	〃	縄文(早・前期)、鉄滓	〃	25	太田林	〃	縄文(中期)、石器	
6	種戸	集落跡	縄文(前・中・後期)	〃	26	館	城館跡	平場、空堀	
7	一ノ渡	散布地	縄文土器		27	三竿館	城館跡	平場、空堀	
8	櫓沢	〃	縄文(晩期)、土師器須恵器	壊滅	28	館	〃	〃	
9	崎山弁天	貝塚	縄文(早・中・後期)	昭和46年発掘調査	29	館ヶ森	〃	空堀	
10	山岸	散布地	土師器		30	明神館	〃	平場、空堀	
11	三枚堂	〃	縄文土器、土師器		31	片岸貝塚	貝塚	縄文(中期)、石斧	壊滅
12	くまん館	城館跡	堀		32	荷倉館	城館跡	空堀	
13	挾田館	〃	空堀、平場、帯郭		33	鶴住居	散布地	縄文(中期)	
14	沢山	集落跡	縄文(中期)		34	安倍館	城館跡	平場、空堀	
15	夏本	〃	縄文(中期)、奈良、平安	報告遺跡	35	白浜	散布地	縄文(後期)	
16	古館	城館跡	平場		36	大沢貝塚	貝塚	縄文(中期)	
17	白沢	散布地	縄文(後期)	壊滅	37	仮宿	散布地	縄文(後・晩期)	
18	寺野	〃	縄文(後期)	〃	38	大仮宿	〃	縄文(早期)	
19	大槌城	城館跡		昭和58・60年発掘調査	39	上前畑	散布地	縄文(前期)	壊滅
20	安渡	貝塚	縄文土器、石器		40	中河原	〃	縄文(中期)	〃



第5図 遺跡分布図

### III 調査の方法と整理

#### 1. 調査の方法

##### (1) グリッドの設定と遺構名

遺跡の西側には小さな尾根が南北に張り出し、調査区全体を見通すことができない。このため、便宜上尾根を境として調査区をAB2地区に分け、それぞれの地区で調査区を適宜覆う形のグリッドを設定した。

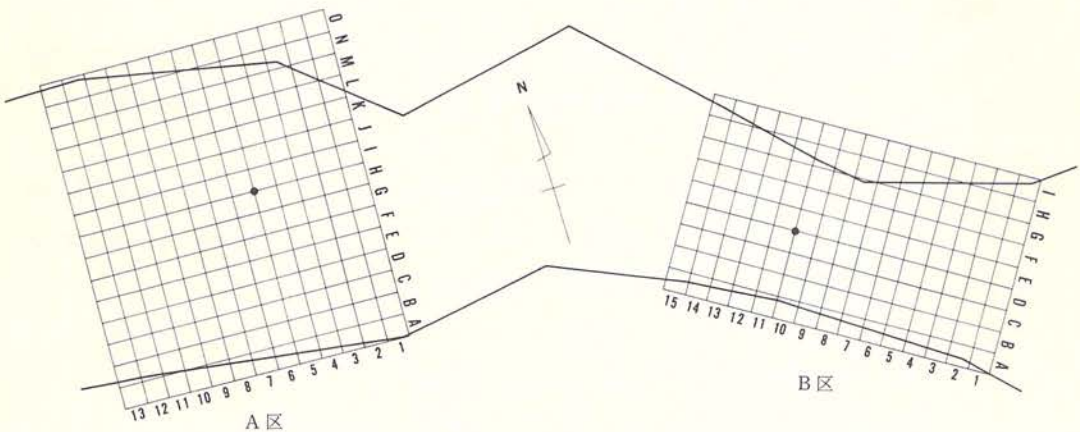
A区 建設省設定の中心杭のうち、No.106とNo.109を結んだ線を基軸線として延長し、後者の杭を基点として3×3mのメッシュで遺構が検出された範囲を区割した。このメッシュの南東端部を基準点とし、南北方向には南からA・B・C……のアルファベットを与え、東西方向には東から1・2・3……の番号を付して、A1・B2と表示した。南北方向のグリッドの軸線は磁北に対して約3°30′西に偏している。なお、見通した中心杭の平面直角座標値は次のとおりである。

No.106  $X = -70057.798$   $Y = +92832.405$

No.109  $X = -70053.787$   $Y = +92829.038$

B区 建設省設定の測量基準杭KE-2と、これに対応する路線の幅杭を結ぶ線を基軸線とし、前者の杭を基点として3×3mの区割を行った。グリッド名の表示方法はA区と同様である。南北方向のグリッド軸は磁北に対して約31°30′西に偏する。基点とした測量基準杭の平面直角座標値は次のとおりである。

$X = -70072.725$   $Y = +92961.933$



第6図 グリッド配置図

遺構名は検出されたグリット名をあて、A区は頭にA、B区はBを付してAA5住居跡、BC3土坑のように命名した。遺構が複数のグリットにかかる場合はより若い区画名によった。

## (2) 粗掘と遺構検出・遺構の精査と遺物の取り上げ

検出面までの深さ及び層序の確認のため、両地区とも斜面に沿って小規模なトレンチを入れた。この結果、A区では西側に向って表土及び第II層の堆積が厚く、沢の西岸部ではこの層厚が2mを越えることが分った。このため、粗掘には人力と重機（バック・ホー）を併用することとした。なお、沢の西側については遺構・遺物の分布確認も合せて重機によるトレンチ発掘を行ったが、いずれも検出されなかったので危険防止のため埋め戻した。また、B区でも西側に埋没した沢の存在が確認され、この部分の粗掘には重機を使用した。この後、人力によって遺構の有無を確認しながら、第IV層まで掘り下げた。遺構が検出された場合には、平面形の把握に努めた。多くの遺構が重複する部分では、この作業に手間取った。

検出された遺構は、住居跡は4分法、土坑類は2分法を原則として精査を行ったが、必要に応じてその他の方法も併用した。また、精査の各段階において必要図面の作成や写真撮影を適宜行った。

遺構内出土の遺物は、埋土では上部・下部に分けて取り上げ、床面出土の遺物は、写真撮影図面作成後に取り上げた。遺構外出土の遺物についてはグリット別に出土した層位を記して取り上げるよう努めた。

## (3) 実測方法・写真撮影

調査区の高低差が著しく、総遣り方を組むことができなかったため、簡易的な遣り方実測を行った。実測図は20分の1の縮尺で平面図と断面図を作成した。また、カマドや炉などの細部の実測は10分の1の縮尺で図面を作成した。なお、遺構の埋土が単層である場合には、その状態を文章記録し、土層断面図の作成を省略したものもある。

写真撮影は6×7cm判カメラ（モノクロ）を主とし、これに35mm判カメラ2台（モノクロ・カラーリバーサル）を補助カメラとして使用した。撮影にあたっては、整理時の混乱をさけるため撮影カードを利用した。なお、野外調査終了後、飛行機による空中写真の撮影を行った。

## (4) 広報活動

埋蔵文化財に対する啓蒙活動の一環として、調査成果を公開する現地説明会を5月28日に開催した。また、近隣の学校・個人や郷土史研究会等の団体から遺跡の見学要請があり、適宜調査員が現場の状況を説明した。主な見学団体と日程は次のとおりである。

4月25日 大槌町立安渡小学校児童100名見学 5月19日 同町文化財郷土史教室25名見学  
5月20・22日 同町立大槌北小学校児童92名発掘体験学習  
6月1日 同町吉里吉里カブスカウト30名見学 6月5日 同町立大槌小学校児童100名見学

(酒井)

## 2. 整理

室内での作業は、野外調査で作成した遺構図面の点検と補正及びトレース、遺物の復元と仕分けを優先させて行った。次に実測・拓本・写真撮影を並行して進めた。この後、実測図の点検とトレースを行い、図版・写真図版の作成を順に行った。個々の整理方法及び縮尺・図版の凡例は下記のとおりである。

### (1) 遺構

遺構配置図は発掘調査時に作成した図面を基本に 1/200 の縮尺図を作成し、不定縮尺で掲載した。各遺構図面は以下の縮尺を原則としたが、一部には縮尺の変更もあり、図版にはそれぞれスケール・縮尺率を付した。住居跡・住居跡状遺構の平・断面図…1/40、カマドや炉などの施設の断面図…1/20、土坑類及び溝跡の平・断面図…1/40。なお、図中で使用した記号及びスクリーン・トーンの指示は次のとおりである。

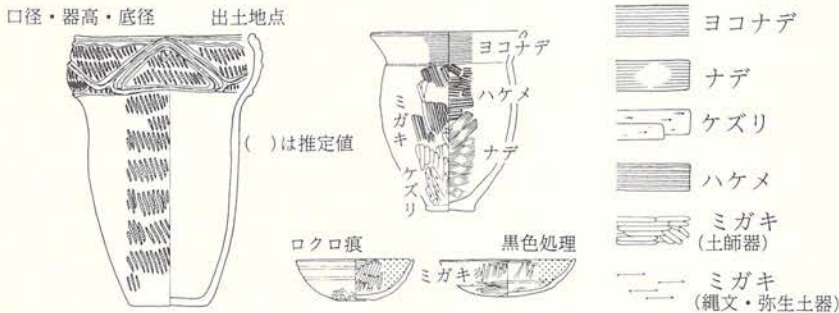


Pot…土器 P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>…柱穴または柱穴状土坑

### (2) 遺物

土器の実測図は原則として、反転実測が可能なもの（口縁部・底部が 1/6 以上残存するもの）に限ったが、器面に凹凸が著しく、拓本では表現できないものや、遺構内出土のうちより小破片のものについては平面実測して掲載した。土師器の調整技法は、明瞭な箇所のみ中軸線の両側 3~4 cm だけを図化した。須恵器は断面を黒く塗りつぶして表現した。縄文・弥生土器のうち、地文のみが施されている土器では、中軸線の左側約 1/3 のみを図化した。掲載遺物の縮尺率、個々の凡例は下記のとおりである。

土器の実測図・拓本…1/3（ミニチュア土器 1/2）、剥片石器・石製品…1/2、礫石器…1/3、大型の礫石器…1/6、鉄製品…1/2 (酒井)



土器実測図凡例

## IV 検出された遺構と遺物

### 1. 縄文時代の遺構と遺構内出土遺物

#### (1) 竪穴住居跡

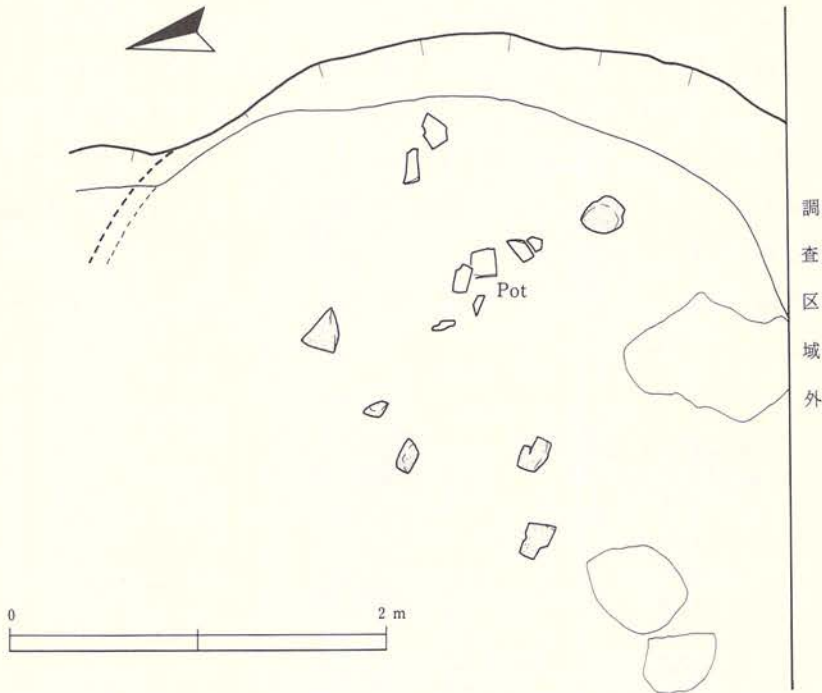
##### AA 2 住居跡

遺構（第7図・写真図版4）

〈検出状況・重複関係〉粗掘り中の土層変化と縄文土器の出土によって検出された。北側が AB 3 住居跡と重複し、南側は調査区域外に延びている。西側は斜面下位に位置するため壁と床の一部が流亡する。

〈規模・平面形〉検出された壁が僅かであるため断定できないが、径 4 m 以上の円形を示すと推定される。

〈埋土〉土層図の作成はないが、調査時の記録では重複する AB 3 住居跡と同じ土質の単層である。



第7図 AA 2 住居跡

〈壁〉北壁の一部にはほぼ垂直に近い部分もみられるが、南に寄るほど外傾の度合いが強くなる。壁高は最も高い東壁で 27 cm あり、北と西に寄るほど低くなる。

〈床面〉粘板岩の小礫が混じる黄褐色土で構築され、平坦で硬くよくしまる。

〈柱穴〉未検出である。

〈炉〉施設を伴う炉は検出されない。南部の床面から検出された焼土は、新しい柱穴状土坑の上部に載る例もあり、縄文時代ではなく古代に属すると考えられる。 (高橋)

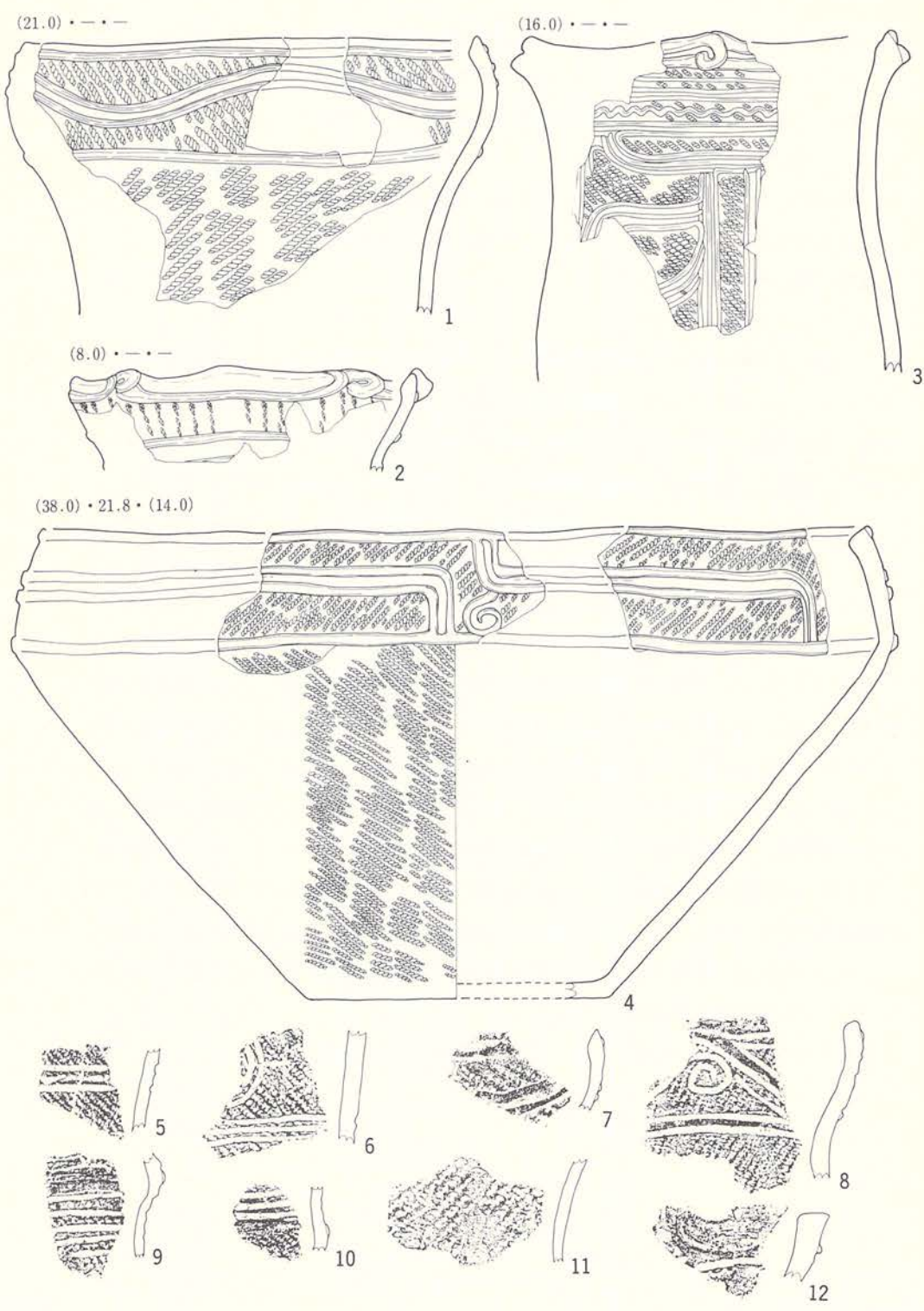
#### 遺物 (第 8 図・写真図版 53)

埋土から土器が出土している。

〈土器〉1 は口縁部～体部上端が残存する、深鉢である。頸部にくびれをもち、口縁部は内湾するキャリパー形を呈する。口縁部上端と下端には隆帯が巡り、この区画内に 2 本一組の隆帯が緩い曲線を描いて貼付され、部分的に渦巻文を構成している。地文は RL 単節斜縄文で、口縁部は横、体部には縦回転で施文されている。2 もキャリパー形を呈する口縁部片であるが、内湾は緩く、全体に開きぎみとなる。口縁部上端には、口唇部で 4 単位の渦巻文を構成する隆帯が巡る。また下半にも 2 本の隆帯が巡り、中央部には縦方向に縄文原体の側面圧痕が等間隔に配される。3 は口縁部が外反して開く深鉢である。口縁部上端には 2 本の隆帯が巡り、小さな山形となる部分では渦巻文を構成している。この下位では、並行沈線、小波状を呈する曲線文が口縁に沿って巡る。体部には 3 本一組の沈線による文様が描かれている。4 は大型の鉢である。体部は外傾して立ち上がり、「く」字に曲がって内傾する口縁部に続く。口縁部の上端と下端は隆帯によって区画され、この中に 2 本一組の隆帯により屈曲部分に渦巻文を配する 4 単位の折曲文様が展開する。地文は LR 単節斜縄文で、口縁部には横、体部には縦回転で施文されている。5・6 は縄文地に沈線で文様が描かれた体部片である。7～10 はキャリパー形の口縁部片である。7 は隆帯、8 は隆沈線と沈線によって文様が施される。9・10 は口縁部下端の破片で、隆帯と沈線が器面に沿って巡る。11 は粗製土器の口縁部片で強く外反する。12 は大型の突起部分と考えられる。全体に緩く内湾する。中央部に円形の孔を有し、この周囲を太い隆帯が取り巻く。器面は全体に丁寧に研磨調整されている。

時期 出土した土器から推定して、縄文時代中期中葉の住居跡と考えられる。 (酒井)





第8图 AA 2 住居跡出土遺物

### AB 3 住居跡

#### 遺構 (第 9 図・写真図版 4)

〈検出状況・重複関係〉粗掘り中の土層変化と、周囲より縄文土器が多く出土することによって確認されたが、斜面に立地することと農道の開削によって西側は遺存しない。南壁で AA 2 住居跡と重複するが、土層や出土土器から新旧関係を明確にし得なかった。出土した土器にほとんど差がみられないことから、極端な時間差はないと考える。

〈規模・平面形〉残存する壁から推定すると径 3.2 m 前後の円形を示すであろう。

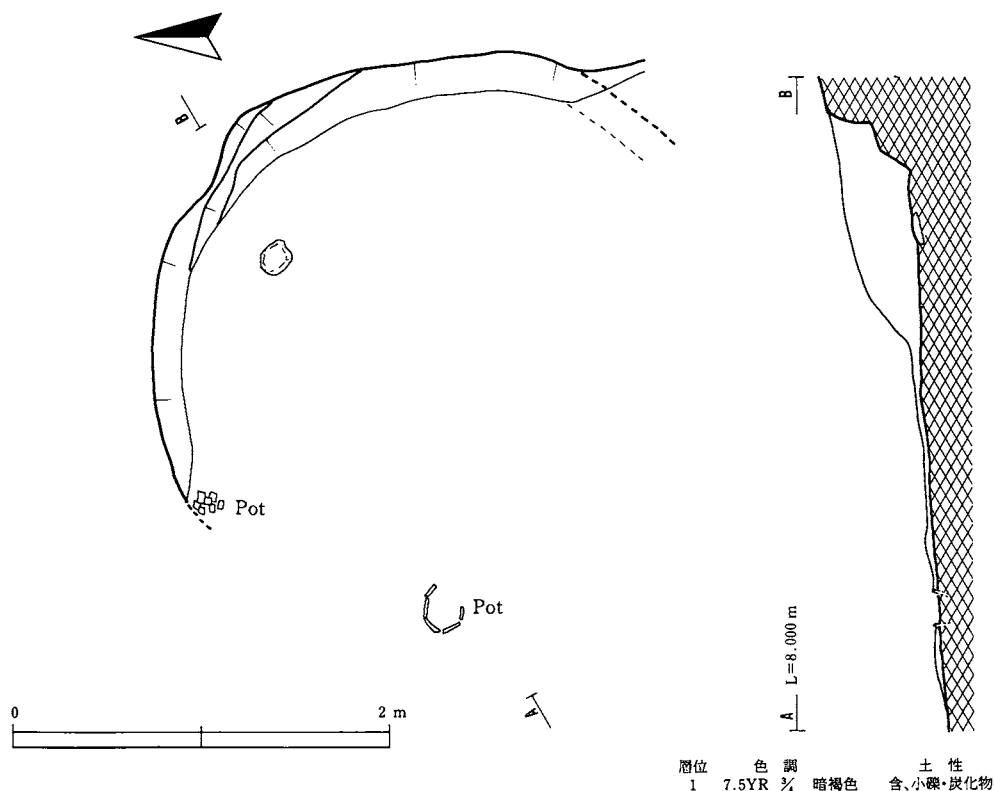
〈埋土〉暗褐色土の単層で占められ、小礫と炭化物が混じり、しまり良く硬い。

〈壁〉床面から外傾して立ち上がり、壁高は最高 40 cm である。北壁に幅約 20 cm の中段がある。

〈床面〉粘板岩の細片を含む黄褐色土で構築され、ほぼ平坦でしまり良く硬い。

〈柱穴〉検出されていない。

〈炉〉検出された範囲では炉と考えられる施設や焼土は検出されなかった。 (高橋)



第 9 図 AB 3 住居跡

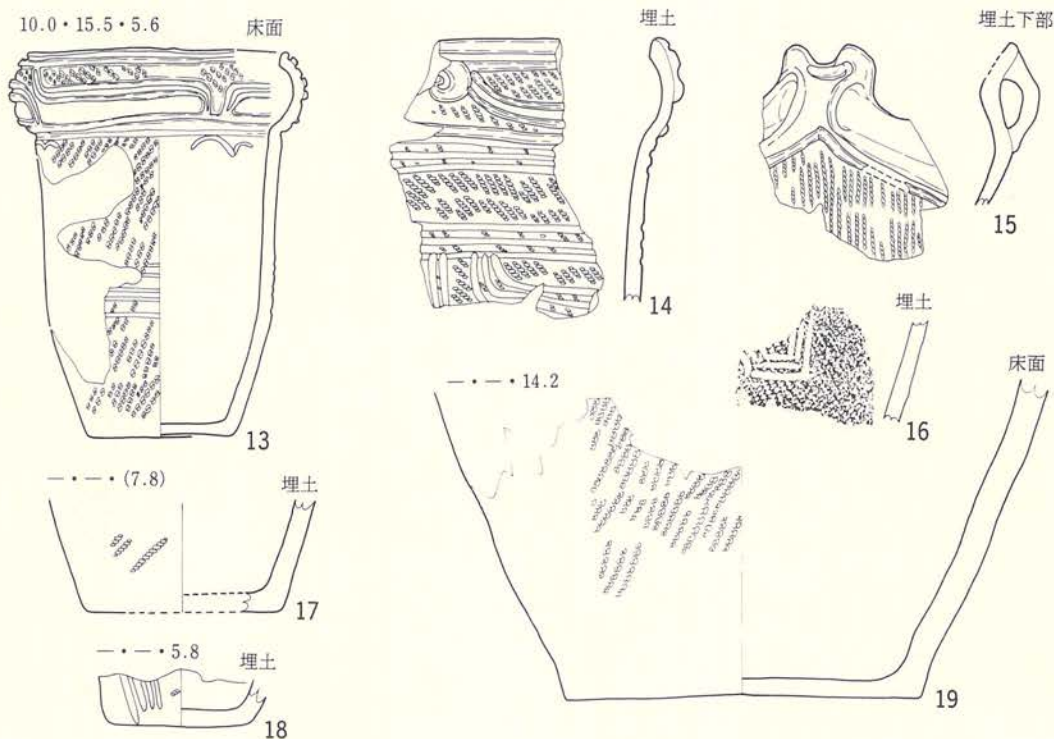
遺物 (第 10 図・写真図版 53・54)

床面と埋土から土器が出土している。

〈土器〉13 は床面出土の小型の深鉢である。体部は外傾して立ち上がった後、ほぼ直立する。口縁部は内湾し、キャリパー形を呈する。口縁部には隆沈線により曲折文が描かれる。体部上端には、連弧状の沈線文、中央に 5 本の並行沈線が巡る。地文は RLR 複節斜縄文で口縁部は横、体部は縦回転での施文である。14 もキャリパー形の深鉢である。口縁部は隆帯、体部は沈線によって文様が描かれる。15 は鉢の口縁部片である。波状口縁で頂部は角状の突起となり、この側辺に橋状把手が付く。また、口縁に沿って隆帯が巡り、この下位には R 1 段の撚糸文が施文される。16 は 3 本一組の沈線による文様をもつ体部片である。17~18 は底部のみが残存する。18 は 4 本一組の沈線が垂下している。19 は床面出土の大型深鉢の底部で、地文は RLR 複節斜縄文である。

時期 床面出土の土器から、縄文時代中期中葉の住居跡と考えられる。

(酒井)



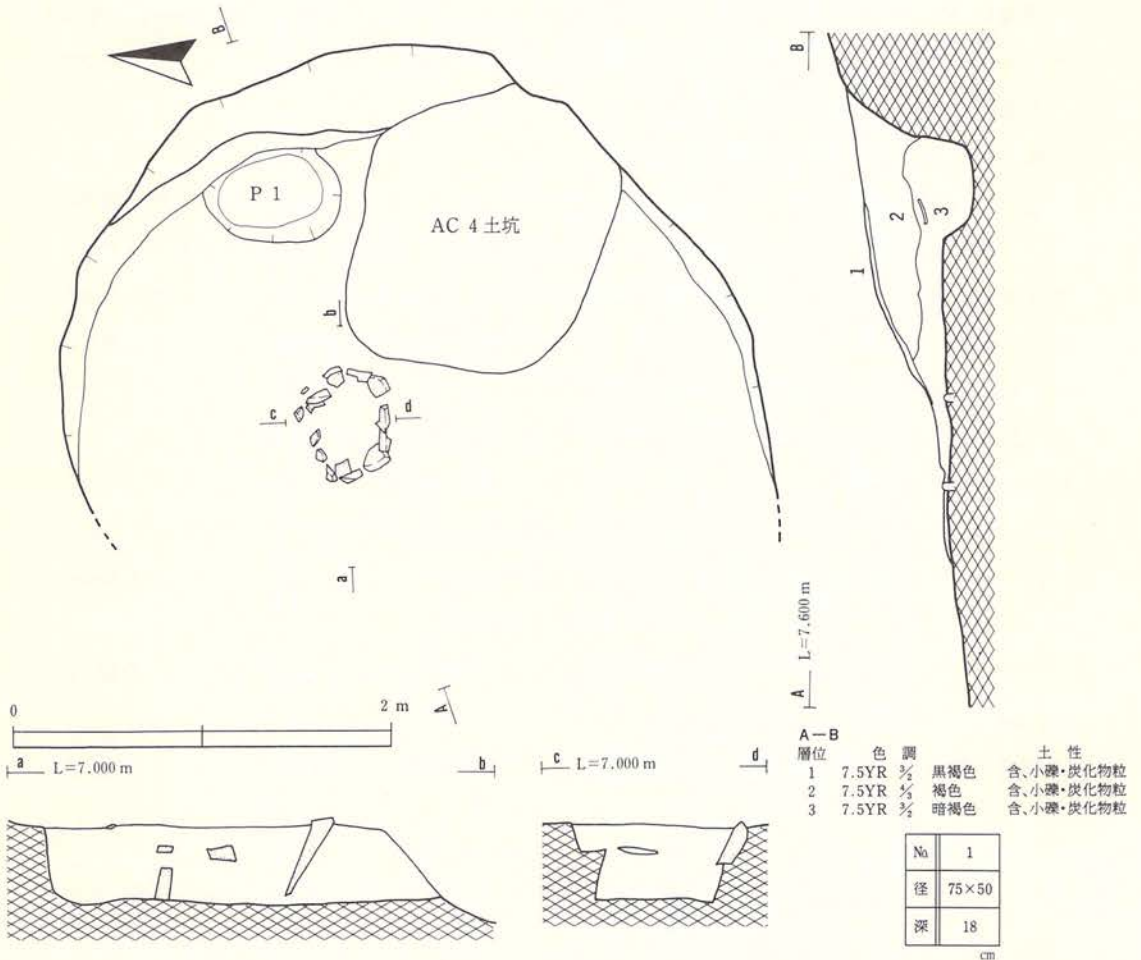
第 10 図 AB 3 住居跡出土遺物

## AC 4 住居跡

遺構 (第 11 図・写真図版 5)

〈検出状況・重複関係〉粗掘り中の土層変化と、周辺部より縄文土器が多く出土することで確認されたが、斜面に立地することと農道の開削によって西側は残存しない。南壁際で AC 4 土坑と重複するが、土坑の埋土内に本住居跡の床面が検出されないことから、本住居跡が古い。

〈規模・平面形〉西壁が残存しないため断定できないが、長軸 4 m 以上、短軸 3.7 m 楕円形と推定される。



第 11 図 AC 4 住居跡

〈埋土〉3層に分けられる。いずれの層も小礫と炭化物を含むが、色調は1層黒褐色土、2層褐色土、3層暗褐色土と異なる。

〈壁〉壁高は最高58cmで、南・北壁とも西側の斜面下位に寄るほど浅くなる。南壁と北壁は僅かに外傾するが、東壁は上部が大きく湾曲して外方へ開く。

〈床面〉粘板岩の細片を含む黄褐色土で構築され、平坦で硬くしまる。

〈柱穴〉東壁際にP<sub>1</sub>を検出したが、規模から考えて柱穴とは言えない。

〈炉〉床面中央やや北壁寄りに石囲炉が設置される。15個の垂角礫を60cm～50cmの楕円形状に埋設し、掘り方は明確でないが、10cm～20cm床に埋め込み、床面上に2cm～5cm露出する。礫の大きさは、最小13cm×6cm、最大25cm×15cmで、長軸を縦に使用している。炉内に明瞭な焼土の形成がみられず、常時掻き出していたか、あまり使用されなかった可能性がある。

〈附属施設〉東壁際の床面に貯蔵穴状の土坑が検出されている。規模は長軸65cm、短軸48cm、深さ15cm～18cmあり、長軸を南北にもつ楕円形を示す。 (高橋)

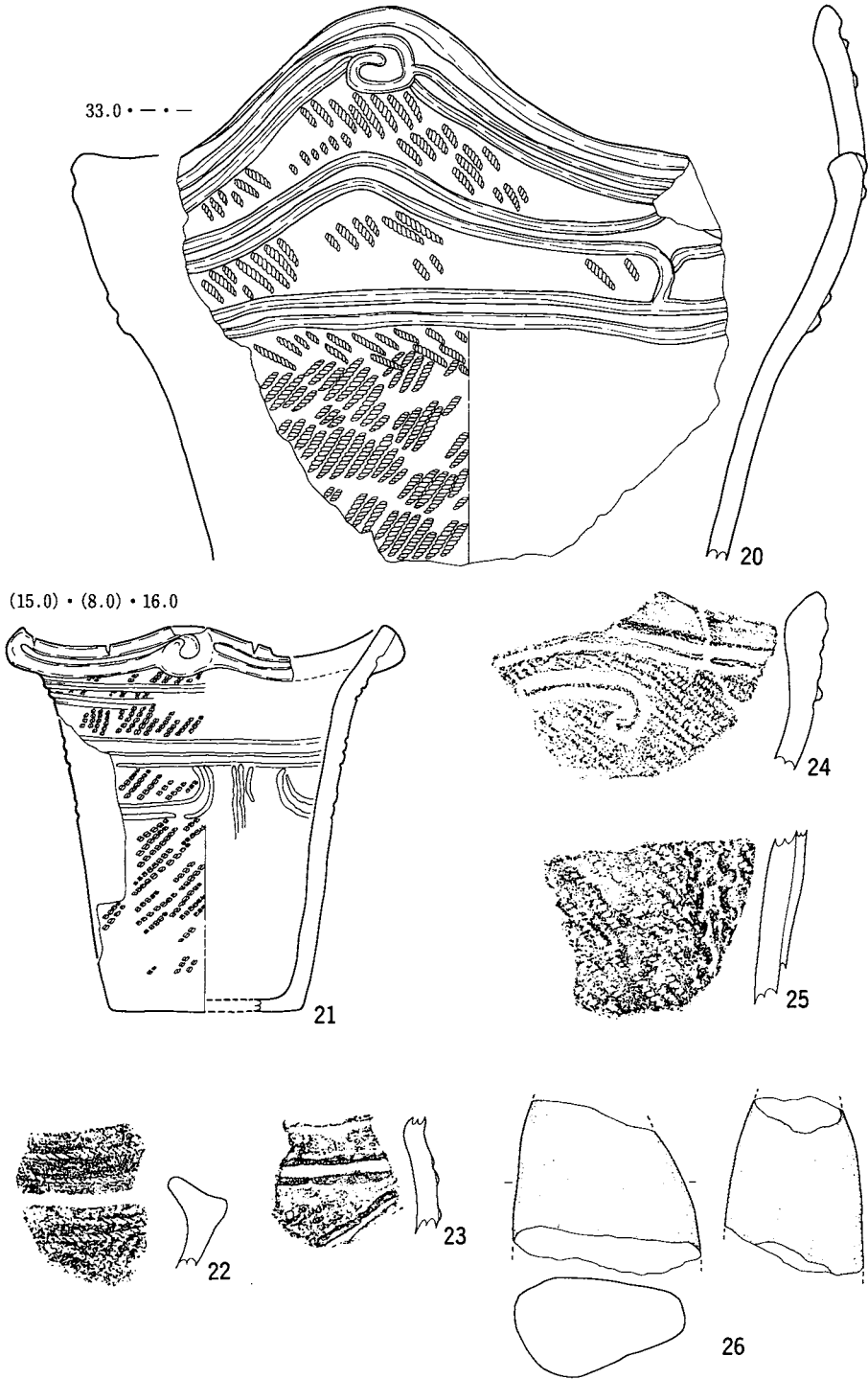
#### 遺物 (第12図・写真図版54)

埋土及び床面から土器と石器が出土した。

〈土器〉20は大型のキャリパー形深鉢で、大波状口縁を呈す。口縁部には2本一組の隆帯によって曲線文が描かれている。口縁部の上端に巡るものは、波頭部で渦巻文を構成している。地文はRL単節斜縄文で、口縁部は横、体部には縦回転で施文されている。21は小型の深鉢である。体部は僅かに外傾して立ち上がり、緩い波状を呈する口縁部は外反して開く。口縁部には2本の隆帯が巡り、波頭部分で渦巻文を構成している。体部には2～3本一組の沈線が、平行文、曲線文を描いている。地文はRLR複節斜縄文である。22は浅鉢の口縁部と考えられる。口縁部は内側に強く屈曲し、2本の原体圧痕文が巡る。体部文様もこの圧痕文によって構成されている。23・24はキャリパー形の口縁部片である。23は2本の隆帯により文様が描かれる。24は大波状口縁で、口唇部は肥厚する。文様は隆沈線によって描かれ、口縁部に沿って巡るほか渦巻文を構成する。25は2本の細かく蛇行する隆帯が垂下する。

〈石器〉床面から26が出土した。大半を欠損する。断面が不整な三角形を呈し、この頂部を使用面とした磨石である。

時期 出土した土器から推定して、縄文時代中期中葉の住居跡と考えられる。 (酒井)



第 12 図 AC 4 住居跡出土遺物

## AC 6—1 住居跡

### 遺構（第 13 図・写真図版 6）

〈検出状況・重複関係〉AD 5 住居跡の精査時に検出された。同住居跡の大半を切っている。また、西側で AC 7 土坑と重複し、壁と床面を切られている。なお、床下から先行する住居跡の床面及び石囲炉が検出され、2 棟の重複であることが分った。新期を 1 住居跡、古期を 2 住居跡として記述する。

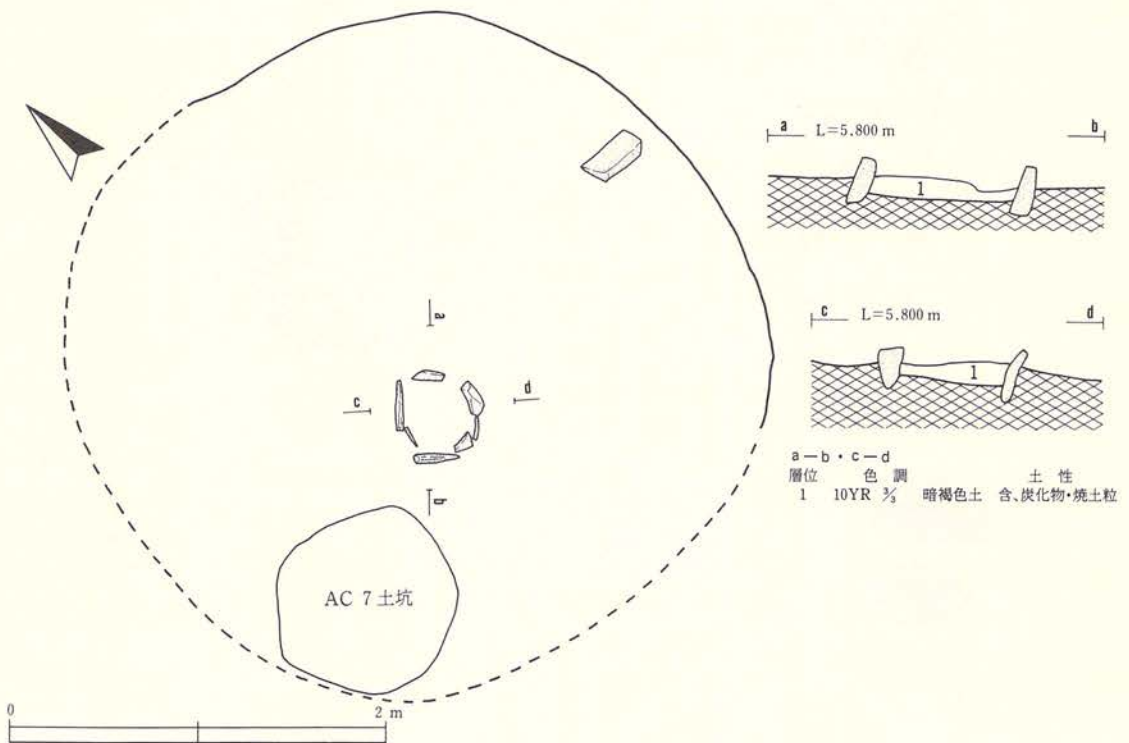
〈規模・平面形〉周辺の土層との区別がつきにくく、明確なものではないが、径 3.7 m 前後の不整な円形を呈するものと考えられる。

〈埋土〉粘板岩の細礫を含む黒褐色土が主体となり、下位に薄く褐色土が堆積している。

〈壁〉全体に明瞭ではない。

〈床面〉2 住居跡の埋土をそのまま利用しており、貼り床等は認められなかった。全体に平坦であるが、硬くしまるものではない。

〈炉〉床面中央部やや南寄りに石囲炉をもつ。扁平な礫 6 個を用い、径 50 cm の不整な円形に構築している。礫は床面より 8 cm ほど埋設されているが、掘り方は明確ではない。焼土層の発達が悪く、炉内の埋土は焼土粒・炭化物を僅かに含む暗褐色土で占められている。（酒井）



第 13 図 AC 6—1 住居跡

## AC 6-2 住居跡

### 遺構 (第 14 図・写真図版 7)

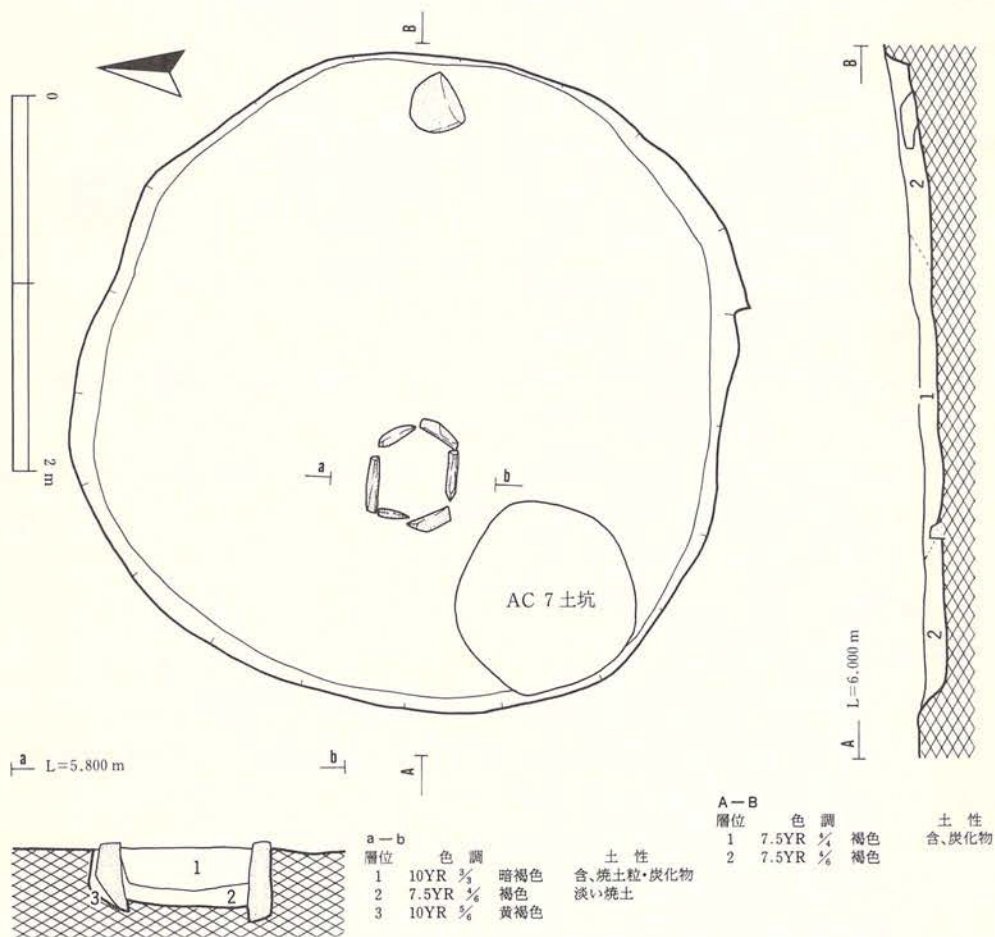
〈検出状況・重複関係〉 AC 6-1 住居跡の精査時に、同住居跡の床面下約 12 cm で新たな床面及び石囲炉が検出され、重複が確認された。1 住居跡と共に、東側で AD 5 住居跡の大半を切っている。また、西側で AC 7 土坑に床面を切られている。

〈規模・平面形〉 径 3.5 m のやや歪な円形を呈する。

〈埋土〉 全体は炭化物を僅かに含む褐色土の単層であるが、中央部はやや汚れが強い。

〈壁〉 いずれもいくぶん外傾して立ち上がる。壁高は東壁 21 cm、西壁 10 cm、南壁 13 cm、北壁 21 cm である。

〈床面〉 粘板岩の細片を含む黄褐色土層面で、平坦で硬くしまっている。



第 14 図 AC 6-2 住居跡

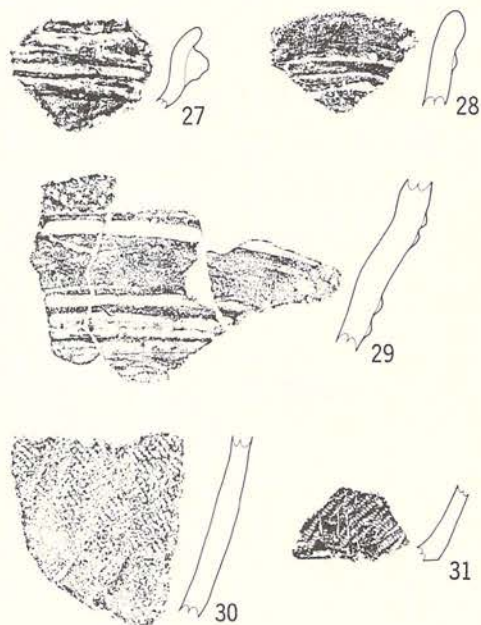


〈炉〉床面中央部やや西寄りに石囲炉をもつ。扁平な礫6個を用い、60×50 cmの不整な六角形に築いている。礫は床面より約20 cm埋設されているが、掘り方は一部で観察されるものの明確ではない。焼土の発達が悪く、底面に最大5 cmの厚さで淡い焼土層が形成されている。

#### 遺物（第15図・写真図版54）

精査当初、AD5住居跡との重複が把握できず、出土遺物の多くをAD5住居に伴うものとして取り上げてしまったため、掲載した遺物は少量となった。また、これらのほとんどは1住居跡の埋土からの遺物である。

〈土器〉27～29は口縁部片である。27は頸部が強く屈曲し、口縁部は短く外反する。中央部には太いツバ状の隆帯が巡り、器面は研磨調整されている。28は緩い波状口縁を呈し、全体に緩く外反する。口縁部に沿って隆帯が巡る。29は大型の深鉢と考えられる。器面には断面が三角形の隆帯が2本一組で巡り、これらに挟まれた部分は無文帯となっている。30はLR単節斜縄文を地文とする粗製土器の体部片である。31は底部片で、2本一組の細い沈線が垂下する。地文はLRの単節斜縄文である。



第15図 AC 6住居跡出土遺物

時期 出土遺物が少なく、詳細は不明であるが、AD5住居跡の出土遺物や重複関係から推定すると1・2住居跡とも縄文時代中期後葉の可能性が強い。（酒井）

#### AD5住居跡

##### 遺構（第16図・写真図版8）

〈検出状況・重複関係〉第III層面で黒褐色土の広がりとして検出された。西側をAC6-1・2住居跡に大半を切られている。残存部では、埋土下位から床面にかけて多量の炭化物や現地性焼土の分布がみられ、焼失した住居跡と考えられる。

〈規模・平面形〉重複のため全体の規模は不明である。残存部は東壁沿い3.5 mで、平面形は長方形を基調とするものと考えられる。

〈埋土〉残存部の埋土は褐色土の単層で、下位に多量の炭化物・焼土ブロックを含む。埋土の

観察では、重複は明瞭ではない。

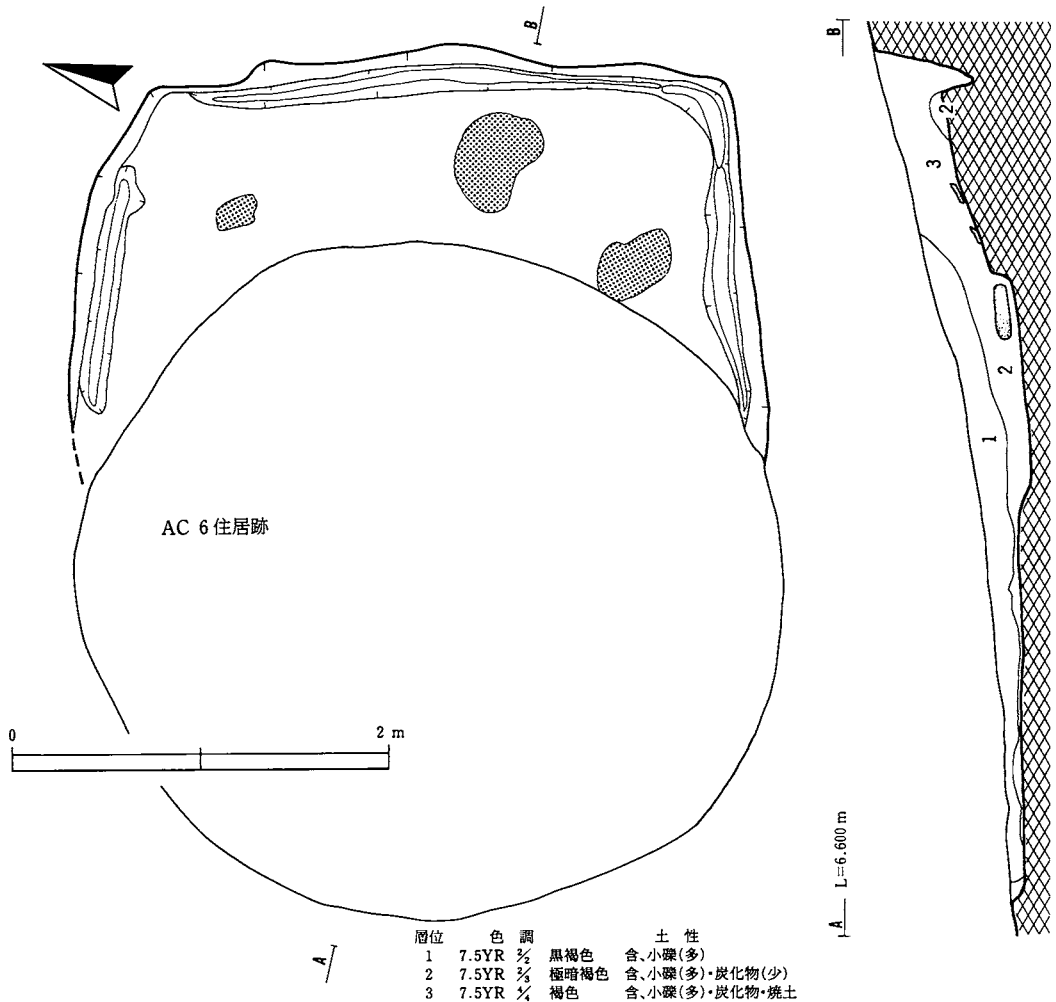
〈壁〉いずれもほぼ直立する。壁高は東壁 36 cm、北壁 23 cm、南壁 33 cm である。また、北東隅部を除いて、幅 15~20 cm、深さ 9~22 cm の壁溝が巡る。

〈床面〉粘板岩の細片を含む黄褐色土層面で、緩く西に傾斜する。全体にやや凹凸があるが、硬くしまっている。

遺物 (第 17~19 図・写真図版 55・56)

精査当初 AC 6 住居跡との重複が把握できず、同住居跡に伴う遺物の大半を当住居跡のものとして取り上げた。このため、掲載した遺物中には AC 6 住居跡に伴うものが含まれる。

〈土器〉23 は大型の鉢である。体部は強く外傾し、上端部から内湾し口縁部に続く。口縁部に



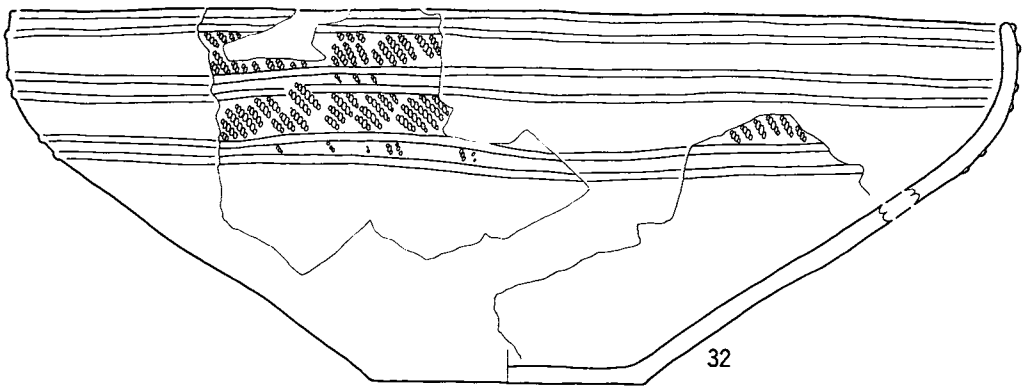
第 16 図 AD 5 住居跡

は2本一組の隆帯が、上端・中央・下端に巡る。地文はRL単節斜縄文で、口縁部のみに施文される。体部及び内面は丁寧に研磨調整されている。33～39はキャリパー形を呈する深鉢である。いずれも口縁部は隆帯によって区画されている。文様も隆帯で描かれ、33・34は1本、35は2本の隆帯による緩い波状文様が巡る。35は口縁部下半が無文帯となる。39は口縁部に2本一組の隆帯による曲折文が施され、頸部には3本の沈線が巡る。地文は33・34・36・37はLR、35・38はRL単節斜縄文、39はLRL複節斜縄文である。34・38は体部が無文となる。40・41は同一個体と考えられる。体部はほぼ直立し、口縁部に向って緩く外反する。体部上端には数本の沈線が巡り、体部には2～3本一組の沈線によって、渦巻文を配した区画性の強い文様が描かれている。42は2本一組の隆帯が垂下し、末端部で渦巻文と棘状の文様を構成している。この隆帯の側辺は丁寧に研磨調整されている。地文はRLR複節斜縄文である。43は3本一組の細い沈線が垂下する。地文はRLR複節斜縄文である。44は隆沈線が垂下する底部片である。45～47も底部片であるが、地文以外の文様はもたない。48・49は口縁の装飾部で、太い隆帯による楕円形文が連続し、これらの接触部は橋状把手となっている。50は口縁部上端に巡る隆帯が渦巻文を構成している。51・52は緩く外反する口縁部片で、いずれも波状を呈する。51は波頭を基点として沈線文が展開し、52は3本一組の並行沈線が巡る。53は沈線による渦巻文が描かれた体部片である。54～61はキャリパー形の口縁部片である。54は頂部に粘土紐が貼付された太い隆帯によって渦巻文が構成されている。55～56も隆帯による渦巻文が配される。59は2本の太い隆帯が巡り、これらが橋状の把手を構成するものと考えられる。60は下端に隆沈線が巡る。61は原体圧痕文による文様が施されている。62・63は同一個体で、RLR複節斜縄文地に2本一組の隆沈線が垂下する。

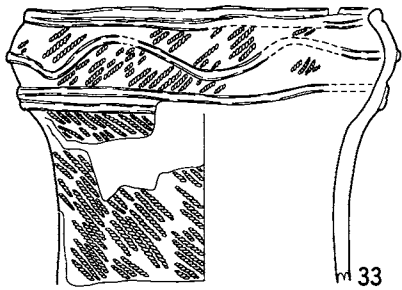
64は波状を呈する口縁部片で、全体に緩く内湾する。波頭部には隆帯による渦巻文が配され、体部には隆沈線による区画文が縦方向に展開する。地文はRLR複節斜縄文である。65・66は沈線区画された磨消縄文によって文様が描かれる口縁部片である。いずれも緩く外反し、65は波状口縁となる。67は口縁部上端に隆帯と2本の沈線が巡る。68は短い折り返し口縁をもつ。69～71は粗製土器片である。69は緩く外反する波状口縁で、上端はいくぶん肥厚し、無文となっている。地文はRL単節斜縄文である。70は口縁上端がわずかに内湾する。地文はRLR複節斜縄文で、口縁上端部が無文となっている。71はLR単節斜縄文を地文とする体部片である。

**時期** AC6住居跡との重複及び出土土器の組成から推定して、縄文時代中期中葉の住居跡と考えられる。(酒井)

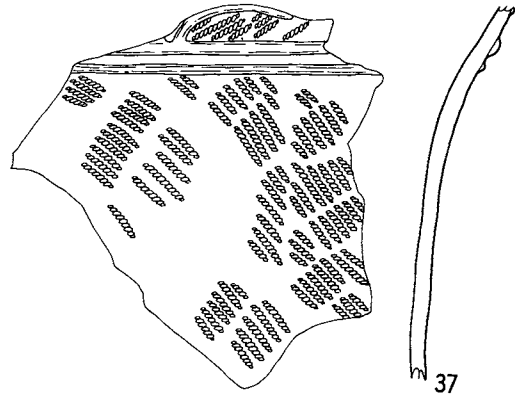
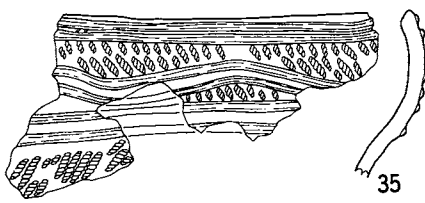
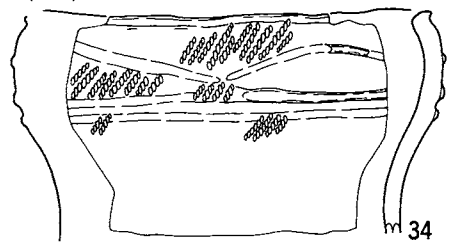
(40.0) • (15.0) • 11.0



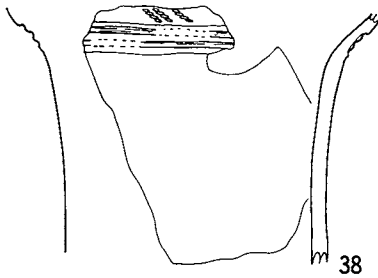
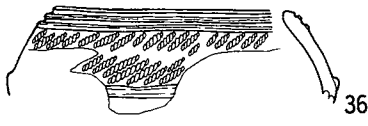
14.0 • - - -



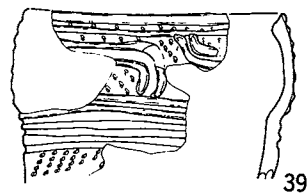
(16.0) • - - -



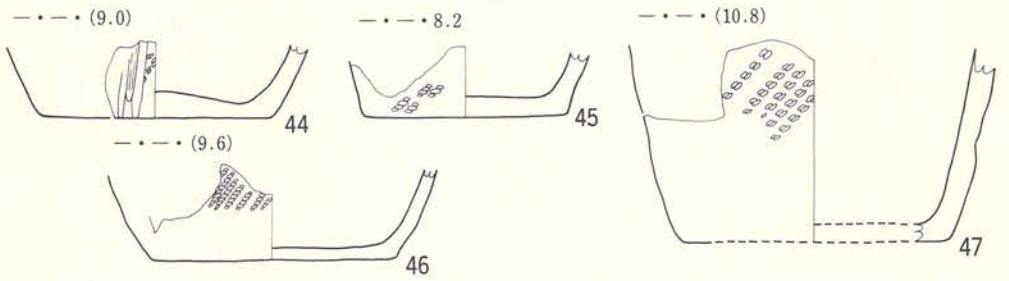
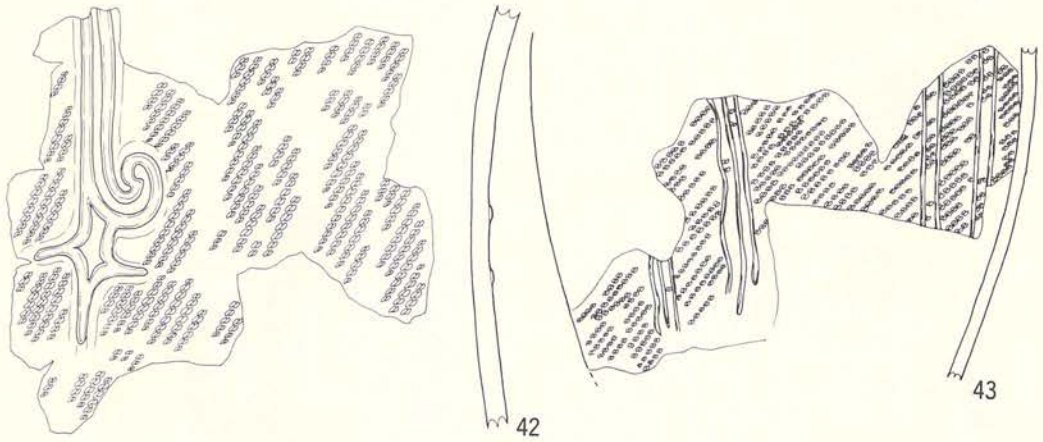
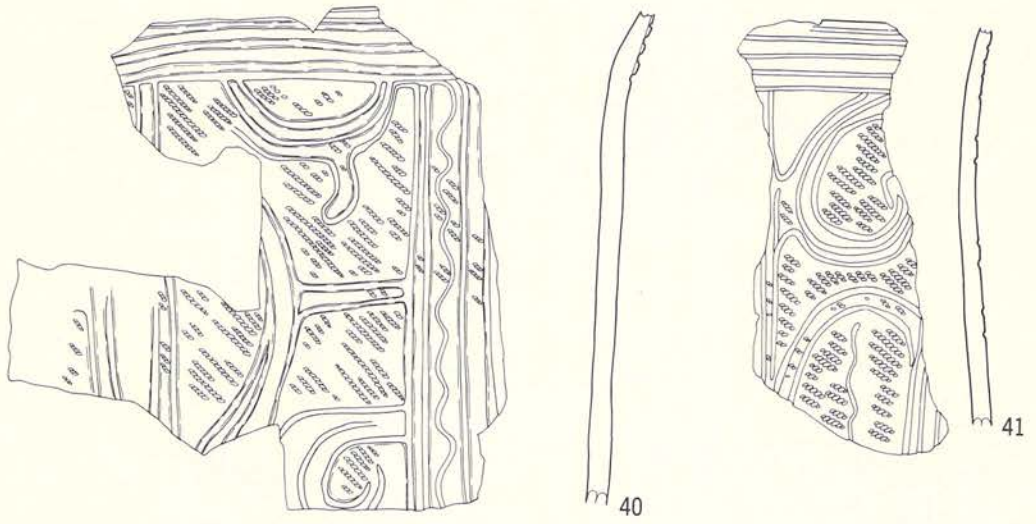
(9.2) • - - -



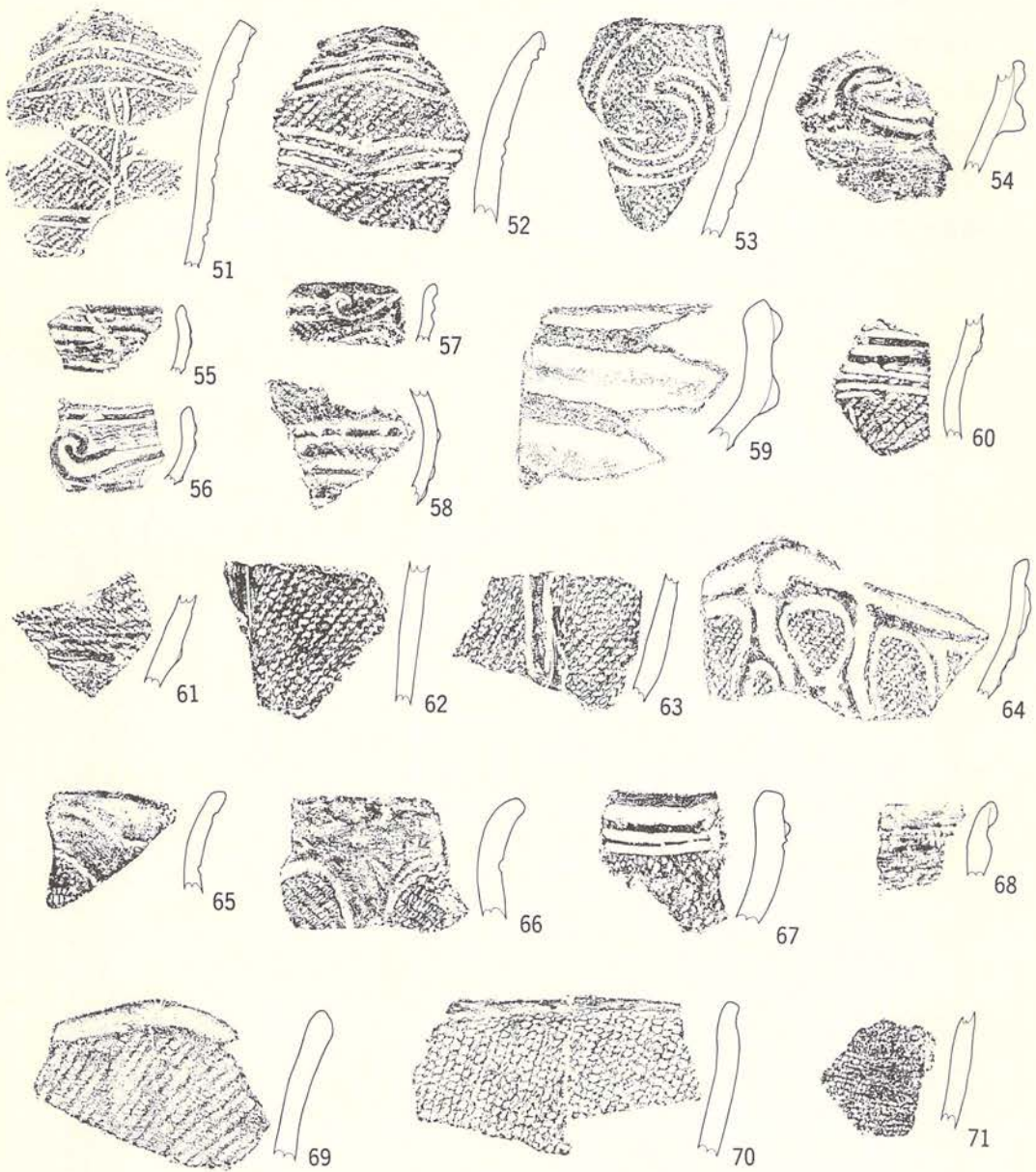
(10.2) • - - -



第17图 AD 5住居跡出土遺物(1)



第 18 图 AD 5 住居跡出土遺物(2)



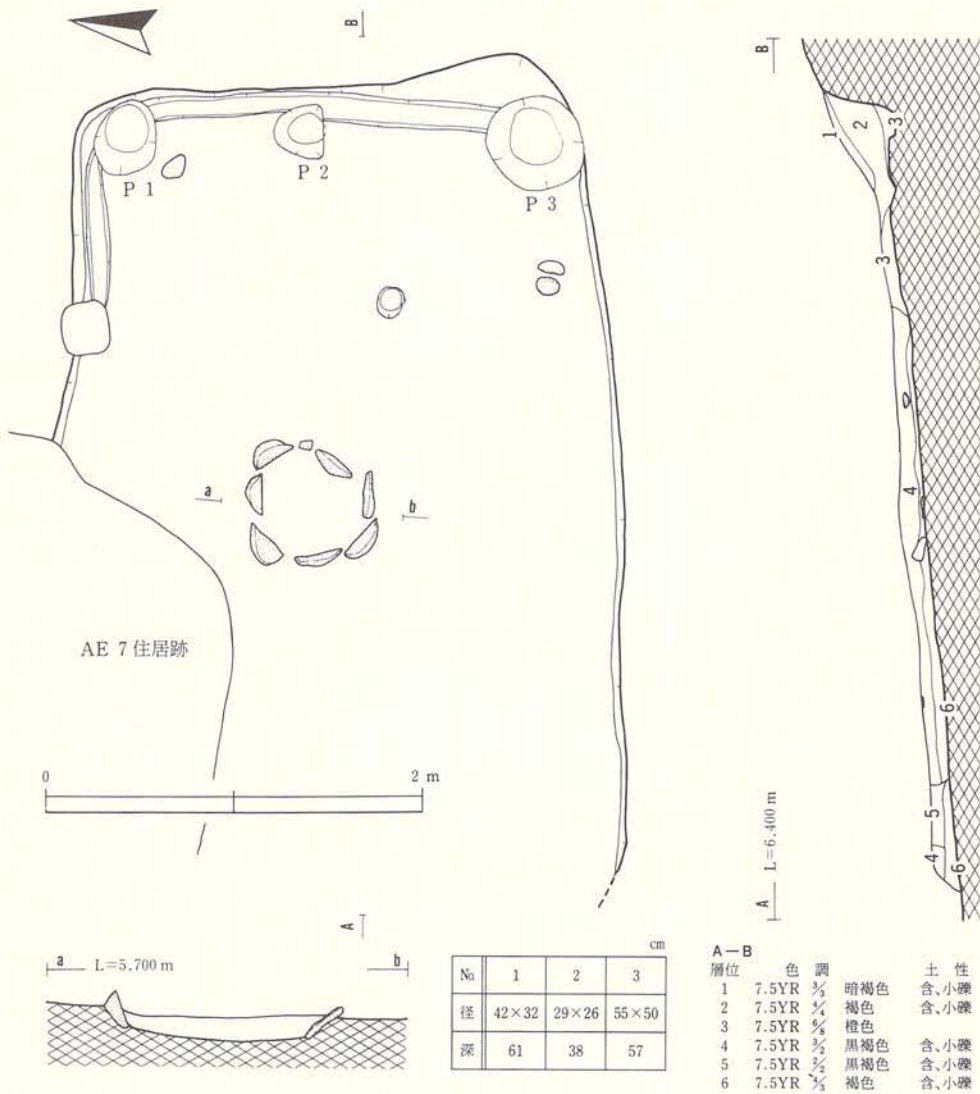
第 19 图 AD 5 住居跡出土遺物(3)

## AE 6 住居跡

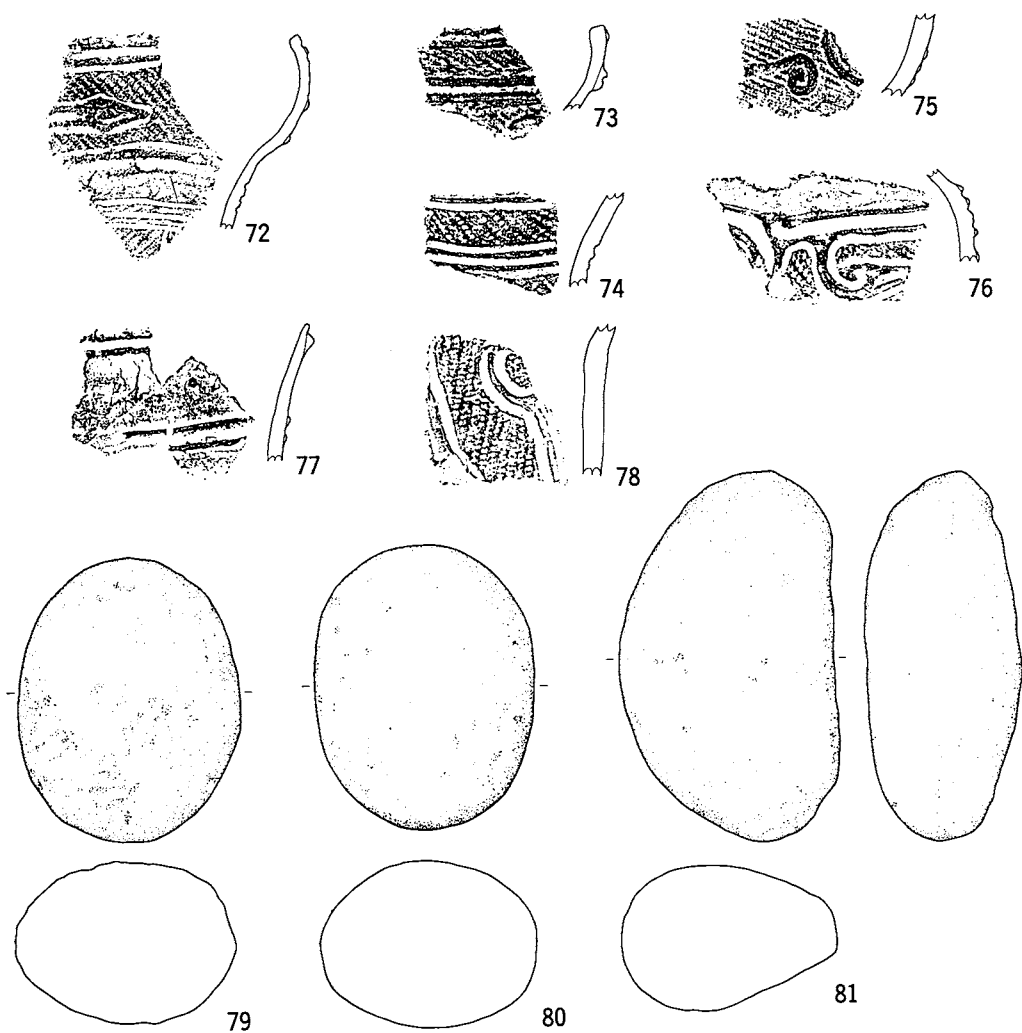
遺構（第 20 図・写真図版 9）

〈検出状況・重複関係〉粗掘り中の土層変化と土器の出土によって検出された。北壁の西側で奈良時代の AE 7 住居跡と重複し、本住居跡が破壊されている。また、斜面部に立地するため西壁が存在しない。

〈規模・平面形〉検出された規模は長軸 4.3 m、短軸 2.7 m で、東西に長軸方向をもつ長方形を示す。



第 20 図 AE 6 住居跡



第 21 図 AE 6 住居跡出土遺物

〈埋土〉6層に細分されるが、3層以外には小礫が混入する。色調は褐色—2・6層、暗褐色—1層、黒褐色—4・5層、橙色—3層と差がみられる。

〈壁〉垂直に近い立ち上がりを示す部分もみられるが、全体的には若干外傾する。高さは、もっとも高い東壁で31 cmあり、西に進むほど低くなり、4.1 m先で消滅する。東壁と北壁の一部に幅14 cm、深さ3 cm~5 cmの壁溝をもつ。

〈床面〉僅かに小礫の入った褐色土で構築される。しまり良く平坦で硬いが、西に寄るほど低



くなり、最大 30 cm 位の比高がある。この現象が斜面に立地することによるものかは定かでない。

〈柱穴〉 $P_1$ ～ $P_3$ の3個が検出された。 $P_1$ ・ $P_3$ は東壁の南北両隅、 $P_2$ はそのほぼ中間に位置することから、本住居跡の柱穴を構成すると考えられる。検出に努めたが西壁沿いの柱穴は検出されなかった。

〈炉〉床面のほぼ中央と推定される位置に石囲炉を設置する。最大 25 cm×10 cm、最小 8 cm×6 cm の垂角礫を 74 cm×70 cm のやや歪んだ円形状に上部が外傾するように約 10 cm～15 cm 埋め込んで構築している。炉内は常時焼土を掻き出していたのか、焼土は全く残っていなかった。 (高橋)

#### 遺物 (第 21 図・写真図版 57)

埋土と床面から土器と石器が出土している。

〈土器〉72～75 はキャリパー形を呈する口縁部片である。72 は隆沈線によって口縁部を区画し、この中に末端部が棘状になる文様を隆沈線によって描いている。頸部は無文帯となり、この下位に 3 本の並行沈線が巡る。地文は 0 段多条 RL 単節斜縄文で、口縁部では横、体部では縦回転で施文されている。73 は器面を磨かれた隆帯が巡り、74 は沈線が巡る。75 は隆帯が渦巻文を構成している。76 は丁寧に器面調整された隆沈線が渦巻文を構成している。77 は緩く外傾して開く口縁部片である。上端部に 1 本、下端部に 2 本の隆帯が巡り、この間は無文帯となっている。78 は渦巻文を配しながら垂下する隆沈線による文様をもつ体部片である。

〈石器〉いずれも磨石で床面からの出土である。79・80 は平面・断面形とも楕円形を呈す。79 は表裏の 2 面、80 はこれに両側面を加えた 4 面が使用面となっている。81 は 1 側面に使用痕を有する。

時期 出土した土器から、縄文時代中期中葉の住居跡と考えられる。 (酒井)

### AE 8 住居跡

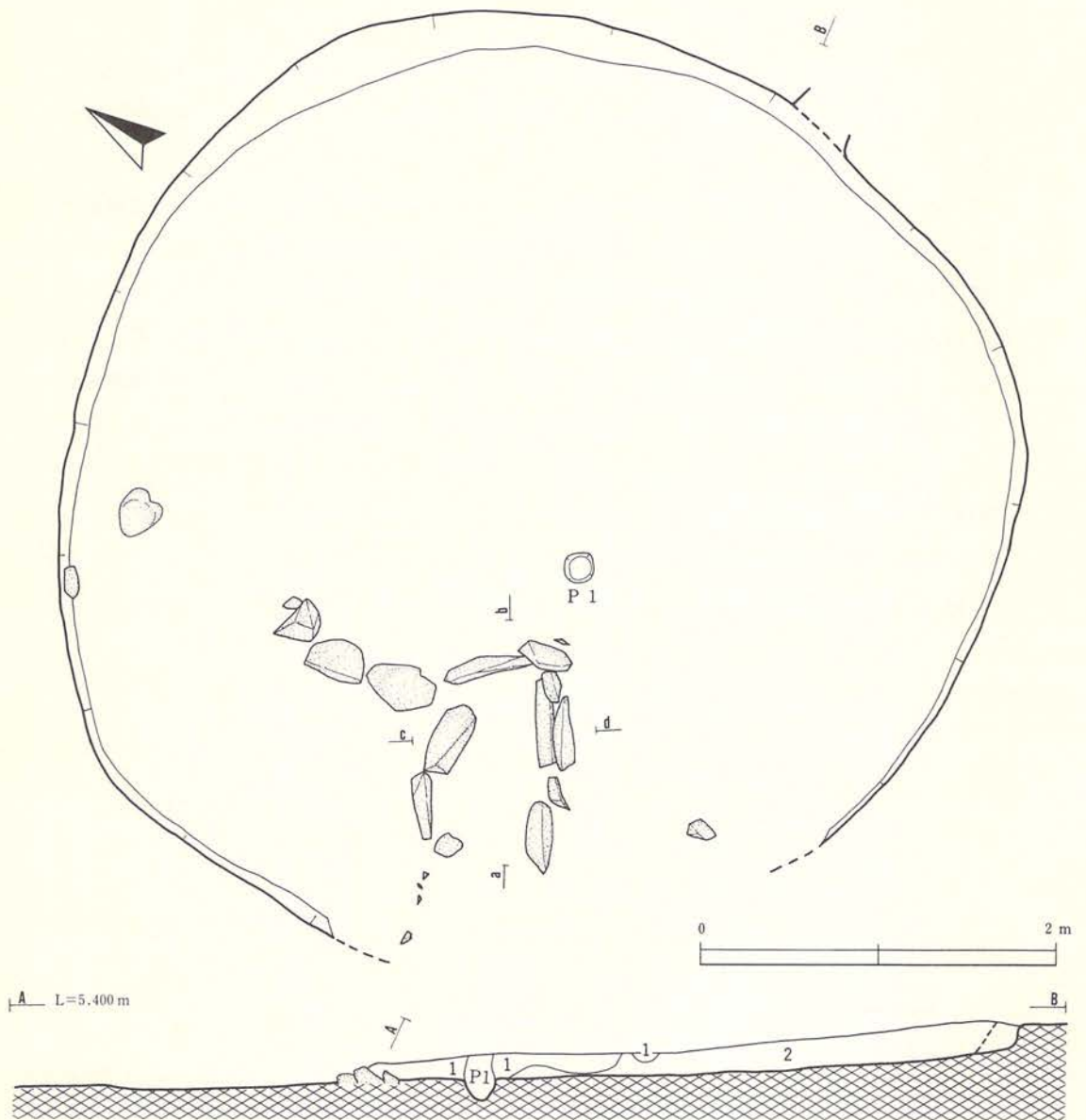
#### 遺構 (第 22 図・写真図版 10)

〈検出状況・重複関係〉AD 8 住居跡のダメ押し中に炉跡の一部が検出されたことにより確認された。北東部側で AD 8 住居跡と重複するが、同住居跡は弥生時代に属することから、本住居跡の方が古い。また、斜面に立地するため、西壁の一部は検出できなかった。

〈規模・平面形〉長軸 5.5 m、短軸 5.3 m の円形を示す。

〈埋土〉2 層に分けられるが、1 層は小礫と炭化物が混じった黒褐色土、2 層は炭化物の混じった暗褐色土と違いがみられる。

〈壁〉検出された壁らしき部分は微妙な土層変化で壁としたが、非常に軟弱である。壁の高さ



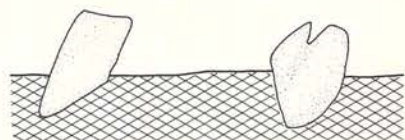
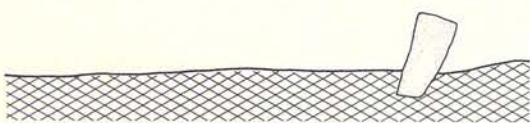
A-B	層位	色調	土性
1	7.5YR 3/4	黑褐色	含、小礫・炭化物
2	7.5YR 3/4	暗褐色	含、炭化物

a L=5.200 m

b

c L=5.200 m

d



第 22 図 AE 8 住居跡

は東壁 20 cm、西壁 3 cm、南壁 5~8 cm、北壁 20 cm 位を示し、西側に寄るほど低くなる。

〈床面〉極暗褐色のシルトで構築されるが、非常に軟弱で踏み締めがあったとは考えられない硬さである。

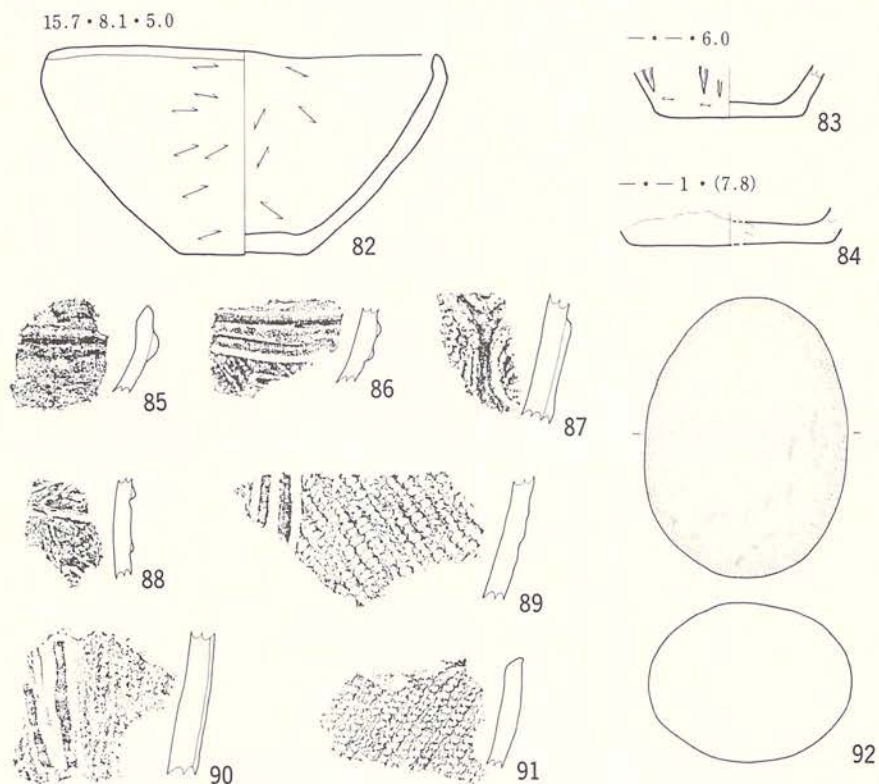
〈柱穴〉炉跡の東に位置する柱穴状の土坑は、上位から掘り込まれており本住居跡と直接関わりはない。床面の内外から本住居跡に関係する柱穴状小土坑は未検出である。

〈炉〉西壁から 70 cm 東寄りに石囲炉が検出されている。最大長 50 cm、幅 10 cm、最小 14 cm×14 cm の扁平な垂角礫を 10 個 1.2 m×90 cm のコの字形に配列して構築する。掘り方は不明であるが、内傾または外傾で埋設され、南側の一部は 2 列並列する。なお、北東隅部から北へ直線的に 3 個の垂角礫を埋設するが、性格は不明である。炉内に焼土の堆積が認められない。(高橋)

#### 遺物 (第 23 図・写真図版 57)

床面及び埋土から土器と石器が出土した。

〈土器〉82 は床面出土の鉢である。体部は外傾して立ち上がり、口縁部で内側に屈曲する。無



第 23 図 AE 8 住居跡出土遺物

文で、内外面とも雑なミガキが施されている。また、内外面とも炭化物が付着したものか、黒色を呈する。83・84は底部片である。83は2本一組の沈線が垂下している。85は口縁部片で、上位に太い隆帯が巡るほかに文様はない。86は隆沈線が巡る口縁部下半部の破片である。87・88は隆沈線による渦巻状の文様が施されている。87はRLR複節斜縄文を地文とする。89・90は2本一組の隆沈線が垂下する体部片である。89はLR単節斜縄文、90はRLR複節縄文を地文とする。91はRLR複節斜縄文を地文とする粗製土器で、口縁部は緩く内湾し、口唇部は僅かに外に引き出されている。

〈石器〉92は床面出土の磨石である。平面・断面形とも楕円形を呈し、表裏両面が使用面となっている。

時期 出土した土器からの推定であるが、縄文時代中期後葉の住居跡と考えられる。(酒井)

## AF7住居跡

### 遺構(第24図・写真図版11)

〈検出状況・重複関係〉奈良時代のAE7住居跡の精査時に検出された。南西壁を同住居跡に切られている。なお、埋土下部から床面にかけて、多量の炭化材と現地性焼土が検出されており、焼失した住居跡である。

〈規模・平面形〉長軸3m、短軸2.2mの歪な長方形を呈する。

〈埋土〉3層に大別される。上位は炭化物を僅かに含む黒色土、中位は炭化物・焼土ブロックを含む暗褐色土、下位は炭化材・焼土ブロックを多量に含む褐色土で構成されている。

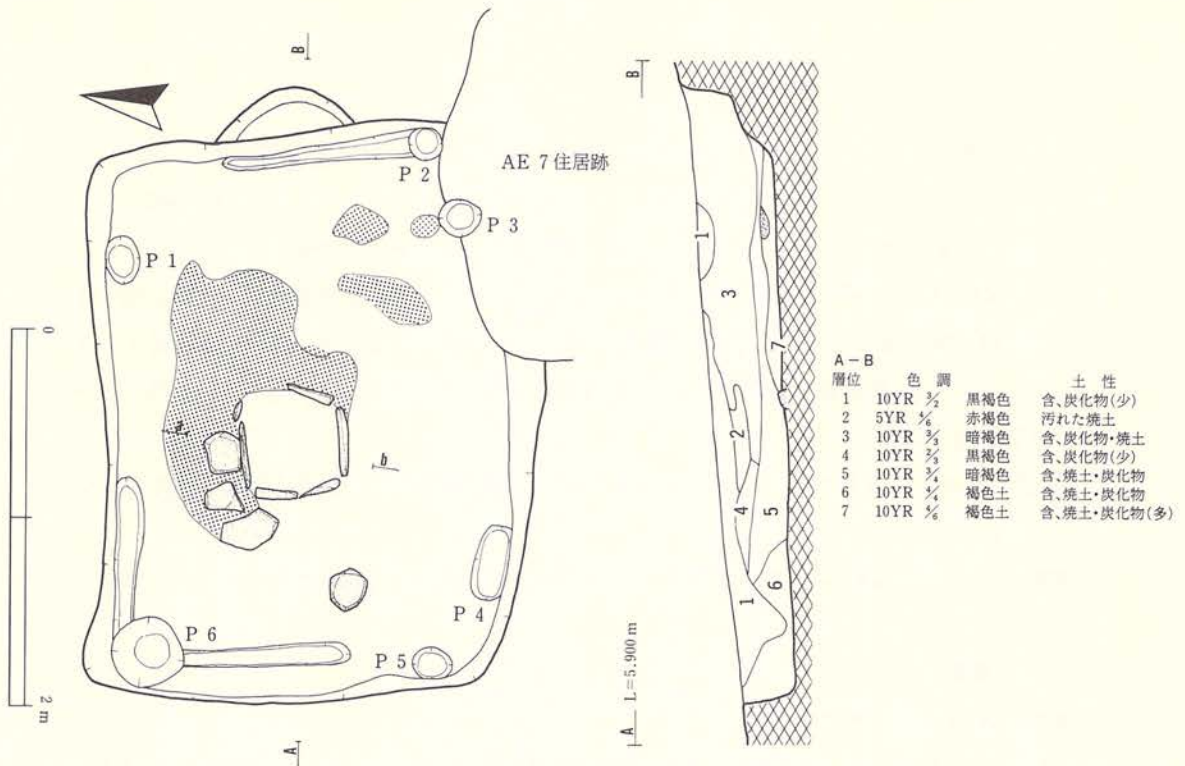
〈壁〉いずれもほぼ直立する。壁高は東壁49cm、西壁27cm、南壁30cm、北壁35cmである。また、東壁・西壁・北壁の一部に、幅7～15cm、深さ5～10cmの壁溝をもつ。

〈床面〉粘板岩の細片を僅かに含む黄褐色土層面で、平坦で硬くしまっている。なお、炉の周辺部には、焼失に伴って形成されたと考えられる現地性焼土が広く分布していた。

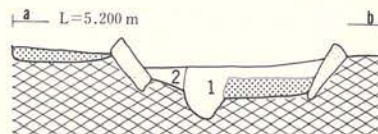
〈柱穴〉P<sub>1</sub>～P<sub>6</sub>の6個が検出された。対称形とはならないが、いずれも壁に沿って配置されている。

〈炉〉床面のほぼ中央に石囲炉をもつ。平扁な礫5個を使用して、59×62cmの方形に築かれている。礫は床面から10cmほど下位に埋め込まれているが、掘り方は明確ではない。炉内には最大5cmの厚さに焼土層が形成されている。

〈附属施設〉東壁中央部に径76cm、奥ゆき26cmの不整な半円形を呈する段状の張り出しをもつ。床面からの高さは30cm、東側の壁高は19cmである。底面は緩く西に傾き、平坦であるが硬くしまるものではない。性格については不明である。



No.	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>4</sub>	P <sub>5</sub>	P <sub>6</sub>
径	19×25	18×29	21×24	19×41	18×22	39×40
深	35	10	11	29	22	51



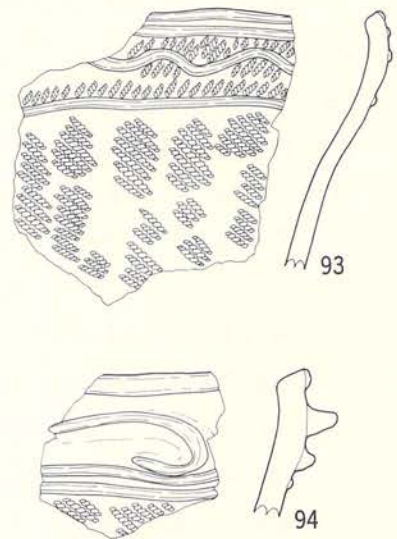
第24図 AF 7 住居跡

遺物 (第25図・写真図版58)

埋土から土器片が出土した。量は非常に少ない。

〈土器〉93はキャリパー形を呈する口縁部片である。上端に2本、下端に1本の隆帯が巡り、口縁部を区画し、中央には緩い曲線文を描く隆帯が貼付される。地文はLR単節斜縄文で、口縁は横、体部には縦回転で施文されている。94もキャリパー形を呈する口縁部片である。93と同様に計3本の隆帯が口縁部を区画し、この中に太い隆帯が稚拙な渦巻文を構成している。体部にはLR単節斜縄文が施されるが、口縁部には施文されない。

時期 遺物量が少なく、詳細は不明であるが、住居跡の形態と土器から推定して、縄文時代中期中葉の遺構と考えられる。(酒井)



第25図 AF 7 住居跡出土遺物

## AI 5 住居跡

### 遺構 (第 28 図・写真図版 12)

〈検出状況・重複関係〉粗掘り時の土層変化によって検出されたが、斜面に立地するため西側部分の壁は未検出である。直接的な重複関係はないが、完全であれば AH 5 土坑によって南壁を切られていた可能性がある。

〈規模・平面形〉径 3.7 m 位の円形か楕円形と推定される。

〈埋土〉小礫を多く含む褐色土の単層であり、炭化物も若干混入する。

〈壁〉東壁中央に垂直に近い部分もみられるが、30度～40度大きく外傾する。高さは、最も高い東壁で 23 cm あり、南と北に向かうほど浅くなる。

〈床面〉若干起伏があるものの、小礫が多く混入した褐色土層面を床面とし、良くしまり硬い。

〈柱穴〉床面や壁外の周辺部から柱穴状の土坑は全く検出されていない。

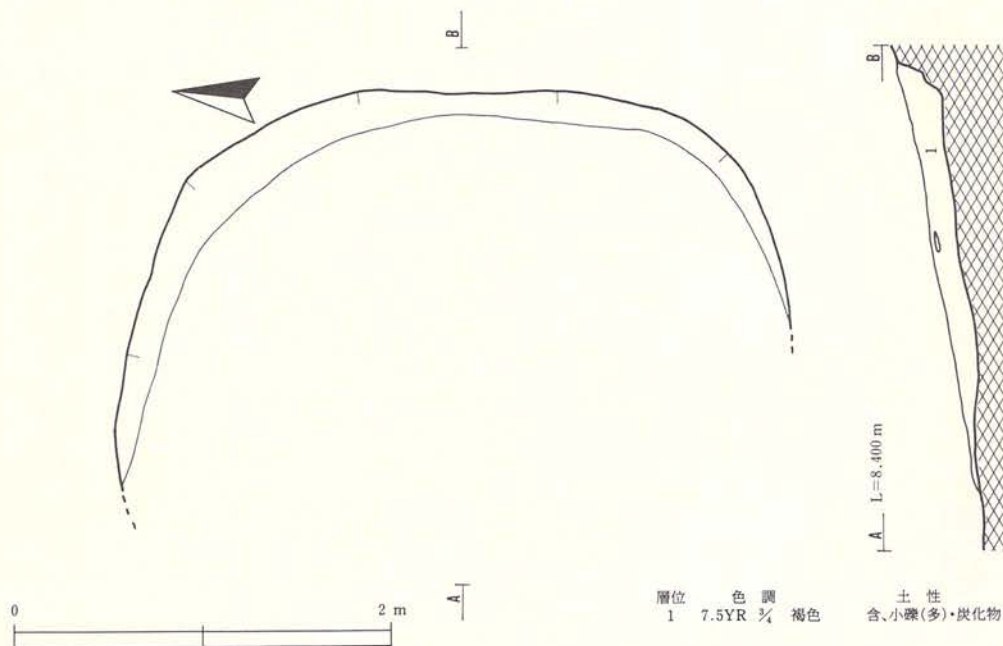
〈炉〉炉としての特別な施設や焼土も発見されない。流亡した西側部分に位置したものと考えられる。

(高橋)

### 遺物 (第 27 図・写真図版 58)

床面及び埋土下部から土器と石器が出土した。

〈土器〉95 は体部上半の破片である。復元される器形から台付鉢または高坏と考えられる。口

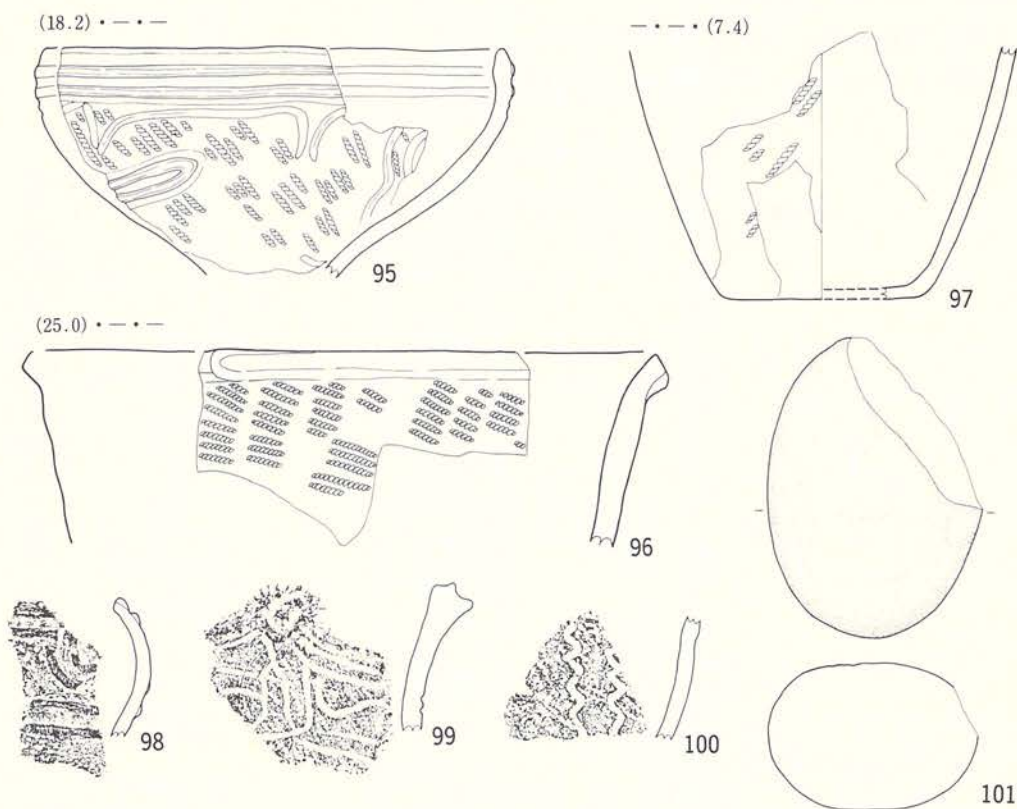


第 26 図 AI 5 住居跡

縁部は緩く内湾し、体部下方に向って急激にすぼむ。口縁部には2本の隆帯が巡り、この下位に不整な連弧文風の沈線が施される。体部には隆沈線による文様が描かれているが、モチーフは不明である。地文はLR単節斜縄文である。97は口縁部片で、緩く外傾する。口縁上端には、部分的に稚拙な渦巻文を構成する隆帯が巡る。地文はLR単節斜縄文である。97はRL単節斜縄文を地文とする底部片である。98はキャリパー形を呈する口縁部片で、隆帯による文様が施されている。99は外反する口縁部片である。波状口縁で、波頭部には頂部に渦巻文を付した突起をもつ。文様は沈線による曲線文で、波頭部の下位を基点に展開されている。100は2本一組の蛇行沈線文が垂下する。

〈石器〉101は床面出土の磨石で、一部を欠損する。平面・断面形とも楕円形を呈し、表裏両面が使用面となっている。

時期 出土した土器から推定して、縄文時代中期中葉の住居跡と考えられる。 (酒井)



第27図 AI 5住居跡出土遺物

## AI 8 住居跡

### 遺構 (第 28 図・写真図版 13)

〈検出状況・重複関係〉粗掘り中の土層変化と遺物の出土によって検出された。南壁西寄りが AI 9 土坑に切られる他、重複する遺構はない。

〈規模・形状〉6.4 m×6.4 m の円形を示す。

〈埋土〉8 層に細分されるが、色調には黒色～褐色まで差がみられるものの、質的にはいずれも小礫が混入したシルトで大きな違いは認められない。3 層と 5 層には少量の炭化物が混入し、1・5・8 層はしまりが良く、3・4・8 層には若干の粘性をもつ。また、径 10 cm～15 cm の円礫も僅か点在する。

〈壁〉一部にはほぼ直立気味を示す部分もみられるが、全体的には外傾する部分が多く、凹凸はほとんどなく平滑である。壁高はもっとも高い東壁で 96 cm、もっとも低い西壁で 29 cm、南壁 49 cm、北壁 72 cm あり、斜面低位の西に寄るほど低くなる。東壁・南壁・北壁際の床面には幅 8 cm～15 cm、深さ 2 cm～16 cm の壁溝が断続して巡る。

〈床面〉若干の小礫が混在する黄褐色粘土質シルト面で、しまり良く硬い。僅かの起伏があり、全体が斜面下位の西に向って低くなり 15 cm 位の高低差がみられる。

〈柱穴〉 $P_1 \sim P_{24}$  の 24 個検出されたが、 $P_{14}$  の開口部径は 40 cm と柱穴状であるが、底部径が 110 cm と断面形がフラスコ形を示し、柱穴とするには無理がある。開口部径は最小 10 cm×8 cm、最大 68 cm×60 cm と大差がみられるものの径 30 cm 以上が 15 個の 65 % を占める。深さは 10 cm 以下の 5 個から 60 cm 以上 6 個まで大きな差がみられ、まとめると 20 cm 以下 10 個、21 cm～50 cm 5 個、51 cm 以上 8 個となる。位置や規模から考えて、支柱穴として  $P_2$ 、 $P_4$ 、 $P_{12}$ 、 $P_{13}$ 、 $P_{23}$  が想定されるが、 $P_2$  と  $P_{23}$  の距離が離れ過ぎていることを考えれば、 $P_2$  と対をなす柱穴が  $P_{23}$  の南西に存在した可能性がある。

〈炉〉南西壁寄りに石囲炉をもつ。扁平で長めの礫を 8 個使用し、110 cm×90 cm の長辺が外方に若干張り出す長方形に埋設される。礫の大きさは 66 cm×18 cm×20 cm を最大に 22 cm×8 cm×10 cm まで各種あり、9 cm～15 cm 埋め込まれている。北西と南西には掘り方が観察された。北東寄りの炉床には 45 cm×40 cm の範囲に層厚 7 cm の焼土層が形成されている。

〈附属施設〉柱穴ではないとした土坑  $P_{14}$  は、開口部径 40 cm、底面径 110 cm、深さ 70 cm の規模をもち、断面がフラスコ形を示すことから、貯蔵穴としての機能が考えられる。南西壁際の床面に扁平で長目の礫を 2 個北々東方向に直線的に埋設した施設が検出された。礫の大きさは、長さ 45 cm と 42 cm、幅 12 cm～14 cm、高さ 27 cm あり、やや斜めに 15 cm 位埋めている。性格は不明である。

(高橋)



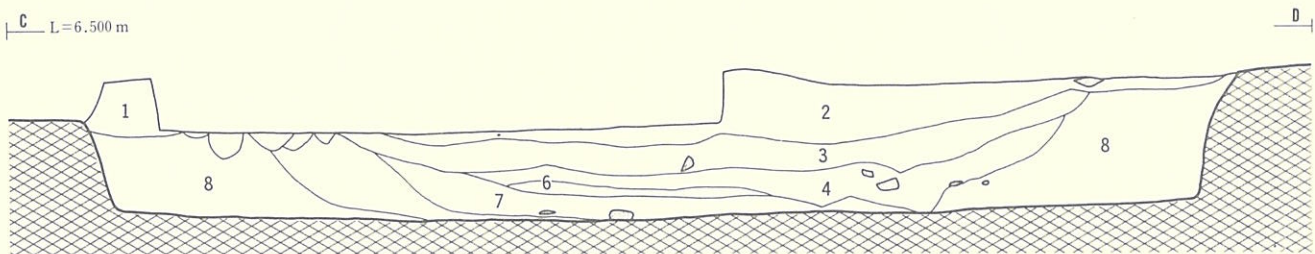
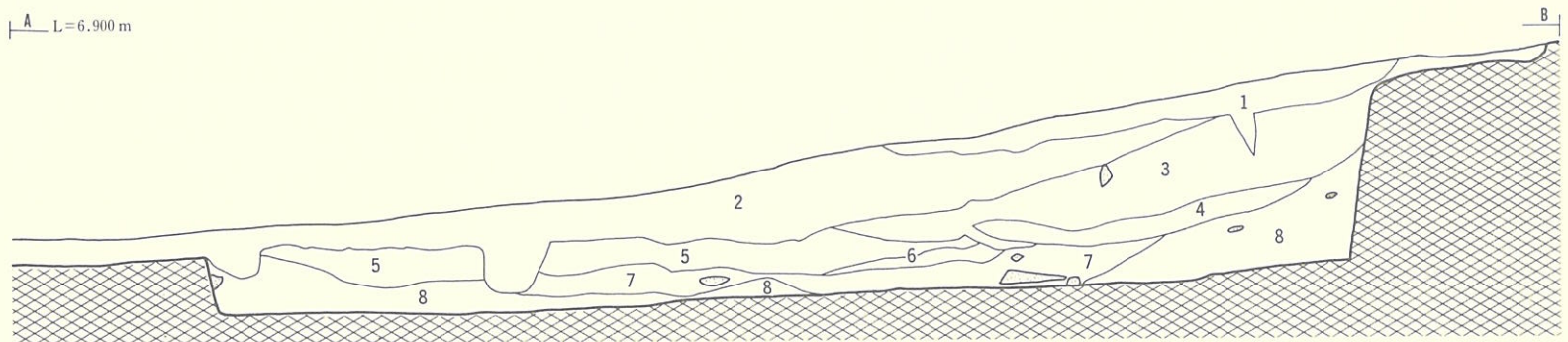
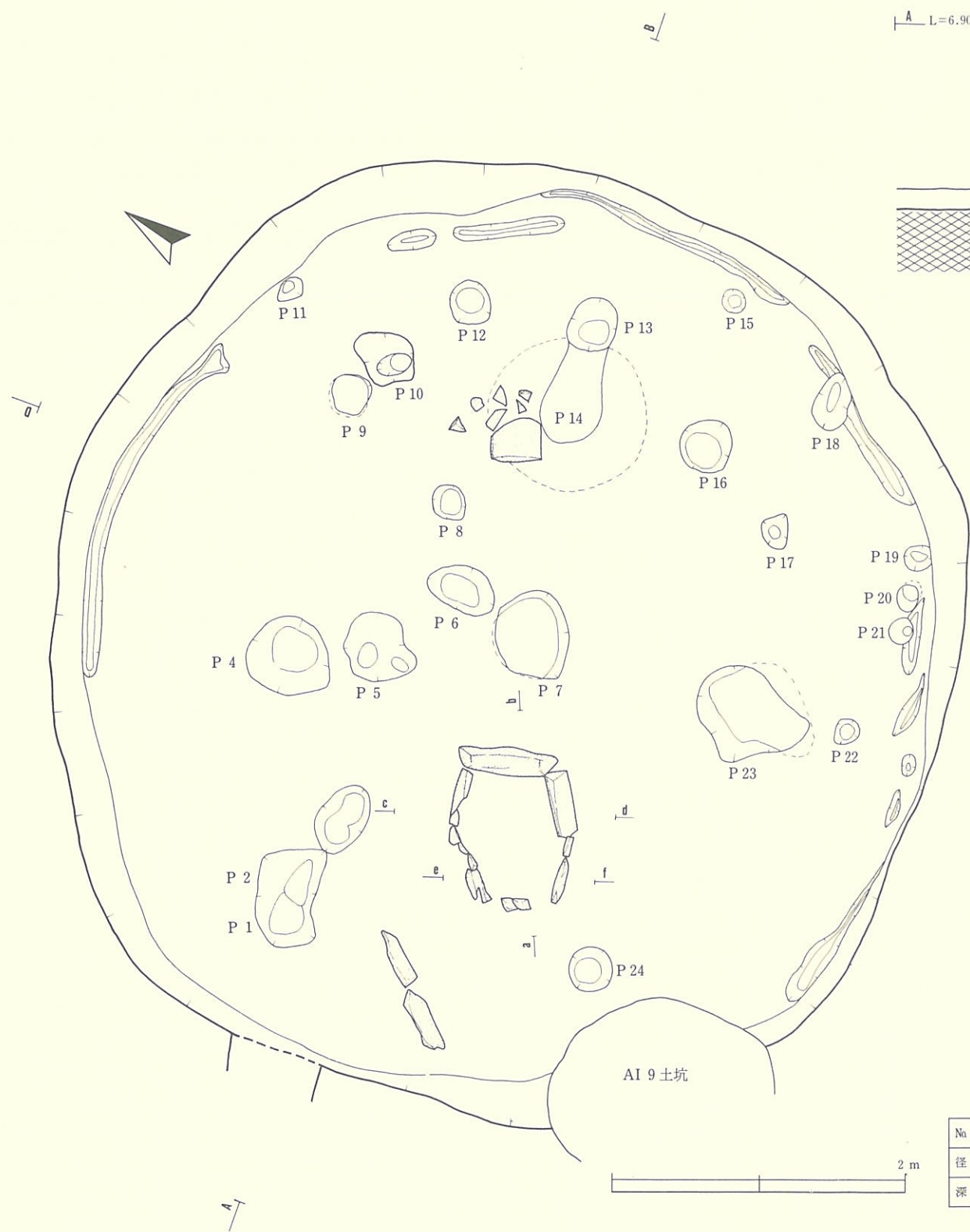
遺物（第 29～35 図・写真図版 58～63）

埋土及び床面から土器及び石器が出土した。数量は検出された遺構中最も多い。

〈土器〉102 は体部から口縁部にかけての大型破片である。体部は内湾ぎみに立ち上がり、中央部から緩くすぼんで外反する口縁部に続く。口縁上端には 2 本の隆帯が巡り、この間に刻み状の縦沈線が連続して施される。また口縁下端には隆帯と沈線が巡り、体部と区画している。このほか、体部中央にも隆帯が巡り、上半と下半に区画している。体部の上半部には上端に沈線による連弧文が施されるが、この他には文様はない。下半部には隆沈線と沈線によって、所々に渦巻文を配した曲線文と曲折文が描かれる。地文は LR 単節斜縄文である。103 は小型の深鉢で、体部中央が僅かに膨らみ口縁部は緩く外反する。口縁部上端には部分的に稚拙な渦巻文を構成する低い隆帯が巡り、この部分では口唇部がいくぶん高まる。体部には RL 単節斜縄文が施文されている。104 も同様な形態をもつ口縁部片であるが、渦巻部分の左側では口唇部に、右側では口縁部上端に連続した刻みを有する。また、口縁部の内側にも低い隆帯が巡る。105 はキャリパー形を呈する深鉢である。口縁上端と下端に隆帯が巡り、この区画内に 2 本一組の隆帯が曲線文を描いている。地文は RL 単節斜縄文で、口縁部では横、体部には縦回転で施文されている。106 は側面をナデ調整された 2 本一組の隆帯が縦方向の文様を構成している。

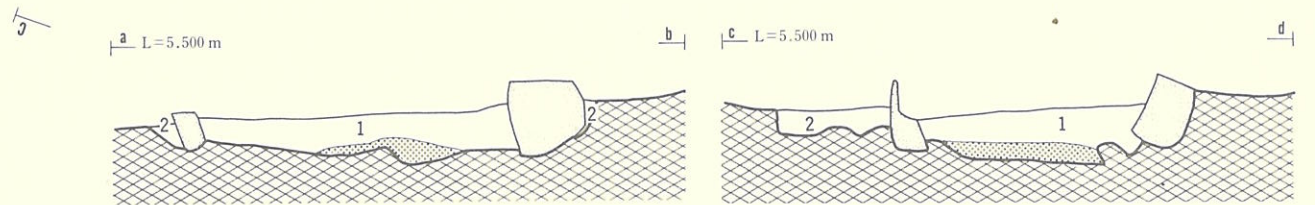
107・108 は同一個体と考えられる。僅かに内湾する口縁部は大きな波状を呈する。波頭部分には隆帯による渦巻文をもち、体部には隆沈線によって所々渦巻文を配する区画文が縦方向に展開される。地文は LR 単節斜縄文である。109 は短頸の壺と考えられる。全体に強く内湾する。頸部に太い隆帯が巡り、口縁部と体部を区画している。口縁部は無文帯となるが上端部は欠損する。文様は沈線によるゼンマイ状の磨消縄文が縦に展開する。また、上端部には部分的に隆沈線による渦巻文が配される。110 は沈線区画された長楕円文が施される。111 は小型の深鉢で、4 単位の波状口縁となる。波頭の下位にはゼンマイ状の沈線が垂下し、この両側は沈線によって方形に区画される。地文は RL 単節斜縄文である。112・113 は同一個体と考えられる。体部は外傾して立ち上がり、体部上端部に最大径を有した後内湾して緩い波状を呈する口縁部に続く。文様は沈線で描かれ、ゼンマイ状文と大きな  $\cap$  字文が交互に垂下する。地文は LRL 複節斜縄文で、縦走する。114 は沈線区画された長楕円形の縄文帯が並列する。115 は LR 単節斜縄文を地文とする粗製土器である。116 は大型の粗製深鉢で、体部上端に最大径をもち、口縁部は緩く内湾する。地文は RLR 複節斜縄文である。117～123 は底部のみが残存する。119 は体部が内湾ぎみに立ち上がるが、他は外傾する。

124 はキャリパー形の口縁部破片で、側面に沈線を伴う橋状把手をもつ。文様は丁寧に調整された隆沈線によって施される。125・126 は同一個体の可能性がある。125 は体部片で、3 本一組の隆帯が貼付される。126 は口縁部に近い部分の破片と考えられる。器面には低い隆帯による並



AI 8 住  
A-B · C-D

層位	色調	土性
1	7.5YR 3/2 黑褐色	含、小礫(多)
2	7.5YR 1/2 黑色	含、小礫
3	7.5YR 3/3 暗褐色	含、小礫·炭化物
4	7.5YR 3/2 黑褐色	含、小礫
5	7.5YR 3/2 黑褐色	含、小礫·炭化物
6	7.5YR 3/4 暗褐色	
7	7.5YR 3/2 黑褐色	含、小礫(多)
8	7.5YR 3/4 暗褐色~褐色	含、小礫(多)



AI 8 住  
a-b · c-d · e-f

層位	色調	土性
1	7.5YR 3/4 暗褐色	含、小礫
2	7.5YR 3/4 褐色	

No	cm												No	cm											
	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>4</sub>	P <sub>5</sub>	P <sub>6</sub>	P <sub>7</sub>	P <sub>8</sub>	P <sub>9</sub>	P <sub>10</sub>	P <sub>11</sub>	P <sub>12</sub>		P <sub>13</sub>	P <sub>14</sub>	P <sub>15</sub>	P <sub>16</sub>	P <sub>17</sub>	P <sub>18</sub>	P <sub>19</sub>	P <sub>20</sub>	P <sub>21</sub>	P <sub>22</sub>	P <sub>23</sub>	P <sub>24</sub>
径	40	42	50×33	60×52	50×45	50×30	62×50	28×22	30×29	46×36	22×16	32×28	34×28	±40× 下110×	10×8	36×36	22×20	40×24	18×1668	18×4	18×15	20×18	68×60	34×32	
深	27	53	18	64	41	30	53	10	35	64	5	65	46	70	8	63	61	11	5	16	11	6	56	16	

第28图 AI 8住居跡

行文、曲線文、格子状文が描かれる。127 は口縁に付く突起部分で、頂部に渦巻文が配され、口縁部には隆帯による文様をもつ。128・129 はキャリパー形土器の口縁部片である。128 は隆帯、129 は隆沈線により、末端部が渦巻文を構成する曲線文が描かれている。130 は隆沈線による渦巻文をもつ。131～133 は沈線による文様をもつ。134 は強く外反する口縁部片で、上端部には2本の隆帯が巡り、この間に縦方向の刺突が連続する。地文は RL 単節斜縄文である。

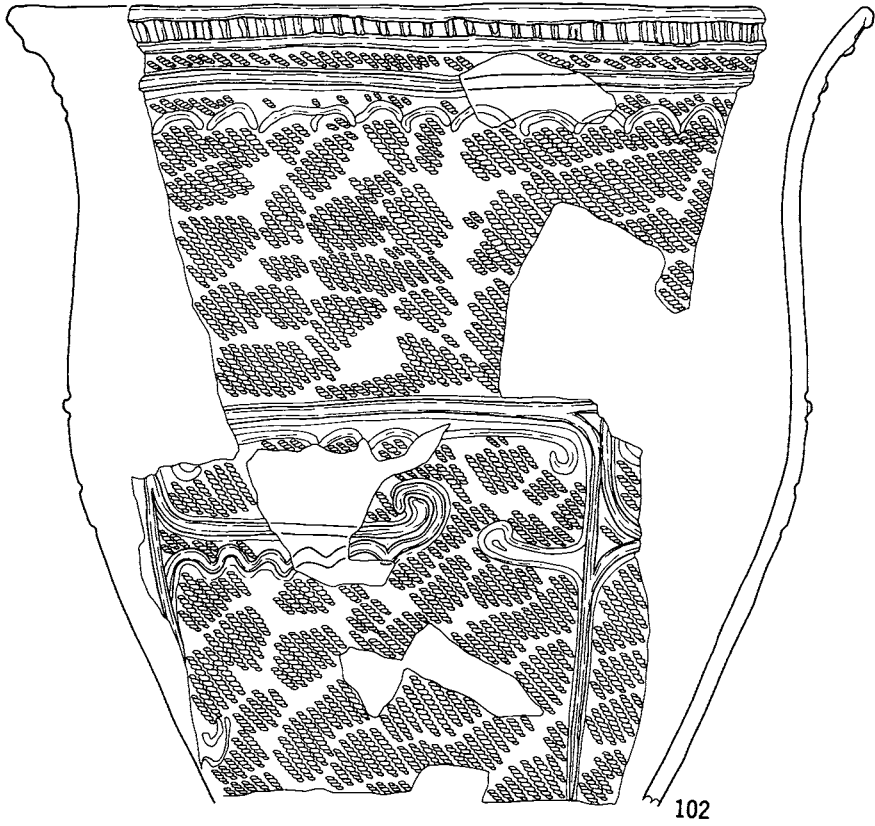
135～137 は同一個体と考えられる。緩く外傾する波状口縁で、頂部下位には渦巻文が配される。また、口唇部には沈線が巡る。体部には太い隆沈線により、所々に渦巻文を配した区画文が施文される。138 も波状を呈する口縁部片である。全体は緩く内湾するが、口縁部上端は短く外傾する。頂部下位には隆沈線によるゼンマイ状の文様が施されている。139・140 は平縁を呈する口縁部片で、いずれも沈線によるゼンマイ状文が垂下し、この両側には沈線区画された縄文帯をもつ。141 は緩く外反する口縁部片である。0 段多条 RL 単節斜縄文を地文とし、隆帯が大柄な方形区画文を構成している。142 は内湾する大波状口縁で、上端部は折り返されている。地文は RLR 複節斜縄文で、沈線によるゼンマイ状文が描かれている。143 は沈線区画された狭い無文帯が垂下する体部片である。144 は台状の突起部分で、頂部は浅くくぼむ。器面には竹管状の工具による円形刺突文が施されている。145 は LR 単節斜縄文を地文とする粗製土器の口縁部片で、上端部に細い隆帯が巡る。146 は大型の粗製土器の体部片で、器面には4～5本一組の櫛歯状の条痕文が縦走する。

〈石器〉147 は石皿であるが大部分は欠損する。残存部分から推定すると、平面形は楕円形を基調とするものと考えられる。表面には断面が方形の縁が巡り、皿面は平坦である。裏面には断面が三角形の縁が巡る。表面ほどではないが、縁の内側が平坦であることから、表裏両面を使用した可能性がある。148～161 は磨石で、それぞれ2～4面に使用に際して生じたと考えられる擦痕を有する。このうち159は擦痕のほかに敲打痕を合わせもち、敲石としても利用されたものと考えられる。162は石刀であろうか。さしたる調整痕は観察できないが、端部は磨製石斧の刃部のように尖がる。

163は剝片石器である。縦長の剝片の一側辺に使用によって生じたと考えられる微細な剝離痕がみられる。

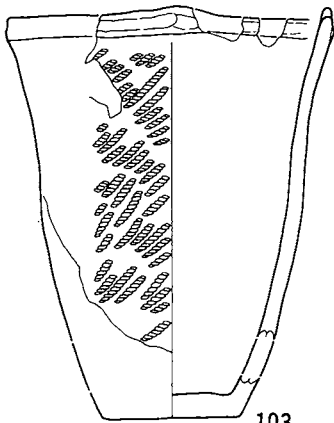
**時期** 出土した土器から推定して縄文時代中期中葉～後葉の遺構と考えられる。 (酒井)

(34.2) · · · ·

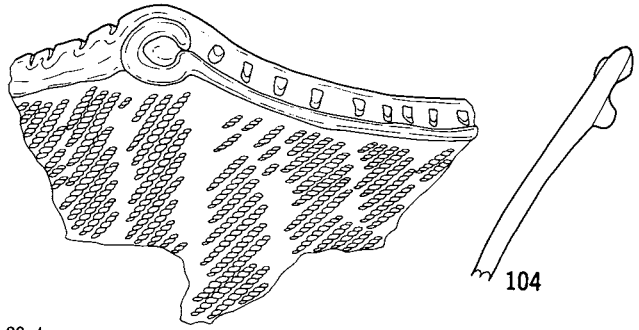


102

(13.0) · (16.4) · 54

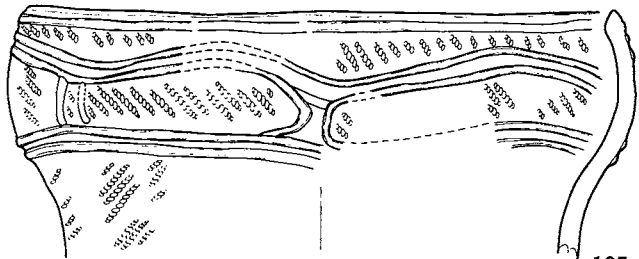


103



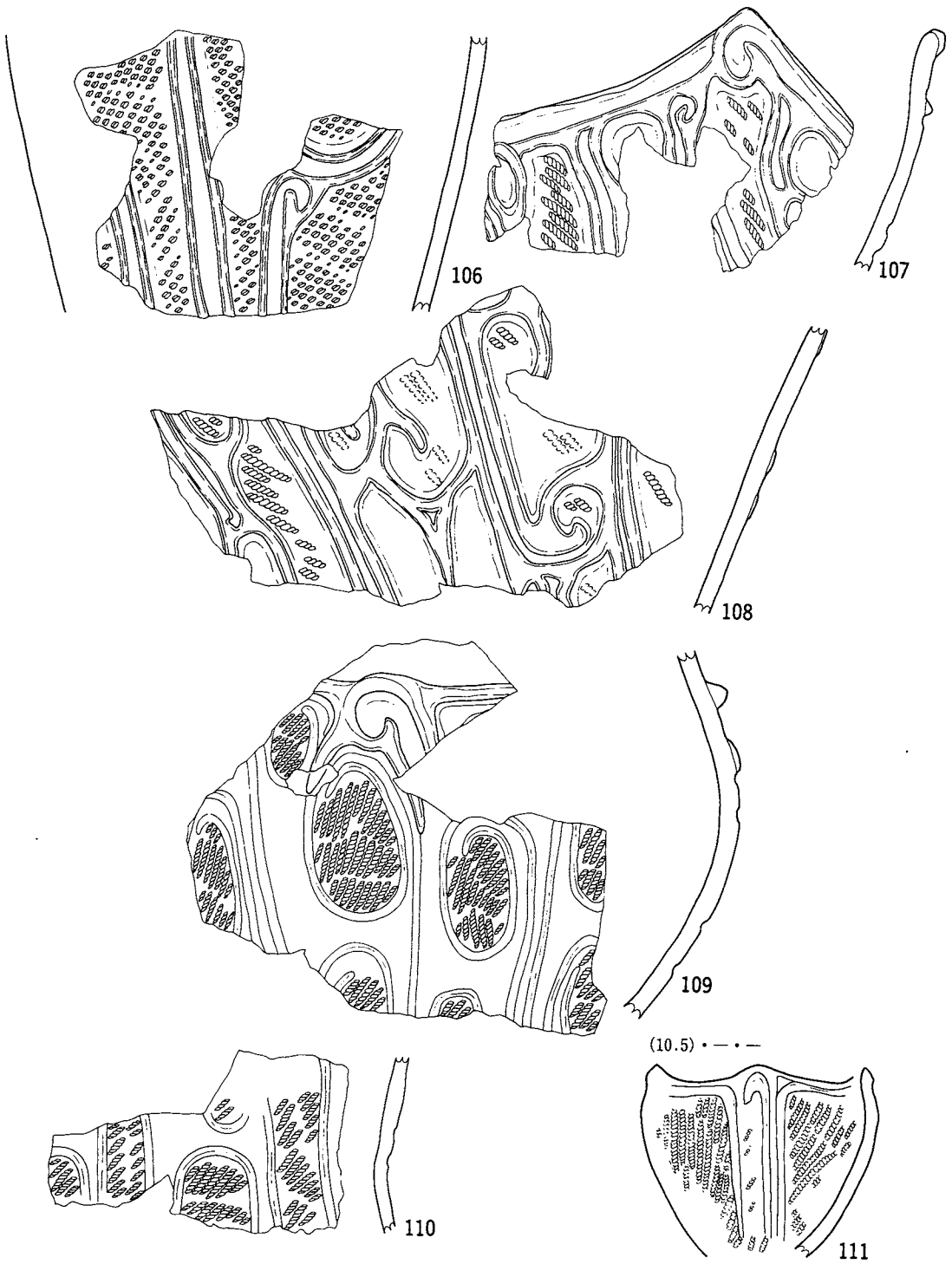
104

23.4 · · · ·

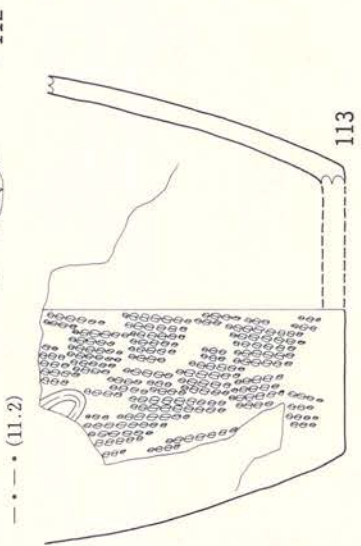
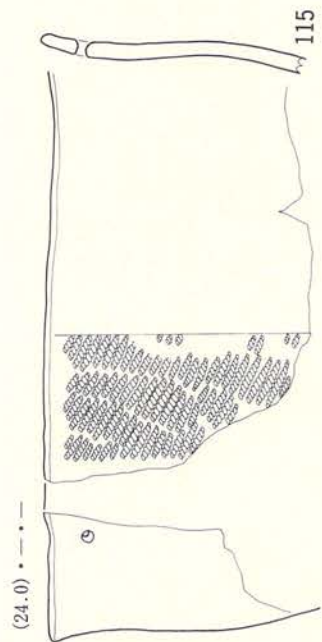
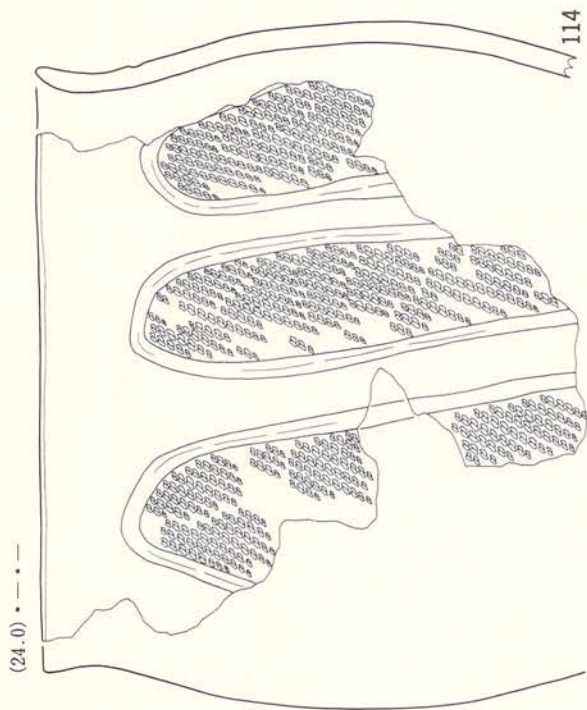


105

第 29 图 AI 8 住居跡出土遺物 (1)

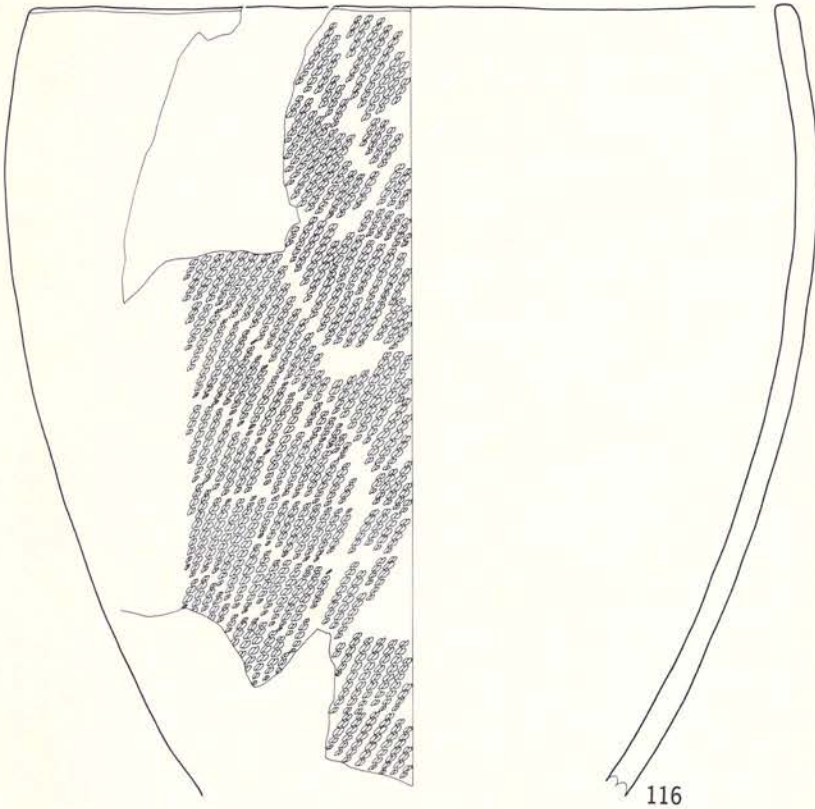


第 30 图 AI 8 住居跡出土遺物(2)



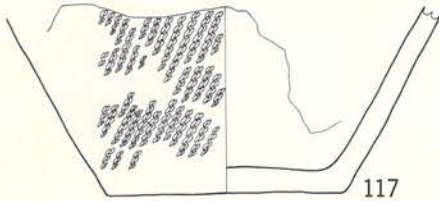
第 31 図 AI 8 住居跡出土遺物(3)

(30.4) · (31.4) · —



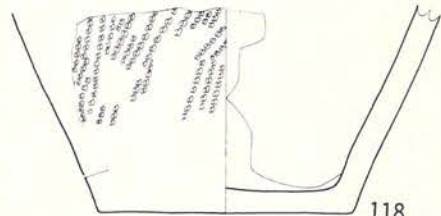
116

— · (7.7) · 9.4



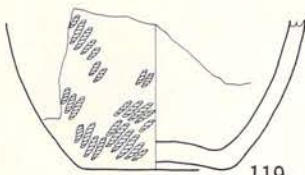
117

— · — · 10.2



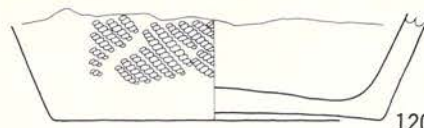
118

— · (6.0) · 6.0



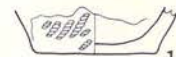
119

— · (4.5) · 13.2



120

— · (1.9) · 5.0



121

— · (1.6) · (13.2)



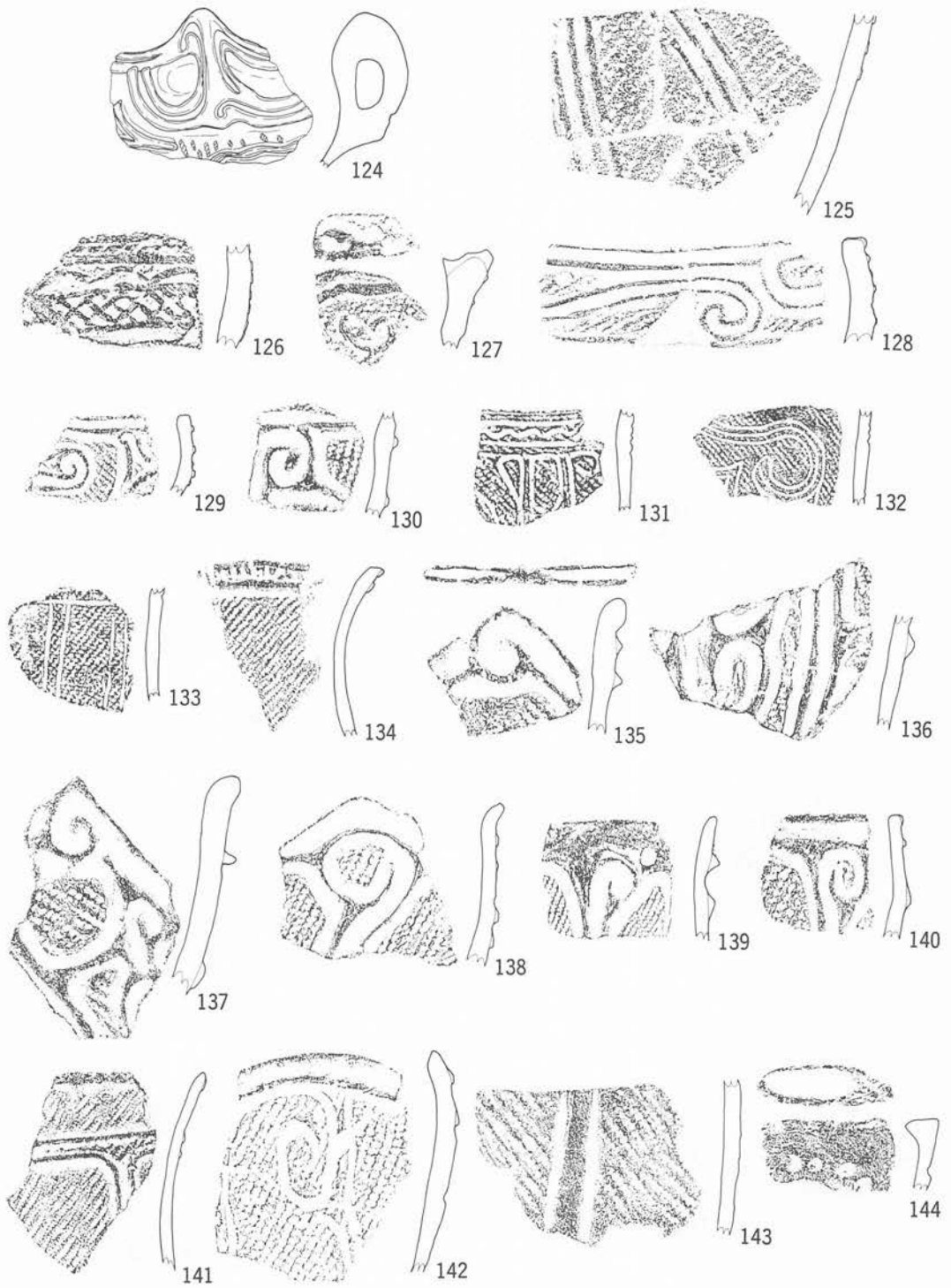
122

— · (1.7) · 58



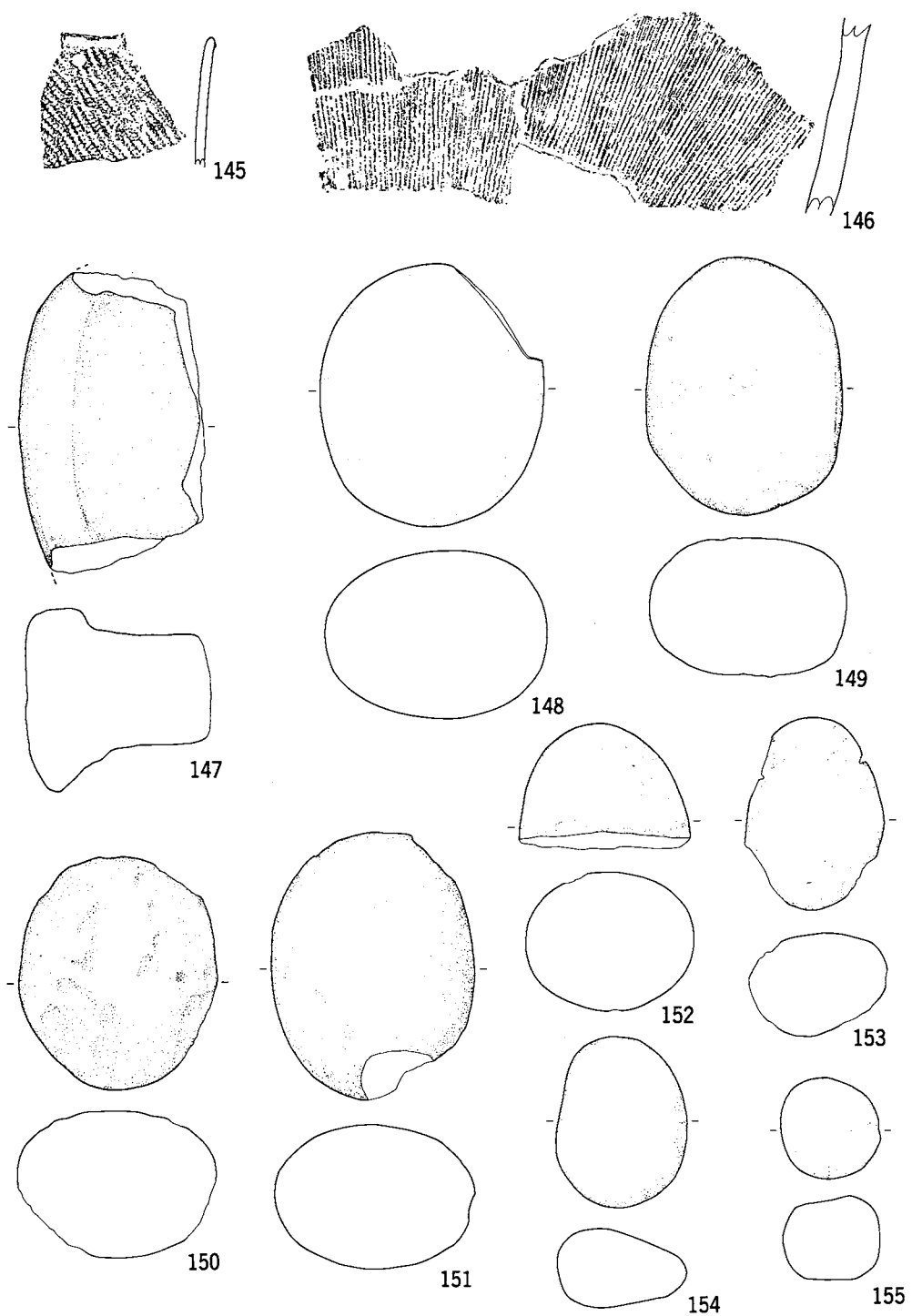
123

第 32 图 AI 8 住居跡出土遺物(4)

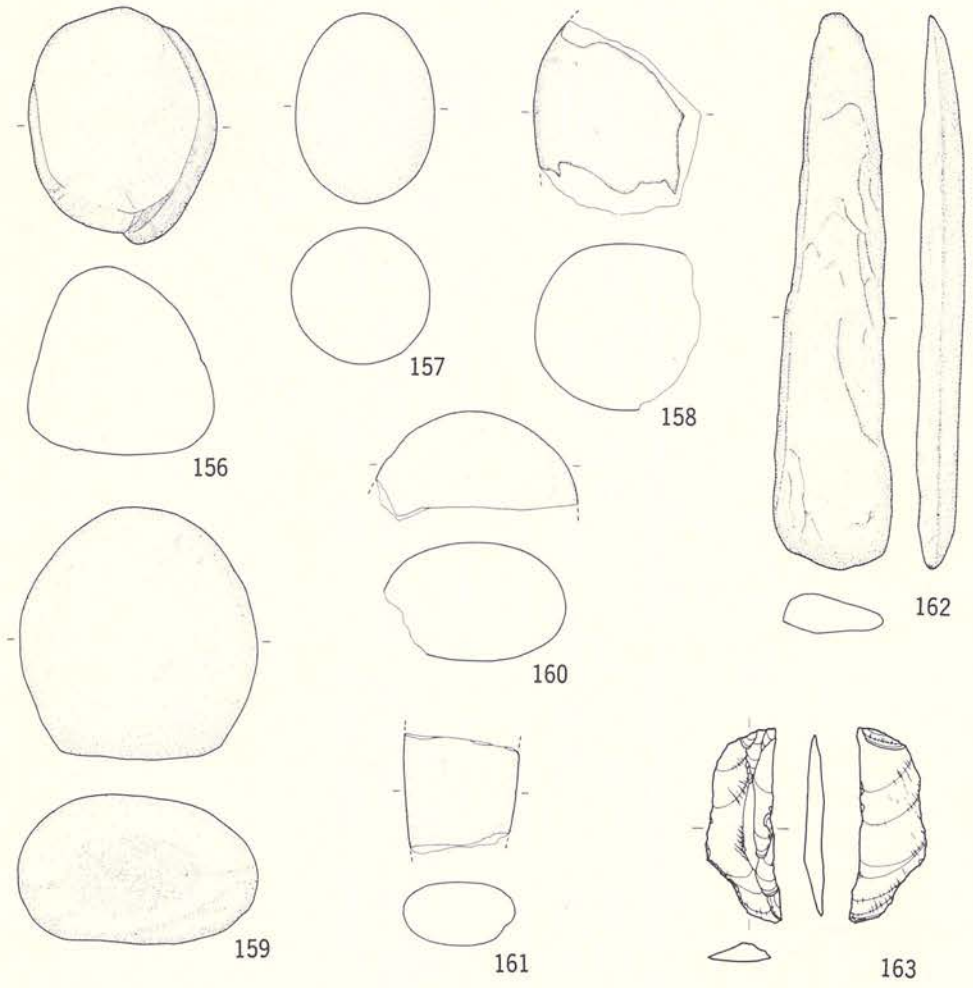


第 33 图 AI 8 住居跡出土遺物(5)





第 34 图 AI 8 住居跡出土遺物(6)



第 35 図 AI 8 住居跡出土遺物(7)

## AJ 5 住居跡

### 遺構 (第 36・37 図 写真図版 14)

〈検出状況・重複関係〉粗掘り中の土層変化と土器の出土、そして奈良時代の AK 4 住居跡の精査中に存在が確認された。奈良時代の AK 4 住居跡と重複するが、本住居跡の方が古い。斜面部に立地するため西壁は流亡している。

〈規模・平面形〉長軸 5.3 m、短軸 5.2 m 位の円形か楕円形を示すと推定される。

〈埋土〉4 層に細分され土性は大同小異であるが、色調はそれぞれによって異なる。いずれの土層にも小礫が混入し、3 層にはさらに炭化物が多く混入する。色調は、1 層明褐色、2 層黒褐色、3 層黒色、4 層褐色である。

〈壁〉ほぼ垂直に近い部分もみられるが、いずれも多少外傾する。壁高は最も高い東壁で 35 cm、南壁 25 cm、北壁 25.5 cm と西に寄るほど低くなり西壁は不明である。北東壁の一部に幅 10 cm～12 cm、深さ 4 cm の壁溝が約 1.5 m 巡っている。

〈床面〉小礫を多量に含む黄褐色土で構築される。中央部と西側がやや低いもののほぼ平坦である。踏み締めによって非常に硬い。

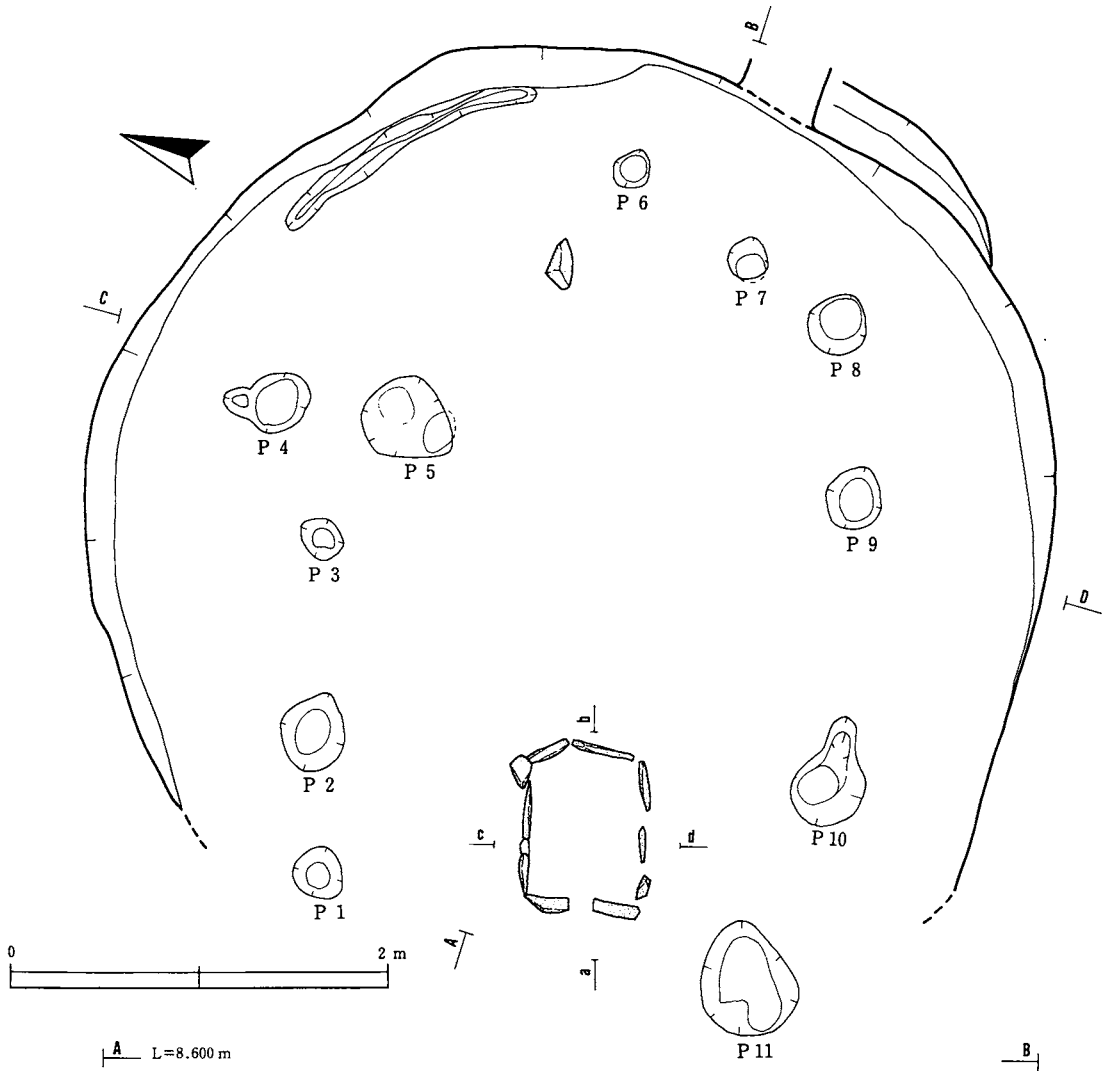
〈柱穴〉 $P_1 \sim P_{11}$  の 11 個検出された。 $P_2 \cdot P_5 \cdot P_8 \cdot P_9 \cdot P_{10}$  の 5 個が、位置や規模から考えて本住居跡の支柱穴を構成すると思われる。他の柱穴状土坑も深い例が多いことから支柱として使用されたと推定される。

〈炉〉床面中央から西壁に寄った位置に石囲炉をもつ。最大 34 cm×4 cm×10 cm、最小 14 cm×4 cm×10 cm 等の扁平な亜角礫を北側 4 個、東側 2 個、南側 3 個、西側 2 個東西 94 cm、南北 70 cm の長方形に配列し、10 cm～15 cm 埋設している。一部の礫には掘り方もち、ほぼ直立している。炉内の埋土は焼土粒や炭化物粒が若干混入した黒褐色のシルトで、その下層に約 5 mm の層厚で焼土が部分的に堆積する。(高橋)

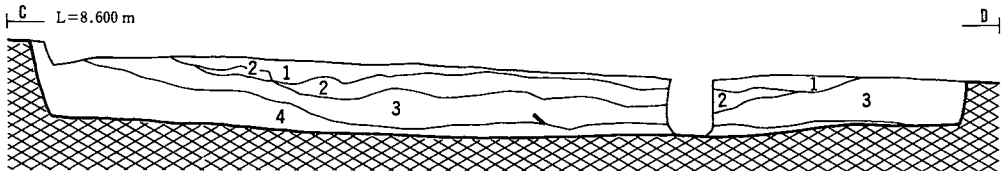
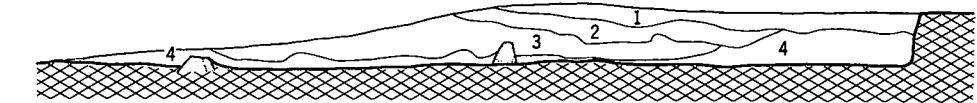
### 遺物 (第 38 図・写真図版 63)

埋土から土器と礫石器が出土している。

〈土器〉164～170 はキャリパー形土器の口縁部片と考えられる。164 は口唇部に突起を有していたものと考えられる。文様は沈線と一部に隆沈線を用い、連弧文、曲線文が描かれる。地文は RL 単節斜縄文である。165 は口縁下端と考えられ、隆帯による区画文をもつ。地文は RLR 複節斜縄文である。166 は口縁の上端と下端に隆帯が巡る。地文は RLR 複節斜縄文である。167～170 は隆帯による渦巻文が貼付されている。167～169 は口縁部に縄文が施文されるが、170 は無文である。171 は体部上端の破片で、口縁部下端に 2 本の隆帯が巡る。172 は隆沈線による渦巻文をもつ体部片である。173 は 2 本 1 組の隆沈線が垂下する。174 は RLR 複節斜縄文を地文とする粗製土器片である。175・176 は底部のみが残存する。



A L=8.600 m

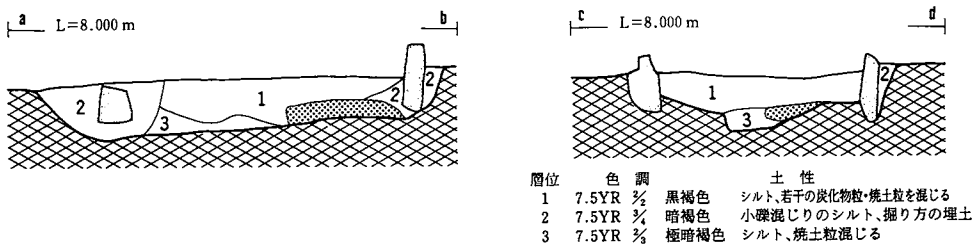


A-B · C-D

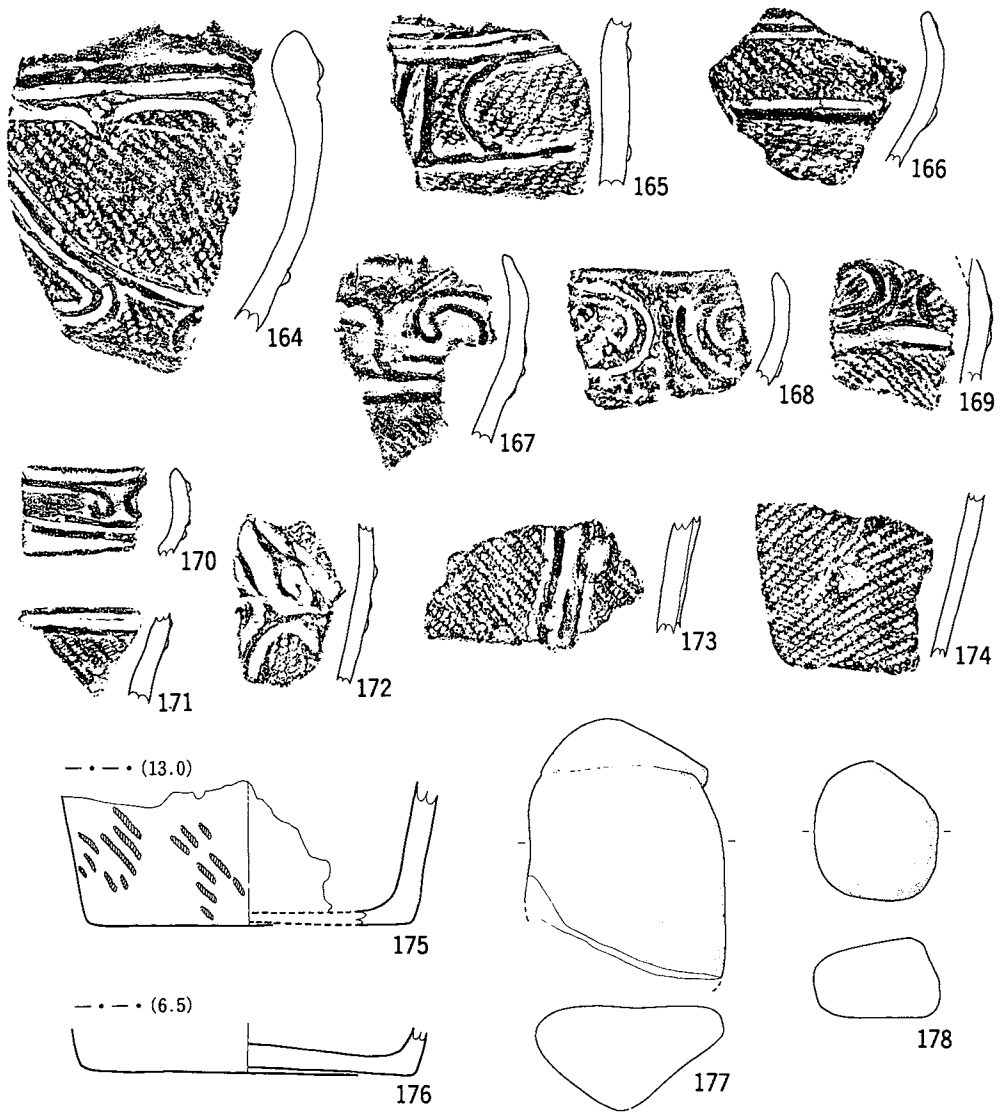
層位	色調	土性
1	7.5YR 明褐色	含、小礫
2	7.5YR 黑褐色	含、小礫(多)
3	7.5YR 黑色	含、小礫・炭化物(多)
4	7.5YR 褐色	含、小礫

No	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
徑	30×27	42×36	25×20	45×34	53×46	24×20	22×22	34×32	35×32	60×38	63×52
深	12.5	53	65.5	49.5	55	40.5	51.5	53	56.5	44	48

第36圖 AJ 5住居跡(1)



第 37 図 AJ 5 住居跡 (2)



第 38 図 AJ 5 住居跡出土遺物

〈石器〉磨石が2点出土している。177は断面形が三角形を呈し、このうち2面に使用痕を有する。178は表裏両面に使用痕をもつ。

時期 出土した土器片から推定して、縄文時代中期中葉の住居跡であろう。 (酒井)

## AK 10 住居跡

### 遺構 (第 39 図・写真図版 15)

〈検出状況・重複関係〉粗掘り中の遺物出土と、重複する奈良時代の AJ 9 住居跡と古代以降の AL 10 土坑の精査時に検出された。南壁が AJ 9 住居跡、北壁が AL 10 土坑によって切られ、南側部分は未調査である。土層の検討と床面の高さから、西側が他の遺構と重複する可能性がある。

〈規模・平面形〉南北 4.1 m、東西 3.8 m 以上の規模をもち、凸辺の隅丸長方形を示す。

〈埋土〉8層に細分されるが、7層が炭化物層の他は色調が黒色～褐色と差があるものの、質的にはほとんど差がない。6層と7層の間には径 60 cm のほぼ円形に広がる異地性焼土が堆積する。また、東壁寄り約 1.6 m は西壁よりやや複雑な堆積状況を示す。

〈壁〉いずれもほぼ直立に近い立ち上がりを示すが、全体がやや凹凸をもつ。壁高はもっとも高い東壁が 46 cm の他、南壁中央 18.5 cm、北壁 25 cm で、西に寄るほど低くなる傾向がみられ、南壁が顕著である。北壁に幅 15 cm、深さ 7 cm、長さ 2.4 m の壁溝をもち、両端とほぼ中央に柱穴状の小土坑を配置する。

〈床面〉小粒の角礫を僅か混入する黄褐色土を床面とし、良くしまり硬い。東壁寄り 2 m は平坦でほぼ水平に近いが、それより西側は約 10 cm 弱低くなり、5 cm 位の起伏をもち、硬さには差がない。高さの変化する地点は埋土の堆積状況の違いに対応する。

〈柱穴〉 $P_1 \sim P_{15}$  の 15 個検出されたが、 $P_2$  は他と規模に大差がみられ、柱穴とは考えられない。他は径 18 cm × 18 cm ~ 50 cm × 50 cm、深さ 5.5 cm × 75.5 cm の範囲に入り、比較的浅い  $P_4 \cdot P_8 \cdot P_{11} \cdot P_{10}$  以外は 15 cm 以上の深さをもち、特に  $P_1 \cdot P_2 \cdot P_3 \cdot P_5 \cdot P_9 \cdot P_{10} \cdot P_{15}$  は 30 cm 以上と顕著である。しかし、位置が不整で支柱穴の構成は不明である。

〈炉〉検出された床面の範囲では炉と考えられる施設は未検出である。

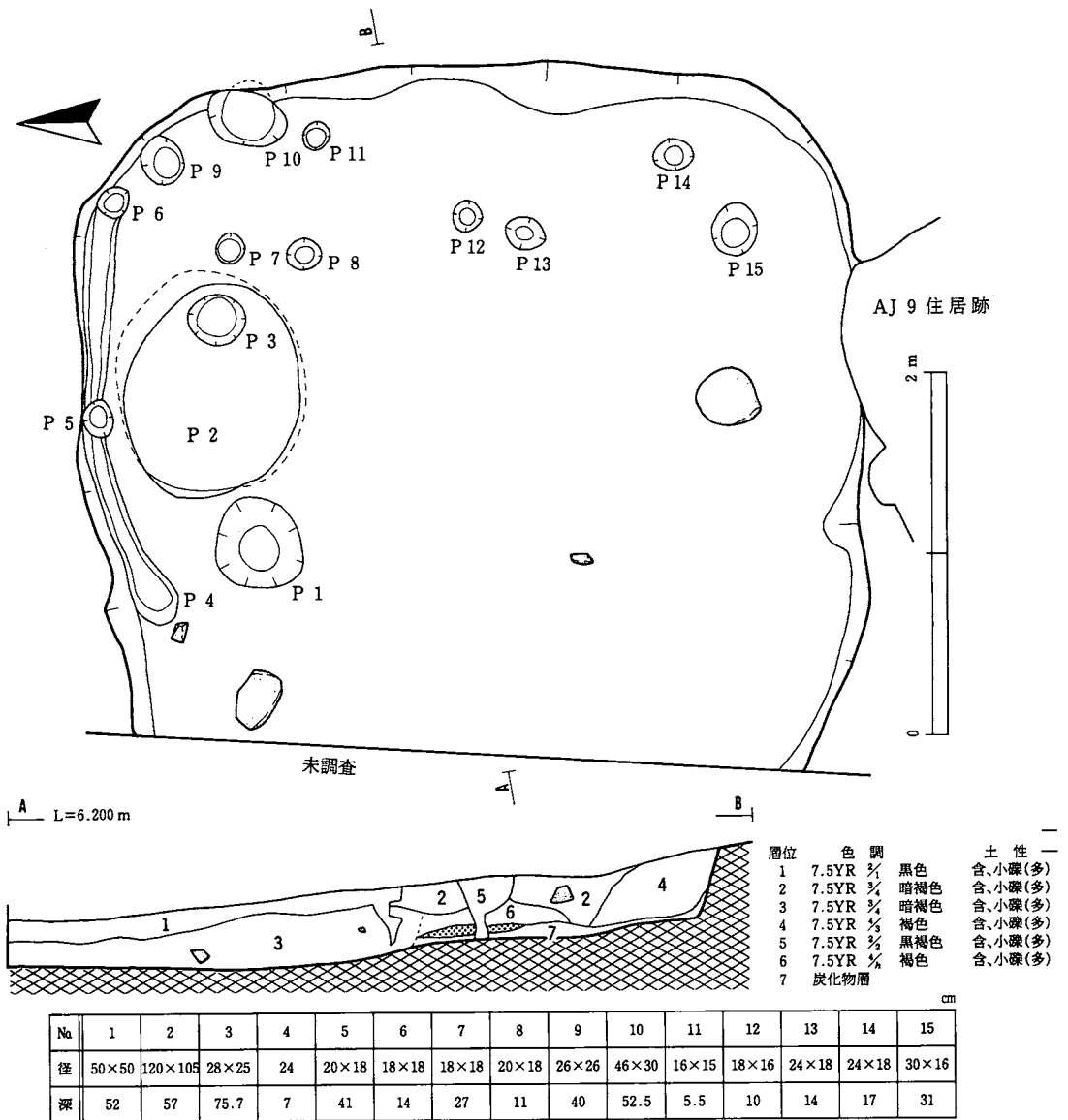
〈附属施設〉柱穴ではないとした土坑  $P_2$  は、本住居跡の時期と異なる土坑の可能性をもつが、本住居跡に伴う貯蔵穴の可能性もある。 (高橋)

### 遺物 (第 40~43 図・写真図版 63~66)

埋土・床面及び柱穴状土坑から土器・石器・石製品が出土した。

〈土器〉179は体部上半～口縁部が残存する。体部は内湾し、頸部でくびれた後外反する口縁部に続く。口縁部上端には2本の隆帯が巡り、所々で渦巻を構成する突起となる。また隆帯間

にはC字状の刺突文が連続して施されている。口縁下端にも隆帯が巡り、これらに区画された内部には短かい隆帯が縦に2本貼付されるほかは無文帯となっている。頸部には3本の沈線が巡り、LR単節斜縄文を地文とする体部には3本一組の曲線文が描かれる。180はキャリパー形土器の口縁部片で、中央に孔を有するC字状の大形突起が付く。この突起部分を基点として、細かく蛇行する隆帯が垂下し区画文を構成している。地文はLR単節斜縄文である。181は直接は接合せず、図面上で推定復元したものである。キャリパー形土器の深鉢で、体部中央に膨ら



第 39 図 AK 10 住居跡

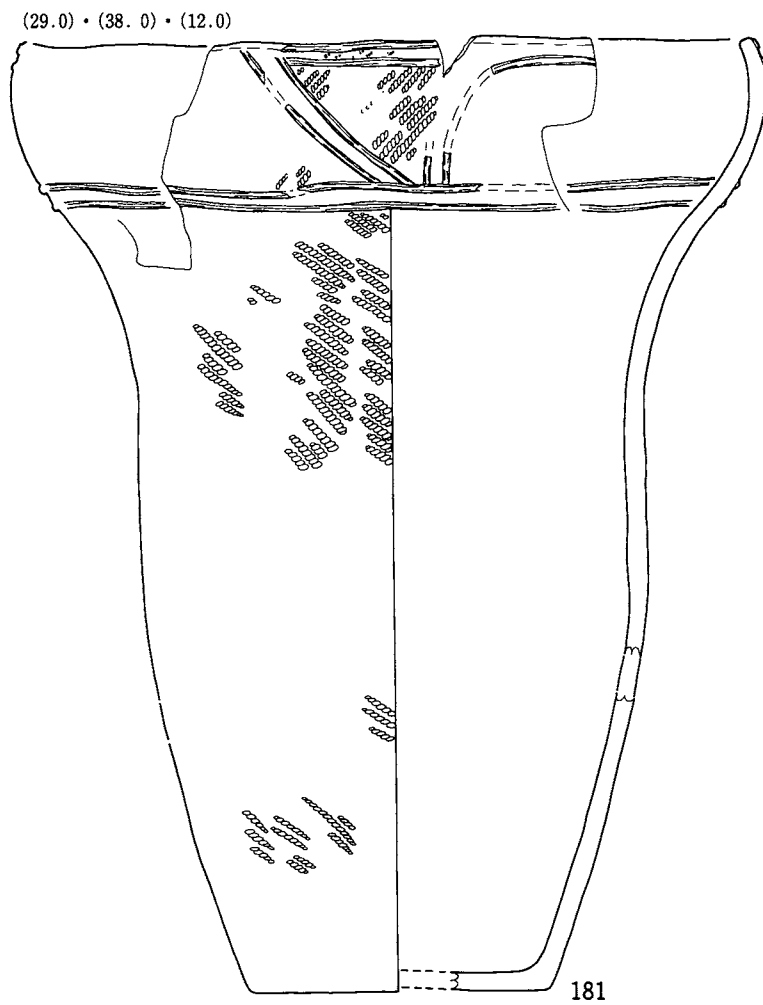
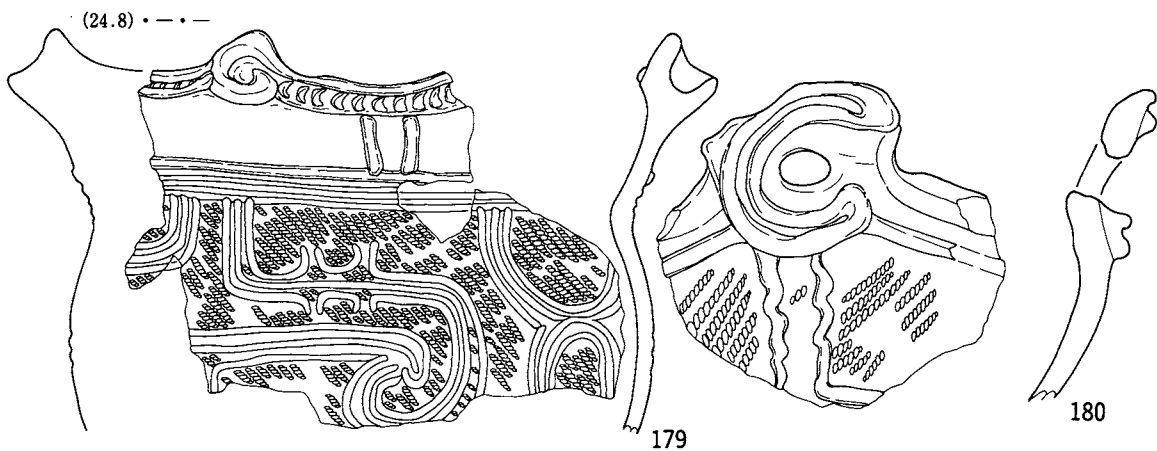
みをもった後、いくぶんくびれて内湾する口縁部に続く。口縁部には上端と下端に隆帯が巡り、この区画内には2本一組の隆帯が曲線文を描いている。地文はLR単節斜縄文で、口縁部には横、体部には縦回転で施文されている。182もキャリパー形の深鉢片である。隆帯区画された口縁部には、部分的に渦巻状の文様を構成する2本の隆帯が横走する。地文はRLR複節斜縄文で、口縁部は横、体部は縦回転で施文されている。183は2本一組の沈線が垂下する底部片である。184は体部上半部にくびれを有する深鉢で、この部分に2本の隆帯が巡るほか、下には同様の隆帯により末端が渦巻を構成する曲線文が展開する。185は体部上半～口縁部が残存する深鉢である。緩い波状を呈す口縁部は、強く外反して開く。口縁上端には2本の隆帯が巡り、波頭部分で渦巻文を構成する。頸部にも2本の隆帯が巡り、これらに挟まれた口縁部は無文帯となっている。体部には細い隆帯によって、渦巻文を配した曲線文が展開される。地文は0段多条RL単節斜縄文である。

186は小さな山形状の突起をもつ口縁部で、全体は緩く内湾するが、突起部分は外反する。口縁部上端には隆帯が巡り、突起部分は円形文が配される。体部には側面が丁寧に調整された隆帯沈線によって部分的に渦巻文を構成する区画文が描かれる。地文はRLR複節斜縄文が縦走する。187は大きな波状を呈する口縁部を有する。全体は内湾するが、波頭部分は短かく外反する。体部には沈線区画された長楕円形の縄文帯が並列し、波頭部下位では楕円形文の両側にゼンマイ状の沈線文が垂下している。縄文はRLR複節斜縄文である。188は体部下端から底部が残存する。体部は内傾して立ち上がる。沈線区画された楕円状の縄文帯が並列し、この間に2本一組の隆帯沈線が垂下する。189は小型の深鉢で、体部上半部に最大径を有し、緩くすぼんで口縁部に続く。口縁部は短かく僅かに外傾し、3単位の山形突起をもつ。地文はLR単節斜縄文である。190はLR単節斜縄文を地文とする深鉢の体部片である。191、192は底部片である。192は体部下端が無文帯となっている。193は頂部に隆帯による渦巻文が配された橋状把手である。194は台状の突起部分である。中央部に孔を有し、これを取り巻くように隆帯が渦巻文を構成している。また、突起の内側にも隆帯による渦巻文をもつ。

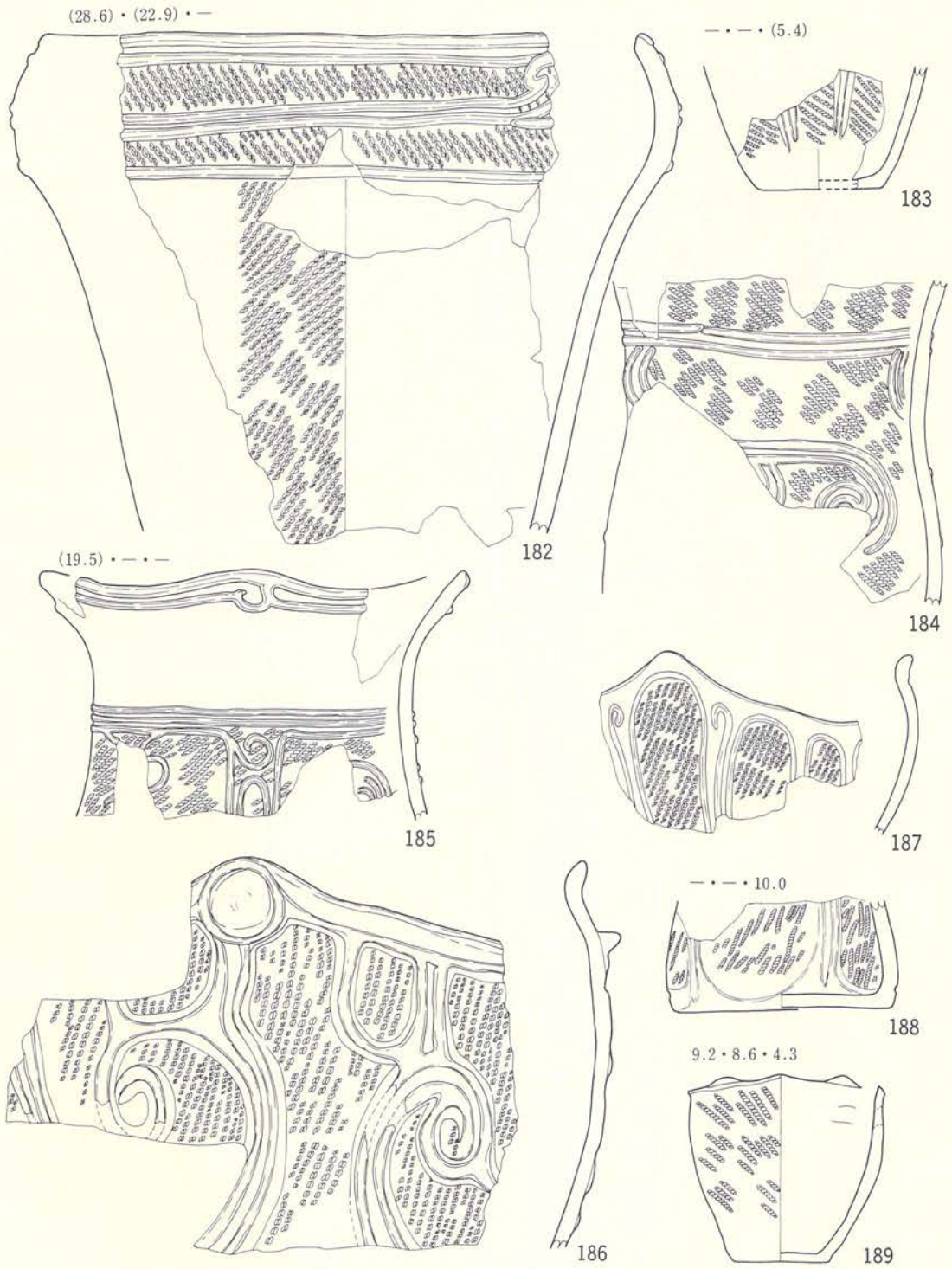
195は緩く外傾する口縁部片である。口縁下端には太い隆帯が巡り、この上位に縄文原体の側面圧痕文が縦に連続して施文される。地文は0段多条RL単節斜縄文である。196は体部上端部の破片と考えられる。上位には隆帯による並行文、波状文が巡り、下位には隆帯による曲線文が展開する。197～201はキャリパー形土器の口縁部片である。いずれも隆帯による曲線文が施文されている。198は隆帯に挟まれた部分が無文となっている。

202、203は同一個体の可能性がある。体部上端に最大径をもち、無文の口縁部は外反して開く。体部には2本一組の沈線が区画文を構成する。地文はLR単節斜縄文で、2本の沈線間は磨り消されている部分もある。204もこれらと同様な形態をもつ。205は緩い波状を呈す口縁部片

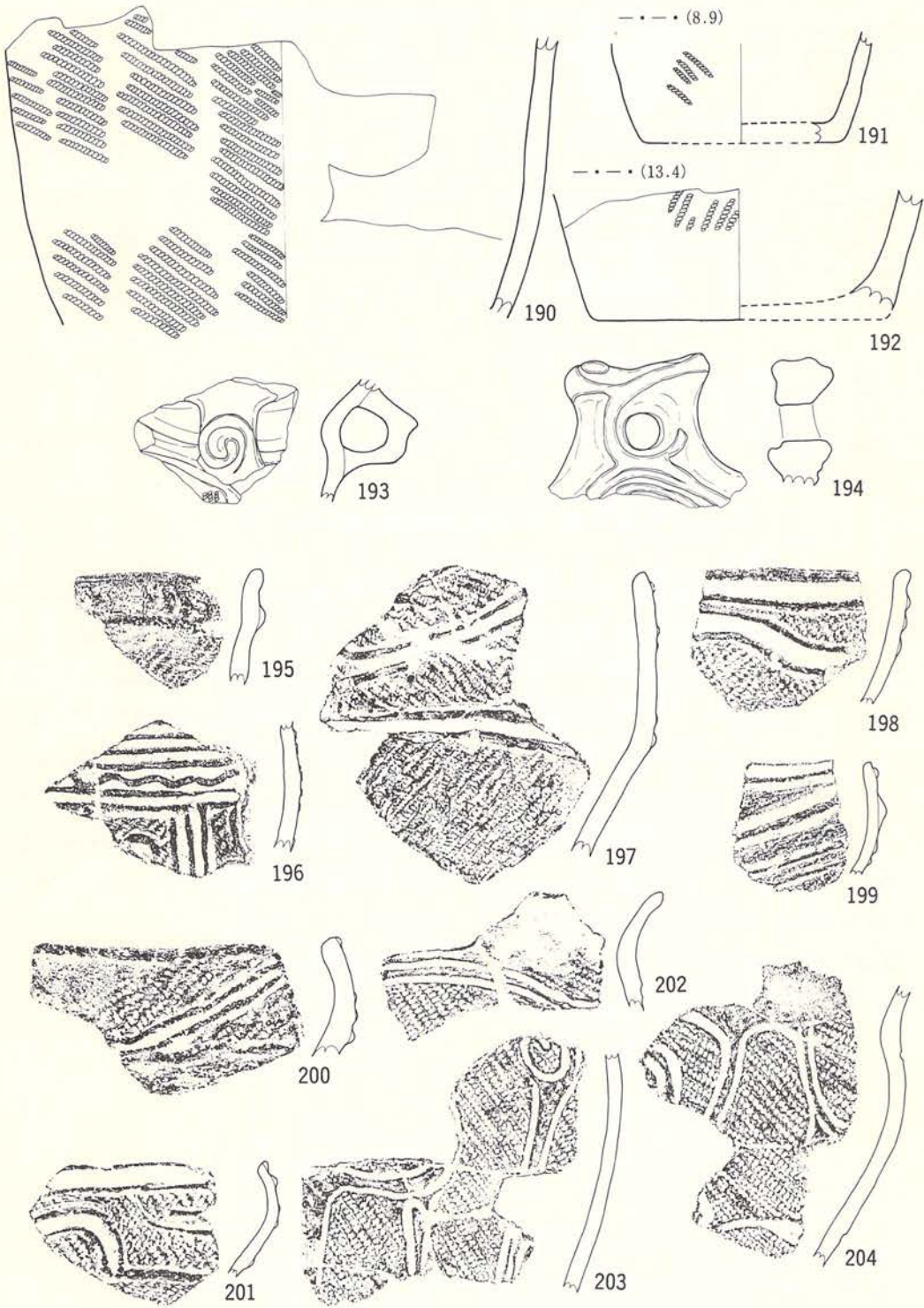




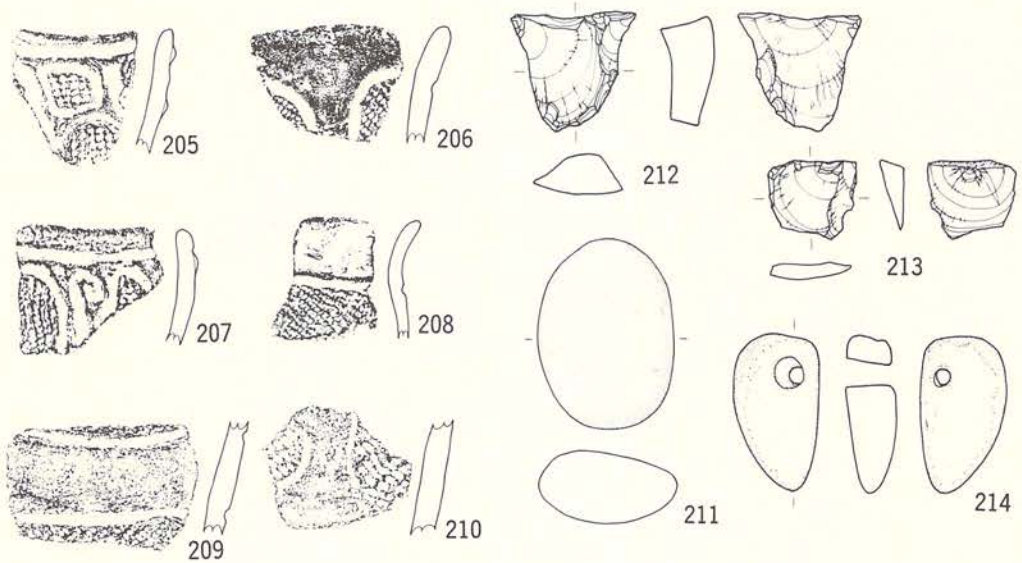
第40图 AK10住居跡出土遺物(1)



第 41 图 AK 10 住居跡出土遺物(2)



第 42 图 AK 10 住居跡出土遺物 (3)



第 43 図 AK 10 住居跡出土遺物(4)

で、隆沈線による区画文が描かれる。206 は平縁で緩く外反する。沈線区画された縄文帯が文様を構成する。207 も平縁で緩く内湾する。口縁上端に波線が巡り、この下位に低い隆沈線によるゼンマイ状文と沈線区画された縄文帯が垂下する。208 は外反する口縁部片で、沈線によって区画された口縁部は無文となっている。209、210 は沈線区画された無文帯が文様を構成している。

〈石器〉211 は小型の磨石である。平面・断面形とも楕円形を呈し、表裏両面が使用面となっている。212、213 はフレイクである。

〈石製品〉214 は、柱穴状土坑 P<sub>5</sub> から出土した硬玉製の垂飾りである。平面形は不整な半月形である。上端に径 8~4 mm の小孔が穿たれている。器面には顕著な整形痕は認められず、原石をそのまま利用したものと考えられる。

時期 出土した土器等から推定して、縄文時代中期後葉の住居跡と考えられる。 (酒井)

## AM 8 住居跡

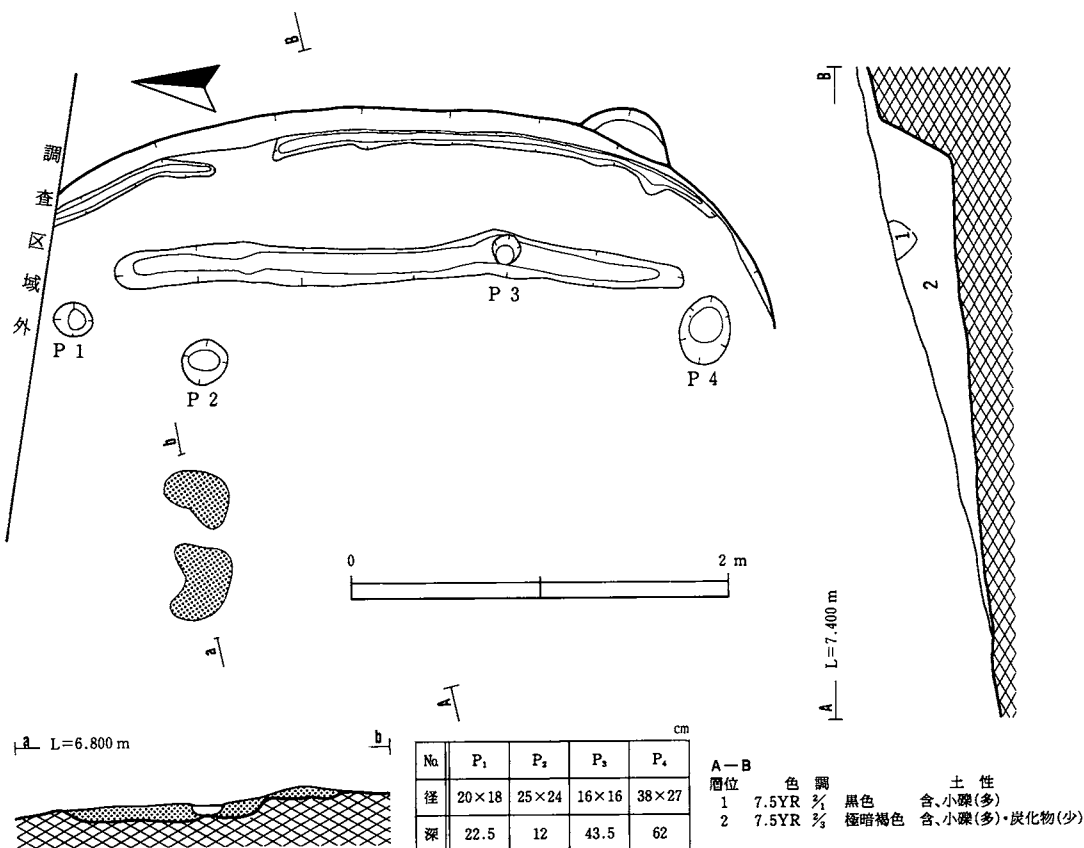
遺構 (第 44 図・写真図版 16)

〈検出状況、重複関係〉粗掘り時に縄文土器が周囲より多く出土する地点として検出された。斜面に立地するため斜面下位の西壁は遺存せず、検出時に直接重複する遺構はない。なお、北側は調査区外に延びる。

〈規模・平面形〉検出された部分で径 3.9 m であることから、完全であれば 4 m 以上と推定され、凸辺隅丸方形に近い形状と考えられる。

〈埋土〉2 層に分けられる。1 層は小礫を多く含む黒色土で、2 層は多量の小礫と少量の炭化物を含む極暗褐色土である。

〈壁〉約 30 度で強く外傾し、高さは中央部で 34 cm、北西壁で 32.5 cm、南東壁で 5~0 cm である。北西壁・北壁沿いには幅 8 cm~10 cm、深さ 2 cm~5 cm の壁溝が巡るが、北西から 90



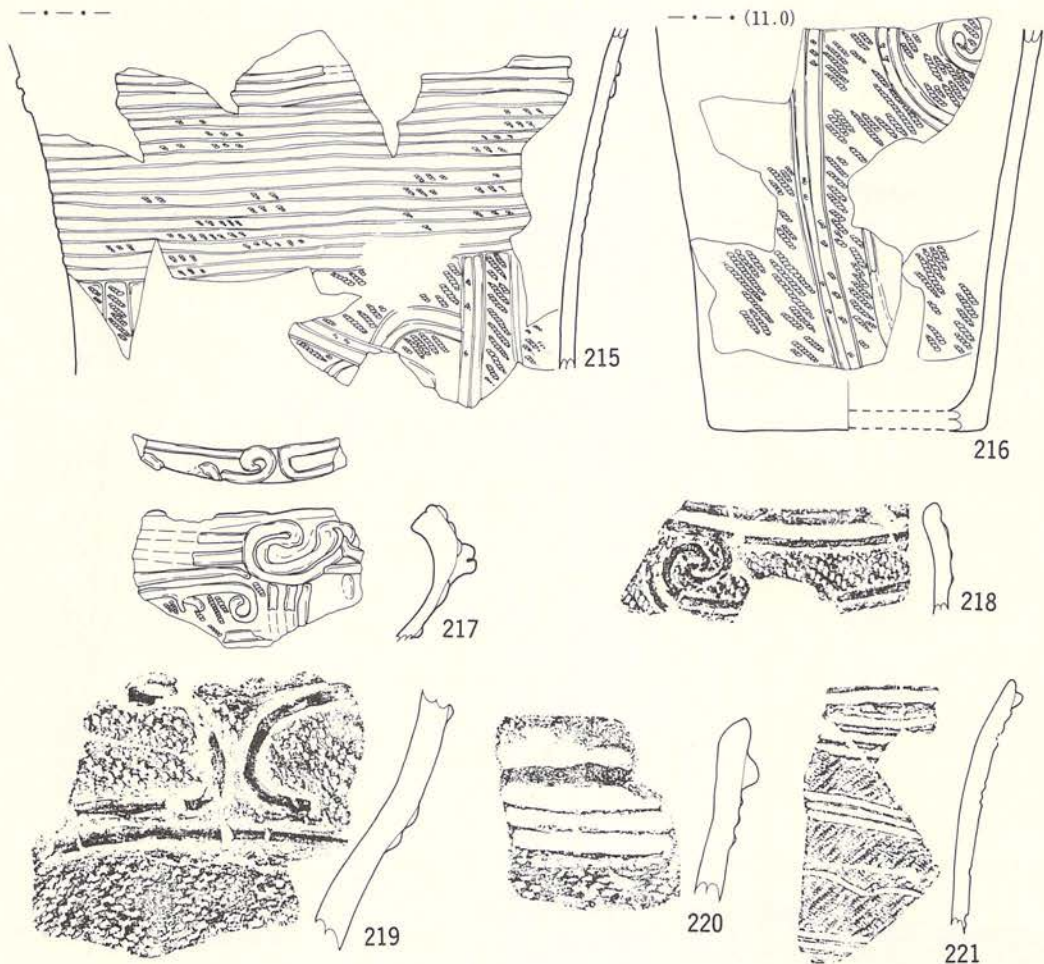
第 44 図 AM 8 住居跡

cm の位置で 35 cm ほど中断する。また、壁の中央部から 65 cm 南方の床面に、長さ 3.5 m、幅 20 cm、深さ 12 cm～19 cm の規模をもつ溝跡がほぼ直線的に掘られている。

〈床面〉粘板岩の細片を含む黄褐色土層面で、硬くしまり平坦である。

〈柱穴〉P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub> の 4 個が検出された。位置が必ずしも整っていないが、本住居跡の柱穴を構成する一部と考えられる。

〈炉〉特別な施設をもつ炉は未検出であるが、床面中央の西寄りに南が 40 cm×30 cm、北が 35 cm×25 cm、厚さ 4.5 cm の不整形な形を示す現地性焼土があり、これが炉に相当する可能性がある。  
(高橋)



第 45 図 AM 8 住居跡出土遺物

## 遺物（第45図・写真図版66）

出土遺物は土器だけである。

〈土器〉215・216は同一個体の可能性がある。215は体部上半部で、口縁部は欠損する。上端に2本の細い隆帯が巡り、これが口縁部と体部を区画している。体部上端には十数本の細い並行沈線が巡る。216は体部～底部で、体部はほぼ直立する。上端に施されるものと同じ細い沈線によって渦巻文・曲線文が描かれている。地文はLR単節斜縄文である。217～219はキャリパー形土器の口縁部片である。217は細い隆帯による渦巻文が配され、内削ぎとなる口唇部にも渦巻文を構成する隆帯が貼付される。218は2本の隆帯による曲線文が描かれ、末端は渦巻文を構成している。地文はRL単節斜縄文である。219も隆帯による曲線文をもつ。地文はRLR複節斜縄文で、口縁には横、体部には縦回転で施文されている。220は口縁上端に太い隆帯が巡り、この下位に3本の断面が三角形の細い隆帯が巡る。221は全体が外反して開く口縁部片である。口縁上端には隆帯が巡り、体部には3本一組の並行沈線が巡る。また、沈線文の間には緩い波状沈線が施されている。地文は0段多条RL単節斜縄文である。

時期 出土遺物から推定して、縄文時代中期中葉の住居跡と考えられる。（酒井）

## BA2住居跡

### 遺構（第46・47図・写真図版17）

〈検出状況〉表土を除去した時点で、暗褐色土の広がりとして検出された。重複する遺構はない。斜面下位にあたる西側は流失している。量的に多いとはいえないが、埋土下位から床面にかけて炭化物や焼土の分布がみられ、焼失した住居跡の可能性はある。

〈規模・平面形〉南北4.3～3.5m、東西4.2mで、東壁側に長軸をもつ隅丸台形を呈する。

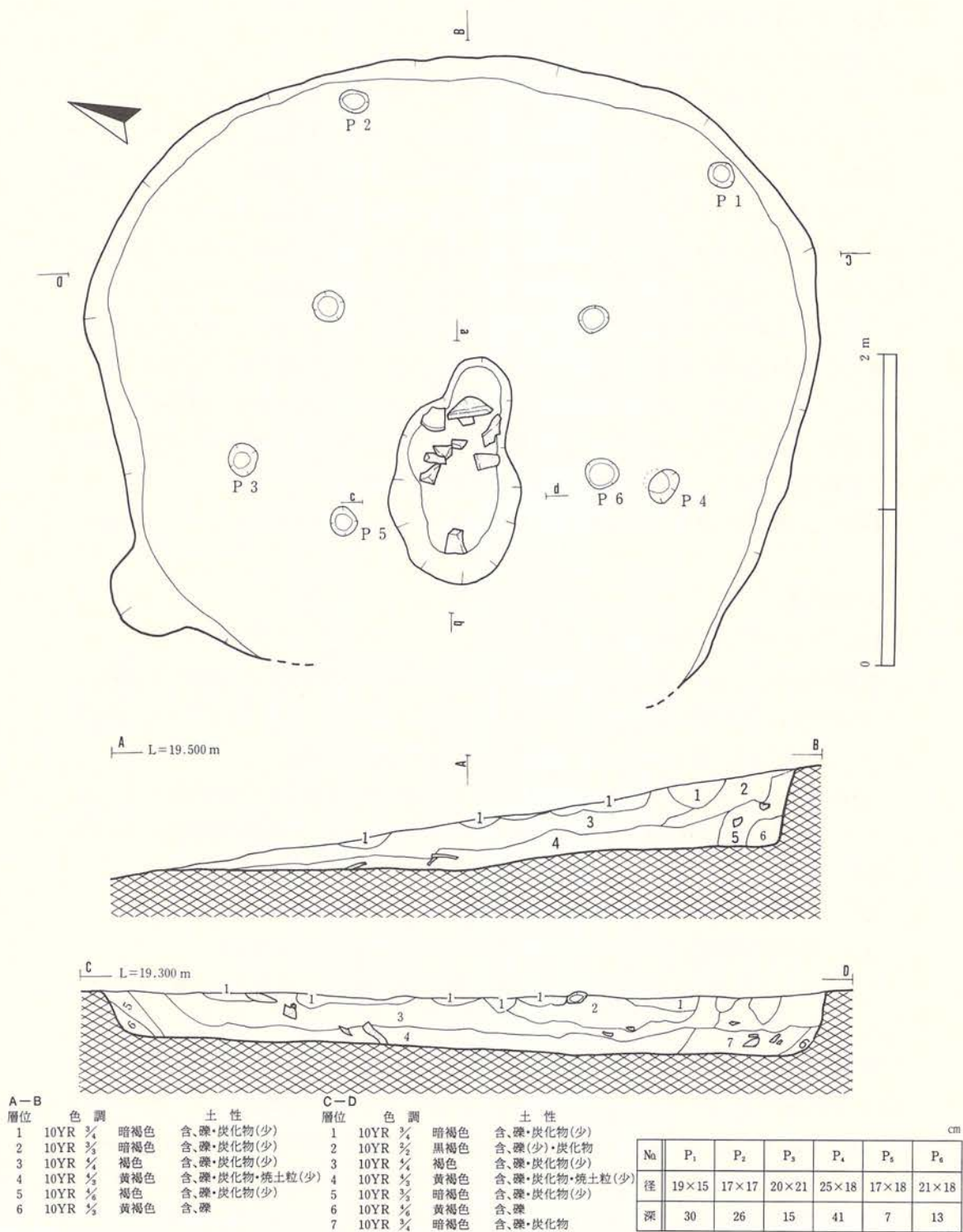
〈埋土〉自然堆積の様相を示す。2層に大別され、上位は暗褐色土、下位は炭化物・焼土を含む褐色土で構成されている。なお、全体に粘板岩の巨礫及び細礫を多く包含する。

〈壁〉いずれもほぼ直立する。壁高は東壁60cm、南壁・北壁は20cmである。

〈床面〉粘板岩の細礫を含む褐色～暗褐色土層で、平坦で硬くしまっている。

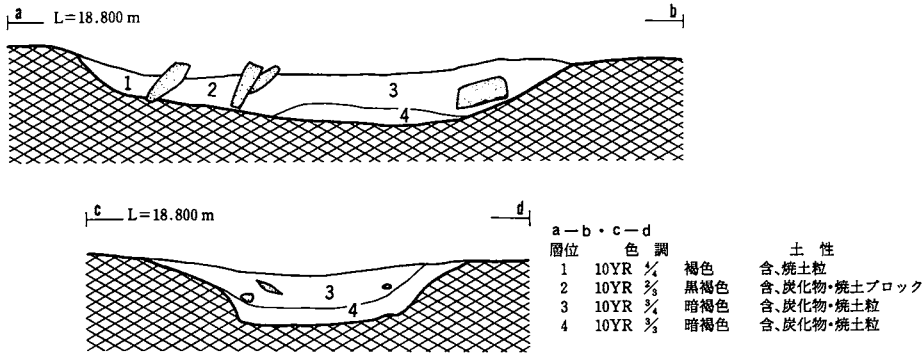
〈柱穴〉 $P_1$ ～ $P_6$ の6個が検出された。 $P_1$ ・ $P_2$ は東壁際に位置する。主柱穴の配置は $P_1$ ～ $P_4$ で構成される台形が想定される。

〈炉〉床面中央の西寄りに複式炉をもつ。全体の形状は長軸1.5m、短軸85cm、深さ10～20cmの不整な楕円形の土坑である。東側に偏平な礫5～6個による石囲部があり、石囲炉＋掘り込み部（前庭部）から成る複式炉を構成している。土坑の埋土には炭化物や焼土粒を含むが、焼土層が発達している部分はみられない。石囲炉の西側に底部を欠く大型土器破片が炉石に接して出土しているが、これが埋設土器として利用されたものかどうかは不明である。



第46図 BA 2住居跡(1)





第 47 図 BA 2 住居跡(2)

遺物 (第 48・49 図・写真図版 66・67)

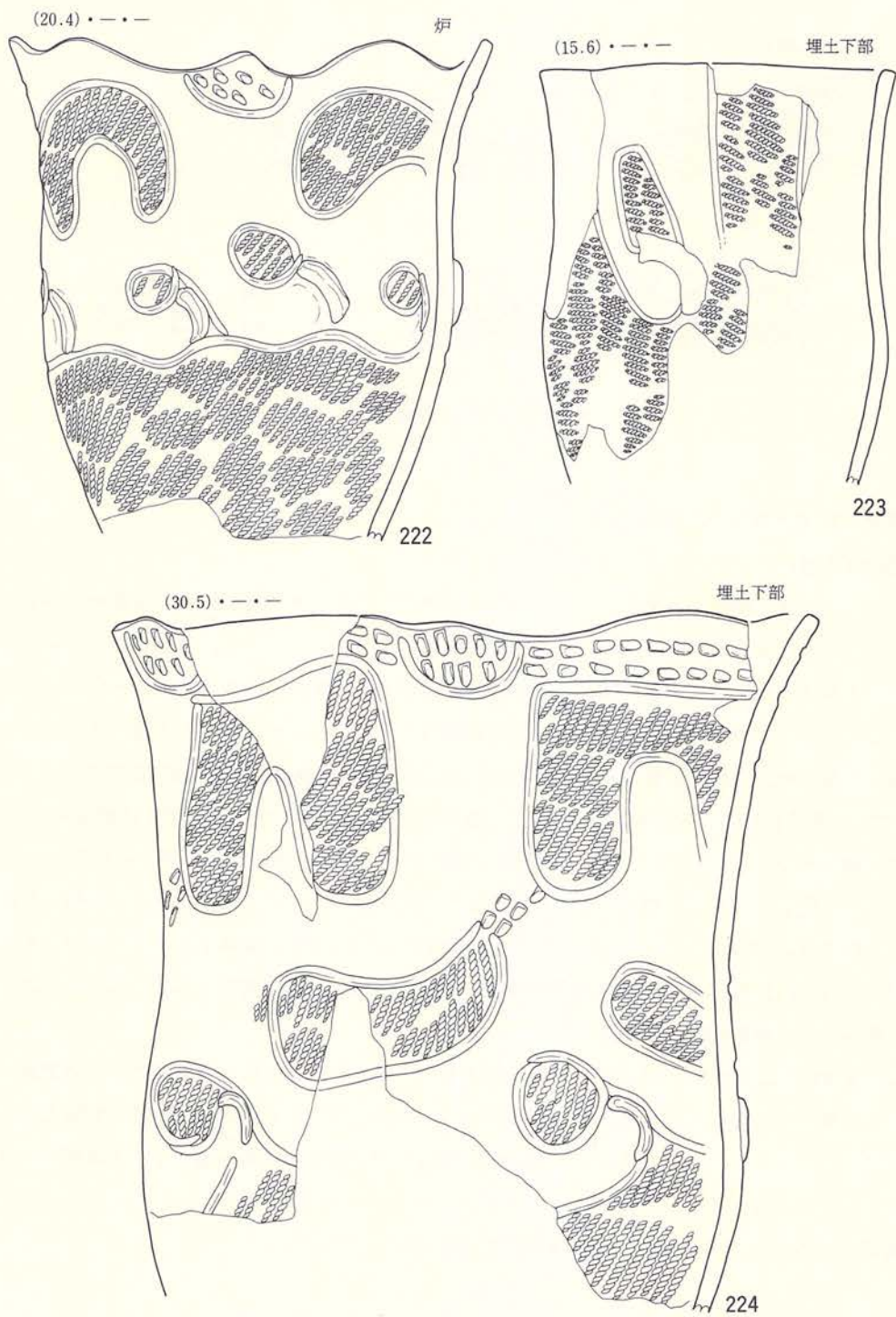
遺物は土器だけで、炉・床・埋土から出土した。

〈土器〉222 は、炉内から出土した。底部及び体部の約 $\frac{2}{3}$ を欠損する深鉢で、体部中央が僅かにふくらみ、口縁部は緩く外反する。口縁部は頂部に丸味をもつものと、角ばるものが交互に連続する波状を呈する。文様は体部上半部に施されており、沈線区画された $\cap$ 形・円形の縄文帯を配している。また、円形文の下位には鱗状隆帯が付されるほか、角ばる口縁の下は弧状の沈線文が描かれ、この中に刺突が充填されている。223 は沈線区画の J 字状の無文帯が描かれる。223 は底部を欠損する大型の深鉢である。器形や口縁部の形態・文様とも 222 に類似するが、波状口縁は緩やかで、文様も $\cap$ 形文と円形文の間にバナナ状の不整な楕円形文が加わる。また、口縁部の全面と、 $\cap$ 形文と楕円形文をつなぐように刺突が施されている。胎土には金雲母が散在する砂を含んでいる。3 点とも地文は RL 単節縄文である。225 は体部下半を欠く大型の粗製深鉢で、口縁部は緩く外反し、LR 単節斜縄文を地文とする。226 は底部のみが残存する。地文は 0 段多条 LR 単節斜縄文である。

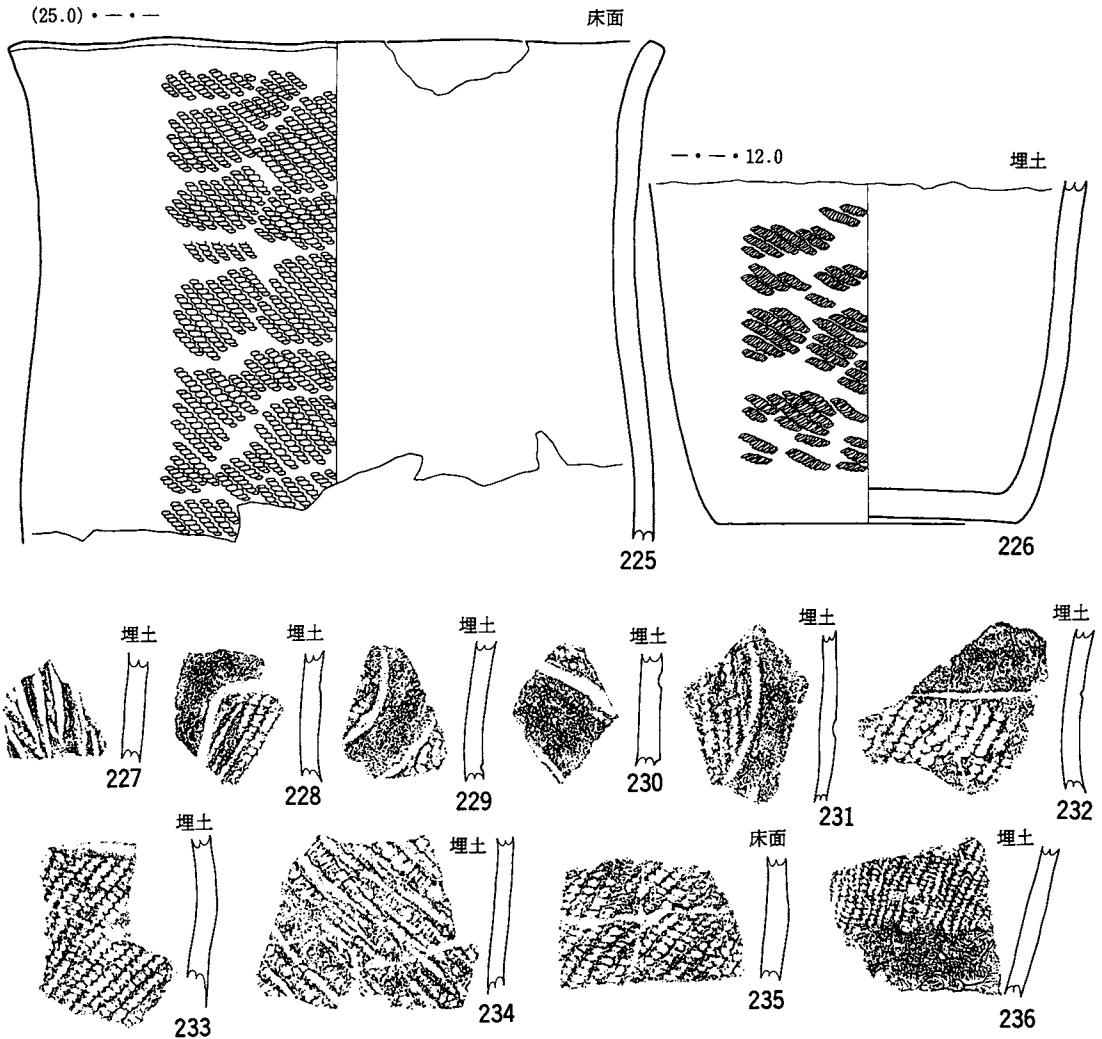
227 は体部下端の破片で、2 本一組の隆沈線が垂下する。228～232 は沈線区画された磨消縄文による文様をもつ土器片である。いずれも胎土には金雲母を包含する。233～236 は粗製土器片である。このうち 233・236 の胎土には金雲母が含まれる。236 は体部下端片で、下端部分は無文帯となっている。

時期 炉内出土の土器から、縄文時代中期末葉の住居跡であろう。

(酒井)



第 48 図 BA 2 住居跡出土遺物(1)



第 49 図 BA 2 住居跡出土遺物(2)

BA14 住居跡

遺構 (第 50 図・写真図版 18)

〈検出状況・重複関係〉 第IV層面で、焼土ブロック及び炭化物を含む褐色土の広がりとして検出された。東側は古代の BB 12 住居跡状遺構に切られ、南西部は調査区域外となっている。また、木根等による攪乱を受けており残存状態は良くない。

床面直上に炭化物や焼土ブロックが分布しており、焼失した住居跡の可能性がある。

〈規模・平面形〉残存する壁や床面の状態から推定して、径 3.5 m 前後の円形を呈するものと考えられる。

〈埋土〉2 層に大別される。上位は炭化物・焼土ブロックを含む褐色～暗褐色土、下位は炭化物・焼土ブロックを多量に含む黒褐色土で構成されている。

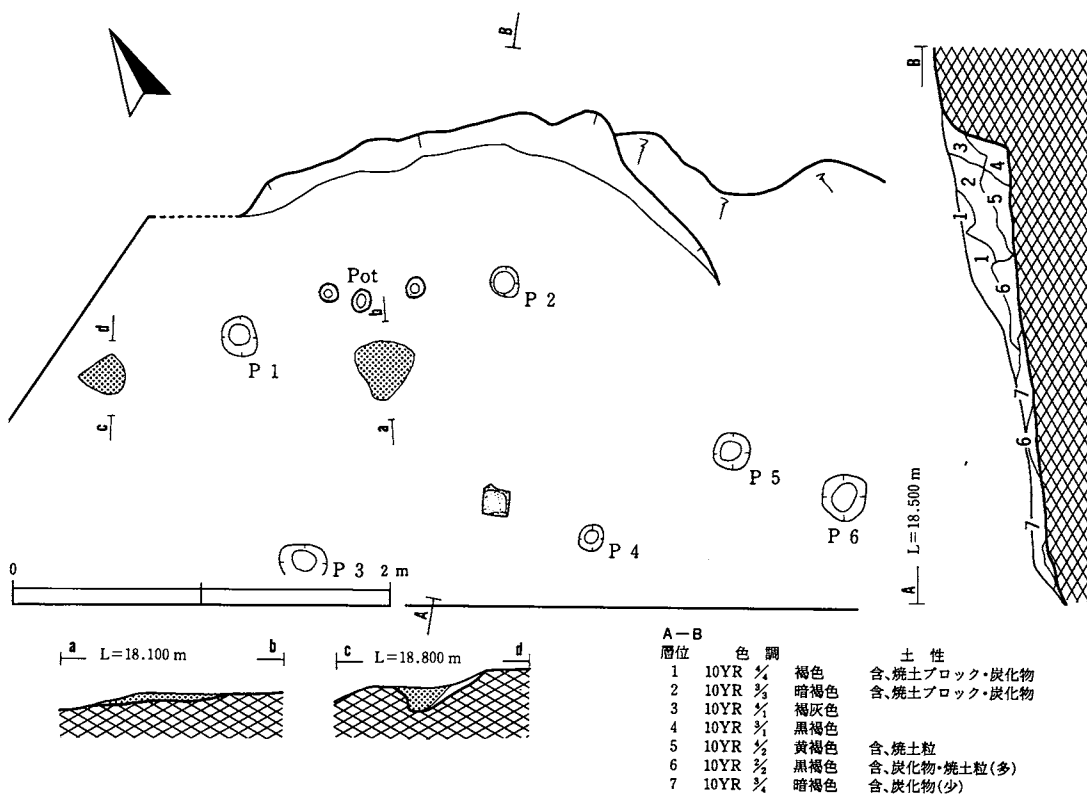
〈壁〉緩く外傾して立ち上がる。壁高は北東壁で 45 cm である。

〈床面〉大半は粘板岩の細礫を含む褐色土層であるが、北西部分では基盤と考えられる粘板岩層を利用している。しまりはなく、全体に南西方向に緩く傾斜している。

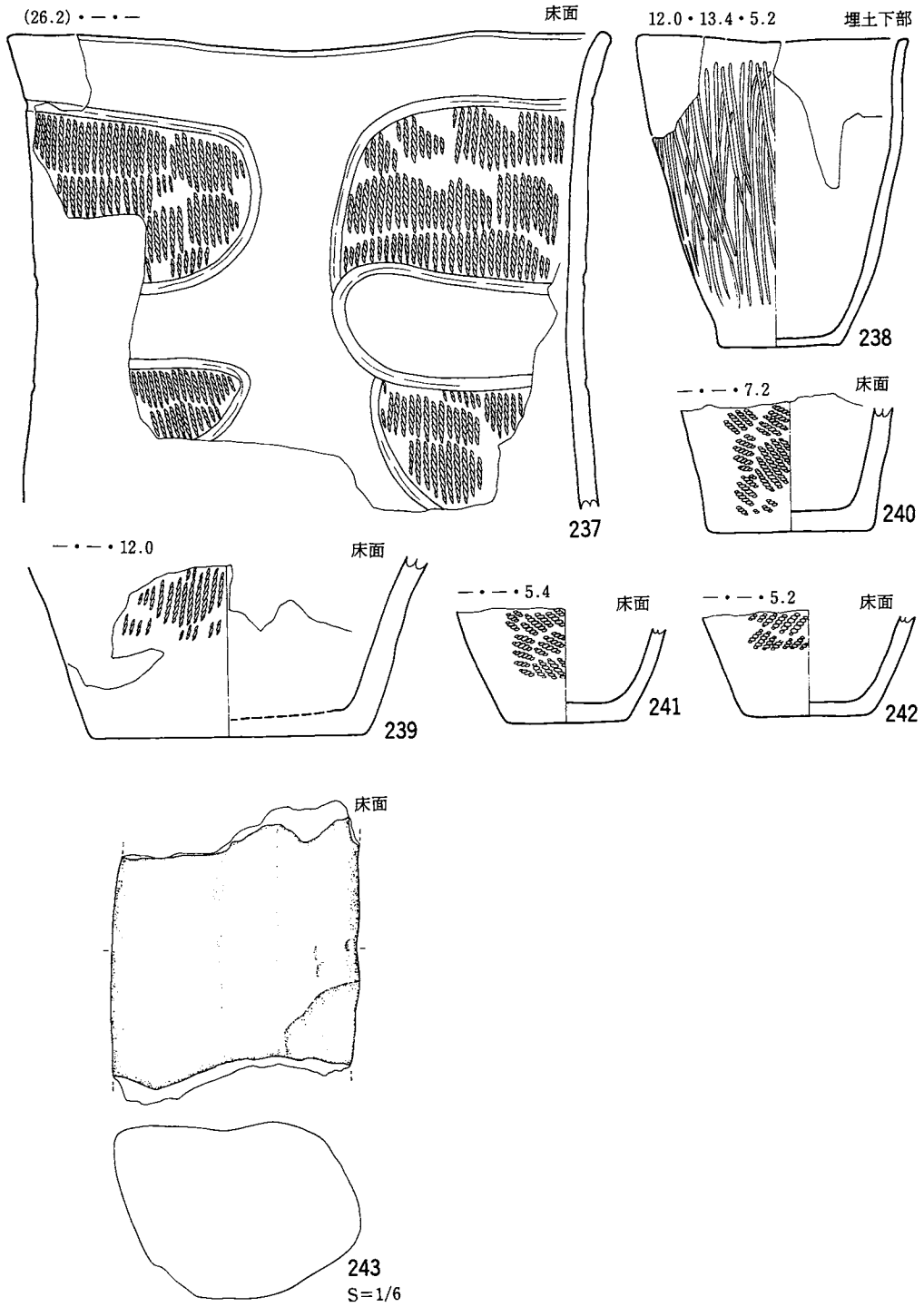
〈柱穴〉P<sub>1</sub>～P<sub>6</sub>の 6 個が検出されている。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は方形の配置となるが、規模や深さからこれらが支柱穴となるかどうかは不明である。

(cm)						
No	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>4</sub>	P <sub>5</sub>	P <sub>6</sub>
径	22×20	15×17	25×19	12×14	20×20	24×23
深	15	22	13	33	36	32

〈炉〉床面中央部に地床炉をもつ。焼土は 32×30 cm の範囲に不整形に広がり、層厚は最大 4 cm と薄い。また、南西部に小規模な現地性焼土が検出されたが、位置や規模から炉とは考えにくい。



第 50 図 BA 14 住居跡



第 51 图 BA 14 住居跡出土遺物

遺物 (第 51 図・写真図版 67・68)

床面及び埋土下部から土器と石器が出土した。

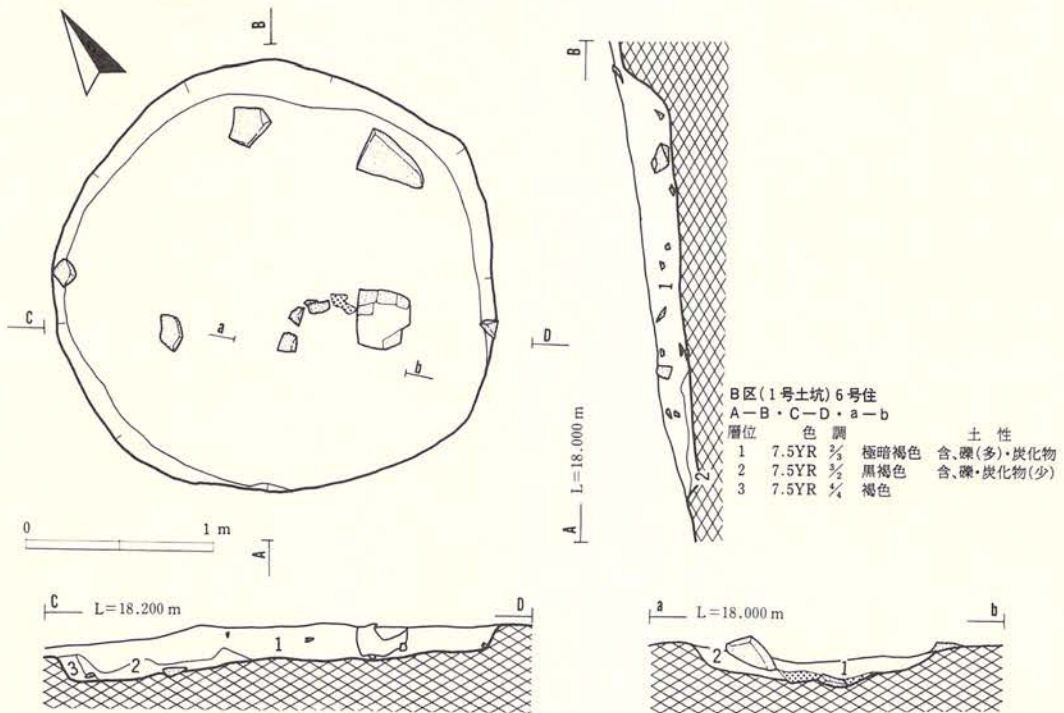
〈土器〉237 は炉の周辺から出土した深鉢で、体部から口縁部にかけて緩く外反する。全体が残存しないためモチーフの詳細は不明であるが、沈線区画された横位 S 字状またはヨ字の磨消帯が展開したものと考えられる。地文は L 1 段の捺糸文である。胎土には金雲母が含まれる。238 は小形の深鉢である。体部は僅かに内湾して立ち上がり、口縁部上端で緩く外反する。体部には 3~5 本を一組とする櫛歯状の条痕文が施されている。239~242 は底部のみが残存する。いずれも胎土には金雲母を含む。このうち、240 を除く 3 点は床面に伏せた状態で出土した。239 は L 1 段の捺糸文を地文とし、下端部は無文帯となっている。240・241 は LR・242 は RL の単節斜縄文である。また、これら 3 点の内面には炭化物が多く付着している。

〈石器〉243 1 点だけの出土である。形状は縦長と考えられるが、両端を欠損する。使用面は緩くくぼみ、滑らかである。砥石の類であろうか。

時期 床面出土の土器から縄文時代中期末葉の住居跡であろう。

(酒井)

BB 6 住居跡



第 52 図 BB 6 住居跡

### 遺構 (第 52 図・写真図版 19)

〈検出状況〉表土を除去した時点で、炭化物を含む暗褐色土の広がりとして検出された。重複する遺構はない。西側の一部は沢による削剝を受けており、また南壁は掘りすぎている。

〈規模・平面形〉径 2.3 m 前後のややいびつな円形を呈するものと推定される。

〈埋土〉壁際に褐色土が堆積する他は、粘板岩の細礫を含む暗褐色土が主体を占める。

〈壁〉ほぼ直立する。壁高は北壁 37 cm、東壁 8 cm である。

〈床面〉粘板岩の細礫を含む褐色土層面で、いくぶん凹凸があり硬くしまる。また、沢による削剝のため、全体は緩く西側に傾斜している。

〈炉〉床面中央の南寄りに 3 個の礫を伴う炉が検出された。径 60 cm、深さ 5 cm の円形の掘り方をもち、礫は北側にのみ検出された。掘り方の埋土中には焼土粒、炭化物を含むほか、底面には最大 4 cm の厚さで焼土層が形成されている。

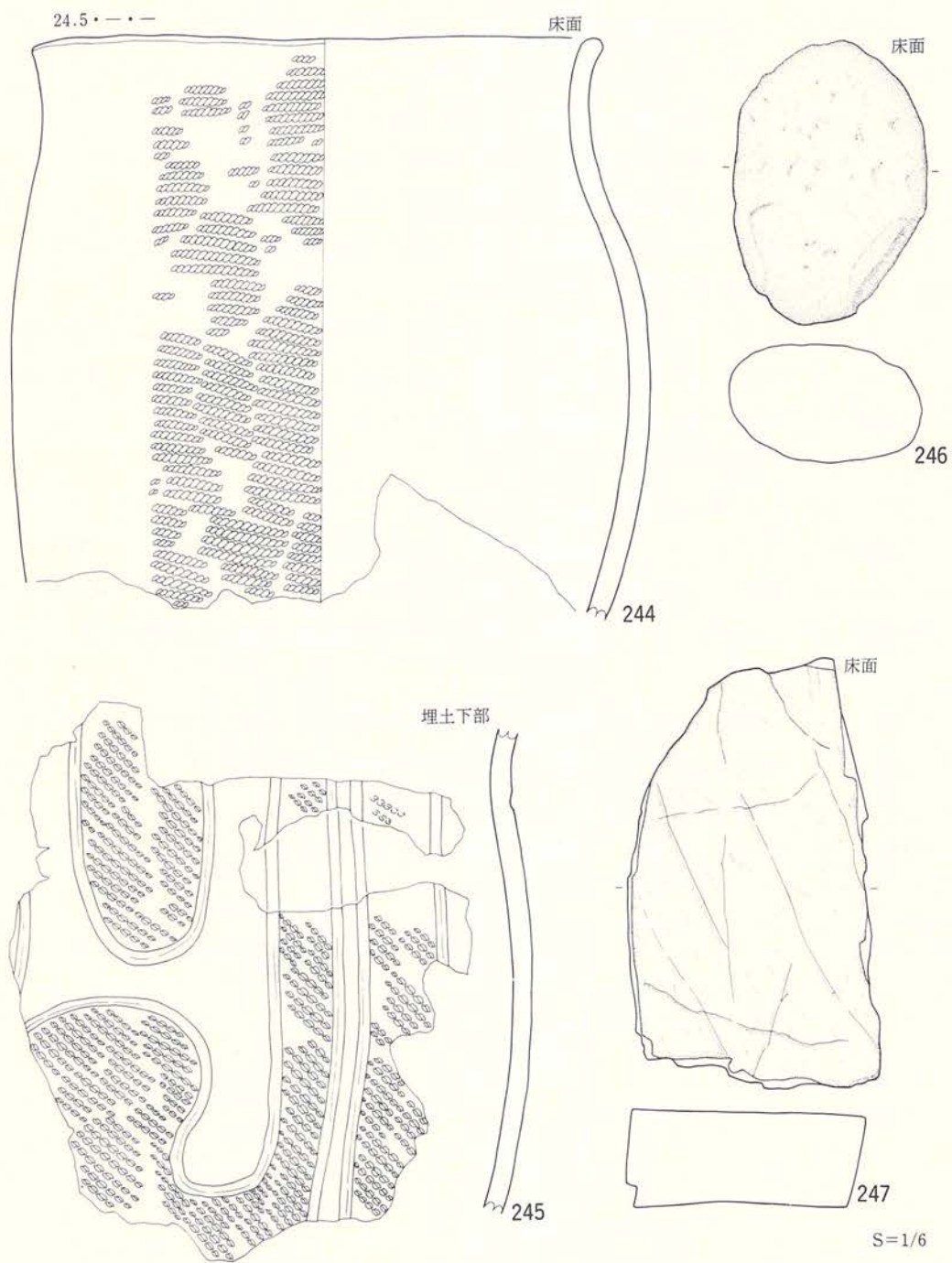
### 遺物 (第 53 図・写真図版 68)

床面及び埋土から土器と石器が出土した。

〈土器〉224 は体部下半を欠く大型の粗製深鉢で、床面から出土した。体部中央に最大径をもち、口縁部は緩く外反する。地文は LR 単節縄文で、横走する。245 は沈線区画された磨消帯が縦方向に展開している。地文は LRL 複節縄文である。これらの胎土には金雲母は包含されていない。

〈石器〉いずれも床面からの出土である。246 は平面形・断面形とも楕円形を呈する磨石である。風化のため使用痕は明瞭ではないが、表裏両面が使用面となっている。247 は扁平な自然礫をそのまま利用した粗製の石皿である。これも表裏両面を使用している。

時期 出土した土器から推定して、縄文時代中期末葉の住居跡と考えられる。 (酒井)



第 53 図 BB 6 住居跡出土遺物

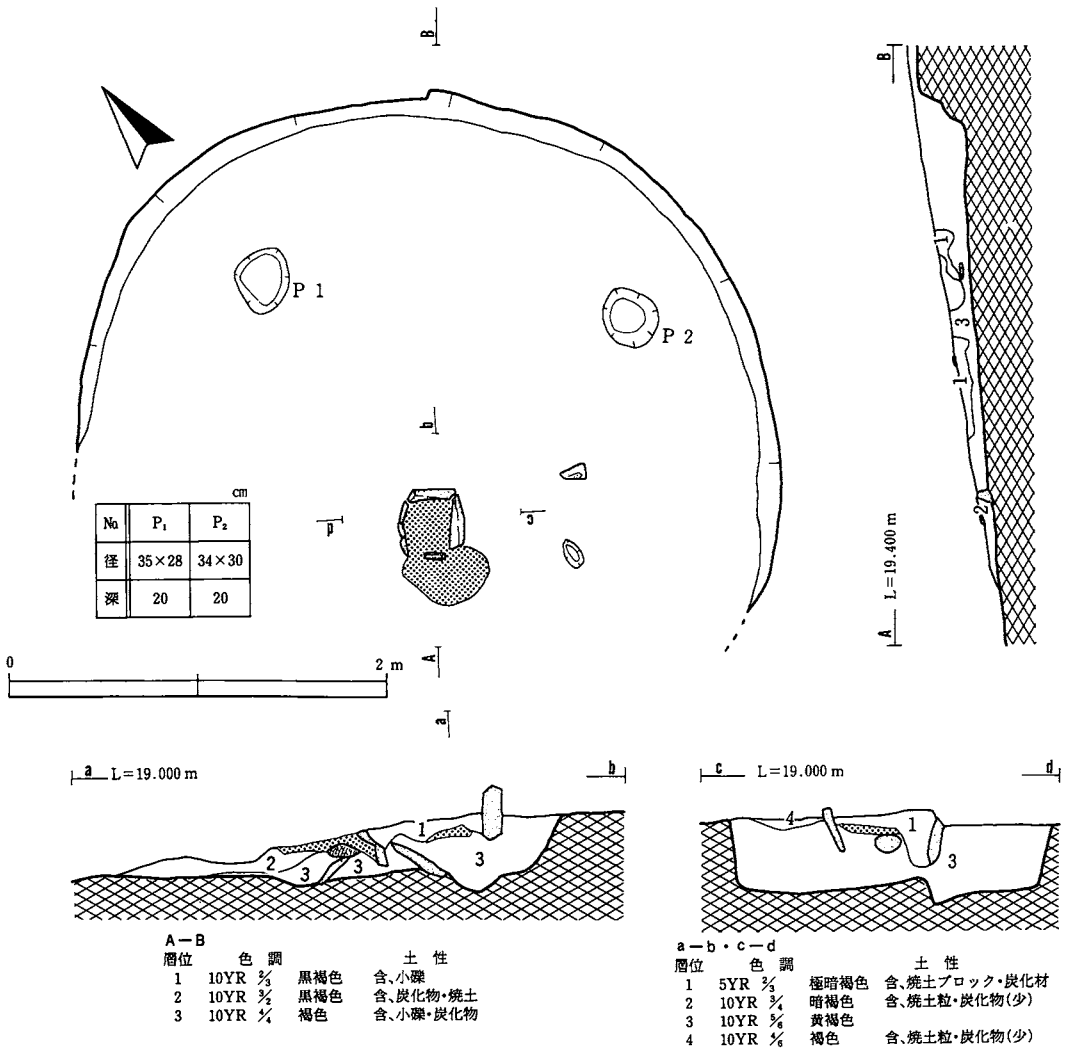


# BC 5-1 住居跡

遺構 (第 54 図・写真図版 20)

〈検出状況・重複関係〉 第三層面で、石囲炉及びこれに伴う現地性焼土が検出され、住居跡と認定した。炉の精査時に、床下から先行する住居跡の石囲炉が検出され、2 棟の重複であることが分った。新期を 1 住居跡、古期を 2 住居跡として記載する。

〈規模・平面形〉 埋土と地山との区別がつきにくく、床面の状態と炭化物の分布からの推定であるが、径 3.7 m 前後の円形を呈するものと考えられる。なお、斜面下位にあたる西側は流失



第 54 図 BC 5-1 住居跡

している。

〈埋土〉上位の一部に黒褐色土が堆積するが、主体は炭化物を含む褐色土層である。層中には粘板岩の細礫を多量に含む。

〈壁〉いずれもほぼ直立する。壁高は北東壁 20 cm、北西壁・南東壁 15 cm である。

〈床面〉全体に粘板岩を含む褐色土で貼り床が施されている。厚さは中央部で 10～8 cm で、壁際はしだいに薄くなる。床面は斜面下位にあたる南西方向に緩く傾いているが、おおむね平坦で硬くしまっている。

〈柱穴〉 $P_1$ ・ $P_2$ の 2 個が検出された。検出された位置から支柱穴を構成するものと考えられるが、これらに対応する柱穴は確認できなかった。

〈炉〉床面中央やや南西寄りに石囲炉をもつ。偏平な礫 5 個を使用して 37×35 cm の方形に築かれている。礫は床面下約 8 cm まで埋設されているが、掘り方は明確ではない。焼土は炉内及び炉の南側に分布し、層厚は最大 4 cm である。 (酒井)

## BC 5—2 住居跡

### 遺構 (第 55 図・写真図版 21)

〈検出状況・重複関係〉BC 5—1 住居跡の石囲炉の精査時に、この下位約 8 cm で新たな石囲炉が検出され、重複が確認された。

〈規模・平面形〉1 住居跡の貼り床の範囲と柱穴の配置から、ほぼ同じ規模で、平面形も円形を呈していたと考えられる。

〈埋土〉1 住居跡の貼り床が主体となっており、個有の埋土はもたない。

〈壁〉ほぼ直立する。壁高は北東壁 24 cm、北西壁・南東壁は 18 cm である。

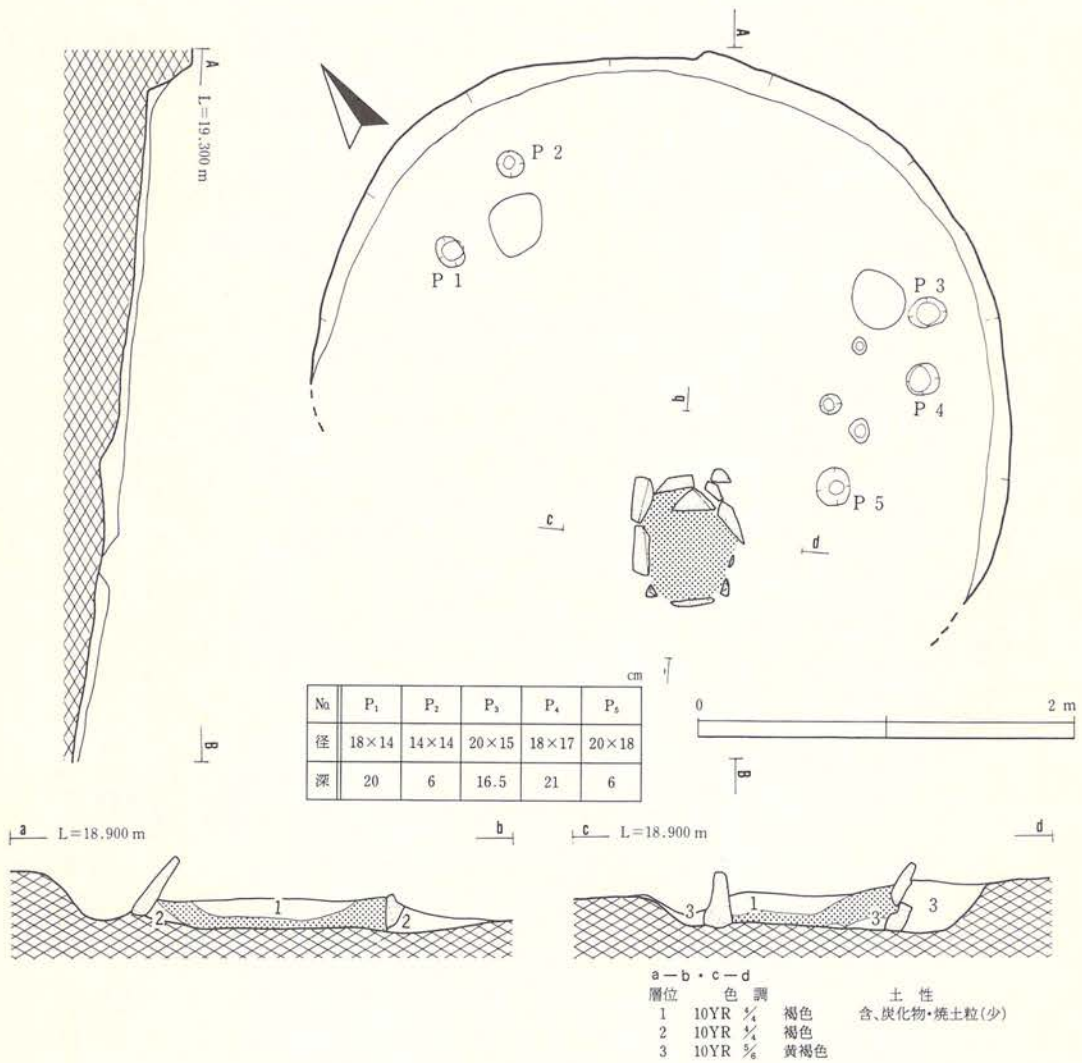
〈床面〉粘板岩の細片を含む黄褐色土層面で、南西方向に緩傾している。凹凸はなく、硬くしまっている。

〈柱穴〉 $P_1$ ～ $P_5$ の 5 個が検出された。深さと配置から推定して、 $P_1$ と  $P_4$ が支柱穴を構成するものと考えられる。

〈炉〉床面中央やや南西寄りに石囲炉をもつ。偏平な礫 6～8 個を用いて不整な五角形に築いている。これらの礫は床面から 10～15 cm ほど埋設されているが、掘り方は明確ではない。炉底部には最大 8 cm の厚さで焼土層の発達が見られた。

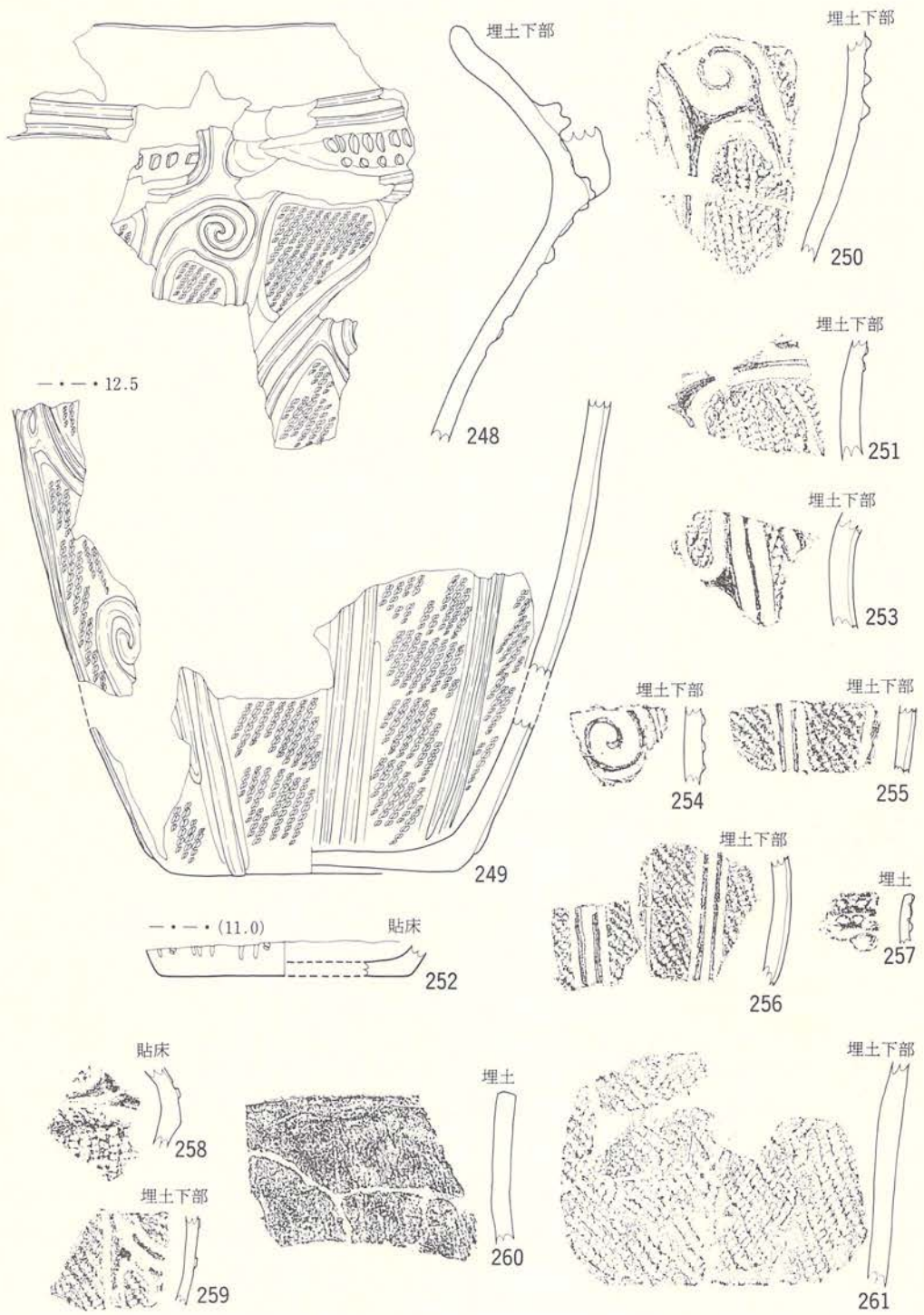
### 遺物 (第 56・57 図・写真図版 69)

1 住居跡の埋土・床面及び貼床内から土器と石器が出土した。貼床内からのものは 2 住居跡に伴う遺物の可能性が強いが、土器片には互いに接合するものもあり、明確に区分できない。ここでは一括して記載する。

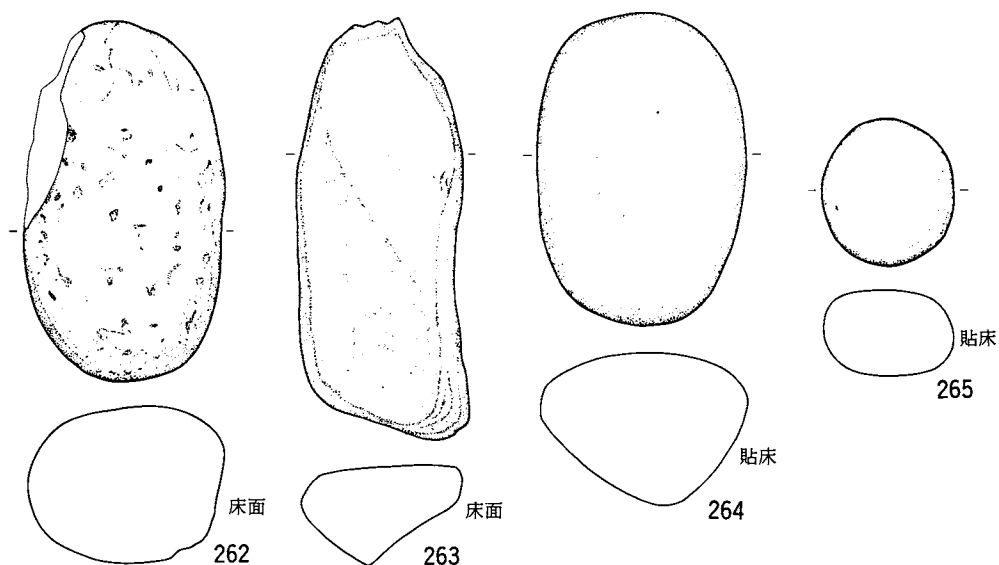


第 55 図 BC 5-2 住居跡

〈土器〉 248～251 は同一個体と考えられる。248 は口縁部～体部上端の破片で、「く」字に屈曲するキャリパー形を呈する。屈曲部の直上部には太い隆帯が巡り、この上位は無文帯となる。隆帯は橋状の把手に連続するようであるが、この部分は欠損している。また、隆帯の下位には隆沈線で区画された刺突先文帯が、把手を基点として巡る。体部には所々に渦巻文を配する隆沈線の区画文が縦位に展開する。249 は体部～底部部分で、この部分では 2 本 1 組の隆沈線が垂下している。これらの隆沈線は全面が丁寧になでられ、断面は台形となっている。内面も全体に研磨され、光沢をもつ。地文は RLR 複節斜縄文である。252 は底部片で、2 本 1 組の沈線が



第 56 図 BC 5 住居跡出土遺物 (1)



第 57 図 BC 5 住居跡出土遺物(2)

垂下している。254 は隆沈線による渦巻文をもつ。255・256 は同一個体で、2 本 1 組の隆沈線が垂下する。258・259 も隆沈線による文様をもつ。260 は器面がよく研磨された口縁部片である。261 は粗整土器の体部片で、LR 単節斜縄文を地文とし、これに綾絡文が縦走している。

〈石器〉いずれも礫石器で、磨石と考えられる。262 は平面形が楕円形を呈し、表裏両面と一側面に使用痕をもつ。263 は断面形が不整な三角形で、このうち 2 面に使用痕をもつ。264 は平面形が楕円形・断面形が不整三角形で、ほぼ全面を使用している。265 は他に比べて小型で、表裏両面が使用面となっている。

**時期** 出土した土器から推定して、1・2 住居跡とも縄文時代中期中葉の住居跡と考えられる。また、土器型式・出土状況から、この 2 つの住居跡間には大きな时期的な開きは考えられず、同時期内での作り替えと推定される。(酒井)

### BD 3 住居跡

#### 遺構 (第 58 図・写真図版 22)

〈検出状況・重複関係〉 第Ⅲ層面で暗褐色土の広がりとして検出された。北側の一部は後世の攪乱を受けている。また、斜面下位にあたる西側は流失している。

〈規模・平面形〉 残存部及び炉・柱穴の配置から指定して、南北 5.3 m、東西 4 m の前後の楕円形を呈するものと考えられている。

〈埋土〉 自然堆積の様相を示す。2 層に大別され上位は暗褐色～黒褐色土、下位は炭化物を僅かに含む褐色土で構成されている。層中には粘板岩の巨礫・細礫を多量に包含する。

〈壁〉 北壁と南壁はほぼ直立し、東壁は全体に緩くオーバーハングする。壁高は北壁・南壁で 30 cm、東壁 55 cm である。

〈床面〉 粘土岩の細礫を含む褐色～黄褐色土層面で、平坦で硬くしまっている。

〈柱穴〉 P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub> の 2 個が検出された。これらはほぼ長軸方向の中軸線上にあり、2 本柱の構造であった可能性が強い。

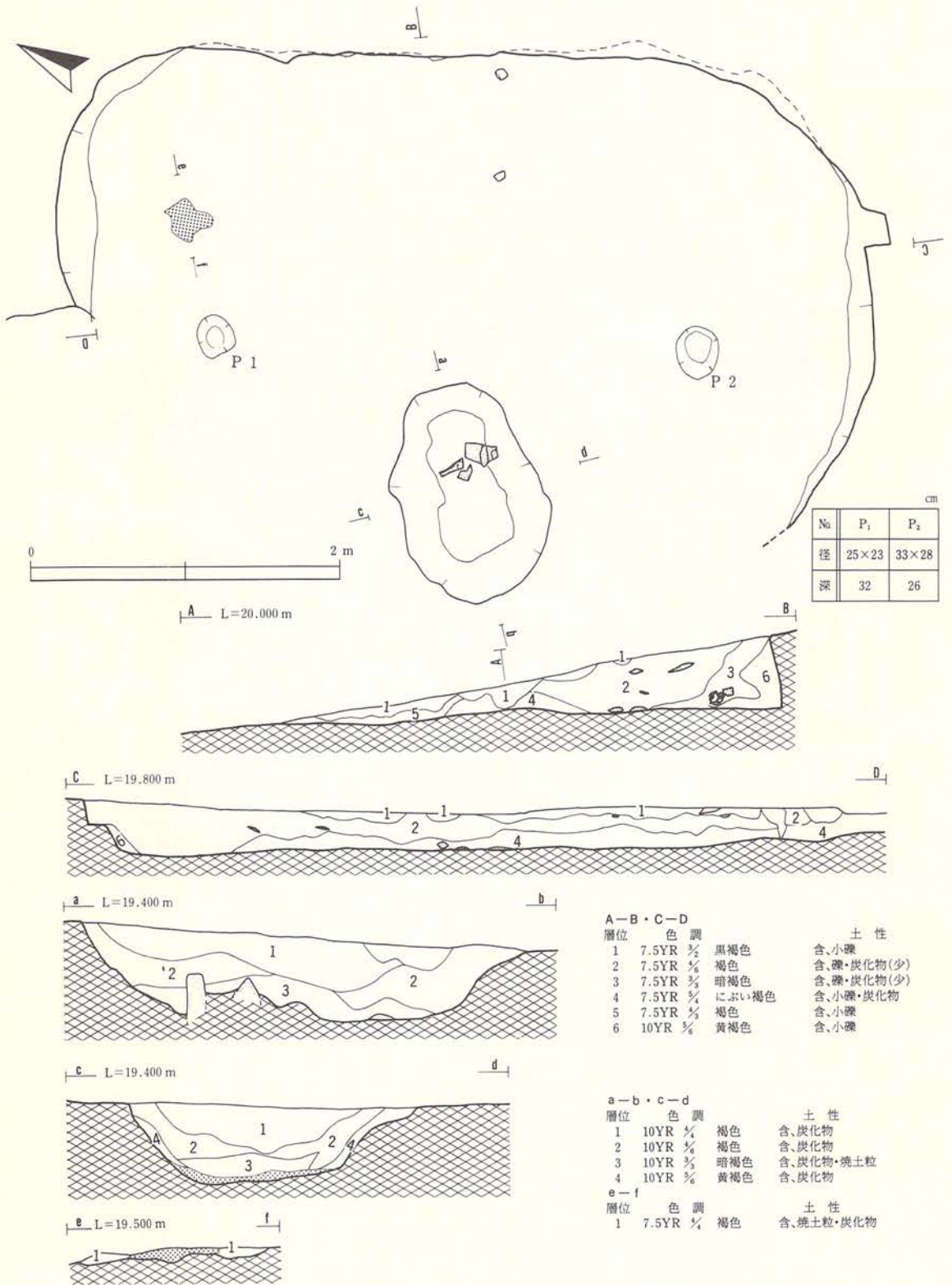
〈炉〉 床面中央部西側に、複式炉と考えられる炉跡をもつ。全体の形状は長軸 1.4 m、短軸 90 cm の不整な楕円形の土坑で、底面中央やや東寄りに仕切りと考えられる扁平な礫 4 個を伴う。埋土は炭化物や焼土粒を含む暗褐色～褐色土で構成され、底面及び壁面には 2～4 cm の薄い焼土層がみられる。この他に北東部に 30×30 cm、厚さ 3 cm の現地性焼土が検出された。

#### 遺物 (第 59 図・写真図版 70)

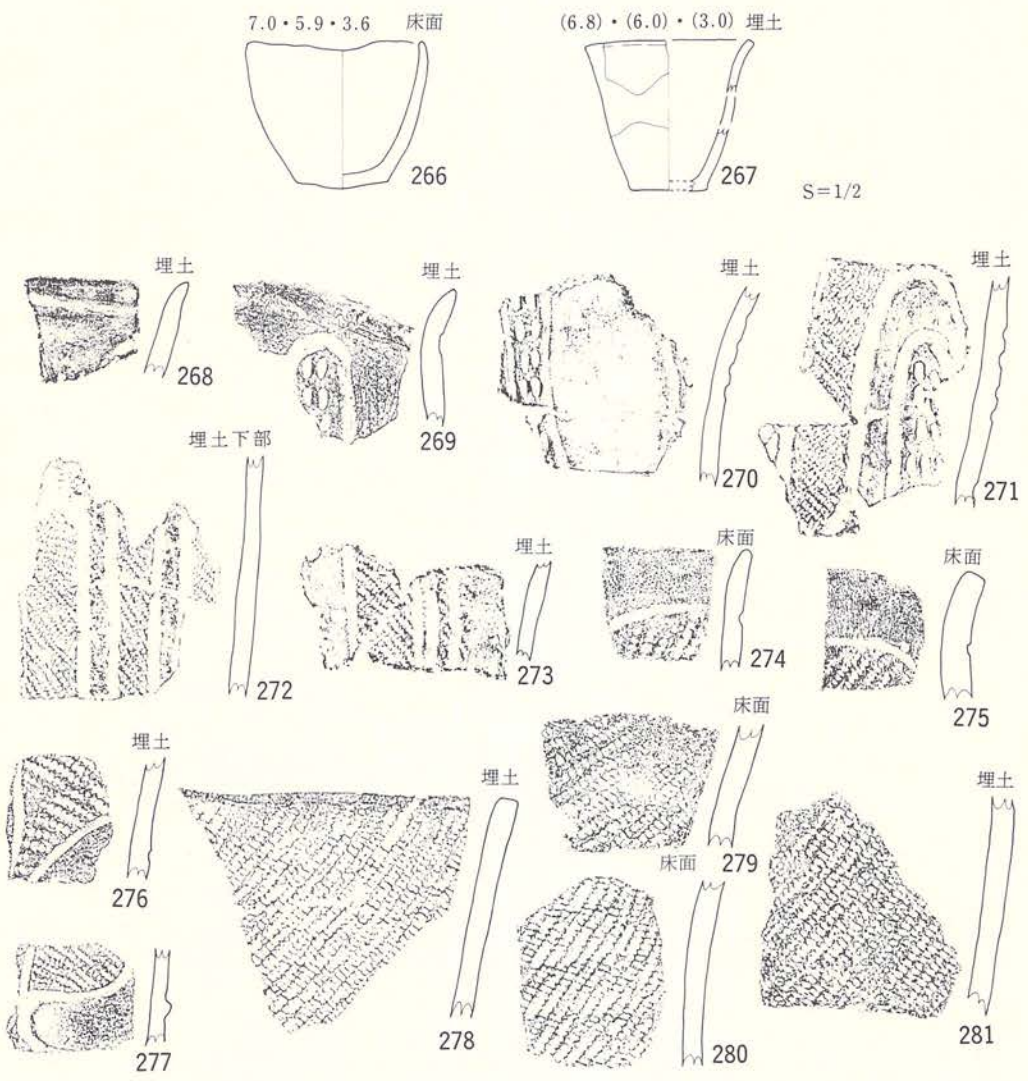
床面と埋土から土器が出土した。

〈土器〉 266 は器面が緩く内湾する小型の鉢である。無文で内外面とも雑なミガキが施されており、内面には炭化物が付着している。267 も無文の小型深鉢で、口縁部は緩く外反する。器面は全体に粗いナデとミガキが施されている。268 は口縁部片で、上端部に雑な沈線が巡る。沈線区画によって文様を描いているが、詳細は不明である。残存部は丁寧に磨かれており、磨消縄文の可能性が強い。269～273 同一個体と考えられる。269 口縁部片で緩い波状を呈し、外反する。文様は沈線による区画内に刺突を施している。271 は刺突文帯を沈線区画された縄文帯が取り巻いている。また 272、273 には縦長の縄文帯がみられる。無文帯および内面は丁寧に磨かれ、光沢をもつ。縄文は LR 単節斜縄文である。274～277 も沈線区画された磨消縄文による文様が施されている。274、275 は口縁部片で、どちらも緩く外反し、口縁部は無文帯となっている。277 は無文帯の末端に鱗状隆帯が付されている。これらの土器は、胎土中に金雲母を含んでいる。278～281 は粗製土器片である。地文は全て RL 単節斜縄文で、胎土にはいずれも金雲母が含まれている。

時期 床面出土の土器片から推定して、縄文時代中期末葉の住居跡と考えられる。(酒井)



第 58 図 BD 3 住居跡



第 59 図 BD 3 住居跡出土遺物



## BF 6 住居跡

### 遺構（第 60・61 図・写真図版 23・24）

〈検出状況・重複関係〉表土を除去した時点で、大小の礫を含む黒褐色～暗褐色土の広がりとして検出された。北側で BF 7 住居跡と重複し、埋土及び北・北西壁の上半を切られている。

〈規模・平面形〉長軸 4.5 m、短軸 3.5 m で、北東方向に長い卵型を呈する。

〈埋土〉BF 7 住居跡と重複しない部分の観察では、自然堆積の埋没と考えられる。3 層に大別され、上位は黒色～黒褐色土、中位は暗褐色土主体、下位は炭化物を僅かに含む褐色土層で構成されている。また、重複する部分では中位～下位にかけて、多量の炭化材を包含する。なお、これらの層には粘板岩の巨礫・細礫を多量に包含する。

〈壁〉いずれもほぼ直立する。壁高は北東壁 62 cm、南東壁 40 cm、南西壁 7 cm、BF 7 住居跡に切られる北西壁は 5 cm である。

〈床面〉全体に平坦で、硬くしまっている。斜面下位にあたる北東部は、地山である粘板岩の細礫を含む黄褐色土層を床面としているが、中央部から南西側では暗褐色土による貼り床が施されている。層厚は 3～12 cm で、南西部ほど厚くなっており、地山は同方向に緩く傾斜している。

〈柱穴〉 $P_1$ ～ $P_6$  の 6 個が検出された。しかし支柱穴の配置等は不明である。これらのうち、 $P_5$ ・ $P_6$  は他のものに比べて深く、南西方面に傾いている。

〈炉〉地床炉と掘り込み式の石囲炉をもつ。地床炉は床面中央部東寄りに位置し、40×50 cm の範囲に最大 4 cm の厚さで焼土層が発達している。

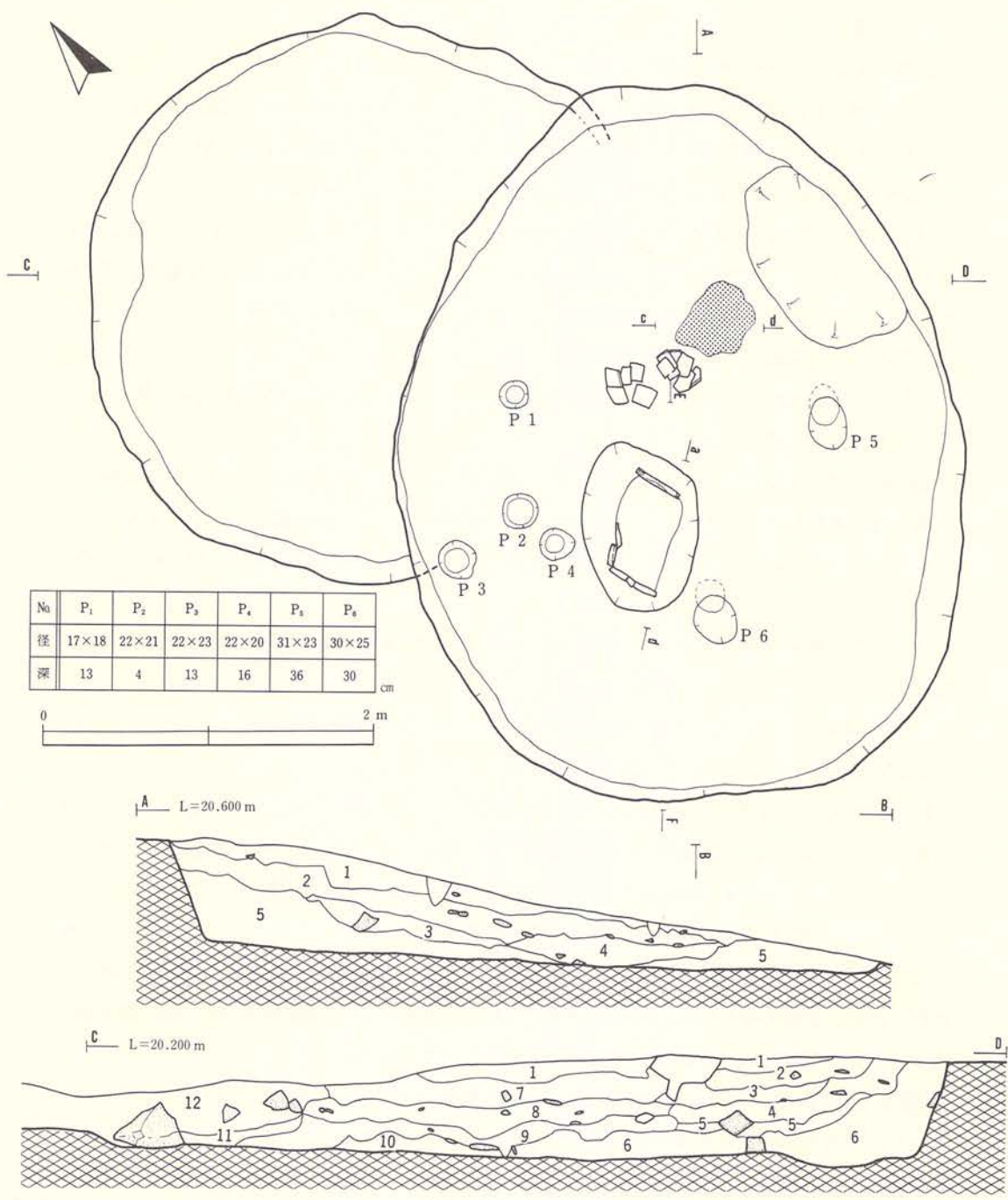
掘り込み式の石囲炉としたものは、土坑の底面に石囲いを設置したものである。土坑の形状は開口部が長軸 95 cm、短軸 75 cm の不整楕円形、底部が 60×38 cm の平行四辺形で、深さは 25 cm である。この東壁・西壁及び北壁の一部に沿って、扁平な礫が埋置されている。しかし、他の部分には礫の扱き取り痕はみられず、礫は全体を囲むものではなかったと考えられる。埋土は炭化物や焼土粒を含む黒褐色～暗褐色土で構成され、底面と壁面には薄い焼土層が観察された。なお、周囲の貼り床との区別は明確ではなかったが、炉の西側部分では、薄い焼土層や炭化物の分布がみられ、この部分が前庭部であった可能性がある。

〈附属土坑〉東壁際に長軸 1.2 m、短軸 60 cm、深さ 10 cm の不整楕円形を呈する土坑が検出された。性格を判断できる資料はないが、屋内の貯蔵穴的機能が考えられる。

### 遺物（第 62・63 図・写真図版 70・71）

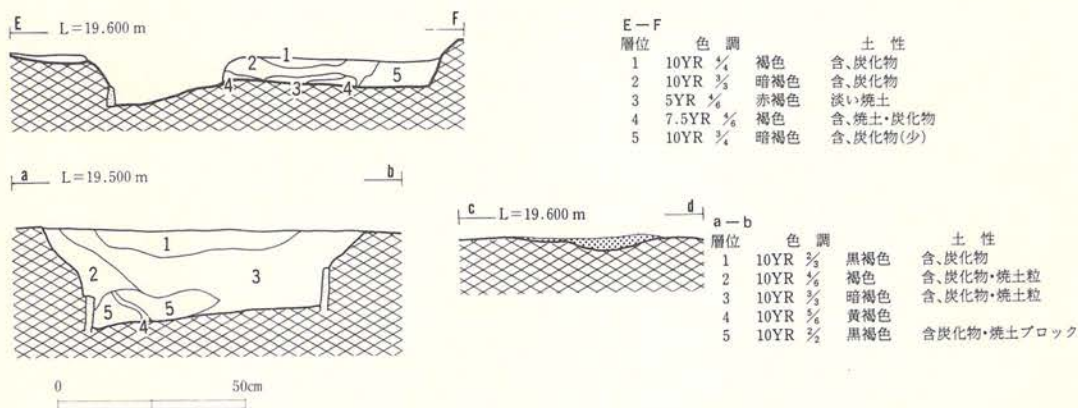
埋土及び床面から土器と石器が出土している。

〈土器〉282 は床面出土の大型粗製土器で、体部下半を欠く。体部中央に最大径をもち、口縁部は緩く外反する。地文は LR 単節斜縄文で、内面には炭化物の付着がみられる。また、胎土に



A-B			C-D					
層位	色調	土性	層位	色調	土性		色調	土性
1	7.5YR 3/2	黑褐色 含、小礫	1	7.5YR 3/2	黑褐色 含、小礫	7	7.5YR 3/2	黑褐色 含、小礫・炭化物
2	7.5YR 3/2	極暗褐色 含、小礫	2	7.5YR 3/2	暗褐色 含、礫・炭化物	8	7.5YR 3/4	暗褐色 含、小礫・炭化材・焼土塊
3	7.5YR 1/2	黑色 含、小礫・炭化物	3	7.5YR 3/2	褐色 含、炭化物	9	7.5YR 3/4	暗褐色 含、小礫・炭化材・炭化物・焼土塊
4	7.5YR 3/2	黑褐色 含、小礫・炭化物粒	4	7.5YR 3/2	黑褐色 含、小礫・炭化物	10	7.5YR 3/2	褐色 含、炭化物(少)
5	7.5YR 3/4	褐色 含、小礫・炭化物粒	5	7.5YR 3/4	褐色 含、炭化物・小礫	11	7.5YR 3/2	暗褐色 含、小礫(多)
			6	7.5YR 3/4	褐色 含、炭化物・小礫	12	7.5YR 3/2	褐色 含、巨礫・小礫(多)

第60図 BF 6・BF 7住居跡(1)



第 61 図 BF 6 住居跡(2)

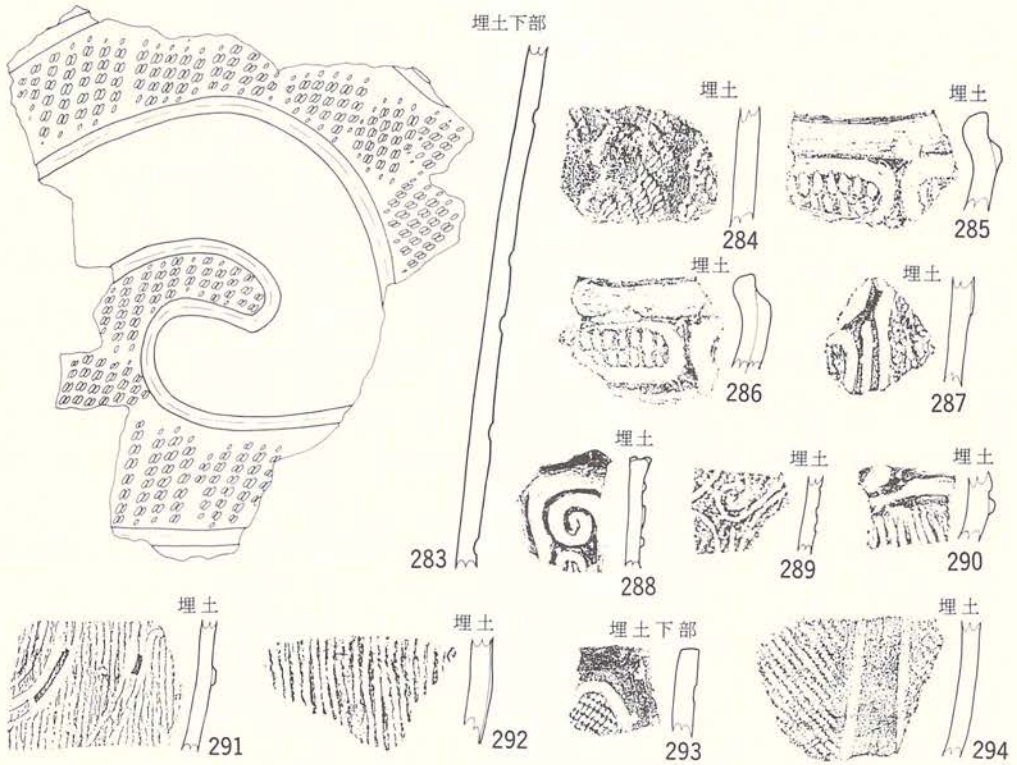
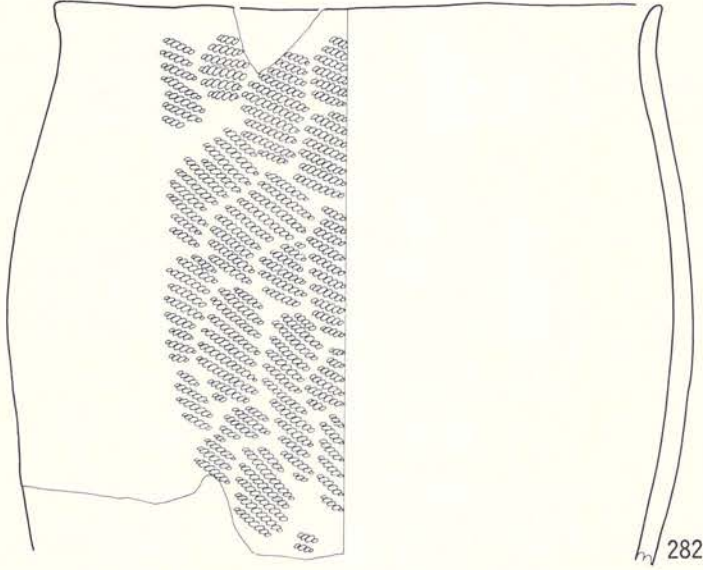
は金雲母を含んでいる。283 は太い沈線によって区画された無文帯が渦巻状の文様を構成している。縄文は RLR 複節斜縄文である。284 は縦位の綾絡文とし LR 単節斜縄文を地文とする粗製土器片である。285・286 はキャリパー形土器の口縁部片で同一個体である。上端部は無文で、この下位に太い隆沈線で区画された楕円形文が配される。この区画内には 2 段に縦方向の刺突が施されている。287 も太い隆沈線による文様をもつ。288 は、ほぼ直立する口縁部片である。小さな山形状の突起をもち、口唇部にも深い沈線が巡る。文様は全体が丁寧に磨かれた隆沈線を用いて、渦巻文を配した縦方向の区画文が展開する。また、表面には赤色塗彩が施されていたらしく、部分的に顔料が残る。289 は縄文地に細い沈線によって渦巻文が描かれている。290~292 は同一個体の可能性がある。290 は口縁部片で、上部に隆沈線による文様をもつ。291 は体部片で、隆沈線による渦巻文が施されるが、沈線部分は明瞭ではない。地文は R 1 段の撚糸文である。293 は沈線区画された楕円形の縄文帯をもつ口縁部片である。294 は狭い無文帯が垂下する。295~298 は縄文を地文とする粗製土器片である。295 は口縁部片で緩く外反する。地文は 295~297 は RL、298・299 は LR の単節斜縄文である。このうち、296・298 の胎土には金雲母が含まれる。300 は 5 本一組の櫛歯状条痕文を地文とする。胎土には砂を多く含むが金雲母は混入しない。

〈石器〉 301 は床面から出土した磨石である。平面形は楕円形を呈す。表裏両面と 2 側面に使用痕を有する。

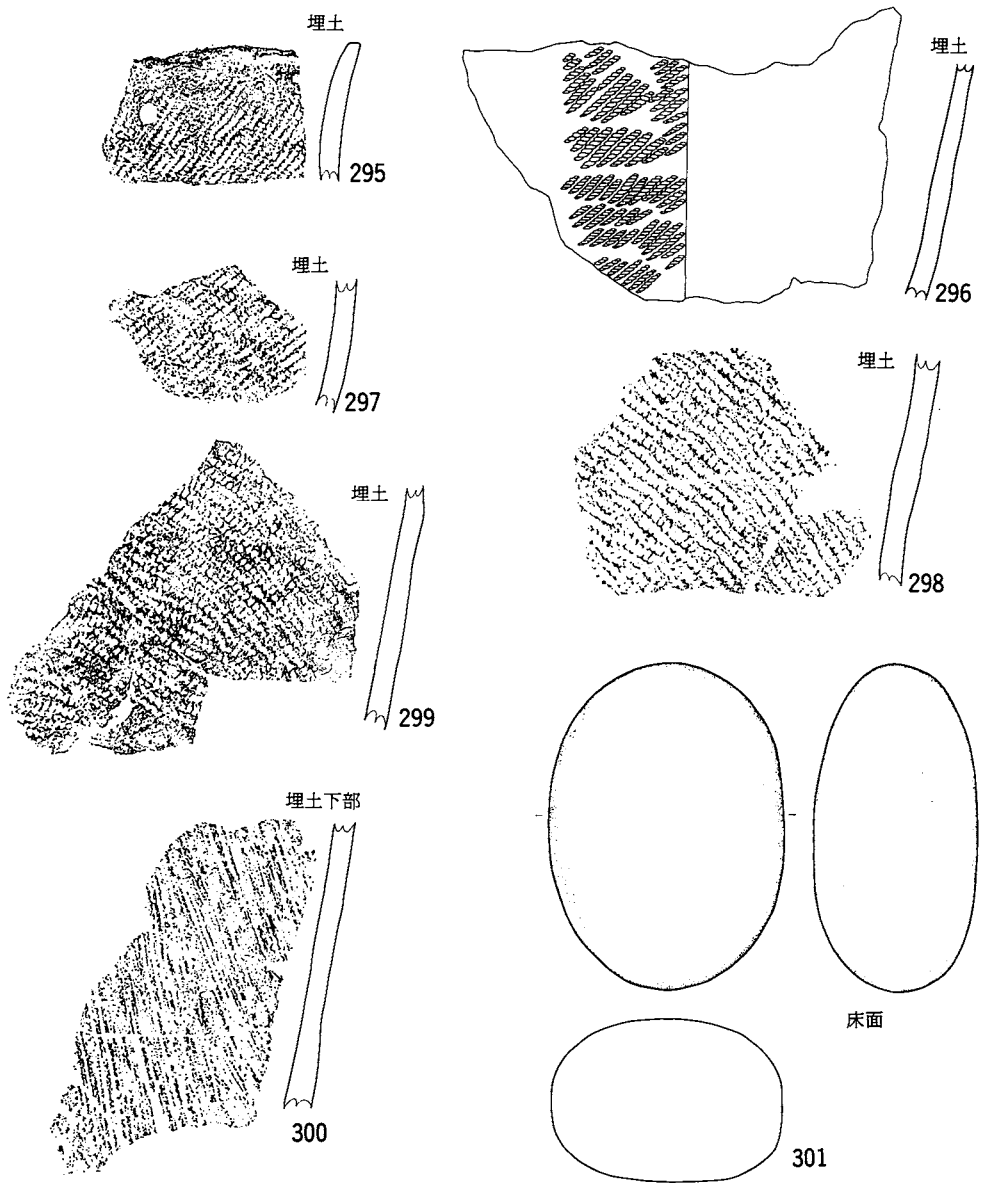
**時期** 埋土下部から出土した土器片からの推定であるが、縄文時代中期末葉の住居跡と考えられる。(酒井)

(24.1) · · ·

床面



第 62 図 BF 6 住居跡出土遺物 (1)



第 63 図 BF 6 住居跡出土遺物(2)

BF 7 住居跡

遺構 (第 60 図・写真図版 24)

〈検出状況・重複関係〉表土を除去した時点で、黒褐色～暗褐色土の広がりとして検出された。東側で BF 6 住居跡を切っているが、検出段階では重複が確認できず、この部分の壁は把握できなかった。また、北～南西部分にかけては、沢による削剝を受けて壁・床面とも流失しており、

北東壁の一部を残存するだけである。

埋土中位から床面にかけて、多量の炭化材や焼土ブロックが検出され、焼失した住居跡と考えられる。

〈規模・平面形〉残存する壁と焼土や炭化物の分布状況からの推定であるが、径 3.5 m 前後の円形を呈していたものと考えられる。

〈埋土〉残存部の観察では、自然堆積の様相を示す。3層に大別され、上位は BF 6 住居跡と共有する黒色～黒褐色土、中位は炭化物を含む暗褐色土、下位は炭化材・焼土粒を多量に含む暗褐色～褐色土で構成されている。これらの層は、粘板岩の巨礫・細礫を多く含有している。また、南西部では粘板岩の巨礫からなる沢の堆積土が厚くみられた。

〈壁〉残存する北東壁はほぼ直立し、壁高は 50 cm である。

〈床面〉大部分は流失している。北東部では粘板岩を含む黄褐色土で、硬くしまっている。BF 6 住居跡と重複する部分の土層断面には、部分的であるが褐色土の分布がみられ、貼り床が施されていたものと考えられる。

〈遺物〉精査時に重複が確認できず、BF 7 住居跡として取り上げたため個有の遺物を欠く。

**時期** 遺物を欠き、詳細は不明である。重複する BF 7 住居跡の遺物から推定すると、縄文時代中期末葉以降の住居跡であろう。(酒井)

## BG 12—1 住居跡

**遺構** (第 64 図・写真図版 25・26)

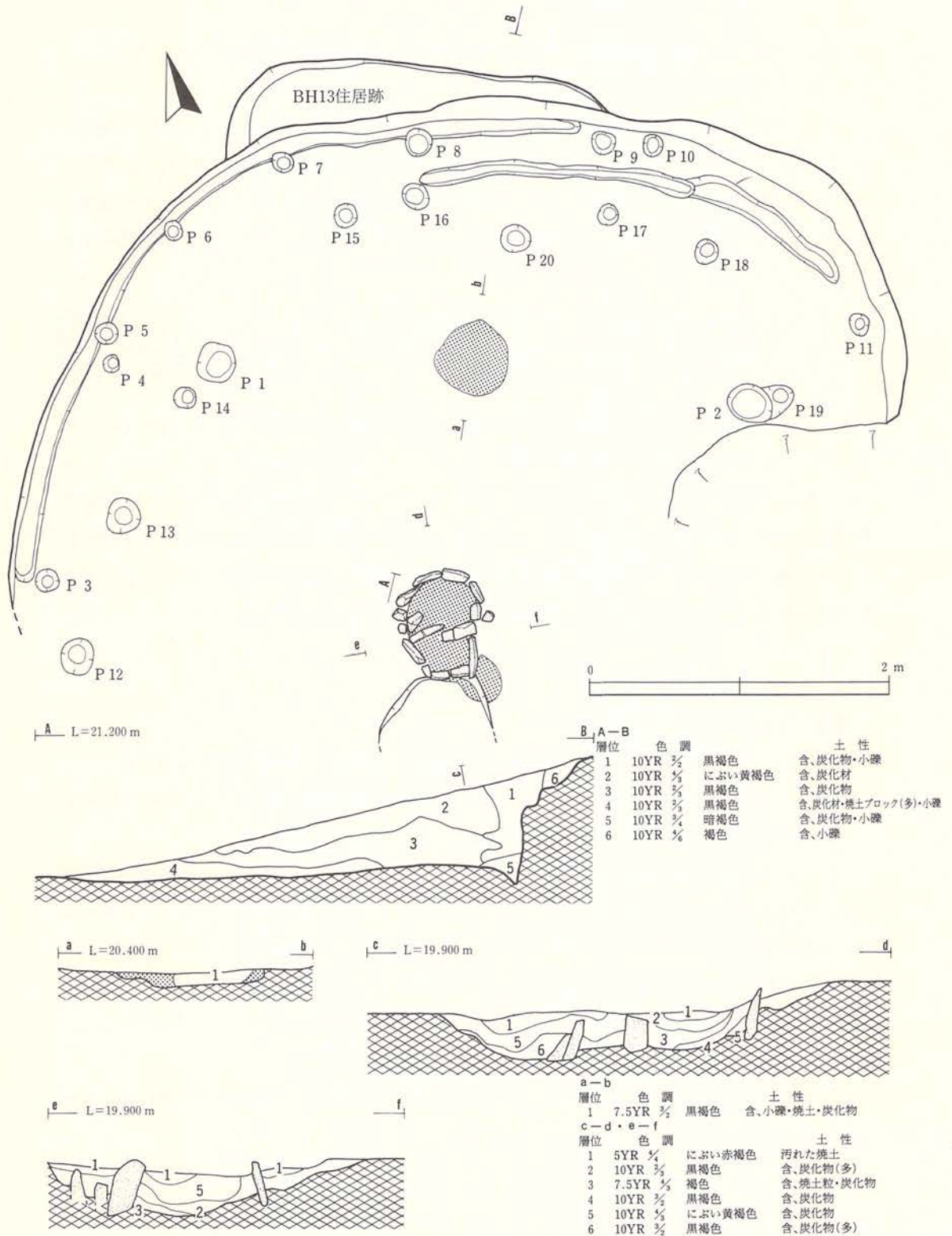
〈検出状況・重複関係〉表土を除去した時点で、IV層に起源をもつ汚れた黄褐色土とこれを取り巻く黒褐色土の広がりとして検出された。壁の南半は流失しており、炉跡から南側の床面は、平安時代の BF 12 工房跡に切られている。また北西部で BH 13 住居跡と重複し、この大部分を切っている。

埋土下位から床面にかけて多量の炭化物や焼土が検出され、焼失した住居跡と考えられる。また、精査の結果、柱穴及び壁溝の配置から 2 棟の住居跡が存在することがわかった。新期を 1、後期を 2 住居跡として記載する。

〈規模・平面形〉残存部及び炉の位置から、東西 6 m、南北 5 m 前後の隅丸方形または、歪な円形を呈するものと推定される。

〈埋土〉2層に大別され、上位は人為的な廃棄土と考えられる黄褐色土、中位～下位にかけては炭化材・焼土ブロックを多量に含む黒褐色土で構成されている。

〈壁〉いずれもほぼ直立する。壁高は北壁 70 cm、東壁 8 cm、西壁 10 cm である。また、東壁北半から北壁東半にかけて、幅 7～15 cm、深さ 6～14 cm の壁溝が巡る。



第 64 図 BG 12・BH 13 住居跡

〈床面〉大部分は、粘板岩の細礫を含む褐色土層であるが、一部は沢の堆積土層を利用している。全体に平坦で硬くしまっている。

〈柱穴〉精査により検出された総数は 20 個であるが、位置から P<sub>1</sub>～P<sub>11</sub>の 11 個が当住居跡に伴うものと考えられる。P<sub>1</sub>と P<sub>2</sub>は規模や配置から主柱穴であろう。これらは検出時には柱根部分が空洞であった。しかし、南側でこれらに対応する柱穴は検出できなかった。P<sub>3</sub>～P<sub>11</sub>は壁に沿って規則的に配置され、壁柱穴を構成していたものと考えられる。なお、P<sub>20</sub>の帰属は明らかではない。

		(cm)																		
No.	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>4</sub>	P <sub>5</sub>	P <sub>6</sub>	P <sub>7</sub>	P <sub>8</sub>	P <sub>9</sub>	P <sub>10</sub>	P <sub>11</sub>	P <sub>12</sub>	P <sub>13</sub>	P <sub>14</sub>	P <sub>15</sub>	P <sub>16</sub>	P <sub>17</sub>	P <sub>18</sub>	P <sub>19</sub>	P <sub>20</sub>
径	26×30	24×31	15×16	11×12	15×15	13×15	12×15	18×19	14×16	13×14	13×15	22×24	25×23	15×15	16×15	18×16	13×15	15×17	16×17	20×21
深	66	60	24	24	23	24	24	41	29	33	15	28	55	23	21	48	27	28	17	55

〈炉〉地床炉と複式炉をもつ。地床炉は床面中央部やや北寄りに位置し、径 50 cm の不整形円の範囲に、最大 5 cm の厚さで焼土層が形成されている。複式炉は床面中央のやや南寄りに位置し、2 基の石囲炉+掘り込み部(前庭部)から構成されている。北側の石囲炉は 60×45 cm の不整形円形、南側の石囲炉は 40×30 cm の歪な方形を呈する。前庭部は東西 50 cm、深さ 10 cm 前後の浅い掘り込みで、南方に向って扇形に開くが、南側は BF 12 工房跡に切られている。2 つの石囲炉内には 5～2 cm の厚さで淡い焼土層が観察された。(酒井)

## BG 12—2 住居跡

### 遺構 (第 64 図・写真図版 25・26)

〈検出状況・重複関係〉BG 12—1 住居跡の精査時に、壁溝と柱穴の配置から確認された。

〈規模・平面図〉壁溝及び柱穴からの推定であるが、5 m 前後の隅丸方形または不整形な円形を呈するものと考えられる。

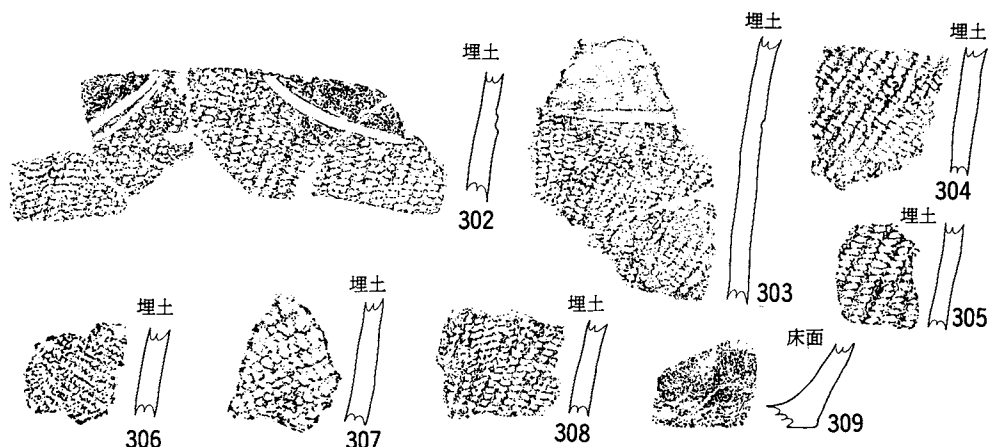
〈壁〉ほとんどの部分は残存しないが、推定されるプランから東壁の一部は 1 住居跡と共有していた可能性が強い。北～北東部にかけて、壁溝が巡る。この壁溝は東側と西側では深度が異なる。規模は東側で幅 8～13 cm、深さ 29～35 cm、西側で幅 14～20 cm、深さ 9～16 cm である。

〈床面〉壁溝・柱穴の検出状況から、1 住居跡と共有していたと考えられる。

〈柱穴〉P<sub>14</sub>～P<sub>18</sub>が壁柱穴を構成する。P<sub>20</sub>は他のものに比べて深いが、帰属は明確ではなく、主柱穴は不明である。1 住居跡と共有していた可能性もある。

〈炉〉個有の炉跡は検出されなかった。位置的に 1 住居跡と共有、あるいは同位置に施設されたものと考えられる。





第 65 図 BG 12 住居跡出土遺物

#### 遺物（第 65 図・写真図版 71）

出土遺物は土器だけである。ほとんどは炉の周辺の埋土からの出土で、1 住居跡の埋土に伴うものと考えられる。

〈土器〉 302・303 は同一個体と考えられる。太い沈線区面の無文帯が文様を構成する。縄文は RL 単節斜縄文で、胎土には金雲母を含む。304～308 は縄文だけが施された体部片である。306 は LR 他は全て LR 単節斜縄文を地文とする。これらのうち 305・307 を除き胎土中に金雲母を含む。309 は底部片である。体部下端には縄文は施されていない。これも胎土に金雲母を含む。

時期 これらの土器片からの推定であるが、縄文時代中期末葉の住居跡であろう。また、炉の共有から 1・2 住居跡間には大きな時期的差は考えられず、同時期内での拡張と思われる。

（酒井）

#### BH 13 住居跡

##### 遺構（第 64 図・写真図版 25）

〈検出状況・重複関係〉 BG 12-1 住居跡の精査時に確認された。北壁及び西壁の一部を残して BG 12 住居跡に大きく切られる。

〈規模・平面形〉 重複のため詳細は不明である。残存部からは、東西 2.5 m 前後の規模をもつ方形を基調としたプランが推定される。

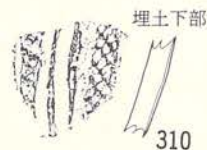
〈埋土〉 精査時の観察では、粘板岩の細礫を含む暗褐色土が主体であった。

〈壁〉 残存する西壁は緩く外傾するが、北壁はほぼ直立する。壁高は西壁 10 cm、北壁 20 cm である。

〈床面〉 斜面下位にあたる南方向に緩く傾斜する。粘板岩の細礫を含む暗褐色～褐色土層面を利用し、平坦で硬くしまっている。

遺物 (第 66 図・写真図版 71)

〈土器〉310 の土器片が埋土下部から出土した。遺物はこの 1 点だけである。体部下半の破片と考えられる。器面には 2 本一組の隆沈線が垂下する。縄文は LR 単節斜縄文で、内面には炭化物が付着している。



時期 出土遺物が少なく詳細は不明であるが、重複関係や唯一の土器片から推定して、縄文時代中期中葉頃の遺構ではないかと思われる。

BH 13 住居跡出土遺物

(酒井)

(2) 土 坑

AC 4 土坑 (第 67 図・写真図版 26)

〈検出状況・重複関係〉縄文時代の AC 4 住居跡の精査中に、埋土最下位～床面で検出された。住居跡との新旧関係は、当土坑上面に住居跡の貼床が確認できなかったことや、住居跡の埋土最下位で色調と硬さに僅かの変化がみられたことから、本土坑が新しい可能性がある。反面、住居跡の壁高 0.5 m～0.6 m の存在を考えると、開口部径や頸部に影響を及ぼすことになり、住居跡に付随する土坑である可能性も全く否定することはできない。

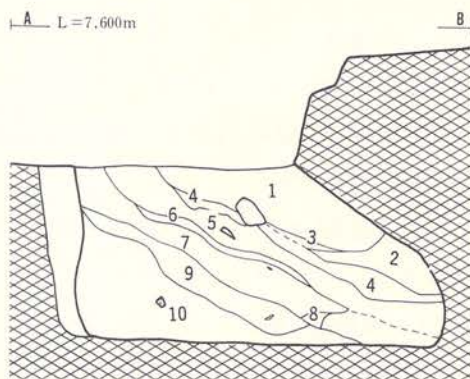
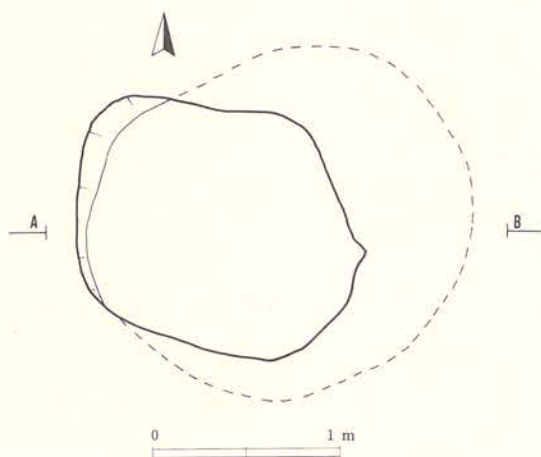
〈規模・形態〉開口部径 1.6 m×1.3 m 底部径 2.1 m×1.85 m、深さは住居跡の床面から 0.95 m の規模をもち、平面形は東西に長軸をもつ楕円形、断面形は西壁がほぼ直立で東壁が大きく外傾する変則的なフラスコ形を示す。底面は平坦でほぼ水平に近く、壁との接続は丸味をもつ。

〈埋土〉地山起源の明褐色土、褐色土が堆積し 10 層に分けられる。全てに多少の小礫が混じるほか 1～6・8・9 層には炭化物が散在する。

(高橋)

遺物 (第 68 図・写真図版 72)

埋土から土器片が出土した。



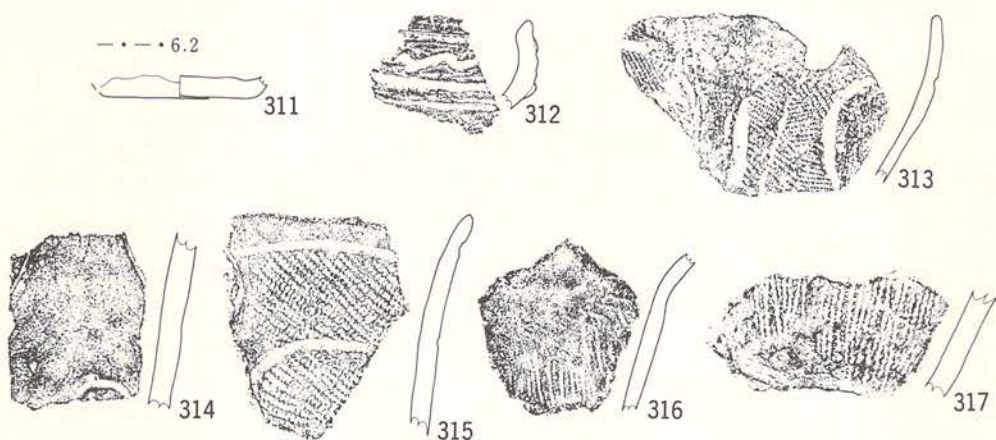
AI 3 土坑

層位	色	調	土性
1	7.5YR	5/6	褐色 含、小礫(多)・炭化物(少)
2	7.5YR	5/6	明褐色 含、小礫(多)・炭化物(少)
3	7.5YR	5/6	暗褐色 含、炭化物
4	7.5YR	5/6	暗褐色 含、炭化物
5	7.5YR	5/6	褐色 含、小礫(多)・炭化物
6	7.5YR	5/6	暗褐色 含、炭化物
7	7.5YR	5/6	明褐色 含、小礫(多)
8	7.5YR	5/6	暗褐色 含、炭化物
9	7.5YR	5/6	褐色 含、小礫(多)・炭化物
10	7.5YR	5/6	明褐色 含、小礫(多)

第 67 図 AC 4 土坑

〈土器〉 311 は底部のみが残存する。312 キャリパー形土器の口縁部片である。上端と下端に2本の隆帯が巡り、この間に綾絡文状の沈線文が横走する。313 は口縁部が緩く内湾する。文様は沈線区画された曲線文で、区画内にはLR単節縄文が充填される。胎土には金雲母が含まれている。314・315 は同一個体の可能性がある。315 は口縁部片で、緩く外反する。文様は沈線による曲線文で、磨消手法により口縁部は無文帯となる。314 は磨消手法によって無文部となる体部片で、この部分は光沢をもつ。どちらも胎土中に金雲母を含む。316 は外反する口縁部片で、口縁部は無文となり体部にはL1段の捺糸文が縦走する。317 は体部下端の破片で、地文にL1段の捺糸文をもつ。胎土には金雲母を含む。

時期 出土した土器片から推定して、縄文時代中期後葉～末葉の遺構と考えられる。(酒井)



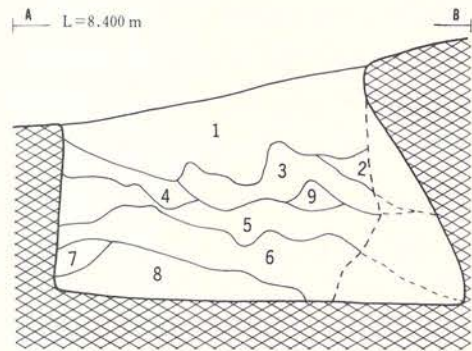
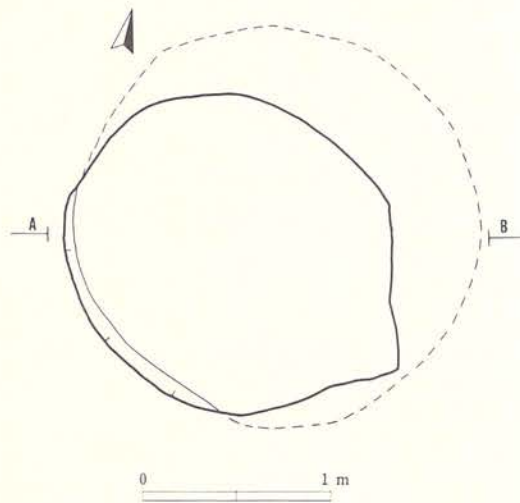
第 68 図 AC 土坑出土遺物

#### AF 4 土坑 (第 69 図・写真図版 27)

〈検出状況・重複関係〉 粗掘りの中の土層変化とその後の乾燥具合によって検出された。他遺構との重複はない。

〈規模・形態〉 開口部径 1.8 m×1.6 m、底部径 2.1 m×2 m、深さ 1.25 m～0.85 m の規模をもち、平面形は北西—南東に長軸方向をもつ楕円形、断面形は北側の壁が大きく外傾するフラスコ形を示す。底面は平坦であるが北壁に向って僅かに傾斜する。

〈埋土〉 小礫が混入した褐色土系の土が堆積し、色調によって9層に細分される。3・4・6層には炭化物が混じる。全体が地山質の埋土で、どの層も斜面下位の西側から流れ込んだ様相を示し、黒色土系の堆積が観察されないことから人為的に埋め戻された可能性が強い。(高橋)



AF 4 土坑

A-B

層位	色調	土性
1	7.5YR 3/4 暗褐色	含、小礫(多)
2	7.5YR 3/4 褐色	含、小礫(多)
3	7.5YR 3/4 ~ 1/2 明褐色~褐色	含、小礫(多)・炭化物(少)
4	7.5YR 3/4 褐色	含、小礫(多)・炭化物(多)
5	7.5YR 3/4 褐色	含、小礫(多)
6	7.5YR 3/4 褐色	含、小礫(多)・炭化物
7	7.5YR 3/4 ~ 1/2 暗褐色	含、小礫(多)
8	7.5YR 3/4 褐色	含、小礫(多)
9	7.5YR 3/4 褐色	含、小礫(多)

遺物 (第70図・写真図版72)

埋土から土器片が出土した。318は上端が短かく外方に引き出された口縁部片で、隆帯による棘状の文様をもつ。319は外反する小さな山形の突起をもち、太い隆帯による渦巻文が配されている。320はキャリパー形土器の口縁部片で、RLR複節斜縄文地に2本一組の隆帯が巡る。

時期 出土遺物が少なく詳細は不明であるが、縄文時代中期中葉頃の遺構と考えられる。



(酒井)

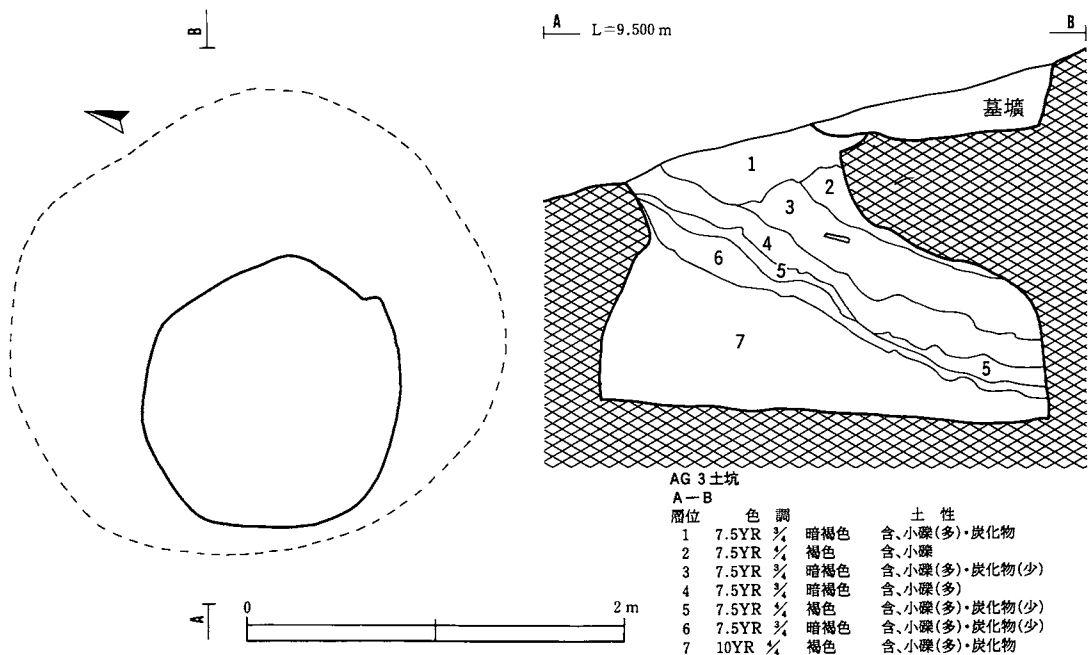
第70図 AF 4土坑出土遺物

AG 3土坑 (第71図・写真図版27)

〈検出状況・重複関係〉粗掘り時の土層変化とその後の乾燥具合によって確認された。斜面上部の東側が近世の墓壙と重複する。

〈規模・形態〉開口部径1.45m×1.35m、底部径2.65m×2.45m、深さ1.6m~1.2mの規模をもち、平面形は円形、断面形は変則的なフラスコ形である。底面は平坦で水平に近い状況を示し、壁は底面から0.7m上位までは垂直に近い立ち上がりで、その上位は頸部に向って大きく内傾し、頸部は径1.1m位の円形で開口部付近は外傾する。

〈埋土〉7層に分けられる。いずれも小礫が混入した地山起源の暗褐色土や褐色土が堆積し、1・3・5~7層には多少の炭化物が混じる。土層から堆積状況を観察すると、全て斜面下位の西側から流れ込んでおり、7層以外は層が薄い特徴がみられる。このことは、別の土坑を掘削した



第71図 AG 3 土坑

際の残土を斜面下位側から投げ込んだ状況を示すものであろう。

(高橋)

遺物 (第72~76図・写真図版72~74)

埋土から多量の土器が出土した。

〈土器〉321は鉢の体部上半部で、全体に緩く内湾する。口縁部には隆帯によって緩い弧状文が描かれ、接触部分には小さな突起が付く。また、隆帯に沿ってR1段の原体圧痕文が巡る。体部には沈線により、渦巻文を配した曲線文が描かれている。地文はLR単節斜縄文である。322はキャリパー形の深鉢で、ほぼ全体が残存する。体部は外傾して立ち上がり、中央に緩い膨らみを有した後上半部でくびれ、内湾する口縁部に続く。口縁部には、外反する4単位の台状突起をもち、この突起の右側には小さな山形突起が付く。台状突起には太い隆帯による渦巻文が配される。口縁上端と下端は隆帯によって区画され、この中に隆沈線による渦巻文・棘状文が構成されるほか、沈線による曲線文が描かれる。地文はLR単節斜縄文で、口縁部には横、体部には縦回転で施文されている。323もキャリパー形の深鉢で、口縁部には隆帯によって渦巻を配する曲線文が描かれる。地文はRLR複節斜縄文で、口縁部には横、体部には縦回転で施文されている。324もキャリパー形土器の口縁部で、口唇部、口縁部に隆帯による文様をもつ。325は大きな台状突起を有する。口縁に沿って隆帯が巡り、突起部分で大柄な渦巻文を構成している。また、突起の内側にも低い隆帯による渦巻文をもつ。体部はLR単節斜縄文を地文とし、これに

隆帯による文様が描かれている。326は橋状把手をもつ口縁部片である。口縁上端には隆帯が巡り、把手部分に渦巻文を構成している。327は底部を欠損する深鉢である。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は僅かに内傾する。口縁部には3本の隆帯が巡り、中央のものは4単位の渦巻文を構成する。体部にはLR単節斜縄文が施文されている。328は大型の深鉢で、体部上半部に緩い膨らみを有し、口縁部は外反する。口縁部には太い蛇行隆帯が貼付される。体部にはL1段の撚糸文が縦走し、沈線による楕円状の区画文と曲線文が描かれている。

329は体部下半を欠く大型の短頸壺である。体部は最大径を有する部分で強く内湾し、内傾して口縁部に続く。口縁部は平縁で僅かに内傾して立ち上がる。口縁部上端と頸部には低い隆帯が巡り、中央やや下位には径4~8mmの少孔が連続して穿たれる。頸部には上部が隆帯に接する2個の橋状把手が付く。形態は所謂有孔鋳付土器に類似する。器面は無文で、内外面とも研磨調整が施されている。また、内外面とも赤色塗彩が施されていたらしく、部分的に赤い顔料が残存している。胎土には砂を含むが緻密で焼きも良く、色調は浅黄橙色を呈し、他の土器に比べて白い。

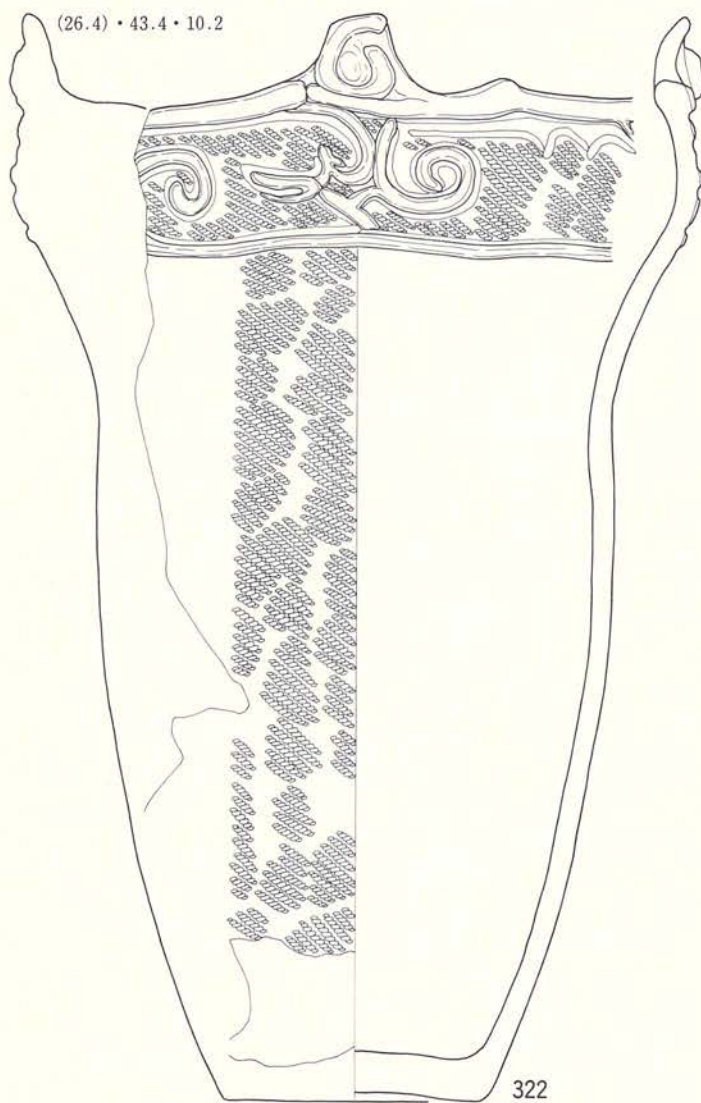
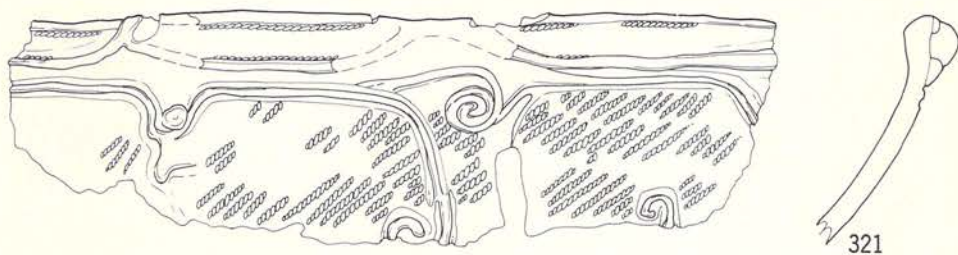
330はRL単節斜縄文を地文とし、緩く蛇行する隆帯が垂下する体部片である。331は体部下半~底部が残存する。体部はほぼ直立する。地文はLR単節斜縄文である。332は中央部が緩くくびれる大型深鉢の体部で、RL単節斜縄文を地文とする。333~341は底部破片である。

342~347はキャリパー形土器の口縁部片である。342は上端に2本の沈線、下端に隆沈線が巡る。343は隆沈線、344は沈線による曲線文を有する。345は上端に2本の沈線が巡る。346は2本一組の隆帯が曲折文を構成し、347は隆帯による渦巻文が配される。348は頂部に縦刻みを有する太い沈線が口縁部に沿って巡る。349も隆帯による文様をもつ。350は隆沈線によって渦巻文を配した曲線文が描かれている。351は3本一組の沈線が文様を構成している。

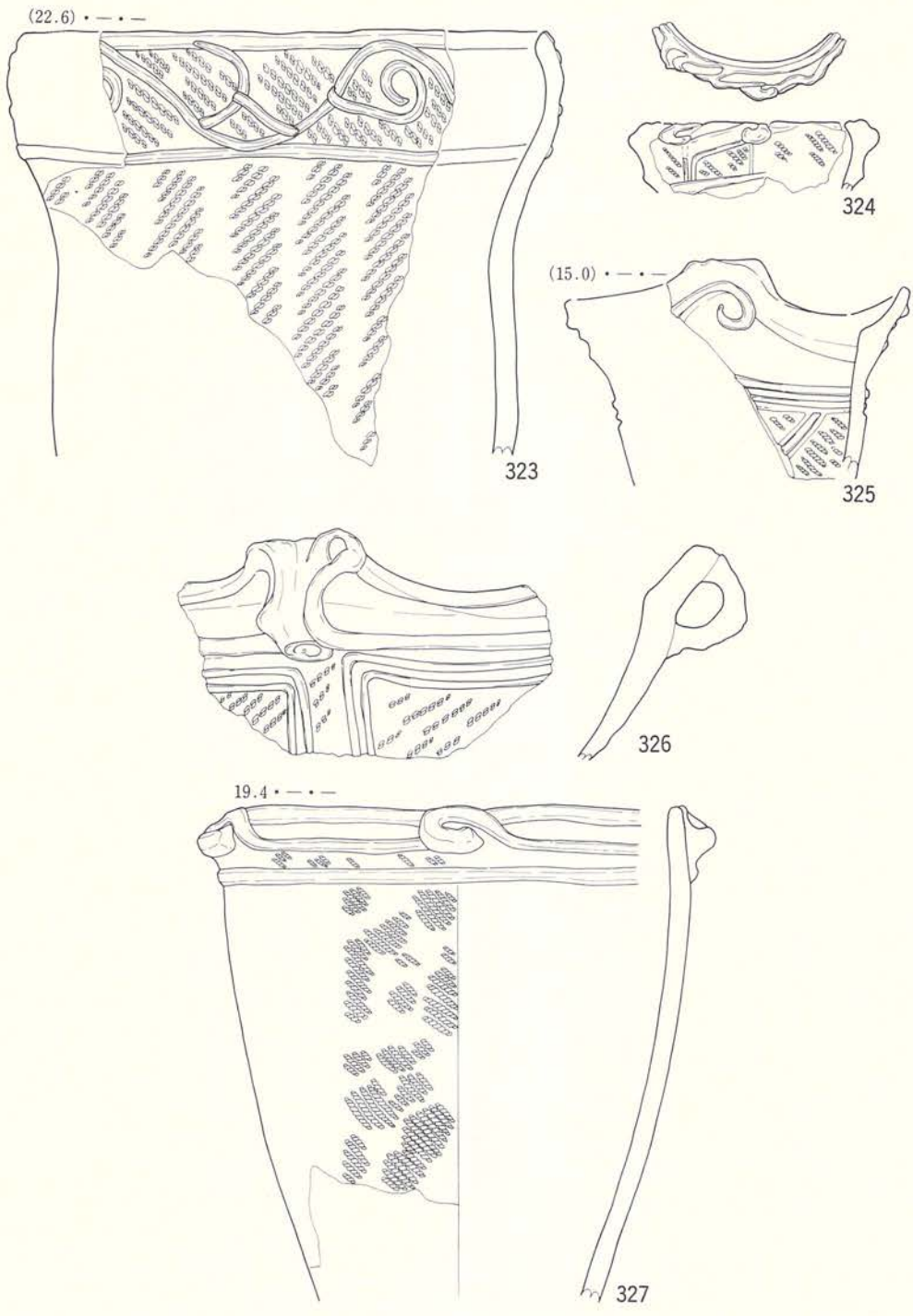
〈石器〉 352は3面に使用面を有する磨石である。

**時期** 出土した土器から、縄文時代中期中葉の遺構と考えられる。

(酒井)

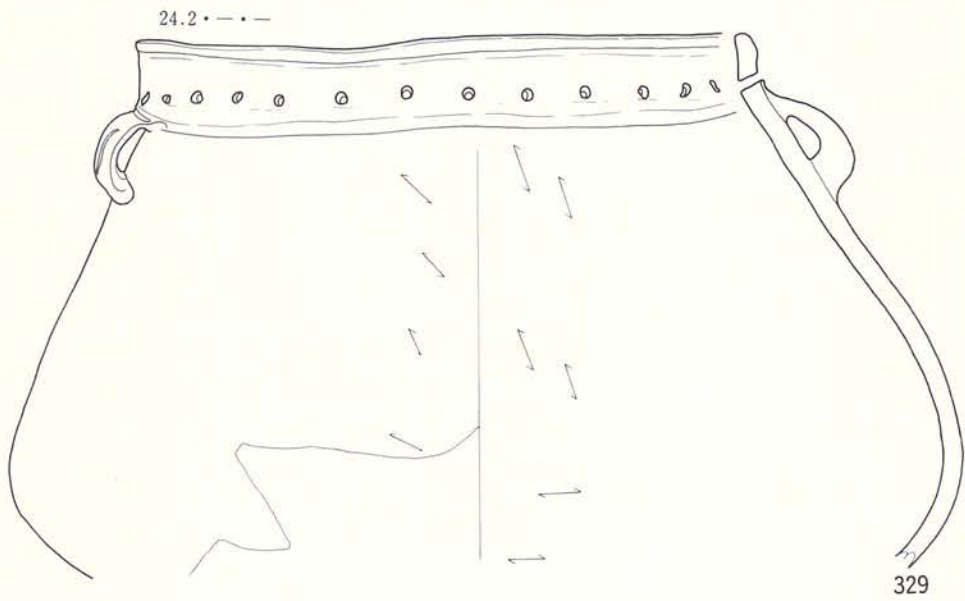
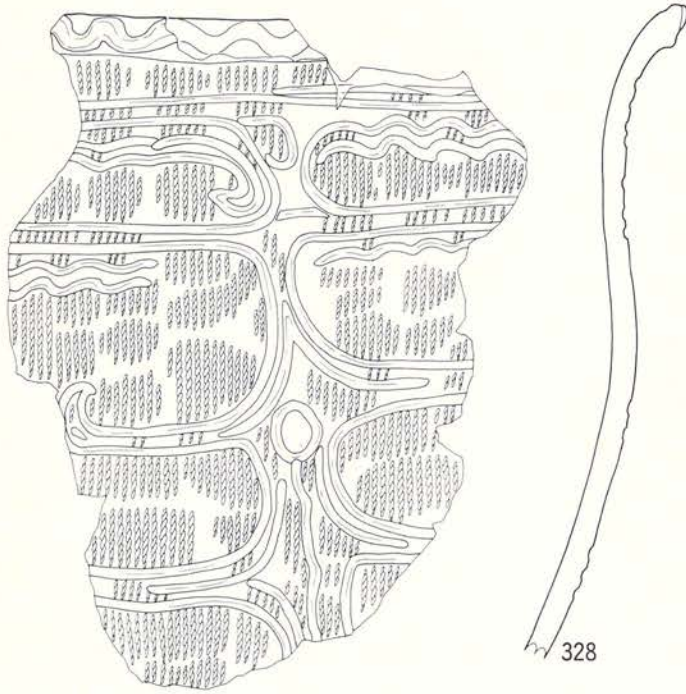


第 72 图 AG 3 土坑出土遗物(1)

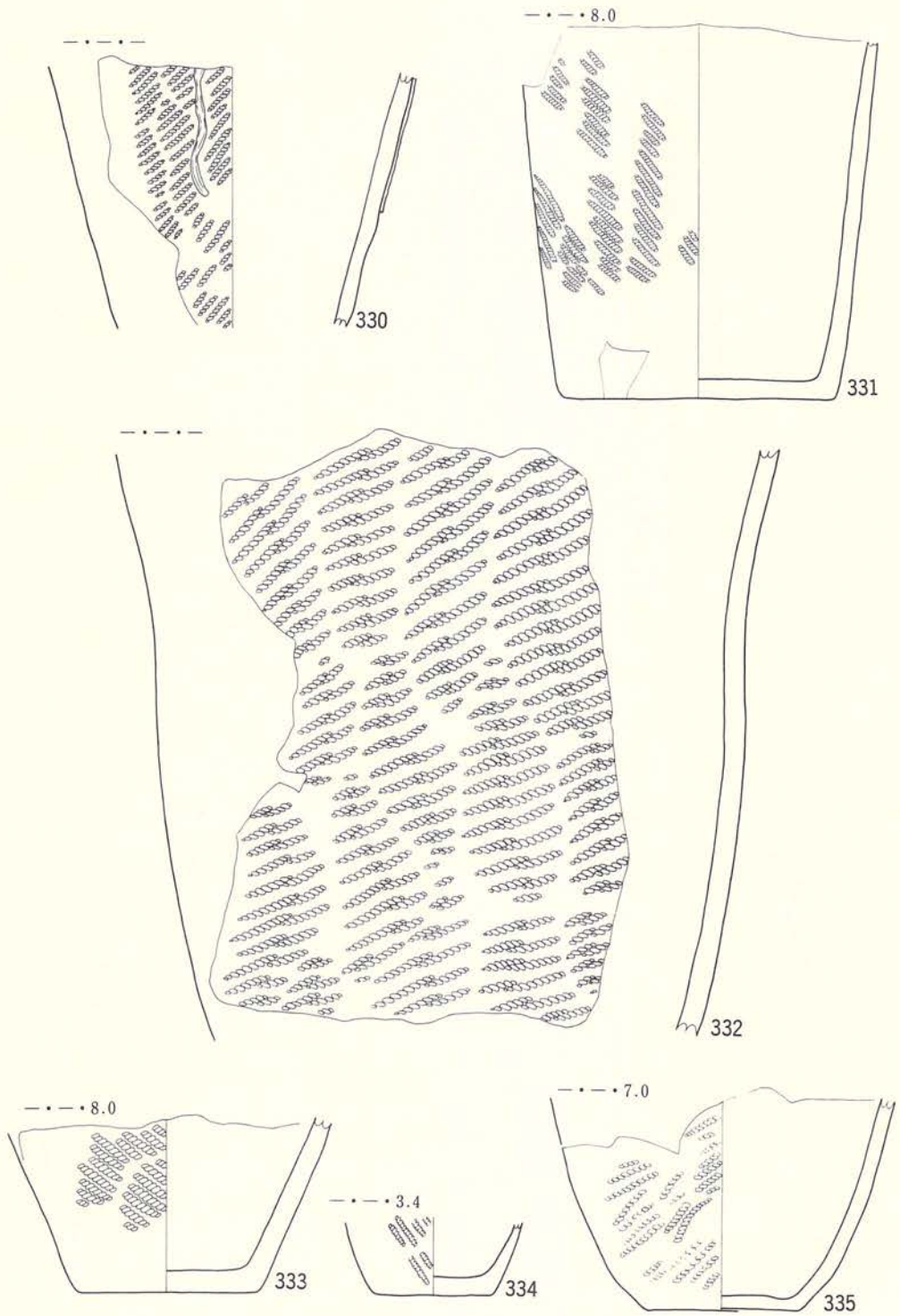


第 73 图 AG 3 土坑出土遺物(2)

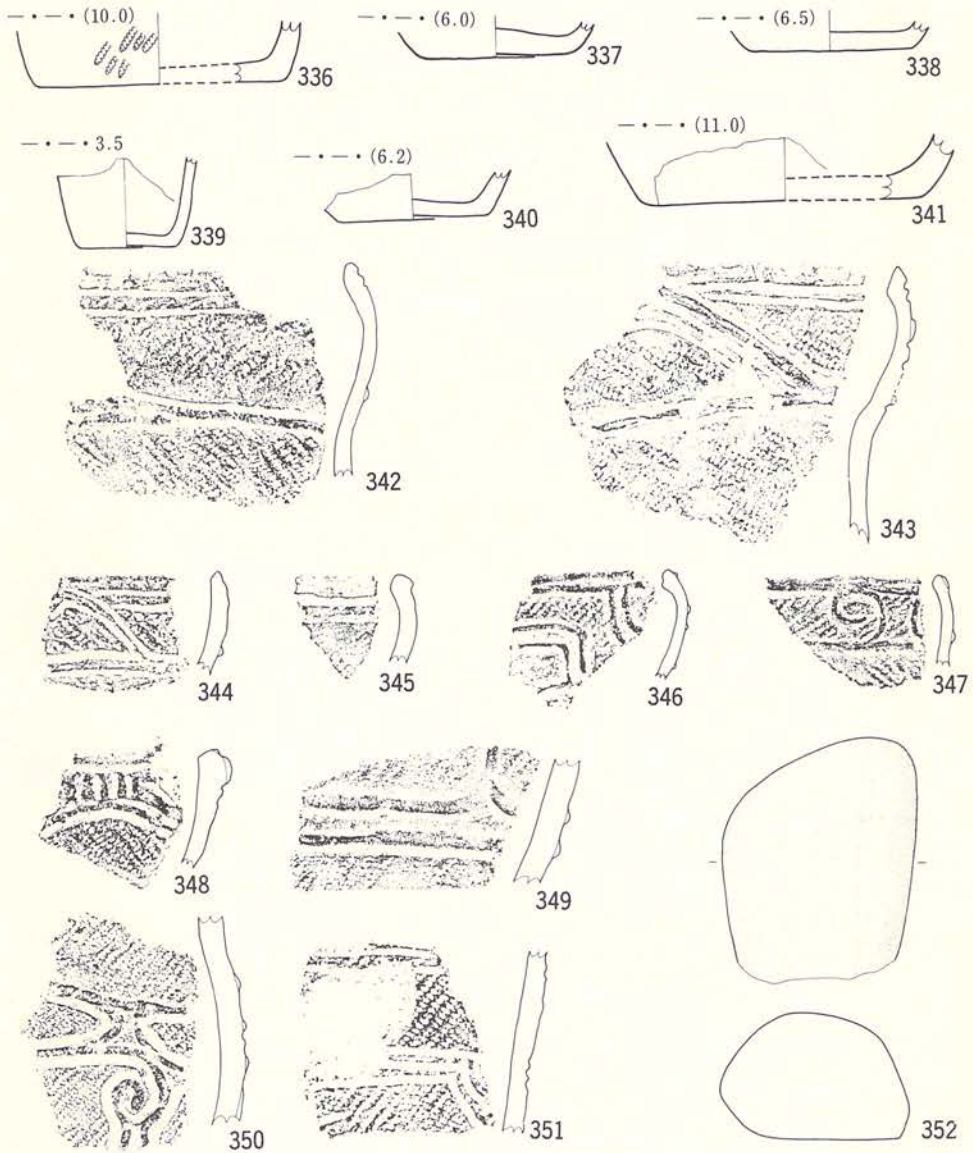




第 74 図 AG 3 土坑出土遺物(3)



第 75 图 AG 3 土坑出土遺物(4)



第76図 AG 3土坑出土遺物(5)

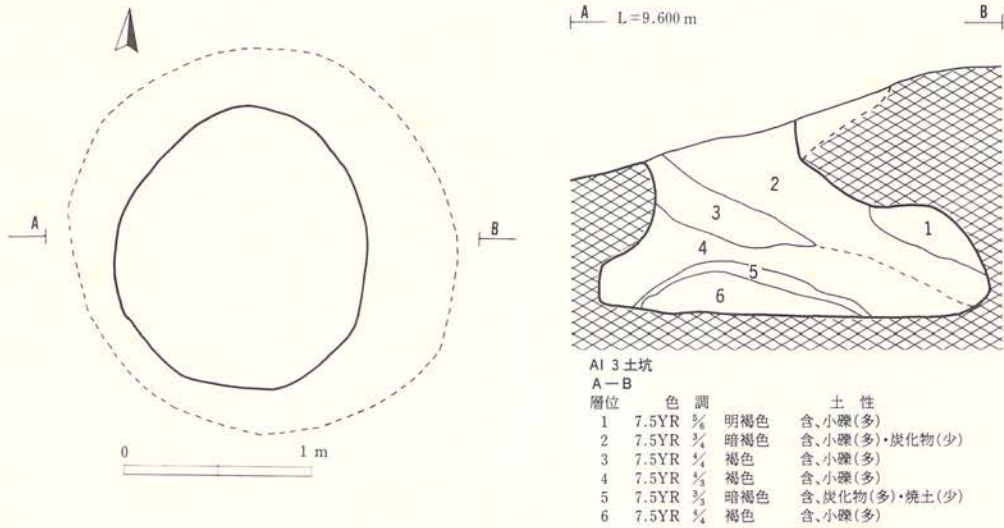
AI 3土坑 (第77図・写真図版27)

〈検出状況・重複関係〉粗掘りの中の土層変化とその後の乾燥程度によって確認された。他遺構との重複はない。

〈規模・形態〉開口部径 1.5 m×1.35 m、底部径 2.1 m×2 m、深さ 1.32 m～0.83 m の規模をもち、平面形は南北に長軸をもつ楕円形、断面形は変則的なスラスコ形である。底面はほぼ平坦であるが周辺部に向って僅か高くなり東側は壁と丸味をもって接続する。底面の上位 0.6 m の壁は内傾の度合が小さく、東壁のその上位は水平に近い状況の後外反しながら径 0.8 m の円形を示す頸部に続く。開口部近くの壁は外傾する部分が多い。

〈埋土〉明褐色土・褐色土・暗褐色土が堆積し、6 層に分けられる。全てに小礫が混在するほか 2 層に炭化物、5 層に焼土が混入する。1～4 層は斜面下位からの流れ込み、5・6 層は開口部の直下に山積みされたような堆積状況を示す。おそらく人為的な投げ込みがあったことを表すものであろう。

(高橋)



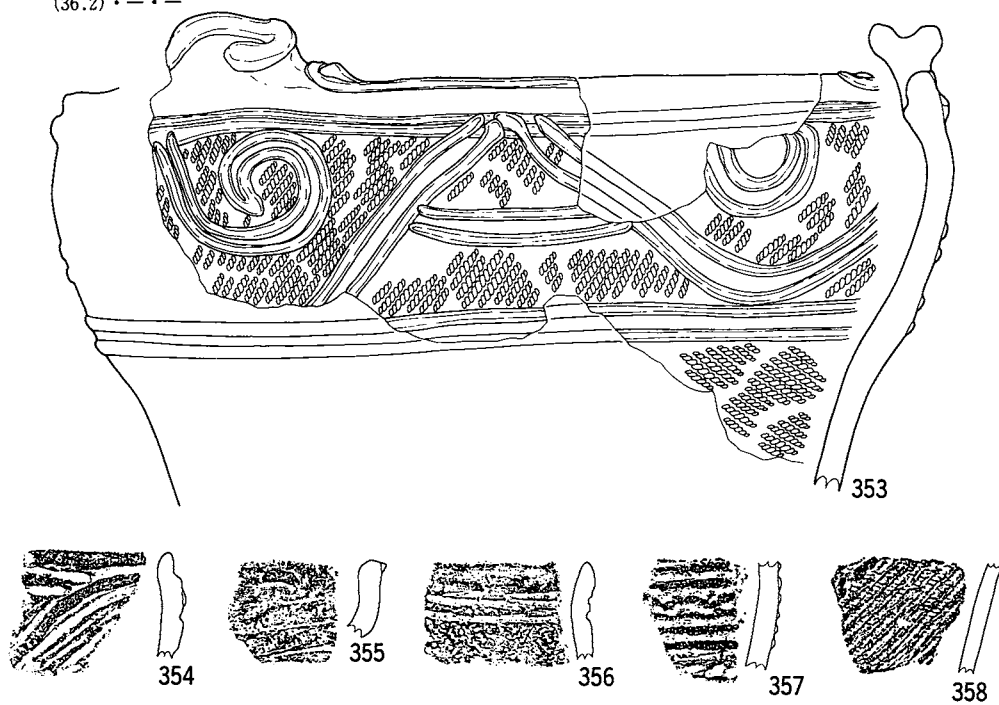
第 77 図 AI 3 土坑

遺物 (第 78 図・写真図版 75)

埋土から土器が出土している。

〈土器〉353 は大型のキャリパー形土器の口縁部である。頂部に横 S 字状の隆帯が貼付された 4 単位の台形突起をもつ。また、台形突起の左右には小さな山形突起が伴う。口唇部には細い隆帯が巡り、山形突起部分に巻き付いて渦巻文を構成している。口縁部は上端・下端に巡る 2 本一組の隆帯によって区画され、この中にやはり 2 本一組の隆帯が渦巻文を伴う曲線文を構成している。地文は LR 単節斜縄文で、口縁部には横、体部には縦回転で施文される。354・355 もキャリパー形土器の口縁部片と考えられる。334 は隆沈線、335 は隆帯と細い沈線によって文様が描かれている。357 は隆帯による並行文・緩い蛇行文が器面を巡る。358 は隆帯による文様をもつ。

(36.2) · · · ·



第 78 図 AI 土坑出土遺物

時期 出土した土器から推定して、縄文時代中期中葉の遺構と考えられる。

(酒井)

## 2. 弥生時代の遺構と遺構内出土遺物

### (1) 竪穴住居跡

#### AD 8 住居跡

遺構 (第 80 図・写真図版 28)

〈検出状況・重複関係〉 第三層直上面で、石囲炉が検出され住居跡と認定した。斜面下位にあたる西半は流失している。また北西側で縄文時代の AE 8 住居跡を切っている。

〈規模・平面形〉 残存部から推定して、一辺 5.5~6 m 前後の隅丸方形、または歪な円形を呈していたものと考えられる。

〈埋土〉 炭化物を僅かに含む黒色~黒褐色土で構成されている。

〈壁〉 いずれもほぼ直立する。壁高は東壁 20 cm、北壁 10 cm、南壁 7 cm である。

〈床面〉 検出及び精査段階での掘りすぎもあるが、全体に斜面下位にあたる西側に緩く傾斜している。東側では粘板岩の細礫を含む褐色土、西側ではこの上位層の黒褐色土層面で、平坦ではあるが、硬くしまるものではない。

〈柱穴〉 柱穴状の小土坑は 24 個検出された。P<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>は他に比べて深度が深く、位置からも棟持柱的機能を持つものかも知れない。しかし、これらに対応する側柱的柱穴は不明である。この他には P<sub>5</sub>-P<sub>7</sub>-P<sub>9</sub>-P<sub>15</sub>-P<sub>20</sub>・P<sub>21</sub>-P<sub>32</sub>や P<sub>5</sub>-P<sub>1</sub>-P<sub>10</sub>-P<sub>14</sub>-P<sub>3</sub>-P<sub>23</sub>などの六角形の配置が想定されるが、いずれも明確なものではない。

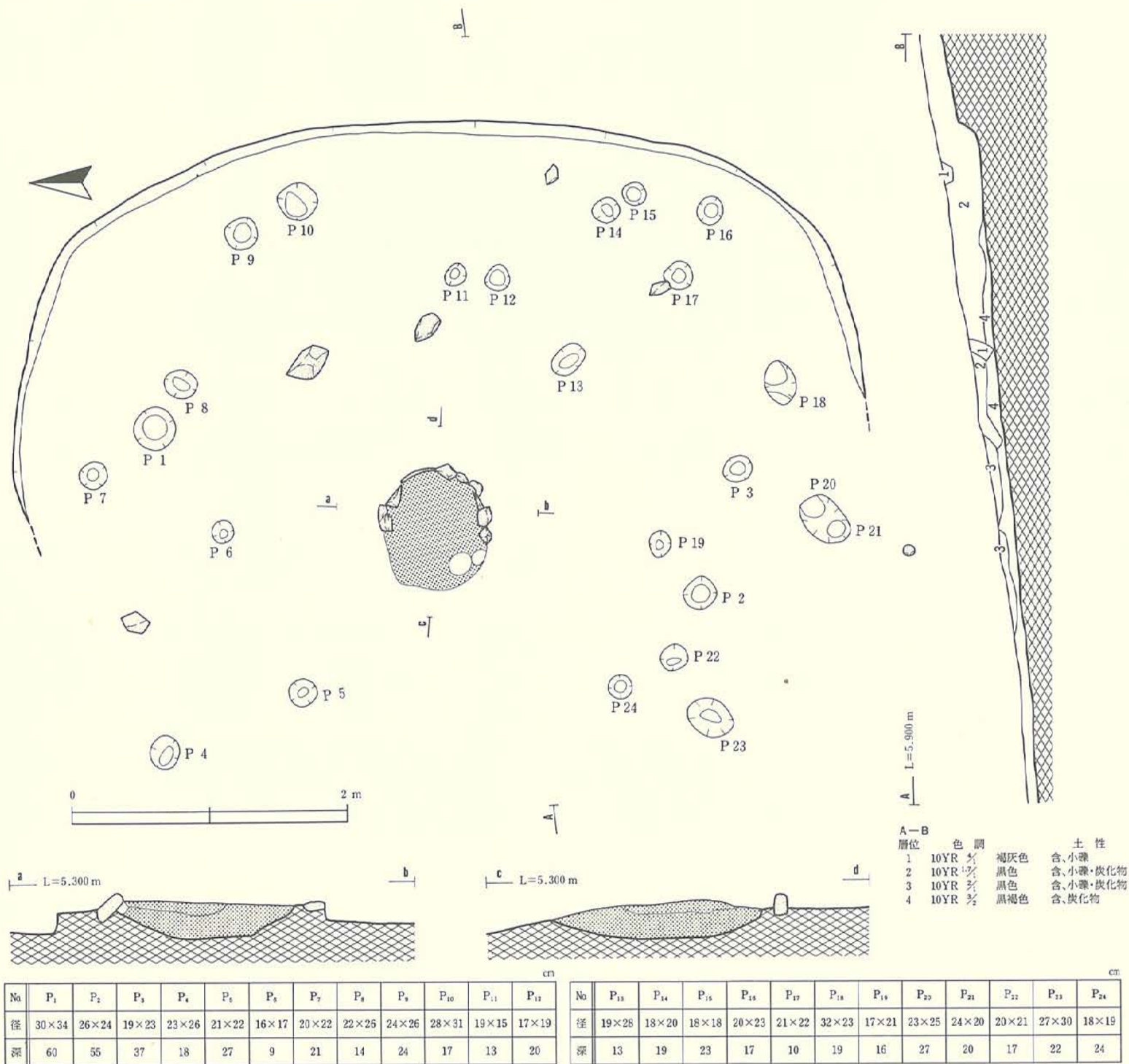
〈炉〉 床面中央部に石囲炉をもつ。構成礫は東半部の 9 個が残存する。南西部には礫の抜き取り痕と考えられる小さな凹みがあるが、北西部にはみられない。全体では径 80 cm 前後の円形 (C 字状) に構築されている。焼土層は、炉内及び炉の西側に 60×90 cm の範囲で分布し、層厚は最大 13 cm に達する。

遺物 (第 79 図・写真図版 75)

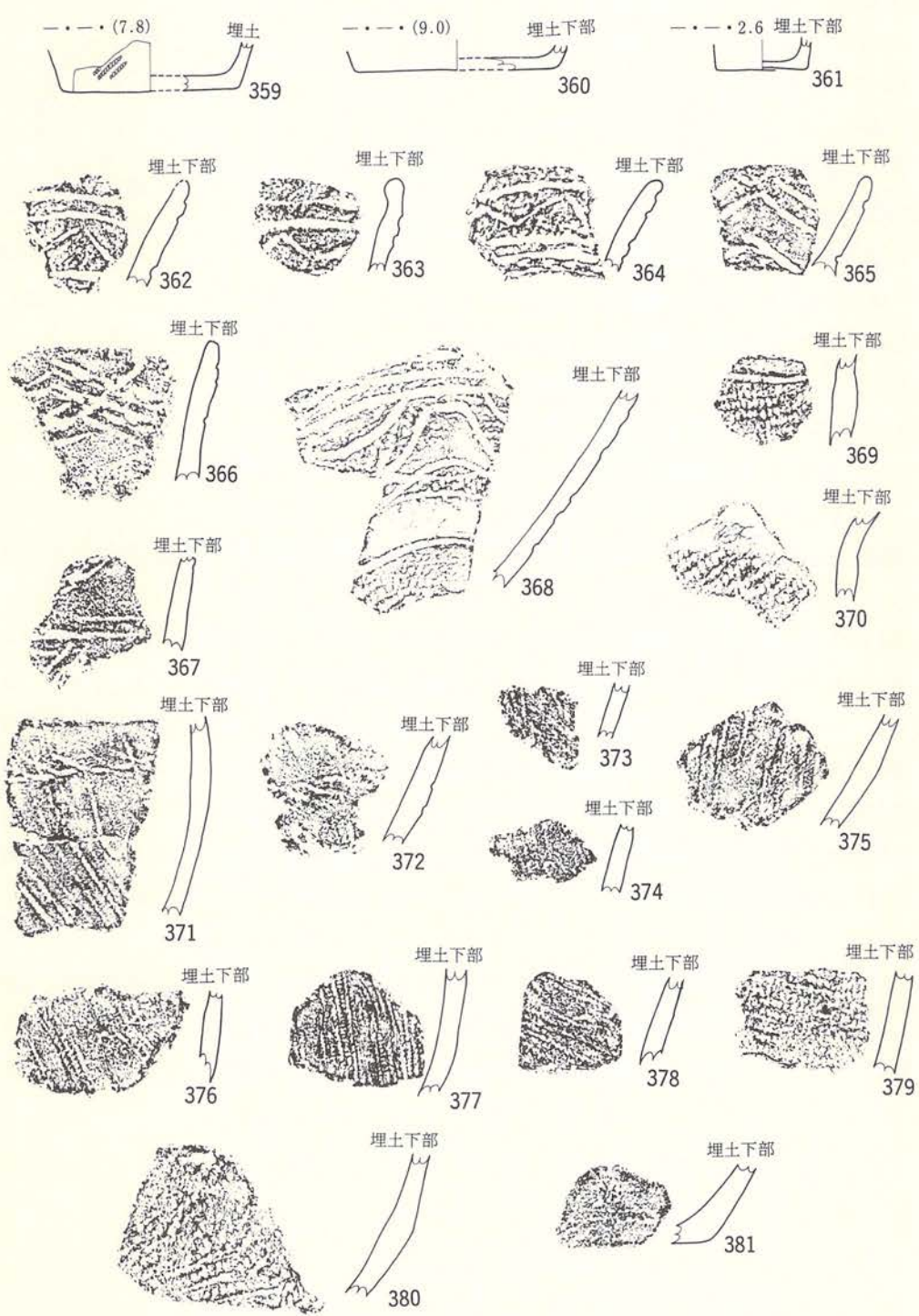
埋土下部~底面にかけて土器と礫石器が出土した。

〈土器〉 359~361 は底部破片である。359 は LR 単節斜縄文を地文とし、底面には木葉痕をもつ。361 はミニチュア土器の底部で、底面に木葉痕を残す。

362~365 は小型の広口壺の口縁部と考えられている。いずれも外傾して開く。362・363 は同一個体の可能性がある。口縁部上端に 2 本の沈線が巡る。この下部には八字状の沈線文が連続し、鋸歯状文を構成している。また、下端にも 2 本の沈線が巡るものと考えられる。器面が磨滅しており詳細は不明であるが、鋸歯状文の上部は縄文が磨消されている。地文は RL 単節斜縄文と考えられる。なお、大部分は欠損するが口縁部内側は肥厚する。胎土には砂を多く含むが



第79図 AD 8住居跡



第80图 AD 8住居跡出土遺物(1)



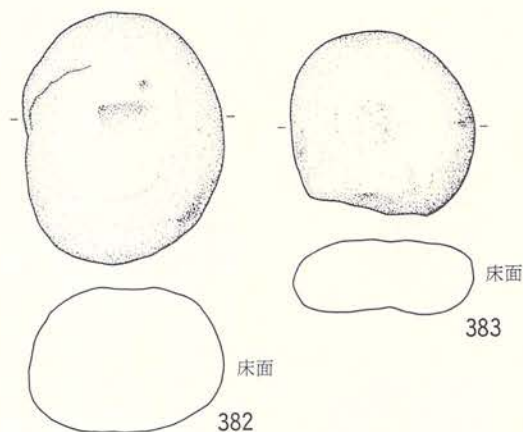
焼成は良い。364 は上端に巡る沈線が1本である。この下位にはやはり鋸歯状文が描かれ、上部は無文帯となる。下端には2本の沈線が巡り、この下位には小さな棒状工具により連続刺突が施されている。地文はLR単節斜縄文である。胎土には砂を多く含むが焼成は良好である。365 は3本の沈線による鋸歯状文をもつ。胎土にはあまり砂を含まない。366 は緩い波状口縁で、僅かに外反する。口縁部に沿って2本一組の非常に雑な沈線が2段に施され、この沈線間には刺突を加え、交互刺突状にしている。胎土には砂を多く含むが焼成は良く、色調

は赤褐色を呈する。367 も同一個体と考えられる。交互刺突文のほかに、L1段の撚糸文が斜行する。

368 は鉢または高坏の坏部の破片と考えられ、全体に外傾する。文様は沈線と磨消手法によって表われ、弧状の縄文帯の組み合わせが横に展開する。地文はLR単節縄文である。胎土には砂を含むが、他に比べてやや緻密で焼成も良い。369 は沈線区画された無文帯をもつ。地文はLR単節縄文で横走する。370 は緩く外傾する口縁部を有する甕で、口縁部は無文となる。地文はLR単節斜縄文である。371～378 はL1段の撚糸文を地文とする甕の体部片である。このうち、371—373 は横走する不整な綾絡文をもつ。372 は綾絡文の上位が無文となっている。379・380 はLR単節縄文を地文とする。379 は横走し、380 は斜行する。381 は底部片で、撚糸文が地文となっているようである。

〈石器〉382・383 が床面から出土した。いずれも表裏両面に浅い凹みを有する凹石である。382 はこの他に擦痕も観察され、磨石としても利用されたものと考えられる。

時期 出土した土器片から推定して、弥生時代後期後半期の住居跡と考えられる。(酒井)



第81図 AD 8住居跡出土遺物(2)

### 3. 古代以降の遺構と遺構内出土遺物

#### (1) 竪穴住居跡

##### AA 3 住居跡

遺構 (第 82・83 図・写真図版 29・30)

〈検出状況、重複関係〉粗掘り中に黒色土の広がりによる土層変化として検出された。埋土上面で現地性焼土が重複する。埋土下位に焼土粒や炭化物粒が多量に混入することから、焼失住居である可能性が推定される。南側が調査区外に延び全体は不明である。

〈規模・平面形〉東西 4 m、南北 3 m 以上の凸辺隅丸方形か長方形を示すと推定される。

〈埋土〉7 層に分けられるが、色調は黒色・黒褐色・暗褐色に大別される。混入物では、3 層を除く他は小礫が多量に混入し、3 層と 5 層には焼土粒と炭化物粒が混在し 3 層は特に多い。層相を観察すると、1~3・7 層は平面的に堆積し、壁際の 4~6 層には乱れがみられる。

〈壁〉壁高は東壁 53 cm、西壁 11 cm、北壁 32 cm あり、西に向う斜面に立地することから、西に寄るほど低くなる。西壁は垂直に近い立ち上がり示すが、他は外傾する。壁面には凹凸もなく平滑である。壁溝はない。

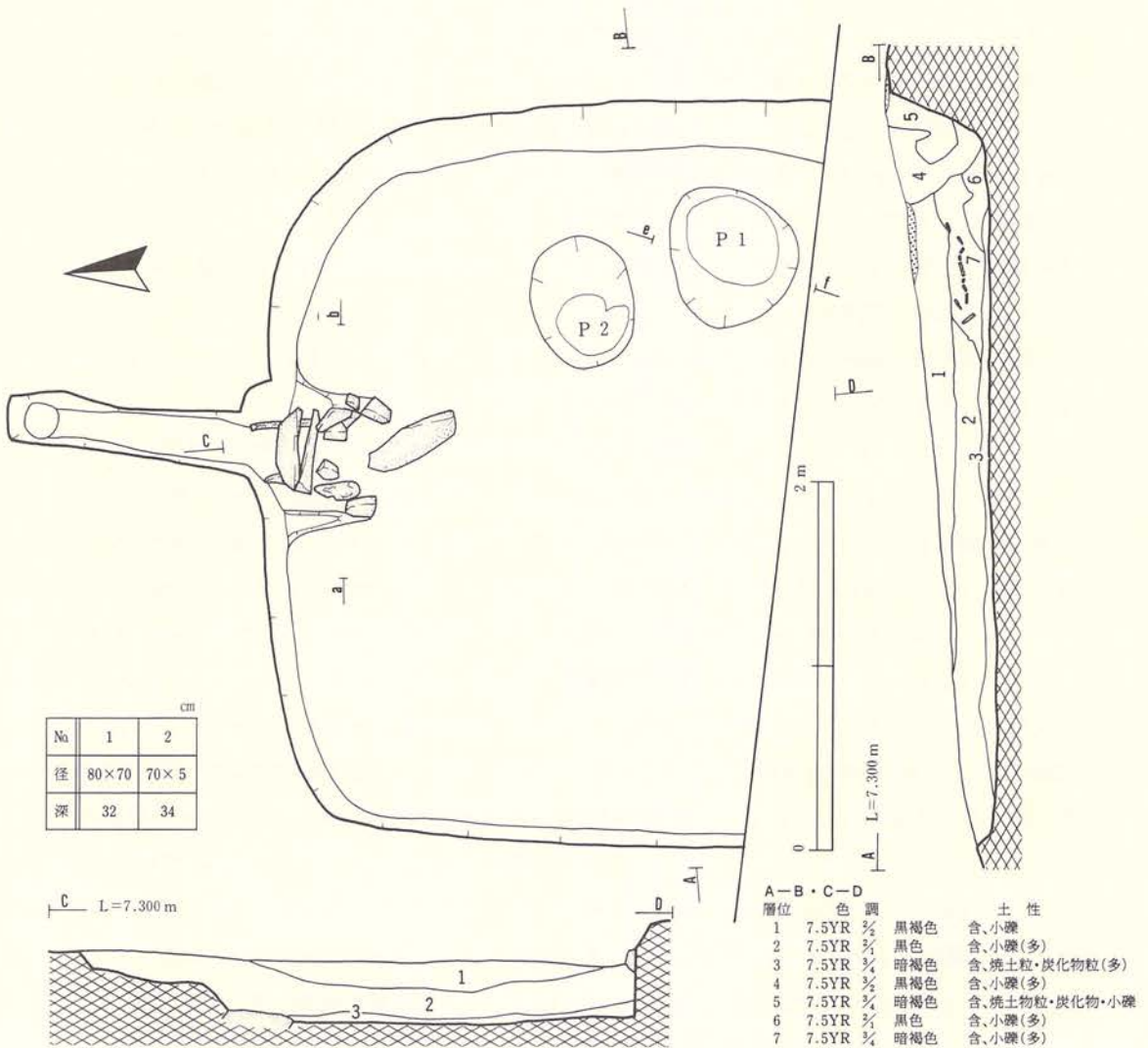
〈床面〉粘板岩の細礫を僅かに含む黄褐色土層面で、平坦で硬くしまり西に向って 10 cm ほど低くなる。かまど付近から東壁寄りにかけての床面が特に硬くしまる。

〈柱穴〉床面から P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub> の土坑が検出されているものの、規模や形状から柱穴とは言えない。

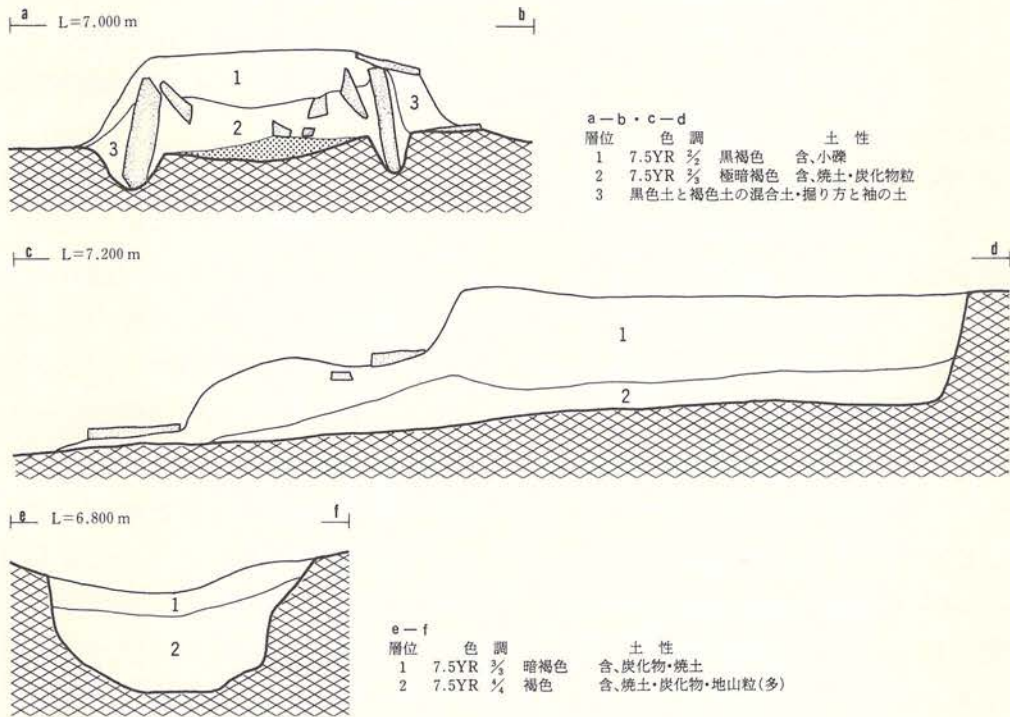
〈カマド〉北壁のほぼ中央に設置され、袖部の幅 75 cm、奥行 60 cm、高さ 25 cm で屋外へ 1.4 m 延びる煙道部とからなる。袖部は左側 3 個、右側 4 個の礫を芯にし、その周囲に褐色の粘土質土を貼り付けて構築する。焚き口部は左側に高さ 33 cm、幅 12 cm、長さ 16 cm、右側に高さ 27 cm、幅 12 cm、長さ 16 cm の礫を立てて埋設し、その上に床面に横たわる長さ 55 cm、幅 18 cm、厚さ 3 cm の細長い板状の礫を載せて構築される。焚き口部~燃烧部の床面は平坦である。燃烧部の焼土は焚き口部のやや奥から支脚の手前まで 50 cm×20 cm の範囲に分布し、7 cm の層厚がある。支脚は 10 cm×10 cm の歪んだ長方形を示し、長さ 15 cm の礫を左側袖部寄りに埋設している。奥壁はなく、燃烧部の床面と同位面がそのまま煙道部底面に続く。焚き口部から支脚付近までの天井は残っていないが、支脚~煙道基部には幅 12 cm、7 cm、長さ 45 cm、48 cm、厚さ 4 cm、3 cm の細長く扁平な礫を架構した天井である。煙道部は幅 32 cm~25 cm、長さ 1.4 m、深さ 33 cm~28 cm の溝状をなし、剥り貫きか掘り込みかは不明である。煙出し部は、検出面が一辺 30 cm の方形、底面は径 20 cm の円形を示し、煙道部の底面より 10 cm 低くなる土坑状である。埋土は 2 層に分けられる。黒褐色と極暗褐色を示すシルトで、1 層には小礫、2

層には焼土粒と炭化物粒が混入し軟かく粘性がない。3層は袖部の礫を埋設した際の掘り方埋土で、褐色土と黒色土の混合土である。

〈附属施設〉貯蔵穴と推定される土坑が東壁寄りで2基検出された。P<sub>1</sub>は75 cm×70 cm、深さ35 cmの楕円形を示し、断面形は鍋底形である。上層に炭化物や焼土を多量に含んだ暗褐色土、下層に炭化物と焼土の他地山粒が混入した褐色土が堆積する。P<sub>2</sub>は70 cm×60 cm、深さ34 cmの楕円形で、焼土粒や炭化物粒が混入した褐色土が堆積する。



第 82 図 AA 3 住居跡(1)



第 83 図 AA 3 住居跡(2)

遺物 (第 84~86 図・写真図版 76・77)

土師器・土製品・石製品・鉄製品が出土している。特に、土師器は床面北東隅部の限定された範囲から、格納された状況を推定し得る状態で出土した。

〈土師器〉(384~398)完形または完形に近い個体は坏 2 点、甕 2 点、小型甕 1 点、小型鉢 1 点、壺 1 点の 7 点と実測可能な 8 点が含まれ、その他に破片が出土している。いずれもロクロ未使用による成形である。

坏(384・385)一底部形態は丸底(385)または丸底風平底(384)で、両者とも体部上端に軽い段をもち、内面の対応する位置にも不明瞭な稜を付す。口縁部は 2 点とも外傾し端部は強く内湾する個体(384)と内湾気味に直口する個体(385)がある。口縁端部はいずれも外削ぎされ、口唇部は小さな丸味(384)や若干大き目の丸味をもつもの(385)がある。外面の器面調整は、ヘラケズリ(384)かヘラナデ(385)で、体部はヨコナデ後ヘラケズリ(384)とヘラナデ後ミガキ(385)がある。口縁部はヨコナデ後ミガキ(384)とヨコナデ後端部のみミガキ(385)に分かれる。内面は底部が放射状ミガキ、体部~口縁部が横方向ミガキ後黒色処理で両

者共通する。なお、内面の黒色処理が口縁部外面にまで及ぶ例(384)がある。大きさは384が口径15.7cm、底径8cm、器高6cm、385が口径14.8cm、底径不詳、器高4.2cmと前者がやや大き目である。胎土は砂粒が混入した緻密な粘土を使用し、焼成は良好で硬く、色調は赤褐色(385)や淡い黄褐色(384)を示す。いずれも不明瞭な輪積み痕を残す。

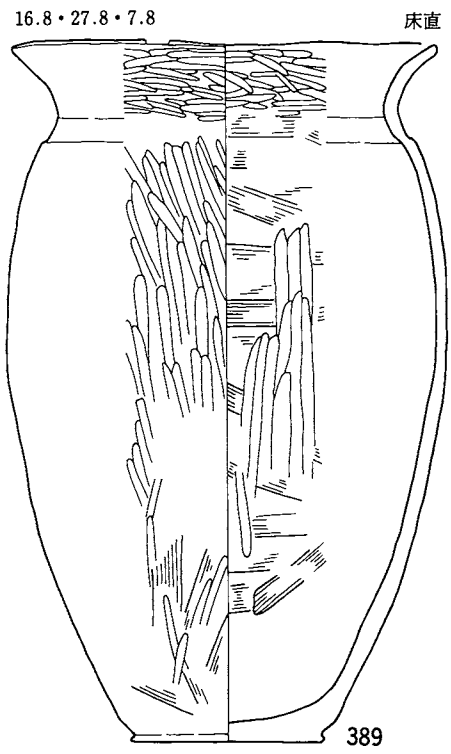
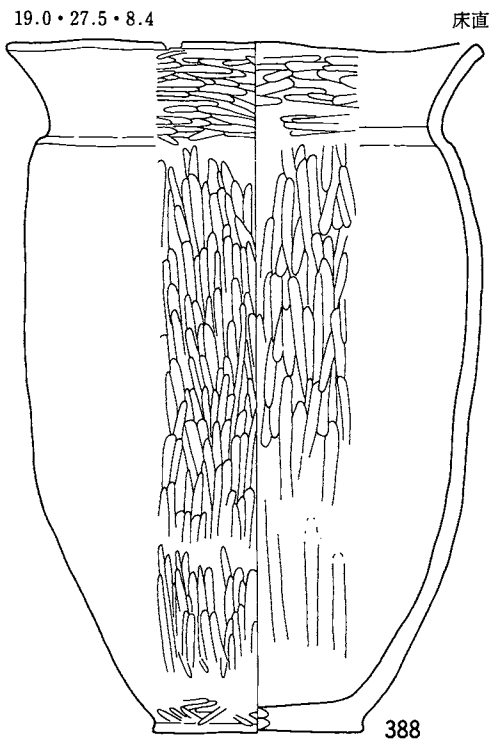
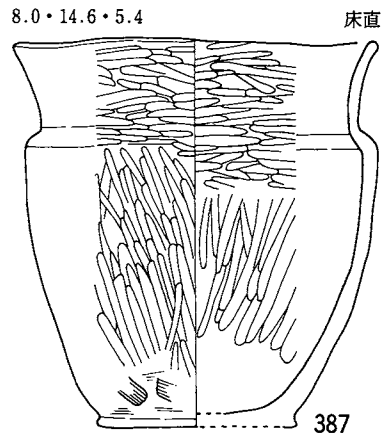
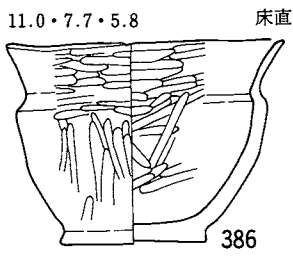
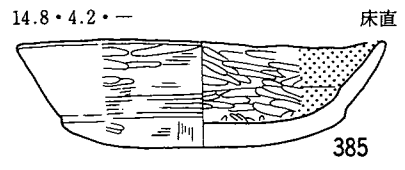
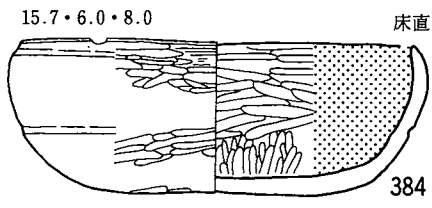
甕(388・389)一両者とも体部上位に体部最大径をもち、次第に内湾気味に窄んで底部に移行し、底部の周囲は僅かに突出し低いベタ高台状をなす。体部上位から頸部下端まで内湾し、明瞭な段をもって頸部と接続する。頸部はさらに軽く窄み、口縁部は外反し口唇は先細りとなって小さな丸味でおさまる個体(389)と、頸部から口縁部が湾曲気味で外傾し口唇が丸くおさまる個体(388)があるものの、全体的にはほぼ同じ器形を示す。外面の器面調整は、388が体部縦方向ミガキ、口縁部横方向ミガキで、389は体部ヘラナデ後縦方向ミガキ、口縁部横方向ミガキと、両者ともミガキを多用している。388の内面調整は外面のそれとまったく同様であるが389は体部横方向ヘラナデ後一部縦方向ミガキで、頸部は横方向ヘラナデ、口縁部横方向ミガキと、前者と若干異なる。底部は両者ともヘラナデ一部ミガキで上げ底気味である。胎土は坏の胎土より砂粒の混入がやや多い幾分粗い胎土を使用し、焼成は良好で硬く、黒味のやや強い茶褐色を示す。いずれも口縁部や体部の一部に輪積み痕を残す。大きさは、388が口径19cm、底径8.4cm、器27.5cm、389は口径16.8cm、底径7.8cm、器高27.8cmとほぼ同じである。

小型甕(387)一体部上端に最大径をもち、緩やかに内湾して底部に移行し、底部は周囲が軽く突出した低いベタ高台状を示す。体部上端と頸部は明瞭な段差で接続し、頸部～口縁部は外反する。口縁部上位は内削ぎされ、口唇は僅か先細りとなって丸くおさまる。器面調整や胎土、色調は内外面とも甕388とまったく同様である。大きさは、口径8cm、底径5.4cm、器高14.6cmと前の甕に比較して約1/2の器をもつ。

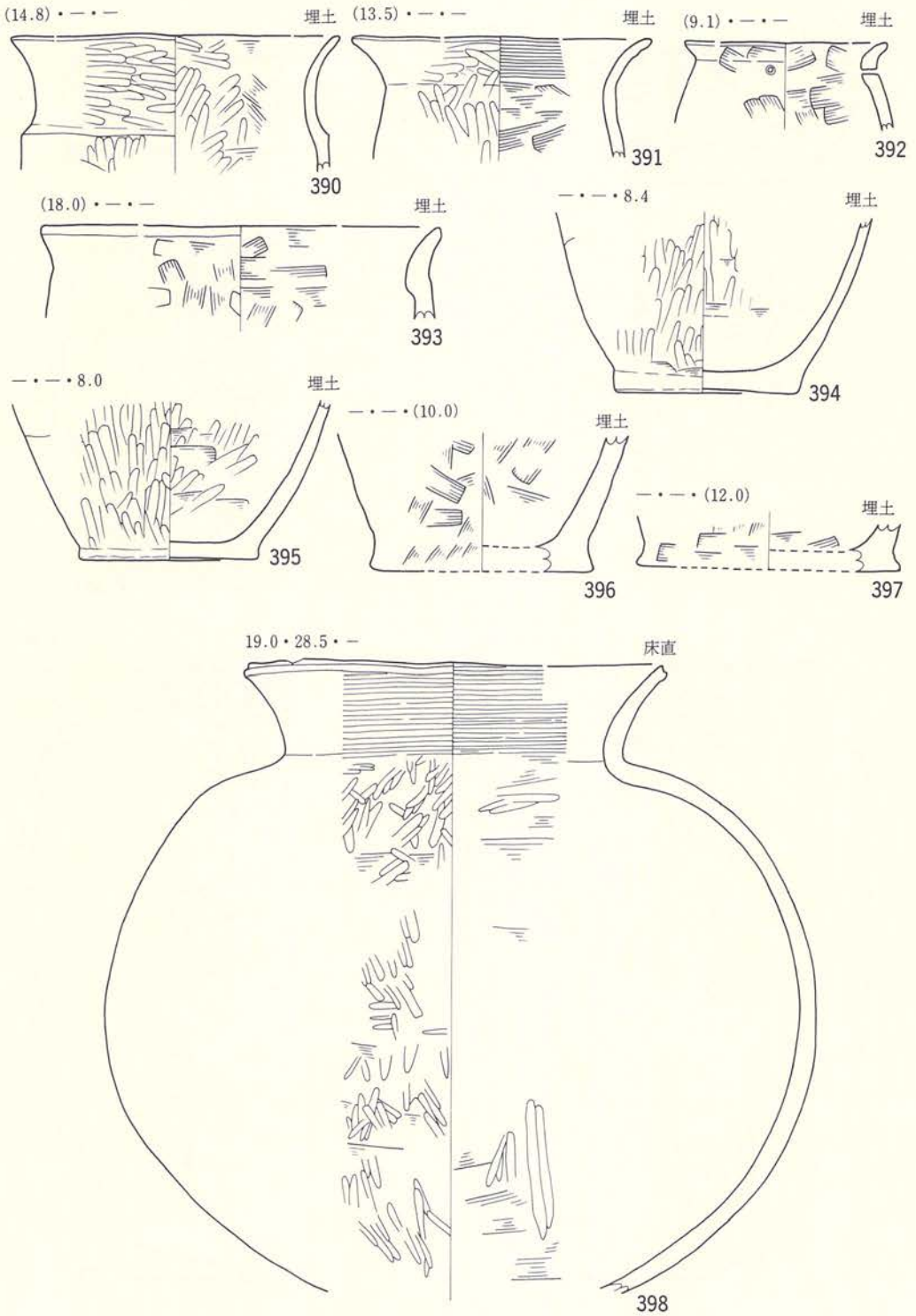
小型鉢(386)一小型甕の約1/2の器高をもつ以外は小型甕387と器形・器面調整、胎土・焼成ともまったく同じ特徴をもつ。甕形を示す器形としては大中小の関係にあると考えられる。

壺(398)一体部中位に最大径をもち、体部全体が円球状を示す器形で、底部は欠失する。体部上端と頸部の境に段がなく、頸部と口縁部は外反し、端部に向って次第に先細りとなるが端部を断面丸形に僅か肥厚させ、口唇には幅・深さとも1mm位で断面丸形の沈線を全周させる。器面調整は、内外面とも体部がヘラナデ後ミガキ、口縁部ヨコナデである。胎土は砂粒が多く混入した緻密な粘土を使用し、焼成良好で硬く、淡黄褐色を示す。大きさは口径19cm、底径不明、器高28.5cm以上である。口縁部～体部にかけて輪積み痕を良く残す。

390～397は埋土内から出土した甕形土器の破片であるが、392・393の器形以外はいずれも388・389の甕に近い器形・器面調整・胎土をもち、392以外の大きさも387・388や389の小型鉢に近い状況を示すであろう。392は口縁部が短くそして強く外反し、内外面ともヘラナデ調整



第 84 図 AA 3 住居跡出土遺物(1)



第 85 图 AA 3 住居跡出土遺物(2)

で、386に近い器形であろうか。

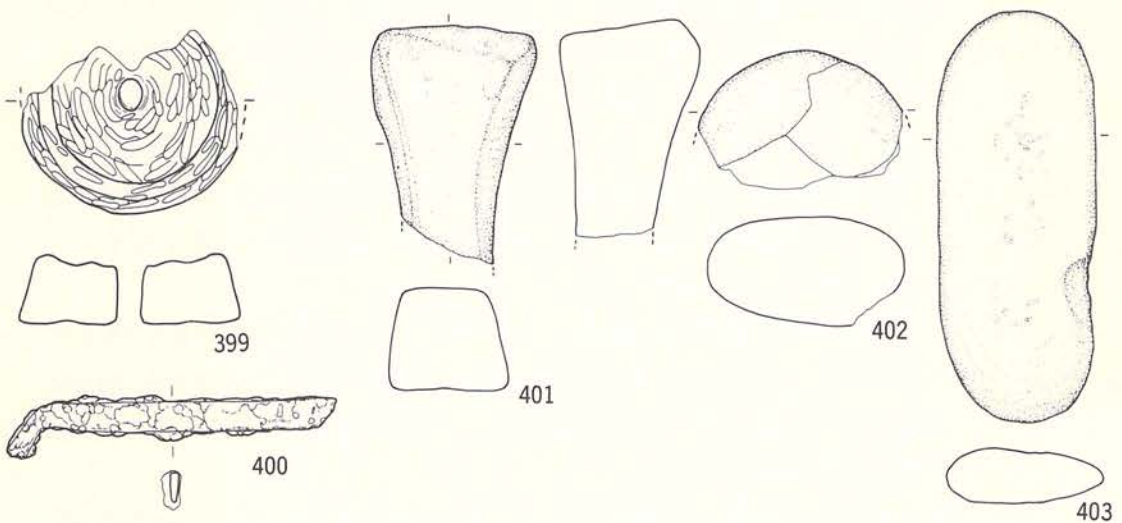
〈土製品〉(399)一截頭円錐台形に近い形状を示し、上面が周縁部に輪状の高まりを残して他は凹み、中央部に上面から下面まで貫通孔を穿つ。約1/2を欠失するが、上面と側面は良く研磨されて光沢を放ち、下面はナデ調整される。大きさは、下面径6 cm位、上面径5.5 cm、上面縁部は高さ3 mm、幅5 mm、全体の高さ約2 cm、低い部分1.7 cm、貫通孔が上面径7 mm、下面径9 mm、重量49 gあり、材質は少量の砂粒が混入した粘土で、焼成良好で硬く、表面は極暗褐色で内部ややくすんだ褐色である。

〈石製品〉(401~403) 砥石・磨石・凹み石が各1点埋土内から出土している。

砥石(401)一平面が歪んだ台形、断面方形を示し、上端に自然面、下端に折損面をもつ。4面に使用面をもち、中央部が使い減りによって細くなり折損したものであろう。大きさは、全長9.6 cm、最大幅6.7 cm、最大厚5.7 cm、重量360 gあり、石質は北上山地中生界の半花崗岩である。

磨石(402)一断面が扁平となる円形を示す器種で、全体の約1/2弱と推定される2個の接合する破片が出土している。全体がやや褐色を帯びてもろいことから火熱を受けている可能性がある。破損面以外は全面が研磨され、一部にやや黒色を帯びる弱い敲打痕をもつ。残存する大きさは最大長8.2 cm、最大幅5.5 cm、最大厚4.5 cm、重量250 gであり、北上山地中生界の半花崗岩を石材としている。

凹み石(403)一断面が扁平となり長楕円形の平面形を示し、使用面を両面にもち、浅い凹みが散在する。また、下位右側縁に叩き石として使用された敲打痕をもち、一部は表・裏面の剝



第86図 AA 3住居跡出土遺物(3)



離痕をもつ。大きさは全長 16.6 cm、最大幅 6.4 cm、最大厚 3 cm、重量 460 g であり、石質は北上山地の硬砂岩である。

〈鉄製品〉(400)全長 8.7 cm、幅 8 mm、厚さ 2 mm、重さ 8.85 g の大きさをもつ平鉄状の鉄板を、左端 1.3 cm の部分を幅 6 mm に狭くし、下方 45 度に屈曲させている。右端に折損の痕跡を残さないことから完形と推定されるが、器種は不明である。

時期 出土した土師器から奈良時代に位置づけられる。 (高橋)

## AB 6 住居跡

遺構 (第 87・88 図・写真図版 31・32)

〈検出状況・重複関係〉表土を除去した段階で、黒褐色土の広がりとして検出された。斜面下位にあたる西半は流失しているほか、所々で後世の攪乱を受けている。床面各所に現地性焼土の分布がみられるが、炭化材は検出されておらず、焼失した住居跡かどうかは不明である。

〈規模・平面形〉残存する壁や床面の状態から推定して、一辺 5 m 前後の隅丸方形を呈していたものと考えられる。

〈埋土〉炭化物を僅かに含む黒褐色土の単層である。なお、層中には粘板岩の細礫が多量に含まれている。

〈壁〉いずれも外傾して立ち上がる。壁高は東壁 45 cm、北壁 11 cm、南壁 13 cm である。

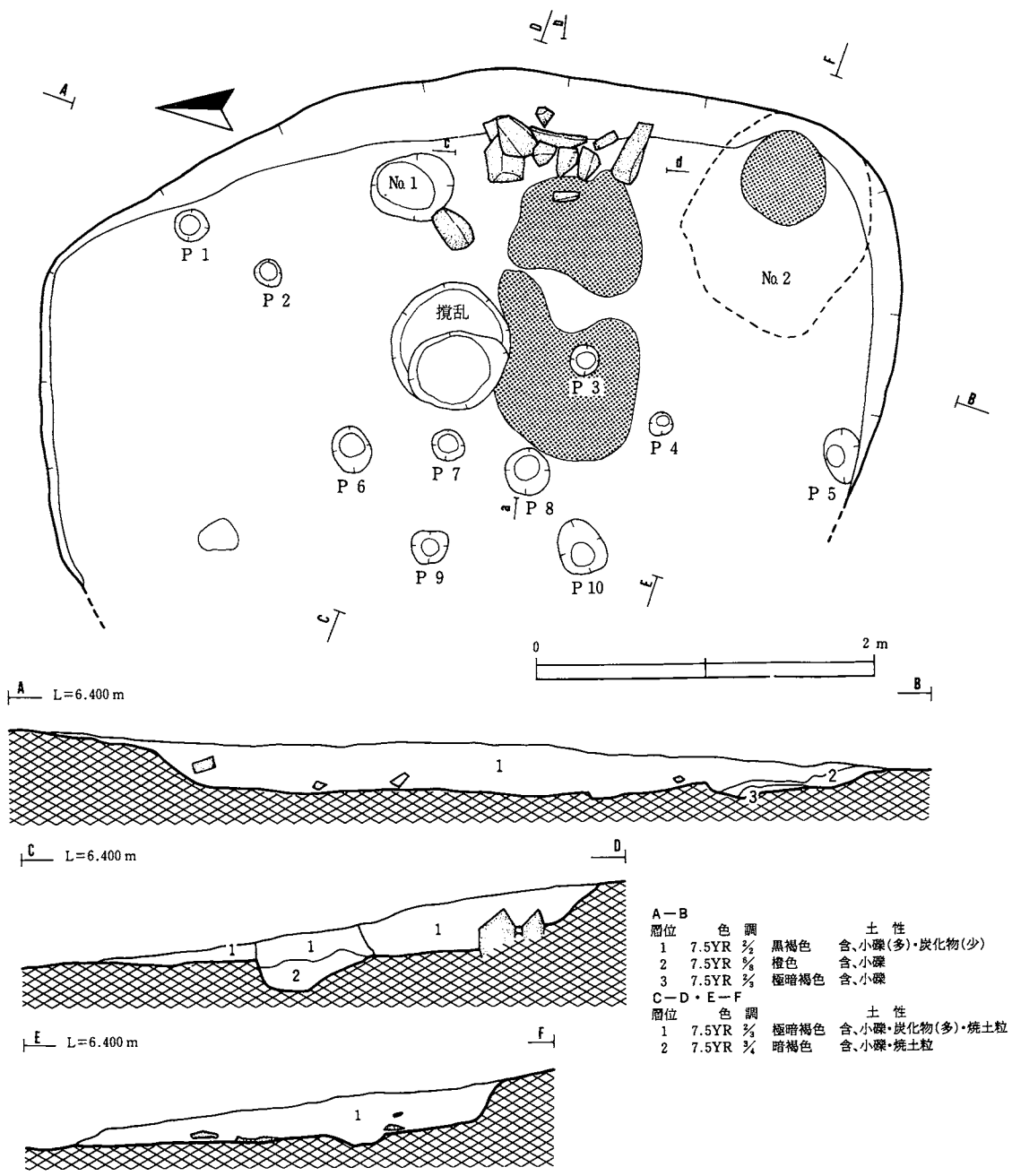
〈床面〉粘板岩の細片を含む褐色土層面で、凹凸があるが硬くしまっている。

〈柱穴〉柱穴状の小土坑は 10 個検出された。しかし、この中には攪乱によるものも多く、主柱穴の配置等は不明である。

〈カマド〉東壁の中央やや南寄りに構築されている。残存状況は不良で、袖部の芯材及び天井部を構成していたと考えられる扁平な礫が壁際に散在していた。また、礫の周辺にはこれらを覆うように粘土質土が分布していた。袖部の芯材は扁平な粘板岩で、やや内側に傾むけて据えられている。これらは床面下 7~20 cm まで埋設されており、北側では幅 50 cm、深さ 25 cm の掘り方を伴う。燃烧部は壁から 75 cm 内側に位置し、40×70 cm の範囲に最大 8 cm の厚さで焼土層が形成されていた。煙道部及び煙出し部は、壁際に炭化物・焼土粒を含む暗褐色土がみられるだけで、明確に把握できなかった。

〈焼土〉床面の各所に現地性焼土が検出された。このうちカマドの西側と南東隅部分で検出されたものは規模が大きく、前者は 1.3×1 m、後者は径 50 cm の範囲に焼土が分布する。厚さはいずれも 3~8 cm ほどである。性格については不明であるが、南東隅のものは、下位から不整な楕円形を呈する小土坑が検出された。

〈附属土坑〉カマドの北側 (No.1) と南東隅部分 (No.2) に小土坑が検出された。No.1 は 50×

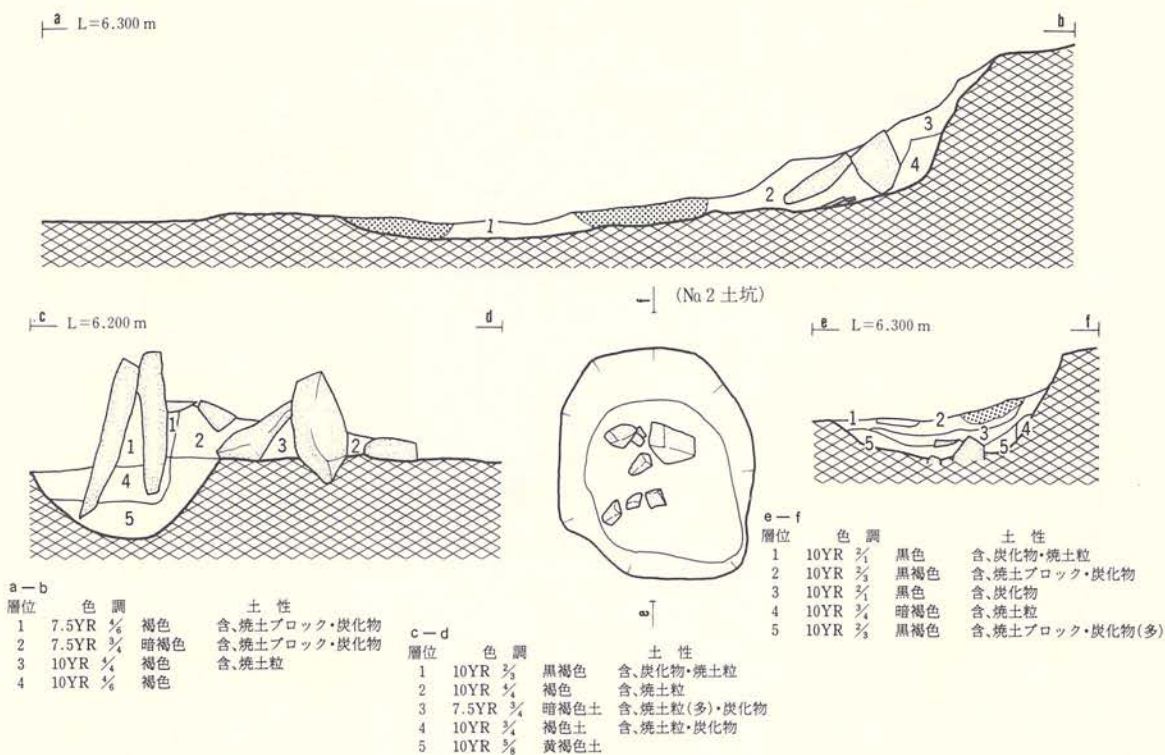


A-B  
 層位 色調 土性  
 1 7.5YR 3/2 黒褐色 含、小礫(多)・炭化物(少)  
 2 7.5YR 5/6 橙色 含、小礫  
 3 7.5YR 3/4 極暗褐色 含、小礫

C-D・E-F  
 層位 色調 土性  
 1 7.5YR 3/4 極暗褐色 含、小礫・炭化物(多)・焼土粒  
 2 7.5YR 3/4 暗褐色 含、小礫・焼土粒

Na	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>4</sub>	P <sub>5</sub>	P <sub>6</sub>	P <sub>7</sub>	P <sub>8</sub>	P <sub>9</sub>	P <sub>10</sub>
径	20×21	16×17	19×20	14×15	20×32	25×29	19×20	28×30	21×25	27×35
深	2	8	12	12	36	26	4	12	9	36

第 87 図 AB 6 住居跡(1)



第 88 図 AB 6 住居跡(2)

45 cm、深さ 6.5 cm で不整な浅皿状を呈する。No.2 は 1.2×1 m、深さ 20 cm の不整な楕円形を呈す。埋土は炭化物・焼土ブロックを含む黒褐色～暗褐色土で構成され、床面から粘板岩の垂角礫が数個検出された。詳細については明確ではないが、検出された位置から貯蔵穴的機能が考えられる。

〈主軸方向〉 E-19°-W を示すと推定される。

(酒井)

遺物 (第 89 図・写真図版 78)

土師器と鉄製品が出土している。

〈土師器〉 甕の底部破片が出土している。

甕 (404~406) 一底部と体部の一部を残す破片で、いずれも非ロクロ成形である。404 は輪積み痕を良く残し、器表に横方向のナデ痕をもつ。底面に何かを圧痕した痕跡をもつが定かでない。405 もほぼ同じ様相を示し、胎土も近似することから同一個体の可能性をもつが、体部の立ち上り角度に差がみられることから、別個体とした。底面に箕子状の圧痕文をもつ。406 は、底

面に木葉文をもち、周囲が断面三角形状に突出する。体部は外傾して内湾気味に立ち上がるものらしい。器表には縦や斜方向のヘラケズリ調整の痕跡を残し、内面は指ナデによる粗雑な調整痕がある。胎土は、前2者は極く少量の砂粒が混入した緻密な粘土を使用し、焼成よく色調は赤褐色を示す。406は砂粒が多量に混じった粗い粘土を使用し、焼成は良いが脆く色調は淡い褐色である。

〈鉄製品〉器種不明1点、刀子1点、柄頭状1点、鎌の破片らしきもの1点の4点出土している。

器種不明(407)―AB3住居跡から出土した400の鉄製品と近似した形状を示す。長さ11cm、幅1.2cm～1cm、厚さ0.3cmの平鉄状のものを右端から7cmの位置で斜上方に折り曲げ、さらに2.5cmの位置で斜下方に曲げ鉤状の形に加工している。重さが15.5gと400に比較して一回り大型である。

刀子(408)―断面が三角形状を示すことから刀子と推定され、実測図の右端が狭いことから鋒部分に近い刀身の一部であろう。残存長6.1cm、最大幅1.1cm、最大厚さ0.2cm、重さ5gの大きさで、棟は平らである。

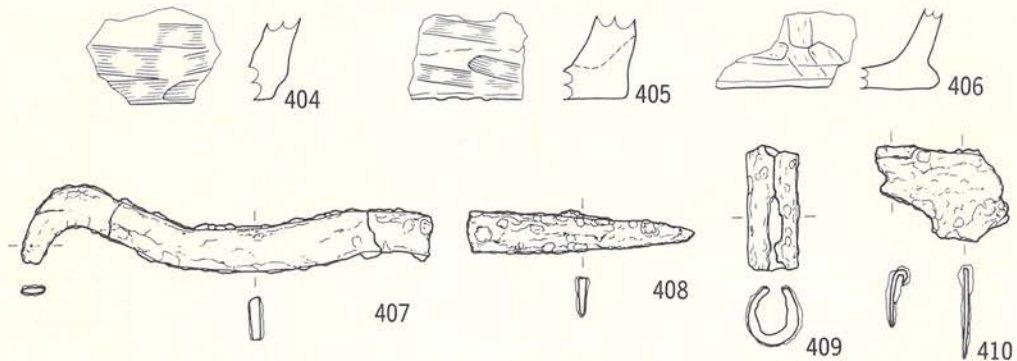
柄頭状(409)―幅3.5cm、厚さ0.3cm～0.2cm、重さ10.9gの鉄板を曲げて内径0.9cmの円筒状に加工されたもので、実測図の上端は内径0.7cm×0.5cmと小さくなっており、鉄板の合わせ目も一部が0.3cm～0.1cm開き密着しない。全体的な形はAM7土坑から出土した刀子(400)の柄頭に装着されていた円筒状金具とほぼ同じ形を示し、それより一回り小型である。

鎌状(410)―実測図左上縁が内側に折り込まれていることから、鎌の柄装着部分と推定した。残存部分は長さ3.7cm、幅2.5cm、厚さ0.2cm～0.1cm、重さ5.1gの大きさがある。

この他に小さな鉄滓が出土している。重量は10gである。(写真図版95-e)

時期 出土した土師器から平安時代に属する。

(高橋)



第 89 図 AB 6 住居跡出土遺物

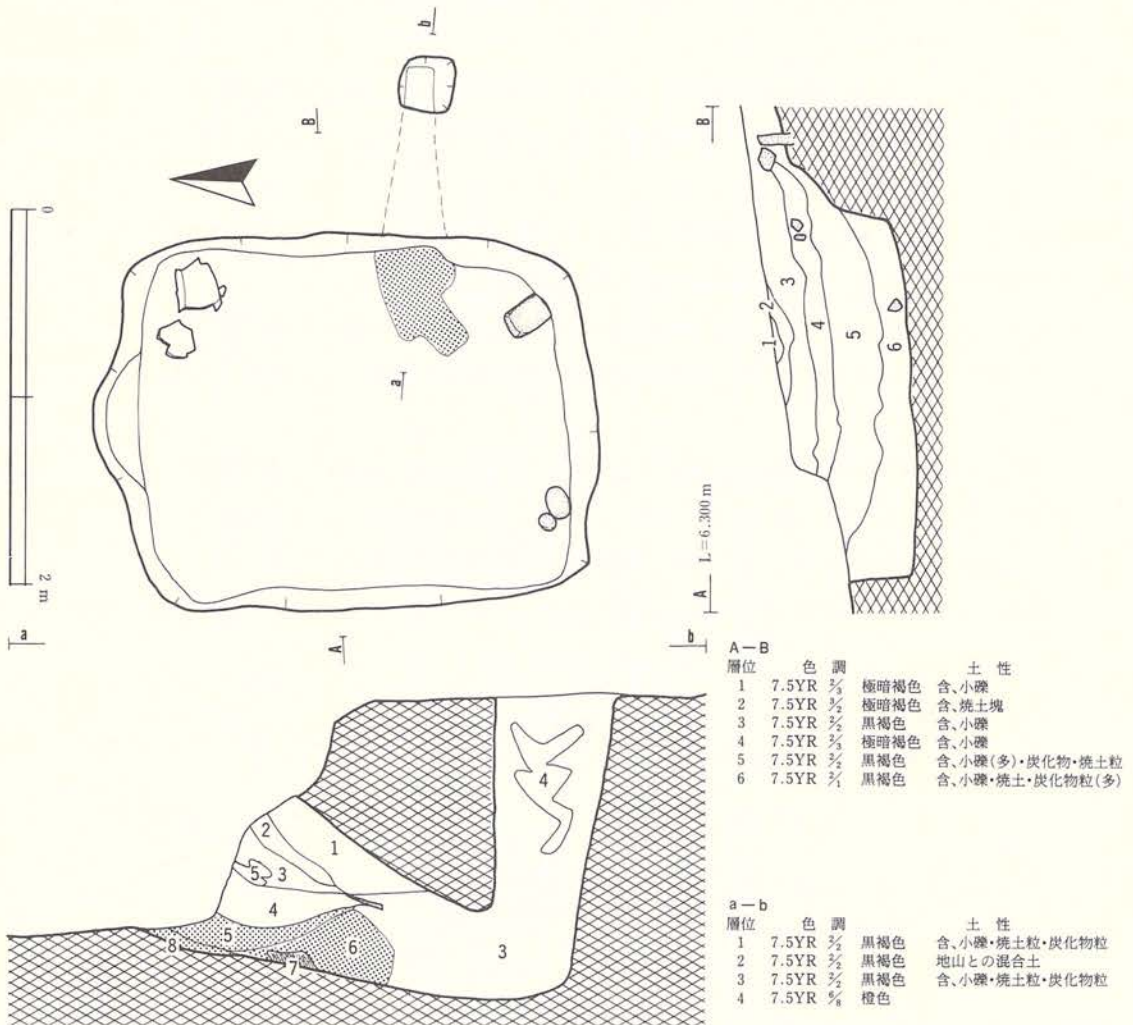
## AE 7 住居跡

遺構 (第 90 図・写真図版 33)

〈検出状況・重複関係〉粗掘り中の土層変化によって検出された。南壁を AE 6 住居跡、北壁で AF 7 住居跡の両縄文時代住居跡と重複し切っている。

〈規模・平面形〉東西 2.1 m、南北 2.7 m の南北に長軸をもつ隅丸長方形を示すが、南壁が北壁に比較して約 20 cm 短く、全体が僅かに歪む。

〈埋土〉6 層に細分されるが、色調は極暗褐色・黒褐色・黒色と大きな差はみられない。い



第 90 図 AE 7 住居跡

れの層にも小礫を多量に含み、さらに2層には焼土塊、5層では炭化物粒と焼土粒、6層は多量の焼土粒と炭化物粒を混入し、火災によって焼失している可能性がある。

〈壁〉東壁と西壁は直立に近い立ち上がりを示すが、南壁と北壁は前者より外傾する。壁高はもっとも高い東壁で60 cm、もっとも低い西壁で22.5 cmあり、斜面に立地することから、西に寄るほど低くなる。なお、北壁中央の半円状張り出しは掘りすぎ部分である。

〈床面〉小礫を僅かに含む黄褐色土層面で、平坦で水平状態に近いが、しまりはよくない。また、東壁から北壁寄りの床面に火熱による赤色変化が認められた。

〈柱穴〉床面から検出された土坑はない。

〈カマド〉南東隅部から約90 cm北に寄った東壁に設置される。袖部は左右とも未検出であることから、崩落したか精査中の不手際で掘り取ってしまった可能性がある。燃烧部の焼土は60 cm×40 cmの不整な長方形気味に焚き口から煙道基部の範囲に分布し、最大で4 cm位の層厚がある。煙道は割り貫きで屋外に90 cm位延び、底面が焚き口床面から煙出しに向って16 cmほど低くなる。煙道基部は径45 cmの円形をなし、最奥部は径24 cmと小さくなり、検出面の煙出しは一辺約30 cmの方形でほぼ直立する。埋土は7層に細分されるが、1層～3層が黒褐色土、4層は橙色土、5層は煙道の天井から落ちた焼土、6層は炭化物が多量に混じった焼土、7層は炭化物で、8層は燃烧部の焼土である。

〈附属施設〉特にない。

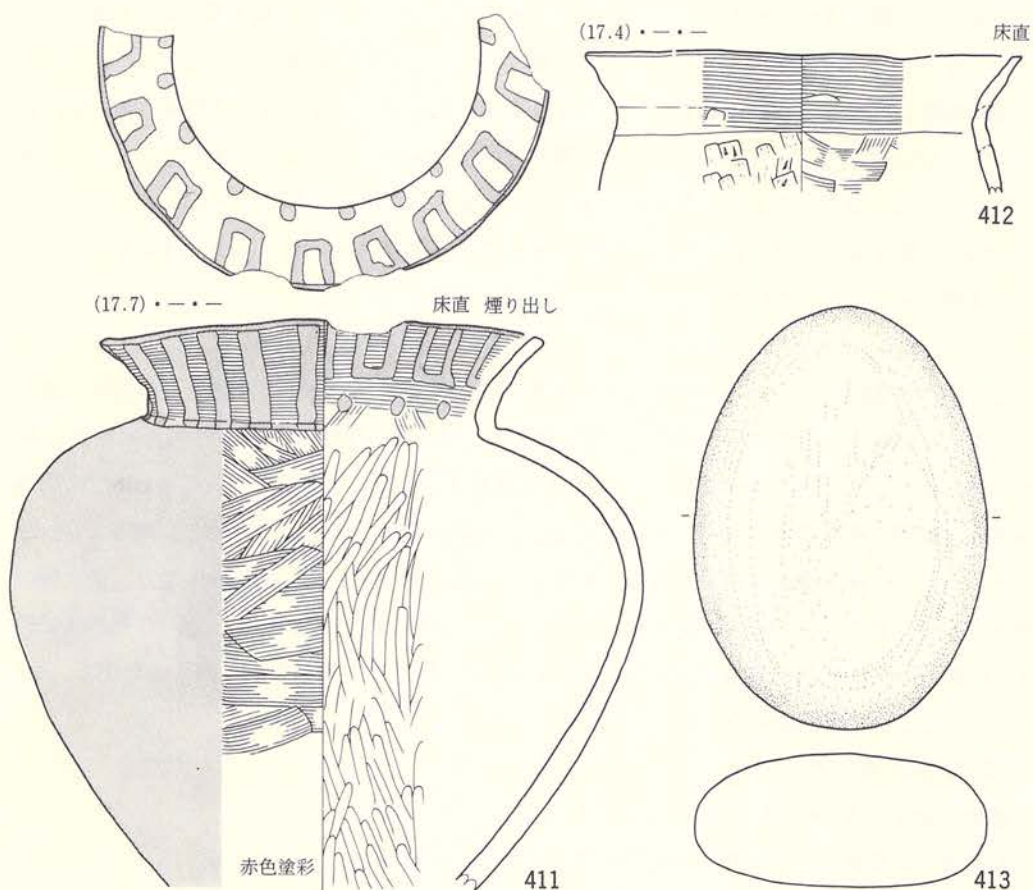
#### 遺物（第91・92図・写真図版78）

北東隅部の床面から土師器、南西隅部寄りの床面から磨石が出土している。

〈土師器〉(411・412)一甕の体部上位から口縁部を残す破片1点と底部を欠失し体部～口縁部約1/2を残存する壺1点が床面直上と煙り出し口から接合する個体が出土したのみである。いずれもロクロ未使用成形である。

甕(412)一体部上位か中位に体部最大径をもち、体部上端は僅かな段で頸部と接続する。頸部はやや直立気味に立ち上がった後大きく湾曲して直線的に外傾する口縁部に続く。端部は口唇部のナデによって外方に軽く肥厚し、口唇部には断面丸形の沈線が全周する。外面の器面調整は、体部が縦・横方向ナデ後縦方向ヘラケズリ、口縁部ヨコナデである。内面のそれは、体部が横方向ヘラナデ、口縁部ヨコナデである。胎土は砂粒の混入した緻密な粘土が使用され、焼成が良好で硬く、ややくすんだ黄褐色を示す。大きさは口径17.4 cm位と推定される以外不明である。

壺(411)一体部上位に最大径をもち、軽く内湾しながら窄んで底部に移行し、底部は欠失する。体部上位は最大径の位置から内湾して大きく窄んだ後僅かな段で頸部と接続する。頸部は直立気味に立ち上がり、口縁部は直線的に外傾する。口唇は角張り中央部が僅かに凹む。外面

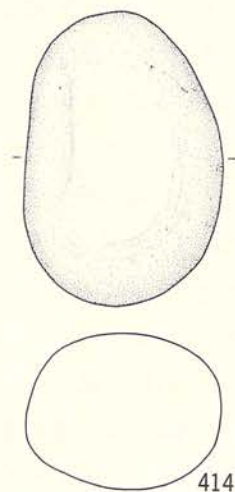


第91図 AE 7住居跡出土遺物(1)

の器面調整は、体部が横方向へラナデ後赤彩、口縁部ヨコナデ後縦方向に幅 1.2 cm~0.8 cm の線状に 1.1 cm~0.6 cm の間隔で赤彩される。内面は体部が縦方向ミガキ、口縁部はヨコナデ後 U 字形に赤彩され、さらにその下に円形の列点状にも赤彩される。胎土は少量の砂粒が混入した緻密な粘土を使用し、焼成は良好で硬く淡く明るい褐色を示す。大きさは口径 18 cm、底径不明、器高 22.5 cm 以上である。

〈石製品〉(413・414)

磨石が 2 点出土している。413 は断面が扁平で楕円形の平面を示し、最大長 17 cm、最大幅 11.8 cm、厚さ 5.4 cm、重さ 1580 g の大きさをもつ北上山地古生界産のチャートを石材とした磨石で、平坦



第92図 AF 7住居跡出土遺物(2)

な両面の一部に磨面をもつ。414 は最大長 11.9 cm、最大幅 8 cm、厚さ 6.3 cm、重さ 840 g の大きさをもち、断面、平面とも楕円形を示す北上山地中生界産の半花崗岩を石材とし、平坦な両面に磨面をもつ。この他に小さな鉄滓が出土している。(写真図版 95-f) 重量は 66 g である。

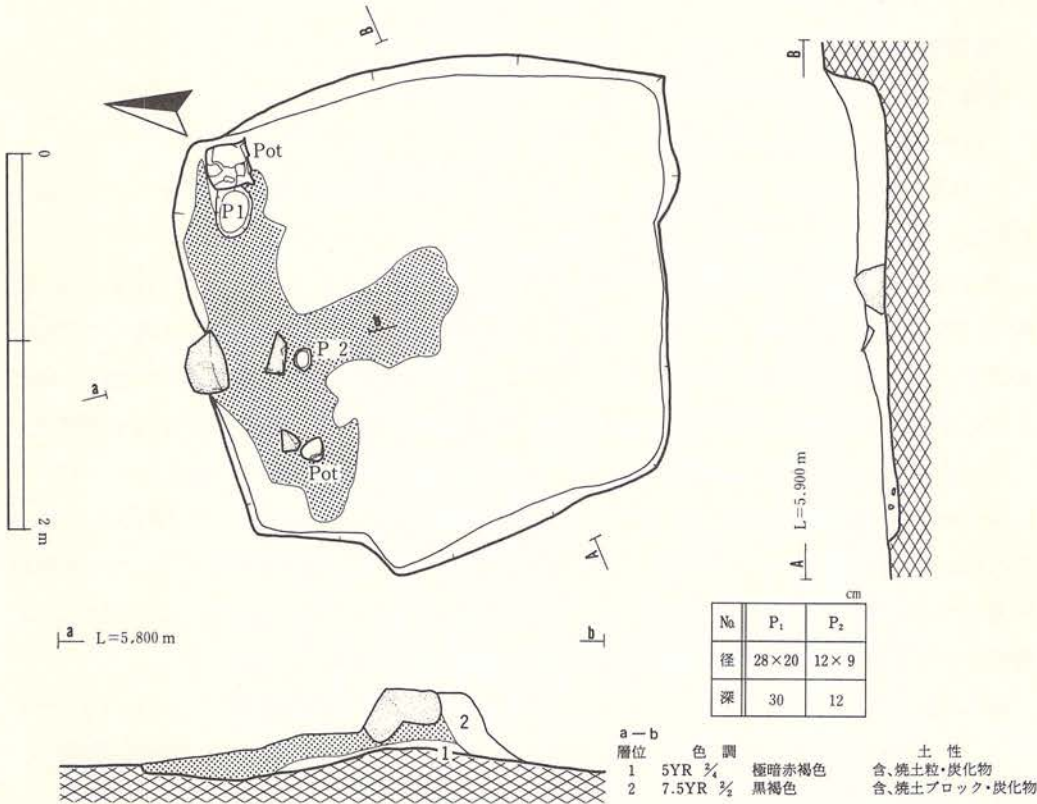
時期 出土した土師器から奈良時代に属する。 (高橋)

AJ 9 住居跡

遺構 (第 93 図・写真図版 34)

〈検出状況・重複関係〉粗掘り中に黒色土の広がりとして検出された。北壁寄りの床面に広い範囲に火熱によって赤変した部分が観察されたことから、火災で焼失した可能性がある。南東壁が AI 8 住居跡、北西壁で AK 10 住居跡と重複するが、ともに縄文時代の住居跡である。

〈規模・平面形〉東西 2.3 m、南北 2.7 m であるが、東壁と西壁の間に 40 cm の差があり、やや歪んだ方形を示す。また、西壁は一部突出するが、この部分は掘りすぎである。



第 93 図 AJ 9 住居跡



〈埋土〉焼土粒、炭化物細粒、細礫の混入した黒褐色土の単層で、埋土下位に少量の巨礫が入る。

〈壁〉壁高は東壁 30 cm、西壁 8 cm、南壁 15 cm、北壁 10 cm あり、西に寄るほど低くなる。南壁と北壁・西壁はほぼ垂直に近い立ち上がりを示し、東壁はやや外傾する。壁面は平滑で凹凸はない。また、壁溝も検出されない。

〈床面〉僅かの礫が混入した黄褐色土層面で、若干凹凸があり全体として軟弱である。床面の焼成面は北壁際の幅 50 cm とほぼ中央から南方に突出する東西 40 cm、南北 80 cm のほぼ T 字形を示す範囲に分布し、0.5 cm～1 cm の層厚に及んでいる。

〈柱穴〉北東隅部に 28 cm×20 cm、深さ 30 cm、北壁中央やや床面中央寄りに 12 cm×9 cm、深さ 12 cm の 2 個が検出されているが、支柱穴か否かは不明である。

〈カマド〉袖部や煙道部は検出されていないが、北壁際ほぼ中央の床面から現地性焼土が検出されたことから、北壁中央にカマドが設置されたと推定され、焼土は燃焼部に伴う可能性が高い。焼土は 2 m×1.4 m、層厚約 7 cm の範囲に広がり、南端は床面との間に焼土塊や炭化物が混入した黒褐色土が挟在する。

〈附属施設〉特になし。

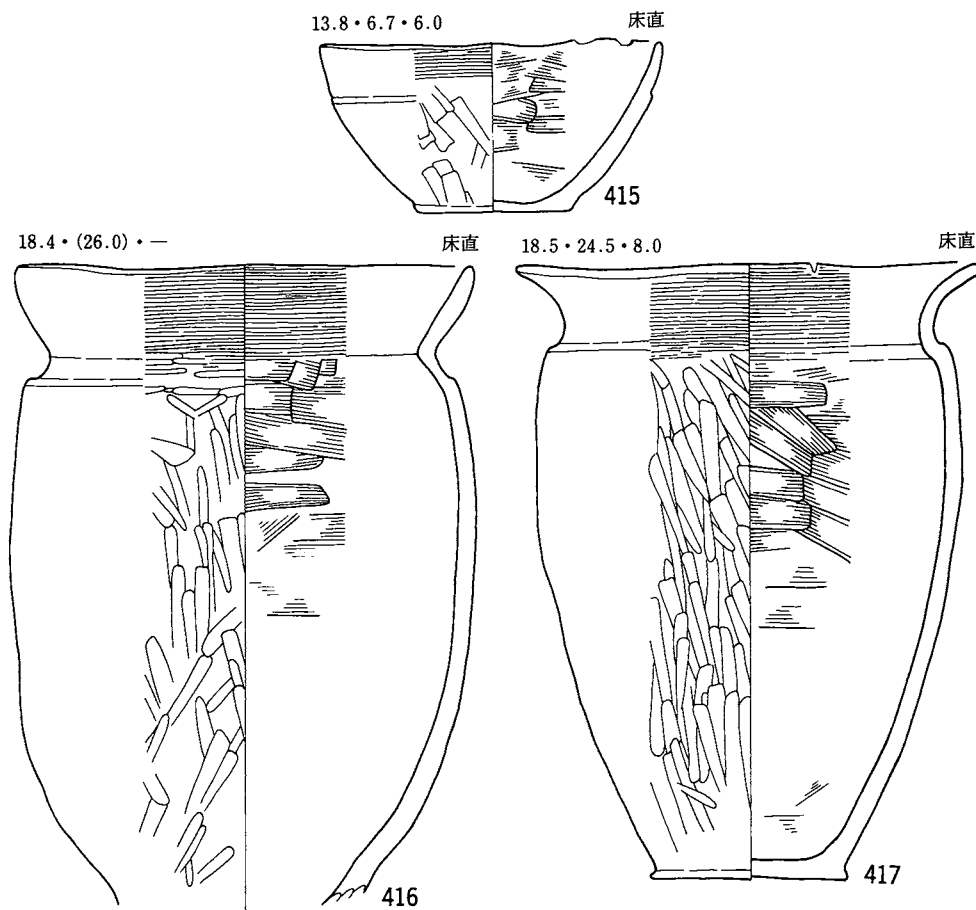
遺物（第 94 図・写真図版 79）

土師器だけが出土している。

〈土師器〉（415～417）北東隅部と北壁ほぼ中央の床面から完形に近い甕各 1 点と、北西隅部の床面で約 1/3 を欠失する鉢 1 点が出土したのみである。

甕（416・417）416 は体部中位のやや上、417 は体部上位に体部最大径をもち、416 は直立気味に下降した後大きく窄んで底部に移行するが、底部を欠失する。417 は次第に内湾して底部に移行し、底部は周辺部が外方に突出し、底面は平らにナデられる。体部と頸部は両者とも段をもって接続するが、416 では頸部が内湾して窄み口縁部は外傾する。口縁部の上位は外削ぎによって内湾状を示し、口唇部は丸味をもつ。417 は頸部が直線的に立ち上がった後大きく外反し、口唇は角張る。器面調整は 2 点とも同じで、体部は外面縦方向ヘラミガキ、内面横方向ヘラナデ、口縁部は内外面ともヨコナデである。両者の胎土とも砂粒の混在するやや粗い粘土を使用するも焼成は良好で硬く、淡い褐色を示す。大きさは、口径が 416—18.4 cm・417—18.5 cm、底径は 416—不明・417—8.0、器高が 416—26.0 cm 以上・417—24.5 cm である。

鉢（415）形態が坏と近似しているが、平底であることや器面調整が甕のそれと全く同じであることから鉢に分類した。底部から内湾気味に外傾した体部は上端に最大径をもつ。体部と口縁部は僅かな段をもって接続し、口縁部も内湾気味に外傾する。器面調整は、体部が外面斜方向ヘラケズリ、内面横方向ヘラナデ、口縁部は外面ヨコナデ、内面体部と連続する横方向ヘラ



第94図 AJ 9住居跡出土遺物

ナデである。底面は全面不定方向にヘラケズリされ中央部が軽く凹む。内面に黒色の付着物がある。胎土は砂粒が少量混じる緻密な粘土を使用し、焼成良好で硬く、淡い褐色を示す。大きさは口径 13.8 cm、底径 6.0 cm、器高 6.8 cm である。

**時期** 出土した土師器から奈良時代に位置づけられる。

(高橋)

#### AK 4 住居跡

遺物 (第 95・96 図・写真図版 35・36)

〈検出状況・重複関係〉粗掘り中に黒色土の広がりとして検出されたが、斜面に立地することから西側は流亡により不明である。縄文時代の AJ 5 住居跡と西側が重複し本住居跡が切っている。

〈規模・平面形〉東西方向は不明であるが、南北方向が 5.6 m の規模をもち、凸辺隅丸の方形か長方形を示すと推定される。

〈埋土〉5 層に細分され、色調に褐色～黒褐色まで差がみられ、上層ほど黒味が強くなる傾向

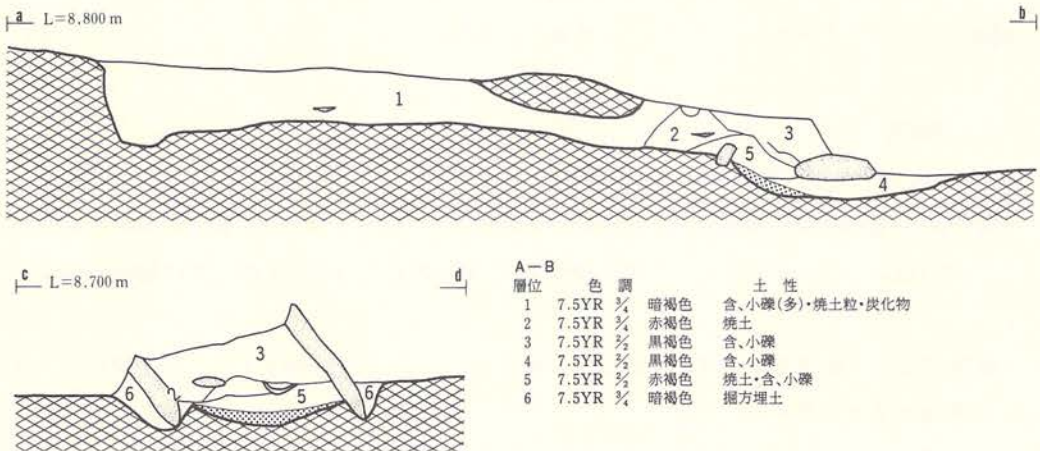
がある。全体として粘板岩細礫の混入が多く、2層は投げ込まれた焼土である。5層は壁の崩落土と考えられるが、他は斜面上位からの流れ込みによる堆積であろう。

〈壁〉壁高はもっとも高い東壁で約80 cmあり、他は西によるほど高さを減らし北壁で3.6 m西方まで遺存する。南壁はほぼ垂直に近い立ち上がりの部分もあるが、他は下位が直立状態を示し上位は湾曲して外方に開く場合が多い。南東隅部から東壁と北壁に沿う床面には幅10 cm～20 cm、深さ3 cm～6 cmの壁溝がある。

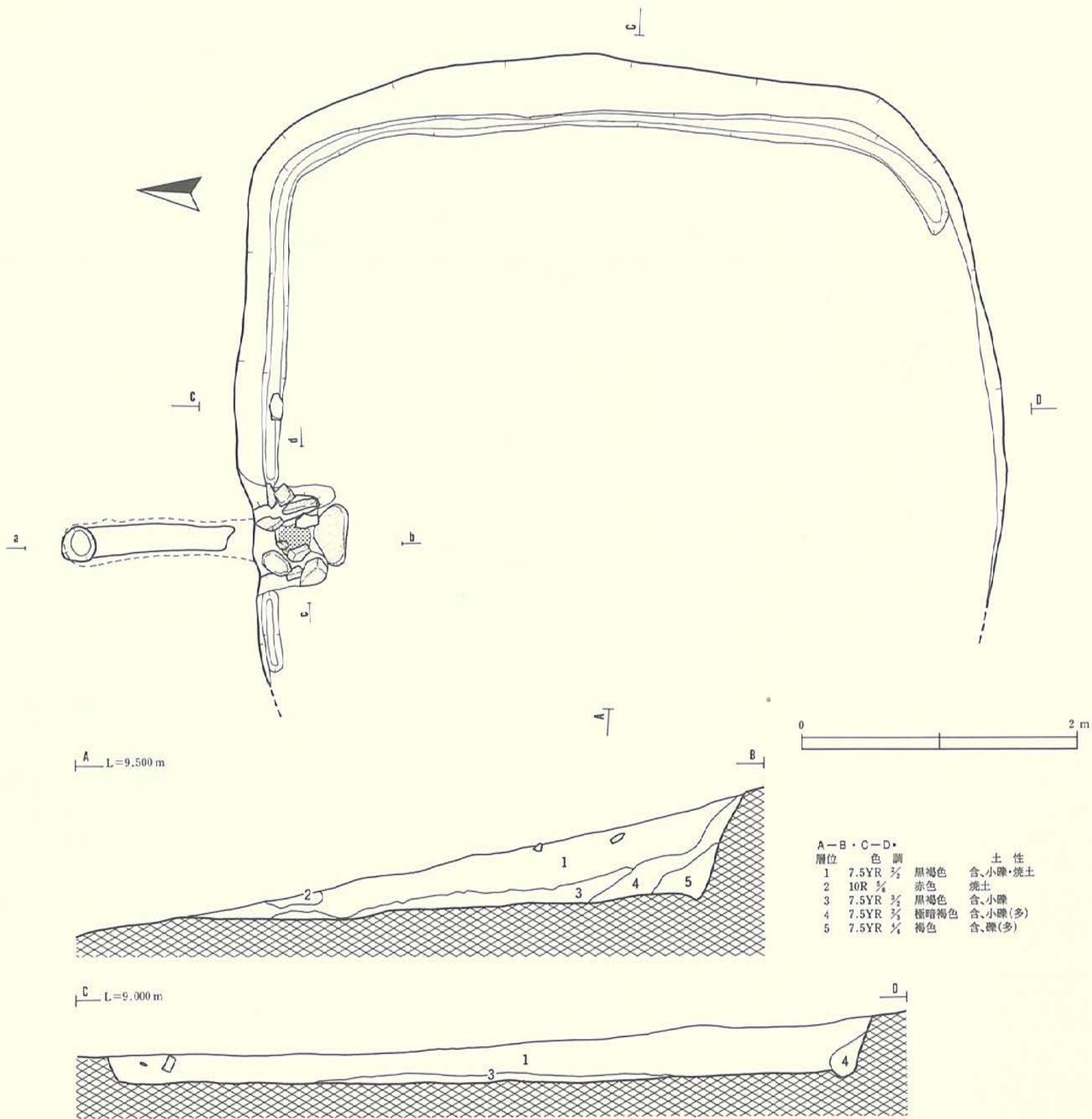
〈床面〉粘板岩の細礫が僅かに混入した黄褐色土層面で、平坦で硬く水平状態に近い。

〈柱穴〉床面から検出された柱穴はない。

〈カマド〉北東隅部から約3 m西に寄った北壁に設置される。袖部は左側・右側とも3個の礫を芯にし、その両側に褐色の粘土を貼り付けて構築し、幅70 cm、奥行45 cm、高さ21 cmの規模をもつ。焚き口部は左側に長さ25 cm、厚さ12 cm、高さ25 cm、右側が長さ26 cm、厚さ10 cm、高さ74 cmの礫が各1個立てて配置され、さらに、その上には床面に横たわる長さ45 cm、幅24 cm、厚さ14 cmの礫が載って焚き口を構築していたと推定される。焚き口部から燃焼部にかけては床面を皿状に12 cm位掘り下げられ、燃焼部の焼土は径20 cmの円形に約3 cmの層厚で支脚の前まで分布する。支脚は4 cm×3 cmの楕円形で7 cmの長さをもつ礫を使用し、やや前傾させて3 cmほど埋めている。奥壁は煙道の基部底面まで緩く傾斜して立ち上がり、支脚は煙道部との境に位置する。燃焼部の天井は残っていない。煙道部は幅25 cm、深さ15 cm位の溝状をなして160 cm屋外に延び、煙出し部は径30 cmの円形で底面より約10 cm低い土坑状を示す。煙道基部に天井が残っていることから、割り貫きによって構築された煙道であろう。埋土は7層に細分される。1層は煙道部のみに観察される暗褐色土で、風化礫や焼土粒・炭化物粒が混入する。3層は住居跡部の埋土1層と共通する。2層と5層は天井の崩落起源と推定され



第95図 AK4住居跡(1)



第96図 AK 4 住居跡(2)

る赤褐色の焼土である。4層は3層とほぼ共通することから焼き口部天井の礫が落下以前に堆積した土と考えられる。6層は燃焼部焼土である。7層は袖部の礫を埋設した際に埋め戻した土である。

遺物（第97図・写真図版79・80）

土師器・土製品・鉄製品が出土している。

〈土師器〉(418~422)完形となる個体は含まず、418が口縁部~底部までの約1/2を残存する。他は破片の出土である。出土層位と地点は、418が北壁のカマド東側の壁溝付近から出土した以外はいずれも埋土内からの出土である。器種はすべて甕であるが大小みられる。いずれもロクロ未使用による成形である。

甕(419~422) 419は口縁部~体部下位、420・421は口縁部~体部上位、422は体部下位を残す破片で、419・421は418の器形に近似する。419・421は体部最大径を最上位にもち、頸部に明瞭な段や沈線のない器形を示し、体部下位に向って次第に窄んで底部に接続する。口縁部は僅かに外傾する。器面調整は、体部表面がヘラケズリ(419・421)やヘラナデ(421)で口縁部にヨコナデの痕跡を残す。内部は全面が縦または横方向のヘラナデである。419の大きさは、口縁部径26.5cm位、底部径不明、器高22cm以上であるが、421は不明である。胎土は砂粒が多く混入した粗い土を使用しているが、焼成は良好で硬く、色調は419が黒斑のある淡い褐色、421はやや黒味があった褐色である。420は口頸部のみの残存であるため体部の器形は不明であるが、頸部で窄んだ後口縁部が直線的に外傾する器形を示すらしい。また、口縁部下位の外面には2箇所1mm位の段をもち、さらに上位内面の器厚を薄くした後端部を僅かに肥厚させ、口唇は両角を丸くするが平らになで全体がやや角張る。器面調整は口縁部は内外面ともヨコナデを基調とし、その下位は縦・横のヘラナデである。胎土はやや多目の砂粒が混入した緻密な粘土を使用し、焼成良く堅固であるが、外面は二次焼成によってやや脆い。色調は内面が黒斑がある褐色、外面が淡一明黄褐色である。大きさは不明である。

小型甕(418)口縁端部に最大径をもち、頸部に段や沈線を付さない器形を示し、体部は次第に窄んで下位に移行して底部に接続し、底部は一部が周辺部に突出する。口縁部は次第に薄くなって端部に移行し、内削ぎされて外反し口唇は小さく丸くおさまる。胎土は他の甕と大同小異で、焼成は良好である。色調は一部に黒斑をもつがほぼ褐色を示す。口径15cm、底径7.4cm、器高15.6cmの大きさである。

〈土製品〉(423)端部を欠失し残存長12.5cm、最大径9cm、柱状部最大径7cmの大きさをもつ支脚である。現存する端部を太くし、柱状部を細く作り、中心部に径2.5cmの円孔が貫通する。表面の調整が粗雑で、粘土を芯棒に貼り付け手で握って形を整えただけの可能性がある。胎土には砂粒の混入がみられるものの緻密な粘土を使用し、焼成は良好である。色調も二次的

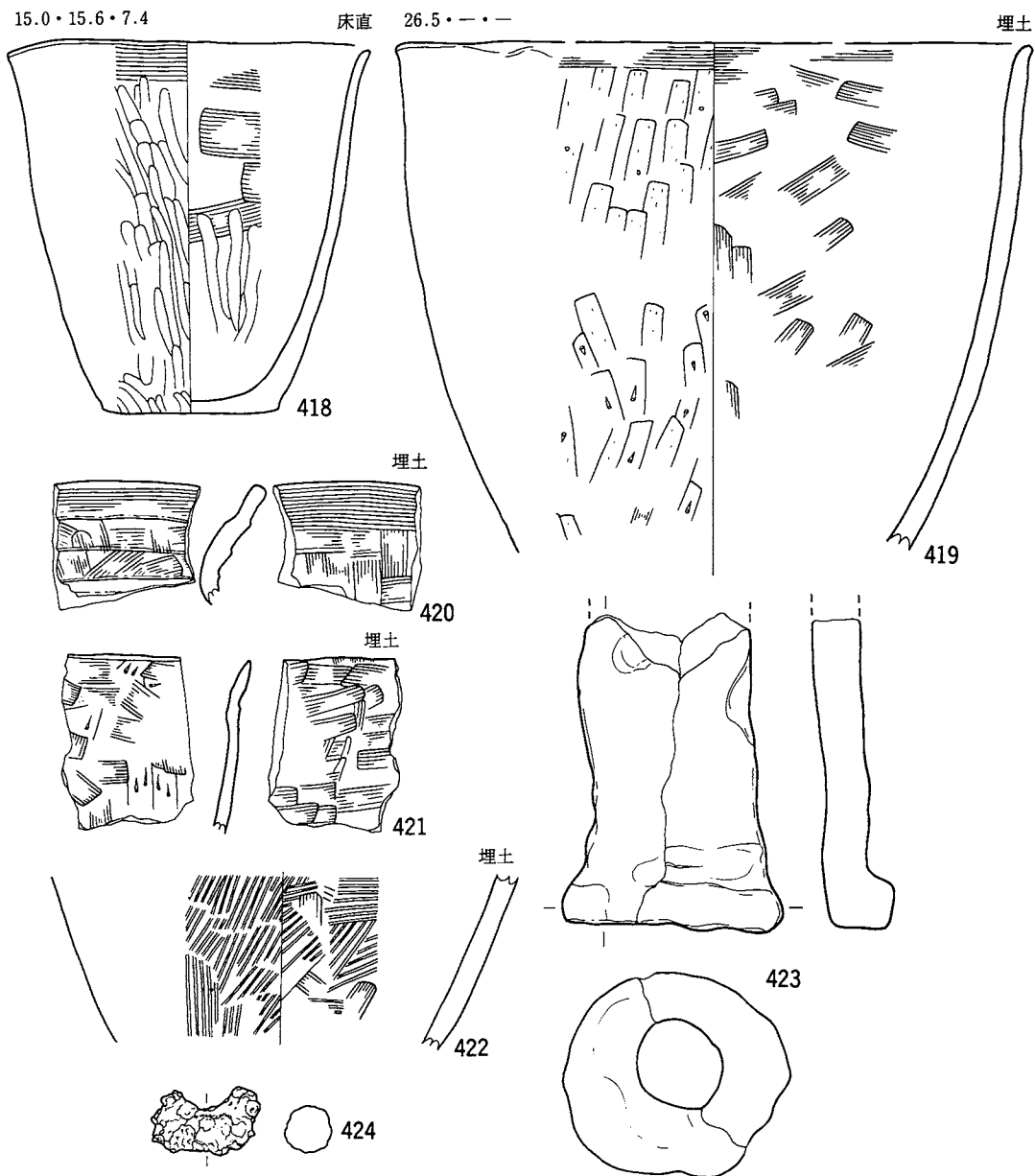
な火熱によって淡く明るい赤褐色～橙褐色を示す。

〈鉄製品〉(424)断面が丸形で平面が弧状を示すが、器種名は不明である。全長 2.5 cm、径 1.2 cm、重さ 13.35 g の大きさを示す。

このほかに鉄滓が 2 個出土している。(写真図版—g・h) 重量は g が 20 g、h が 283 g である。

時期 出土した土師器から奈良時代に属する。

(高橋)



第 97 図 AK 4 住居跡出土遺物

## (2) 住居跡状遺構

### AH 6 住居跡状遺構

遺構 (第 99 図・写真図版 37)

〈検出状況・重複関係〉 黒色土が円弧を描くように広がる土層変化として検出された。西側は自然傾斜面に延びるため遺存しないが、北側は AI 7 住居跡状遺構を削平している。

〈規模・平面形〉 東西は不明であるが、南北は 3.7 m の規模をもち、平面形は歪みの強い円弧状を描くことから、本来は円形か楕円形を示すと推定される。

〈埋土〉 黒色土・暗褐色土・明褐色土の 3 層からなり、いずれの層にも小礫が混入し、しまりなく軟かい。

〈壁〉 北壁はほぼ垂直に近い立ち上がりを示すが、東壁と南壁は外傾し、やや不規則で起伏がある。しまり良く硬い。

〈床面〉 褐色土面を床面とししまり良く硬いが、やや凹凸があり全体が擂鉢に近い断面形を示す。断面形を重視すれば住居跡状遺構とするには問題がある。

〈柱穴〉 未検出である。

〈炉〉 検出されていない。

出土遺物はない。

時期 特定資料はないが古代以降であろう。

(高橋)

### AI 7 住居跡状遺構

遺構 (第 99 図・写真図版 37)

〈検出状況・重複関係〉 AJ 6・AJ 7・AH 6 住居跡状遺構群の黒色土の広がりとして検出され、精査中にその存在が確認された。西側は自然傾斜による流亡によって遺存しないが、南側は AH 6 住居跡状遺構、北側は AJ 7 住居跡状遺構と重複し両遺構の削平を受けている。また、北東部は AJ 6 住居跡状遺構を削平している。

〈規模・平面形〉 検出された規模は東西 1.3 m、南北 2.7 m で、平面形は定かでないが東壁が直線的であることから方形か長方形を示すと推定される。

〈埋土〉 小礫を多く含む黒色土の単層からなり、他と大きな差はみられない。

〈壁〉 ほぼ垂直な立ち上がりを示し、凹凸もなくほぼ平滑である。

〈床面〉 褐色土面を床面とし、平坦でしまり良くかたい。

〈柱穴〉 未検出である。

〈炉〉 検出されていない。

出土遺物はない。

時期 重複関係から奈良時代と推定される。

(高橋)

### AJ 6 住居跡状遺構

遺構 (第 99 図・写真図版 38)

〈検出状況・重複関係〉 AH 6・AI 7・AJ 6・AJ 7 各住居跡状遺構群の黒褐色土の広がりとして検出され、精査によってその存在が確認された。西側の南寄りでは AI 7 住居跡状遺構、同北寄りで AJ 6 住居跡状遺構と重複し、本遺構が最も古い。西に向う斜面に立地することと他遺構との重複によってほとんどが削平され、残っているのは東側僅かの部分である。

〈規模・平面形〉 東西 1.2 m 以上、南北 3.8 m の規模をもち、平面形は隅丸方形か隅丸長方形を示すと推定される。

〈埋土〉 小礫が混入した黒色土・褐色土・明褐色土の 4 層に細分される。いずれも良くしまり硬い。

〈壁〉 最も高い東壁で 30 cm を示し、他は西に寄るほど低くなり西壁と南・北壁の西壁寄りとは不明である。残存する壁はいずれも外傾する。

〈床面〉 若干の小礫が混入した明褐色土で構築され、小凹凸がみられるもののほぼ水平に近く、しまり良く硬い。また、東壁南半分には幅 30 cm～10 cm、高さ 10 cm の高い床が付随する。

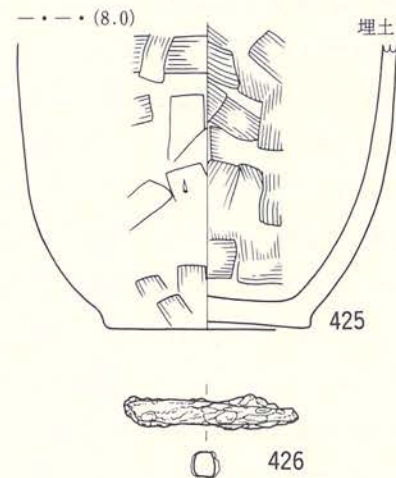
〈柱穴〉 東壁際床面ほぼ中央に 35 cm×20 cm の長方形を示し、床面からの深さ 55 cm の柱穴状土坑が検出されている。おそらく本遺構の支柱穴を構成する一部であろう。また、AJ 7 住居跡状遺構の南西隅部床面～壁に掘られた 45 cm×25 cm の長方形で 35 cm の深さをもつ柱穴状土坑は、本遺構の柱穴と直線で結ぶと東壁とほぼ直交することと規模・形状も近似することから、本遺構の支柱穴を構成する柱穴と推定される。

〈炉〉 南壁寄りの AJ 7 住居跡状遺構南東隅部付近の床面に南西―北東に長軸をもち 60 cm×40 cm の広がりを示し、層厚 3 cm の現地性焼土が検出されている。カマドとするには壁から離れすぎているとともに袖部や煙道部が検出されないことから否定され、炉跡と推定される。

遺物 (第 98 図、写真図版 80)

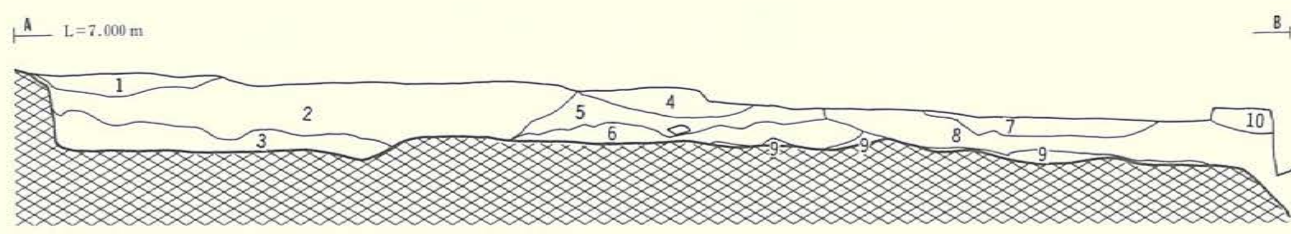
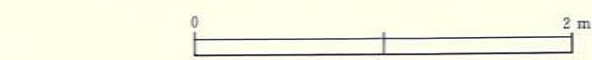
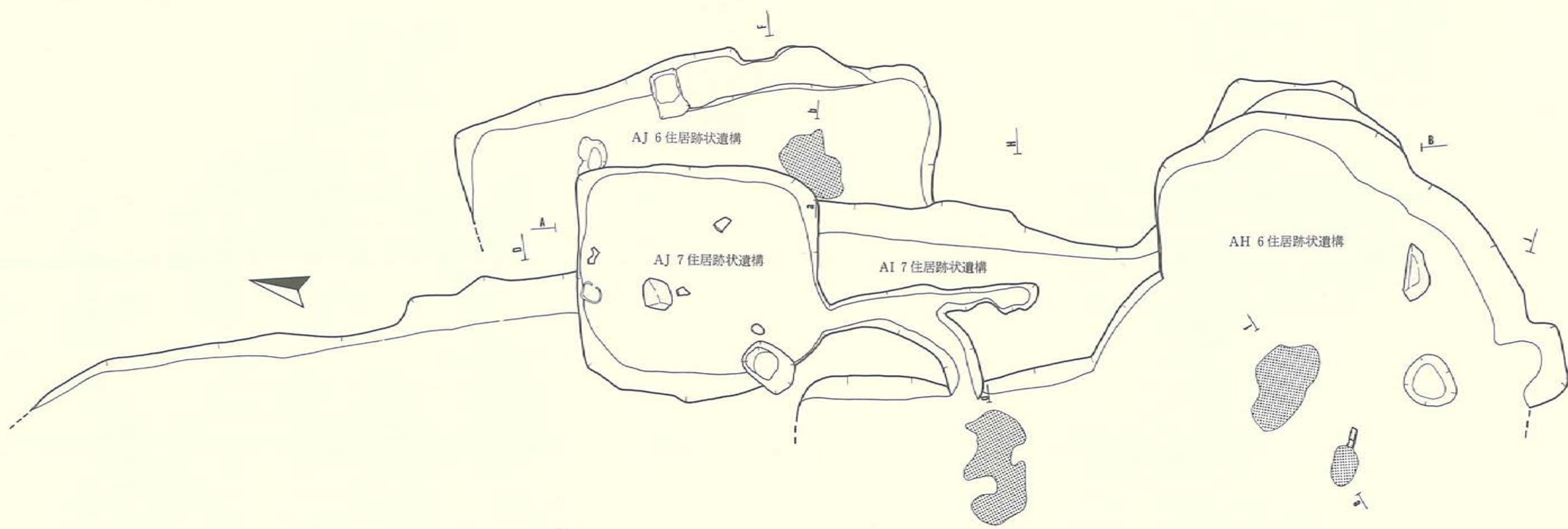
土師器と鉄製品が出土している。

〈土師器〉 (425) AJ 7 住居跡状遺構寄りの埋土内



第 98 図 AJ 6 住居跡状遺構出土遺物





**A-B**

層位	色調	土性
1	7.5YR 2/1 暗褐色	含、小礫
2	7.5YR 2/1 黑色	含、小礫
3	7.5YR 2/1 暗褐色	含、小礫(多)
4	7.5YR 2/1 黑褐色	含、小礫(多)
5	7.5YR 2/1 褐色	含、小礫
6	7.5YR 2/1 黑褐色	含、小礫
7	7.5YR 2/1 褐色	含、小礫
8	7.5YR 2/1 暗褐色	含、小礫(多)
9	7.5YR 2/1 暗褐色	含、小礫
10	7.5YR 2/1 明褐色	含、礫

**C-D**

層位	色調	土性
1	7.5YR 2/1 黑色	含、小礫
2	7.5YR 2/1 黑褐色	含、小礫(多)

**E-F**

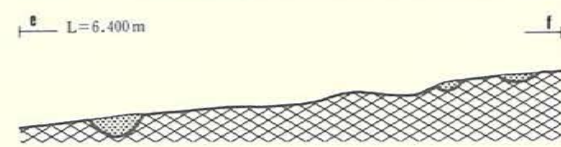
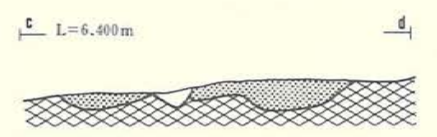
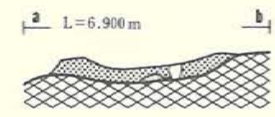
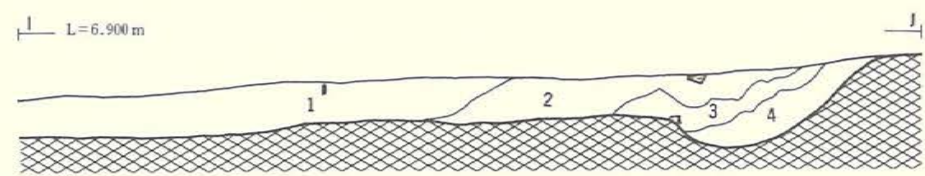
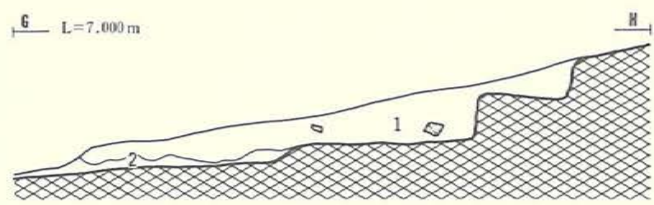
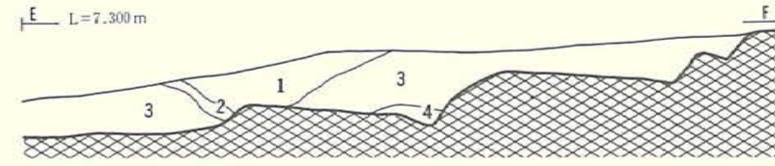
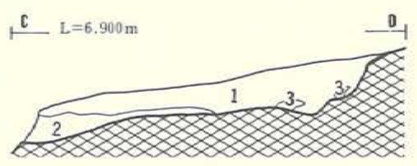
層位	色調	土性
1	7.5YR 2/1 褐色	含、小礫
2	7.5YR 2/1 明褐色	含、小礫
3	7.5YR 2/1 黑色	含、小礫
4	7.5YR 2/1 暗褐色	含、小礫(多)

**G-H**

層位	色調	土性
1	7.5YR 2/1 黑色	含、小礫
2	7.5YR 2/1 黑褐色	含、小礫(多)

**I-J**

層位	色調	土性
1	7.5YR 2/1 黑色	含、小礫
2	7.5YR 2/1 明褐色	含、礫
3	7.5YR 2/1 黑褐色	含、小礫(多)
4	7.5YR 2/1 暗褐色	含、小礫(多)



第99图 AH 5 · AI 7 · AJ 6 · AJ 7 住居跡状遺構

からロクロ未使用成形の甕が1点出土している。

甕(425) 上半分は欠失のため不明であるが、体部最大径を体部上位か中位にもつ下膨れ形を示し、下位が強く窄んで底部と接続する。底部の周辺部は直立気味を示し、底面は中央に向けて凹むがヘラで撫でられている。器面調整は、外面は縦や横方向の一部ヘラケズリ、一部ヘラナデで仕上げられ、内面は不定方向のヘラナデである。胎土は砂粒や金雲母・石英を混ぜた緻密な粘土を使用し、焼成は良好で硬い。色調は一部に黒斑をもつがやや淡い黄褐色を示す。大きさは、口径不明、底径 8.0 cm、器高 14 cm 以上である。

〈鉄製品〉(426) 断面が凸凹隅丸方形で一端が尖る形を示すものが1点埋土内から出土している。大きさは径 5~6 mm、長さ 4.6 cm、重さ 5.5 g で、器形から推定して釘の一部先端部分と考えられる。

時期 出土した土師器から奈良時代であろう。

(高橋)

## AJ 7 住居跡状遺構

### 遺構 (第 99 図・写真図版 39)

〈検出状況・重複関係〉粗掘り時に AI 7~AJ 7 付近に黒色土~黒褐色土の広がりとして検出され、その精査中に他遺構と重複する形で確認された。東側で AJ 6 住居跡状遺構、南側が AI 5 住居跡状遺構と重複し、そのいずれの遺構より新しい。

〈規模・平面形〉東西 1.8 m、南北 1.85 m の規模をもち、平面形は隅丸の方形を示す。

〈埋土〉小礫が多量に混入した黒色土と暗褐色土が堆積し、中層の黒色土を上・下層の暗褐色土が挟む形で堆積し 3 層に分けられる。3 層には若干の粘性があるほか 1 層には砂礫層に等しい小礫の混入がみられ、しまりが良い。

〈壁〉最も高い東壁で 40 cm あるが、斜面下位の西に寄るほど低くなり西壁では 5 cm 位である。西壁以外は垂直に近い立ち上がりを示す部分が多いものの、ほかは外傾する。凹凸はほとんどみられず平滑である。

〈床面〉凹凸もなくほぼ平坦で水平状態に近く、良くしまり硬い。

〈柱穴〉南西隅部の床面~壁に位置する柱穴状土坑は AJ 6 住居跡状遺構に付随すると推定されることから、本遺構では触れない。

〈炉〉未検出である。

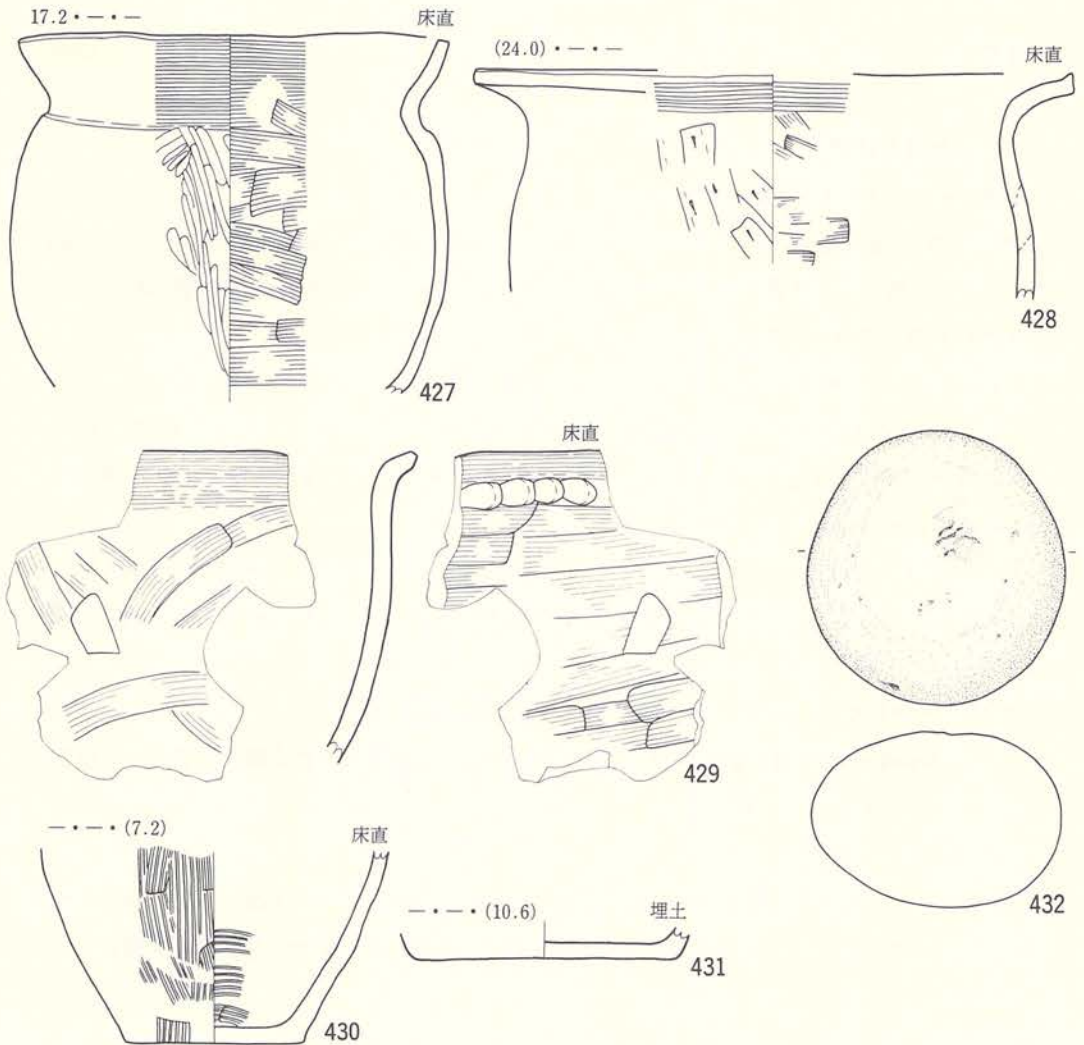
〈附属施設〉南壁の南西隅部寄りに幅 30 cm~25 cm、深さ 10 cm~5 cm の溝が南壁外へ 70 cm 延びた後丸く湾曲し、さらに西へ 70 cm 位延びる。検出状況や埋土から本遺構に関わりをもつと推定される。

遺物 (第 100 図・写真図版 80)

東壁寄りと北壁寄りの床面から土師器と縄文土器、南西隅部寄りの床面から縄文時代の遺物と考えられる石器が出土している。

〈土師器〉(427~430)いずれも甕であるが、427 が体部下位から底部を欠失するが他の個体は一部を残す破片である。428 はロクロ使用成形の可能性をもつが、他は未使用である。

甕(427~430) 427 は体部最大径を中位にもつ球状に近い形を示し、体部と頸部の境に明瞭な段を付す。口縁部は強く外傾するが中~上位は軽く内湾して口唇部に移行し、口唇部の両隅部は丸味をもつが平らに撫でられる。428 は体部最大径を上位か中位にもち、頸部は無段で口縁部は大きく外反する。口唇部は垂直にナデられ上方に軽く突出する。体部下半は欠失のため不明



第 100 図 AJ 7 住居跡状遺構出土遺物

である。429 は体部上位に体部最大径をもち、内湾しながら底部に移行する。頸部は無段で、口縁部は短かく大きく外反する。430 は体部下位～底部を残す個体で、体部は底部から直線的に外傾し、底部の周辺部は直立状を示す。底面には木葉痕をもつが篋で軽くナデられる。器面調整は、口縁部が内外面ともヨコナデ、体部は外面がヘラミガキ（427）、ヘラナデ（429）、ヘラケズリ（428）、ハケメ（430）と個体によって差がみられる。内面はヘラナデ（427～429）、ハケメ（430）である。胎土には多少の違いはあるがいずれも砂粒・石英・雲母が混じった粘土を使用し、焼成は良く硬い。色調は橙褐色気味（428・430）、くすんだ褐色（427、429）があり、427、429、430 には黒斑をもつ。大きさは、427 が口径 17.2 cm、底径不明、器高 15 cm 以上、430 は口径不明、底径 7.2 cm、器高不明である。

〈縄文土器〉（431）3 個に割れ約 $\frac{1}{2}$ を残す底部破片が 1 点埋土内から出土している。外底が光沢を放つほど良く研磨され内面は粗雑である。体部の立ち上がりは外傾する器形らしい。胎土は多量の砂が混入した粗い土を使用し焼成は良好であるが脆い。色調は赤味のある褐色である。

〈石器〉（432）縄文時代に属すると推定される磨石が 1 点出土している。

磨石（432）一断面が扁平でほぼ円形に近い楕円の平面形を示し、磨り面を平らな両面に、さらに一部を凹み石として使用している。北上山地中生界産の半花崗岩を石材とし、最大長 10.9 cm、最大幅 10.4 cm、厚さ 7.1 cm、重さ 1080 g の大きさをもつ。

このほかに小さな鉄滓が出土した。（写真図版-i）重量は 49 g である。

時期 出土した土師器から奈良時代に属する。

（高橋）

## AL 8 住居跡状遺構

### 遺構（第 101 図・写真図版 40）

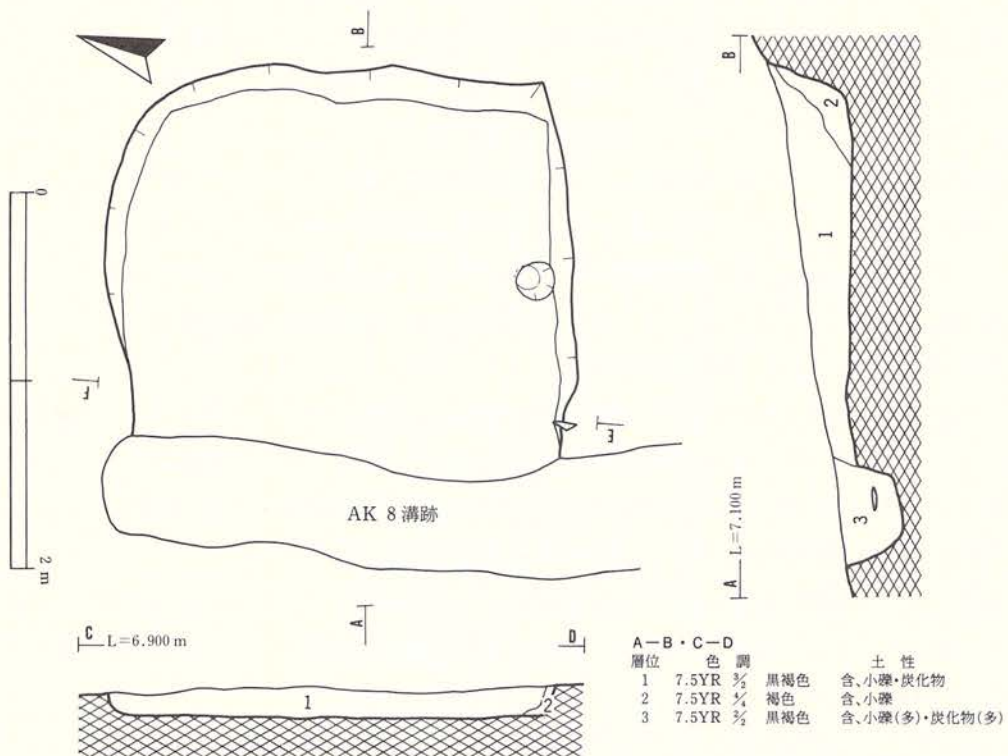
〈検出状況・重複関係〉粗掘り時に黒褐色土の広がりとして検出された。斜面下位の西側で本遺構を切って掘られた AK 8 溝跡と重複する。また、斜面下位の西壁は残っていない。

〈規模・平面形〉東西 2.1 m 以上、南北 2.5 m、壁高 0.5 m～0 m の規模をもち、平面形は方形か長方形と推定される。炉・カマドは検出されていない。

〈埋土〉黒褐色土と褐色土の 2 層から成り、両層とも多くの砂礫が混入して硬くしまり、1 層にはさらに炭化物も多く混じる。

〈壁〉壁高は最も高い東壁で 50 cm あるが、斜面下位の西に寄るほど低くなり南・北壁の西端部と西壁が流亡によって不明である。いずれの壁も若干外傾する立ち上りを示し、僅かの小凹凸がある。

〈床面〉粘板岩の小礫が多量に混じる褐色土で構築され、小凹凸がみられるもののほぼ水平状態に近く、良くしまり硬い。



第 101 図 AL 8 住居跡状遺構

〈柱穴〉 南壁際の床面に径 20 cm×20 cm、深さ 33 cm の柱穴状土坑が検出されている。おそらく本遺の柱穴を構成する一部と考えられる。

〈遺物〉 埋土から鉄滓 2 個が出土した。(写真図版 95—j・k) 重量は j が 76 g、k が 62 g である。

時期 古代以降と推定さるるが、特定できない。

(高橋)

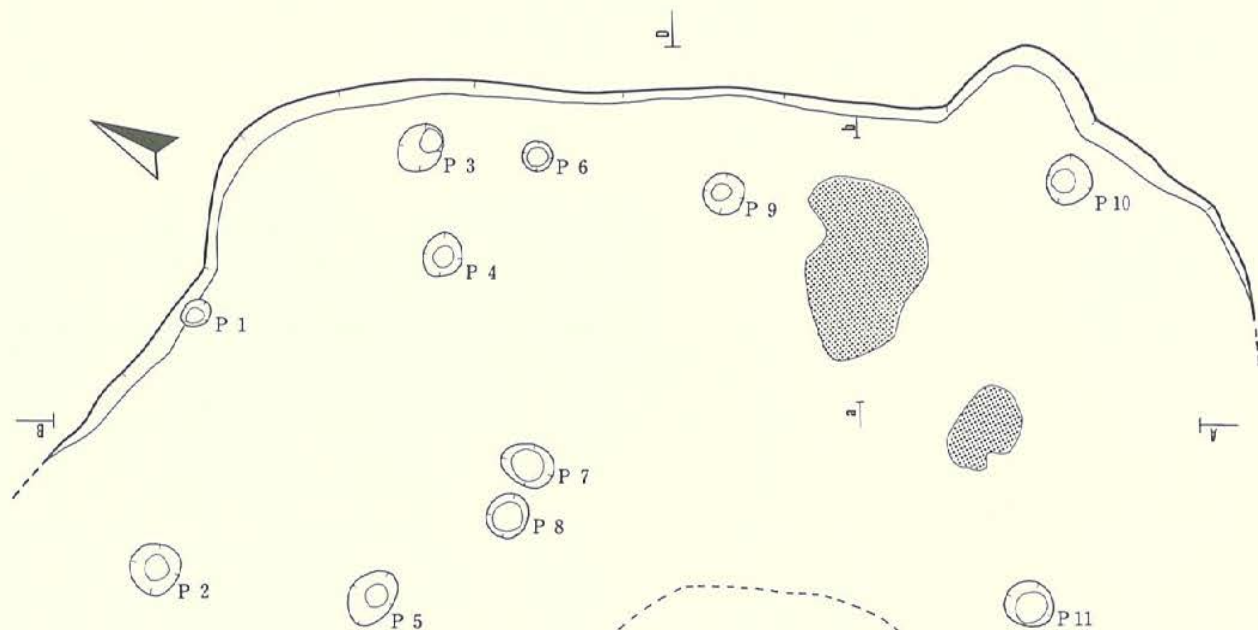
### AL 9 住居跡状遺構

遺構 (第 103 図・写真図版 41)

〈検出状況・重複関係〉 第三層面で、黒色土の広がりとして検出された。沢による削剝を受け、北東部が残存するにすぎない。

〈規模・平面形〉 残存部が少なく、詳細は不明であるが北東部は 5.4 m で、平面形は方形を基調としているものと考えられる。

〈埋土〉 炭化物・焼土ブロックを含む黒色土を主体とする。なお、層中には粘板岩の細礫が多



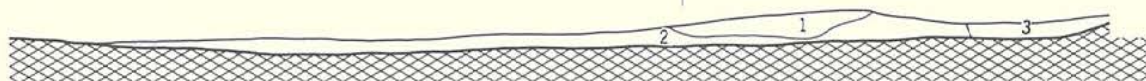
No.	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>4</sub>	P <sub>5</sub>	P <sub>6</sub>	P <sub>7</sub>	P <sub>8</sub>	P <sub>9</sub>	P <sub>10</sub>	P <sub>11</sub>
径	14×17	27×27	23×29	20×25	24×32	15×16	22×30	23×24	22×23	24×27	25×27
深	7	34	39	10	29	9	21	22	19	20	15



a L=6.400 m



A L=6.600 m



c L=6.600 m



A-B		色調	土性
層位	1	10YR 2/4 暗褐色	含、小礫(多)・焼土塊
	2	10YR 2/4 黒土	含、小礫(多)・炭化物
	3	10YR 2/4 灰黄褐色	含、小礫(多)・炭化物
C-D		色調	土性
層位	1	10YR 2/4 黒色	含、小礫(多)・炭化物
	2	10YR 2/4 褐色	含、小礫
	3	10YR 2/4 黒色	含、小礫

第103図 AL 9住居跡状遺構

量に包含される。

〈壁〉 いずれも外傾して立ち上がる。壁高は北東壁で 20~10 cm である。

〈床〉 粘板岩の細礫を含む褐色土層面で、全体に凹凸があるが硬くしまっている。

〈柱穴〉柱穴状土坑は 11 個が検出された。配置は  $P_3-P_5-P_{10}-P_{11}$  の四角形が想定されるが、明確なものではない。

〈焼土〉床面の南東部に現地性焼土が検出された。焼土層は  $98 \times 70$  cm の不整形の範囲に、最大 5 cm の厚さで形成されている。周辺部には他の施設の痕跡は認められず、性格については不明である。

〈主軸方向〉北東壁に直交する線は  $E-25^\circ-N$  を示す。

(酒井)

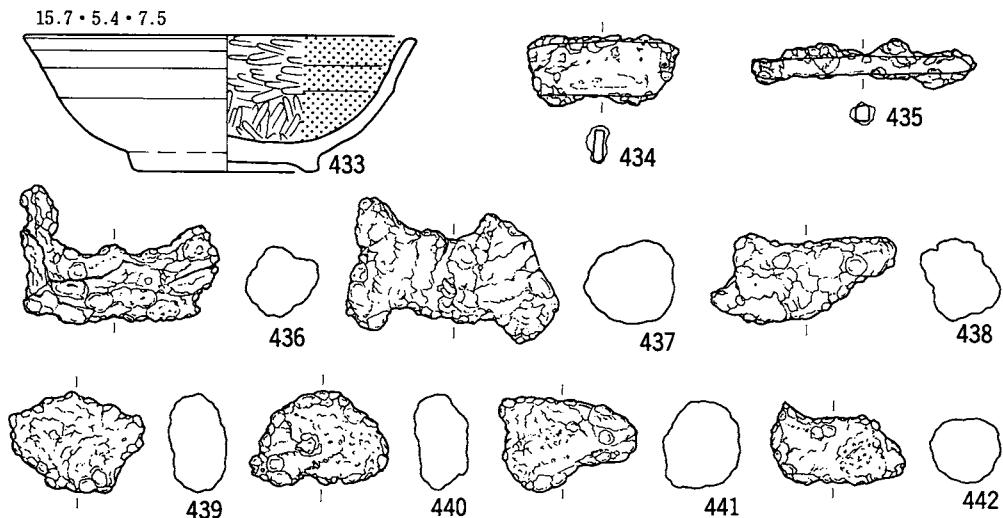
### 遺物 (第 102 図・写真図版 81)

土師器と鉄製品・鋳滓が出土している。

〈土師器〉東壁際のカマド焼土付近から坏が 1 点出土したのみである。

坏 (433) 一ロクロ成形で内面黒色処理された低い高台をもつ坏である。器形は、回転糸切りされた底部から大きく外傾した体部下位は、強く内湾して上位に移行し、端部は軽く外反する。内面は底面中央が低い円錐台形状に突出し、体部下位から強く内湾して上位に移行し、端部は僅かに削がれて外反し、口唇は丸くおさまる。高台は断面が逆台形を示し体部下端から底部の沿りに貼り付けられる。畳付けは平坦であるが、両隅は丸味をもつ。大きさは口径 15.7 cm、底径 7.3 cm、器高 5.7 cm である。

〈鉄製品〉人為的に加工されたと判断されるものが 4 点ある。器種としては角棒状 1 点、鉄板状 2 点、平鉄が L 字状に曲がるもの 1 点がある。



第 102 図 AL 9 住居跡状遺構出土遺物

角棒状(435)一断面が1辺5mm~3mmの方形を示し、長さ6cm、重さ5.7gの角棒状であるが、両端に破断面をもつことから、本来はもっと長かったと推定される。実測図の右端が左端より若干細いことから、四ツ目錐か釘の一部である可能性をもつ。

鉄板状(434・439)二点あるが439は周囲に錆の付着が多く、原形を知ることは困難である。434は長さ4cm、幅1.8cm~1.5cm、厚さ3mm~2mm、重さ6.8gの大きさを持ち、断面が軽く湾曲した平鉄状であるが、周辺の状況が不規則であることから、何かの断片であろう。439は、長さ8.2cm、幅約2cm、厚さ約4mmの鉄板状が原形と推定され、錆の付着した状態で14.8gの重さである。その他鋳滓としたなか加工品を含む可能性がある。

L字状に曲がるもの(436)一全長8.2cm、幅0.5cm、厚0.5cmの細い平鉄が約4cmのところL字状に曲がり、鋸や絞具の一部とも考えられる。重さは27.6gである。

〈鉄滓〉加工品を含む可能性をもつが錆化や石を噛み原形が不明であることから鉄滓としておくが、437・438・440~442の5点出土している。いずれも表面は凹凸が著しく形は不定であり、大きさも長さが57cm~3.6cm、幅2.7cm~1.7cm、厚さ2.4cm~1.4cm、重さ70g~19.7gと不規則である。写真図版95~も鉄滓である。重量は62gである。

時期 出土した土師器から平安時代に属する。

(高橋)

## BB 12 住居跡状遺構

### 遺構(第104図・写真図版42)

〈検出状況・重複関係〉表土を除去した段階で、黒色土の広がりとして検出された。南西部は調査区域外にかかる他、北西~北側では木根等の攪乱を多く受けている。精査の結果、整地部を伴う掘立柱式の建物跡と考えられる。

〈規模・平面形〉攪乱等により明確ではないが、整地は東西方向5m前後の範囲で、平面形は長方形を基調としているものと推定される。斜面上位での掘り込みは、25~5cmである。整地面は沢の堆積土層面で、粘板岩の巨礫から成り、凹凸が激しい。

〈埋土〉整地部の埋土は、炭化物を僅かに含む黒色~黒褐色土で、整地面には貼り床等はみられなかった。

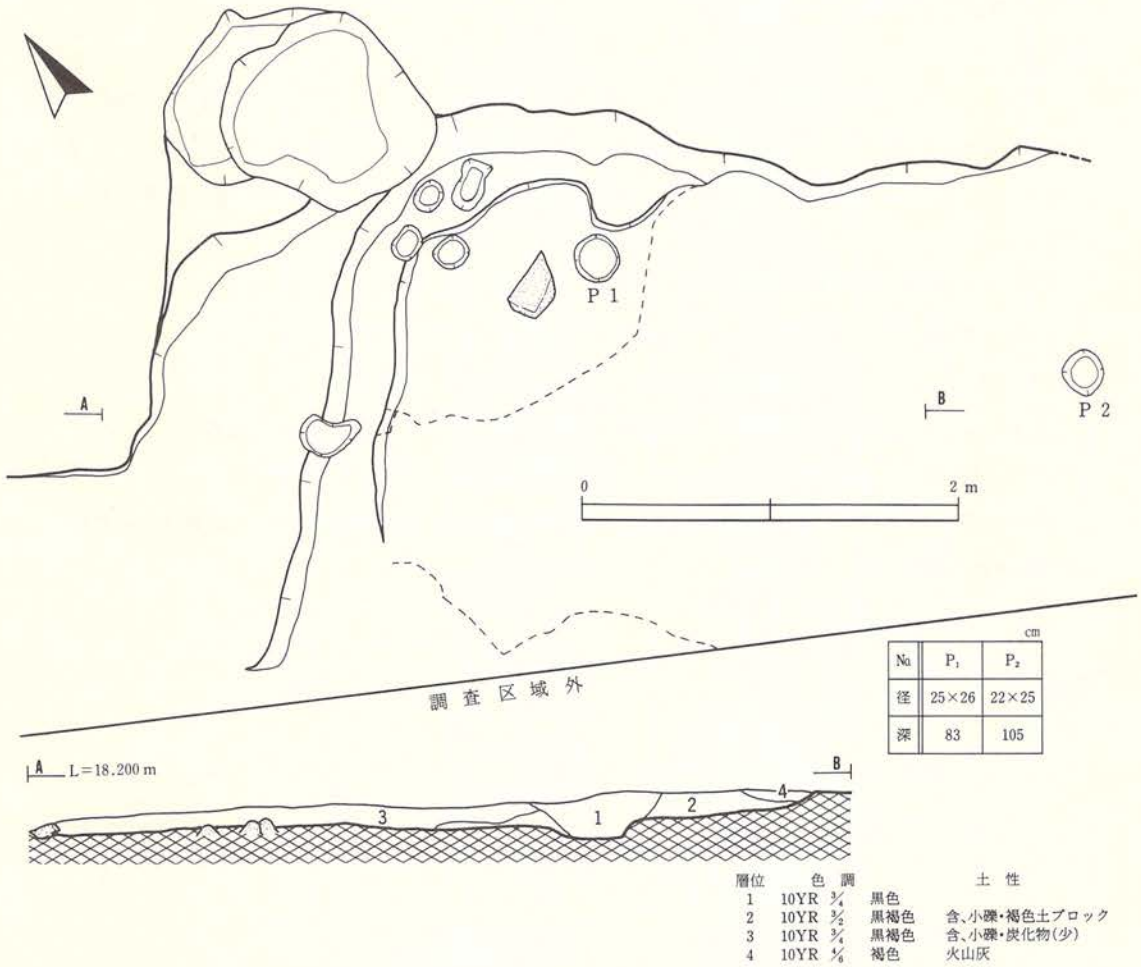
〈柱穴〉 $P_1$ ・ $P_2$ の2個が検出された。整地部の縁辺からの距離は $P_1$ が75cm、 $P_2$ が110cmで、これらの芯芯距離は2.7mである。しかし、これらに対応する柱穴は検出できなかった。

### 遺物(第105図・写真図版8)

埋土及び整地面から鉄製品と鉄滓が出土した。

〈鉄製品〉443は整地面から出土した鉄製品である。残存長4cmの円筒形を呈する。上部径は1.8cm、下部径は1cmで、下部に向かっていくぶん細くなる。中心部に径1cm、深さ3cmの孔





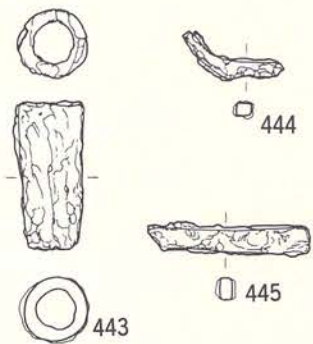
第 104 図 BB 12 住居跡状遺構

を有する。形態は石突きに類似する。これと同様の形態をもつ鉄製品がもう 1 個出土したが、調査時の不手際によって紛失してしまった。444 は断面が方形で、全体に湾曲する。445 は断面が長方形で棒状を呈する。いずれも器種は不明である。

〈鉄滓〉約 570 g が埋土から出土した。

**時期** 時期を推定しうる遺物を欠き、詳細は不明である。しかし、鉄製品・鉄滓等の出土から、この遺構の北約 10 m に位置する平安時代の工房跡に関する遺構の可能性がある。

(酒井)



第 105 図 BB 12 住居跡状遺構出土遺物

## BE 5 住居跡状遺構

遺構（第 106 図・写真図版 42・43）

〈検出状況・重複関係〉 表土を除去した段階で、黒褐色土の広がりとして検出された。北側で BF 6 住居跡、南側で BD 3 住居跡（いずれも縄文時代）の壁の一部を切っている。また、斜面下位にあたる西側は流失しているほか、所々に後世の攪乱を受けており、北東壁が検出されただけである。

〈規模・平面形〉 残存部は東西 5 m で、東西に長い長方形を呈するものと推定される。

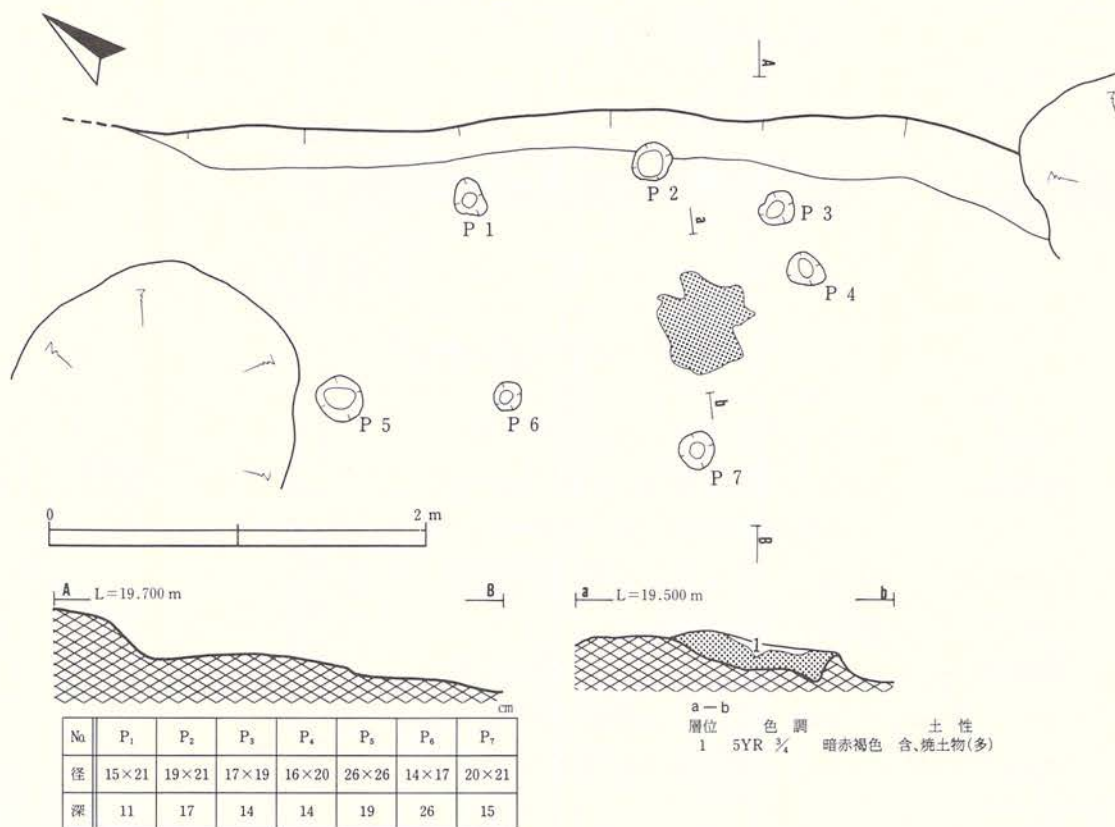
〈埋土〉 炭化物を僅かに黒褐色土の単層で、土層断面の作成は省略した。

〈壁〉 緩く外傾して立ち上がる。壁高は 15～23 cm である。

〈床面〉 粘板岩の細礫を含む褐色～黄褐色土層面で凹凸があり、あまり硬くはない。

〈柱穴〉 P<sub>1</sub>～P<sub>6</sub> の 6 個が検出されたが、柱穴配置等は不明である。

〈焼土〉 床面中央やや南側に現地性焼土が検出された。50×55 cm の範囲で、最高 8 cm の厚さで焼土層が形成されている。



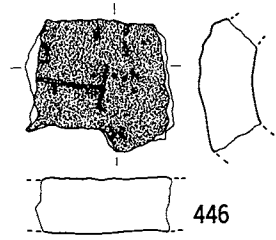
第 106 図 BE 5 住居跡状遺構

遺物 (第 108 図・写真図版 81)

446 は埋土から出土した韃の羽口の破片である。小破片のため全体の器形等は不明である。約 2 cm の厚みを持ち、器表には薄く鉄滓が付着する。

時期 時期を推定しうる遺物を欠き、詳細は不明であるが、韃の羽口が出土していることから、当遺構の西約 20 m に位置する平安時代の鍛冶工房に關係する遺構の可能性もある。

(酒井)



第107図  
BE 5 住居跡状遺構  
出土遺物

BF 12 工房跡

遺構 (第 108 図・写真図版 43~45)

〈検出状況・重複関係〉表土を除去した段階で、炭化物を多量に含む黒色土の広がりとして検出された。北側で縄文時代の BG 12 住居跡を切っている。また、斜面下位にあたる南西部は流失しているほか、南側は粗掘段階での掘りすぎのため残存状態は不良である。

〈規模・平面形〉残存部や床面の状況から、一辺 4 m 前後の隅丸方形を基調としたプランが推定される。

〈埋土〉全体に黒色土で構成されるが、上位には粘板岩の細礫、中位には炭化物・鉄滓、下位には鉄滓及びスケールが多量に含まれている。

〈壁〉緩く外傾して立ち上がる。壁高は北壁 15~30 cm、西壁 14~20 cm である。

〈床面〉明確に把握されなかった。残存する壁の周辺部で床面と考えられる硬くしまった面が検出されたが、この段階では鍛冶炉は検出できなかった。また、炉跡が検出された面は当面より 10~15 cm 下位で、この高さでは壁の周辺部は地山と考えられる粘板岩礫層となった。これらのことから、西~北東部分の床面は、炉の設置されている面より 10 cm 前後高かった可能性がある。中央部は鉄滓・スケールを含む黒色土から成り、非常に硬くしまつてゐる。この下位からは、古期の鍛冶跡と考えられる小規模な土坑が検出された。

〈鍛冶炉跡〉鍛冶炉跡と考えられる施設は 4 基検出された。上位面で検出されたものを 1 号炉、下位面で検出されたものは北側から 2~4 号炉として記述する。いずれも形態は、小規模な土坑である。

1 号炉は、床面中央やや東寄りに位置する。南側は粗掘時点での掘りすぎのため破壊されている。南西部では、炉壁の構築材と考えられる粘土質土が僅かに残存している。この残存状況や鉄滓の分布から、全体の規模・形状は長軸 1.3 m、短軸 1.1 m、深さ 25 cm で、南側に緩く立ち上がる不整楕円形が推定される。炉の主体部は北側の径 1 m 前後の範囲と考えられ、この部分

では底面は還元され青灰色を呈する。また、埋土は上位から焼けた粘土質土、炭化物を主体とする黒褐色土、焼けた粘土質土、炭化物を含む黒色土から成り、中位の粘土質土は還元を受けた部分もみられた。これらの粘土質土は、炉体の構築材である可能性が強いが、炉体の構造については把握できなかった。

底面から大型の鉄滓が2個出土した。No.1(写真図版82-e)は炉の主体部中央やや北西側で検出され、出土状況から原位置を保っているものと考えられる。No.2(写真図版83-a)は南西壁際で横立した状態で出土した。また、炉の検出時に北側の縁辺に沿って、3個の花崗岩礫が検出された。3個はそれぞれ接合し、表面には特に火熱を受けた痕跡は認められない。性格については不明であるが、平坦面をもち、石床の可能性はある。

2号炉は、床面中央やや北寄りに位置する。規模は径50cm、深さ12cmで、平面形は円形を呈する。3号炉は2号炉の南西壁に接し、規模は径60cm、深さ8cmで、平面形は円形を呈する。4号炉は3号炉の南西壁に接し、規模は径75cm、深さ16cmで、平面形は不整な円形を呈する。これらの埋土は鉄滓・スケールを多量に含む黒褐色土で構成され、特に3号炉ではこの量が多かった。いずれの埋土中にも炉体の構築土は認められず、壁面及び底面は非常に硬くしまっている。なお、3基の炉の新旧関係は明確ではない。

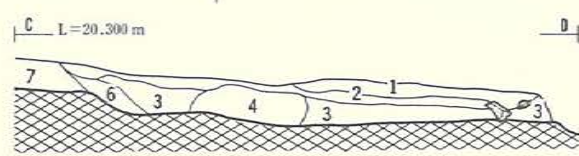
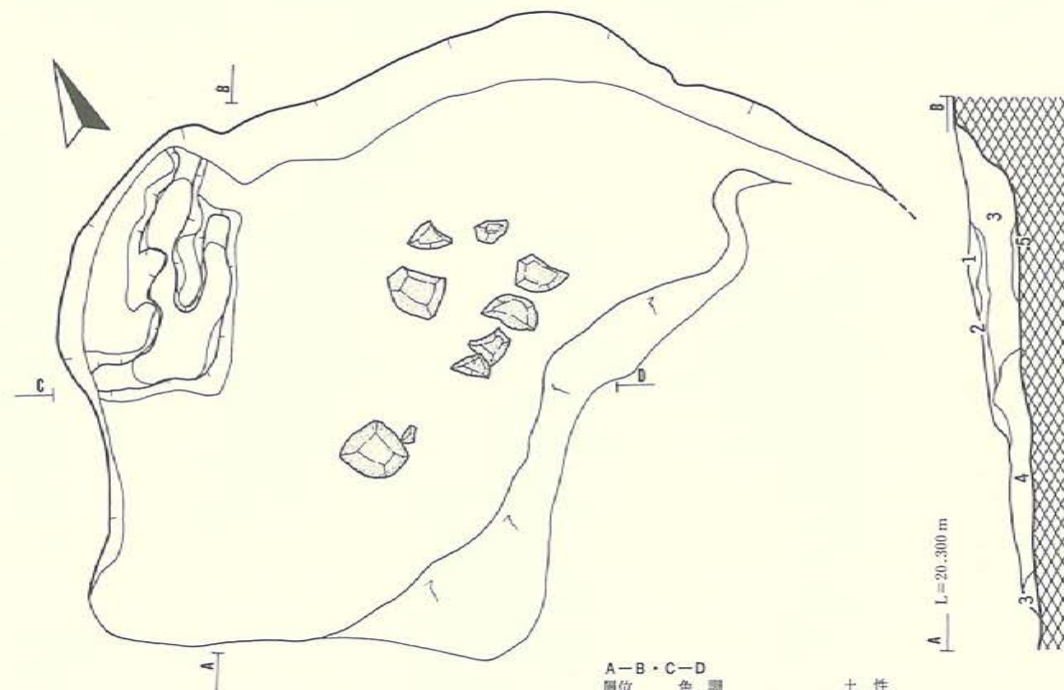
〈焼土〉北西壁際に現地性焼土が検出された。焼土は径55cmの円形の範囲に、最大7cmの厚さで形成されている。周辺には他の施設の痕跡はみられず、性格については不明である。

#### 遺物(第109・110図・写真図版81~83)

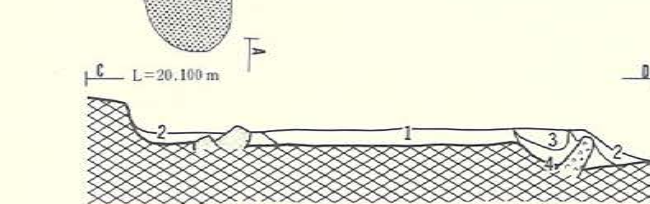
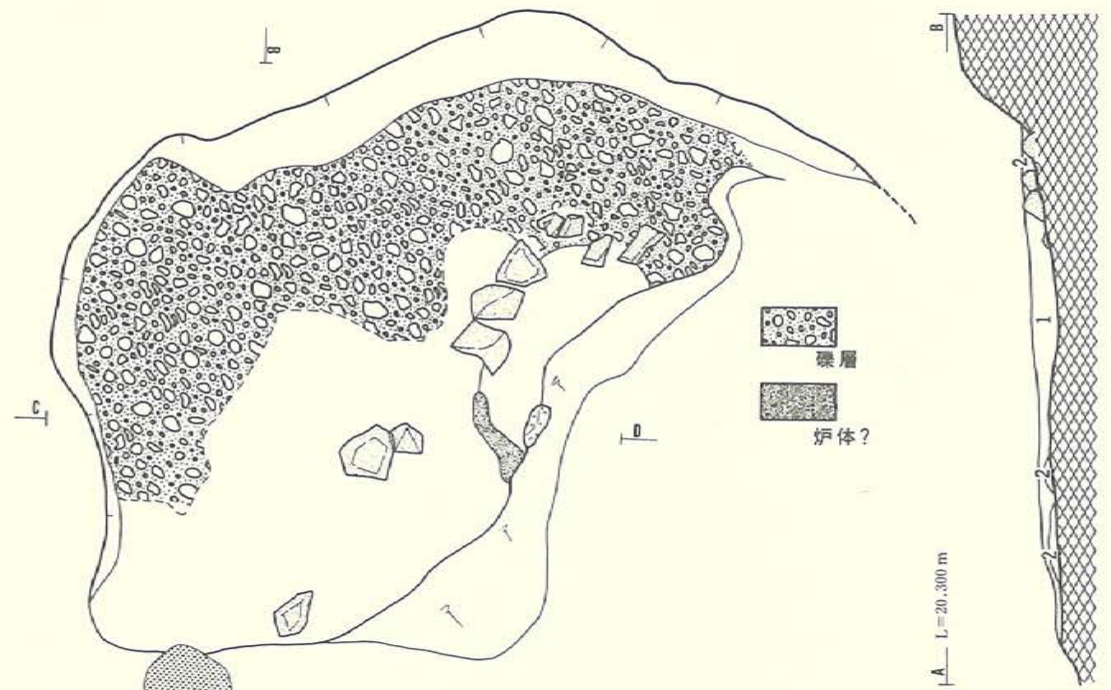
床面と埋土から土器と鉄製品・鞆の羽口が出土した。また埋土・炉内からは多量の鉄滓が出土した。

〈土器〉447は床面から出土した土師器の甕形土器の口縁部片である。体部はほぼ直立し、口縁部は短かく外傾する。口縁部外面はヨコナデ、体部は粗いヘラケズリ、内面は全体にナデ調整されている。写真図版81-aは床面出土の甕形土器の体部片で447と同一個体と考えられる。外面は粗いヘラケズリ、内面はナデ調整が施されている。

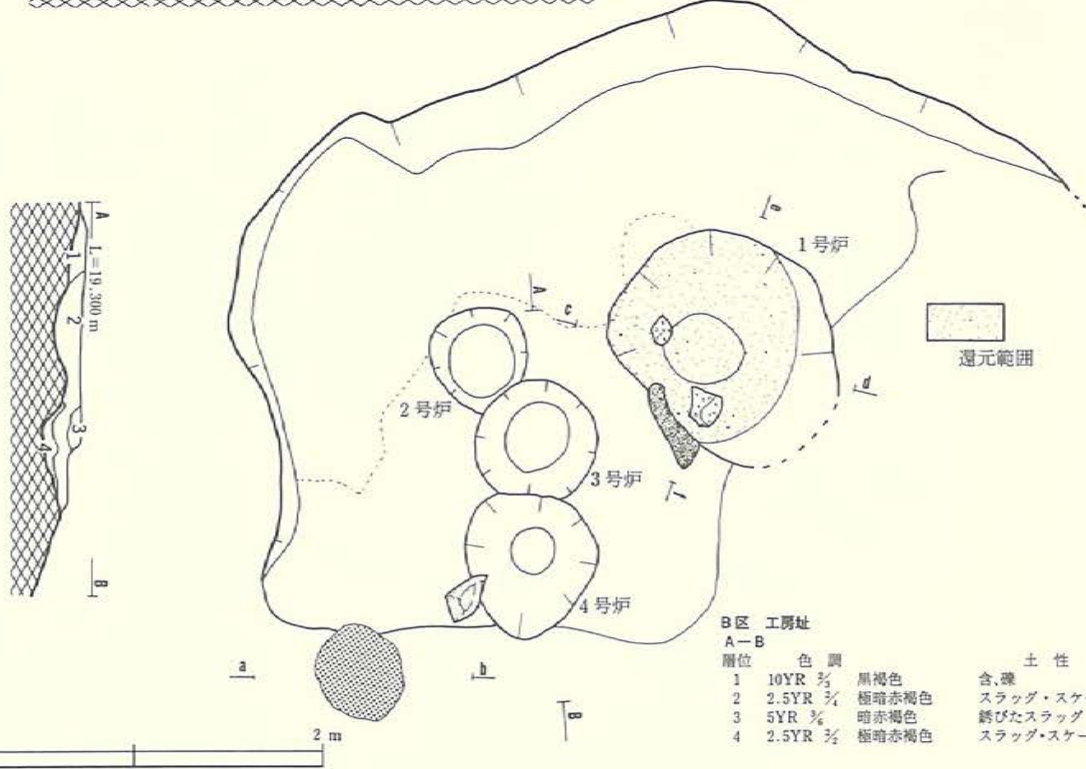
〈鉄製品〉448は断面が方形を呈す細長い棒状の鉄製品で、全体に緩く湾曲し、一端が細くなる。449は断面が扁平な長方形を呈し、一端が尖がる。450は両端をねじったような形状を呈す。両端部の断面形は扁平な長方形で、一方が縦長に、一方が横長となる。中央部の断面は方形を呈する。451は断面形が長方形を呈し、一端がやや細くなる。452は断面がL字状に屈曲する。整形されたものか破損したものかは不明である。453は断面形が扁平な長方形で、一端は茎状に細くなる。454は一方に向かって細くなる。断面は長方形を呈する。455は断面形が台形を呈する。456は断面形が長方形を呈する。457は断面がかまぼこ状を呈する。458は一端が薄くなる幅広の鉄製品である。459は断面形が不整な楕円形を呈す。表面には鉄滓が付着する。460は短かい



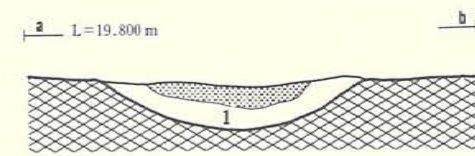
A-B · C-D		土性	
層位	色調		
1	10YR 2/2	黒褐色	含、小礫(多)
2	10YR 1/2	黒色	含、木炭
3	10YR 2/2	黒色	含、炭化物・スラッグ・焼土粒(少)
4	10YR 2/2	黒色	含、炭化物・スラッグ(多)
5	5YR 2/2	赤褐色	含、汚れた焼土ブロック
6	10YR 2/2	暗褐色	含、礫・焼土ブロック・炭化物
7	10YR 2/2	暗褐色	



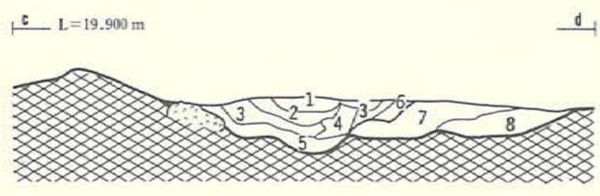
A-B · C-D		土性	
層位	色調		
1	10YR 2/2	黒色	含、炭化物・スラッグ(多)
2	10YR 2/2	黒褐色	含、小礫
3	10YR 2/2	黒褐色	含、炭化物・スラッグ
4	10YR 1/2	黒色	含、炭化物(多)



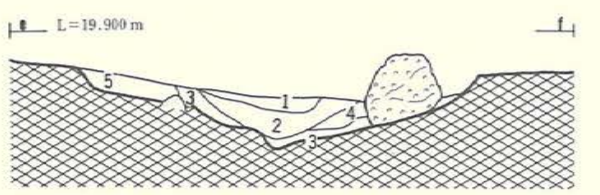
B区 工房址		土性	
層位	色調		
1	10YR 2/2	黒褐色	含、礫
2	2.5YR 2/2	極暗赤褐色	スラッグ・スケール
3	5YR 2/2	暗赤褐色	錆びたスラッグ
4	2.5YR 2/2	極暗赤褐色	スラッグ・スケール



a-b		土性	
層位	色調		
1	1.5YR 2/2	暗赤褐色	含、小礫

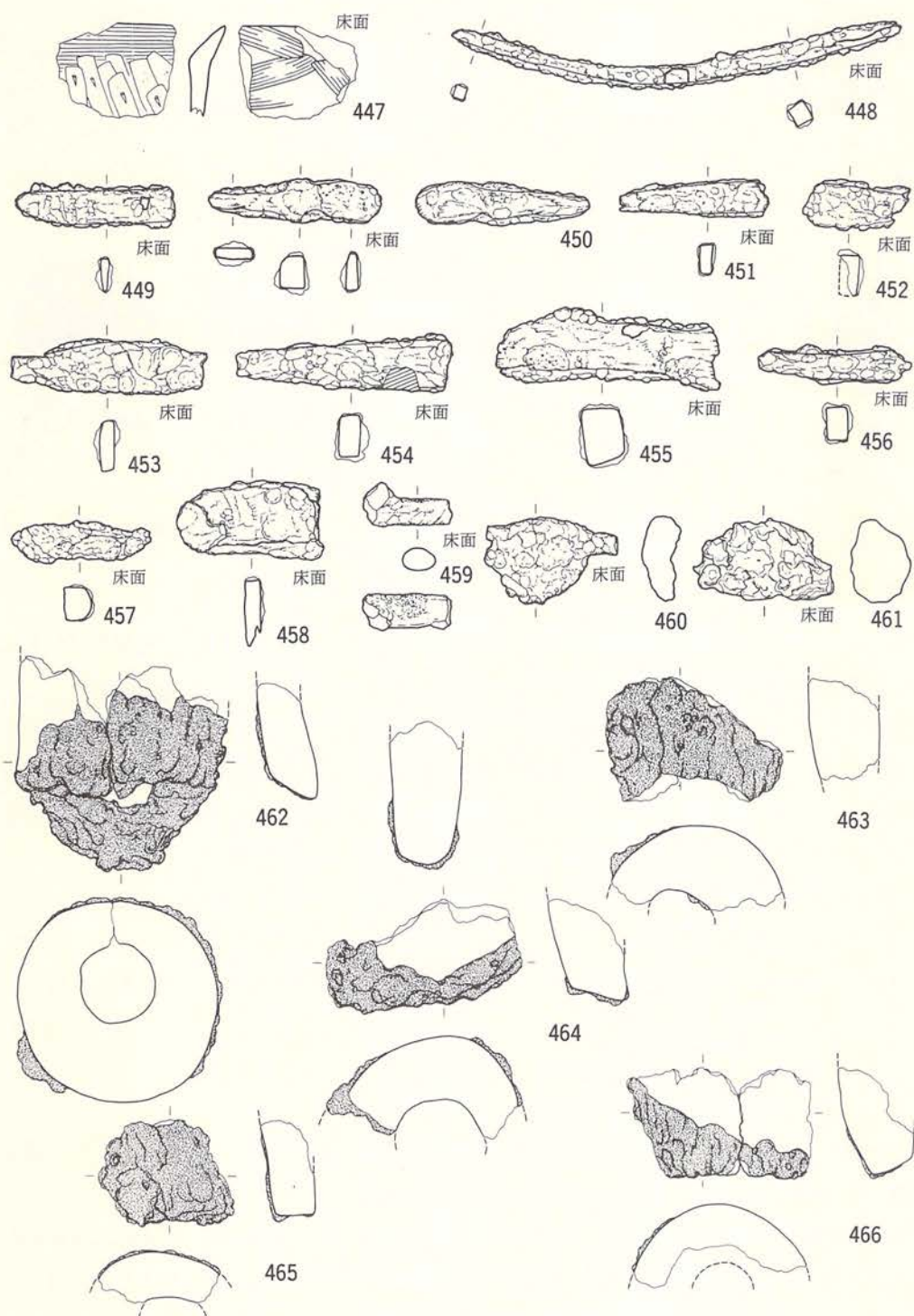


c-d		土性	
層位	色調		
1	10YR 2/2	にぶい褐色	含、炭化物
2	10YR 2/2	黒褐色	炭化物主体
3	10YR 2/2	灰黄褐色	含、炭化物・焼土粒・鉄滓
4	25YR 2/2	暗オリーブ褐色	含、炭化物・焼土ブロック
5	10YR 2/2	黒色	含、炭化物・鉄滓・焼土粒
6	25YR 2/2	赤褐色	含、焼土ブロック
7	5YR 2/2	にぶい赤褐色	地山
8			

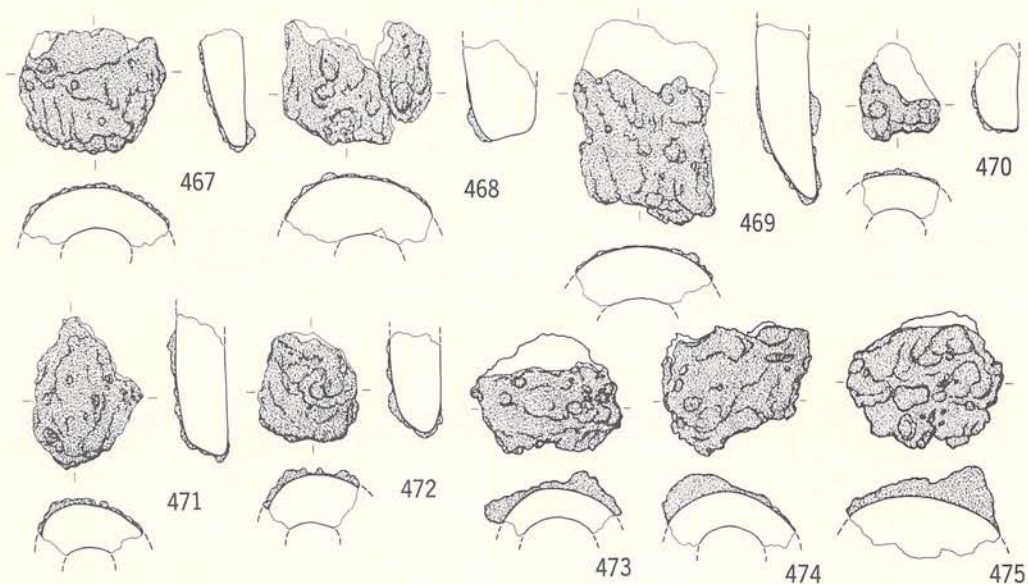


e-f		土性	
層位	色調		
1	10YR 2/2	にぶい黄褐色	含、炭化物(少)
2	10YR 2/2	黒褐色	炭化物主体・含、鉄滓
3	10YR 2/2	黒色	含、炭化物・鉄滓・焼土
4	10YR 2/2	黒褐色	含、炭化物・鉄滓片(多)
5	10YR 2/2	黒褐色	含、小礫・炭化物

第108図 BF 12 工房跡



第 109 图 BF 12 工房跡出土遺物(1)



第 110 図 BF 12 工房跡出土遺物(2)

棒状の部分に円形で扁平な部分が付くが、これが錆化によってできたものか、整形されたものかは不明である。461 は鉄塊と考えられる。

〈轆の羽口〉埋土や床面から多数出土したが、完形品は 1 点もない。先端部が残存する 462～475 の 14 点を実測掲載した。462 はほぼ全周が残存する。最大径は約 9 cm で、径 3 cm の通風孔を有する。先端部は斜めとなり、多量の鉄滓が付着する。胎土は緻密な粘土で、石英状の白い砂状の物質を含む。他の 13 個も器面には多量の鉄滓が付着している。

〈鉄滓〉埋土・炉内から出土した総量は 35,445 g である。炉内出土の No.1 は 2,330 g、No.2 は 1,770 g である。

時期 床面から出土した土師器片の特徴から、この工房跡は平安時代の遺構と考えられる。

(酒井)

### (3) 土 坑

#### AC 7 土坑 (第 111 図・写真図版 46)

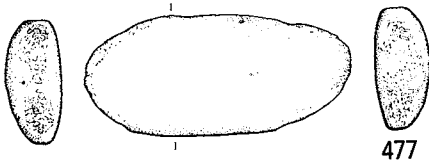
〈検出状況・重複関係〉平安時代の AB 6 住居跡の精査中に土層変化として検出された。新旧関係は埋土や検出面の違いから、本土坑の方が新しい。

〈規模・形態〉開口部径 1 m×1 m、底部径 0.9 m×0.85 m、深さ 0.7 m～0.6 m の規模をもち、平面形は円形、断面形はピーカー形を示す。底面は平坦であるが全体が軟かく、周辺部に向かって次第に高くなり、壁とは僅かな丸味をもって接続する。

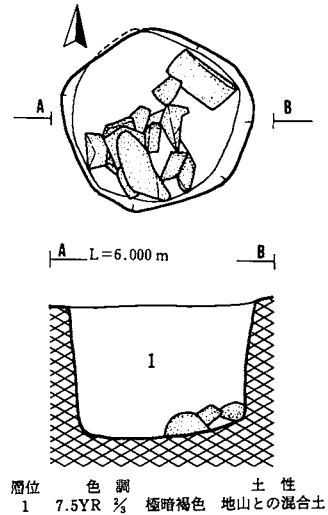
〈埋土〉褐色の地山粒と混合した極暗褐色土の単層で、しまりなく軟弱である。南壁沿いの最下位には粒径 40 cm×16 cm～15 cm×8 cm の礫が 15 個ほど山積みされたような状況で検出されたが、人為的ではあるが何んらかの意図をもって積み上げられた状況とするには乱雑である。

〈遺物〉埋土内から縄文時代に属する敲石的な石器が 1 点 (477) 出土している。最大長 10.7 cm、最大幅 4.8 cm と細長く厚さ 2 cm の扁平な断面を示し 170 g の重さをもつ自然礫の長軸両端に敲石的な使用痕をもつ。石質は北上山地中生界産の閃緑岩である。

時期 重複関係から平安時代以降に属する。(高橋)



第 112 図 AC 7 土坑出土遺物



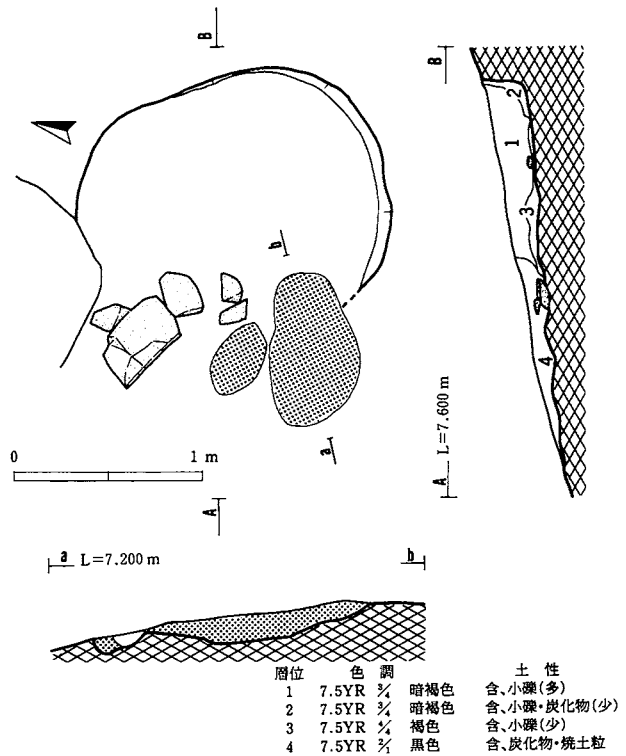
第 111 図 AC 7 土坑

#### AD 4 土坑

(第 113 図・写真図版 46)

〈検出状況・重複関係〉粗掘り中の土層変化で検出されたが、作場道の開削時に攪乱を受け、西側の壁を欠失する。北壁の西寄り AE 4 土坑の南壁東寄りと僅か重複するが、埋土に差がなく新旧関係は不明である。

〈規模・形態〉検出された部分は開口部径 1.65 m、底部径 1.6 m、深さ 0.23 m 以下の規模をもち、平面形は平形か楕円形、断面形は皿形を示すと推定される。底面は平坦でほぼ水平に近く、良くしまり硬い。西壁の南寄り床面に 80 cm×50 cm とその



第 113 図 AD 4 土坑



北側に隣接する 40 cm×25 cm の範囲が火熱によって最大層厚 7 cm の焼土がみられるものの、その範囲が推定される土坑の範囲の外方に大きく広がり、さらに、層厚が自然の傾斜面に並行することから、本土坑に直接関連するとは考えられない。また、焼土の北側には底面に密着して焼成を受けた扁平な礫が 6 個散在する。

〈埋土〉3 層に分けられるが、大半は 1 層の小礫混じりの黒褐色土で占められ、他は 2 層が汚れた地山質の暗褐色土、3 層は褐色の汚れた地山である。1 層は非常に軟弱で粘性も全くないや 1 層の土質からみて最近掘られた土坑の可能性はある。

〈遺物〉埋土から小さな鉄滓が出土している。(写真図版 95—m) 重量は 45 g である。

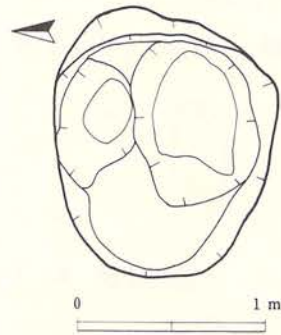
時期 特定資料がない。

(高橋)

#### AE 4 土坑 (第 114 図・写真図版 47)

〈検出状況・重複関係〉粗掘り中の土層変化として検出された。AD 4 土坑と南東壁で接するが新旧関係は不明である。

〈規模・形態〉開口部径 1.45 m×1.2 m、底部径 1.25 m×1.05 m、深さ 0.17 m～0.05 m の規模をもち、平面形は東西に長軸をもつ楕円形、断面形は皿形を示す。底面は良くしまり硬いものの起伏があり、南壁寄りに 85 cm×60 cm・深さ 19 cm、北壁寄りに 70 cm×20 cm・深さ 20 cm の断面形がともに楕円形に近い形を示す凹みがある。



第 114 図 AE 4 土坑

〈埋土〉小礫が混入し非常に軟弱な黒褐色土の単層である。土質や堆積状況から最近掘られた遺構の可能性はある。

時期 出土遺物はなく、不明である。

(高橋)

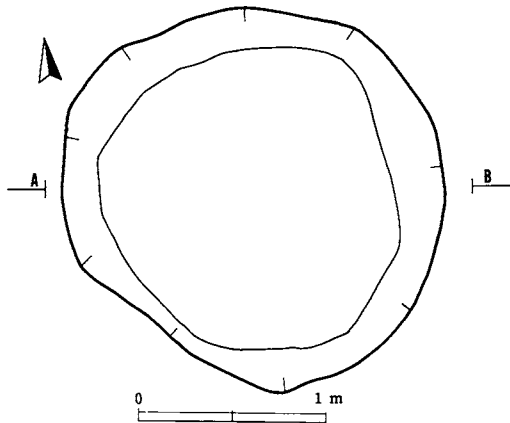
#### AE 5 土坑 (第 115 図・写真図版 47)

〈検出状況・重複関係〉粗掘り中に黒褐色土の広がりとして検出され、重複遺構はない。

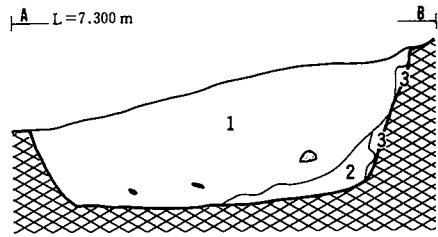
〈規模・形態〉開口部径 2 m×1.85 m、底部径 1.6 m×1.6 m、深さ 0.7 m～0.3 m の規模をもち、平面形は楕円形、断面形は壁が外傾し浅いバケツ形に近似する。底面は平坦であるが西に向って次第に低くなり、しまつて固い。

〈埋土〉3 層に分けられるが、そのほとんどは 1 層の小礫の混入し、固くしまり粘性のない黒褐色土で占める。2 層は褐色土と明褐色土が混合した粘性のある地山性の土であり、3 層は褐色を示す汚れた地山の塊である。

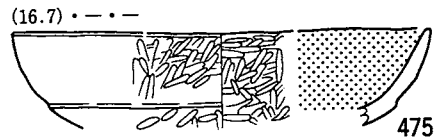
〈遺物〉埋土最下位から土師器の坏が出土している。475 は口縁部～底部を残す破片である。



第115図 AE 5土坑



層位	色調	土性
1	7.5YR 2/6 黒褐色	含、小礫
2	7.5YR 5/6 褐色～明褐色	地山との混合土
3	7.5YR 5/6 褐色	



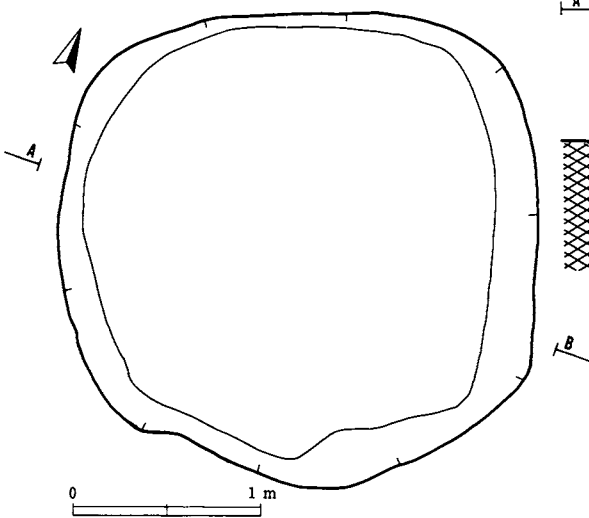
第116図 AE 5土坑出土遺物

底部は丸底で体部と口縁部が明瞭な段で接続し、口縁部が内湾して外傾する器形を示す。

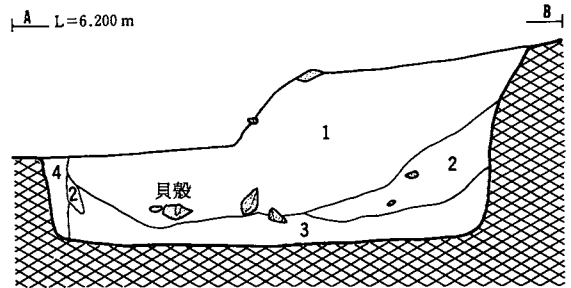
器面の調整は、外面は底部～体部がヘラケズリ、口縁部ヨコナデであり、内面は横方向へラミガキ後黒色処理される。胎土にはやや多い砂粒・石英が混入した緻密な粘土で使用し、焼成は良好で硬い、色調はやや赤味のある褐色を示す。大きさは口径 16.7 cm 位で他は不明である。

時期 出土した土師器から奈良時代に属する。

(高橋)



第117図 AG 7土坑



層位	色調	土性
1	7.5YR 2/6 黒褐色	含、小礫(多)・一部貝層あり
2	7.5YR 2/6 黒色	含、焼土塊・小礫
3	7.5YR 2/6 極暗褐色	含、焼土粒・地山粒(多)小礫
4	7.5YR 2/6 暗褐色	

AG 7 土坑 (第 117 図・写真図版 47)

〈検出状況・重複関係〉粗掘り中に黒褐色土の広がりとして検出され、重複する遺構はない。

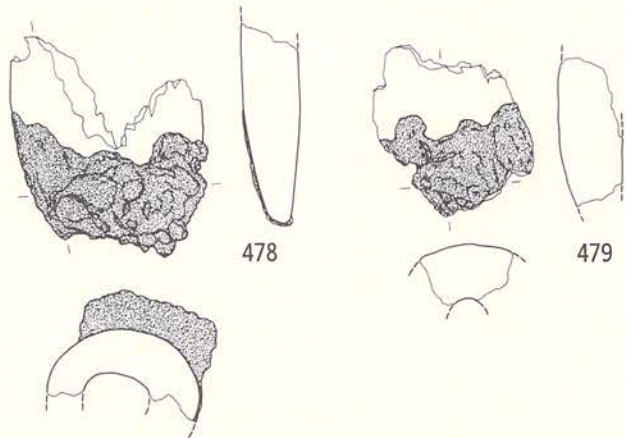
〈規模・形態〉開口部径 1.55 m×1.55 m、底部径 1.2 m×1.15 m、深さ 1.1 m～0.49 m の規模をもち、平面形は凸辺隅丸方形、断面形は壁が若干外傾するが北壁が垂直に近い立ち上がりを示すことから、ピーカー形であったと推定される。底面は平坦であるが壁に向って次第に高くなる傾向がみられ、全体的にやや硬い。

〈埋土〉4 層に分けられるが、大半が 1 層の小礫が多量に混入した黒褐色土で占められ、西壁寄りの下位にはマガキを主体とした貝層が部分的に堆積する。2 層は焼土塊や小礫を混入する黒色土、3 層は焼土粒、地山粒・小礫を混じる極暗褐色土、4 層は壁の崩れとも考えられる暗褐色土である。なお、1 層・2 層には粒径 10 cm～15 cm の礫も少量混在する。

〈遺物〉埋土内から鞆羽口の破片が 2 個体 (478・479) 出土した。いずれの個体も先端部であるが 478 の残りが良好である。外径 7.5～8 cm の中央部に径 2.7 cm 位の円孔が貫通する円筒状を示し、長さ約 8 cm が残存する。小砂礫が多量に混入した比較的粒子の細かい粘土で作られ、残存部最大厚さ 2.5 cm で先端部は外削ぎされて次第に薄くなり、端部は小さな丸味をもっておさまる。また、端部の外面には炉壁の一部か鉄滓と推定される小砂利を噛んだ内部がガラス質の熔融物が瘤状に付着する。瘤状をなさない部分もガラス質の熔融物の付着によって表面がにぶい光沢を放ち、その他の部分も火熱によって亀裂が入っている。全体が灰褐色気味に発色するが、内面の一部は黄褐色気味の部分がある。479 は小破片のため不明な点が多いものの、478 のそれとほぼ同じ状況を示すと推定される。

このほかに小さな鉄滓が出土している。(写真図版 95-n) 重量は 33 g である。

時期 古代以降と推定される。  
(高橋)

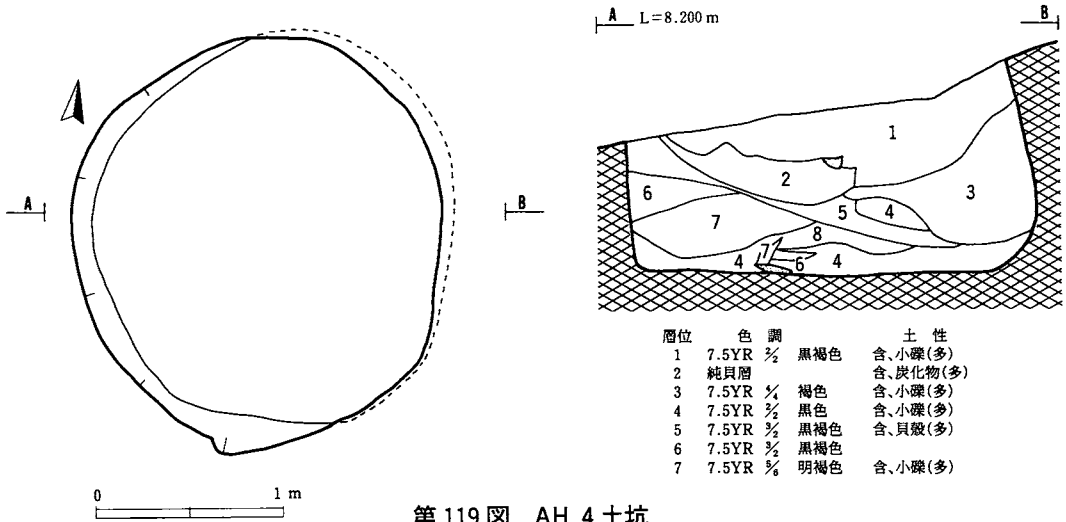


第 118 図 AG 7 土坑出土遺物

AH 4 土坑 (第 119 図・写真図版 48)

〈検出状況・重複関係〉粗掘り中に黒褐色土の広がりとして検出された。縄文時代の AI 5 住居跡の南壁と接するが、当土坑の方が新しい。

〈規模・形態〉開口部径 2.1 m×2 m、底部径 2.05 m×1.9 m、深さ 1.15 m～0.7 m の規模を

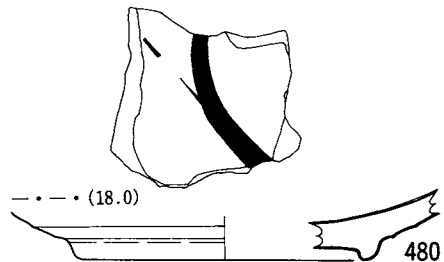


第119図 AH 4 土坑

もち、平面形は南北に長軸をもつ楕円形、断面形は東壁が内傾することから浅いフラスコ形であった可能性が大きい。底面は平坦でしまり良く硬い。

〈埋土〉7層に分けられる。色調には黒色・黒褐色・褐色・明褐色があり、いずれにも多少の小礫が混入するほか5層には貝殻が混じり、2層はほぼ純粋な貝殻層である。貝殻にはカキ、オオノガイ等の2枚貝と少数の巻貝がある。全体の層相を観察すると、乱雑な堆積状況を示し、人為的な埋め戻しであろう。

〈遺物〉埋土上位から陶器の破片が1点(480)出土している。器種は大平鉢と推定され、高さ1.2cmの低い輪高台の付く底と体部の一部を残す破片である。全体がロクロ成形され、高台は逆台形状に削り出され、畳付けは幅7mmの平らで両隅は丸くおさまり、外底面はほぼ水平をなす。高台脇は断面が低い円形の隆起帯を全周させた後腰部まで平らに削り、体部は直線的に外傾する。内面は滑らかに削られ内湾状を示す。内面と高台と外底面の一部を除いて全面に白濁した半透明の淡い褐色に発色する釉がかけられ、さらに内面は施釉前に鉄釉による文様を描くが、図柄は不明である。胎土は砂粒をまったく含まない粒子の細かい粘土を使用し、断面には鬆穴があるものの焼成は良好で硬い。色調は淡い黄褐色を示す。また、見込み部分に丸トチンによる目跡が1箇所みられる。釉調や胎土の状況から唐津の生産品と推定され、トチンの状況から16世紀末～17世紀前半頃の製品であろう。



第120図 AH 4 土坑出土遺物

時期 江戸時代に属する。

(高橋)

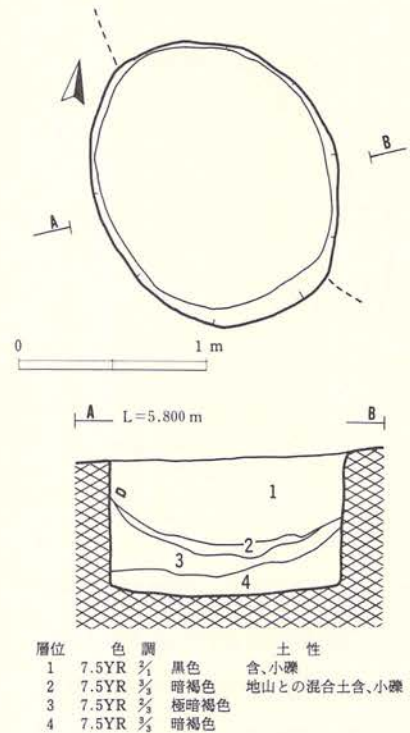
AI 9 土坑 (第 121 図・写真図版 48)

〈検出状況・重複関係〉粗掘り中に黒色土の広がりとして検出された。縄文時代の AI 9 住居跡の南西壁と重複し、本土坑の方が新しい。

〈規模・形態〉開口部径 1.55 m×1.3 m、底部径 1.43×1.18 m、深さ 0.8 m の規模をもち、平面形はほぼ南北に長軸をもつ楕円形、断面形はピーカー形を示す。底面は平坦であるがしまりなく軟弱である。壁は僅かに外傾し凹凸はない。

〈埋土〉4 層に分けられ、黒色土、暗褐色土、極暗褐色土が堆積する。1 層は小礫が混入した若干粘性のある砂質シルト、小礫が混じり黄橙色の地山塊と混合した粘性のある土、3 層は地山粒が僅か混入した粘性土、4 層は 2 層と同様である。層理は自然堆積的であるが、2・4 層の土質は人為的な混合を示す可能性がある。

時期 出土遺物がなく、不明である。(高橋)



第 121 図 AI 9 土坑

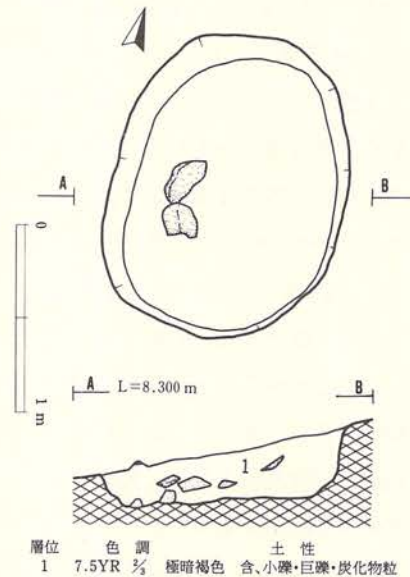
AL 6 土坑 (第 122 図・写真図版 49)

〈検出状況・重複関係〉粗掘り中の土層変化と、その後の乾燥の違いによって検出された。重複する遺構はない。

〈規模・形態〉開口部径 1.65 m×1.25 m、底部径 1.45 m×1.1 m、深さ 0.35 m~0.2 m の規模をもち、平面形は南北に長軸をもつ楕円形で断面形は壁が僅かに外傾する皿形を示す。底面は平坦であるが周辺部に向って次第に高くなり、しまり良く硬い。

〈埋土〉基本層序 II 層に近似した極暗褐色シルトの単層で、多量の砂礫と炭化物が若干混じり、良くしまり硬くやや粘性がある。

〈遺物〉埋土最下位に二次焼成によって赤変した



第 122 図 AL 6 土坑

実測不能な土師器の破片が出土し、一部は坑底に密着する。器種は甕と推定され、輪積み痕を明瞭に残した粗雑なロクロ未使用成形で、器厚が1.5 cm～1 cmと厚く器表は指や篋でナデられる。内面は指おさえ痕を良く残す。胎土は砂粒の混じった比較的緻密な粘土を使用し、黒斑をもつ破片はない。他の遺構からも同様の状況を示す破片が出土しており、何個体かが使用されたものであろう。

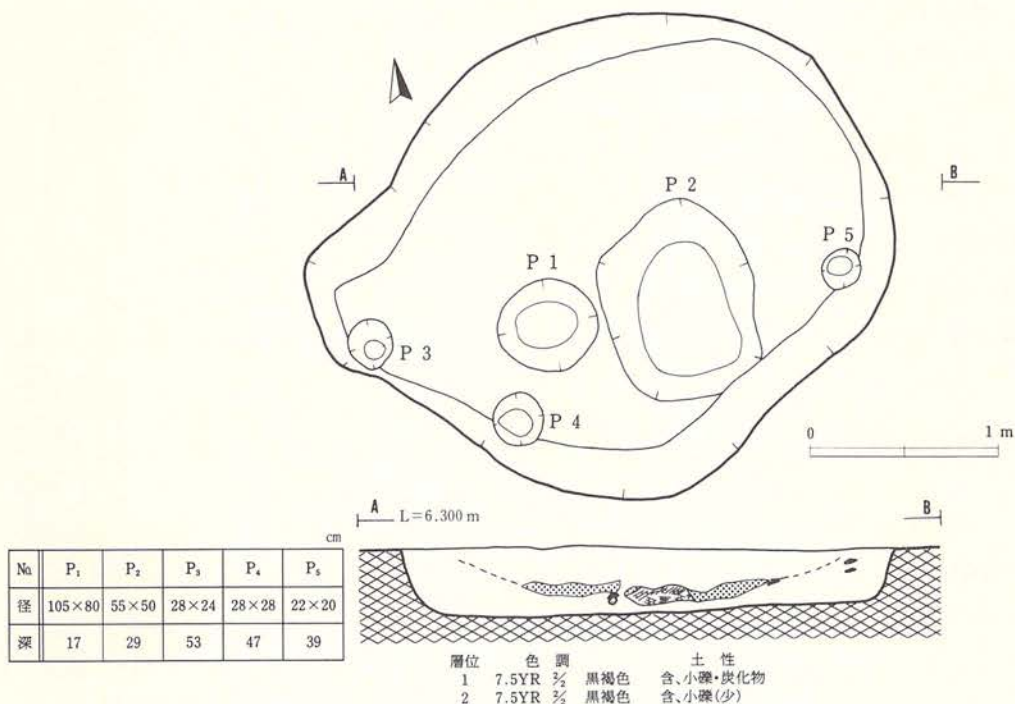
時期 古代と推定されるが特定はできない。

(高橋)

### AL 10 土坑 (第 123 図・写真図版 49)

〈検出状況・重複関係〉平安時代の AL 9 住居跡の精査中に、黒色土の広がりとして検出された。明確ではないが AL 9 住居跡西側の床を壊し、南側が縄文時代の AK 10 住居跡の壁と床の一部を掘り込んでいる。

〈規模・形態〉開口部径 3.1 m×2.55 m、底部径 2.9 m×2 m、深さ 0.4 m の規模をもち、平面形は東西に長軸をもつ楕円形、断面形は皿形である。底面は良くしまり平坦であるが、南壁寄りに P<sub>1</sub>～P<sub>5</sub> の土坑が検出されている。P<sub>3</sub>～P<sub>5</sub> は検出面が埋土内であることや規模・形状から当土坑より新しい柱穴状土坑と理解されるが、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub> は本土坑の底面からの検出であり、さらに埋土に差がないことから当土坑の副穴であろう。北東・南西側の壁は垂直に近いが他は内湾



第 123 図 AL 10 土坑

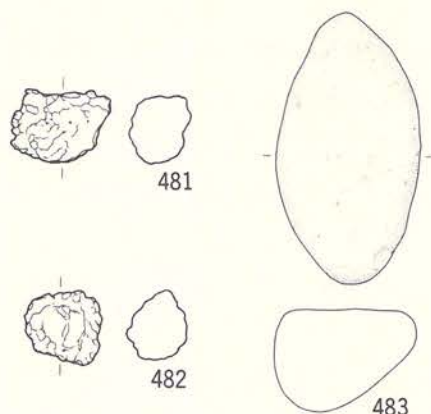
気味に外傾し、凹凸はない。

〈埋土〉埋土は小礫を含む黒褐色土であるが、炭化物の有無によって2層に細分されさらに炭化物が混入した焼土が間層として挟在する。粘性はないがしまり良く硬い。なお、間層の焼土は投げ込まれもので、現地性のもではない。

〈遺物〉埋土から縄文時代の石器が1点と小石を嚙んだ鉄滓が2点出土している。石器(483)は、最大長11cm、最大幅5.9m、最大厚さ4.2cm、重さ330gの大きさがあり、平面形が長楕円形、断面半円状を示す北上山地中生界産の輝石安山岩を使用した磨石的に使用されたもので、凸面の頂部に小範囲の磨面と黒色に変色した部分をもつ。鉄滓の2点はいずれも表面に凹凸のある楕円球状を示し、大きさは481が2.6cm×1.8cm×1.6cmの9.7g、482は2cm×1.9cm×1.6cmの6.2gである。

時期 古代以降と推定されるが、特定できない。

(高橋)



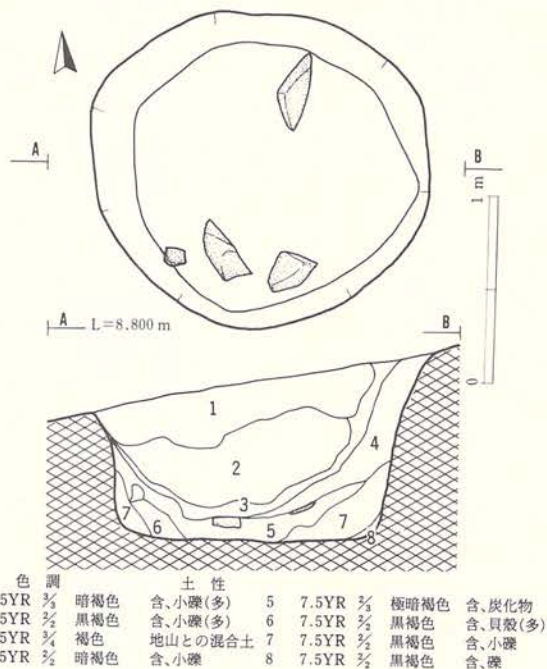
第124図 AL 10土坑出土遺物

### AM 6 土坑 (第125図・写真図版49・50)

〈検出状況・重複状況〉粗掘りの中の土層変化と、その後の乾燥の相違によって検出された。他遺構との重複はない。

〈規模・形態〉開口部径1.8m×1.7m、底部径1.55m×1.4m、深さ1.05m~0.72mの規模をもち、平面形はほぼ円形、断面形は壁が外傾しバケツ形に近い形状を示す。底面は平坦であるが、周辺部に向かって次第に高くなり壁とは丸味をもって接続する。

〈埋土〉8層に分けられるが、1・2層は厚く堆積し、その他は層が薄い特徴がある。色調には褐色・暗褐色・極暗褐色・黒褐色がみられ、土性はいずれもシルトである。混入物は、6層が混貝土層であるほかいず



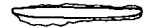
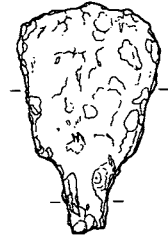
第125図 AM 6土坑

れも砂や礫が混入し、特に1・2・7層に多く、他は少ない。ほかに、3層には地山質の褐色土粒、5層には炭化物粒が混じり、7層は汚れた暗褐色地山質土である。6層の混貝土層は北壁・西壁・南壁沿いに堆積し、層厚は最大20 cmほどで、砂泥性の貝殻を主に若干の哺乳動物の骨片や魚骨を含む。

〈遺物〉埋土下位から鉄製品が出土している。篋状を示すが鏃の一類型と推定される。根は長辺4.9 cmの凸辺、短辺2.7 cm、高さ4 cmの合形状をなし、短辺の中央に基部の幅1.6 cm、折損部の幅0.8 cmの柄が長さ1.9 cmで残っており、厚さは全体が0.3 cm位でほぼ一定する。重さは20.9 gである。有茎型で奈良時代の斧箭形やのみ頭形に相当する可能性がある。

このほかに鉄滓が出土している。(写真図版95—0)重量は185 gである。

時期 古代以降と推定される。



484

第126図

AM 6土坑出土遺物

#### AM 7土坑 (第127図・写真図版50)

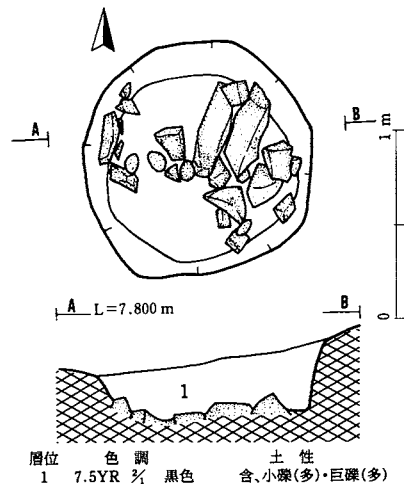
〈検出状況・重複関係〉粗掘り中の僅かな土層変化とその後の乾燥の違いによって検出され、他遺構との重複はない。

〈規模・形態〉開口部径1.35 m×1.25 m、底部径1 m×1 m、深さ0.45 m~0.3 mの規模をもち、平面形は円形、断面形は壁が外傾しやや深い皿形を示す。底面は平坦で硬くしめるが周辺部に向って次第に高くなる。

〈埋土〉小礫が多量に混入した黒色の砂質シルトのみが堆積し、最下位には粒径50 cm×15 cm~10 cm×10 cmの礫が20数個敷き詰めたように検出され、ほとんどのものは底面に密着する。礫の検出状況は、底面に密着し人為的に投げ込まれたことは確実であるが、大きさが不揃いであることや方向が不整であり、何んらかの意図をもって敷き詰めたとは考えられない。

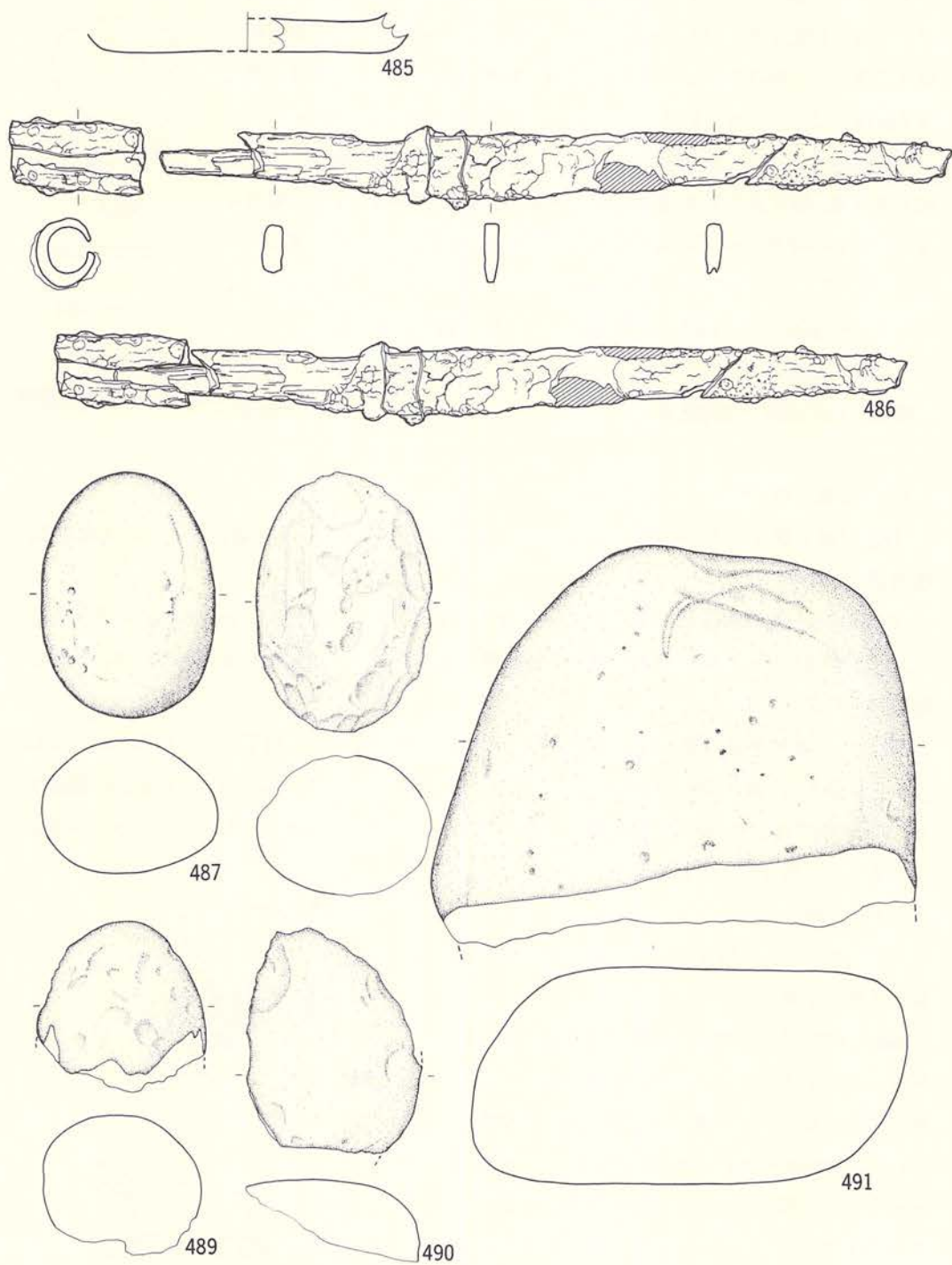
〈遺物〉埋土内から縄文土器1点、石器5点、鉄製品1個体2点が出土している。

〈縄文土器〉(485)内外の底面が良く磨かれた底部破片で、全体のほぼ1/2を残存する。胎土には多量の砂粒が混入し、全体として粗い粘土を使用している。焼成は若干悪く色調が表面から4 mm~3 mmまでが赤褐色、中心部は黒味の強い灰褐色と焼成不足であったことを表している。器種を特定できる状況ではないが、深鉢か浅鉢と推定される。



第127図 AM 7土坑





第 128 图 AM 7 土坑出土遺物

〈石器〉(487~491) おそらく縄文時代に属すると考えられる磨石3点(487~489)、台石もしくは石皿1点(491)、使用痕のある礫1点(490)が出土している。磨石の3点は488・489が破碎しているものの、いずれも平面・断面とも楕円形を示し、大きさは長さ11.7cm~7cm、幅7.9cm~7.7cm、厚さ7.4cm~6.0cmと近似するが重さは820g~420gと大きな差がみられ、これは489が大きく欠損することに起因するものであろう。487は両面に磨面と一部に黒色の媒が付着しており、他の2点はほぼ全面に磨面をもつものらしい。台石か石皿とされた491は、周辺部の一部に火熱によると推定される表面剝落がみられ、さらにどの程度かは不明であるが大きく割れた破損面をもつ。断面が扁平で平面が断面形を示す自然礫の平坦面両面に磨面をもつ。大きさは長さ18.1cm以上、幅22cm、厚さ9.9cm、重さ5600g以上である。使用痕をもつ礫の490は、円礫から剝離された破片の表面に使用痕とみられる変色部をもつ。大きさは、長さ10.1cm、幅7.9cm、厚さ3.7cm、重さ310gである。石質には流紋岩(487)、花崗閃緑岩(488・489)輝石安山岩(490)、半花崗岩(491)があり、いずれも北上山地の古第三系(487)や中生界(488~491)の産である。

〈鉄製品〉(486) 鋒と莖部先端を欠失した刀子が1点出土している。残存部全長23.5cm、最大幅1.8cm厚さ0.4cmの大きさで、莖部先端から8cmの位置に幅0.7cmの縁金具が残っている。莖部は先端が幅0.6cm・厚さ0.2cm、縁金具との位置で幅1.5cm・厚さ0.4cmで、残存の長さ8.0cmであり、両面に若干の木質部を残す。刀身は残存長15.5cm、最大幅1.8cm、棟の厚さ0.5cmであり、平棟で断面が二等辺三角形を示す。また、基部に最大幅をもって鋒に向って次第に細くなる。柄頭部分には幅3.7cm・厚さ0.3cmの鉄板を径1.6cmの円筒状に曲げたものが柄頭状に装着していた。実際は円筒状の合わせ目が0.7cm~0.5cm開いており、密着していない。重さは刀身が56.9g、柄頭が19.45gである。

時期 古代以降と推定される。

(高橋)

#### BA2土坑(第129図・写真図版51)

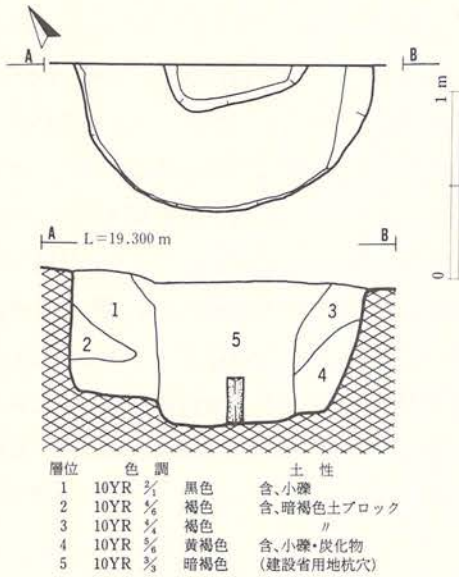
〈検出状況・重複関係〉表土を除去した時点で、黒色土の広がりとして検出された。南西半分は調査区域にかかるほか、中央部を跡線の幅杭によって攪乱されている。

〈規模・形態〉残存部から開口部径1.6m前後、底部径1.4m前後、深さ55cmで、平面形は円形を呈するものと考えられる。壁はほぼ直立する。底面は平坦で、やや硬い。

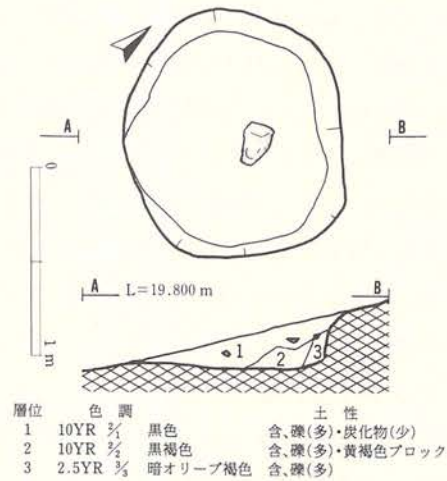
〈埋土〉上位は褐色土、下位は黄褐色土で構成されている。

時期 出土遺物はなく、不明である。

(酒井)



第 129 図 BA 2 土坑



第 130 図 BF 11 土坑

#### BG 11 土坑 (第 130 図・写真図版 51)

〈検出状況〉表土を除去した時点で、黒色土の広がりとして検出された。

〈規模・形態〉開口部径 1.3×1.2 cm、底部径 1.1×1 cm、深さ 30 cm で、平面形は不整な円形を呈する。壁は緩く傾斜し断面形は浅皿状を呈する。底面には凹凸がありしまりはない。

〈埋土〉黒色土が主体で、壁際に黒褐色土～褐色土が堆積する。

時期 出土遺物がなく、不明である。

(酒井)

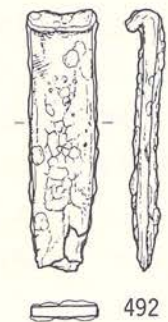
#### BH 11 土坑 (第 132 図・写真図版 51)

〈検出状況〉表土を除去した時点で黒色土の広がりとして検出された。周辺の土層との区別がつきにくく、大きく掘りすぎている。また、北東部は調査区域外にかかる。

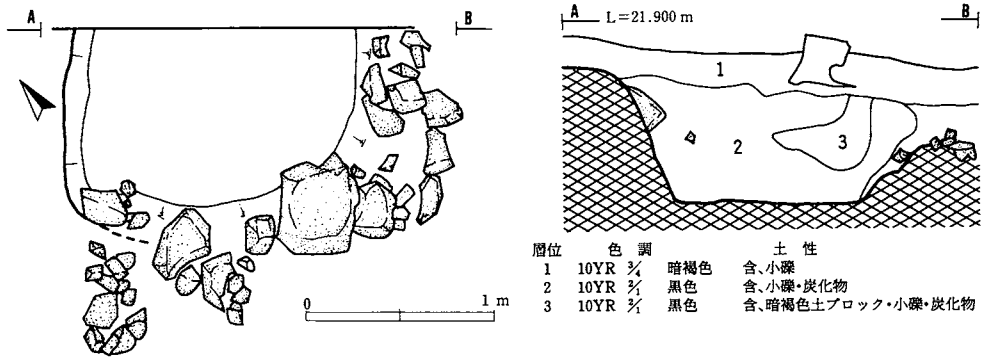
〈規模・形態〉残存部から開口部 1.7 m 前後、底部 1.4 m 前後、深さ 60 cm の隅丸方形を呈していたものと考えられる。壁は緩く外傾して立ち上がり、底面は平坦で硬くしまる。

〈埋土〉炭化物を僅かに含む黒色土の単層である。なお、層中には粘板岩の細礫を多量に包含する。

〈遺物〉492 は埋土から出土した楔状の鉄製品である。縦長の長方形を呈



第 131 図  
BH 11 土坑出土遺構



第 132 図 BH 11 土坑

し、上端は折り曲げられ、下端部はいくぶん細くなる。断面形は扁平な長方形で、下端部は薄くなっている。

時期 古代以降に属する。

(酒井)

#### (4) 溝状遺構

##### AK 8 溝状遺構 (第 133 図・写真図版 52)

〈検出状況・重複関係〉粗掘り中の土層変化とその後の乾燥具合によって検出された。時代不明な AL 8 住居跡状遺構の西側を切って開削されている。

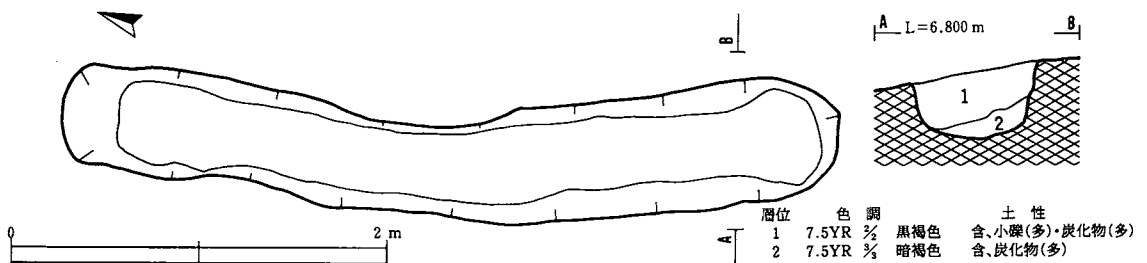
〈規模・形態〉全長 4.15 m、底部長 3.75 m、幅 0.65 m~0.6 m、深さ 0.36 m~0.16 m の規模をもち、断面形は鍋底形を示す。長軸が N-16°-W を示し、全体が僅か東方に湾曲し南北両端は明瞭な段差で止まる。水流を伴う一般的な溝とは性格が異なる可能性が強い。

〈埋土〉2 層に分けられ、上層に黒褐色土、下層に暗褐色土が堆積し、ともに小礫と炭化物を混入する。斜面上位の東側から流れ込んだ堆積状況を示す。

出土遺物はない。

時期 古代以降に属する。

(高橋)



第 133 図 AK 8 溝状遺構

#### 4. 遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物は、41×31×19 cm のコンテナで 15 箱である。遺物には土器・石器・鉄製品・陶磁器・鞆の羽口・鉄滓がある。大部分は土器で、鉄製品・石器がこれに欠ぐが、出土量は少ない。区域別では、遺物包含層となる第Ⅱ層の堆積が厚い A 区からの出土量が多い。

##### (1) 縄文土器

出土遺物の中で最も多い。時期別には前期の土器と中期の土器があるが、前期のものは破片が 1 点出土しているだけで、他は全て中期の土器である。

分類及び記載にあたり、前期をⅠ群、中期をⅡ群とする時期区分を行った。また、Ⅱ群土器については従来の土器編年における型式名にあてはめ、1～3 類の小区分を行った。小区分における形式名は 1 類……大木 8 a・8 b 式、2 類……大木 9 式、3 類……大木 10 式である。なお、1 類については、a・b 2 型式を含むが、これは資料の多くが破片で全体の文様意匠が把握できず、明確な分類基準を見出し得なかったためである。

##### 第Ⅰ群土器（第 134 図・写真図版 85）

493 1 点が B 区から出土した。僅かに外反する口縁部破片で、口唇部は角ばる。胎土には砂と若干の植物繊維を含み、焼成は良い。口縁部には不整な綾絡文が、横位に施文される。胎土に繊維を含み、綾絡文が施される土器には大木 1 式、同 2 式があげられる。493 は小破片のため詳細は不明であるが、胎土に含まれる繊維の量が少ないことから、大木 2 式に比定されるものと考えられる。

##### 第Ⅱ群土器（第 134～138 図・写真図版 85～88）

1 類（494～571）494 は鉢で、体部上端～口縁部が残存する。口縁部は「く」字に屈曲して内傾し、横に張り出す渦巻状の大突起 4 個と小突起 4 個をもつ。これらの突起間は縄文原体の側面圧痕文によって繋がれ、小突起部分では渦巻文を構成している。体部にも各突起部分に渦巻を構成する原体の側面圧痕文が施されている。地文は RLR 複節斜縄文である。495 も同様な形態をもつ鉢で、小突起部の口縁には径 1 cm の孔を有する。口縁部上端には、細かい波状の隆帯が貼付され、突起間は原体の側面圧痕文によって繋がれている。体部には 2 本一組の沈線による文様が、大突起を起点として施文されている。地文は 0 段多条 RL 単節斜縄文である。なお、500 は同一個体である。496 は口縁部及び体部に原体圧痕文による文様を有する。497 は太い隆帯による渦巻文をもつ口縁部片で、下位に原体圧痕文が巡る。498 は口縁部が内傾する鉢で、横に張り出す渦巻状の突起をもつ。口縁部・体部とも原体圧痕文はなく、細い隆帯による文様が施されている。499 はキャリパー形土器の口縁部片で、台状の突起を有するものと考えられる。口縁

部上端には太い隆帯が巡り、この下位に隆帯と原体の側面圧痕による文様をもつ。地文は0段多条RLR複節斜縄文である。501は鉢の口縁部片と考えられる。口唇部と口縁部に原体の側面圧痕文が巡る。

502は体部上端～口縁部が残存するキャリパー形の深鉢である。口縁部は平縁で、低い隆帯によって末端が渦巻状になる文様が横位に展開している。地文は0段多条RL単節斜縄文で、口縁部には横、体部には縦回転で施文されている。503・504はキャリパー形土器の口縁部片で、いずれも欠損するが口縁部には突起を有していたものと考えられる。503は2本一組の低い隆帯による渦巻文をもつ。504は、両側部をナデ調整された2本一組の隆帯による曲折文が横位に展開する。505は口縁上端に太い隆帯が巡り、これが部分的に渦巻文を構成している。506は頂部が渦巻文となる台状の突起を有する口縁部片で、口縁部には細い隆帯による文様をもつ。507は頂部に「S」字状の隆帯が付く台状突起をもつ口縁部片である。突起の下位には径1.3cmの孔を有し、これを起点とする沈線文が施されている。508は横に突出する渦巻突起をもつ口縁部片である。509は大型の台状突起の破片で、太い隆帯が巡り中央部に孔を有する。510は水滴形を呈する突起部分で、中央部に同形の孔をもち、周囲には太い沈線が巡る。

511・512は太い隆帯による横位の「S」字状突起を有する口縁部片である。

513～533はキャリパー形土器の口縁部片である。513～515は口縁部の上下両端に隆帯が巡り、この間に緩い波状曲線文が同様の隆帯によって展開されている。516は2本一組の沈線によって波状曲線文が描かれている。517は隆帯と隆沈線によって文様が描かれている。518は直線的な文様、519は細い波状曲線文が施されている。520は綾絡文風の曲線文が隆帯によって表わされている。521は断面が三角形の隆帯が巡る。522は隆帯による区画文的な文様をもつ。523～528は、部分的に渦巻文を構成する曲線の文様をもつ。529は2本一組の隆帯によって渦巻文を配する曲線文をもつ。この隆帯は器面と両側がナデ調整され、浅い隆沈線状になっている。530は隆沈線による渦巻文を有する。531は2本一組の隆帯によって渦巻文が表現されている。532も隆帯による渦巻曲線文が施されている。533は沈線によって山形文と渦巻文が描かれている。

534は緩く外反する口縁部片で、外削ぎとなる口唇部にはジグザグな粘土紐が貼られ、この上に縄文が施文されている。口縁部には隆帯が巡り、この上位は無文帯となっている。535は口縁部が肥厚し、この部分に短い縦沈線が連続して施されている。536は口縁部上端が内側に肥厚し、口唇部は内削ぎとなる。口縁部には器面をナデ調整された隆帯が巡る。537は上端が肥厚し、全体に内湾する口縁部片である。538は波状口縁の形態をもつ。全体に内湾し、上端部は短く外反する。文様は器面をナデ調整された太い隆帯が、2～3本一組で曲線文を構成している。

539～541は口縁部上端に、太い隆帯による「く」字状の突起をもつ。539は雑な隆沈線、541は太い隆帯による文様をもつ。

542～544 は体部が内湾し、そのまま口縁部に続く器形をもつ深鉢である。いずれも口縁部上端に2本の隆帯が巡る。542はこの下位に2～3本一組の並行沈線と、緩い波状沈線が巡り、体部には長楕円形文を基調した文様が施されている。地文はLR単節斜縄文である。543も3本一組の並行沈線と、1本の波状沈線が巡る。地文RL単節斜縄文である。544は3本一組の並行沈線と2本一組の波状沈線文が描かれている。545は緩い波状を呈し、短い折り返し口縁の形態をとる。文様は3本一組の沈線による曲線文である。546も短い折り返し口縁で、並行沈線文と波状沈線文が巡る。547は口縁部がほぼ直立する。口縁上端に2本の隆帯が巡り、口唇部には沈線が施されている。体部には雑な隆沈線による文様が施文されている。548・549は体部の小破片で、沈線による並行文・波状文が描かれている。550は細かい波状沈線が垂下する。551は体部上端と考えられる部分に、2本一組の並行沈線と波状沈線が巡る。552は沈線によって渦巻文をモチーフとする文様が描かれている。553は体部上端と考えられる部分に3本の隆沈線が巡る。

554は小型の鉢で、体部は内湾ぎみに立ち上がり、口縁部は「く」字に屈曲して内傾する。体部上端と頸部には隆帯が巡り、部分的に歪な楕円形の突起を構成している。口縁部は無文で、ミガキ調整され、口唇部は内削ぎとなる。地文はR1段の撚糸文で、縦走する。

555はキャリパー形土器の口縁部片である。文様は隆沈線によって、大柄な渦巻文を配する曲線文が横位に展開されている。556は頂部に渦巻文が施された小型の山形突起を有する。文様は細い隆帯による渦巻文を配した曲線文である。557は低い隆沈線による渦巻文をもつ口縁部片である。558は隆沈線と隆帯による文様が施されている。559は口縁部に太い隆帯によって区画された円形・楕円形文を有す。楕円形文内には、棒状工具による棘突文が充填されている。560は口縁部が外反し、緩い波状を呈する。口縁部上端は肥厚し、口唇部には太い沈線が巡り、波頭部分では渦巻文を構成している。口縁部は無文で、下端に隆沈線が巡り体部と区画されている。

561～571は体部の破片である。561は上端部に3本の沈線が巡り、上下を区画している。文様は3本一組の沈線によって描かれ、渦巻文を配する縦方向に展開する文様が施されている。562は隆帯と沈線によって体部を区画しており、上位は無文帯となっている。体部には2～3本一組の沈線が、縦方向に文様を構成している。563は2本一組の沈線による文様を有する。564は細い沈線によって区画的な文様が描かれている。565は2本一組、566は3本一組の細い沈線が垂下する。567は体部上端に並行沈線と波状沈線が巡り、上下を区画している。下位には沈線によって縦方向に展開する文様が施されている。568は2～3本一組の沈線が垂下し、沈線が施された部分は粗く縄文が消り磨かれている。569は3本一組の沈線と緩い波状沈線が垂下する。570は2本一組の隆帯が垂下する。571は体部下端の破片である。R1段の撚糸文を地文とし、2本一組の隆沈線が垂下する。

2類(572~594) 572は波状を呈する口縁部片である。全体は緩く内湾し、口縁上端は短く外反する。文様は隆沈線による区画文である。573も波状口縁を呈し、波頭部分には隆帯による渦巻状の文様が構成されている。体部文様は隆沈線による縦方向の区画文である。574は口縁部に、断面が三角形の隆帯2本が巡り、下位のは体部に渦巻状の文様を構成している。575は緩い波状口縁を呈するものと考えられる。口縁部に沿って低い隆帯が巡り、この下位には沈線による区画文が施されている。なお、沈線に狭まれた部分では、地文が雑に磨り消されている。576は山形状の口縁部で、隆沈線による文様をもつ。577・578は隆沈線による区画文が施されている。579は口縁に沿って太い隆帯が巡り、上端部は無文帯となっている。580・581・583は隆沈線による区画文をもつ。582・584は口縁部に沿って隆帯が巡り、沈線による区画文が描かれている。585は口縁上端に、棒状工具による円形の刺突が連続して施されている。586は隆帯と、これに沿って施文される円形刺突が口縁部を巡る。587・588は太い隆沈線による区画文をもつ体部片である。この隆沈線は2本一組で、縦方向への分岐点では、中間の沈線は末端が渦巻文(ゼンマイ状文)を構成している。

589~594は磨消縄文による文様を有する。589は鉢で、全体に緩く内湾して立ち上がる。文様は沈線区画による∩字文とゼンマイ状文で、区画内にはLR単節斜縄文が施文されている。区画外は丹念にミガキ調整され、光沢をもつ。590は沈線区画された縄文帯が垂下する底部片である。591は平縁を呈する口縁部片で、沈線区画内には縄文の他に刺突文が施文されている。593・594は同一個体と考えられ、沈線区画された狭い無文帯が垂下する。

3類(595~599)いずれも沈線区画による磨消縄文で文様を表わしている。しかし小破片のため、文様意匠は不明である。2類との区別は明確ではないが、区画する沈線は太く、文様も大柄である。595・596は同一個体と考えられる。595は口縁部に近い部分の破片と考えられ、口縁部は無文帯となるようである。区画内にはLRL複節斜縄文が施文されている。597は円形基調の区画文をもつ。598はより曲線的モチーフをもつ。599は胎土に金雲母を含む。

600~611は体部文様をもたない粗製土器である。胎土・器形及び縄文の施文方法から、いずれもII群土器に属するものと考えられる。600は小さな波状を呈する口縁部片で、緩く外反する。地文はLR単節斜縄文で縦回転で施文されている。601は上端が無文帯となる口縁部片である。602は口縁部が僅かに外反する。胎土には金雲母が含まれている。603~610は底部片である。いずれも体部は、ほぼ直立して立ち上がる。610は下端部が無文で、胎土には金雲母を包含する。

611は体部の大型破片である。中央部付近の破片と思われ、全体にいくぶん内湾する。地文はLR単節斜縄文で、縦回転による施文である。(酒井)



## (2) 弥生土器 (第 139 図・写真図版 90)

量的には多くないが、弥生時代の遺構である AD 5 住居跡の周辺から集中して出土している。土器型式的には 2~3 型式に分けられるが、出土量が少ないことや、いずれも小破片であることから、ここでは一括して記載する。

612 はほぼ全体が残存する短頸壺である。底部は平底で、体部は内湾して立ち上がり、ほぼ球形を呈す。頸部は緩く外傾し、口縁部は短かく外傾して開き、口唇部には刻みが連続する。文様は沈線区画された磨消縄文によって表現されている。頸部には下端に 2 本の平行沈線、中央に波状沈線が巡り、この間が縄文帯となっている。また、縄文帯内には 2 本の短かい沈線が、刺突文状に施されている。体部上端には 2 本の沈線間に縦方向の刻みが連続して施文され、中央部には連弧状の縄文帯が器面を巡る。縄文帯の中間部分には短かい沈線が断続的に施されている。下線部にも上部の文様に対応するように連弧状の縄文帯が施されているが、器面の剝落が著しく詳細は不明である。また、上下の文様は対峙する 2 カ所で、縦の弧状沈線文によって連結され、この部分は錨状を呈する。胎土には多量の砂を含み、器面は全体に脆い。

613~614 は壺の体部破片と考えられ、いずれも磨消縄文による文様を有する。613 は胎土に砂を含まず、焼成もよい。文様は変形工字文をモチーフとしたものであろうか。区画内には LR 単節斜縄文が横走る。614 は波状文的な縄文帯をもつ。器面は赤色塗彩されていたらしく、僅かではあるが顔料の付着がみられる。317 は三角形を基調とした区画内に LR 単節斜縄文が充填されている。また、頂部に 3 本の刻みを有する小突起が配されている。616 は鉢の口縁部と考えられる。上端には 2 本の沈線が巡り、この下位に波状沈線が施されており、これらに区画された内部には LR 単節縄文が横走る。617 は細い沈線文をもつ。器面は赤色塗彩されていたらしく、部分的に顔料の付着がみられる。618 は 3~4 本一組の細い沈線によって連弧状文が描かれている。619~621 は同一個体の可能性がある。上位には 2~3 本一組の細い沈線によって連弧状文 (山形文) が描かれ、下位には不整綾絡文を伴う撚糸文が施文されている。

622~638 は L 1 段の撚糸文を地文とする甕の体部片である。大半のものは、斜行あるいは縦走る。また、623・624・634 などは縦方向のものと、斜行するものが不整に交差している。胎土には砂を含むものが多く、器厚はおおむね薄い。639 は、横走る LR 単節縄文を地文とする体部下端の破片である。胎土には砂を多く含んでいる。 (酒井)

## (3) 石器

A・B 両区域から出土しているが、数量は少ない。剝片石器と礫石器とに区分し記載する。  
剝片石器 (第 145 図・写真図版 94)

640・641 の 2 点だけの出土である。640 は横形の石匙で、形状は三角形を呈する。全体に両

面からの細かい剝離調整が施され、頂部には二又に分れる角状のツマミを有する。641は横長剝片の一部に、粗雑な剝離調整によって刃部を作り出している。

#### 礫石器（第145・146図・写真図版94）

器種には磨石類（磨石・凹石・敲石）と砥石がある。磨石類の時期の詳細は不明であるが、砥石は出土地点の周辺の状況から推定して、奈良～平安時代の遺物であろう。

684・685は平・断面形とも楕円形を呈し、表裏両面に使用痕をもつ磨石である。686・688は断面形が隅丸の方形で、4面に使用痕をもつ。687・691は一表面に浅い凹みを有し、磨石と凹石の機態を合せもつ。690は一側辺部に敲打痕をもち、敲石としても利用された磨石である。692・693はほぼ全面が使用面となっている。694・695は小型の磨石である。

696～698は砥石である。696は4面が使用面となっており、このうち1面の中央は溝状に凹む。697は破損品である。4面が使用され、このうちの1面には、細い溝状の擦痕が4～5本観察される。698は縦長の砥石で、4面に使用痕を有する。 (酒井)

#### (4) 古代の土器

土師器・須恵器と鉄製品・鉄滓が出土しているものの、縄文土器の出土量に比較して少量である。

##### 土師器（第142図・写真図版91）

全体で4点の出土であるが、この中に坏1点、甕3点が含まれ、さらにロクロ使用成形と未使用成形の二種類ある。

##### ロクロ使用成形

坏(643)―口縁部～体部中位を残す破片で、内面が上部横方向、下位放射状のヘラミガキ、外面は横方向ヘラミガキ調整の後、内外面とも黒色処理されるものの、外面の一部は二次焼成によって消失している。胎土に極く微量の細砂粒が混じるも、全体として緻密な粘土を使用し、焼成は良好で淡い灰褐色を示す。大きさは口径14cm、底径不明、器高4.5cm以上である。

##### ロクロ未使用

甕(640～642)―642は底部～体部下位を残し、他は口縁部～体部上位を残存する。640・641は頸部に成形時の明瞭な段を有しない、器形が近似するといった共通点をもつが、他の特徴は異なる。640は体部上位に最大径をもち、頸部で窄み口縁部が直線的に外傾した後端部が部分的に外反し口唇が丸くおさまる器形を示し、器面が口縁部内外面ともヨコナデ、体部は外面が縦方向ヘラケズリ、内面は横方向ヘラナデで調整される。頸部に観察される段は成形時のものとは異なり、ヘラケズリされた際の筥の当りによって生じた段である。641は、最大径を体部にもち、頸部で軽く窄んだ後極く僅かな稜線で口縁部が外反する。口縁部内面は削がれて次第に厚

さを減じ、口唇部はナデによる幅の狭い平坦面をなす。器面調整は、口縁部内外面ヨコナデ、体部外面斜方向ヘラケズリ、内面横方向ナデである。642は周辺が若干突出する底部と外傾する体部とからなる。体部内面は横方向のヘラナデ、外面は横方向にナデられる下端以外は縦や斜方向にヘラケズリによる調整が入る。底面は粗雑で凹凸が多い。胎土は640・642が多くの砂粒が混入してやや粗く、極く少量の砂粒が混じり緻密な粘土を使用する641と好対照をなす。色調は640が赤褐色、641が淡い橙褐色、642は黒味がかかる黒斑をもつ灰褐色である。大きさは、640が口径14.1cm、642が口径17cm、642が底径11cmと推定される。

#### 須恵器（第142図・写真図版91）

坏3点、甕1点の出土であるが、いずれも破片である。

坏（644～646）— いずれもロクロ成形され、644は口縁部から体部中位、645・646は底部と体部下端を残す。644は体部下位が大きく窄んで底部に移行する器形を示し、内外面に成形時の軽い稜をもつ。645・646は回転糸切りによって切り離された後、底面の周辺部と体部下端に回転ヘラケズリの再調整を施す。胎土・色調・調整・器形などの比較によって、645・646は同一個体の破片である可能性が大きい。胎土は、644が細砂の混入したやや粗い粘土で、645・646は砂粒の混入が少なく緻密な粘土である。焼成は644がやや不良以外は良好である。色調は644が灰色、645・646が淡い褐色である。（高橋）

#### (5) 鉄製品

総点数71点には遺構外出土の46.8%33点を含み、それらはA区32点、B区1点とほとんどはA区沢沿いの黒色土内から鉄滓などと出土した。器種には鍬・鋤・刀子・轡金具・鍬・錐・釘・平鉄や鉄板状のもの・鉄塊とおもわれるもの・製品か鉄塊か不明なものがある。以下に各器種に分類して記すこととする。なお、平鉄・鉄板・鉄塊・器種不明も器種として一括した。

#### 鍬（第143図649～653・写真図版92）

5点ありいずれもA区からの出土である。すべて有茎型であるが651以外は茎部を欠失する。根の形状が三型に大別され、それぞれの中に大きさに若干の差がみられる。649・650は基部が軽く突出して肉が薄いわゆる平根で、平安時代の龍舌形と呼ばれる形に近い。根の大きさは、649が長さ4.8cm・幅3.3cm、650が長さ6cm・幅4.0cmと650がやや大型であるが、長幅の比率が前者1.45・後者1.5とほぼ近接し、平面形にはほとんど差がないことを表している。頸は前者が長さ2cm・幅1.1cm～0.9cm・厚さ0.5cm～0.3cm、後者は長さ2m・幅1.6cm～1.3cm・厚さ0.5cm前後といずれも短頸である。頸と茎の接点には突帯が全周し、茎の口巻部分は頸より細くなり断面が方形か長方形を示すらしい。651・653の根の大きさは、651が長さ3.9cm・幅1.8cm、653は長さ4.4cm・幅2cmと、649・650に比較して身が狭く基部に

わたくりのない尖根の鏃で平面形からは柳葉形といえよう。長幅の比率は 651 が 2.16、653 が 2.2 と大小はあるものの平面形はほぼ同じと考えられる。651 は頸の長さが 4 cm・幅 0.9 cm～0.7 cm・厚さ 0.5 cm～0.3 cm と 649・650 より長く長頸式の可能性をもち、茎は長さ 1.6 cm で断面が方形を示すらしい。653 は頸・茎を欠失し不明である。652 は根が長さ 7.5 cm、鋒から 2.5 cm～4.5 cm の部分の幅が 1.6 cm、最大幅 2 cm と長幅の比率が 3.75 を示す。形状は尖根柳葉形とした 651・653 をさらに長くした平安時代の定角形か柳葉形に属すると推定され、奈良時代の鋒の一類型の平面形にも近似している。

#### 鋤 (第 143 図 655・写真図版 92)

A 区南側の山裾 AA 3 住居跡付近の II 層から耳部～刃部の一部を残す個体が 1 点出土している。残存する大きさは長さ 14.1 cm、幅 5 cm～3.4 cm、厚さ 0.8 cm を示し、風呂受けは幅 1 cm、同深さ 1.5 cm～1.3 cm の V 字状をなし、同厚さは 0.4 cm～0.3 cm である。残存するのが一部であるため全体形を推定することは困難であるが、幅が頭部から刃先に寄るほど広くなるとともに、平面形が湾曲する傾向を示すことから考えると、全長が比較的短かく、風呂部が円弧を描くような形状をもつ刃部の比較的長い全体形が推定される。

#### 刀子 (第 144 図 657～659・写真図版 92)

A 区沢沿い黒色土から 2 点 (657・658)、同区南側の表土から 1 点 (659) が出土している。いずれも破損品で 658 は鋒、657・659 は刀身の一部を残存し、全体的なことは不明である。特に 658・659 は残存長 4.2 cm・3.3 cm、幅 1.2 cm・1.7 cm、厚さ 0.3 cm・0.5 cm、重さ 3.1 g・4.4 g と小破片であり、断面が三角形を示し長軸に破損面を残すことから刀子とした。657 は長さ 8 cm、幅 1.6 cm、厚さ 0.5 cm、重さ 17.4 g の大きさがあり、断面が三角形を示す棒状であることから刀子とした。棟は平らで両端に破損面を残す。

#### 轡金具 (第 143 図 656・写真図版 92)

水付部分の完形品が 1 点 A 区中央南寄りの黒色土層中から出土している。全長が 13.7 cm で一端に掬みの輪に取り付く外径 2.6 cm×2.6 cm、内径 1.4 cm×1.0 cm の環状をなす耳と、別的一端に外径 3.8 cm×3.2 cm、内径 2.1 cm×1.2 cm を示す環状の蛇口が棒状部とほぼ直角に付く。蛇口と掬みの輪に取り付く耳は丸棒を円形に曲げて作り出しているが、棒状部は一辺約 0.7 cm の角棒状で 9.7 cm の長さがある。重さは全体で 56.6 g である。

#### 鏃 (第 144 図 660・写真図版 92)

A 区山裾南側の I・II 層から 1 点出土しているが、一端を欠失する。幅 1.5 cm、厚さ 0.4 cm を示す平鉄を 2.8 cm の長さで 85 度の角度に折り曲げ、折り曲げた部分は先端が幅狭になるように加土しているが、薄くしてはいない。一端が残っていないため全体の形や大きさは不明であるが、残存長 5.2 cm、重さ 13.0 g である。

**錐** (第 144 図 662・写真図版 93)

A 区沢沿いの黒色土から 1 点出土している。全長 7.5 cm、重さ 6.1 g のほぼ完形と推定される。一端から 3.5 cm の部分に断面が 0.6 cm×0.5 cm の方形をなす最大径をもち、端部に向って次第に細くなり端部は尖るのが原形と推定されるが、現状は磨滅して丸味をもつ。他の一端は急激に太さを減じ、一辺 0.3 cm の断面方形をなしさらに次第に細くして端部に続く。太い部分を刃部、細い部分を茎として考え、四ツ目錐と判断した。

**釘** (第 144 図 654・663～669・675・678・写真図版 92・93)

10 点とも A 区の出土であるが、そのほとんどが沢沿いの黒色土に限定される。ほぼ完形に近いものは 654・663・664 の 3 点のみで、他は一部を残存するのみである。大きさは、長さが 3 cm 位から 7.5 cm 前後まであり、破損する個体にはそれ以上の長さをもつ例を含むかも知れない。太さには径 1.0 cm～0.3 cm まであり、細分するともっとも多いのが 0.4 cm の 4 点で、他は各 1 点が該当する。重さは 11.4 g～1.5 g の範囲であるが欠損品が多く単純に比較できない。断面はすべて方形を示し、一端に向って細くなり、頭部はいずれか一方に折れ曲る折頭釘である。

**平鉄** (第 144 図 670・写真図版 93)

BC5 住居跡南側のⅢ層をだめ押し中に 1 点出土している。長さ 6.8 cm、幅 1.0 cm で厚さ 0.5 cm の断面扁平な形状を示すことから平鉄としたが、両面に錆が厚く付着していることから原形は判然とせず、刀子の刀身である可能性も考えられる。やや湾曲し両端を欠出するらしいことから、製品の素材とするよりは製品の一部と考えるのが妥当であろう。重さは 16.1 g である。

**鉄板** (第 144 図 676・写真図版 93)

A 区山裾南側トレンチの上位から 1 点出土している。鉄板としたが、僅かに湾曲し平面形が不規則な多角形を示し、破損面も不規則であることから製品の一部と推定され、破損面の観察から鑄造品の可能性をもつ。大きさは長さ 5.7 cm、幅 3.4 cm、厚さ 0.6 cm、重さ 24 g である。

**器種不明** (第 144 図 661・677・679・680・写真図版 92・93)

A 区の黒色土中から 4 点出土している。この中には長さ 9.5 cm、幅 0.8 cm、厚さ 0.5 cm の平鉄をクランク状に曲げて加工した完形品である器種が不明な 661 と、棒状を示すが誘化が著しく原形がまったく不明のため、器種不明としたものが含まれる。しかし、後者がいずれも棒状を示すことから、釘である可能性が強い。

**鉄塊** (第 144 図 671～674・681、写真図版 93)

A 区沢沿いの黒色土中から鉄器を製作する際の素材となる鉄塊と推定されるものが出土している。これらのうち 671～674 は断面が扁平な板状を示すとともに、周囲の断面が若干傾斜するものの直線的な切断面を示し、鑿状の工具で人為的に細片に切り分けて炉で溶解して製品を

作ったことを示すものであろう。681の形状は鉄滓である可能性をもつが、大きさにしては重く錆化の著しい鉄塊の可能性もある。前者4点は他の製品に比較して錆化も少なく地金の残存が非常に良好で、重さも85g～210gと製品のそれに比較して重い。(高橋)

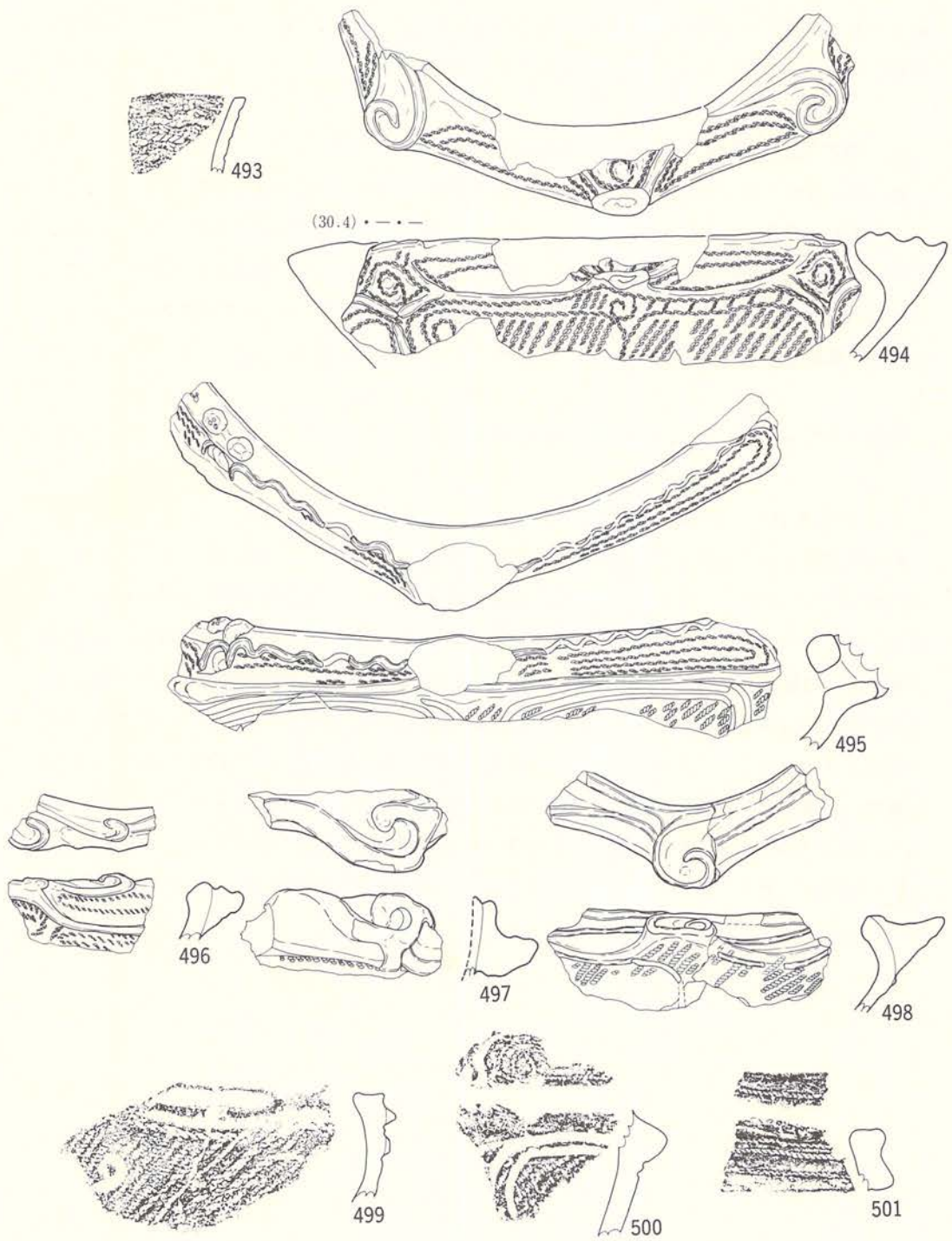
#### (6) 鞆の羽口、鉄滓(第146図・写真図版95)

鞆の羽口は全てA区からの出土である。3点の実測図を掲載した。669は先端に近い部分である。一部を欠損するが、全体径は約8cmで、このほぼ中央に径約3cmの通風孔をもつ。胎土には砂の他に、白い石英状の物質を含み、若干の金雲母も含まれる。先端部には鉄滓が付着する。700も先端に近い部分の破片で、表面に鉄滓が僅かに付着している。701は先端部の破片で、鉄滓は表面及び先端部、通風孔の内面にも付着している。写真図版95-a～dは羽口の破片である。

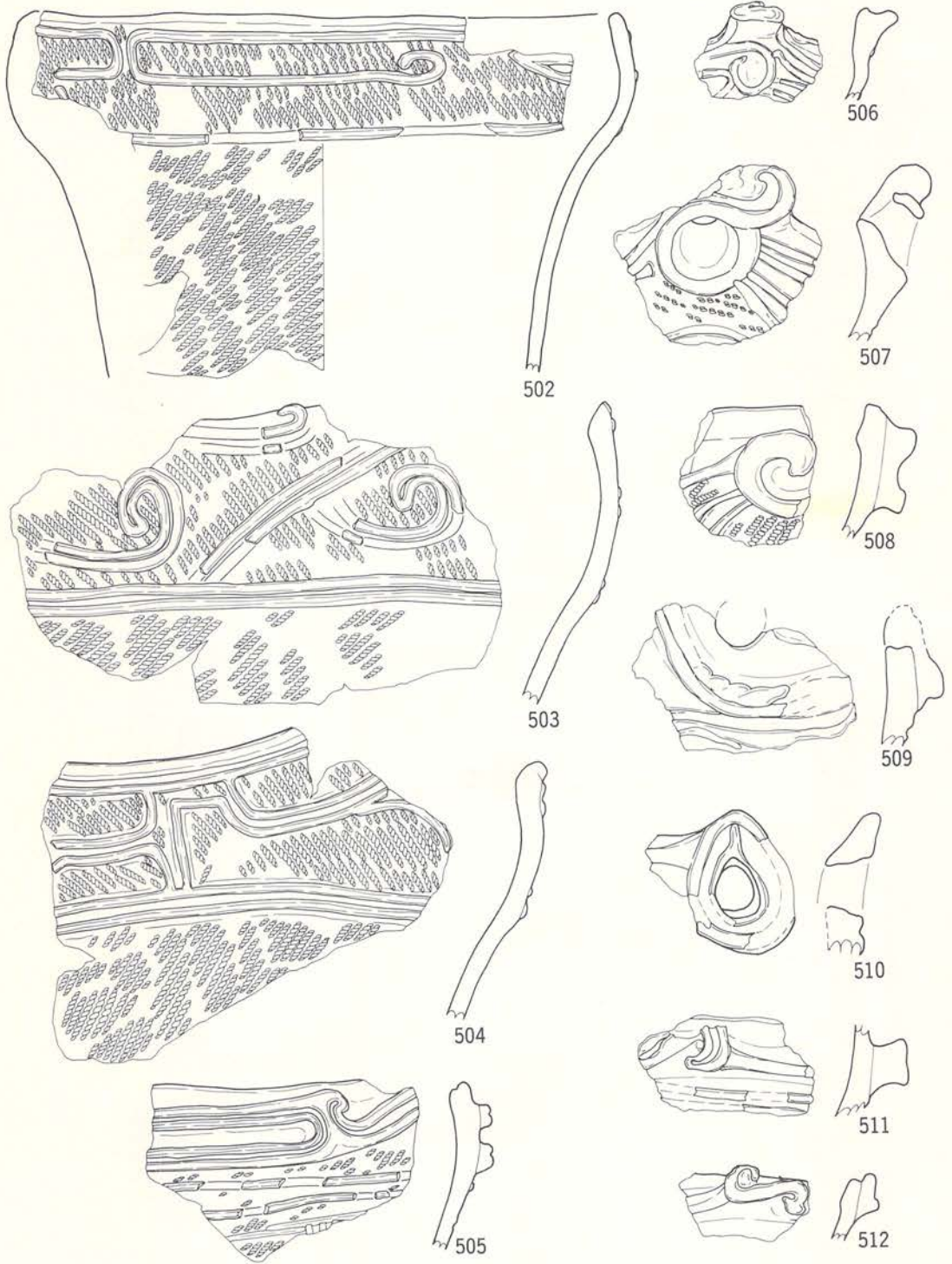
鉄滓も全てA区からの出土である。総重量は約18.8kgである。(酒井)

#### (7) 中世の遺物(第142図：写真図版91)

中世の遺物として中国製品の白磁碗の破片が1点出土している。(681)破片は高台の一部から体部中位までを残し、高台から高台脇・腰の一部を露胎にする以外は全面に施釉される。釉は透明なガラス質で生地の子目目が明瞭にみえ、体部外面に0.3mm位の沈線が巡る。内面は茶詮摺りの部分に沈線が全周し、見込み部分には細線による唐草文が型押によって付される。全体的な器形は小破片のため明確にし難いが、高台脇を平らに幅0.6cm～0.5cmに削り、体部は外面が僅かに内湾して外傾するらしく、高台は外方に軽く踏ん張る。内面は見込みから体部が湾曲し、腰部で若干強く内湾している。器厚は破片の上端で約0.4cm、高台脇で0.85cmである。胎土は砂粒のまったく混入しない緻密な粒土が使用され、断面に光沢をもつほど焼成は良好であるが、断面に多くの小さな鬆穴があり、色調は淡い灰緑色を示し、高台部分は若干黒味をもつ。(高橋)

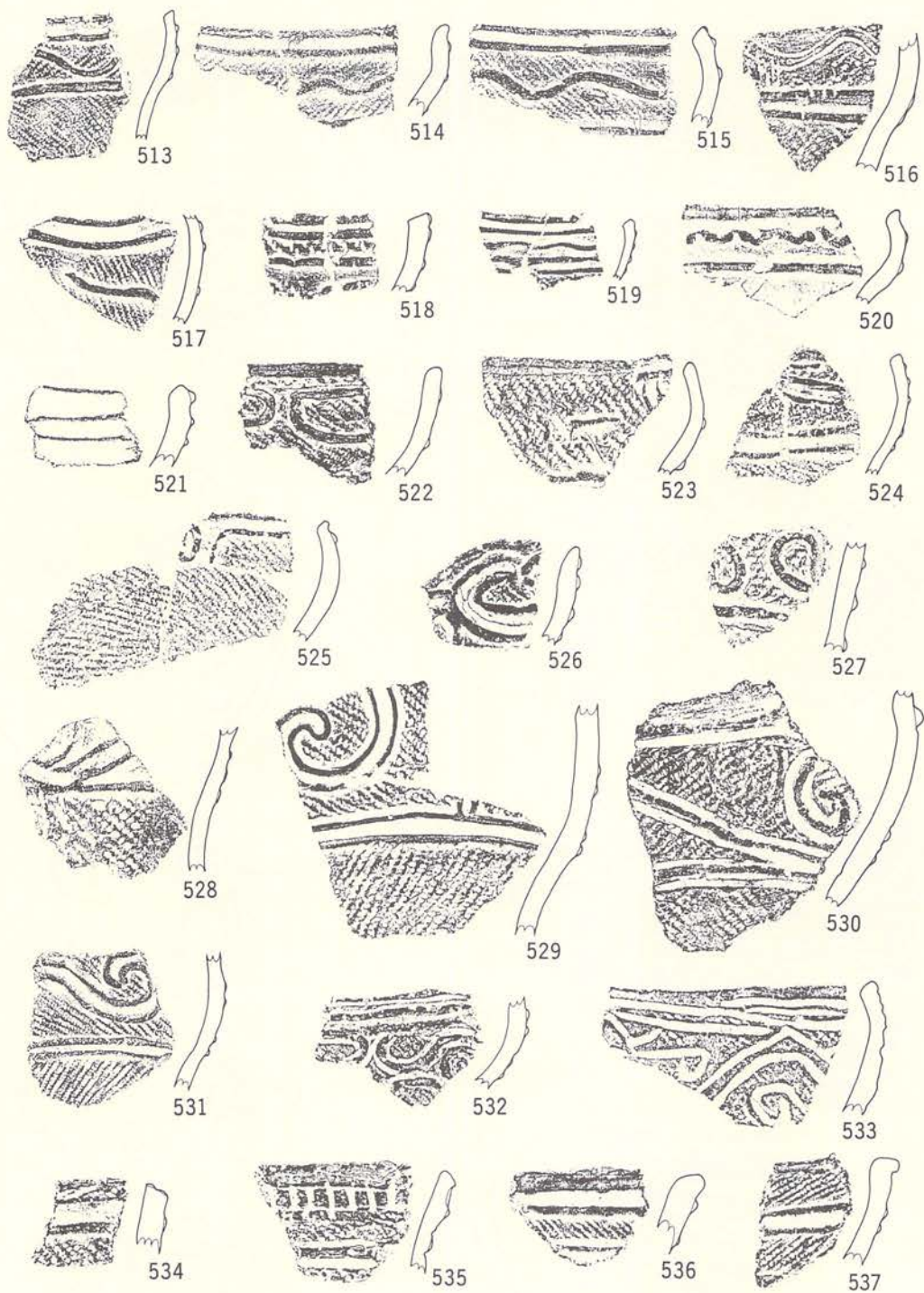


第 134 図 遺構外出土遺物(493~501)

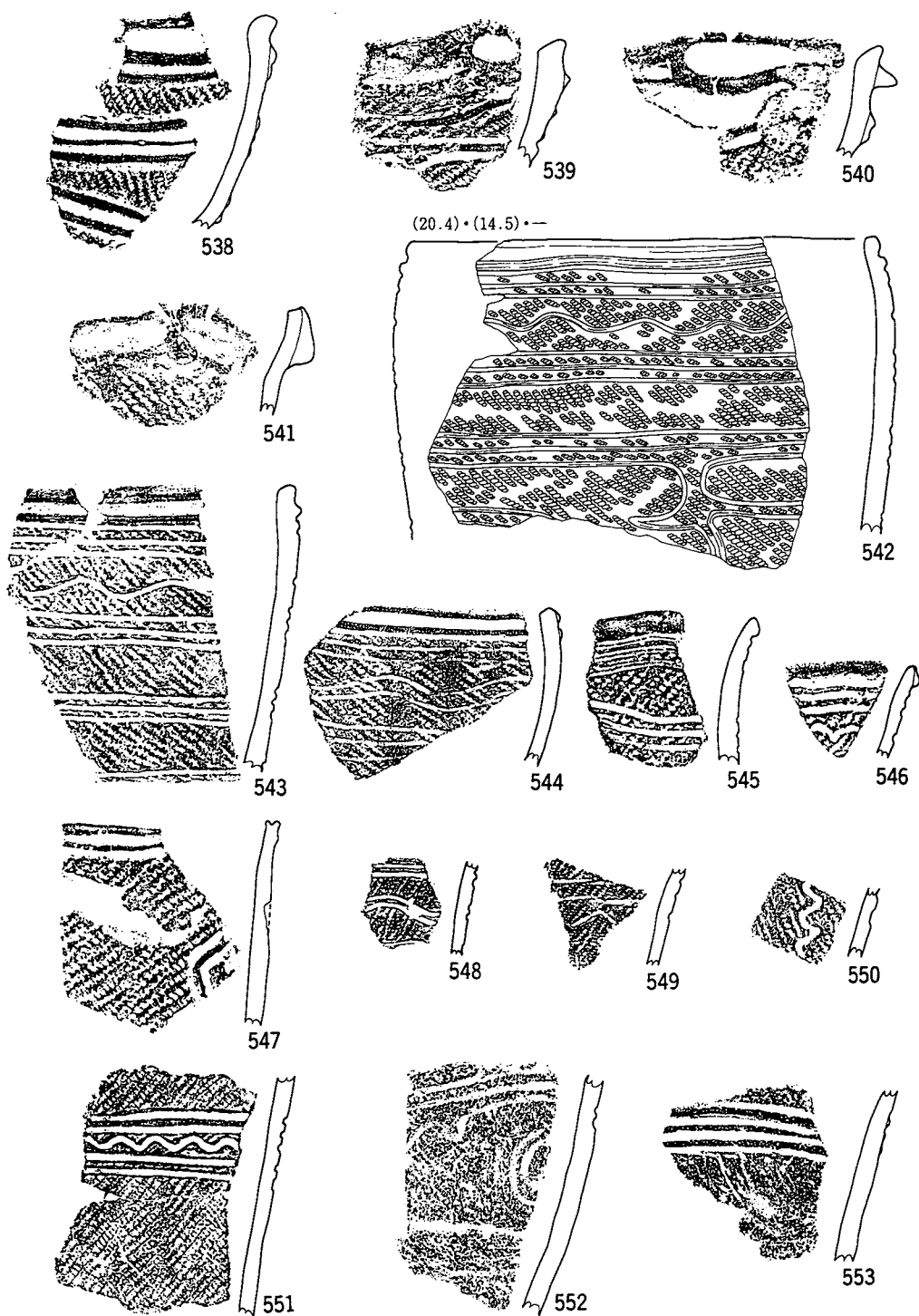


第 135 图 遺構外出土遺物(502~512)

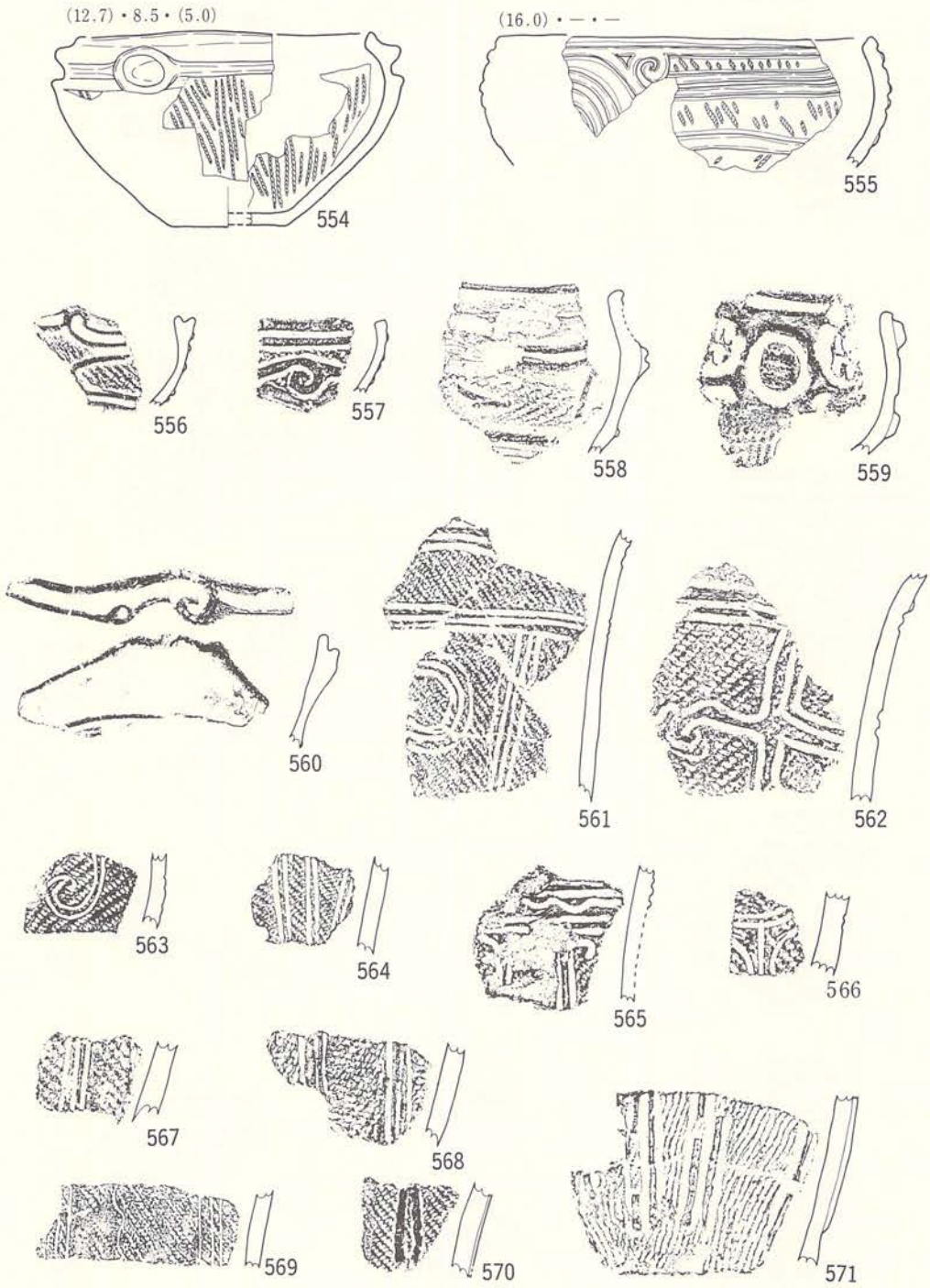




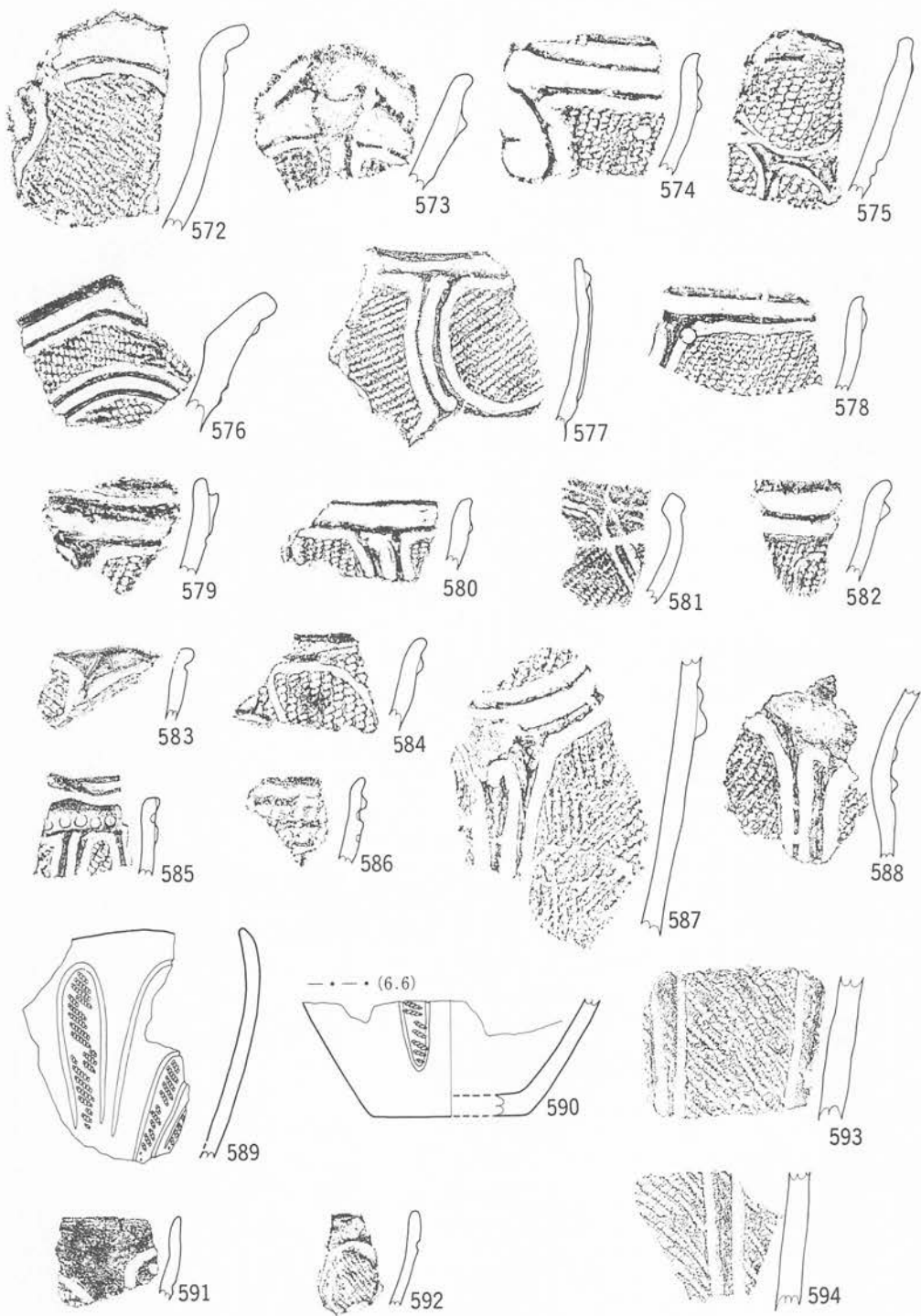
第 136 図 遺構外出土遺物(513~537)



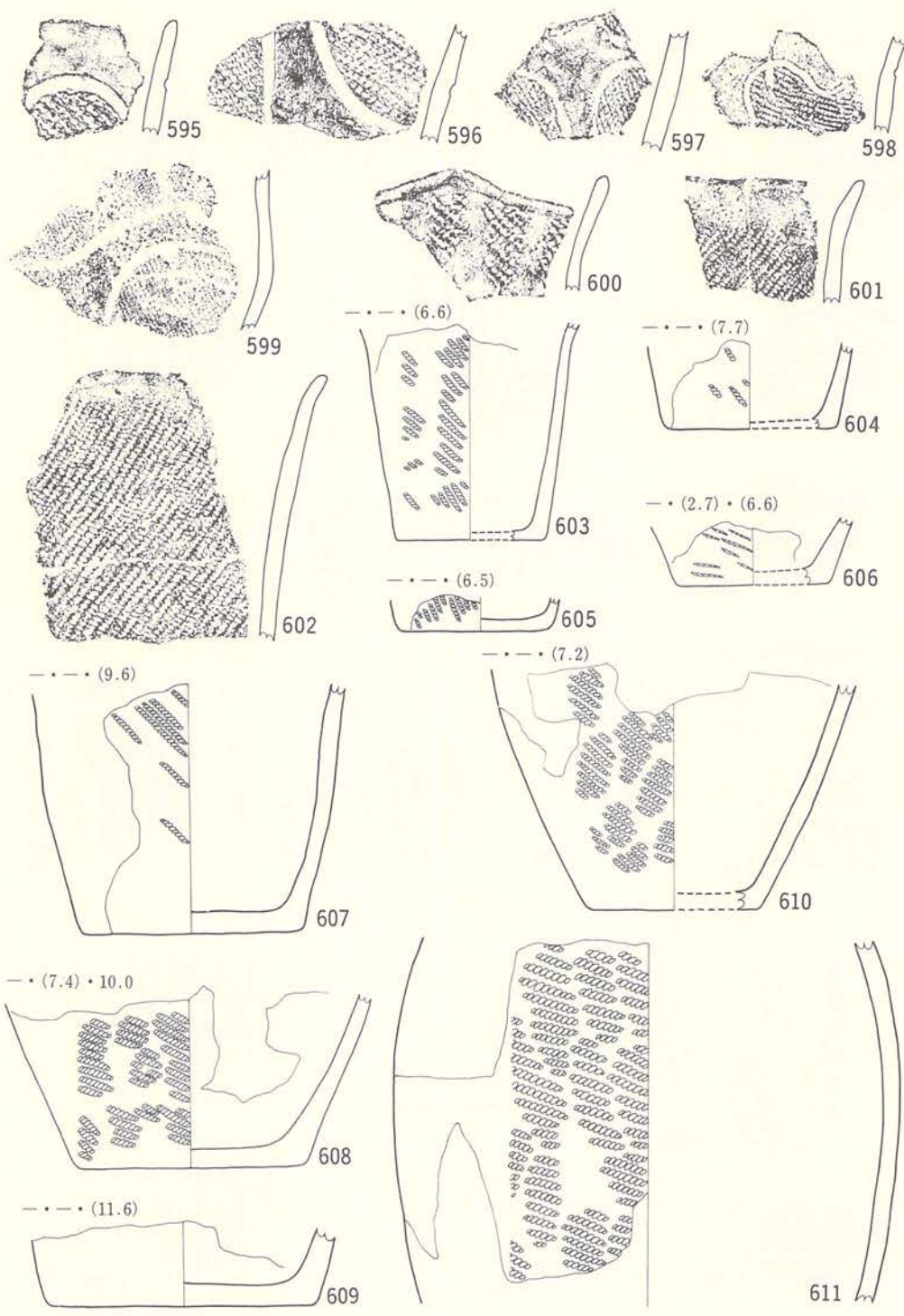
第 137 図 遺構外出土遺物(538~553)



第 138 図 遺構外出土遺物(554~571)

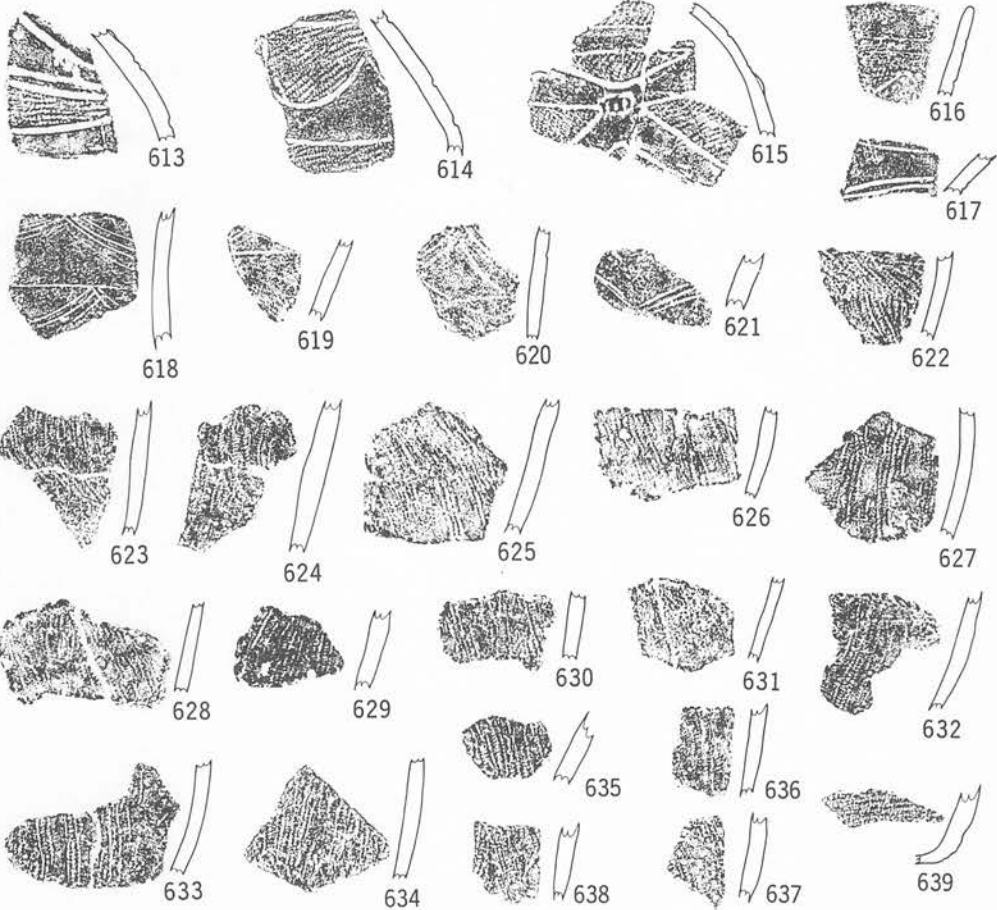
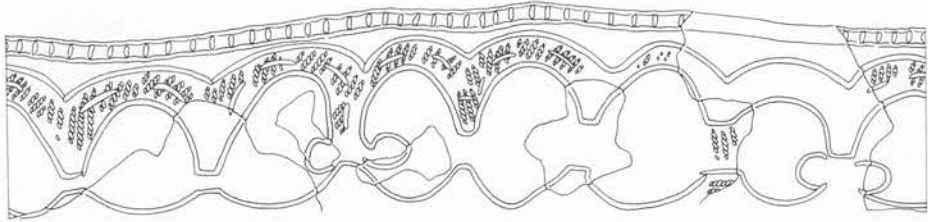
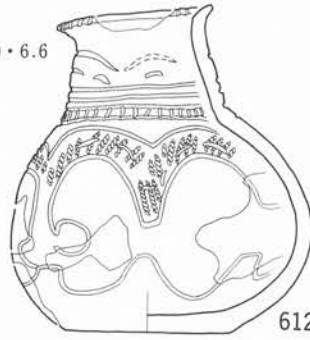


第 139 図 遺構外出土遺物(572~594)

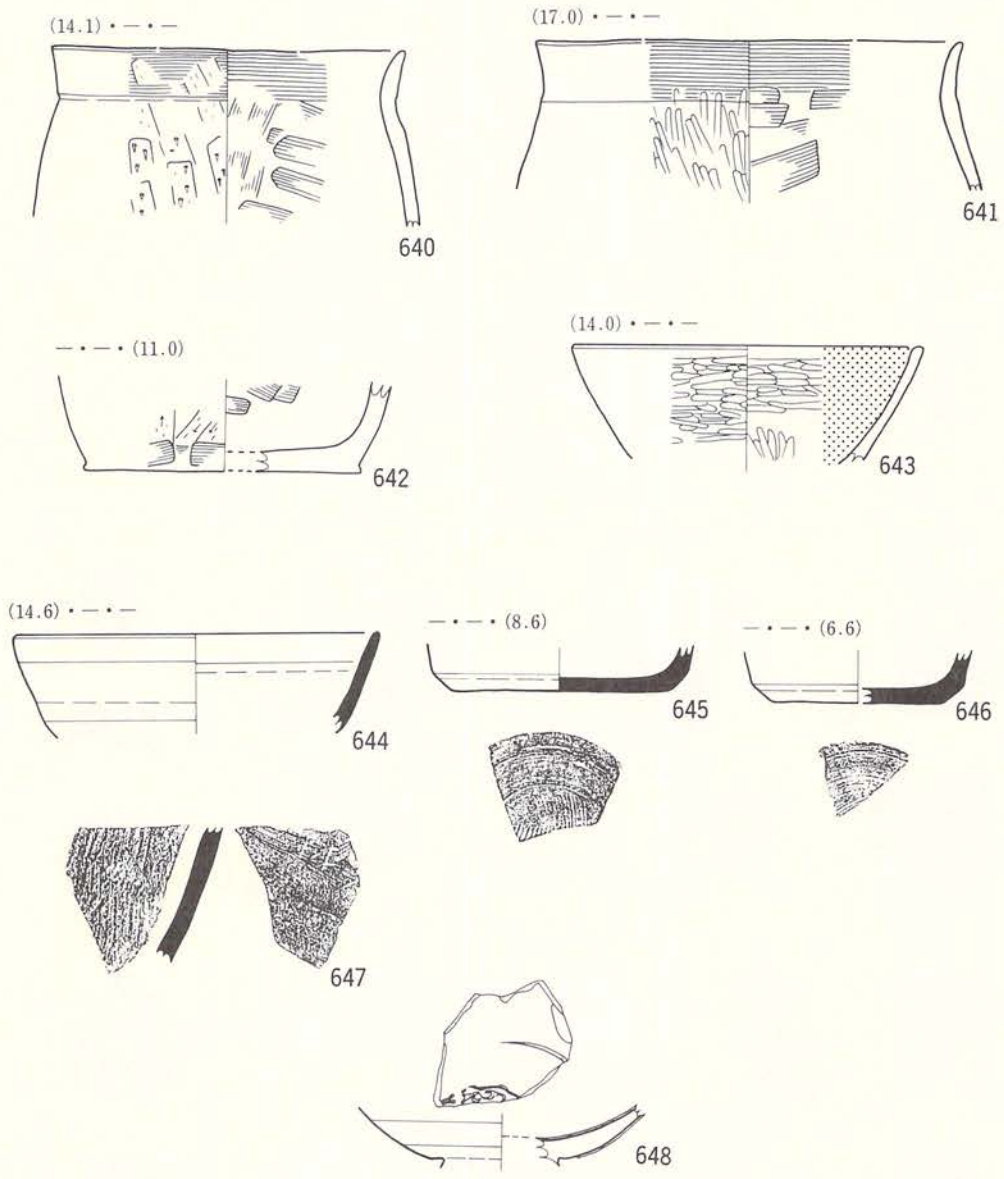


第140図 遺構外出土遺物(595~611)

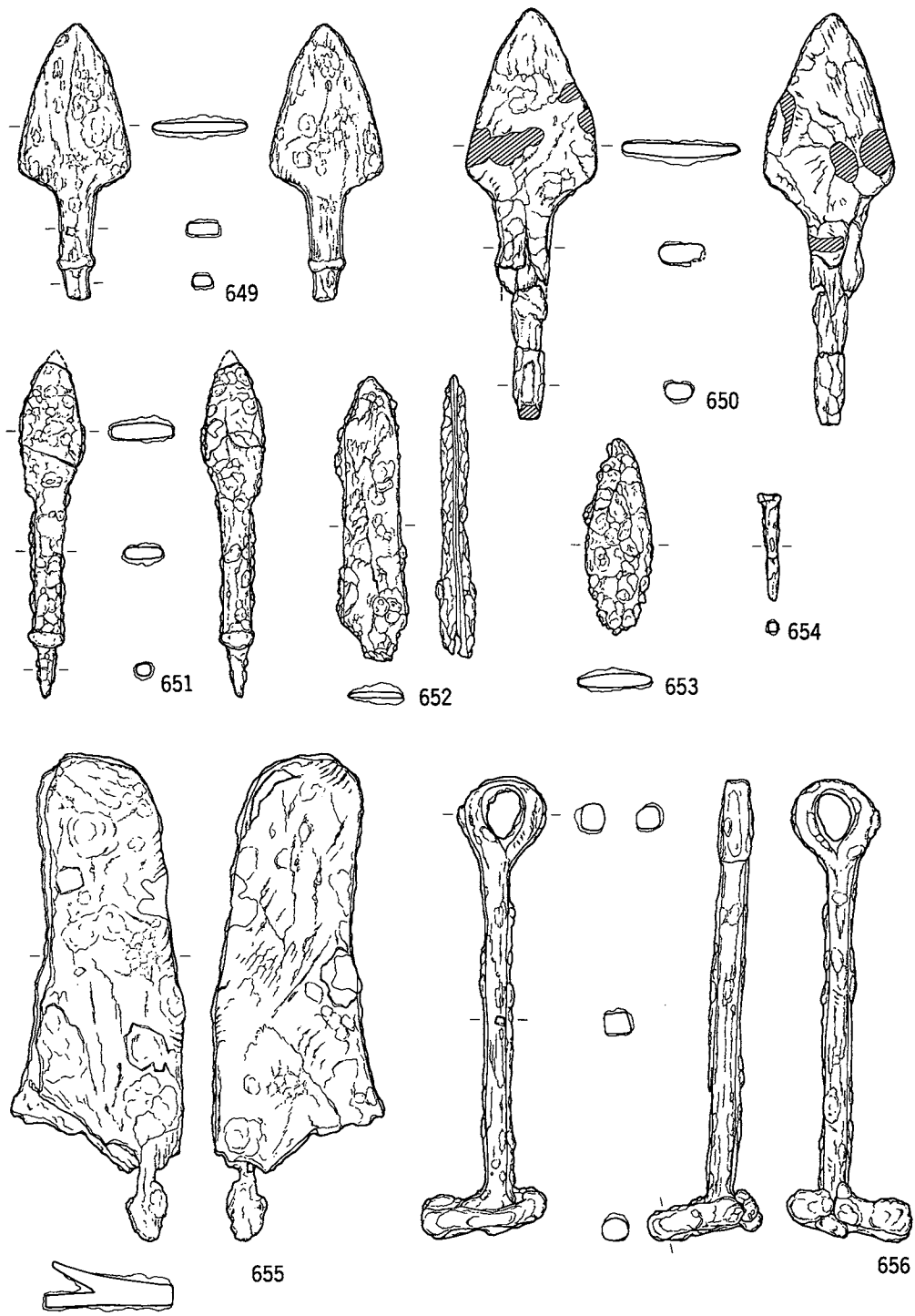
6.4・13.0・6.6



第 141 図 遺構外出土遺物(612~639)

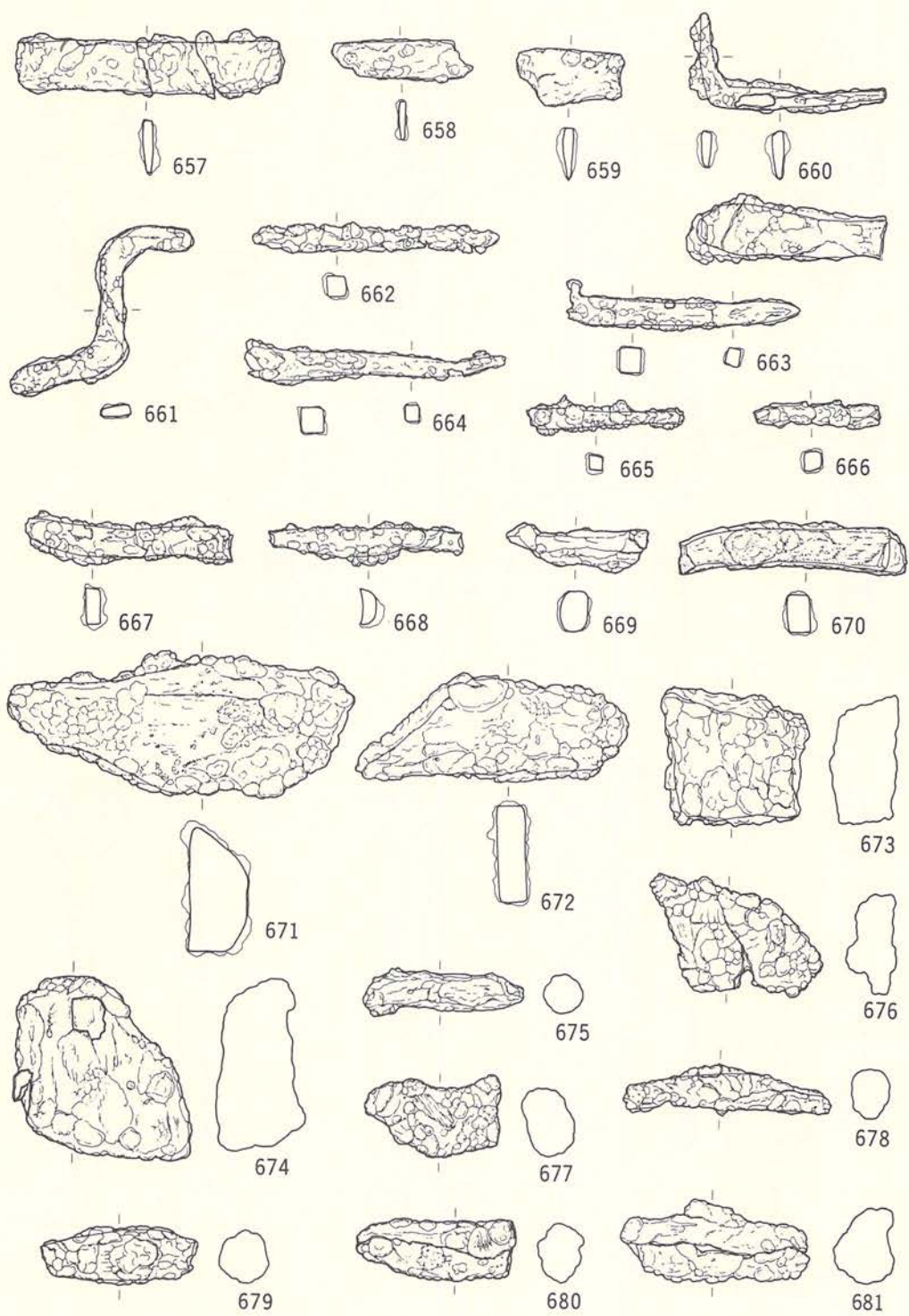


第 142 図 遺構外出土遺物(640~648)

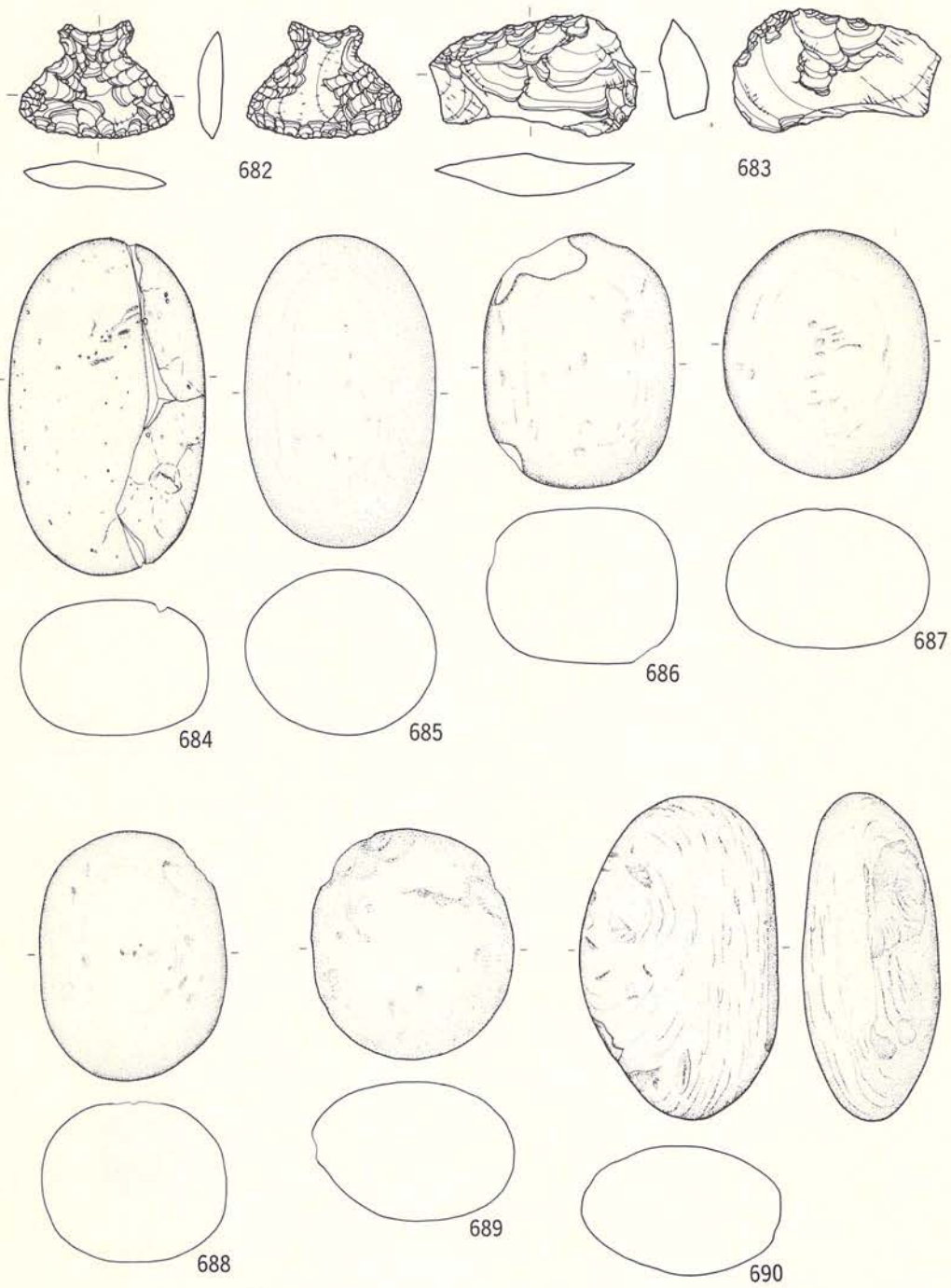


第 143 図 遺構外出土遺物(649~656)

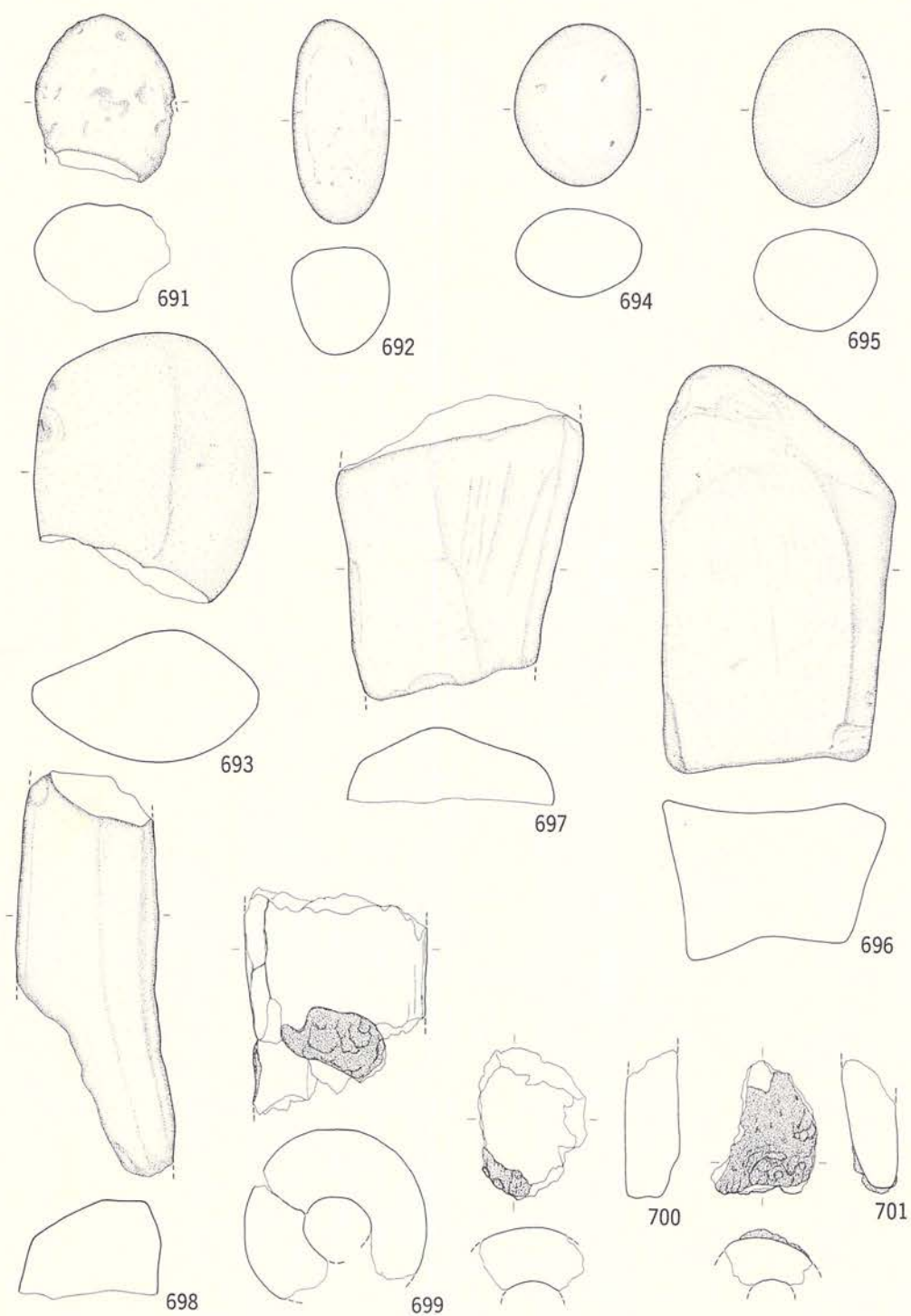




第 144 図 遺構外出土遺物(657~681)



第 145 図 遺構外出土遺物(682~690)



第 146 図 遺構外出土遺物(691~701)

## V ま と め

### 1. 縄文時代

#### (1) 遺構

縄文時代の遺構は、竪穴住居跡 25 棟、土坑 4 基である。出土した遺物から、これは全て縄文時代中期の遺構である。以下種別ごとに、簡単に整理してまとめとする。

##### 1) 竪穴住居跡

###### 〈時期・占地〉

検出された 25 棟は全て縄文時代中期に位置づけられるが、出土した土器から中期中葉・後葉・末葉の 3 期に細分される。以下、遺構外出土土器の分類と照合しながら細分を試みる。

II 群 1 類土器（中期中葉）を伴う住居跡は AA 2・AB 3・AC 4・AD 5・AE 6・AE 8・AF 7・AI 5・AJ 5・AM 8・BC 5—1・BC 5—2・BH 13 住居跡の 13 棟である。このうち、AA 2・AB 3 住居跡は重複するが、遺構の残存状況及び出土遺物からも新旧関係は明確ではない。AD 5 住居跡は、重複する AC 6 住居跡を含めた出土遺物の検討からの推定である。また、AF 7・BH 13 住居跡は少量の遺物からの推定である。

さらに、これら 13 棟の住居跡は出土土器の特徴から、前半期（大木 8a 式期）AA 2・AB 3・AD 5・AF 7・AI 5・AJ 5・AM 8 住居跡の 7 棟、後半期（大木 8b 式期）AC 4・AE 6・AE 8・BC 5—1・BC 5—2・BH 13 住居跡の 6 棟に細分される可能性をもつ。

II 群 2 類土器（中期後葉）を伴う住居跡は AC 6—1・AC 6—2・AI 8・AK 10 住居跡の 4 棟である。しかし、いずれの遺物の出土状況が明確ではなく、出土遺物の検討からの推定である。

II 群 3 類針器（中期末葉）を伴う住居跡は BA 2・BA 14・BB 6・BD 3・BF 6・BF 7・BG 12—1・BG 12—2 住居跡の 8 棟である。このうち BF 7 住居跡は BF 6 住居跡を切る重複関係にあるが、出土土器から推定して、いずれも該期に属するものと考えられる。

調査区内における各時期の住居跡の占地を見ると、1 類土器の前半期に位置づけられる住居跡は全て A 区に占地し、後半期に属する住居跡は A・B 両地区に検出されている。また、2 類土器を伴う 4 棟は A 区、3 類土器を伴う 8 棟は全て B 区に占地している。

住居跡間の距離からみた各時期における同時存在の可能性では、1 類前半期は最大 5 棟、後半期は A 区 2 棟、B 区 2 棟の計 4 棟、2 類期では 2 棟、3 類期では 6 棟となる。

A 区では調査区と同様の地形面が南北に広がるため、住居跡の占地形態を把握しきれないが、B 区では前述の 6 棟の住居跡が沢筋を囲む占地が想定できる。

なお、大槌町教育委員会が行った調査で検出された2棟は、いずれも1類前半期に属する。

#### 〈平面形・規模〉

住居跡の平面形は大きく、方形を基調とするもの(A型)と円形を基調とするもの(B型)に分けられる。さらに方形を基調とするものは、隅丸方形(A<sub>1</sub>型)、隅丸台形(A<sub>2</sub>型)、隅丸長方形(A<sub>3</sub>型)、長方形(A<sub>4</sub>型)に細分される。また、同形を基調とするものは、円形(B<sub>1</sub>型)、楕円形(B<sub>2</sub>型)に細分される。しかし、遺跡が載る地形が緩斜面であるため、ほとんどの住居跡は斜面下位にあたる壁が流失しており、これらの分類にあたっては、明確に平面形が把握できた5棟を除いて、残存部分からの推定による。

時期別には1類前半期ではAM8住居跡がA<sub>1</sub>型、AD5・AF7住居跡がA<sub>4</sub>型、AA2・AB3・AI5・AJ5住居跡はB<sub>1</sub>型となる。1類後半期ではAE6・BH13住居跡がA<sub>4</sub>型、AC4・AE8・BC5-1・BC5-2住居跡がB<sub>1</sub>型である。

2類期ではAK10住居跡はA<sub>1</sub>型、AC6-1・AC6-2・AI8住居跡はB<sub>1</sub>型である。3類期ではBG12-1・BG12-2住居跡がA<sub>1</sub>型、BA2住居跡がA<sub>2</sub>型、BD3住居跡がA<sub>3</sub>型、BA14・BB6・BF7住居跡がB<sub>1</sub>型、BF6住居跡がB<sub>2</sub>型となる。なお、追加調査における2棟の住居跡は、A<sub>1</sub>型1棟、B<sub>2</sub>型1棟である。

以上のことから、各時期とも方形基調の住居跡と円形基調の住居跡が存在している。形態別比率では、中葉～後葉期ではB型の住居跡がA型をやや上回り、末葉期になるとほぼ半々の割合となる傾向がみられる。

中期中葉期に限られるが、同時期の集落跡が確認されている紫波町西田遺跡と一戸町馬場平II遺跡の例と比較してみる。西田遺跡では前半期の14棟の住居跡のうち、方形基調のものは4棟、円形基調(楕円形)が7棟、不明4棟となっている。後半期の18棟では、方形基調8棟、円形基調7棟(楕円形6、円形1)、不明1棟である。馬場平II遺跡では、前半期の13棟は全て方形を基調としており、後半期の7棟は方形2棟、楕円形5棟となっている。この2遺跡からも、該期の住居跡の形態には方形基調と円形基調があることがわかる。また、前述の住居跡間の距離をみても、これら両形態が集落内で同時存在していた可能性が指摘できる。

後葉～末葉期の住居跡でも、円形基調のものと方形基調のものが存在し、時期が下がるにつれ方形基調の割合が増す傾向は、他の遺跡例からも窺われる。

前述のとおり、住居跡全体の形状が明かなものが少ないため、規模の比較も直接床面積の計測ができないものが多い。残存部から推定される数値のため客観性を欠くが、1類期の最大のAE8住居跡と最小のAF7住居跡では、約3.4倍の面積差がある。他は13～10㎡の規模のものが主体を占めるようである。2類期では今回検出された住居中最も大きなAI8住居跡(約27㎡)があるが、最小のAC6-1・2住居跡(約10㎡)との差は1類期ほどではない。3類期で

は各時期通じて最も小さいBB6住居跡(約3.6㎡)があり、最大のBG12-1住居跡との差は5倍以上となる。しかし、他のものは約15㎡前後の規模が推定され、各時期の中で最もまとまりがみられる。

#### 〈炉〉

炉跡が検出されたものは17棟である。時期別には、1類前半期3棟、2類期5棟、3類期3棟、未葉期6棟となる。1類前半期ではAM8住居跡が地床炉、AF7・AJ5住居跡が石囲炉である。AM8住居跡において炉としたものは、床面中央の南壁際に検出された現地性焼土で、流失部分に他の炉があった可能性もある。AF7住居跡は床面中央部に、AJ5住居跡は、床面中央の西壁寄りに石囲炉をもつ。なお、追加調査で検出された2棟は、いずれも床面中央部に石囲炉をもつ。後半期の住居跡は全て石囲炉を有する。このうち、AC4・AE6住居跡は床面中央、BC5-1・BC5-2は住居跡は中央やや南西寄り、AE8住居跡は床面中央西壁寄りに位置する。

前半期・後半期を通じて、規模がやや大きい住居跡であるAE8・AJ5住居跡では石囲炉が西壁(斜面の下方)に寄る。また、AE6・AF7住居跡のような長方形を呈するものや、円形基調でも規模の小さいAC4・BC5-1・BC5-2住居跡では、ほぼ中央に位置する傾向が窺われる。

前述の2遺跡における炉の形態を見ると、西田遺跡では前半期の14棟のうち、地床炉12、石囲炉2、後半期18棟では地床炉10、石囲炉2、土器埋設炉2、不明2である。馬場平II遺跡の前半期では、土器埋設炉6、土器埋設炉+石囲炉3、石囲炉3、地床炉2である。後半期では地床炉5、土器埋設炉+地床炉1、石囲炉となっている。西田遺跡では、前半・後半を通して地床炉の占める割合が高く、石囲炉・土器埋設炉は少ない。馬場平II遺跡では、前半期には土器埋設炉が多く、石囲炉と土器埋設炉を合せもつものと石囲炉がこれに次いでいる。後半期では、地床炉が多くなる傾向にある。

夏本遺跡と比較した場合、この2遺跡と比較して、石囲炉を有する住居跡の割合が高く、地床炉は少く、土器埋設炉をもつ住居跡は無い。土器埋設炉をもつ住居跡は、盛岡市大館町遺跡群からも検出されており、割合は少ないものの該期の炉の形態としては普遍的な要素であるが、当遺跡の検出例は特異な傾向と言えよう。

2類期では、3棟の住居跡から炉が検出されている。いずれも石囲炉で、AC6-1・AC6-2住居跡では床面中央やや西寄り、AI8住居跡は中央西寄りに位置している。これは1類期の住居跡の規模と炉の位置関係にみられる傾向と同じである。また、次段階の3類期にみられる複式炉は、みられない。

3類期では6棟の住居跡に確認されている。形態はBB6住居跡が石囲炉、BF6住居跡が掘り込み上の石囲炉、BA12住居跡は地床炉、BA2・BD3・BG12-1住居跡は複式炉を有する。なお、BF6・BG12-1住居跡は、これらの炉の他に地床炉を合せもつ。また、明確に検出でき

なかったが、BF 6 住居跡の掘り込み式石囲炉の南壁寄りの部分は、炭化物や焼土粒が他の床面に比べて多く、前庭部である可能性がある。

炉が設置される位置は、BB 6 住居跡は床面中央やや南寄り、BA 14 住居跡は中央やや北寄り、他は全て斜面下方の壁に寄る。また、BF 6 住居跡の地床炉は中央やや東寄り、BG 12—1 住居跡では中央やや北寄りに地床炉をもつ。

複式炉の形態は、BA 2・BD 3 住居跡が石囲炉＋掘り込み部（前庭部）、BG 12—1 住居跡は石囲炉＋石囲炉＋掘り込み部（前庭部）である。BD 3 住居跡の炉は、全体に掘り込みが深く、これは BF 6 住居跡にみられる掘り込み式石囲炉との関連が考えられる。BG 12—1 住居跡の複式炉が大きいことや、BB 6 住居跡が石囲炉であることは、住居跡の規模との関係も考えられる。

なお、BA 14 住居跡では南側が調査区域外にかかり、この部分に主要となる炉が存在する可能性もある。

#### 〈重複・建て替え〉

住居跡相互の重複がみられた例は 7 例である。大半は新旧関係を把握できたが、AA 2・AB 3 住居跡の新旧関係は不明である。また、同時期に属する住居跡間の重複は 3 例で、このうち、BG 12—1・2 住居跡は拡張に伴う重複と考えられる。同時期・同位置での重複は AC 6—1・2 住居跡・BC 5—1・2 住居跡の 2 例である。いずれも出土した土器から推定して、新旧 2 つの住居跡間に長い時間差は認められず、短い時間中での建て替えと考えられる。

#### 〈柱穴・壁〉

柱穴配置の明確な住居跡は少なく、1 類期では AF 7 住居跡だけである。主柱穴は西側隅 2 本と東側隅からやや内側に寄った 2 本の 4 本で構成される。これらはいずれも壁に沿って配置されている。なお、対応する柱穴が検出できなかったものには、AE・6 BC 5—1・BC 5—2 住居跡がある。

2 類期では AI 8 住居跡が 6 本柱の可能性もある。3 類期では BA 2・BA 14 住居跡が 4 本柱となる。このうち、BA 2 住居跡では 2 本が北東壁に接し、2 本は炉の両脇に配置される。BD 3 住居跡は、床面の長軸線上に 2 本配置され、棟持柱的構造が考えられる。また、この住居跡の北東壁は緩くオーバーハングし、上屋構造に関連した形態と思われる。BG 12—1 住居跡は、壁に沿って等間隔に小柱穴が配される。また、この他に主柱穴と考えられる 2 本を伴うが、対応する柱穴は検出できなかった。

#### 〈附属施設〉

AC 4・AI 8・BF 6 住居跡から、貯蔵穴と考えられる小土坑が検出されている。AI 8 住居跡のものは、床面中央東壁寄りに位置し、形態はフラスコ状を呈する。AC 4 住居跡のものは、東壁に接する楕円形の土坑である。BF 6 住居跡のものは、東壁に接する楕円形の浅い凹状の土坑で

ある。

AF7住居跡は、東壁中央部に奥行26cm、床面からの高さ30cmの不整な半月形を呈する段状の張り出しをもつ。このような張り出しは、馬場平II遺の該期の住居跡に多くみられる他、盛岡市大館町遺跡群では、内部に段状に張り出す施設をもつ住居跡が検出されている。いずれも“土壇状施設”、“ベンチ状施設”と呼ばれ、呪術的意味合いの強い施設とされるが詳細は不明である。

## 2) 土坑

4基の土坑は全てA区から検出された。いずれも断面形はフラスコ形を呈し、底部径は2m前後、深さは1m以上と大型である。出土した土器から時期を検討すると、AC4土坑は3類期、AF4・AG3・AI3土坑は1類前半期に位置づけられる。

占地も全てA区の東側に寄り、尾根と緩斜面部の境に構築されている。他の遺構と重複するものはAC4土坑1基で、1類後半期のAC4住居跡を切っている。1類期の3基は、同時存在も可能な位置関係にあり、該期の集落に伴う遺構と考えられる。

## 小結

以上、当遺跡で検出された住居跡25棟、土坑4基の特徴を述べた。今回の調査で、縄文期の夏本遺跡は、中期中葉～後葉期の集落跡であることがわかった。調査区域内での各時期の集落の動きを見ると、中葉前半期は主にA区を中心に、7棟前後（追加調査分を含む）の住居跡が集落の一部を構成していたものと考えられる。後半期にはB区も含めて4棟前後の営みが窺われる。後葉期に入ると再びA区を中心として2棟前後の動きがみられ、末葉期ではB区を中心とする6棟前後の住居跡が集落を構成していたものと考えられる。

今回検出された土坑は4基と少ないが、占地面积で居住地との使い分けが明確にみられ、好資料といえる。

内陸部や県北部における他地域の遺跡との比較では、住居跡の形状と組成に多くの共通点が見られる一方、炉の形態では特異な一面も窺われた。

調査区と同様の地形面はA・B両地区の南北に広がり、遺跡全体の集落跡はより大規模であることが予想される。各時期の住居跡の動きやこれに対応する土坑群の占地や分布の問題、他地域の遺跡とのより詳細な比較・検討が今後の課題となろう。 (酒井)



## (2) 遺物

縄文時代の出土遺物には土器・石器・石製品がある。大半は土器で、石器・石製品は少ない。

### 1) 土器

出土した土器には前期の土器（第Ⅰ群）と中期の土器（第Ⅱ群）がある。このうち、中期の土器は、中葉（1類）、後葉（2類）、末葉（3類）に細分される。以下、これらについてその器形や文様構成について整理する。

#### 〈第Ⅰ群土器〉

B区遺構外から1点出土した。口縁部に不整な綾絡文が施された小破片で、胎土には僅かに植物繊維が含まれる。胎土に含まれる繊維の量が少ないことから、大木2式とした。今回の調査では、該期の遺構は検出されていないが、この時期は縄文海進期にあたり、遺跡周辺の環境等も含めて、興味ある資料といえる。

#### 〈第Ⅱ群土器〉

出土した土器の大半を占める。各類に対応する土器型式は1類…大木8a・8b式、2類…大木9式、3類…大木10式である。ここでは、第147図を基に各時期の特徴を整理する。

1類土器はA・B両地区から出土しているが、出土量は該期の遺構が集中して検出されたA区が卓越する。破片資料が多く、全体の文様意匠が把握できないため、8a・8b式の細分は行なわなかった。

①～③の土器群である。①～③は縄文原体の側面圧痕による文様をもつ。この手法は前段階である大木7b式に盛行するもので、これらは前段階の残存形態であろう。④～⑦はキャリパー形を呈していない土器群である。④は口唇部に③にみられるような粘土紐の貼付をもつ。⑤⑥は口縁上端部に縦方向の刻みを有し、①との関連が考えられる。⑦のような全体に内湾する器形は、後半期の8b式末期に見られる形態であるが、体部文様は④に類似している。これらの土器は、体部の全体に沈線による文様が施されている。

⑧～⑫、⑮～⑲は典型的なキャリパー形深鉢で、⑬⑭はこれらに伴う鉢形土器である。いずれも口縁部上端と下端に隆帯が巡り、この区画内に文様を有し、体部には地文だけが施文されている。口縁部形態には平縁を呈するもの⑧～⑫⑮⑲と4単位の突起を有するもの⑮⑯、波状を呈するもの⑰がある。

文様は隆帯によるものが多く、隆沈線や沈線文がまれにみられる。文様意匠は⑧～⑬が曲線文・平行文・曲折文である。⑭～⑲は渦巻文を配した文様をもつ。⑮は8b式に多用される「棘状」の文様をもつが、まだ稚拙的なものである。⑳㉑は口縁部を欠くが、本来キャリパー形を呈するものと考えられる。これらは体部にも縦方向に展開する沈線文が施されている。㉒は隆

帯による懸垂文をもち、末端は「棘状」となっている。㉔は半粗製といえる深鉢で、口縁部に太い隆帯による渦巻文をもつ。

これらの文様のうち隆帯によるものには、⑩や⑬のように粘土紐の貼り付け状のもの、⑫や⑭のように、隆帯の器面が丁寧にナデ調整されるものがある。また、隆帯の両側にナデ調整が加えられるものもあり、これらの形態の変化は、8b 期に盛行する整然として隆沈線への移行が考えられる。

㉔は A 区の土坑から出土したもので、他の土器に比べて形態・胎土・色調が異なる。形状は短頸の広口壺で、口縁部下端に隆帯が巡り、2つの橋状把手を有する。口縁部には、焼成前に穿たれた小孔が並列する。器面は内外面とも研磨調整され、赤色塗彩されていたものと考えられる。体部下半部を欠くため全体の形状は不明であるが、残存する体部の曲屈位置から、ひさご形を呈していた可能性も考えられる。

口縁部下端の隆帯は「罽」と言えるほど突出していないが、全体の形態から所謂有孔罽付土器と呼ばれるものに類する土器であろう。この土器は、中部高原地域で縄文時代前期末葉に出現し、中期に入って東北地方にも伝播したものと考えられている。県内の報告例では盛岡市畑井野遺跡から、中期中葉期に位置づけられる無文樽形の完形品が出土している。また、中期後葉期では、宮古市<sup>わむら</sup>上村貝塚から小破片が出土しており、後期初頭期のものでは、二戸市馬立II遺跡出土の“狩猟文土器”がこの形態を踏襲したものと考えられる。

明確に後半期の8b式に比定できる土器は少ない。集成図では㉔㉕である。㉕はキャリパー形土器で、口縁部には橋状把手と太い隆帯区画内に施された刺突文をもつ。体部文様は表面が丁寧に研磨調整された隆沈線によって、渦巻文を配した文様が縦方向に展開される。この文様は、体部上端部では区画性が強いものとなっている。㉔は体部片で同様の文様が施文されている。

この他に、いくぶん肥厚する口縁部上端に、太い沈線によって4単位の渦巻文が配される深鉢㉖がある。口縁部は無文帯で外反して開き、器表が研磨調整された細い隆帯に区画される体部には、同様の隆帯が区画性の強い文様を縦位に展開する。㉗㉘は、体部の文様が沈線によって構成され、文様意匠も8a式のものに近いが、口縁部の形態は㉔と同じで、8a～8b式の過渡期の資料かもしれない。

2類土器としたものは㉚～㉜である。㉚㉛は内湾する山形口縁を呈する。文様は隆沈線による区画文が縦位に展開するもので、部分的に渦巻文が配されている。器形が前段階と異なる点、文様がより区画性が強い点から3類としたが、文様の表現方法や意匠はほとんど同じで、8b期の最終形態とも言えるものである。また、同様の文様が沈線によって施文される例もある。

典型的な3類土器は㉜～㉞で、㉜～㉞はハ字状の区画文が垂下し、この間に沈線による“ゼンマイ状文”が施文されている。この段階で、ゼンマイ状文が施される部分やハ字状の文様間

には、粗雑なものであるが磨消手法が取り入れられている。

次段階の資料は③⑨で、ゼンマイ状文が独立し沈線区画された縄文帯として表われる。この段階では、文様帯の上端に前段階の残存形態と考えられる隆沈線状の渦巻文が配されている。

③⑨④⑩では磨消手法によるゼンマイ状文が施されているが、③⑨より簡略化され単純な文様帯への変化がみられる。④⑩ではゼンマイ状の文様は消え、細長い∩字状の縄文帯が並列して垂下し、より3類に近い様相を見せている。

3類土器は④⑪～④⑬である。いずれも主体となる文様は沈線区画の磨消手法によって表現される。④⑪④⑫は刺突文と鱗状突起を有する。

3類土器は、精製・粗製土器を問わず胎土中に金雲母が含まれるものが多い。これが装飾の意味をもつものか、粘土の採集地が異なるためのものかは不明であるが、当類における一つの特徴と思われる。

## 2) 石器・石製品

石器は礫石器と剥片石器に大別できるが、いずれも出土量は少ない。礫石器の器種では磨石が最も多く、凹石がこれに次ぐ。しかし、両機態を合せもつものもあり、明確に分類することはできない。石皿では、自然礫をそのまま利用した粗製の石皿と熔岩に加工を加えた台付の石皿が出土している。

剥片石器は遺構内外で数点しか出土しなかった。当遺跡の土質が粘板岩の細礫を多量に含み、精査時の見落としも考えられるが、検出された遺構数を考え合せれば、その数は極めて少なく、今後の検討課題の一つである。

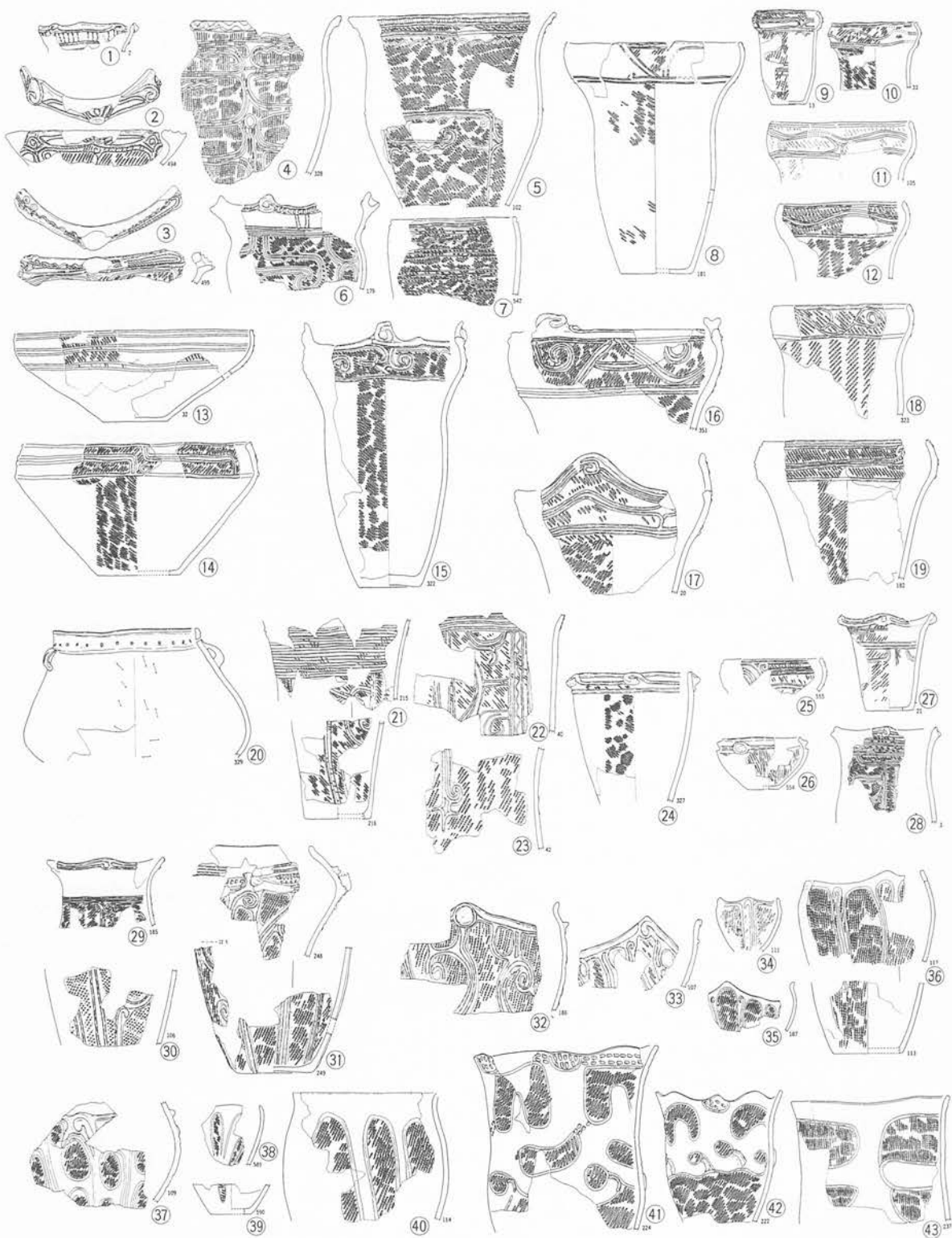
石製品はAK 10 住居跡（縄文時代中期後葉）の柱穴状土坑から出土した硬玉製の垂飾りである。不整な半月形の石材に孔を穿ったもので、明瞭な加工痕は認められない。

県内で硬玉製の石製品を出土した例は、紫波町西田遺跡、宮古市上村貝塚、岩泉町森の越遺跡、軽米町大日向II遺跡などがある。

### 小結

以上、出土した縄文時代の遺物について簡単に整理した。中期の土器は大木8a式～10式に比定され、各時期の器形、文様の表現方法や意匠の流れを漠然とではあるが掴むことができる。しかし、8a式と8b式、8b式と9式への移行段階は不明である。今後、県内外の該期遺跡との比較をより一層行っていきたいと思う。

また、硬玉製垂飾りや有孔鏝付土器の出土など、遠く離れた地域文化の影響が窺われる資料もあり、縄文時代中期の地域的交流を考える上で一つの好資料を増したと考えられる。（酒井）



第 147 図 繩文土器集成図

## 2. 弥生時代

### (1) 遺構

弥生時代の遺構は竪穴住居跡 1 棟だけである。A 区の沢沿い部分、標高約 5.2 m の地点に構築されている。一辺 6 m 前後の隅丸方形を呈するものと考えられる。炉は石囲炉で、住居跡中央に位置している。柱穴配置は明確に認定できたものではないが、6 本柱（六角形）の配置が考えられる。時期は出土した土器の特徴から、弥生時代後期末葉の天王山式期に比定されよう。

県内では該期の住居跡の検出例は少なく、滝沢村湯舟沢遺跡から 3 棟が検出されているだけである。これらの住居跡との比較では、形状は湯舟沢遺跡のものは円形を呈し、炉は地床炉、柱穴は壁に沿って巡る壁柱穴で、当遺跡で検出された住居跡と相異点が多い。これらが地域的な特徴の現れかどうかは、今後の資料の増加を待って再検討したい。

### (2) 遺物

遺構内及び遺構が検出された地区を中心に出土しているが、量は少ない。器種には壺、鉢、甕がある。文様は磨消縄文、2 本一組の細い沈線による連弧状文、交互刺突文、不整な綾絡文を伴う捺糸文などが施されている。また、壺形土器・鉢形土器の一部には赤色塗彩が施されるものがある。これらの土器の大半は、住居跡の時期と同じ天王山式に比定されるものであるが、磨消文様の特徴から、一部にこれらより先行するものと考えられるものがある。

#### 小結

前述のように、該期の住居跡の検出例は少なく、今回の成果は貴重な資料といえよう。大槌町教育委員会が行った追加調査においても、遺構外から弥生土器片が出土しており、周辺部にはまだ住居跡や土坑などの遺構の存在が窺われる。また、出土した土器には、多少の時間差がみられ、時期を異にした遺構の存在も考えられる。

(酒井)

#### 〈参考・引用文献〉

- (1) 遠藤勝博(1988)：夏本遺跡発掘調査報告書 大槌町教育委員会
- (2) 佐々木勝・田村壮一・鈴木優子他(1980)：東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅶ 岩手県教育委員会
- (3) 高田和徳(1983)：一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 一戸町教育委員会
- (4) 八木光則他(1981)：大館遺跡群 昭和 55 年度発掘調査概報 盛岡市教育委員会
- (5) —————(1982)：大館遺跡群 昭和 56 年度発掘調査概報 盛岡市教育委員会
- (6) —————(1983)：大館遺跡群 昭和 57 年度発掘調査概報 盛岡市教育委員会
- (7) 千田和文他(1984)：大館遺跡群 昭和 58 年度発掘調査概報 盛岡市教育委員会

- (8) 高橋憲太郎他(1982)：柿ノ木平遺跡 昭和50・51年度発掘調査報告書 盛岡市教育委員会
- (9) 酒井宗孝(1987)：岩手県北部における縄文中期後葉から後期前葉の住居跡 紀要VII 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- (11) 熊谷常正・小田野哲憲・高橋信雄(1981)：岩手の土器 岩手県立博物館
- (12) 丹羽 茂(1981)：大木式土器 縄文文化の研究4 雄山閣
- (14) 熊谷常正(1981)：大木8式土器の検討 岩手考古学会第2回研究発表要旨
- (15) 長沢宏昌他(1984)：縄文時代の酒造具—有孔鍔付土器展—展示図録 山梨県立考古博物館
- (16) 菊池利和・高橋義介他(1988)：馬立II遺跡発掘調査報告書 岩振埋文報122集
- (17) 田鎖寿夫他(1986)：大日向II遺跡発掘調査報告書 // 100集
- (18) 桐生正一・菊池利和他(1986)：湯舟沢遺跡発掘調査報告書 滝沢村教育委員会
- (19) 小田野哲憲(1986)：湯舟沢遺跡3区の弥生式土器 湯舟沢遺跡発掘調査報告書 滝沢村教育委員会
- (20) —————(1987)：岩手県の弥生土器編年試論 岩手県立博物館研究報告第5号

### 3. 古 代

#### (1) 遺構

住居跡5棟、住居跡状遺構6箇所、工房跡1箇所、土坑11基が古代に属する遺構である。以下に種類ごとに分けて、その特徴を示しまとめとする。

##### 1) 住居跡

古代に属する遺構はA・B両区に分布するが、住居跡はA区のみ所に所在し、時代的には奈良時代4棟、平安時代1棟に分けられる。

〈奈良時代〉

AA3住居跡・AE7住居跡・AJ9住居跡・AK4住居跡の4棟が相当する。

分布——4棟は約15mの間隔で散在して分布する在り方を示し、いずれも東壁が等高線に並行する。

規模・平面形——全体が検出されたのはAE7住居跡のみのため断定できないが、検出された壁の長さでみると一辺が4mを超えるAA3住居跡・AK4住居跡の2棟と、それ以下のAE7住居跡・AJ9住居跡に分けられる。平面形はいずれも方形か長方形と推定されるが、いずれも四隅が若干丸味をもつ隅丸を示し、AK4住居跡は壁が若干外方に張り出す凸辺状をなす。AJ9住居跡は調査中の不手際で平面形に歪みをもつが、本来は他と大差のない形状であろう。

主軸方位——いずれも東壁が等高線に並行することは既述したが、カマドが設置される壁を基準にして主軸方位をみると、磁北に対して2度～12度西に振れるのがAA3住居跡・AJ9住居跡・AK4住居跡の3棟、82度東に振れるAE7住居跡1棟の2型に分けられる。

カマド——明らかにカマドの施設として検出されたのはAA3住居跡・AE7住居跡・AK4住居

跡の3棟である。AJ9住居跡は北壁寄りの床面で焼土が検出されていることから、袖部や煙道部の検出はないが、焼土の位置が炉とするには壁に寄りすぎており、本来はカマドと推定されることから、北壁に設置されていたと推定される。

位置は、AE7住居跡が東壁の南隅部寄り以外は北壁に設置され、AA3住居跡は壁のほぼ中央、AJ9住居跡は東隅部寄りに位置しAK4住居跡はほぼ中央かと推定される。

袖部の構造は、AE7住居跡・AJ9住居跡のシルトのみと、AA3住居跡とAK4住居跡の礫を芯にしてシルトを貼りつけて補強する2型に分けられる。前者は当遺跡では小規模な住居跡に相当することから、規模の差が袖部の構造の違いに関連する可能性がある。

煙道部はAA3住居跡・AE7住居跡・AK4住居跡の3棟から検出された。いずれも壁の外方に0.9m～1.6m延び、AE7住居跡とAK4住居跡は割り貫きであるが、AA3住居跡は溝状をなすが割り貫きか掘り込みかは不明である。

支脚はカマドを北壁に設置するAA3住居跡とAK4住居跡にあり、ともに長目の礫を縦に埋設している。

壁構 — AK4住居跡の残存する壁沿い床面から検出されたのみである。

柱穴 — 未検出である。

貯蔵穴 — AA3住居跡の東壁際床面から検出された2基の土坑が貯蔵穴に相当するであろう。

その他 — AA3住居跡とAJ9住居跡は埋土内に炭化物や焼土が多量に混入し、さらにAA3住居跡では東壁寄りの床面が焼成によって赤色に変化し同時に炭化材が貼り付いていたし、AJ9住居跡の場合は燃焼部焼土が位置する北壁側の床面の広範囲に焼土が堆積している等の状況が観察されたことにより、この2棟は火災によって焼失した住居跡と考えられる。

## 小結

以上本遺跡で検出された住居跡の特徴について要約したが、同時代の他遺跡例と比較し小結とする。

岩手県の海岸部で奈良時代の集落遺跡が発掘調査されたのは、久慈市の上野山遺跡・小屋畑遺跡<sup>①・③</sup>・源道遺跡<sup>②</sup>・中長内遺跡<sup>④</sup>・野田村の古館山遺跡<sup>⑤</sup>・宮古市の上村貝塚遺跡<sup>⑥</sup>の6遺跡であり、そのほとんどは北部の久慈市を中心として所在し、本遺跡が所在する海岸中央部での調査例は宮古市の上村貝塚に次いで2例目であり、貴重な事例を提供したことになる。

本遺跡と最も近い上村貝塚では2棟だけの検出であるが、規模がともに一辺4m以上で平面形はやや凸辺気味の隅丸方形を示し、主軸方位は西1棟、北々西1棟である。カマドの袖部は礫を芯にする例とシルトのみの2型みられ、いずれも壁外に延びる煙道をもつが、割り貫きか掘り込みかは定かでない。柱穴は1棟が対角線、1棟は壁沿いに巡る形で配置され、後者には貯

蔵穴をもつという特徴を具備している。この特徴を本遺跡のそれと比較すると、平面形は両者共通であるが、規模は本遺跡の大規模な2棟と共通する。本遺跡のカマドは規模の大きい住居跡だけが袖部に礫を使用するという違いはあるが両者ともみられることから広義では共通する。貯蔵穴はある例とない例が両遺跡とも共存するが、柱穴の有無・場所は大きく異なる。本遺跡と上村遺跡は直線距離で約31km離れ、さらに時期にも若干差がありそうなことから考えると、若干異なる部分があるとは言え大同小異の範囲であり、両遺跡から検出された住居跡はほぼ同じ特徴をもつと考えて大過ないであろう。

北上川流域には同時代の遺跡が多く所在する。特に花巻市から水沢市の間には花巻市の古館遺跡<sup>⑧</sup>、江釣子村の猫谷地遺跡<sup>⑨</sup>、金ヶ崎町の上餅田遺跡<sup>⑩</sup>、水沢市の膳性遺跡<sup>⑪</sup>・今泉遺跡<sup>⑫</sup>等が大規模な集落遺跡として著名である。今、7世紀後半～8世紀前半頃に位置づけられる住居跡が56棟検出された膳性遺跡例と比較し、北上川流域との類似性を考えることにする。

平面形は方形や長方形を示し両遺跡とも共通するが、膳性遺跡では規模が一辺4m台が31%と最も多く、次いで3m台の24%が続き、全体の55%を5m未満が占め、残る45%は6m以上の本遺跡よりも大規模な住居跡である。しかし、大規模な住居跡は本遺跡より古い時期に相当し、8世紀代になると大規模な住居跡1棟に5m以下の住居跡10棟位で集落を構成しており、一般的な規模は5m未満である。このことは、本遺跡から検出された4棟は膳性遺跡の一般的な規模の範囲に入り、全く差がないことを示すものであろう。膳性遺跡での主軸方位は87%が磁北から45度西偏する範囲に入り、東偏するのは13%と極端に少ない。このことは、本遺跡でみられた東偏する例は稀であることを示すが、両遺跡にもみられることは類似性を表している。カマド袖部の構造は、膳性遺跡ではシルトのみ、シルトで焼き口に礫を埋設、礫を芯にしてシルトに貼り付ける3型があり、本遺跡の例は前者と後者に共通する。本遺跡では柱穴は全く検出されないが、膳性遺跡の場合は73%の住居跡から検出され、柱穴のない住居跡は4m以下に限定され、本遺跡とは若干異なる様相と言うことになろう。

以上のことから判断されることは、柱穴の違い以外は両遺跡の住居跡はほぼ同じ特徴をもつことになる。柱穴の違いはあくまでも壁内の床面上に存在すると仮定した場合の結果であり、4棟だけの調査結果の比較で断定することは不可能である。むしろ、少ないとは言え膳性遺跡にも柱穴をもたない例があると言うことは、大同小異の状況を示すと考えるのが妥当であろう。

#### 〈平安時代〉

明確な住居跡はA区から検出されたAB6住居跡1棟のみである。斜面下位の西部が崩れて残存しないため全体的なことは不明であり、さらに1棟だけの調査であるため、この特徴が遺跡の同時代住居跡全体の特徴と言えるかどうかは不明である。したがって、簡単に要約し他遺跡例と対比しまとめとする。



検出された状況から一辺 5 m 前後で凸辺隅丸の方形か長方形を示すと推定され、東壁の南隅部寄りに礫を芯にシルトを貼り付けたカマドを設置する。煙道部は斜面上位に延びると推定されるが、検出されなかったことから、もたない可能性が強い。壁構・柱穴とも未検出で、右側袖部と南隅部の間に貯蔵穴を設置している。以上が本遺跡から検出された住居跡の特徴であるが、奈良時代の項で比較した宮古市上村貝塚の例と比較すると次のようになる。

上村貝塚では 15 棟検出されているが、全体が検出された 7 棟について要約すると、一辺 7.5 m の大規模な 1 棟以外は 4 m～3 m の範囲で、一辺のみが検出された住居跡に 4 m～5 m が数棟みられる。主軸方位は北 2 棟、東 4 棟、北東 1 棟、北西 1 棟で東方にもつ例が最も多い。袖部の構造をみると礫を芯にしてシルトを貼り付ける例とシルトのみの例が混在している。柱穴は 7.5 m の大規模な住居跡と 4 m 台 1 棟で検出され、検出されない住居跡が主流を占める。

以上両遺跡の特徴を比較すると若干の違いはみられるものの大同小異の範囲と考えられ、ほぼ同じ特徴を具備するとして大過ないであろう。

## 2) 住居跡状遺構

A 区 6 箇所、B 区 2 箇所の 8 箇所検出されているが、B 区の 2 箇所では鉄滓や鉄製品が出土し、工房跡との関連が推定されることから、工房跡の項に一括する。

本遺跡で住居跡状遺構としたのは、形状は住居跡的であるがその証明が不可能な遺構に付した遺構名であり、1 箇所を除くといずれも斜面下位の西側を流失するため全体的なことは不明である。検出された部分の形状や全体が残る例からみると、方形か長方形を示すのが一般的な平面形と推定される。規模の明らかな例は 1 遺構のみであるが、検出された辺の長さからみると 1.85 m～5.4 m までみられ、壁高も 50 cm～0 cm までバラツキがある。内部施設としては、AJ 6 住居跡状遺構では床面から焼土と方形を示す 2 個の柱穴が検出され、所謂住居的な要素をも具備するが、今一つ決定的な条件を欠く。また、AL 9 住居跡状遺構でも東壁南隅部付近の床面から焼土と、9 個の柱穴状小土坑が検出され、本遺構も前者と同じ状況を示す。AL 8 住居跡状遺構の場合は南壁際の床面から 1 個の柱穴状土坑が検出されている。AH 6・AI 7 両住居跡状遺構は残存状態が不良であることにもよると考えられるが、焼土・柱穴と言った内部施設はまったく確認されない。また、遺物を出土した遺構も少なく、所属時期の不明な遺構が多い。しかし、遺物を出土した AJ 6・AJ 7・AL 9 の各住所跡遺構が、前 2 者が奈良時代、後者は平安時代に属することは確実であることから考えて、時期不明の 4 棟もこの 2 時期のいずれかに相当すると考えて大過ないとする。

この種の遺構が機能的にどのような性格をもつかは、それを直接的に示す資料は全く得られていない。しかし、埋土内とは言え AJ 6 住居跡状遺構から鉄器、AJ 7・AL 8・AL 9 の各住居跡状遺構からは鉄滓が出土しており、さらに粗掘り中にも多量の鉄滓や鉄器が出土しているこ

とを考え合わせると、本遺跡は鉄の精錬なり小鍛冶に関係する遺跡であることは容易に推定される。このことは、B地区から平安時代の工房跡が発見されたことが端的に証明しており、工房はB地区だけでなくA地区にも存在したと考えるのが妥当であろう。しかし、今回の調査ではA地区から工房跡は検出されず、住居跡にもその痕跡を示す状況は全く観察されなかった。もしかすると、本遺跡で住居跡状と命名した遺構が工房跡である可能性がある。床面から検出された焼土は範囲・層厚とも強い火熱を受けた結果であるし、柱穴の存在は屋根を架けていたことを示すものであり、工房跡を示す傍証と考えられる。(高橋)

### 3) 工房跡

出土した土器片(土師器甕形土器)の特徴から、平安時代の遺構と考えられる。B区の沢筋のやや奥まった位置に構築されている。同地区には時期が明確ではない住居跡状遺構2棟が検出されているが、一般的な竪穴住居跡はない。

遺構全体の形態は、一般的な竪穴住居跡と同様に半地下式で、形状も隅丸方形を基調としている。遺構内には4基の鍛冶炉の他に、床面に形成された現地性焼土を伴うが、カマド及び柱穴は検出されていない。

鍛冶炉は、新旧4基が検出された。最も新しい炉は1.3×1.1m、深さ25mの不整な楕円形を呈し、粘土質土によって炉体を構築していたと考えられる。炉内からは大型の椀形鉄滓が2個出土しているほか、炉の周辺部には床石と考えられる平坦面を有する花崗岩の巨礫が検出されている。他の3基は径75~50cm、深さ8~16cmの円形を呈し、粘土質土にはみられなかった。

残存する粘土質土の状況から、炉体の具体的な形状・形態は推定できないが、炉内に椀形鉄滓がほぼ原位置で存在することから、遺構廃絶後の炉の大きな破壊は行われなかったと思われ、炉は所謂“開放炉”<sup>②</sup>の形態をもつものと考えられる。また、他の3基には粘土質土が検出されなかったことについては、炉の廃絶後にこれを除去した可能性も考えられる。

該期の集落跡の調査で、鞆の羽口・鉄滓等鍛冶や製鉄との関連を窺わせる遺物を出土する竪穴住居跡の検出例は多い。出土した遺物の多少を問わなければ、ほぼ全遺跡で検出されていると言っても過言ではないであろう。しかし、これらのほとんどは、カマドを伴う一般的な住居跡内に小規模な炉が1基設置されるもので、出土する羽口・鉄滓の量も当工房跡の比ではない。これらのうち、安代町関沢口遺跡から検出された鍛冶炉を伴う住居跡の鉄滓分析を行った搦田勝彦氏は、宮城県沼崎遺跡の例を引用しながら、この鍛冶炉が鍛冶専用のものではなく、農鍛冶用の工房跡としての性格を指摘している。<sup>③・④</sup>

当工房跡の場合、遺構内に複数の鍛冶炉が検出されたこと、炉の規模が大きく、多量のスケール・床石と考えられる巨礫の出土などから、他の遺跡に比べてかなり大規模な操業体制であったと推定される。また、埋土中に含まれる多量の鉄滓から、付近には同様の遺構が存在する

ものと考えられ、当工房跡が本格的な専用鍛冶跡である可能性が高い。

本報告の分析結果（VI章）によれば、当工房跡では精練（鍛冶）作業と鍛練作業を合せて行っていた可能性が指摘されている。今回の調査では製鉄跡が検出されておらず、工房跡への原料供給面の問題はある。しかし、秋田県堪忍沢遺跡では該期の製鉄炉跡が多数検出されているほか、県内でも盛岡市志和城跡・石鳥谷町大瀬川 A 遺跡・宮古市館山遺跡・青猿 I 遺跡等から平安時代の可能性をもつ製鉄跡や関連遺物が検出されており、該期には東北地方において、製鉄技術が確立していたことを裏付けている。大槌町周辺には、時期が明確ではないものの鉄滓を多く出土する遺跡が数多く分布している。また、隣接する釜石は、鉄の始原材料となり得る餅鉄の産地であり、これらのことを考え合わせると、当遺跡の周辺において鉄の一環製産を行っていたことも考えられる。

なお、本報告の分析結果では、始原材料について大槌町文化財保護審議委員会と県立博物館の分析とは相異がみられる。前述の製鉄跡とともに、今後の資料の蓄積が必要な課題である。

同地区で2棟検出されている住居跡状遺構については、時期を判断する遺物を欠くため詳細は不明である。しかし、BB 12 住居跡状遺構は、工房跡北側の床面と同様に礫層面を使用していることや、占地が工房跡と同じ斜面部であることなどの共通点をもつ。南半部は調査区域外にかかり、付属施設等の有無はわからないが、鉄器及び鉄滓を出土すること等からも、工房跡に関連性が強い遺構と考えられる。

（酒井）

### 3) 土坑

本遺跡から検出された土坑 18 基は、縄文時代 4 基と時期不明のものを含めそれ以降の 14 基に分けられるが、本項ではその後 14 基について簡単に要約しまとめとする。

14 基は A 地区に 11 基、B 地区に 3 基が分かれて位置し、地区によって若干の相違がみられることから、地区ごとに記述し最後に一括することとする。

#### 〈A 区〉

11 基はほぼ全域に散在する位置関係を示すが、AD 4 土坑と AE 4 土坑は作場道の開削で破壊されているため詳細は不明であるが、形状や埋土の堆積状況から最近の掘削による土坑である可能性が大きいことから、本項では取りあえず除外することとする。

規模・形状 — 径 1.15 m～1 m に AC 7 土坑・AI 9 土坑の 2 基入る以外は、1.35 m～1.65 m に AG 7 土坑・AL 6 土坑・AM 7 土坑の 3 基、1.8 m 以上に AE 5 土坑・AH 4 土坑・AL 10 土坑・AM 8 土坑の 4 基に細分され、平面形は AG 7 土坑が凸辺隅丸方形を示す以外は、いずれも円形や楕円形を示す。深さは 0.5 m 以下の AL 6 土坑・AL 10 土坑・AM 7 土坑の外は 0.7 m～1.15 m の範囲に入り、断面形についてみれば AH 4 土坑がフラスコ形の可能性をもつが、他はピーカー形が AC 7 土坑・AG 7 土坑：AI 9 土坑の 3 基、バケツ形が AE 5 土坑の 1 基、皿形

がAL 6 土坑・AL 10 土坑・AM 7 土坑の3基が入り、4型に細分される。

埋土 — 土層が単層から8層に細分されるまでそれぞれによって差がみられるものの、全体として単層から4層位の土坑が多く、土性も地山粒と混合したり、軟かいといった特徴が観察され、人為的な堆積状況や人為的な土性を示す例が多い。特にAH 4 土坑・AM 6 土坑の埋土内には海産貝類の貝殻が厚く堆積し、食料の残滓を処理した所謂ごみ穴としての性格を推定される例もある。

遺物 — AI 9 土坑以外は何んらかの遺物を出土している。遺物の種類別にみると、AC 7 土坑からは縄文時代の叩き石的な石器、AE 5 土坑・AL 9 土坑からは土師器の坏や甕、AH 4 土坑からは近世の唐津焼陶器、AG 7 土坑・AL 10 土坑・AM 6 土坑・AM 7 土坑からは鉄器や鉄滓・鑊羽口が出土し、他に縄文土器を混入する例もあるが、いずれも古代もしくは古代以降に属する遺物を伴出している。特に近世陶器の出土は注目に値する。

#### 〈B区〉

3基は北西部の工房跡付近に2基、南東部に1基が分散して位置する。遺物から古代以降としたのは1基のみであるが、通常の縄文時代の土坑と埋土が全く異なることから本期とした。

規模・形状 — 径1.7m～1.3m、深さ0.6m～0.3mの規模をもち、平面形は円形、断面形は皿形かスピーカー形を示す。

埋土 — いずれも単層で、暗褐色～黒褐色の土が堆積し、全体としてしまりなく軟い。

遺物 — BH 11 土坑から楔状鉄製品が出土している。

#### 小結

以上の要約をもとにして本遺跡から検出された縄文時代以外の土坑をまとめると以下のようになる。

規模は径1.5m以上が8基、0.7m以上の深さをもつ例が6基と、平面的な規模が比較的大きく、深さはそれほどでもない土坑が多いことを示している。平面形は凸辺隅丸方形1基、その他は円形や楕円形と、円形を基調とし、断面形はフラスコ形に近い例が1基あるものの、それ以外はビーカー形を基調としている。埋土は地山混じりの黒色土を主体とし層理も単純な堆積状況を示し、一見して人為的な埋め戻しも観察される。共伴遺物は縄文土器や縄文時代の石器もみられるがほとんどは古代か古代以降を想定される遺物に限定される、という特徴がある。

このような諸特徴は縄文時代の土坑の一般的特徴と全く異なるものであり、共伴遺物が全て古代以降に属する種類であることをも考え合わせると、古代以降それも奈良・平安時代そして近世に属する土坑と推定される。中世については、14世紀頃の中国白磁が1点出土していることから、全く可能性を否定する訳にはいかないが、他に中世に属する遺構がないことにより一応中世の土坑はないと考える。機能的な役割については端的にそれを示す状況は観察されてい

ないが、既述のとおり食料の残滓処理に使用される場合もあったことは確実であろう。しかし、それが一次的なのか二次的な転用なのかは不明である。(高橋)

## (2) 遺物

古代以降に属する遺物には土師器・須恵器・陶磁器・鉄製品類・鉄滓・韃羽口があり、以下にその種類ごとに要約し若干の問題点を提示しまとめとする。

### 1) 奈良時代の土師器

全て非ロクロ成形の土師器で須恵器はまったく含まない。該期は遺構数・遺物とも少ないが、各器種ごとに分類してその特徴を明示し、他遺跡の類例から時期的な属性を記述する。

器種には坏・甕・小型甕・鉢・壺が含まれ、各器種の中で大小関係がみられ、さらに数量的な量の多少がある。もっとも点数も多く器種が多いのはAA 3住居跡で、その他は少量である。全個体数を把握したわけではないが、実測可能個体でみると各器種の構成比率は坏3点9.4%、甕22点68.7%、小型甕2点6.25%、鉢3点9.4%、壺2点6.25%となる。また、遺構ごとの出土比率はAA 13住居跡が15点47%、AE 7住居跡2点6.25%、AJ 9住居跡3点9.4%、AK 4住居跡5点15.6%、AJ 6住居跡状遺構1点3.15%、AJ 7住居跡状遺構5点15.62%、AE 5土坑1点3.15%になる。

#### 〈坏〉

3点の出土と数は少ないが、器面調整には大差がないものの器形に違いがみられることから次の2型に分類される。

I型 — 外形は底部が周辺部のみに丸味を持つ平底風丸底で、底部と体部の境に沈線に近い僅かな段を持ち、体部は若干外傾し口縁部は大きく内管する。内面の形状も外形に近いが、底部と体部の境に軽い稜を持って内湾し、口唇部は先細りとなって小さな丸味でおさまる。器面調整は内外面ともミガキであるが、口縁部外面にヨコナデ痕を残す部分がある。内面は黒色処理が施され、口縁部外面の端部にも及ぶ。AA 3住居跡出土の384が本型に該当する。

II型 — 外形は、底部が軽い丸味を持つ丸底で、体部と底部の境に明瞭な段を有し、体部～口縁部は直線的に外傾する。内面の器形も外形に沿い体部と口縁部の境に明瞭な稜を持ち、器厚は体部から口縁部に向かって次第に薄くなり口唇部は丸くおさまる。器面調整は、口縁部外面に一部ヨコナデを残すが、内外面とも全面がミガキで仕上げられ、内面と口縁部外面端部は黒色処理される。AA 3住居跡の385とAE 5土坑の475が該当する。

〈甕〉

本報告書には 22 点掲載したが、全体を把握できる個体は 3 点のみで、他は部分的に残存するのみである。全体を概観すると、全体形、頸部～口縁部の形、体部最大径の位置、底部の形、器面調整に差がみられる。以下では各部位ごとにその特徴を分類して記述することとする。

①全体的な器形の違いによって次の 3 型に分類され、本遺跡から出土した甕の基本的な大別となる。

I 型 — 頸部が窄んで口縁部が外反し、体部が膨みをもつ長胴形を示す甕の器形としては最も一般的な器形である。本遺跡では最も多く 388・389・416・417 が該当し、その他にも口縁部や体部のみが出土した個体にも散見される。

II 型 — 頸部や口縁部は I 型と同じであるが、体部が球胴形に近い膨みをもち、頸部が壺ほど窄まない器形である。427 の 1 点が該当する。

III 型 — 頸部に窄みがなく、体部が底部から外傾し、口縁部に最大径をもつ器形で、底部を欠失する 419 と破片の 429 が該当する。

②頸部～口縁部の形態によって次のように細分される。

A 型 — 肩部と頸部の境に段があり、頸部が窄んだ後口縁部が外反する器形をもつもので、389・417・破片の 390 が位置づけられる。

B 型 — 肩部と頸部の境に段があり、頸部が窄んだ後口縁部が直線的に外傾する器形を示すもので、388 の 1 点が相当する。

C 型 — 肩部と頸部は前 2 者と同様であるが、口縁部が内湾気味に外傾する器形をもつもので、416・247 が該当する。

D 型 — 肩部と頸部の境に段がなく、頸部で窄んだ後口縁部が外反する器形を示すもので、破片の 391 が入る。

E 型 — 肩部～頸部は D 型と同じであるが、口縁部が直線的に外傾する器形をもつもので、破片であるが 412 が該当する。

F 型 — 全体的なことは E 型と同じであるが、口縁部外面に複数の段をもつ器形で、破片の 420 が相当する。

G 型 — 肩部と頸部の境が無段で頸部に窄みがなく、口縁部が外反する器形を示すもので、419・429 が属する。

H 型 — 肩部と頸部の境に沈線的な軽い段をもち、口縁部は僅かに外反する器形であるが、破片の 393・421 が該当する。

この項目を前の大別項目と合わせてみると、I 型は A～F、II 型は C、III 型は G・H の口縁部形態を示すことが分かる。

③体部最大径の位置によって次のように細分される。

1型 — 肩部～上位にあるもので417・425が該当する。

2型 — 中位にもつもので389・427が相当する。

3型 — 下位にもち全体が下膨れとなる器形で、388・416・425が入る。

④底部形態で次のように細分される。

a型 — 周辺部が若干突出するもので、388・389・396・397・417が該当し、本遺跡では最も多い。

b型 — 周辺部の突出がみられず、低いベタ高台状を示す器形で、394・395・425が入る。

⑤器面調整の違いによって次のように分けられる。

あ型 — 口縁部・体部とも内外面ミガキで仕上げる。388の1点が該当する。

い型 — 口縁部内外面と体部外面がミガキで、体部内面がヘラナデ後ミガキで仕上げる。389・390・394・395の4点が入る。

う型 — 口縁部内外面ヨコナデ、体部が外面ミガキで内面ヘラナデで仕上げる。416・417・427が属する。

え型 — 口縁部は内外面ともヨコナデ、体部は外面ヘラナデやケズリで内面ヘラナデで仕上げるもので、412・419・425が該当する。

#### 小結

以上の細分項目を、器形大別のⅠ～Ⅲ型と組み合わせ、本遺跡出土の甕の特徴をまとめると次のようになる。

Ⅰ型 — 出土点数が最も多く本遺跡の主体を占めるが、細部でみると口縁部の形や体部最大径の位置、底部形態、器面調整とも各種あり、一概に集約することは困難であるが、底部がベタ高台状や周辺部が突出し、口縁部が外反や外傾する長胴形を示す器形と要約することができる。器面調整はAJ9住居跡とAJ7住居跡状遺構は共通するが、AA3住居跡には共通するものと共通しないものが混在する。これが工人の好みなのか時間差なのかは断定できないが、全体的な外形にはほとんど差がないことから、時間差としての違いではないと考えている。

Ⅱ型 — 本遺跡で1点の出土であるが、体部の器形に違いがあるのみで、その他の特徴はⅠ型のそれと全く差がない。この器形は頸部が強く窄むと壺の器形となり、その意味では広口壺の範疇に入る器形である可能性がある。

Ⅲ型 — 本遺跡では破片を含めても3点の出土であり、さらに本型とした419は底部を欠失することから甕に分類したが、北上川流域の同時代遺跡の例では鉢や甑に見られる器形であり、本遺跡で小型甕とした418の器形と近似する。いずれにしても、甕としては一般的な器形でないことは確実である。

### 〈小型甕〉

2点の出土であるが、器形や器面調整が全く異なることから、次の2型に分けられる。

I型 — 器形や器面調整は甕の388と同様であるが、口縁部径と器高の比率が1:1を示す器形をもち、鉢とも言えるものである。甕の分類基準に従えばIB3Aあに相当する。387の1点が該当する。

II型 — 頸部に窄みがなく底部からほぼ直線的に外傾する体部をもち、口縁端部が僅かに外反する。器面調整は口縁部が内外面ヨコナデ、体部外面ミガキ内面ヘラナデ後一部ミガキである。器形は419、器面調整は416・417とほぼ同じ状況を示し、418が該当する。

### 〈鉢〉

鉢と分類したのは3点であるが392は破片の出土であり、体部の器形が所謂一般的な鉢とは若干異なるため、本種としては386・415の2点を対象とする。以下のように分類される。

I型 — 器面調整は小型甕I型と同様であるが、器形が口縁部径より器高が小さい形状を示す。386の1点が該当する。

II型 — 底部が平底で、体部が内湾して大きく外傾し、口縁部と体部の境に明瞭な段をもつ。口縁部は次第に器厚を薄くして端部に移行し、口唇部は丸くおさまる。全体的な器形が平底の坏に近似するが、内面にミガキがないことや非ロクロ成形の坏に甕の底部のような平底はないことから鉢にした。器面調整は口縁部外面ヨコナデ、体部外面ヘナケズリ、内面ヘラナデである。415の1点が属する。

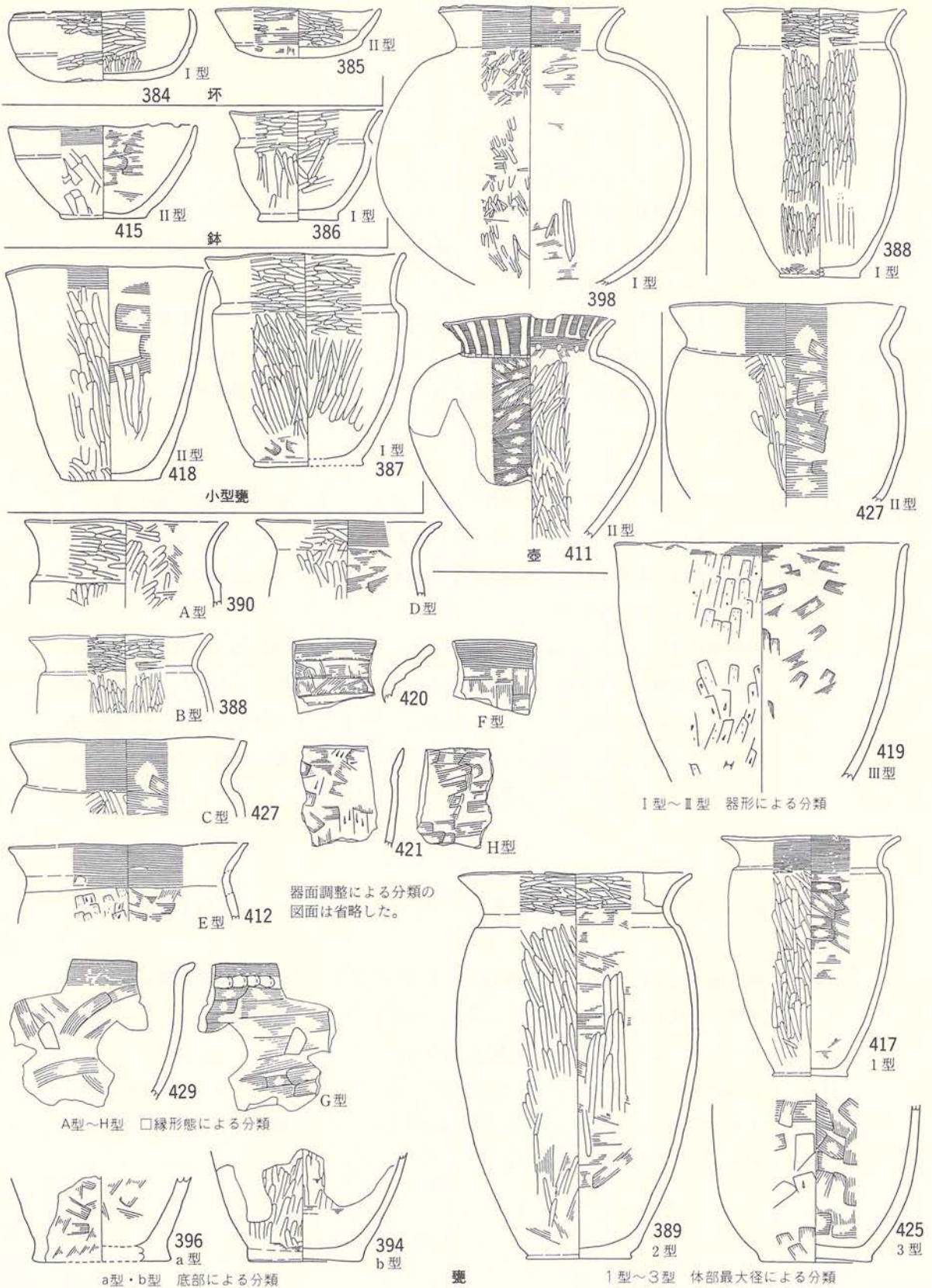
### 〈壺〉

2点の出土であるが、いずれも底部を欠失する。体部最大径の位置によって以下のように細分される。

I型 — 体部最大径を中位にもち全体が球胴を示す器形である。肩部と頸部の境が無段で口縁部は外反する。器面調整は、口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヘラミガキ内面ヘラナデ後一部ミガキである。398が相当する。

II型 — 体部最大径を上位にもち全体が無花果の実形に近い器形を示すが、口縁部の器形はI型と同様である。器面調整は口縁部内外面ヨコナデ後縞状の赤彩塗布、体部は外面ヘラナデ内面ヘラミガキである。411が該当する。





第148図 奈良時代の土師器器形分類図

## 包括的なまとめ

以上各器種ごとにその特徴をそれぞれの器種による基準によって示したが、他遺跡例との対比の中から所属時期を推定しまとめとする。

本遺跡から検出された住居跡は重複することなく8m～15mの間隔で散在する在り方を示すことは既述した。このような状況から考えられることは、集落が複数時期にまたがることなく、単時期でそれも比較的短期間で廃絶した集落跡であろうと推測される。

遺物としての土師器の特徴と共伴関係をみると、出土点数が多くないことから断定はできないが、出土点数の最も多いAA3住居跡の共伴関係がそのまま他遺構から出土した土師器の特徴と大同小異であり、あえて複数時期に細分する根拠は全くない。以上のことから、本遺跡出土の非ロクロ成形になる土師器は全て一時期の共伴関係をもつ土師器群の組成として大過ないであろう。ここで再度各器種ごとの特徴を要約すると以下ようになる。

1. 坏には底部と体部の境の内外面に明瞭な段や稜があり、平底風な底部と内湾する口縁部がある。前者の特徴は古い様相であるし、後者は新しい要素と言えよう。
2. 甕は長胴形とズン胴形があるも前者が主体をなし、前者の中でも下膨れ形の体部を示すものと底部の周辺部が突出ものが比較的多く、この特徴はまだ古さを残すものと言える。
3. 壺が器種組成として残っている。
4. 高坏・甕を欠くが、出土量が少ないことを考慮すれば、器種組成の中にないと断定はできない。

このような様相を示す土師器を出土した遺跡に宮古市上村貝塚であるものの、現在報告書未刊である。海岸部の遺跡としては北部の久慈市上長内遺跡に近似した土師器を含んでいる。しかし、完全に一致する状況ではない。坏はほぼ同様であるが、中長内遺跡では甕の器面調整にハケメが多用され、本遺跡のヘラミガキ・ヘラナデとは若干異なる。器面調整の違いが何に示すかは断定できないが、時間差と地域差によると考えている。それは、県内における今までの調査成果によって、同時期であれば北に寄るほど、同地域では奈良時代のある時期にミガキを多用することが知られていることによる<sup>⑬</sup>。このようにみえてくると、本遺跡の特徴である甕のミガキを時間差とみるのか地域差とみるかが重要な要素となる。また、既述した各器種の器形的特徴は時間的な差を反映しているであろうから、その両者の組合わせで考えてみることにする。先ず器形でみるならば、膳性遺跡II群C、花巻市古館遺跡<sup>⑭</sup>、水沢市石田遺跡の一部<sup>⑮</sup>、二戸市上田面遺跡<sup>⑯</sup>に類例がみられる。また、このような特徴をもつ土師群は、高橋信雄氏のII-2群<sup>⑰</sup>、相原康二氏の7-a・7-b群<sup>⑱</sup>と分類される土師器群に類似する。特に壺に赤彩するものを含む点で一致している。しかし、先の甕の器面調整にミガキを多用することは、北上川流域では普遍的な技法とは言い難い。技法的には県北部の馬渕川流域の土師器に近い様相を示すと考えられるが、

器形や壺の口縁部に赤彩するものを含む点は北上川流域の様相として大過ないであろう。実年代を示す資料は得られていないが、他の遺跡例や既述した編年の位置付けなどから一般に8世紀の土器様相とされる範疇に属することは大過ないであろう。その中でも先に記した本遺跡から出土した土師器群は未だ古い要素を残していると考えられ、これらのことを総合すると8世紀でも早い段階の土器様相と考えることができよう。以上から本遺跡出土の土師器群は8世紀前半に位置づけられるものと理解される。

## 2) 平安時代の土師器と須恵器

### (1) 土師器

土師器はロクロ成形と非ロクロ成形を含むが、遺構・遺物ともに少なく、全体的な特徴を把握することは困難であるが、器種には坏と甕がある。

坏はロクロ成形され低い高台を付す高台付坏で、内面は全面ミガキ後黒色処理されている。AL9住居跡状遺構からの出土であるが、共伴する他の器種がないために属性は不明である。

甕は5点の出土であるが、428のみがロクロ成形で他は非ロクロ成形である。428は膨む体部が頸部で軽く窄み口縁部を外反させる器形を示し、口唇部は角形で上方に僅か挽き出される。器面調整は、口縁部内外面ヨコナデ状のロクロナデ、体部外面はロクロナデ後ヘラケズリで内面はヘラナデされる。404~406と446はほぼ同じ状況を示す非ロクロ成形で、前3点は底部、後者は口縁部である。446は頸部の器壁を把厚させて口縁部を内削ぎし、外面を軽く外傾させる器形を示す。器面調整は口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデやヘラケズリである。

数が少なく断定することは困難であるが、坏は一般に9世紀後半~10世紀頃の製品とされるものに近似している。甕については、成形技法や器形からみれば、北上川流域で普遍的に出土するものとは異なり、どちらかと言うと県北部の技法に近い様相を示している。時期的には10世紀頃の所産として大過ないであろう。

### (2) 須恵器

ロクロ成形された坏3点、甕の体部破片1点の出土と少数である。遺構出土や他遺物と共伴関係を示す例もない。

坏はロクロ成形で底部は回転糸切りによって切り離された後底面の周辺部と体部下端を再調整する特徴は既述のとおりである。このような特徴は一般に底部切り離しが篋切りから糸切りに移行後、しばらく続く技法と考えられている。篋切りの坏は西暦803年創建の志和城跡からも出土することから、少なくとも9世紀初頭頃には使用されていた技法であることは確実であり、それ以後の生産を示している。切り離し技法の最後は再調整のない回転糸切り離しであることもまた事実であり、技法的にはその中間に位置づけられることになる。須恵器の坏が生産されるのは10世紀~11世紀初期頃までとされていることから考えれば、本遺跡出土の坏は9

世紀頃の生産とすることは問題がなかろう。

甕の破片については時期を決定する手懸りを欠き特定が困難のために、須恵器坏や平安時代の土師器と同時期に属すると理解しておく。

### 3) 鉄製品

総点数 70 点の出土であるが、この中に遺構外から出土した 33 点 47.1%と、遺構内から出土した 37 点 52.9%を含み、半数以上が遺構内からの出土である。出土地点別では 52 点 74.3%が A 地区とした山裾の沢沿いからの出土で、工房跡が発見された B 地区から 18 点 25.7%だけである。しかし、B 地区から出土したものは 17 点の 94.4%が何んらかの形で遺構に関連する出土である。A 地区の場合は、遺構内の出土が 20 点 38.5%のみで他は沢沿いの黒色土中から鉄滓や縄文土器等と出土した。この出土の仕方に違いがみられることは、B 地区は製造工場としての工房であったために、その場所で製造した製品と製作途上の半製品のなものがそのまま放置された状態で調査された結果と理解されるし、A 地区の場合は何んらかの理由で廃棄されたものと斜面上位にあったものが次第に斜面下位に移動し、同じ土層内に埋蔵された状況の差によると考えられる。いずれにしても、A 地区では全域に多くの鉄滓や鉄塊・韃羽口の破片が散在しており、製鉄か鍛冶に関連する遺構は B 地区に限定されるのではなく、むしろ A 地区が立地する山裾部に主体が存在する可能性があることを示すものであろう。

器種を特定できるもので最も多いのは釘の 16 点 22.86%で、次いで鉄鎌 6 点 8.57%、刀子 5 点 7.14%、楔 4 点 5.71%、錐 3 点 4.29%と続き、柄頭・鎌・石突・鋤・轡金具・鋸は各 1 点の 1.43%と少ない。その他に全く器種が不明なものや鉄板・平鉄状を示す製品や半製品が 16 点 22.86%、粗材としての鉄塊が 14 点の 20%含まれる。このような器種の組成比率が他遺跡例と比較した場合の評価は、遺跡の性格的背景が極端に違い、その結果だけを短絡的に比較することは大きな問題を含んでいるため、ここではそれは行わないことにする。しかし、調査面積や検出された遺構数からみて出土点数が多いと理解することは許されよう。

これらの鉄製品が何時の時期に属するかについて考えてみよう。まず、本遺跡の調査結果で鉄製品に関連する時期を考えると、遺構では奈良・平安時代と江戸時代、遺物では奈良・平安・中世・江戸の各時代が考えられる。しかし、中世は中国白磁が 1 点出土したのみであるし、江戸時代も唐津焼の陶片を 1 点出土した土坑 1 基だけであることから、調査区外にこの時期の遺構が存在する可能性を全く否定はできないが、ここでは一応除外しても良いように思われる。当然 B 地区から検出された工房跡との関連を重視されねばならない。この遺構は平安時代に属する土師器の小破片を出土していることから、平安時代の鍛冶工房跡と理解して大過ないであろう。また、鉄製品を出土した遺構はすべて奈良時代か平安時代の遺構であること等を総合すると、本遺跡から出土したこれらの鉄製品は奈良・平安時代、その中でも平安時代に属

する可能性が高いものと推定される。

(高橋)

## 4. 中・近世

### (1) 遺構

唐津焼の皿底部破片を出土した土坑1基のみである。この土坑はA地区ほぼ中央の斜面上位に位置し、径2m、深さ1.15mの円形を示し規模が大きい。埋土内には多量の貝殻が投げ込まれており、一部は純粋な貝層であった。先の陶器はこの貝殻層の最上部から貝殻と共に出土したものであり、時期の決定資料と成り得る。皿は釉調・胎土・トチン目跡の状況から16世紀末～17世紀前半頃の製品と考えられることから、この土坑は江戸時代初期に属するであろう。性格としてはゴミ穴と考えている。

### (2) 陶磁器

陶器は前記の1点であるため省略する。磁器は中国白磁で遺構外から1点出土している。このような特徴をもつ製品は東北地方での出土は少なく、青森県の浪岡城跡から1点出土しているのみである。その他沖縄県では多くの出土例があるらしい<sup>②</sup>。一般に14世紀前半頃に位置づけられている<sup>③</sup>。

(高橋)

<註>

- ① 村上達夫・佐々木清文：『上野山遺跡発掘調査報告』 岩手埋文センター報告67集 (勸岩手県埋蔵文化財センター 1983)
- ② 田鎖寿夫：『小屋畑遺跡発掘調査報告書』 岩手埋文センター報告80集 (勸岩手県埋蔵文化財センター 1984)
- ③ 面代民義：『上野山遺跡(II)発掘調査報告書』 久慈市埋文報告4集 久慈市教育委員会 1984
- ④ :『源道遺跡』『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報昭和62年度』 岩手埋文センター報告126集 (勸岩手県文化振興事業団 1988)
- ⑤ 面代民義・千葉啓蔵：『中長内遺跡』 久慈市埋文報告8集 久慈市教育委員会 1988
- ⑥ 斎藤邦雄：『古館山』 野田村文化財調査報告書 野田村教育委員会 1987
- ⑦ :『上村貝塚遺跡』『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報昭和62年度』 岩手埋文センター報告126集 (勸岩手県文化振興事業団 1988)
- ⑧ 光井文行：『古館II遺跡発掘調査報告書』 岩手埋文センター報告103集 (勸岩手県文化振興事業団 1986)
- ⑨ 斎藤 淳：『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 XVI (猫谷地遺跡)』 岩手県教委報告71集 岩手県教育委員会 1982
- ⑩ 斎藤 淳：『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 X (上餅田遺跡)』 岩手県教委報告59集 岩手県教育委員会 1981
- ⑪ 高橋与右エ門他：『金ヶ崎バイパス関連遺跡発掘調査報告書II、水沢市膳性遺跡』 岩手埋文センター報

告 34 集 ( 助岩手県埋蔵文化財センター 1982

- ⑫ 相原康二：『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 XI (今泉遺跡)』 岩手県教委報告 60 集 岩手県教育委員会 1982
- ⑬ たとえば膳性遺跡・今泉遺跡・上餅田遺跡など
- ⑭ 高橋信雄：『古代』『岩手の土器』 岩手県立博物館 1982
- ⑮ 光井文行：『古館II遺跡発掘調査報告書』 岩手埋文センター報告 103 集 (助岩手県文化振興事業団 1986
- ⑯ 相原康二・八重樫良宏：『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 XII (石田遺跡)』 岩手県教委報告 61 集 岩手県教育委員会 1981
- ⑰ 遠藤勝博：『二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書—上田面遺跡・大淵遺跡・火行塚遺跡—』 (助岩手県埋蔵文化財センター 1981
- ⑱ 文献⑭に同じ
- ⑲ 相原康二・遠藤勝博：『岩手県南部に於ける所謂第 I 型式の土師器・前期土師器の内容について』『考古学論叢 I』 東北版楽社 1983
- ⑳ 金沢大学助教授佐々木達夫氏からの御教示による。
- ㉑ 沖縄県教育庁 金武正紀氏からの御教示による。
- ㉒ 鈴木定明他：『研究紀要 7』 千葉県文化財センター 1982
- ㉓ 玉川英喜他：『関沢口遺跡発掘調査報告書』 岩手埋文センター報告 95 集 (助岩手県文化振興事業団 1985
- ㉔ 鴫田勝彦他：『沼崎遺跡』 豊岡町文化財調査報告書 2 集 豊岡町教育委員会 1980
- ㉕ 秋田県埋文センター 船木義勝・小林克氏の御教示による。
- ㉖ 三上 昭他：『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 VIII』 岩手県教委 57 集 岩手県教育委員会 1981
- ㉗ 吉田 努他：『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 XIII』 岩手県教委 68 集 岩手県教育委員会 1982
- ㉘ 宮古市教育委員会 高橋憲太郎・鎌田裕二氏の御教示による。
- ㉙ 同上
- ㉚ 窪田蔵郎：『改訂鉄の考古学』 考古学選書 9 雄山閣 1973
- ㉛ 森 浩一：『鉄』 日本古代文化の探究 社会思想社 1974

## VI 分析・鑑定

### 1. 夏本遺跡出土の鉄滓等について

大槌町文化財保護審議委員会

各資料分析成績表

	T・Fe	(M・Fe)	(Fe・O)	(Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	SiO <sub>2</sub>	TiO <sub>2</sub>	CaO	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	MnO	Cu	P
S-1	55.29				17.88	0.674	0.68	4.38	0.08	0.003	0.14
S-2	54.79				16.26	0.981	0.82	4.65	0.09	0.003	0.13
S-3	54.10				10.50	0.320	0.29	3.55	0.05	0.008	0.09
スケール	72.66	0.67	58.52	37.89	1.50	0.037		0.02	0.02	0.009	0.03

#### S-1 A区沢沿い出土鉄滓

重量 220 g 最大長 82×68 mm

帯褐黒色で小石（山土か）を付着する面がある。磁石に感応しない。熔融し弱い流動状態にあったから凝固したことを伺わせるいわゆる“飴状”の部分が、僅かながら認められる。

破砕面はほぼ黒色であり、熔融時の発生ガスによると思われる多数の小孔が認められる。



Fig 1

#### S-2 A区沢沿い出土鉄滓

重量 530 g 最大長 105×68 mm

ほぼ赤褐色で、表面に多数の小石（山土か）を付着する。磁石に感応する。破砕面は黒色であり、多数の小孔が認められる。

分析試料調製中に破砕及び磨摺できない M・Fe（メタリック鉄）粒と考えられる部分が屢混入していたので、肉眼で認められる範囲で極力これを除去して調製した。なお、約 30 g を破砕中に検出されたこの「M・Fe」粒最大のものは 16 mm の長形で、1.3 g であった。



Fig 2

### S-3 B区工房跡出土鉄滓

多量のスケールが混在する鉄滓小塊の層があり、同層より採取。おおむね径 50 mm 程度以下であり、小石（山土か）を噛みこむものが多い。数個を破碎して均質部分を選び合せて試料調製した。

ほぼ赤褐色で、破碎面も赤褐色であるが、稀に黒色を帯びる部分がある。磁石に感応する。磨摺操作中に屢  $M \cdot Fe$  とと思われる小粒が混じており、これは極力除去して試料調製した。

なお、S-1、S-2、S-3 とも鎚打して破碎し、鉄鉢中で粉碎した後、メノー乳鉢を用いて粉状に調製した。

#### スケール B区工房跡出土酸化鉄

S-3 採取の鉄滓層中に散布状態でかなりの量が認められる。最大のもので  $6 \times 7$  mm、0.055 g 程度である。

イ、やや青色を帯びる灰色で少しく光沢を感じる面と暗褐色の面を有するもの

ロ、両面とも暗褐色であるもの

とに大別できる。両者の中間的なものもないで

はないが、イの形態のものを採取し、メノー乳鉢で磨摺して分析試料に調製した。



Fig 3

製鉄原礦が製鍊される場合、その中のチタンの大部分は製品（鉄）の中に入ることなく、鉄滓中に濃縮される。しかるに工房跡出土の S-3 は言うまでもなく S-1、S-2 ともに  $TiO_2$  値が 1% に満たず、（砂鉄）製鍊滓とみるには低きにすぎる。真砂系の砂鉄（通常  $TiO_2$  2% 以下）を原料とした場合の滓でも  $TiO_2$  値は 1% を下まわらないとされ、まして赤目系（通常  $TiO_2$  5% 前後）とされる東北地方の砂鉄を用いた製鍊滓では数% 以上の値を予想しなければならない。その他  $SiO_2 \cdot Al_2O_3 \cdot CaO$  等も製鍊滓ではより高値が示されねばならないと思われる。

近世の鉄製鍊の過程では、その技術が向上して高温を得ることが可能になり、従って良好な流動状態のまま炉から排出され凝固した、いわゆる“飴状”の滓が多く見られるが、本遺跡（発掘区域外も含めて）では明確なこのタイプの検出はなかった。わずかに外観上 S-1 がこれに近いものと思われた。

高温を得ることができなかった古代の当地方における鉄製鍊は、製鍊設備（炉）において比較的低温度（ $800^\circ C$  前後）で原礦を還元して海綿鉄を得、それを繰り返し加熱し叩打して鉄と滓



とを分離していく精錬鍛冶の技法によったであろう。外観上 S-2 類似の鉄滓は本遺跡付近の地表面で散見され、この技法のなかで生成したものかと考えられる。

S-3 は前 2 者とはやや差異のある成分比となっている。殊にも  $\text{TiO}_2$  がより低値であること、小塊の滓であること、椀形鉄滓の出土もあつたことなどから該工房は、なお滓分を含む荒鉄を再精錬するための設備であつたと考えたい。その作業行程の中で灼熱した鉄塊等を叩打した際にその表面から剝離する酸化鉄—スケール—が小塊の鉄滓層の中に多量に混在することとなつたのであろう。もちろん、荒鉄から一気に製品まで造ることもあつた筈である。

#### 参考

1. 運岡法暉 「かなやごこ鑛跡」『月刊文化財』 昭和 54 年 11 月所載
2. 大澤正己 「古墳供献鉄滓からみた製鉄の開始時期」『季刊考古学』 1984 年 8 月所載
3. 窪田蔵郎 『鉄の考古学』 昭和 48 年 5 月

3. 夏本遺跡出土の動物遺存体について

陸前高田市立博物館 学芸員 佐藤正彦  
東北学院大学 学生 熊谷 賢

動物遺存体種名一覧

	出 土 遺 構
I. 環形動物 ANNELIDA	
i. 多毛綱 POLYCHAETA	
1. カネカンザシ? <i>Hydroides ezoensis</i> OKUDA	AM 6 P
II. 軟体動物 MOLLUSCA	
i. 腹足綱 GASTROPODA	
1. ミミガイ科の一種 <i>Haliotidae</i> gen. et sp. indet.	AM 6 P
2. シボリガイ <i>Patelloida pygmaea signata</i> (PILSBRY)	AM 6 P
3. シロガイ <i>Collisella pelta shirogai</i> HABE et ITO	AM 6 P
4. コウダカアオガイ <i>Notoacmea concinna</i> (LISCHKE)	AM 6 P
5. ニシキウズガイ科の一種 <i>Trochidae</i> gen et sp. indet.	AH 4 P
6. エゾチグサガイ <i>Cantharidus jessoensis</i> (SCHREK)	AM 6 P
7. コシダカガンガラ <i>Opmphalius rusticus</i> (GMELIN)	AM 6 P
8. エゾサンショウガイ <i>Homalopoma amussitatum</i> (GOULD)	AM 6 P
9. タマキビガイ <i>Littorina brevicula</i> (PHILIPPI)	AM 6 P
10. クロタマキビガイ <i>Neritrema sitkana</i> Kurila (MIDDENDORFF)	AM 6 P
11. オオショウラクガイ <i>Ocenebra japonica</i> (DUNKER)	AM 6 P
12. ヒレガイ <i>Ceratostoma burnetti</i> (A.ADAMS. et REEVE)	AH 4 P
13. チヂミボラ <i>Nucella heyseana</i> (DUNKER)	AM 6 P・AH 4 P
14. イボニシ <i>Thais clavigera</i> (KÜSTER)	AM 6 P
15. レイシガイ <i>Thais bronni</i> (DUNKER)	AM 6 P
16. コウダカマツムシガイ <i>Mitrella tenuis</i> (GASKOIN)	AM 6 P
17. キセルガイの一種 <i>Clansiliidae</i> gen. et sp. indet.	AM 6 P
18. パツラマイマイ <i>Discus pauper</i> (GOULD)	AM 6 P・AH 4 P
ii. 二枚貝綱 BIVALVIA	
1. ヒバリガイ <i>Modiolus agripetus</i> (IREDALE)	AM 6 P
2. ムラサキインコガイ <i>Septifer (Mytilisepta) virgatus</i>	AM 6 P・AH 4 P

(WIEGMANN)

- |   |               |
|---|---------------|
| 3. ウチムラサキガイ <i>Saxidomus purpuratus</i> (SOWERBY)                         | AM 6 P・AH 4 P |
| 4. エゾイガイ <i>Crenomytilus grayanus</i> (DUNKER)                            | AM 6 P・AH 4 P |
| 5. マガキ <i>Crassostrea gigas</i> (THUNBERG)                                | AH 4 P        |
| 6. イソシジミ <i>Soletellina</i> ( <i>Nuttallia</i> ) <i>olivacea</i> (JAY)    | AM 6 P        |
| 7. アサリ <i>Tapes</i> ( <i>Amygdala</i> ) <i>sachalinensis</i> (SCHRENCK)   | AM 6 P・AH 4 P |
| 8. オオノガイ <i>Mya</i> ( <i>Areenomya</i> ) <i>arenaia oonogai</i> MA-KIYAMA | AM 6 P・AH 4 P |
| III. 節足動物 ARTHROPODA  |               |
| i. 蔓脚亜綱 CIRRIPIEDIA   |               |
| 1. アカフジツボ <i>Balanus tintinabulum rosa</i> PILSBRY                        | AM 6 P・AH 4 P |
| 2. チシマフジツボ <i>Balanus cariosus</i> (PALLAS)                               | AM 6 P        |
| IV. 棘皮動物 ECHINODERMATA  |               |
| i. 海胆綱 ECHINOIDEA   |               |
| 1. ムラサキウニ <i>Anthocardaris crassispina</i> (A.AGASSIZ)                    |               |
| V. 脊椎動物 VERTEBRATA  |               |
| i. 硬骨魚綱 OSTEICHTHYES  |               |
| 1. サケ <i>Oncorhynchus keta</i> (WALBAUM)                                  | AB 6 住        |
| 2. カサゴ科の一種 <i>Scorpaenidae</i> gen. et. indet.                            | AM 6 P        |
| 3. アイナメ <i>Hexagrammos otakii</i> JORDAN et STARKS                        | AM 6 P        |
| 4. カレイの一種 <i>Pleuronectidae</i> gen. et. sp. indet.                       | AM 6 P        |
| ii. 爬虫綱 REPTILIA  |               |
| 1. ヘビの一種 <i>Ophidia</i> fam. indet.                                       | AM 6 P・AH 4 P |
| iii. 哺乳綱 MAMMALIA   |               |
| 1. キツネ <i>Vulpes vulpes</i> (LINNÉ)                                       | AM 6 P        |
| 2. イノシシ <i>Sus scrofa</i> LINNÉ   | AM 6 P        |
| 3. シカ <i>Cervus nippon</i> TEMMINCK                                       | AB 6 住・AM 6 P |
| 4. ウマ <i>Equus caballus caballus</i> LINNAEUS                             | AM 6 P        |
| 5. 海獣の一種  | AB 6 住        |

※種の記載にあたっては、北隆館の日本の動物図鑑の順に従っている。

種不明の動物遺存体の種同定に際しては、国立歴史民俗博物館助教授西本豊弘氏よりご教示いただいた。

## 遺構別補足説明

### AB 6 住居跡

#### I. 脊椎動物

i 硬骨魚綱 サケ 尾椎が1点出土している。完形ではない。焼けて白色化している。

ii 哺乳綱 シカ  $P_2 \cdot P_3 \cdot P_4 \cdot M_1 \cdot M_2$ を伴った左下顎骨が1点出土している。 $P_4$ が完全に萌出していること、磨滅の度合からみても、成獣であると思われる。保存状態は良好ではなく、下顎骨全体の形態をとどめておらず、かろうじて  $P_2 \sim M_2$ の歯槽の部分の顎骨が残存するのみである。この他に焼けて炭化の著しい左中手骨の近位部破片と、焼けて白色化している中手、中足骨と思われる骨片が数片出土している。

### AM 6 土坑

#### I. 脊椎動物

i 硬骨魚綱 1. カサゴの1種 右主上顎骨1点、左舌顎骨1点、右主鰓蓋骨1点、左上擬鎖骨1点の計5点が出土している。東北地方の海域に棲息するカサゴ科には多くの種類が見られ、沿岸の岩礁地帯に棲息する魚種では、カサゴ類(沿岸の比較的浅い岩礁部に棲息)、ソイ類(沿岸の水深100m以浅の岩礁部に棲息)、メバル類(沿岸の岩礁部棲息)などが挙げられる。

これらの魚類遺存体は種同定が非常に困難であり、また、現生標本の不備などからカサゴ科の一種に留めた。左舌顎骨・左上擬鎖骨に関しては、メバル類よりソイ類に近似している。

2. アイナメ 左前上顎骨1点、右角骨1点、左間鰓蓋骨1点、腹椎1点の計4点が出土している。前上顎骨長は、両端が欠損しているため計測不能であるが、残存部の計測値が18.3mmである。この計測値で欠損している部分も考慮し、現生標本との相関関係を見ると、体長は少なくとも30cm以上の比較的大型のアイナメであることが言える。

3. カレイの一種 鋤骨が1点出土しているのみである。特徴的な第1血管棘の出土は見られない。標本不備から種同定までは到らずカレイの一種に留めた。

ii 爬虫綱 ヘビの一種 脊椎骨1点が出土しているのみである。

ヘビ目の種同定は困難で、現生骨格標本(マムシ・ヤマカガシ)と照合してみたが、種は同定し得なかったため、ヘビ目の一種に留めた。

iii 哺乳綱 1. キツネ 頭骨では  $I^3 \cdot P^1 \cdot P^2 \cdot P^3 \cdot P^4 \cdot M^1 \cdot M^2$ を伴った右上顎骨1点、 $P_1 \cdot P_2 \cdot P_3 \cdot P_4 \cdot M_1 \cdot M_2 \cdot M_3$ を伴った右下顎骨1点、 $I_2 \cdot C$ を伴った左下顎骨1点が出土しており、四肢骨では、左橈骨1点、左尺骨1点、右脛骨1点、左脛骨1点が出土している。

本遺跡出土の哺乳類遺存体としては、1種では最も出土部位が多かった遺存体である。

右上顎骨と右下顎骨のそれぞれの  $M^2$ と  $M_2 \cdot M_3$ は歯槽に歯根部がわずかに残存するのみである。また、この2例はいずれも解体時における切痕と思われる傷を有している。左下顎骨の

I<sub>2</sub>も歯槽に歯根部が残存するのみである。

左橈骨は近位端の橈骨頭より全体の約2分の1が残存している。左尺骨は近位端の肘頭が欠損しているのみで、ほぼ完形である。この左橈骨と左尺骨は左前腕骨を構成していたものと考えられる。左脛骨は、前面の近位端に近い部分と思われる部分が残存するのみである。右脛骨は遠位端が欠損し、前縁部が破損している。

この四肢骨を見るかぎりでは、骨が細く華奢なキツネであると思われる。

2. イノシシ 右下顎骨のM<sub>3</sub>の遊離歯が1点出土している。歯冠部が残存している。

歯種同定し得なかったイノシシの未萌歯片と思われる歯片も数片みられ、磨滅の度合などからみても、比較的若い個体と考えられる。

3. シカ 本遺跡では最も出土量の多い哺乳類遺存体である。頭骨では、右後頭部顆骨片1点、後頭骨底部骨片1点、左側頭骨鼓室部内面に見られる耳骨1点と、部位同定不可能な頭骨片と右上顎骨のM<sup>1</sup>・M<sup>2</sup>・M<sup>3</sup>、左上顎骨のM<sup>2</sup>の遊離歯が出土している。また、歯種不明の遊離歯片数片も出土している。

四肢骨では、右基節骨の近位端骨片1点、左中手骨の近位端骨片1点、左脛骨片1点が出土している。右基節骨は近位端の中足骨遠位端との関節面が残存する。左中手骨は遠位端が欠損し、近位端の底より全体の約3分の2が残存する。左脛骨は近位、遠位両端を欠き、後面が残存する。

4. ウマ 左肩甲骨1点が出土している。本遺跡出土の哺乳類としては最も大型である。近位端の関節窩付近から、遠位端方向に全体の約2分の1が残存している。関節上結節より伸びる烏口突起は欠損している。

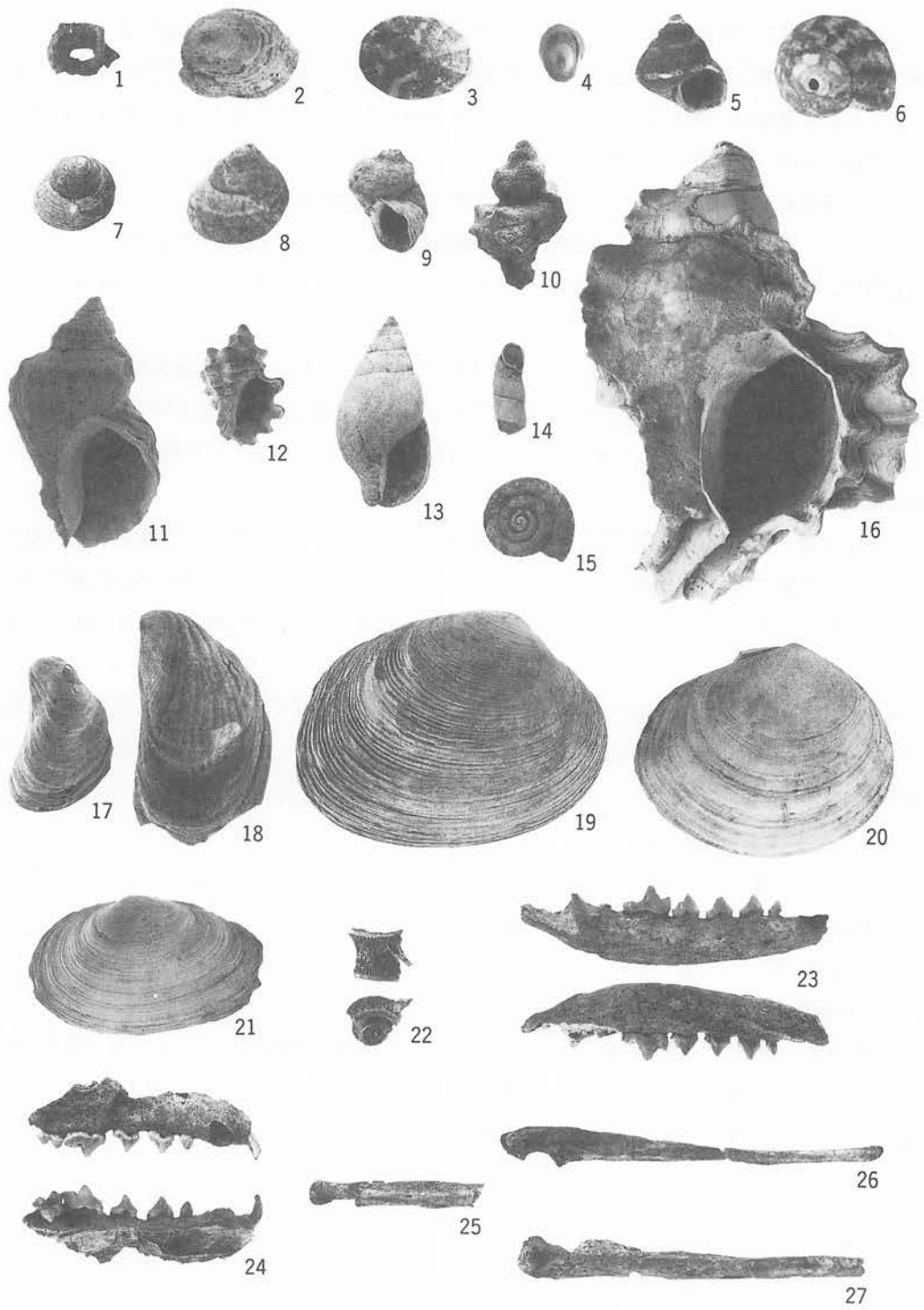
大きさからいって成獣のものである。

AM6土坑の遺存体同定に際し、標本不備などから種同定できなかった遺存体も多い。魚類では左上顎骨2点、鳥類では頸椎1点である。

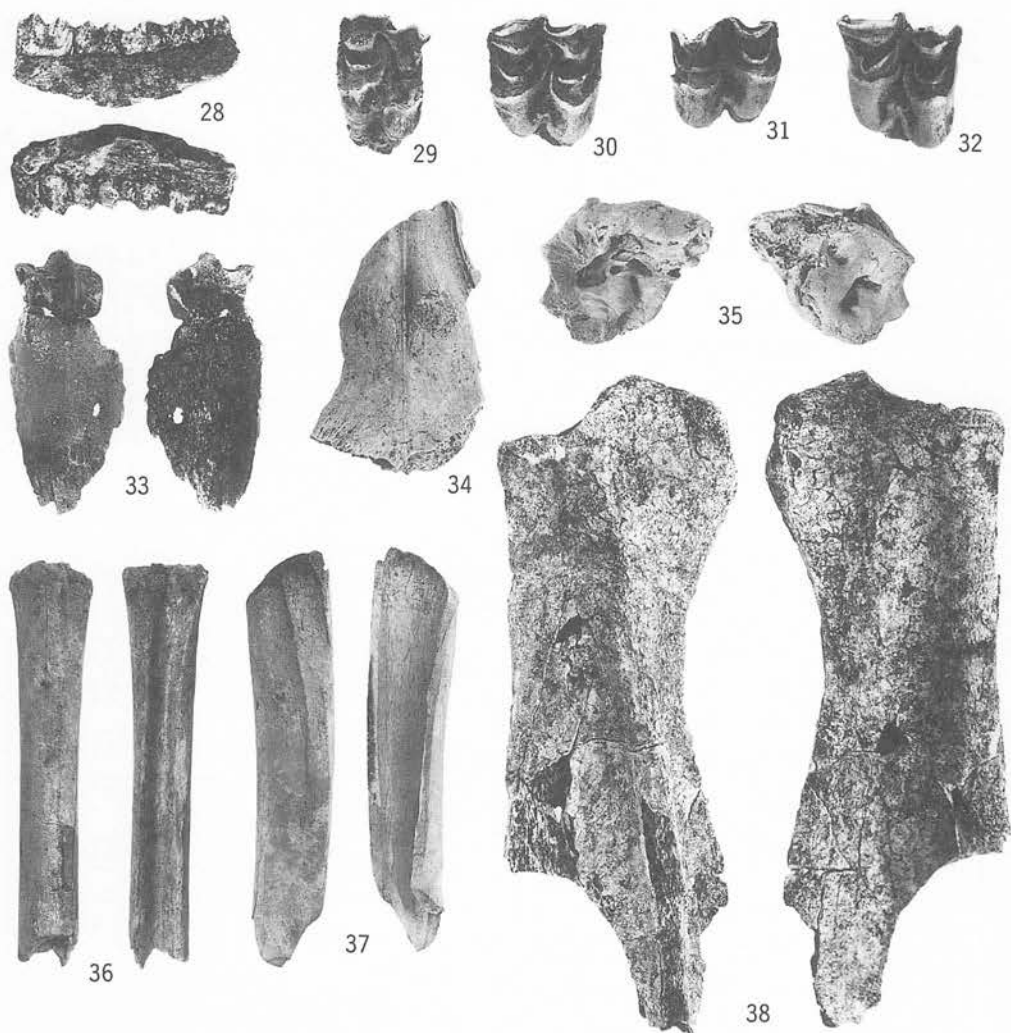
#### AH4土坑

##### I 脊椎動物

i 爬虫綱 ヘビ目の一種、脊椎骨が2点出土している。AM6土坑出土のヘビ目の一種の脊椎骨とほぼ同大の脊椎骨1点と小型の脊椎骨1点がみられ、2個体のヘビ目の遺存が考えられる。種同定は困難なため、ヘビ目の一種に留めた。



動物遺存体(1) ※いずれも縮尺は不定



1	カネカンザシ?	11	チヂミボラ	21	オオノガイ	31	シカM <sup>2</sup>
2	シボリガイ	12	レインガイ	22	サケ尾椎骨	32	シカM <sup>3</sup>
3	シロガイ	13	コシダカマツムシガイ	23	キツネ右下顎骨	33	シカ左中手骨
4	コシダカアオガイ	14	キセルガイ	24	キツネ右上顎骨	34	シカ後頭骨底部
5	エゾチグサガイ	15	バツラマイマイ	25	キツネ左腕骨	35	シカ左耳骨
6	コシダカガンガラ	16	ヒレガイ	26	キツネ左尺骨	36	シカ右中手骨
7	エゾサンショウガイ	17	ヒバリガイ	27	キツネ右頸骨	37	シカ左頸骨
8	タマキビ	18	ムラサキインコガイ	28	シカ左下顎骨	38	ウマ左肩甲骨
9	クロタマキビ	19	ウチムラサキガイ	29	シカM <sup>1</sup>		
10	オオショウラクガイ	20	イソシジミ	30	シカM <sup>2</sup>		

動物遺存体(2) ※いずれも縮尺は不定

石器・石製品・計測表

番号	器種	出土地点	図版番号	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	産地
1	磨石	AC 4 住居跡	26	7.2	7.9	4.3	380	輝石安山岩	北上山地中生界
2	磨石	AE 6 住居跡	80	11.4	8.8	6.7	960	閃緑岩	〃
3	磨石	〃	79	11.4	9.9	6.5	880	輝石安山岩	〃
4	磨石	〃	81	14.8	8.8	5.9	1,010	〃	〃
5	磨石	AE 8 住居跡	92	11.3	8.2	6.5	870	閃緑岩	〃
6	磨石	〃	101	12.0	8.6	6.0	870	〃	〃
7	石皿	〃	147	(13.3)	(8.3)	8.0	650	両輝石安山岩 (熔岩片)	奥羽山地第四系
8	磨石	〃	148	11.6	9.9	7.4	1,130	半花崗岩	北上山地中生界
9	磨石	〃	149	11.4	8.7	9.0	890	花崗閃緑岩	〃
10	磨石	〃	150	10.3	8.8	6.6	790	〃	〃
11	磨石	〃	151	11.8	9.0	6.5	880	〃	〃
12	磨石	〃	152	5.5	7.5	6.2	320	輝石安山岩	〃
13	磨石	〃	153	8.5	6.2	4.5	270	花崗閃緑岩	〃
14	磨石	〃	154	7.6	5.8	3.6	250	チャート	〃
15	磨石?	〃	155	4.5	4.4	3.8	100	〃	〃
16	磨石	〃	156	9.5	7.5	7.5	580	輝石安山岩	〃
17	磨石	〃	157	7.6	5.6	5.4	310	半花崗岩	〃
18	磨石	〃	158	7.7	6.6	6.7	480	花崗閃緑岩	〃
19	磨石・敷石	〃	159	10.0	9.5	5.8	730	凝灰質砂岩	北上山地新生界
20	磨石	〃	160	4.4	8.0	4.8	180	輝石安山岩	北上山地中世界
21	磨石・石剣?	〃	161	4.8	4.7	2.5	85	粘板岩	北上山地古世界
22	石剣?	〃	162	22.0	4.7	1.6	220	〃	〃
23	U フレ	〃	163	5.2	2.1	0.5	3.9	珪質細粒凝灰岩	奥羽山地新第三系中新統
24	磨石	AJ 5 住居跡	177	10.5	8.0	4.2	480	輝石安山岩	北上山地中生界
25	磨石?	〃	178	5.6	5.0	3.3	130	チャート	〃
26	磨石	AK 10 住居跡	211	7.6	5.5	3.0	190	硬砂岩	北上山地古生界
27	フレイク	〃	212	3.2	3.4	1.4	10.3	輝石凝灰岩	〃
28	フレイク	〃	213	2.1	2.4	0.7	2.65	〃	〃
29	硬玉製垂飾	〃	214	4.1	2.3	1.4	20.9	チャート質淡緑色凝灰岩	不詳
30	砥石?	AB 14 住居跡	243	18.0	14.9	10.6	3,900	輝石安山岩	北上山地中生界
31	磨石	BB 6 住居跡	246	12.4	8.5	5.2	780	〃	〃
32	粗製石皿	〃	247	47.0	21.3	8.6	1,700	チャート	北上山地古生界
33	磨石	BC 5 住居跡	262	14.4	8.1	6.3	1,110	花崗閃緑岩	北上山地中生界
34	磨石	〃	263	16.9	6.8	4.0	770	閃緑岩	〃
35	磨石	〃	264	12.5	8.4	6.1	860	半花崗岩	〃
36	磨石	〃	265	5.9	5.3	3.5	150	〃	〃
37	磨石	BF 6 住居跡	301	13.1	9.4	6.5	1,160	チャート質粘板岩	北上山地古生界
38	磨石	AG 3 土坑	352	9.8	7.8	5.1	600	輝石安山岩	北上山地中世界
39	磨石・凹石	AD 8 住居跡	382	10.0	8.0	5.9	670	半花崗岩	〃
40	凹石	〃	383	7.3	7.4	3.0	250	硬砂岩	北上山地古生界
41	砥石	AA 3 住居跡	401	9.6	6.7	5.7	360	半花崗岩	北上山地中生界
42	磨石	〃	402	5.5	8.2	4.5	250	〃	〃
43	凹石?	〃	403	16.6	6.4	2.3	460	硬砂岩	北上山地古生界
44	磨石	AE 7 住居跡	413	17.0	11.8	5.4	1,580	チャート	〃
45	磨石	〃	414	11.9	8.0	6.3	840	半花崗岩	北上山地中世界



番号	器種	出土地点	図版番号	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	産地
46	磨石	Aj7住居跡状遺構	432	10.9	10.4	7.1	1,080	半花崗岩	北上山地中世界
47	磨石・敲石	AC7土坑	476	10.7	4.8	2.0	170	閃綠岩	〃
48	磨石	AL10土坑	482	11.0	5.9	4.2	330	輝石安山岩	〃
49	磨石	AM7土坑	486	11.0	7.8	6.0	740	流紋岩	北上山地古第三系(?)
50	磨石	〃	487	11.7	7.9	7.4	820	花崗閃綠岩	北上山地中生界
51	磨石	〃	488	7.7	7.7	6.3	420	〃	〃
52	磨石	〃	489	10.1	7.9	3.7	310	輝石安山岩	〃
53	粗製石皿	〃	490	18.1	22.0	9.9	5,600	半花崗石	〃
54	石匙	AL-9住居跡状遺構	682	3.4	4.5	0.6	10.1	珪質細粒凝灰岩	奥羽山地新第三系中新統
55	Rフレ	AE-7住居跡	683	3.5	6.0	1.2	21.1	珪質泥岩	奥羽山地中新統
56	磨石	不明	684	14.4	8.4	5.8	1,050	半花崗岩	北上山地中生界
57	磨石	A区	685	13.3	8.2	7.1	1,090	〃	〃
58	磨石	B区	686	10.9	8.2	6.7	910	花崗閃綠岩	〃
59	磨石	A区	687	10.6	8.8	6.1	960	閃綠岩	〃
60	磨石	B区	688	10.7	8.0	6.9	870	花崗閃綠岩	〃
61	磨石	A区	689	9.9	8.7	5.9	720	〃	〃
62	磨石	A区	690	13.9	8.5	5.6	910	輝石安山岩	〃
63	磨石	A区	691	7.5	6.2	4.9	290	花崗閃綠岩	〃
64	磨石	A区	692	9.1	4.3	4.8	260	輝石安山岩	〃
65	磨石	A区	693	12.0	10.1	5.9	970	閃綠岩	〃
66	磨石	A区	694	7.2	5.6	3.9	230	花崗閃綠岩	〃
67	磨石	不明	695	7.9	5.7	4.6	280	半花崗岩	〃
68	砥石	B区	696	18.2	10.6	7.1	1,770	流紋岩	北上山地古第三系
69	砥石	A区	697	13.6	11.0	3.3	620	〃	北上山地新生界?
70	砥石	B区	698	18.1	7.1	4.3	630	〃	北上山地古第三系

写 真 图 版



空中写真(1) 遺跡遠景



空中写真(2) 調査区全景

写真図版 1 空中写真



空中写真(3) A調査区全景



空中写真(4) B調査区全景

写真図版 2 空中写真



遺跡近景（調査前）



← I層

← II層

← III層

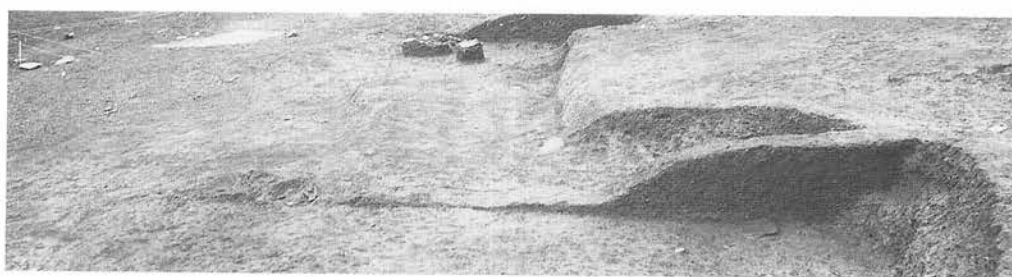
← IV層

B区深掘土層断面

写真図版3 基本土層



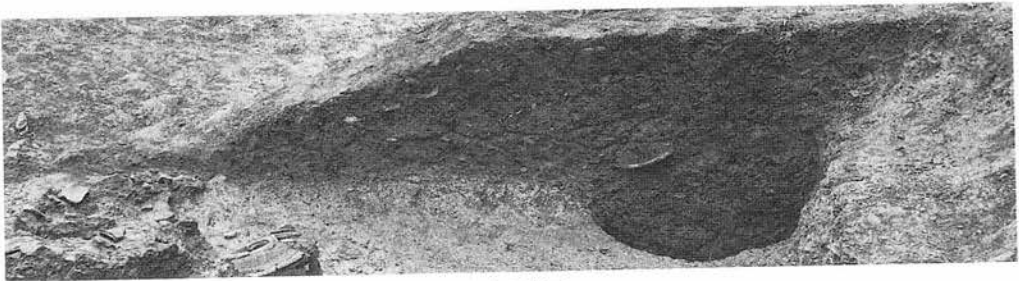
AA 2・AB 3 住居跡全景



AB 3 住居跡埋土層断面



AC 4 住居跡全景



埋土土層断面



炉平面



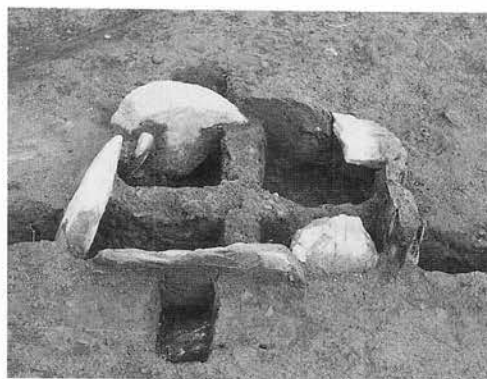
AC 6 - 1 住居跡全景



埋土土層断面



炉平面

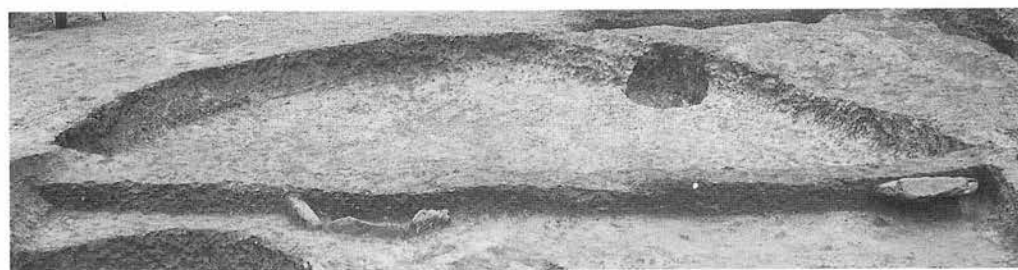


炉断面

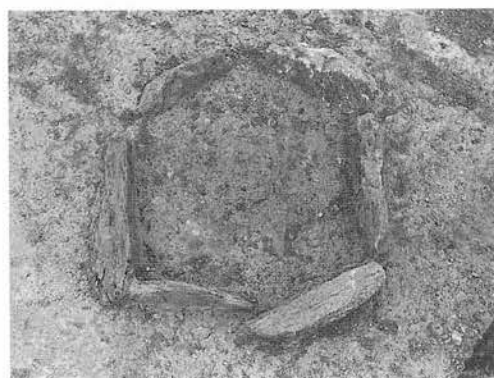




AC 6 - 2 住居跡全景



埋土土層断面



炉平面

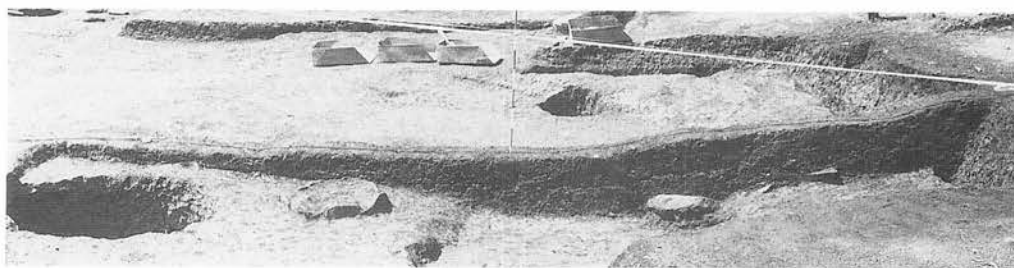


炉断面

写真図版 7 AC 6 - 2 住居跡



AD 5 住居跡全景



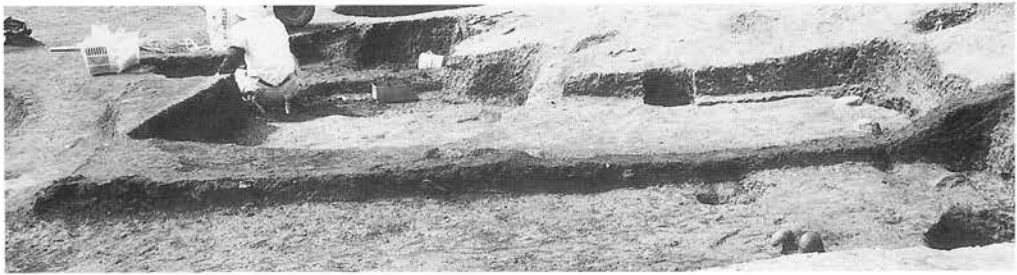
埋土土層断面



焼土検出状況



AE 6 住居跡全景



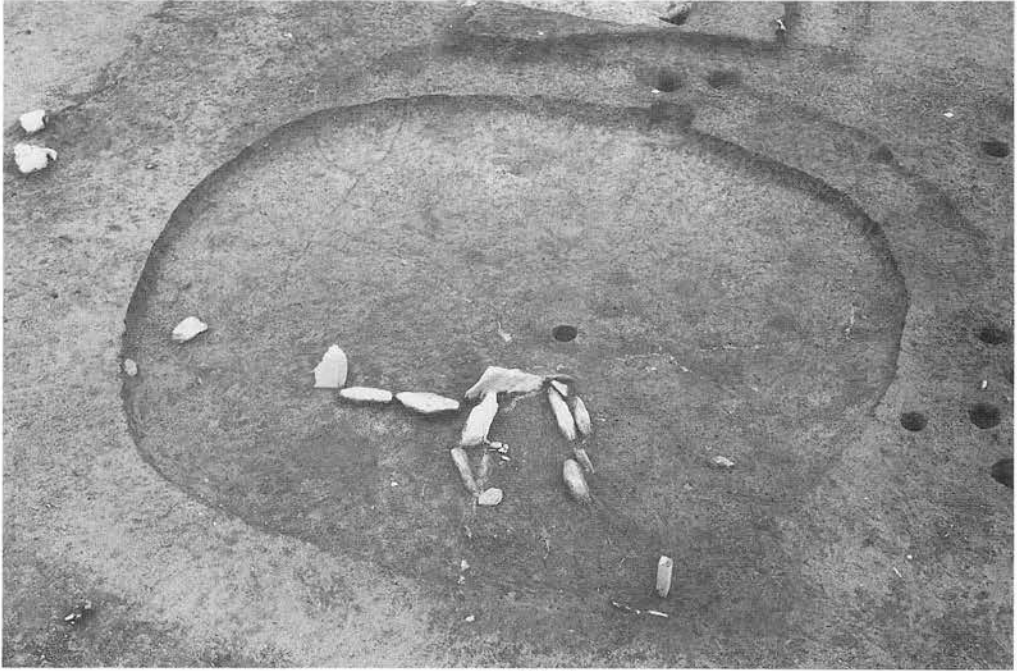
埋土土層断面



炉平面



炉断面



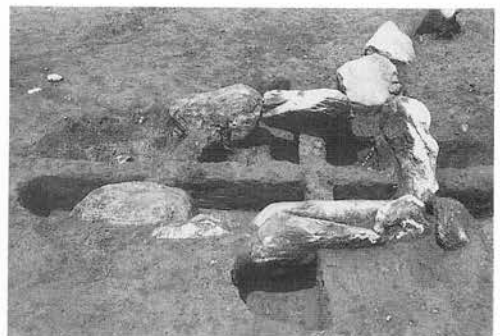
AE 8 住居跡全景



炉平面

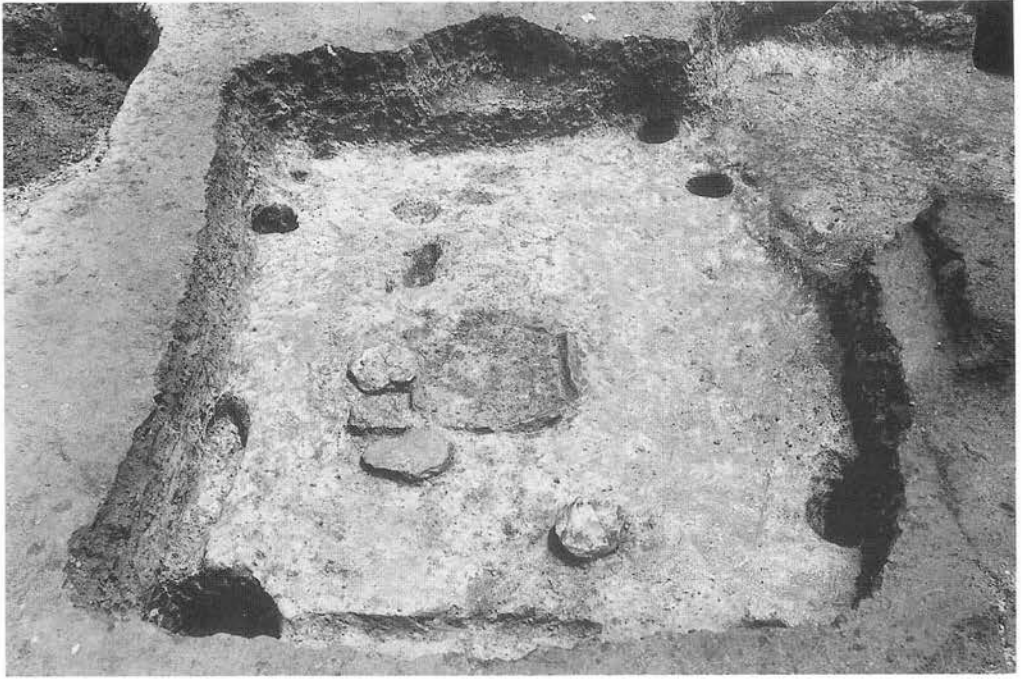


炉断面

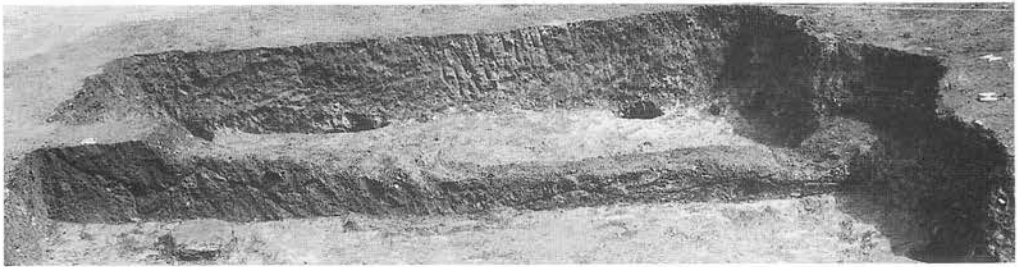


炉断面

写真図版 10 AE 8 住居跡



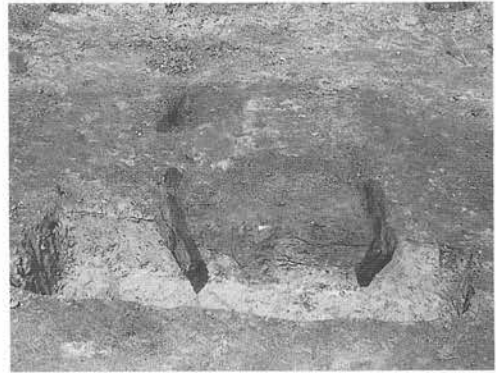
AF 7 住居跡全景



埋土土層断面

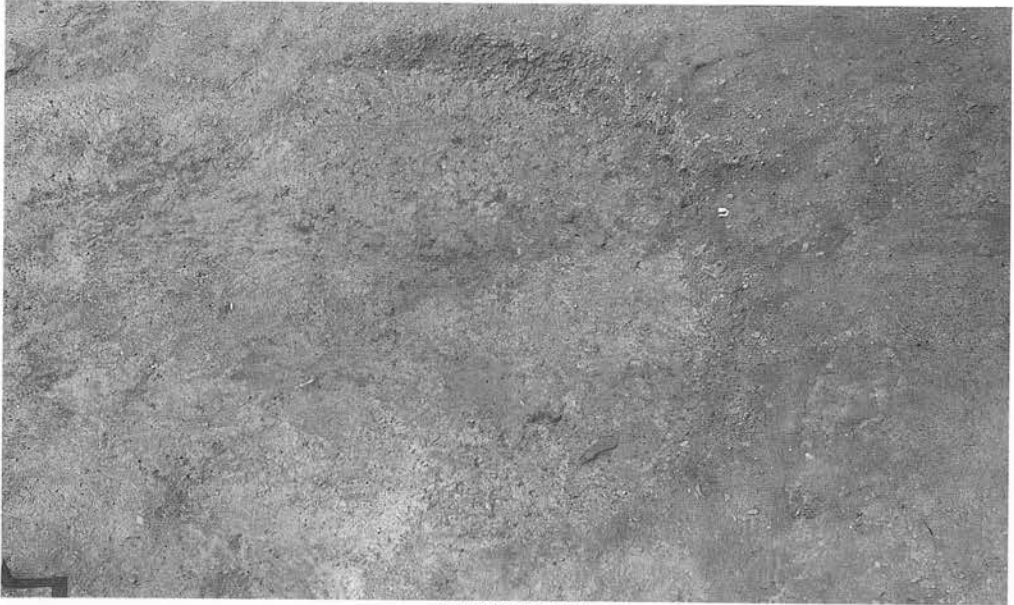


炉平面



炉断面

写真図版 11 AF 7 住居跡



AI 5 住居跡全景



埋土土層断面



A 区調査風景



AI 8 住居跡全景



埋土土層断面

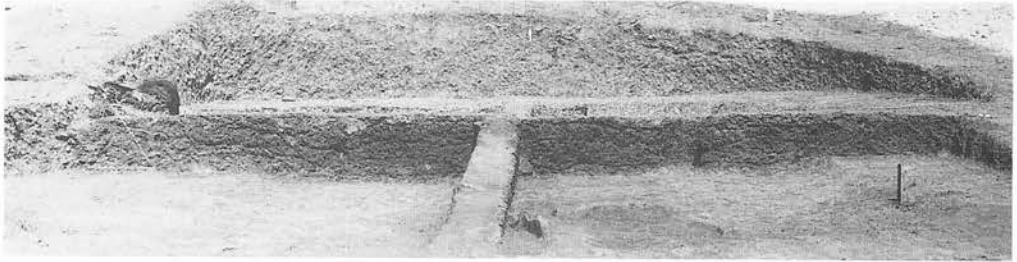


炉平面

写真図版 13 AI 8 住居跡



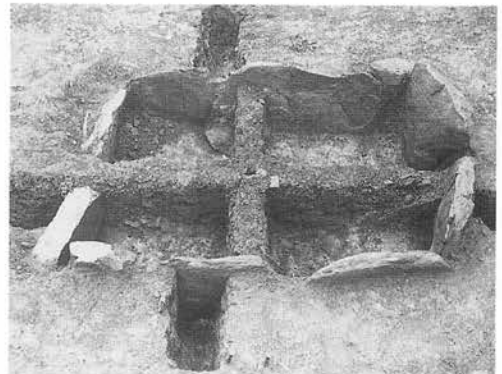
AJ5 住居跡



埋土土層断面



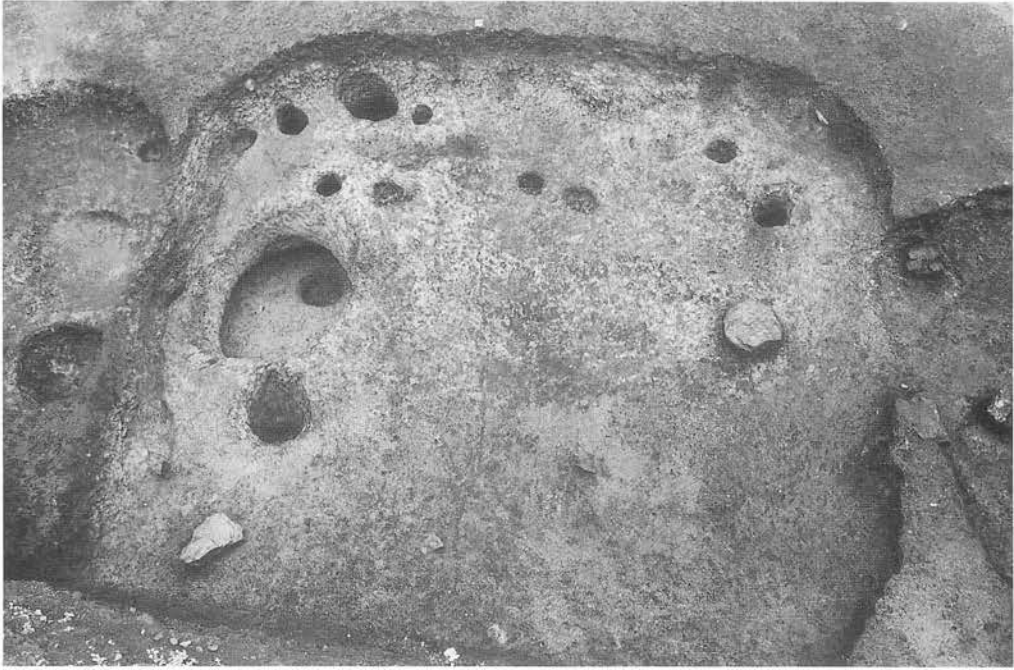
炉平面



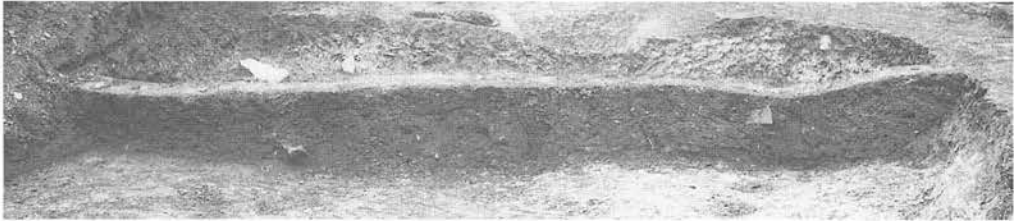
炉断面

写真図版 14 AJ5 住居跡

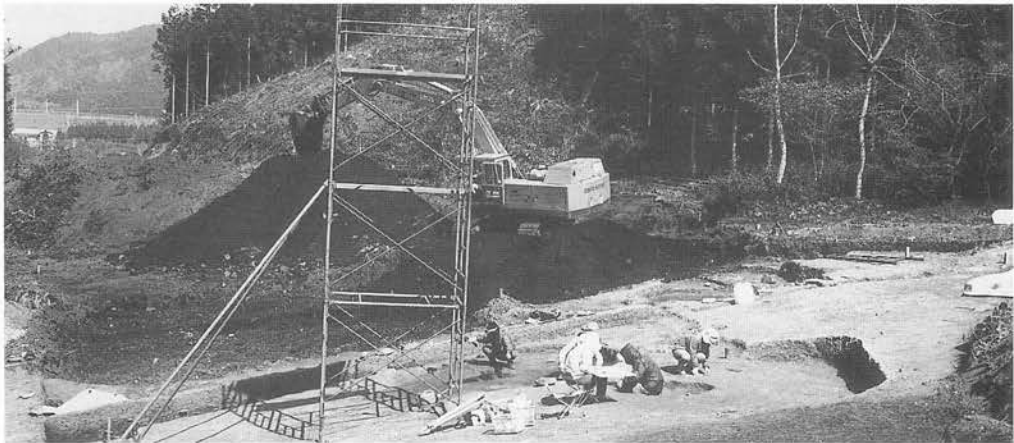




AK10住居跡全景



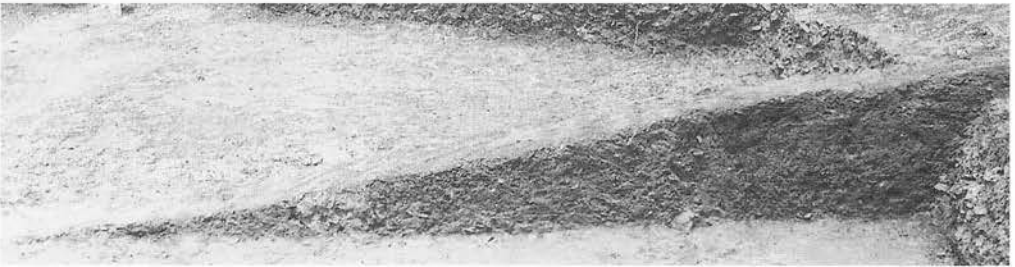
埋土土層断面



B区調査風景



AM 8 住居跡全景



埋土土層断面



炉平面



炉断面



BA 2 住居跡全景



埋土土層断面



炉平面



炉断面

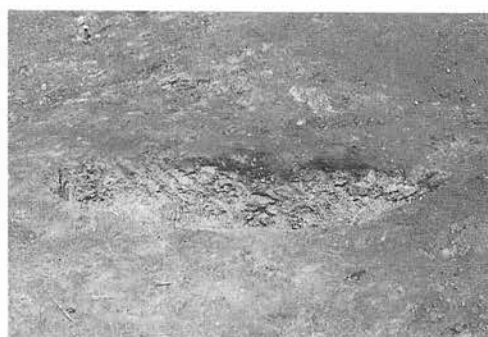
写真図版 17 BA 2 住居跡



BA14住居跡全景



炉平面



炉断面



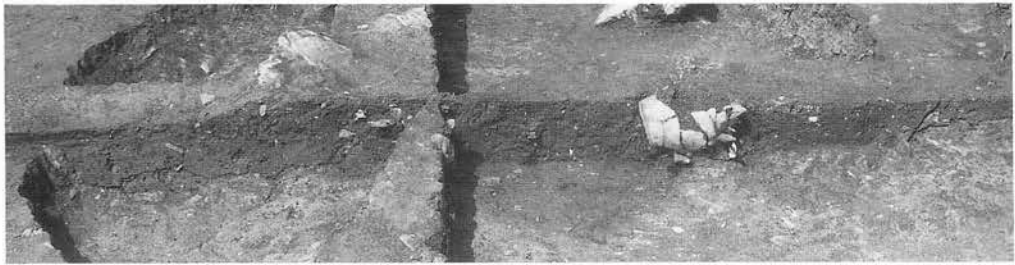
烧土平面



烧土断面



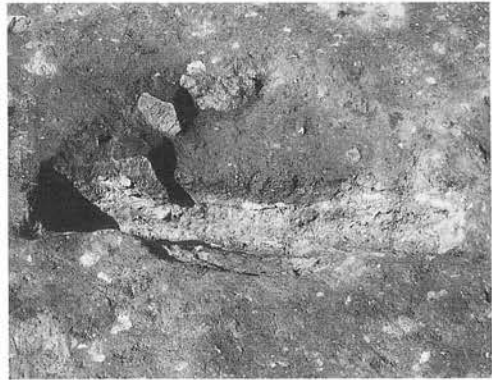
BB 6 住居跡全景



埋土土層断面



炉平面



炉断面



BC 5 - 1 住居跡全景



埋土土層断面



炉平面

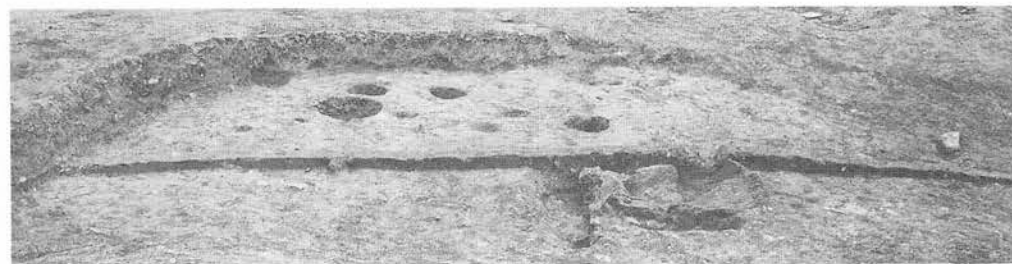


炉断面

写真図版 20 BC 5 - 1 住居跡



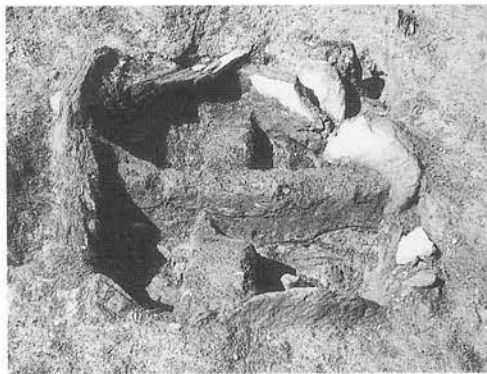
BC 5 - 2 住居跡全景



埋土土層断面



炉平面



炉断面

写真図版 21 BC 5 - 2 住居跡



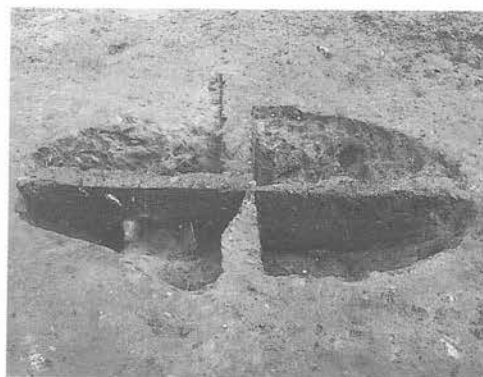
BD 3 住居跡全景



埋土土層断面



炉平面



炉断面





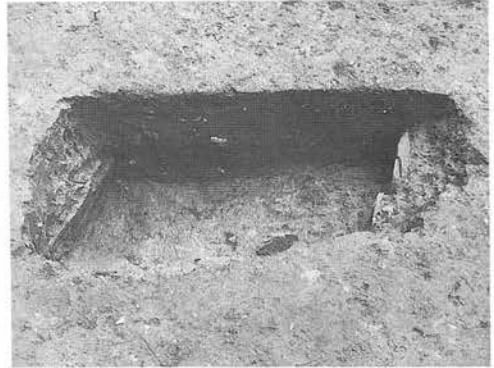
BF 6 住居跡全景



埋土土層断面



石囲炉平面



石囲炉断面



地床炉平面



地床炉断面



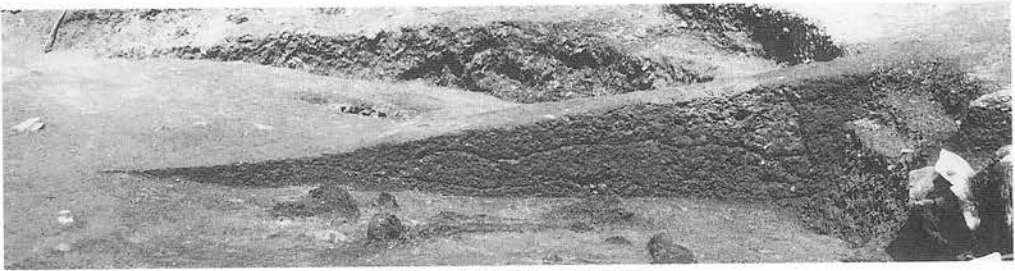
BF 7 住居跡全景



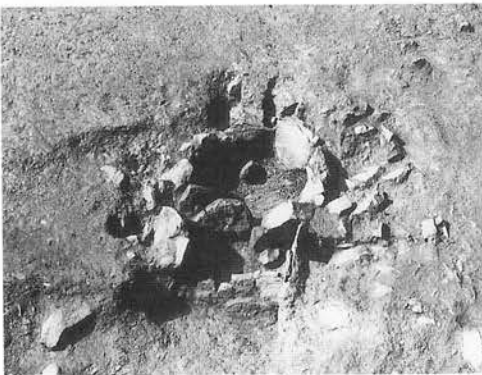
埋土土層断面



BG12-1・2. BH13住居跡全景



BG12-1住居跡埋土土層断面



炉完掘状況



炉検出状況



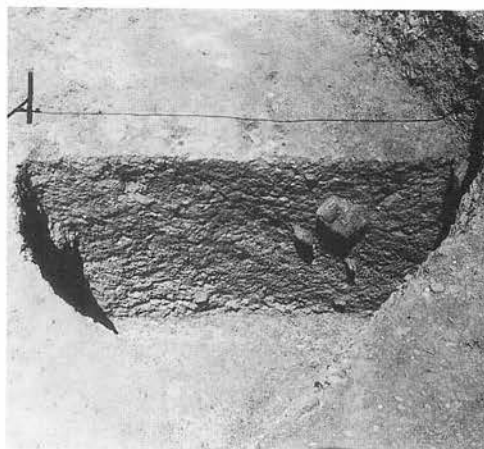
BG12-1 住居跡炉断面



BG12-1 住居跡炉断面



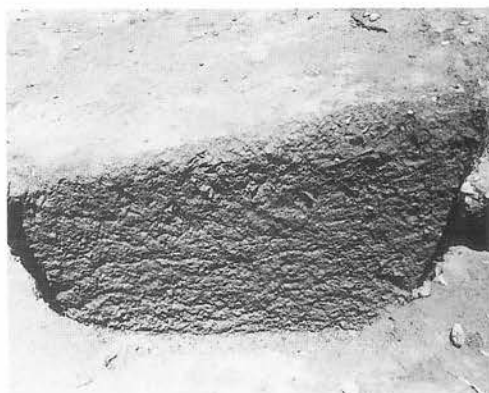
BG12-1 住居跡炭化材出土状況



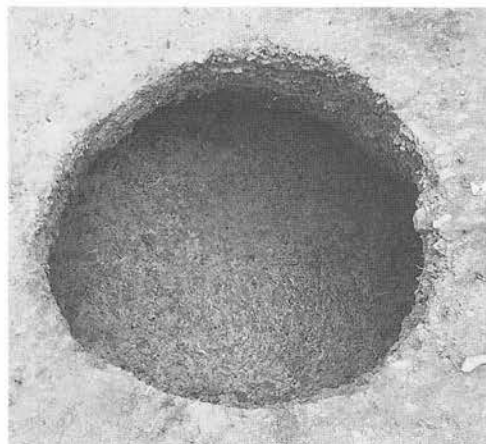


AF 4 土坑

平面

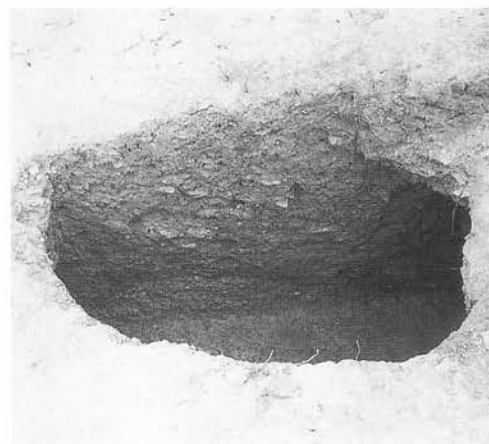


断面



AG 3 土坑

平面



断面

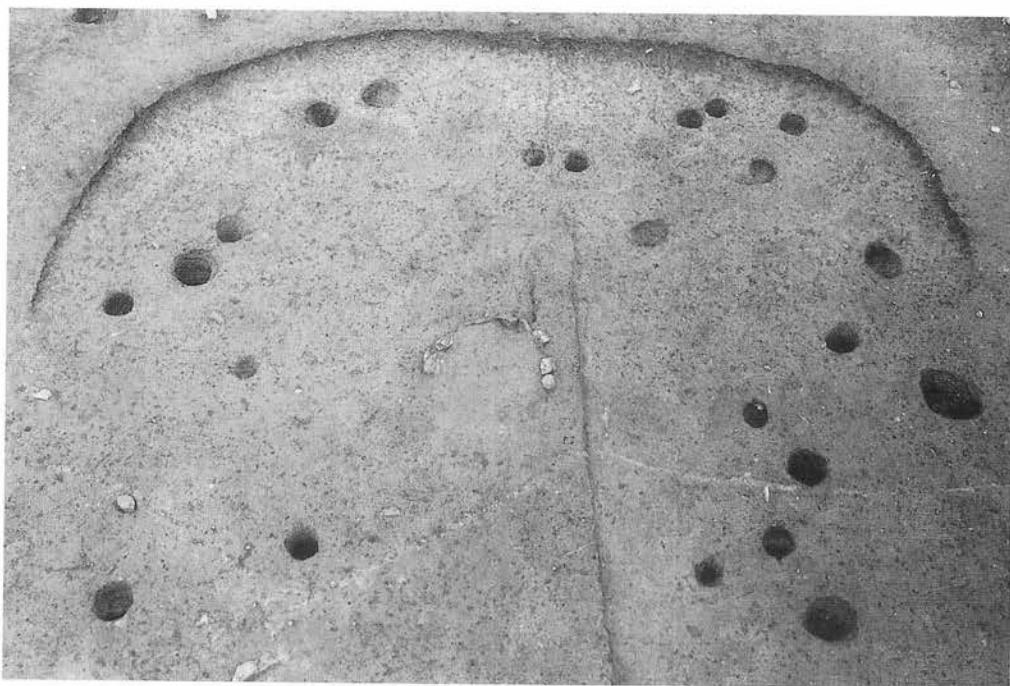


AI 3 土坑

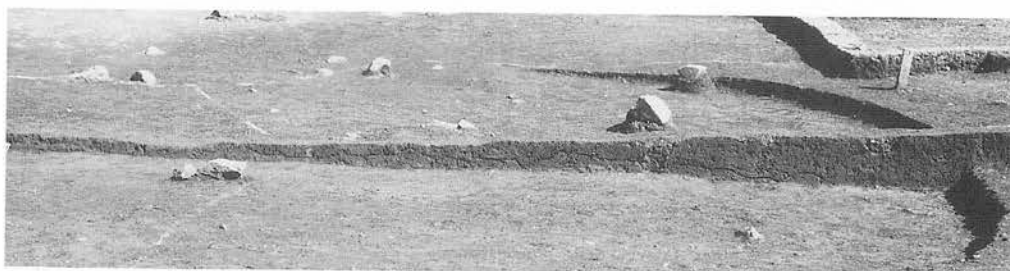
平面



断面



AD 8 住居跡全景



埋土土層断面



炉平面



炉断面



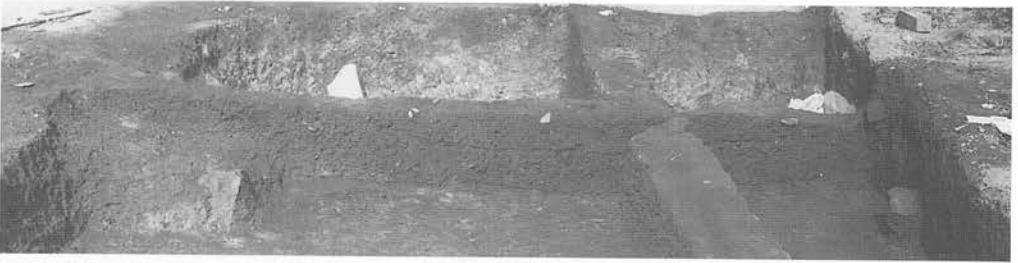
AA 3 住居跡全景



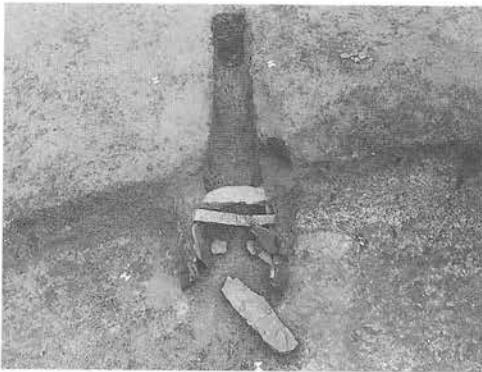
遺物出土状況



埋土土層断面



埋土土層断面



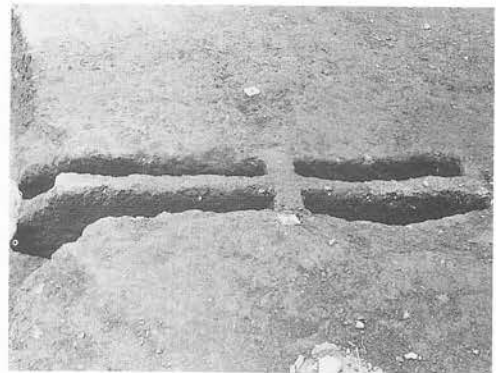
カマド全景



カマド、天井部、燃烧部平面

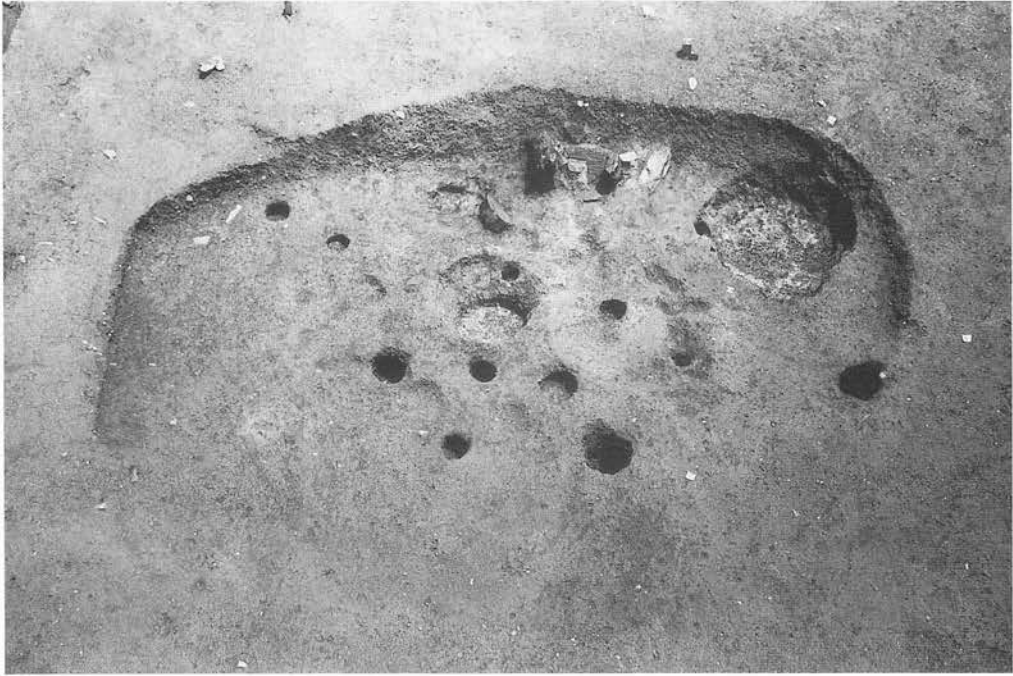


カマド袖部断面

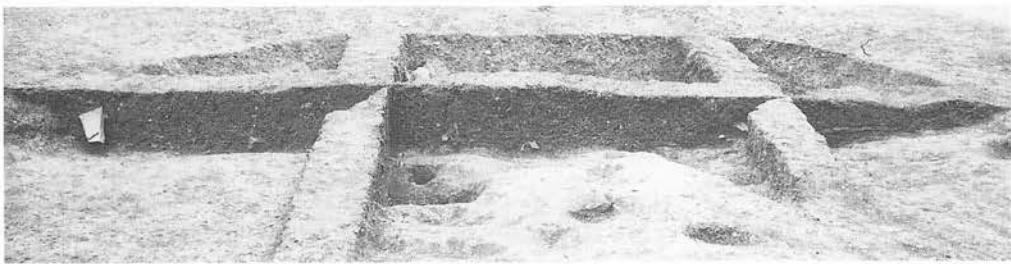


カマド煙道部断面

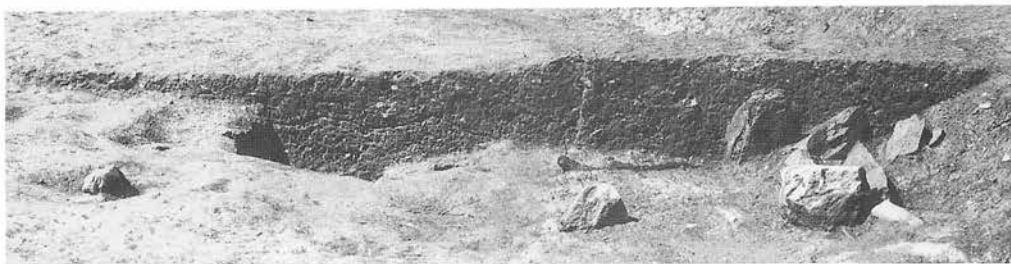




AB 6 住居跡全景



埋土土層断面



埋土土層断面



埋土土層断面



カマド平面



焼土・カマド燃烧部断面



袖部・天井部断面



袖部断面



附属土坑No. 2 平面



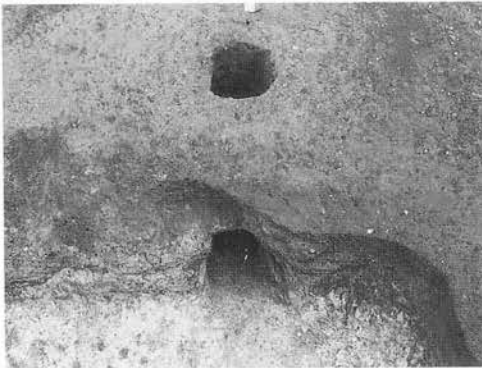
附属土坑No. 2 断面



AE 7 住戸跡全景



埋土土層断面



カマド全景



煙出し部断面



AJ 9 住居跡全景



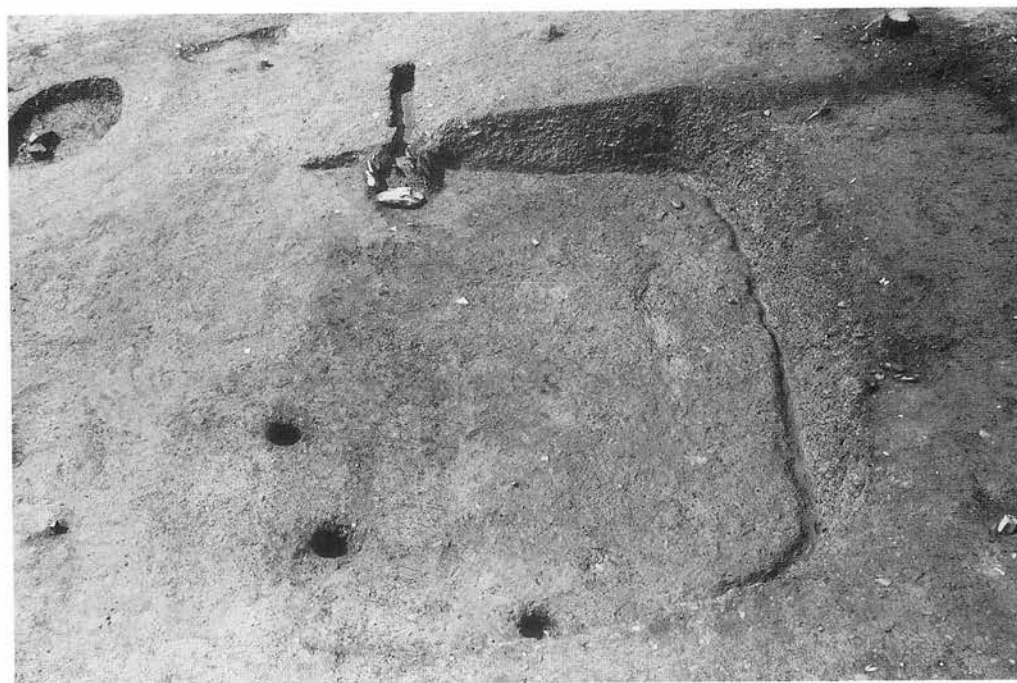
埋土土層断面



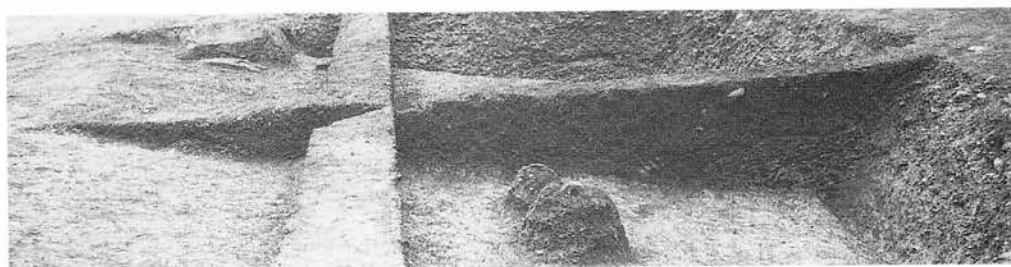
カマド平面



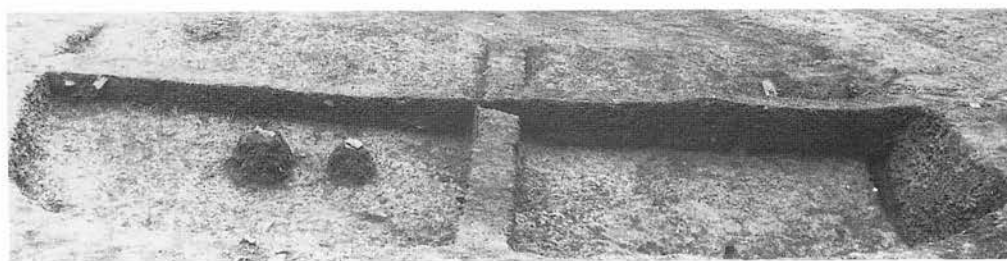
カマド断面



AK 4 住居跡全景



埋土土層断面



埋土土層断面



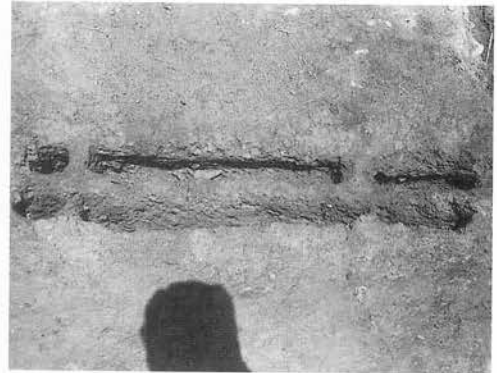
カマド全景



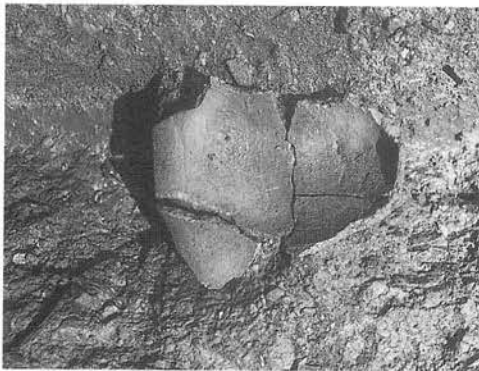
天井部・袖部断面



天井部断面



煙道部断面



土器出土状況



土器出土状況



AH 6 住居跡状遺構全景



埋土土層断面



A1 7 住居跡状遺構全景



AJ 6 住居跡状遺構全景



埋土土層断面

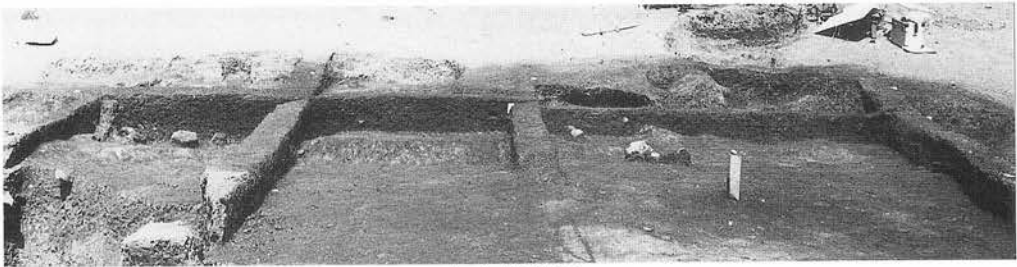


焼土検出状況

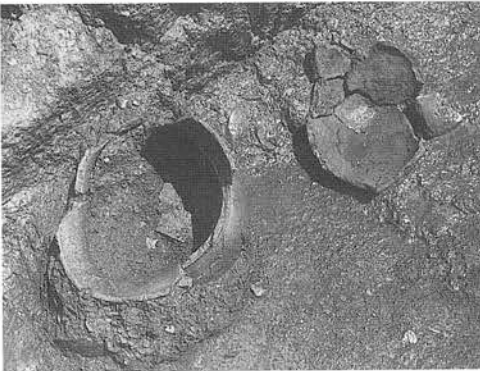




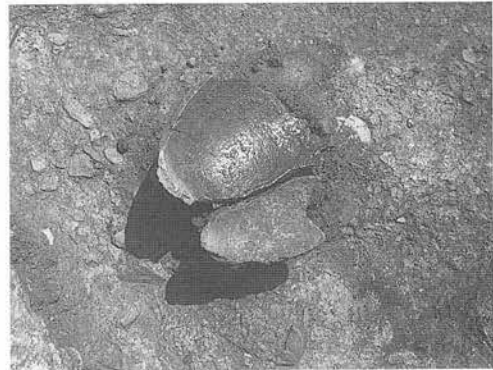
AJ 7 住居跡状遺構全景



埋土土層断面



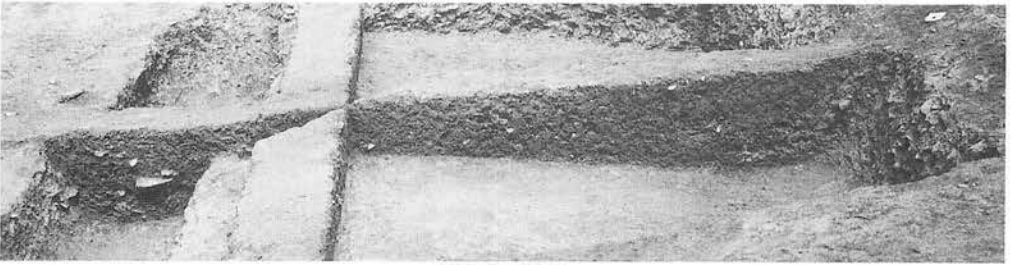
土器出土状況



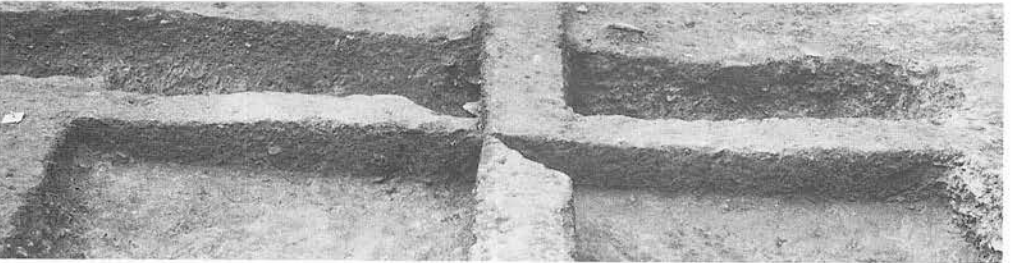
土器出土状況



AL 8 住居跡状遺構



埋土土層断面



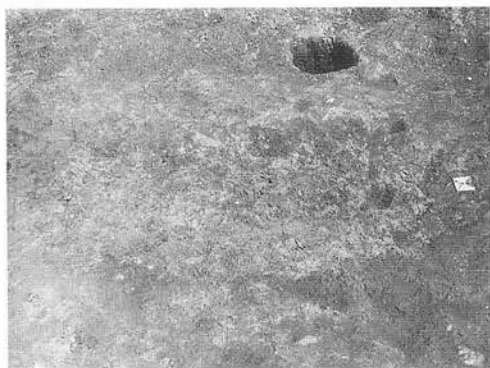
埋土土層断面



AL 9 住居跡状遺構全景



埋土土層断面



焼土平面



焼土平面

写真図版 41 AL 9 住居跡状遺構



BB12住居跡状遺構全景



埋土土層断面

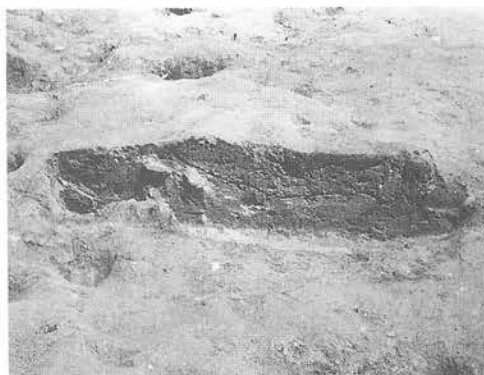


BE 5 住居跡状遺構全景

写真図版 42 BB12・BE 5 住居跡状遺構



BE 5 住居跡状遺構焼土平面



焼土断面



BF12工房跡全景



埋土土層断面



埋土土層断面



全景第2面



埋土土層断面



鍛冶炉No. 1

検出状況



鍛冶炉No. 1

断面



鍛冶炉No. 1

断面



鍛冶炉No. 1

完掘状況



鍛冶炉No. 2 ~ No. 4

平面



鍛冶炉No. 2 ~ No. 4

底面断面



焼土平面



焼土断面



AC 7 土坑

平面



断面



AD 4 土坑

平面



断面



AD 4 土坑

礫検出状況



焼土検出状況





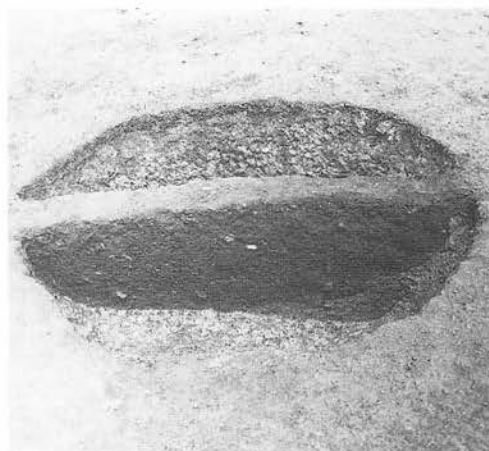
AE 4 土坑

平面



AE 5 土坑

平面

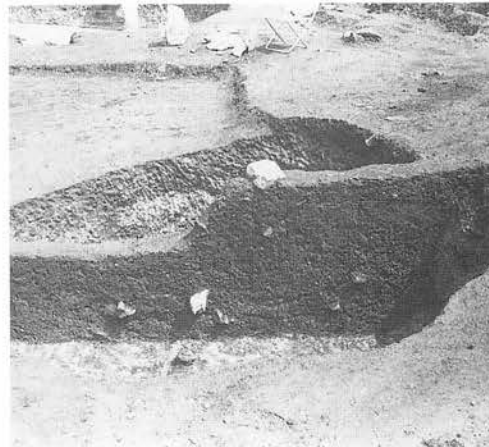


断面



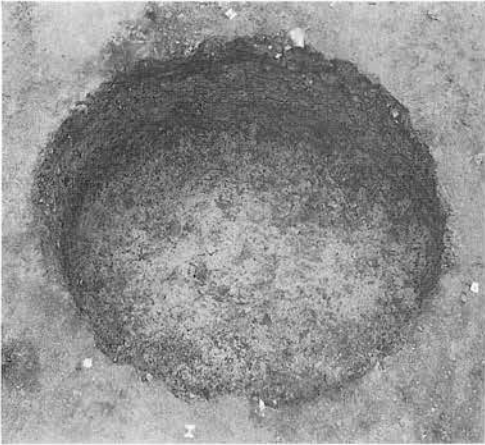
AG 7 土坑

平面



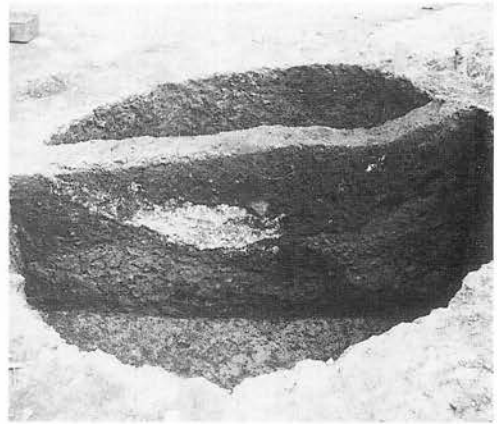
断面

写真图版 47 AE 4·AE 5·AG 7 土坑



AH 4 土坑

平面



断面



AH 4 土坑

貝層出土狀況

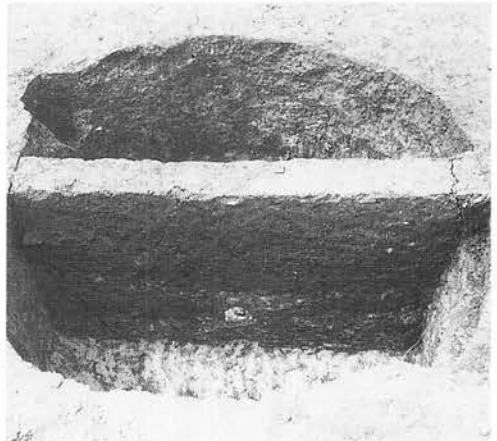


貝層断面

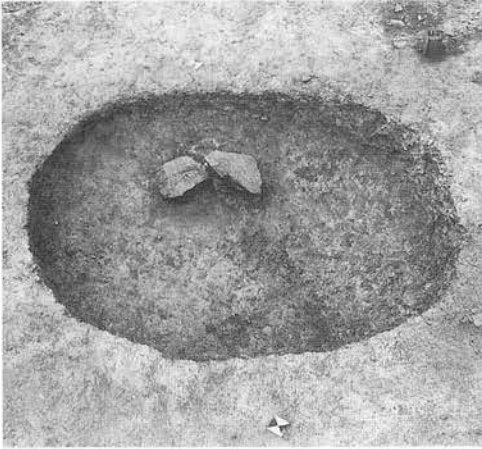


AI 9 土坑

平面



断面



AL 6 土坑

平面

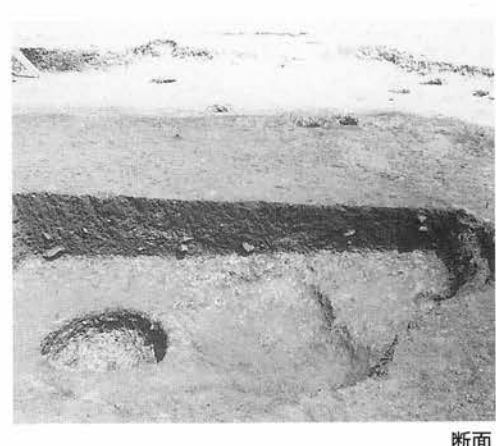


断面

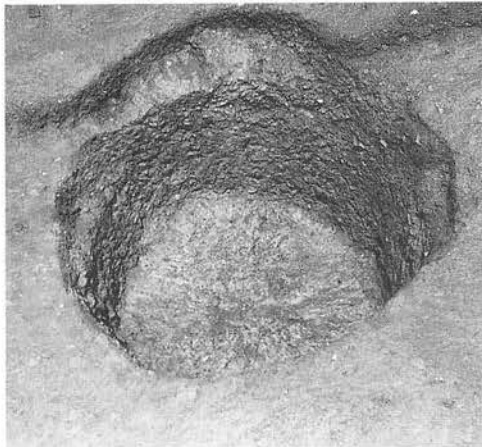


AL10土坑

平面

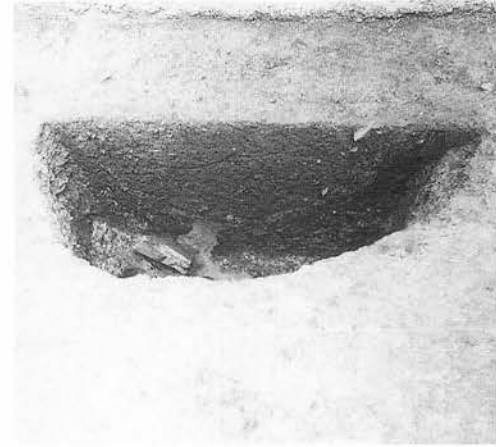


断面



AM 6 土坑

平面



断面

写真図版 49 AL 6・AL10・AM 6 土坑

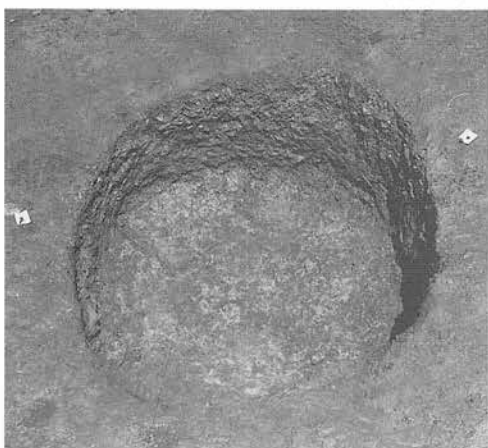


AM 6 土坑

貝出土状況

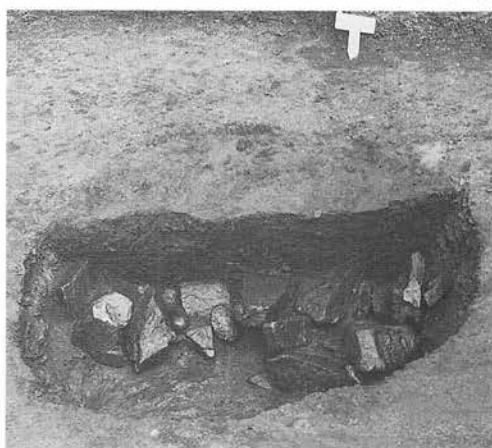


獣骨出土状況



AM 7 土坑

平面



断面



AM 7 土坑

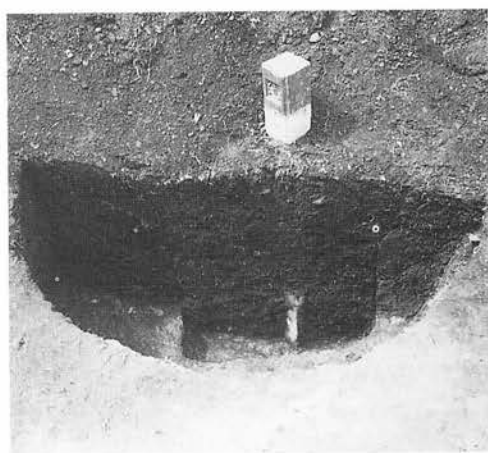
礫出土状況

写真図版 50 AM 6・AM 7 土坑



BA 2 土坑

平面

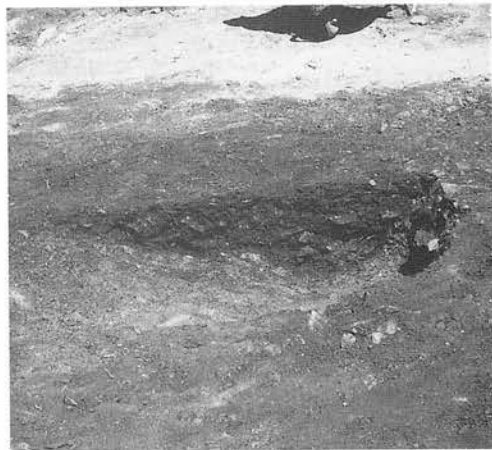


断面



BF11土坑

平面

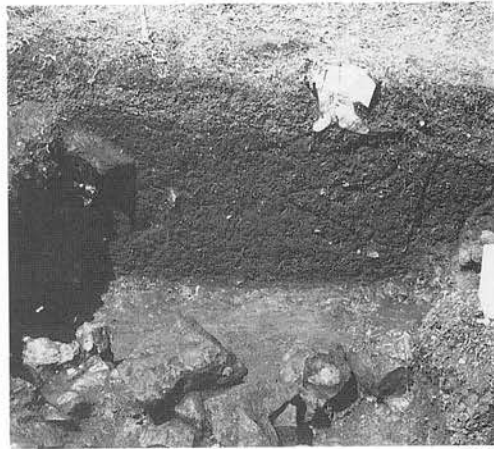


断面



BH11土坑

平面



断面



AK 8 溝状遺構全景



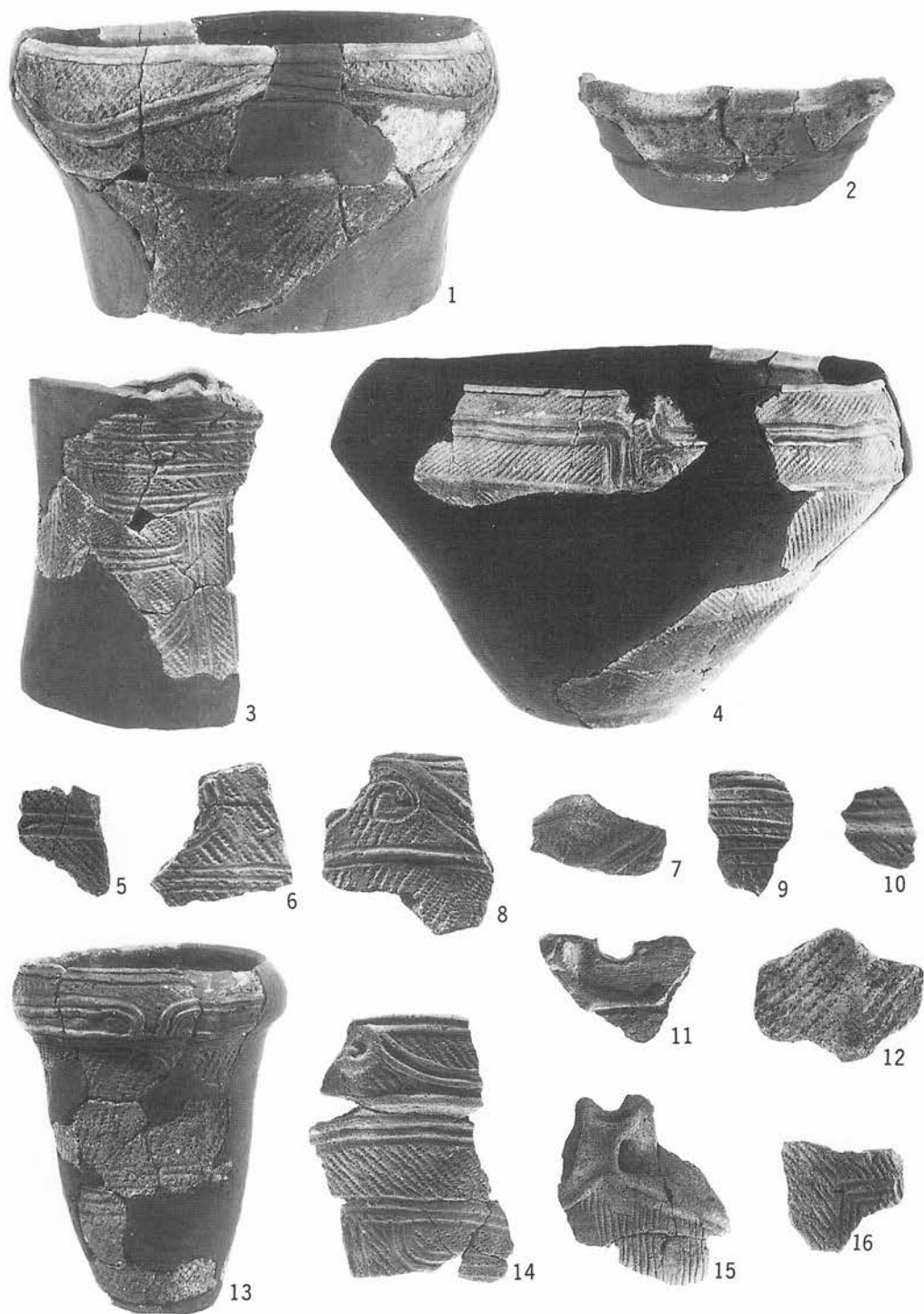
埋土土層断面



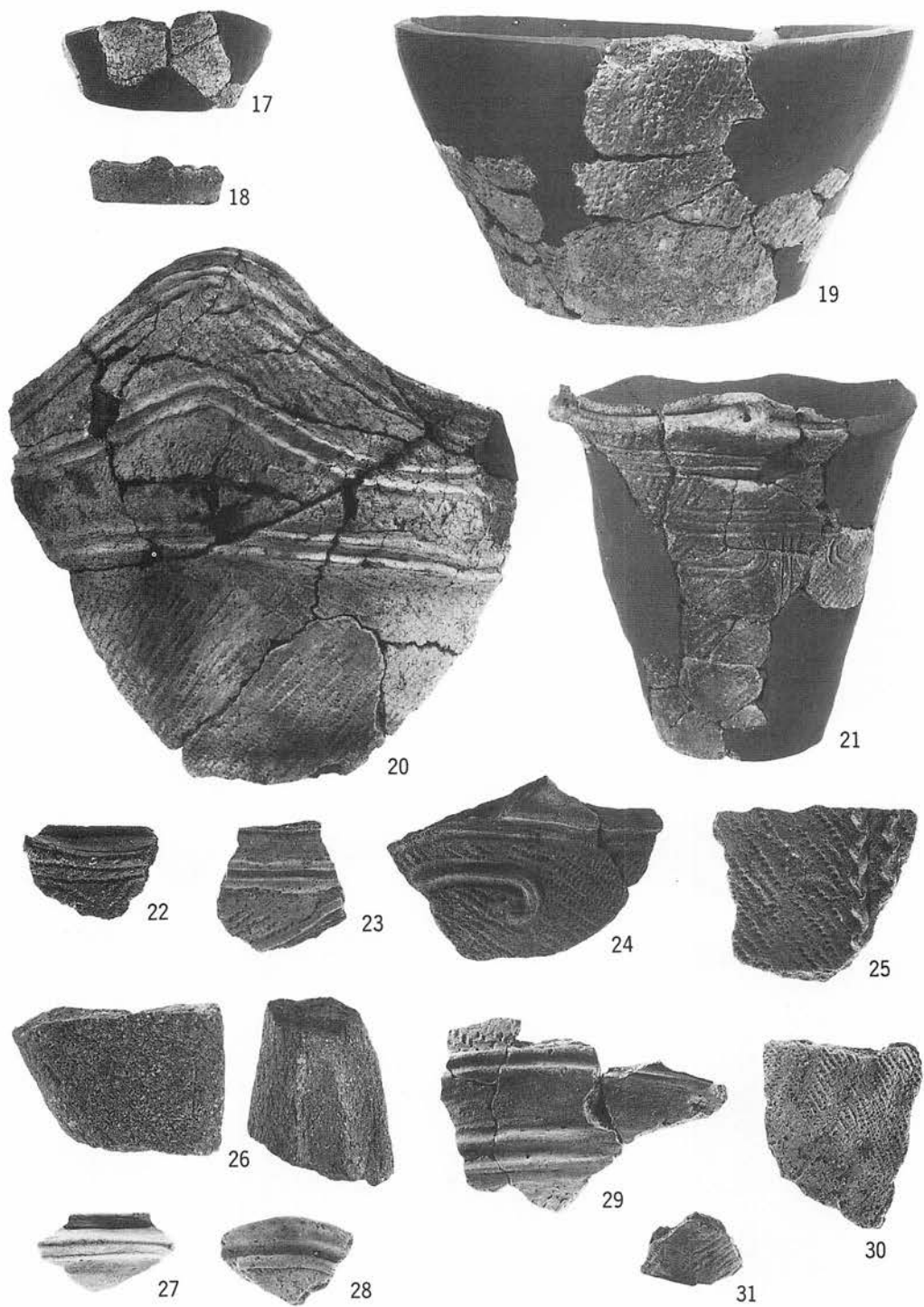
埋土土層断面



B 区住居跡群

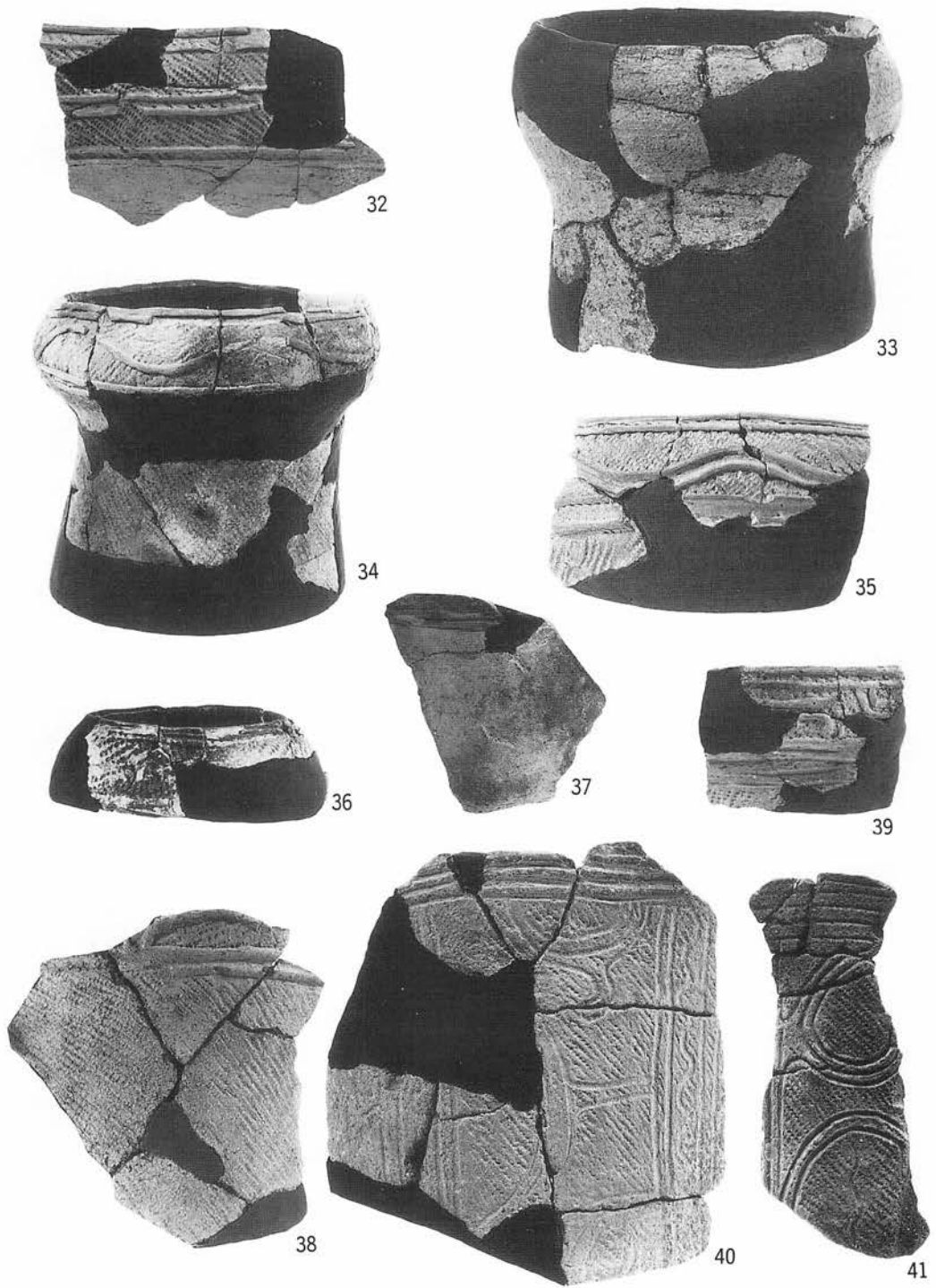


写真図版 53 出土遺物 (AA 2・AB 3 住居跡)

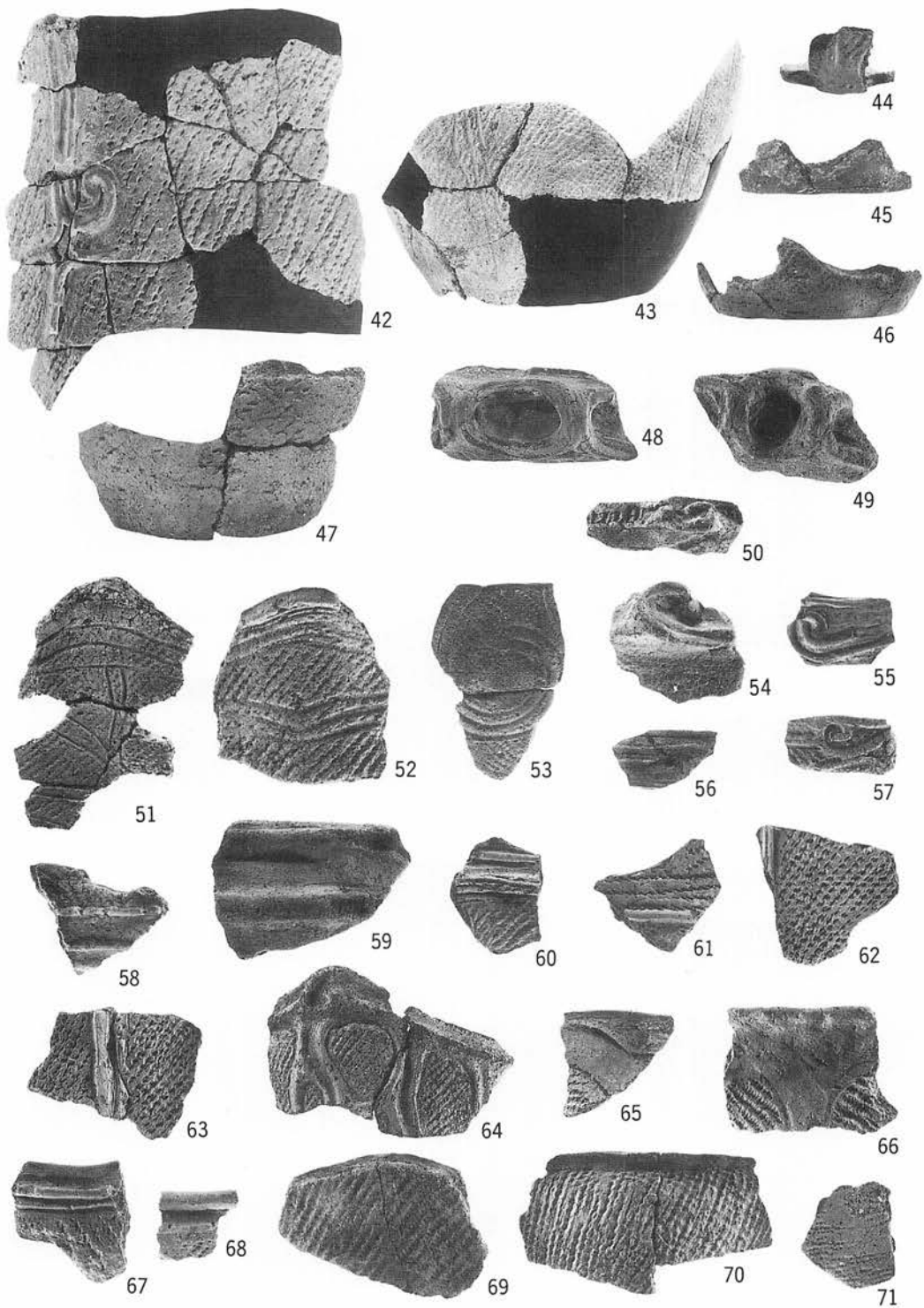


写真図版 54 出土遺物(AB 3・AC 4・AC 6 住居跡)

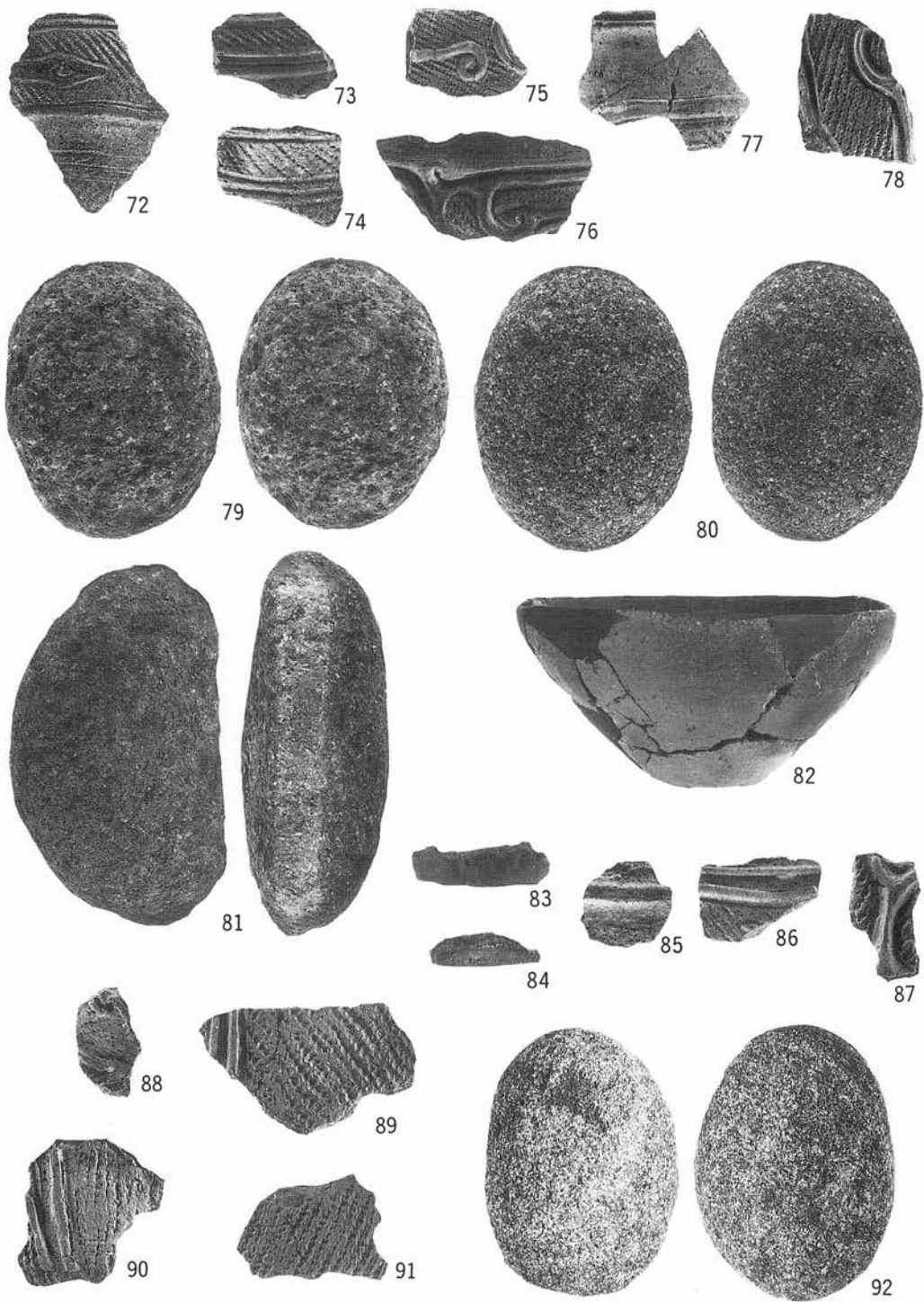




写真図版 55 出土遺物 (AD 5 住居跡)



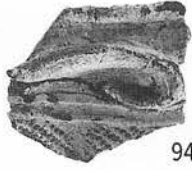
写真図版 56 出土遺物 (AD 5 住居跡)



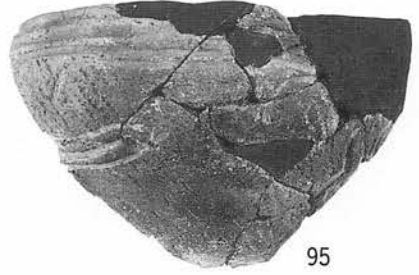
写真図版 57 出土遺物(AE 6・AE 8 住居跡)



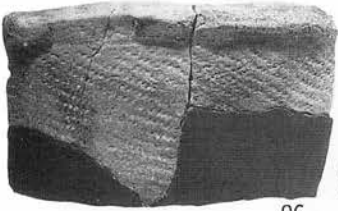
93



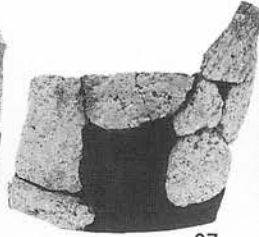
94



95



96



97



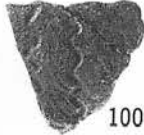
101



98



99



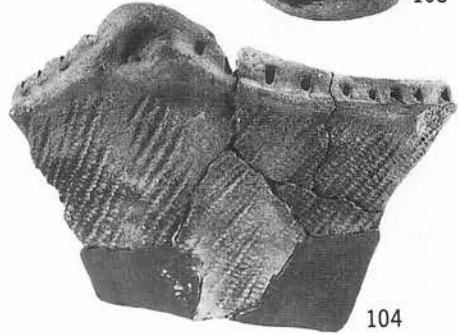
100



102

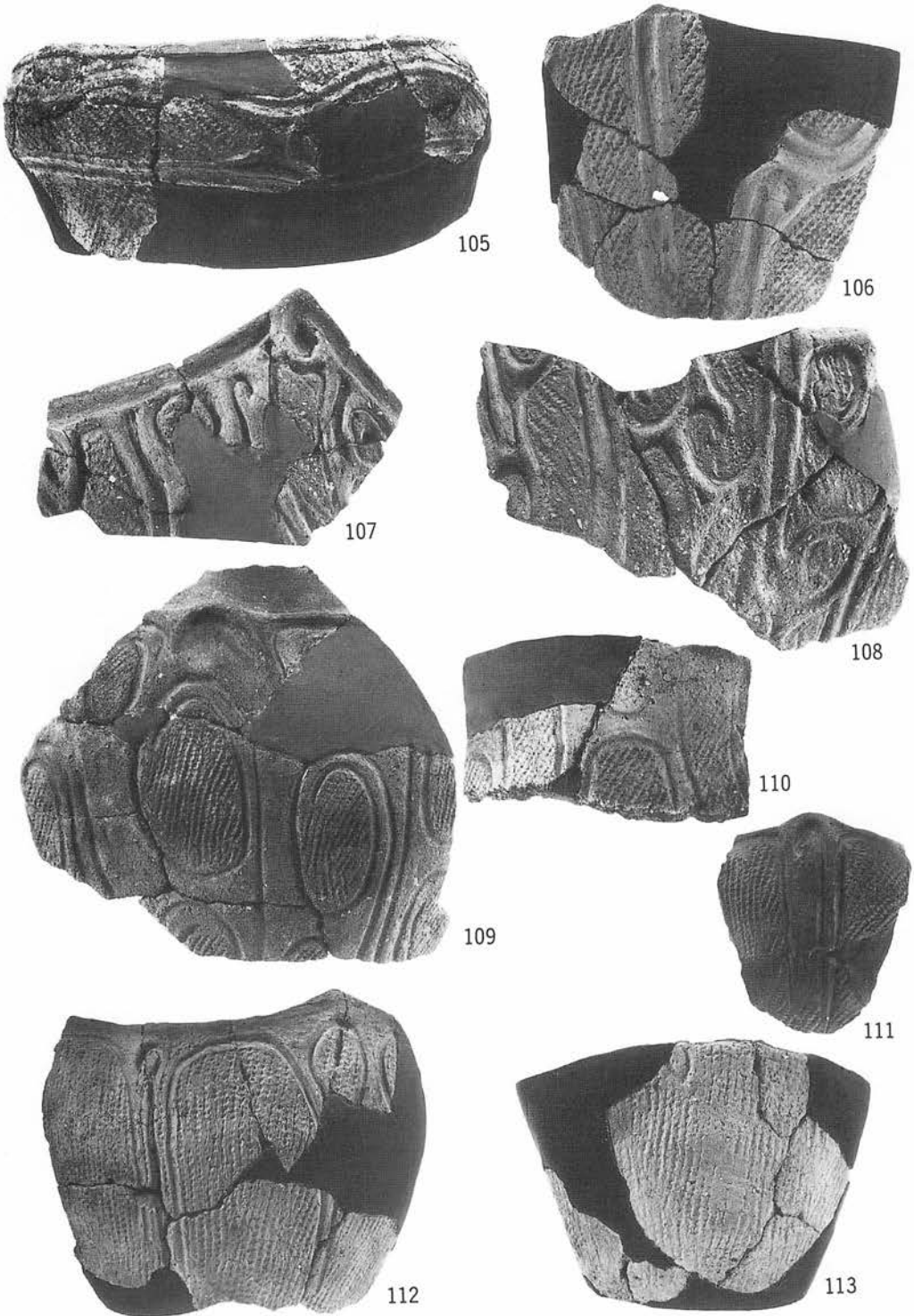


103

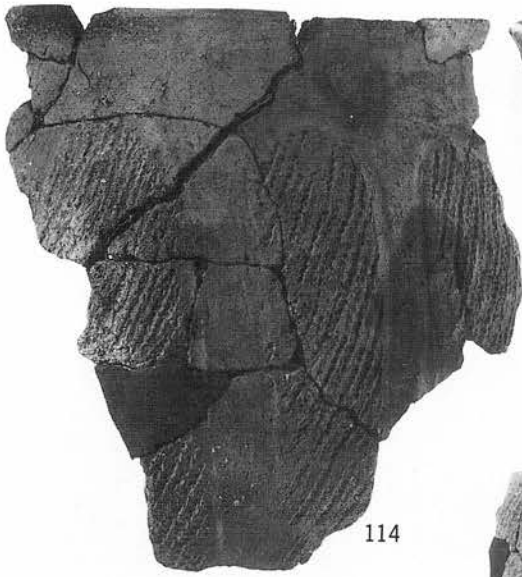


104

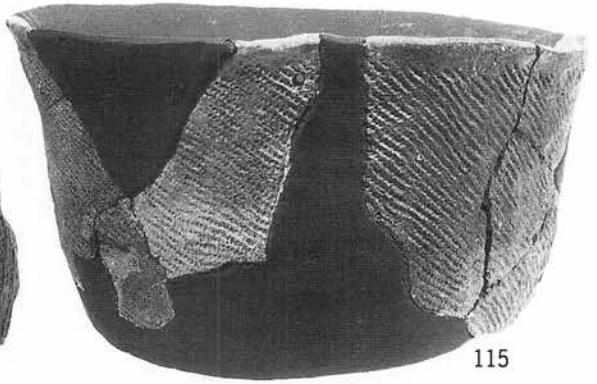
写真図版 58 出土遺物 (AF 7・AI 5・AI 8 住居跡)



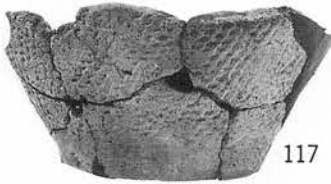
写真図版 59 出土遺物 (AI 8 住居跡)



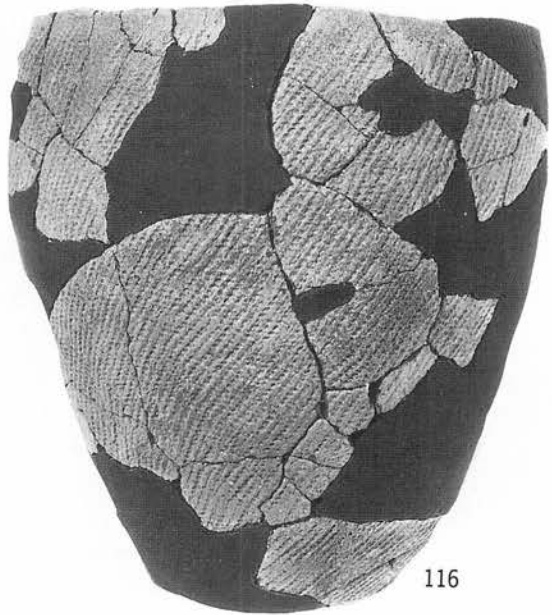
114



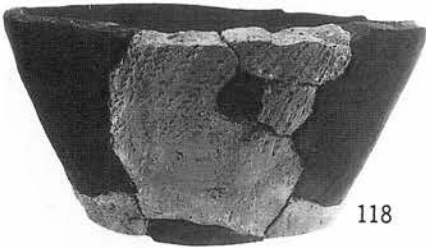
115



117



116



118



119



120



121

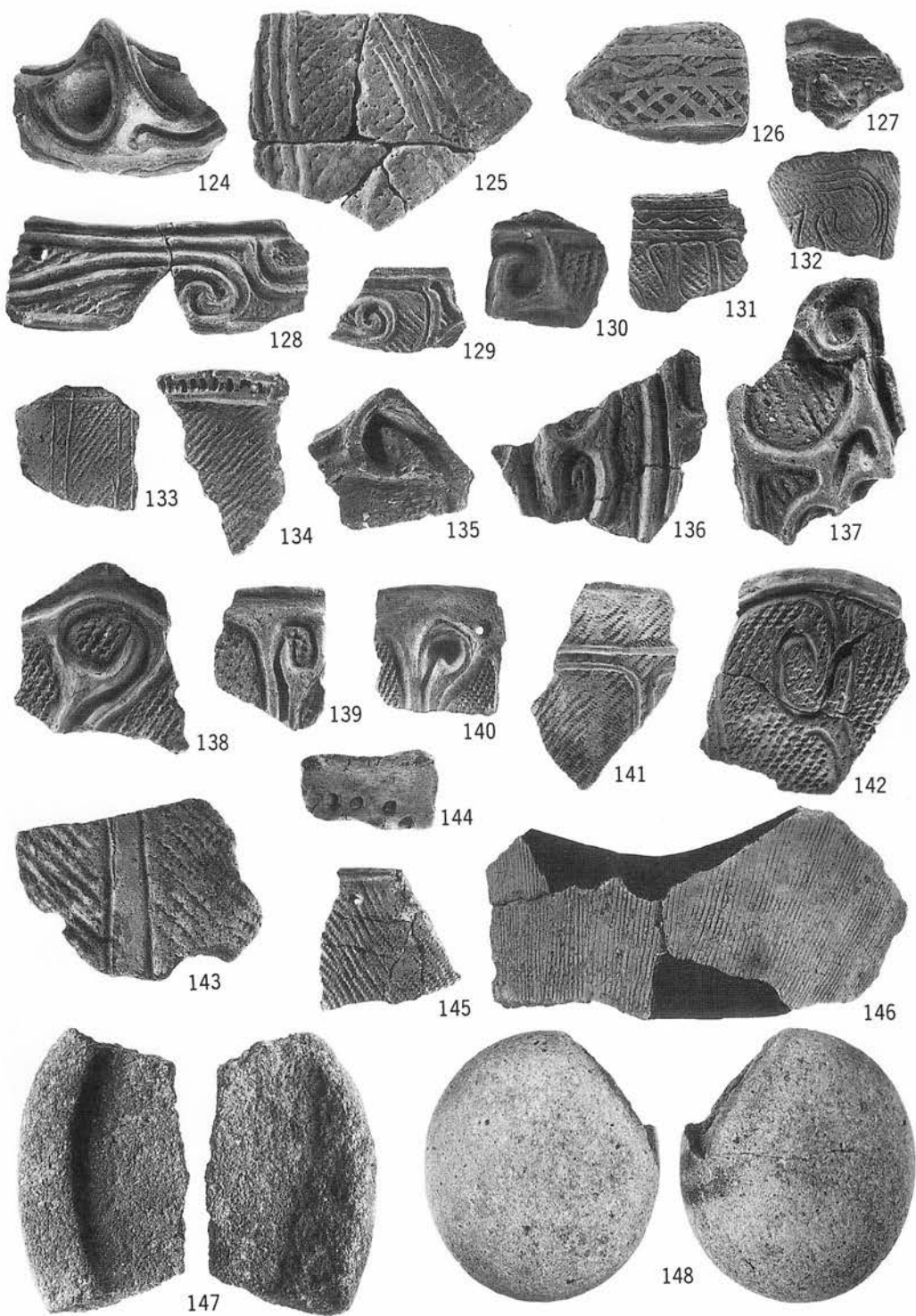


122

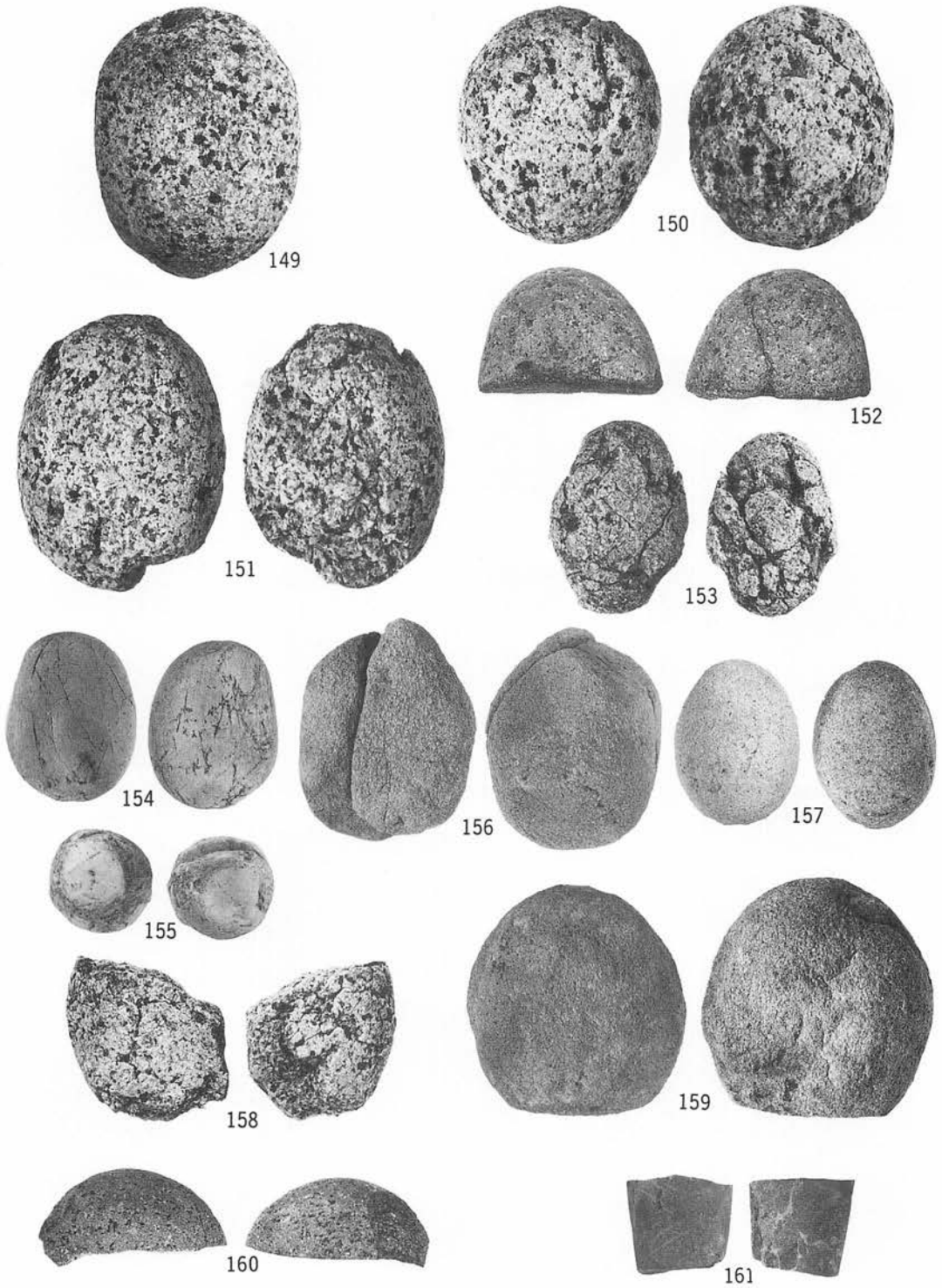


123

写真図版 60 出土遺物 (A18 住居跡)

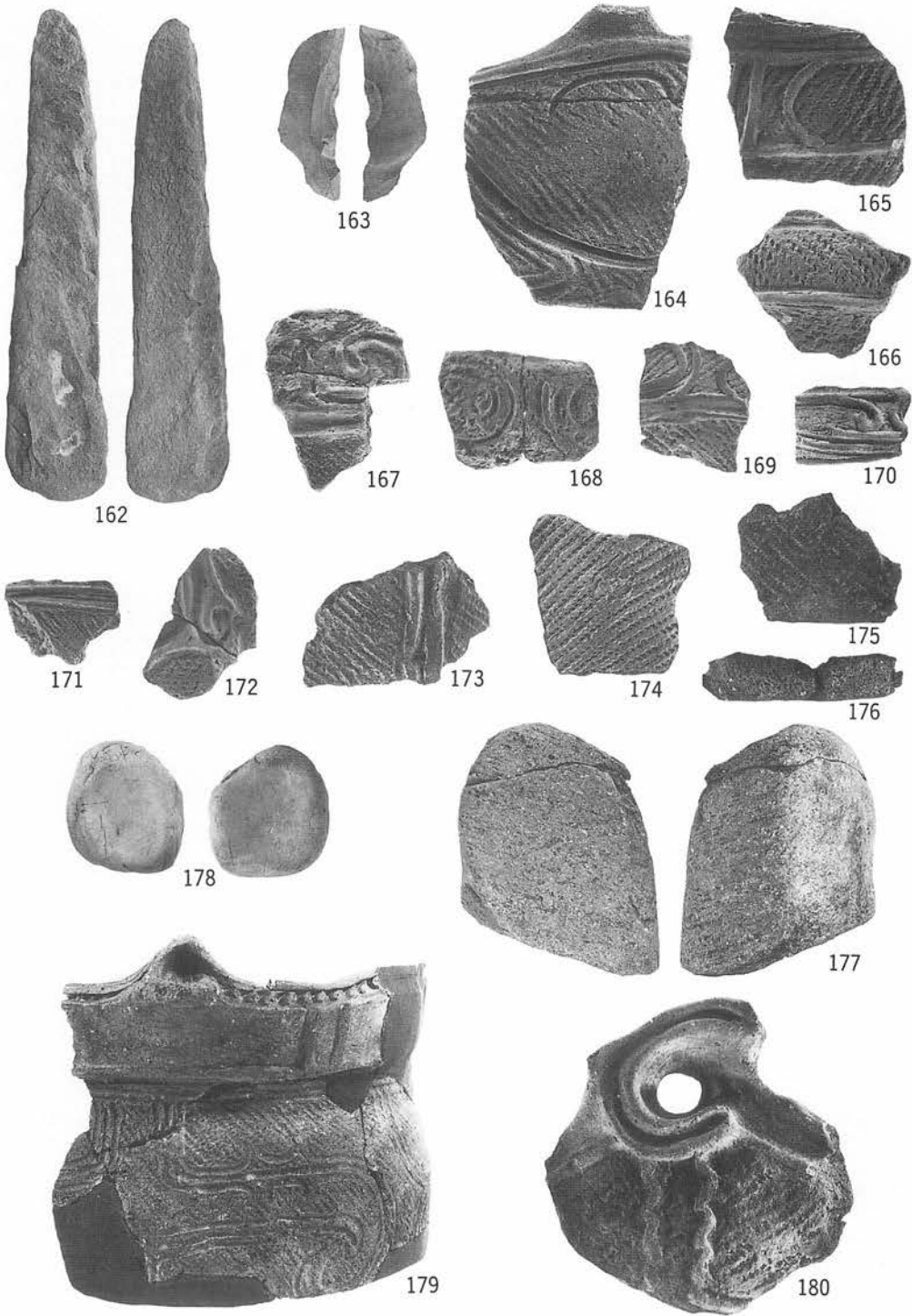


写真図版 61 出土遺物 (AI 8 住居跡)

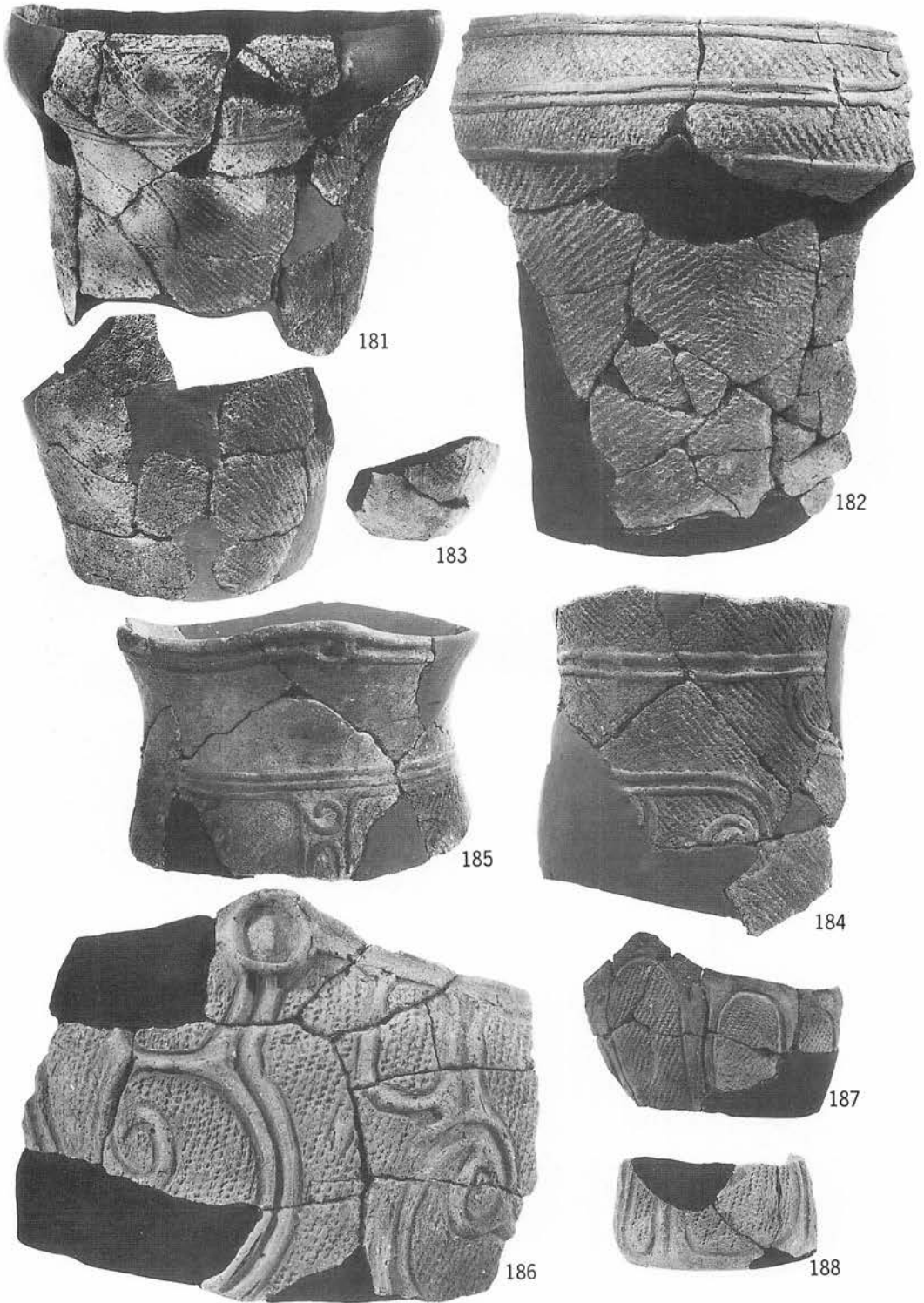


写真図版 62 出土遺物 (AI 8 住居跡)

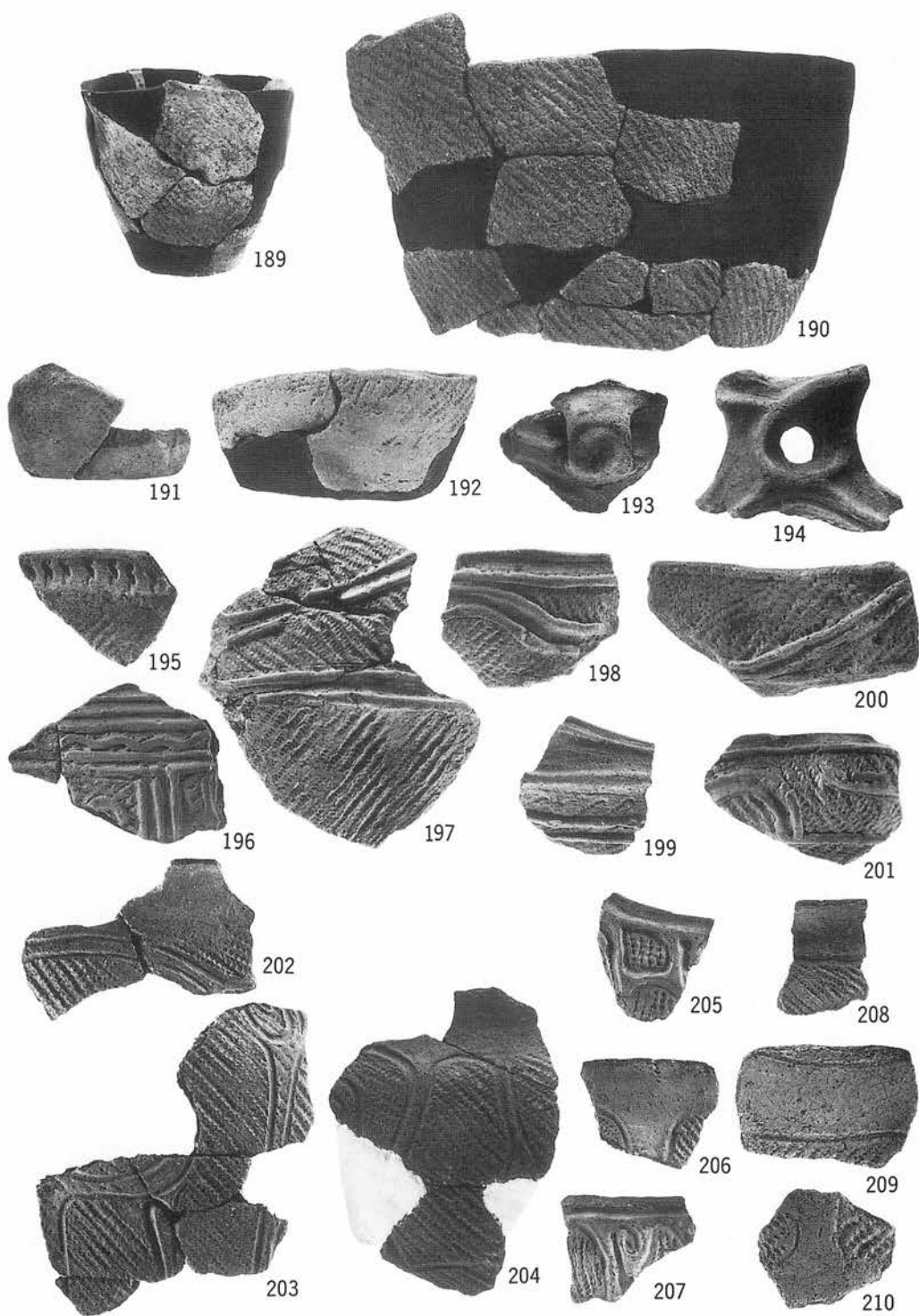




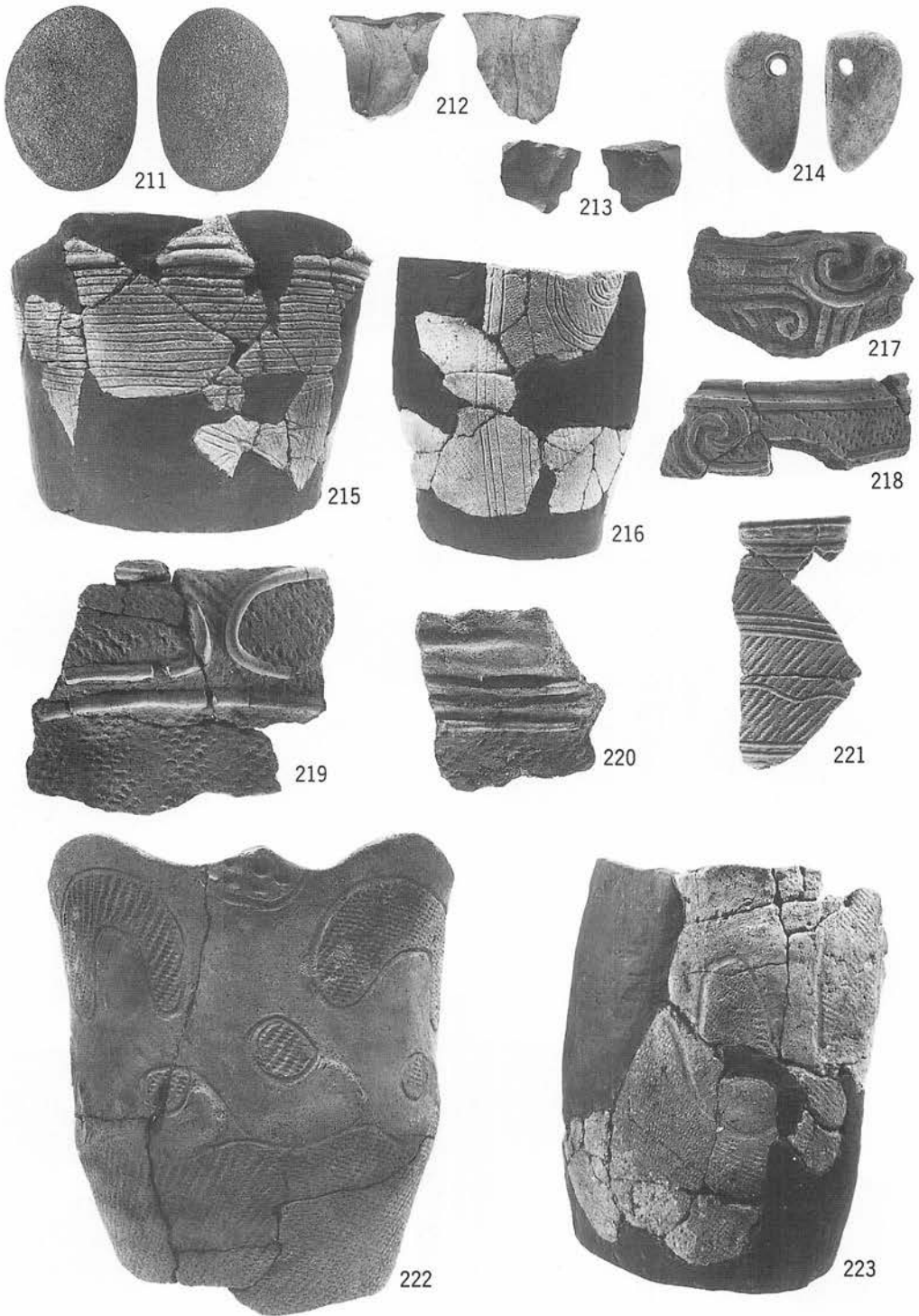
写真図版 63 出土遺物 (A18・AJ5・AK10住居跡)



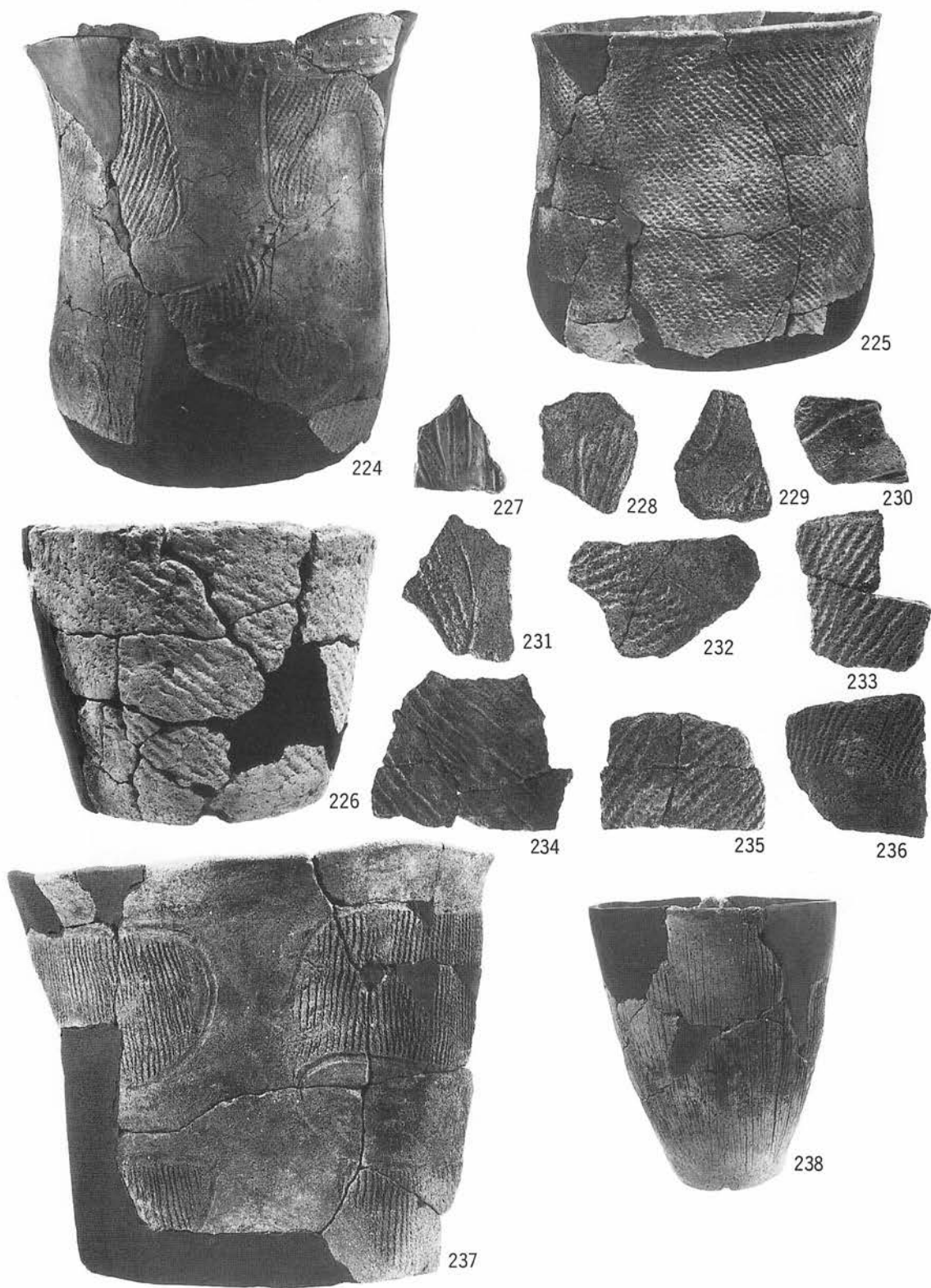
写真図版 64 出土遺物 (AK10住居跡)



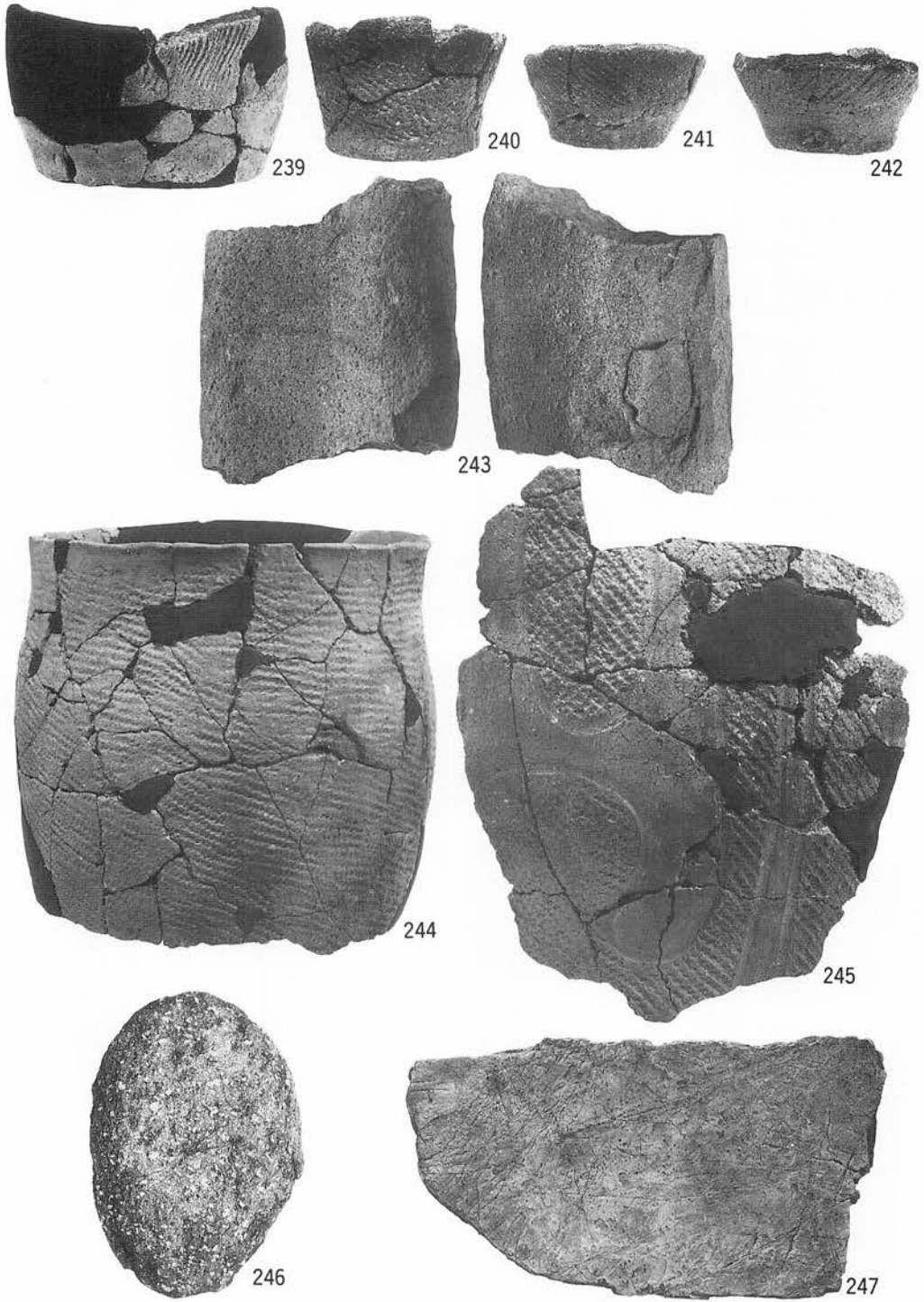
写真図版 65 出土遺物(AK10住居跡)



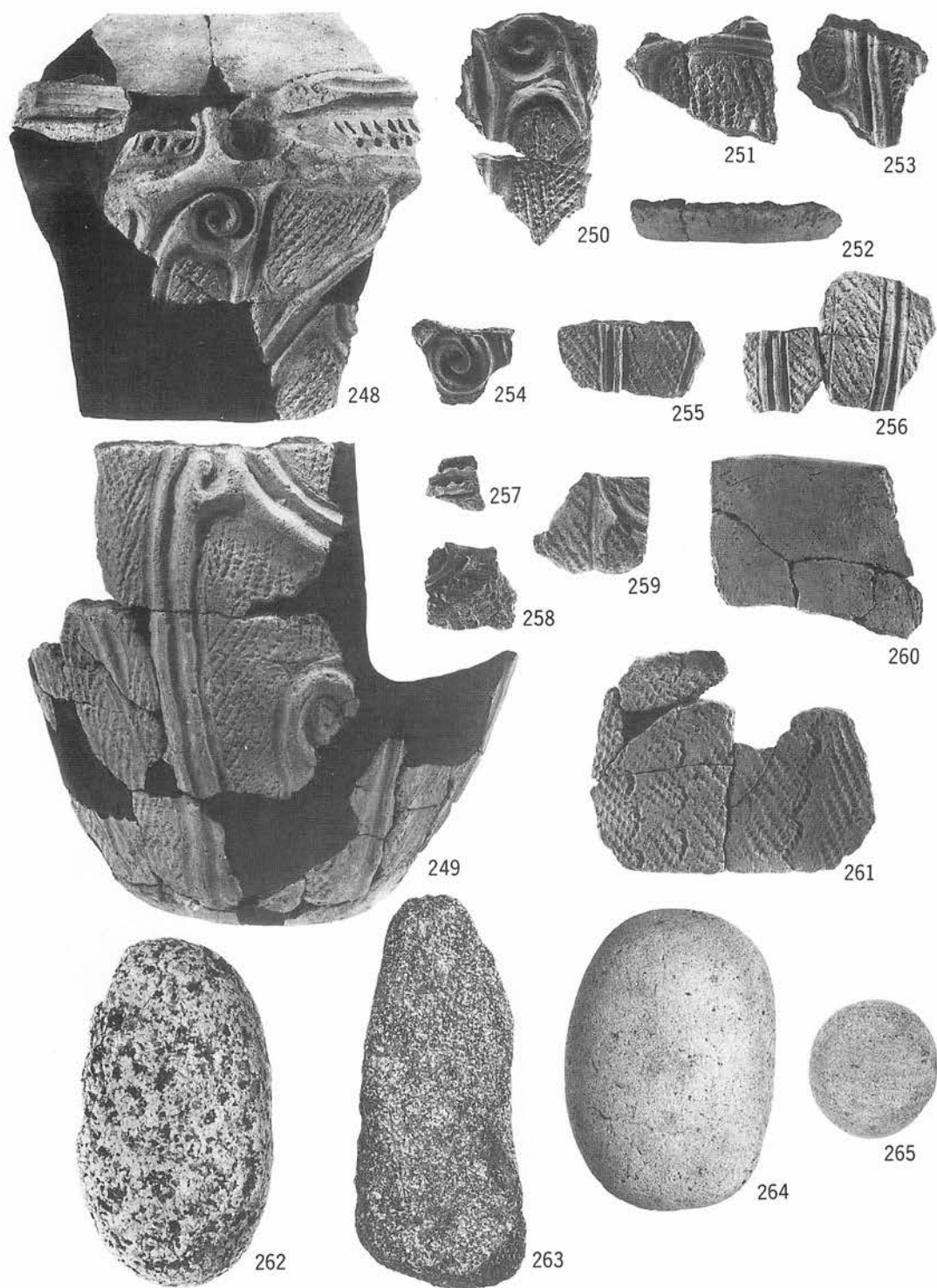
写真図版 66 出土遺物 (AK10・AM 8・BA 2 住居跡)



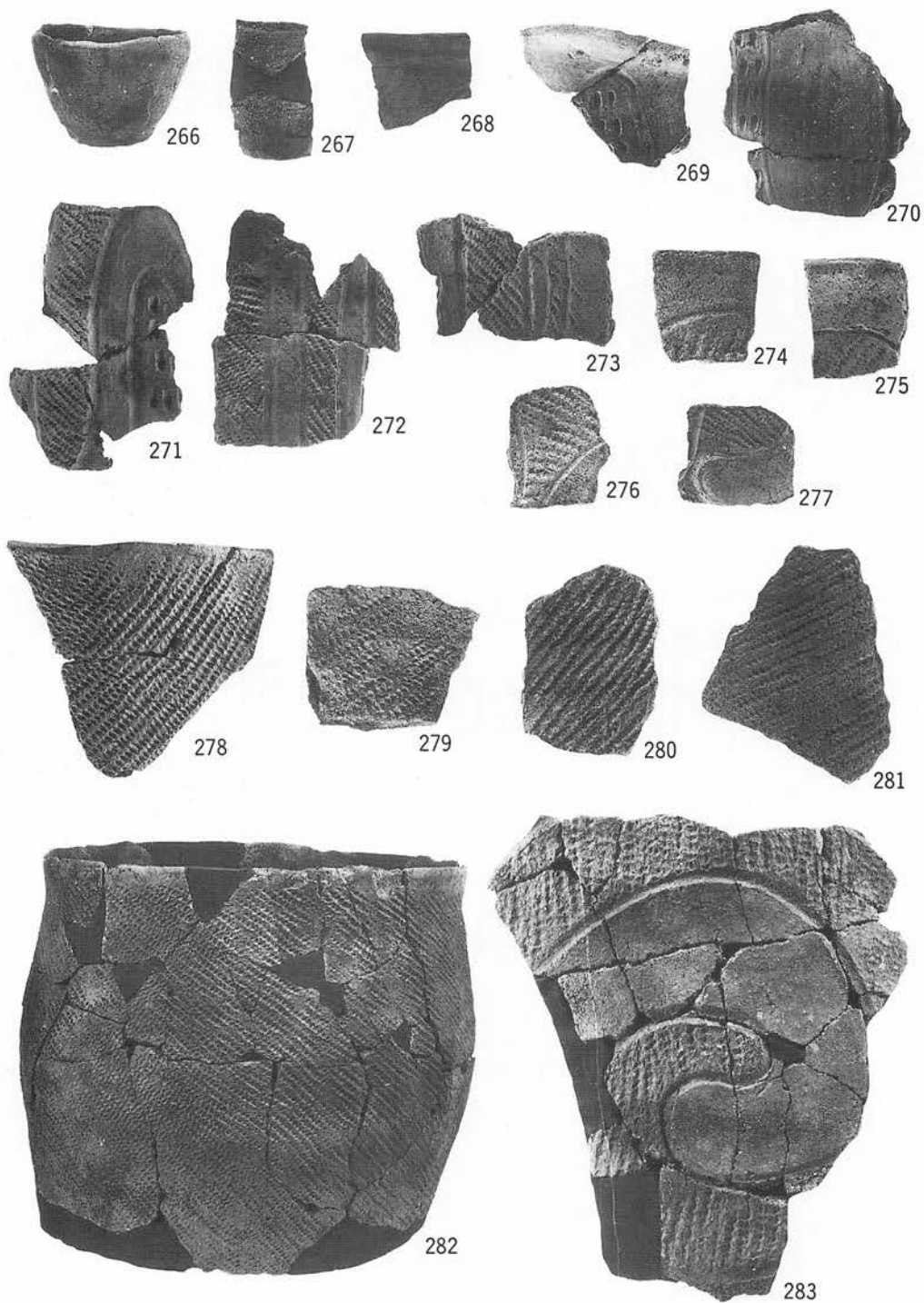
写真図版 67 出土遺物 (BA2・BA14住居跡)



写真図版 68 出土遺物(BA14・BB 6 住居跡)

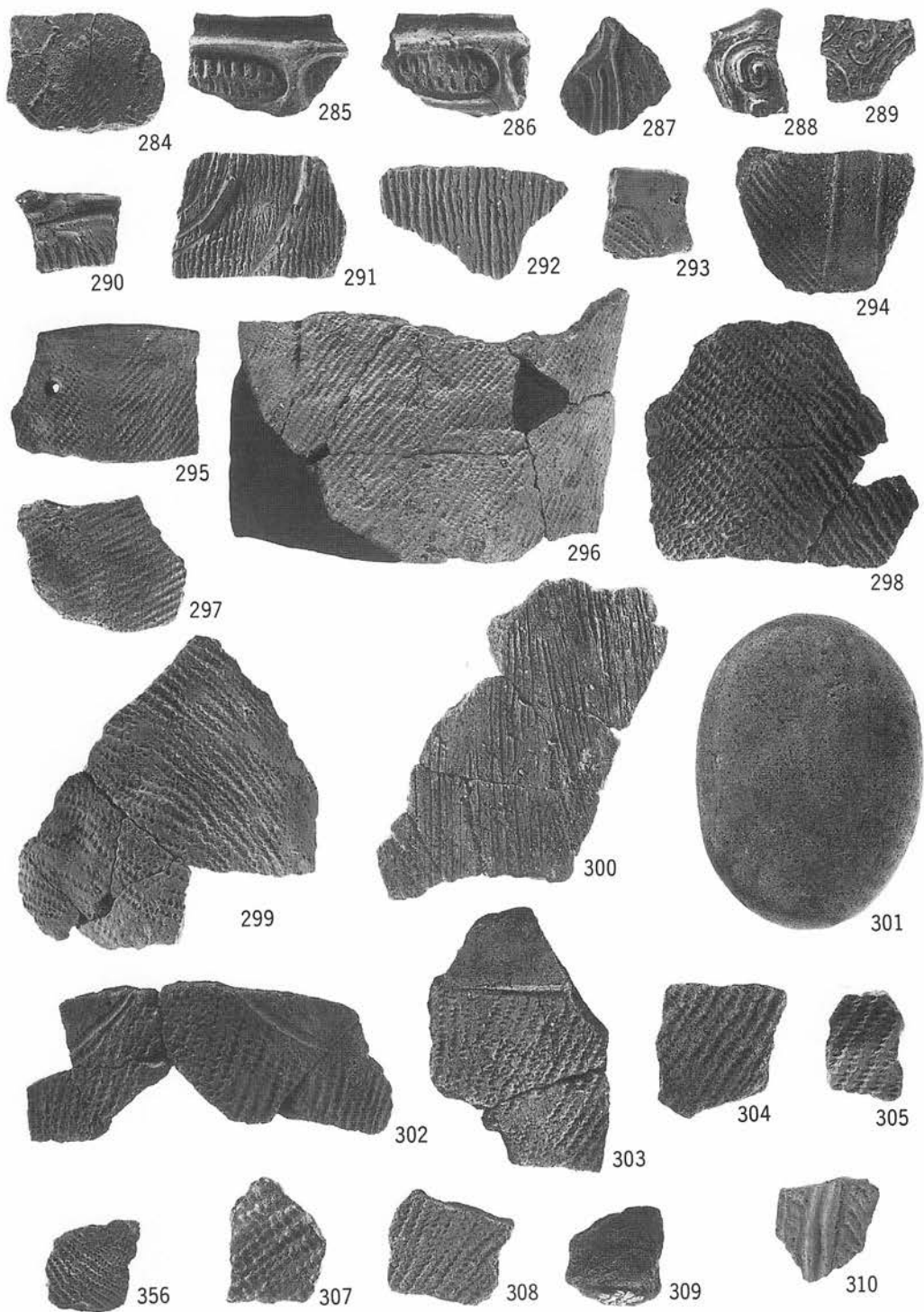


写真図版 69 出土遺物 (BC 5 住居跡)

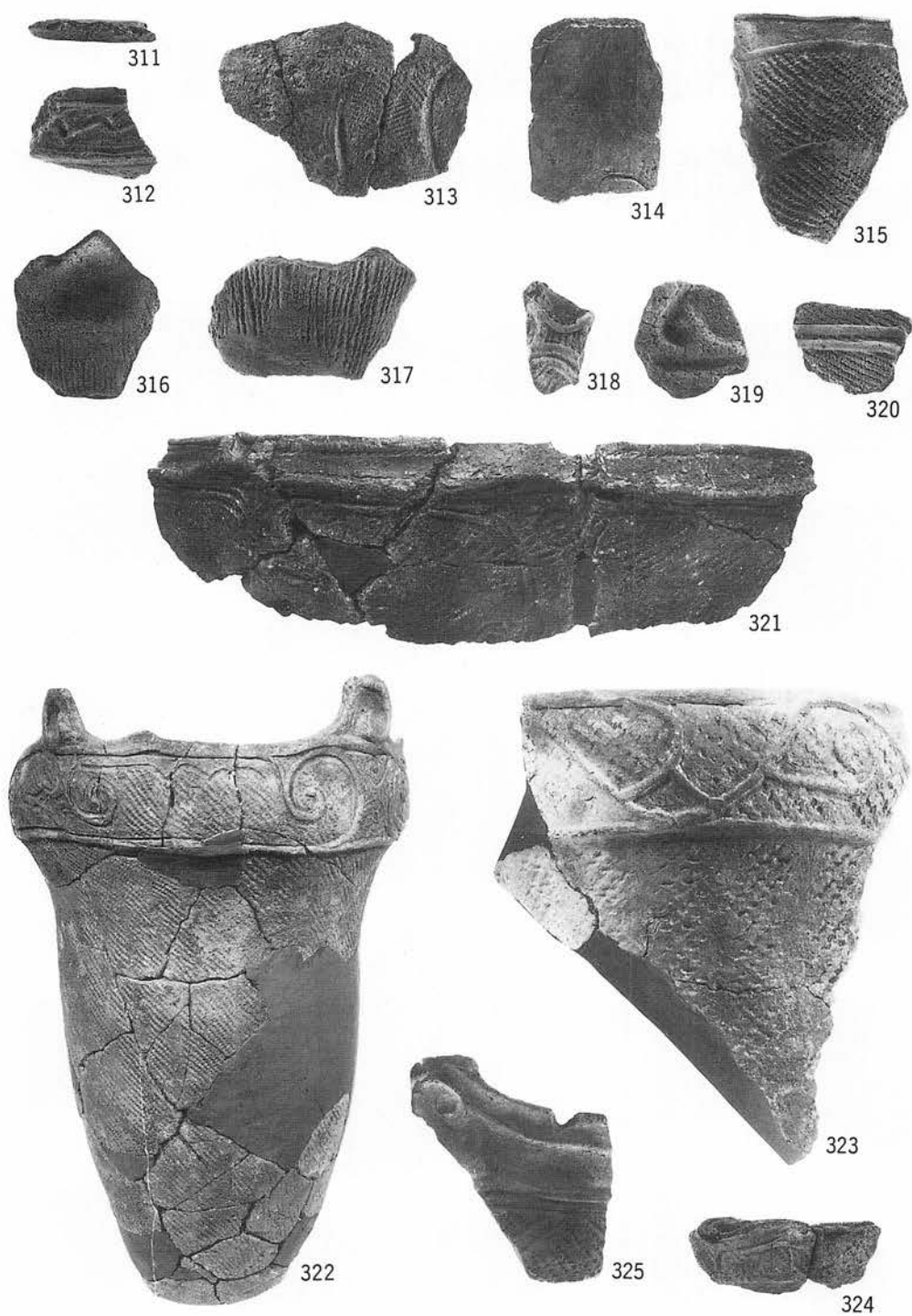


写真図版 70 出土遺物(BD 3・BF 6 住居跡)





写真図版 71 出土遺物 (BF 6・BG12・BH13住居跡)



写真図版 72 出土遺物(AC4・AF4・AG3 土坑)



326



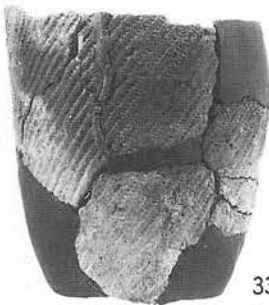
327



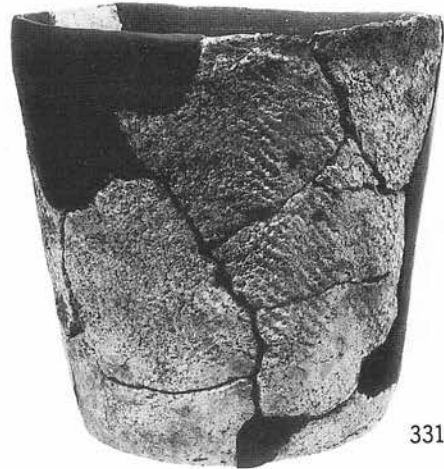
328



329

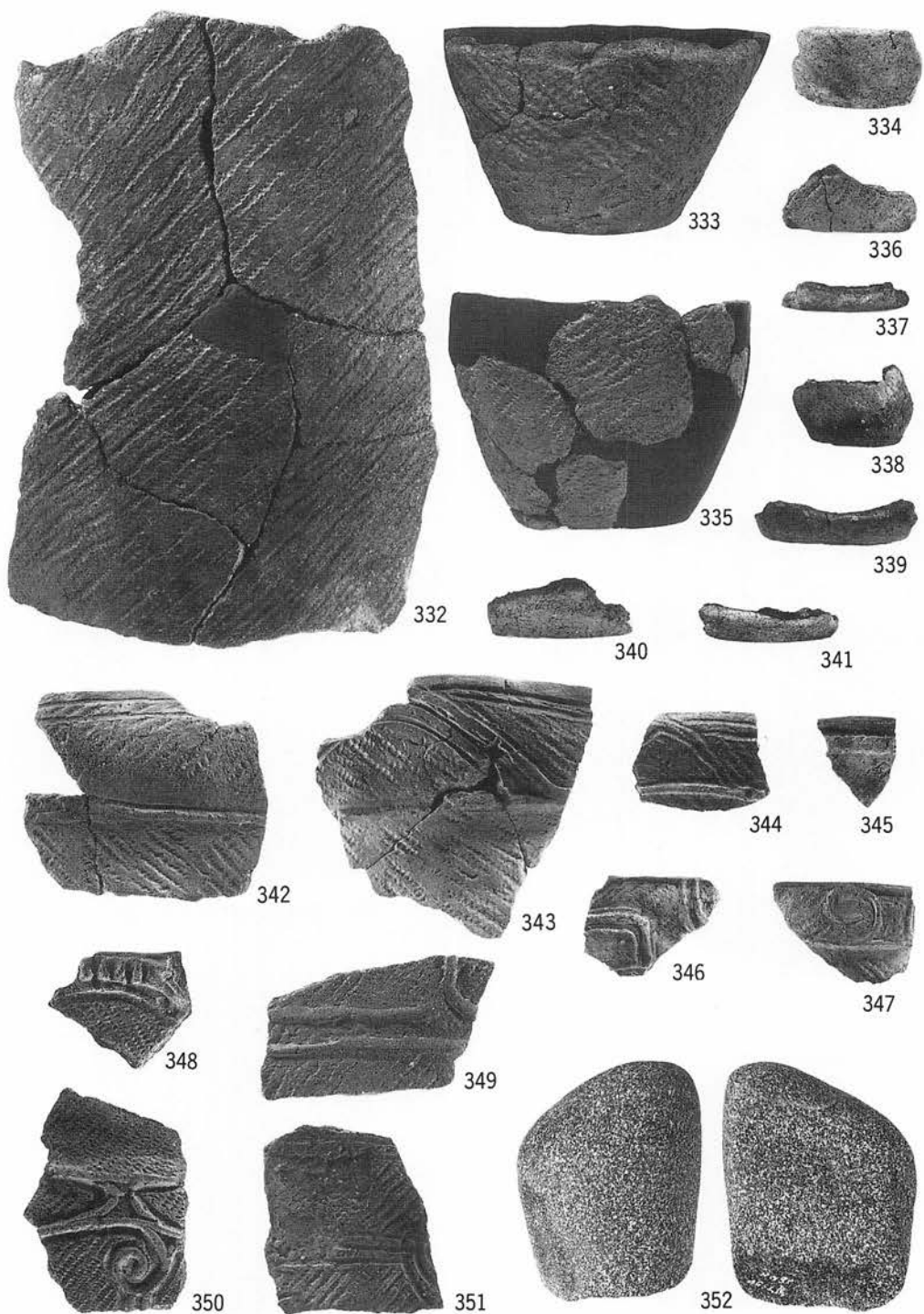


330

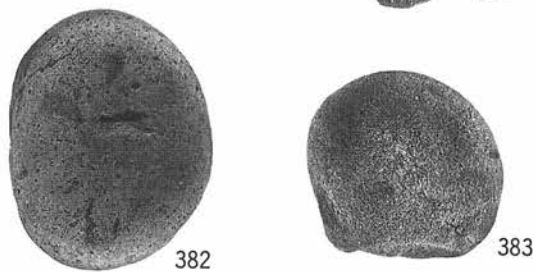
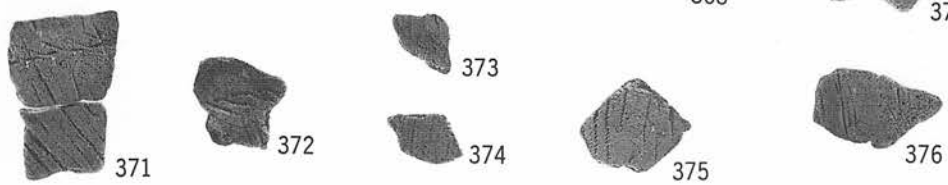
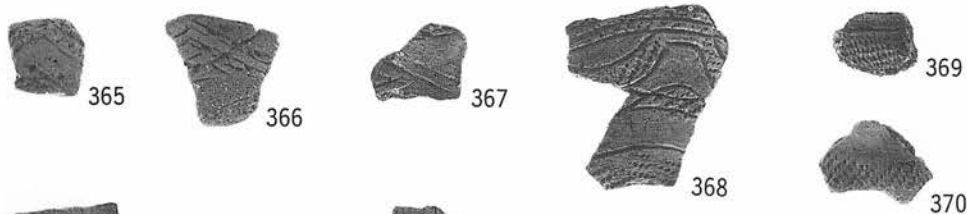
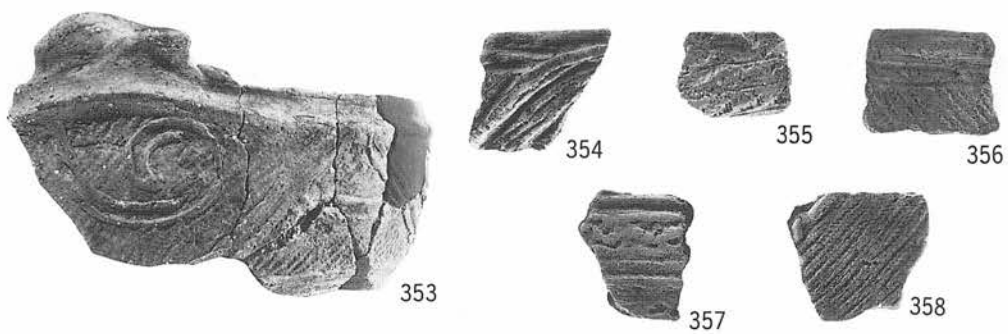


331

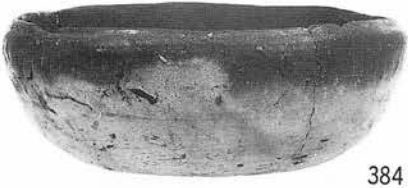
写真図版 73 出土遺物 (AG 3 土坑)



写真図版 74 出土遺物 (AG 3 土坑)



写真図版 75 出土遺物(AI 5 土坑・AD 8 住居跡)



384



385



386



387

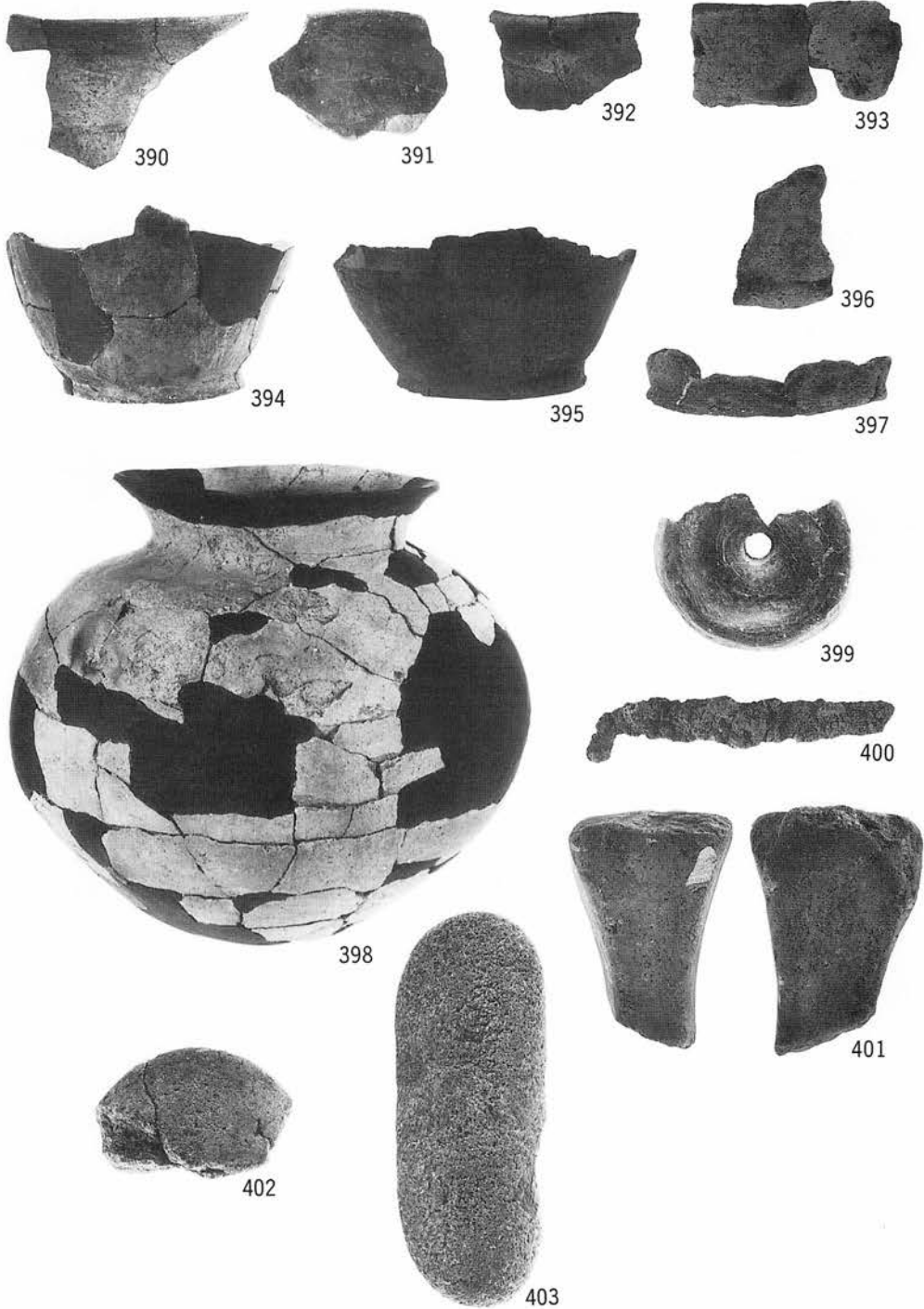


388

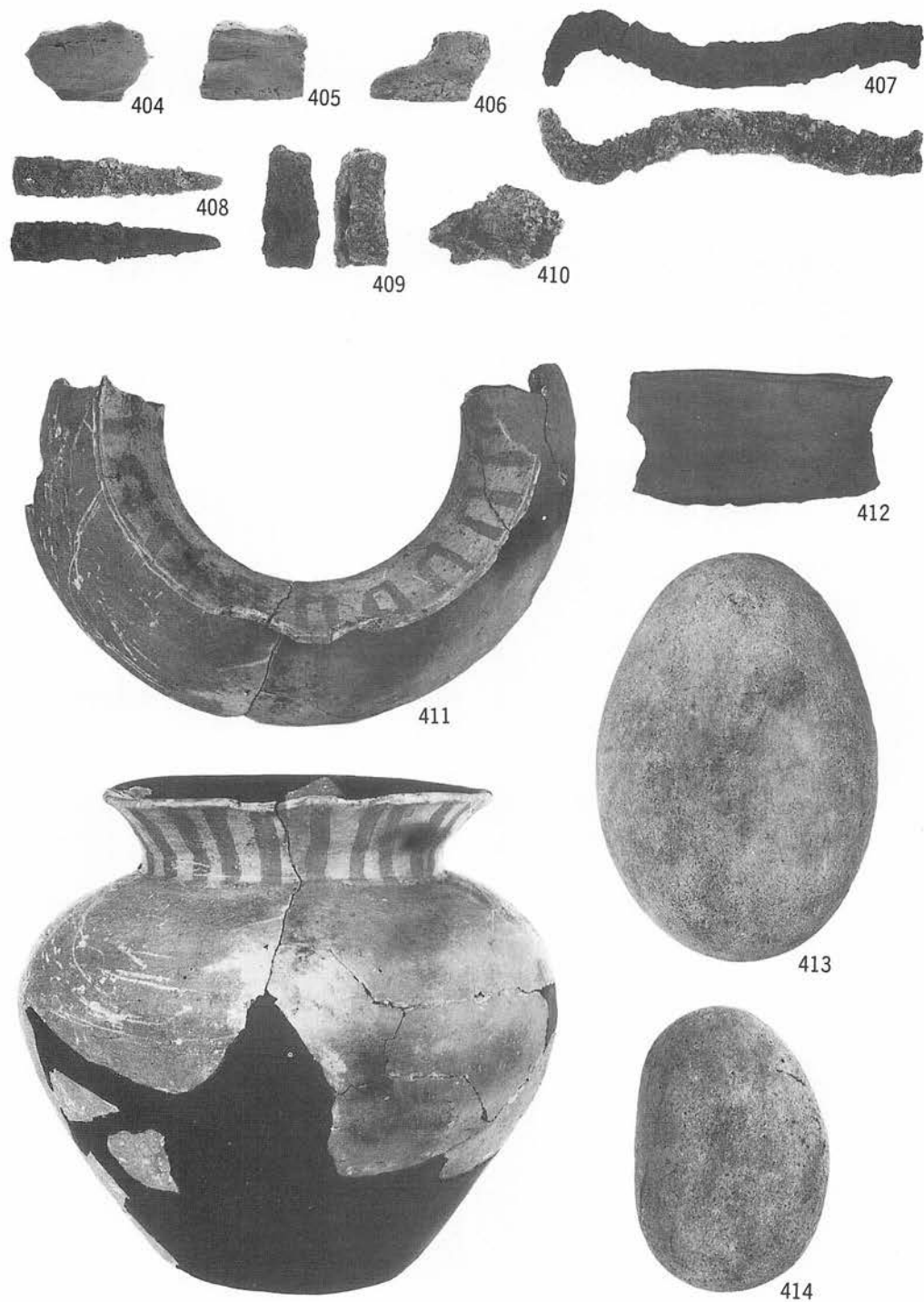


389

写真図版 76 出土遺物(AA 3 住居跡)

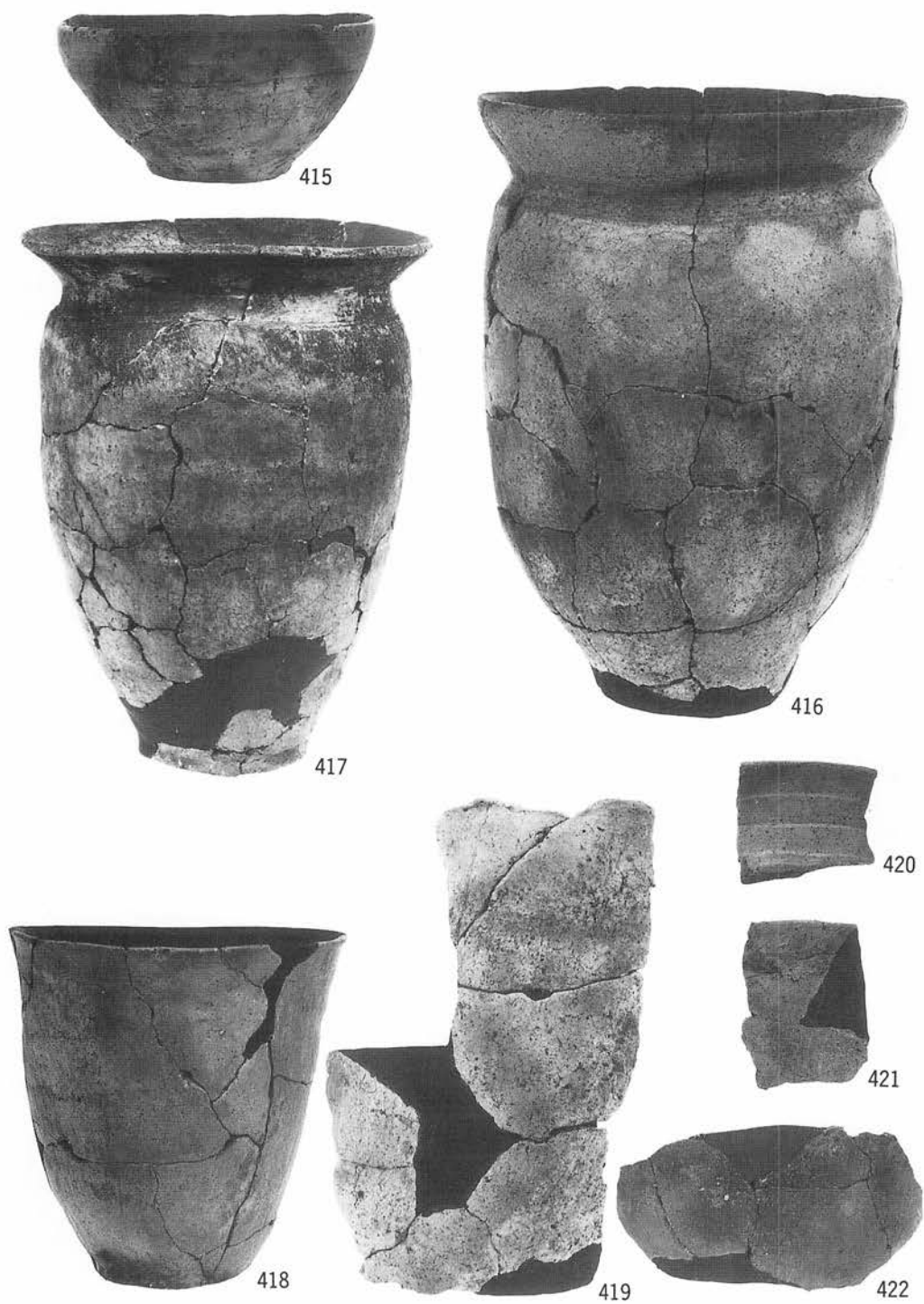


写真図版 77 出土遺物(AA 3 住居跡)

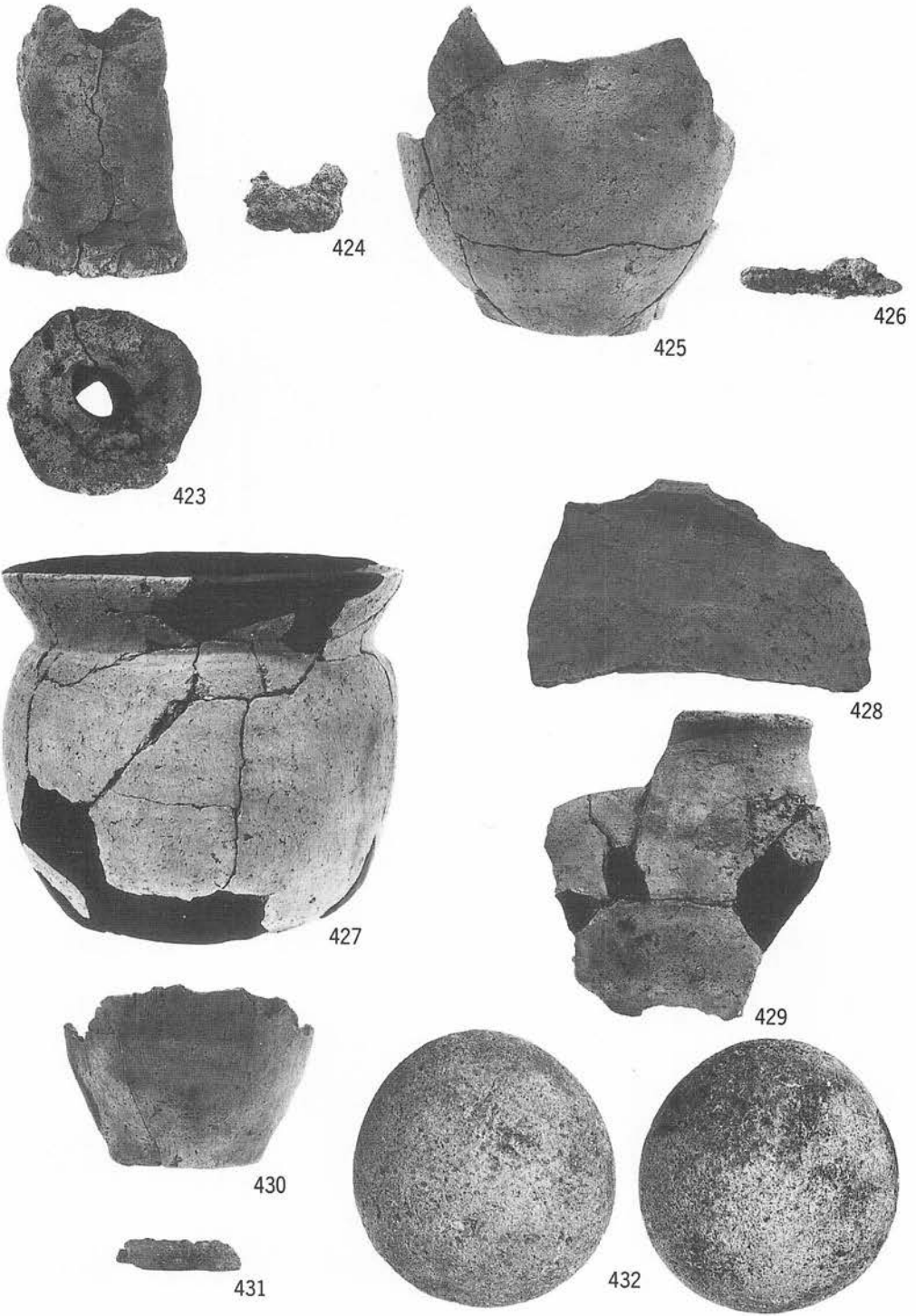


写真図版 78 出土遺物 (AB6・AE7 住居跡)

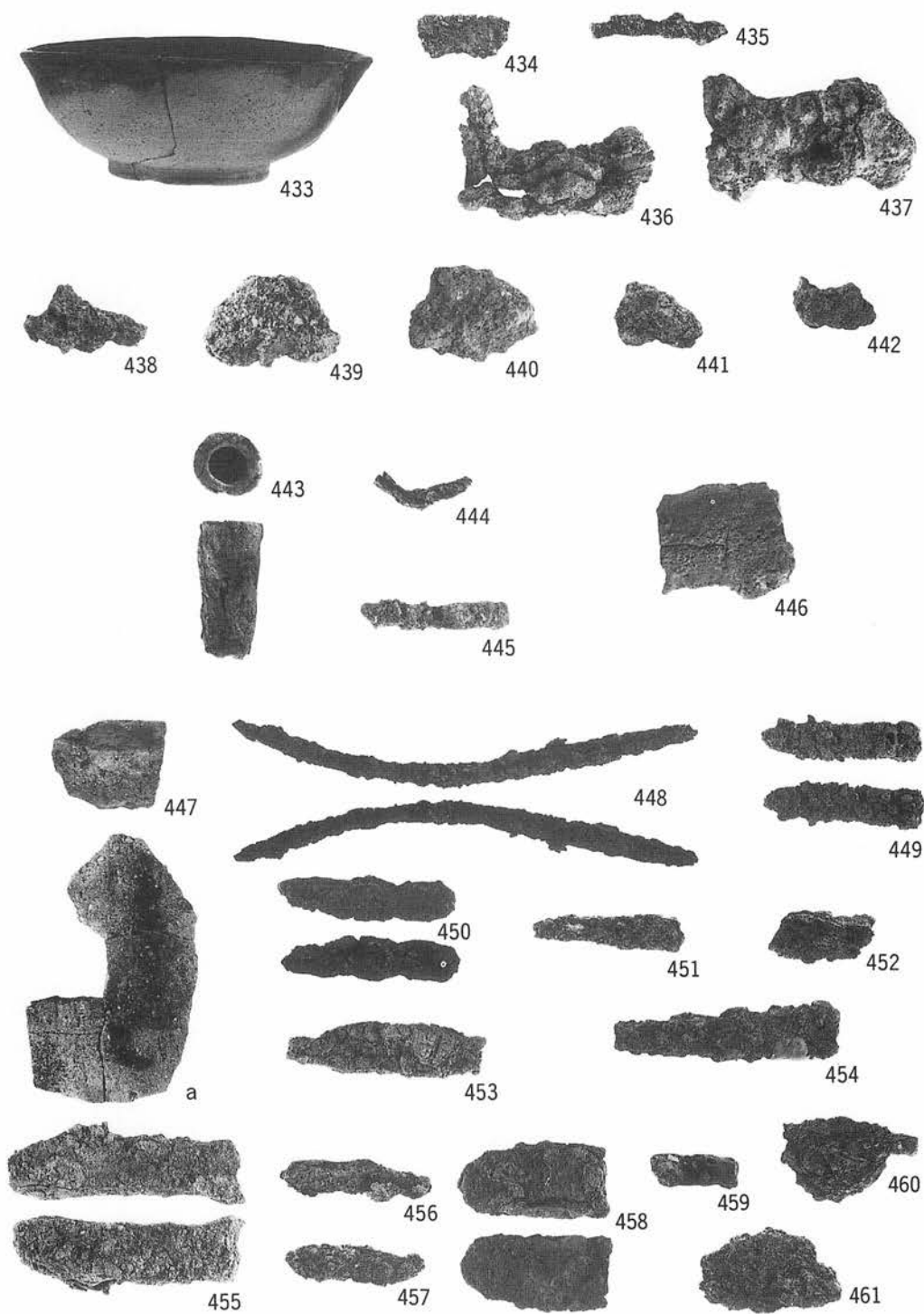




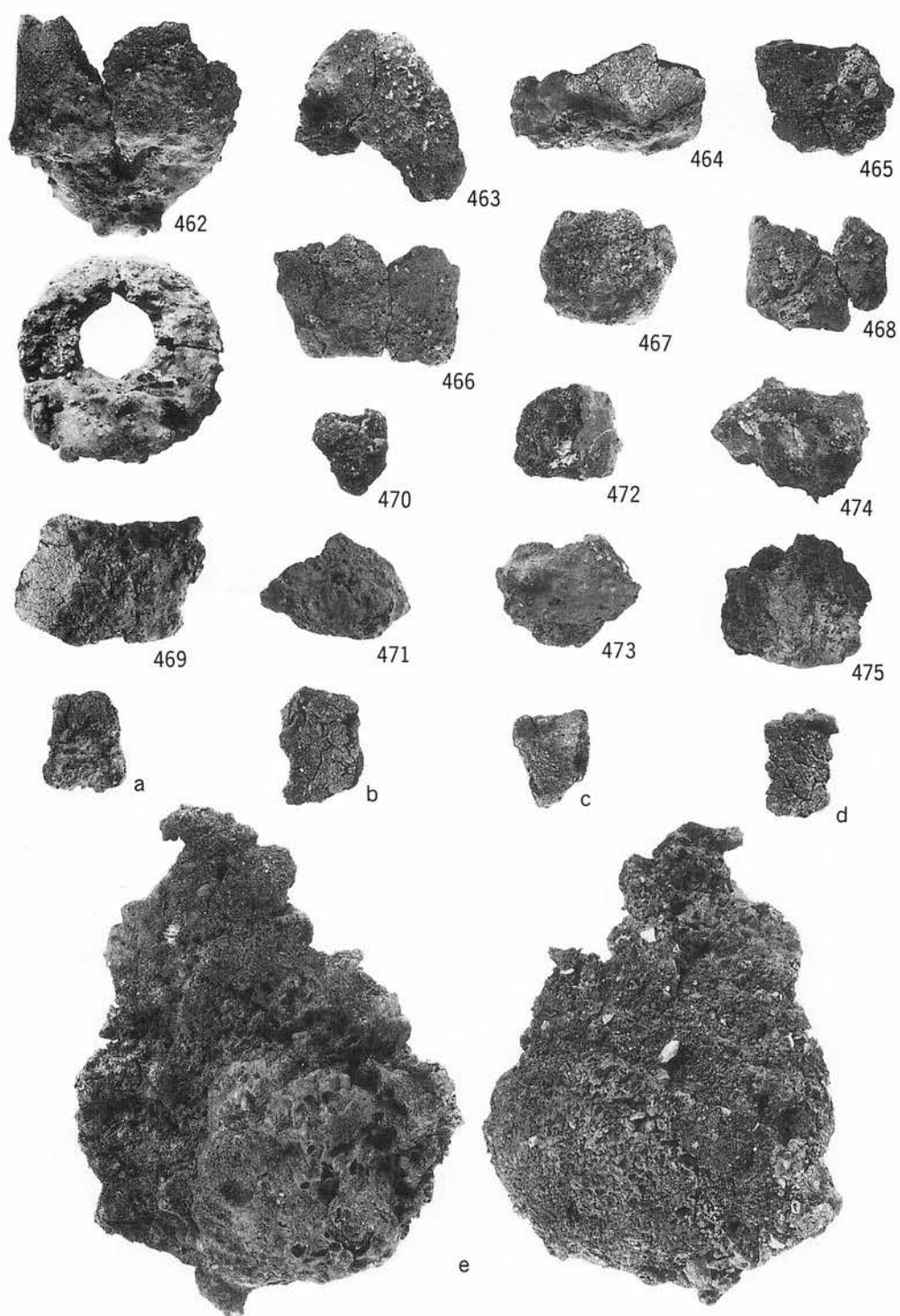
写真図版 79 出土遺物(AJ9・AK 4 住居跡)



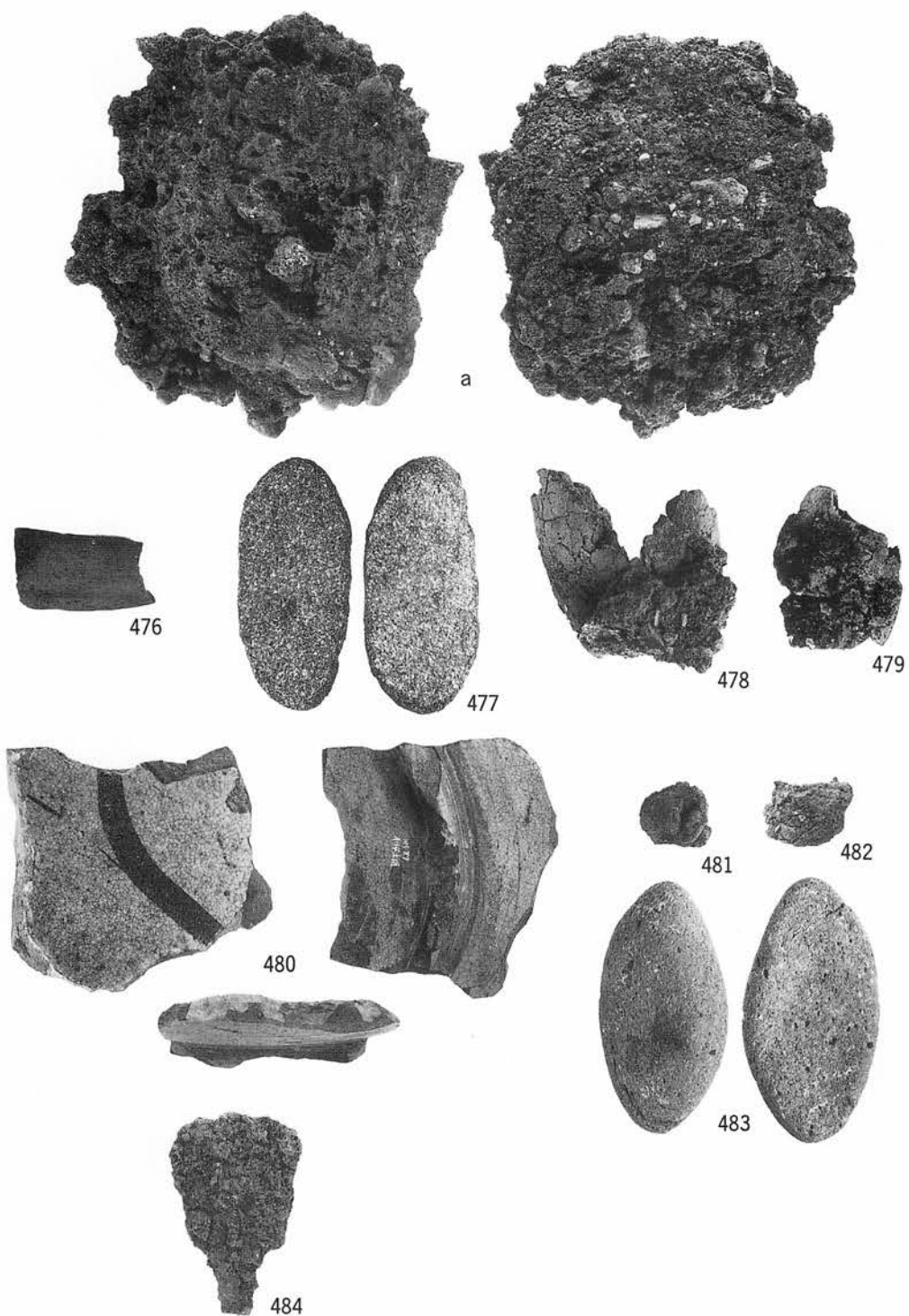
写真図版 80 出土遺物 (AK4 住居跡・AJ6・AJ7 住居跡状遺構)



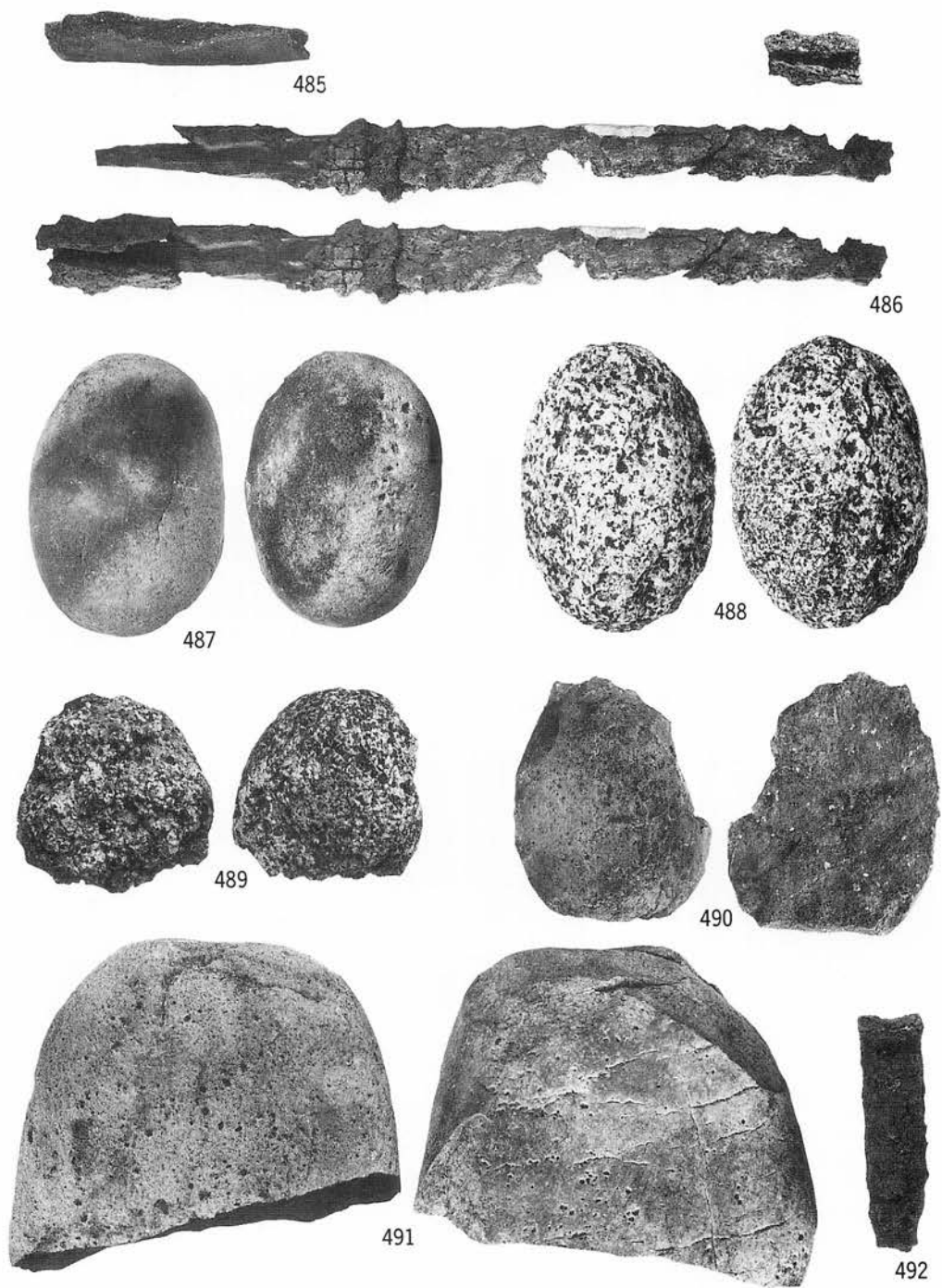
写真図版 81 出土遺物 (AL9・BB12・BF5 住居跡状遺構・BF12 工房跡)



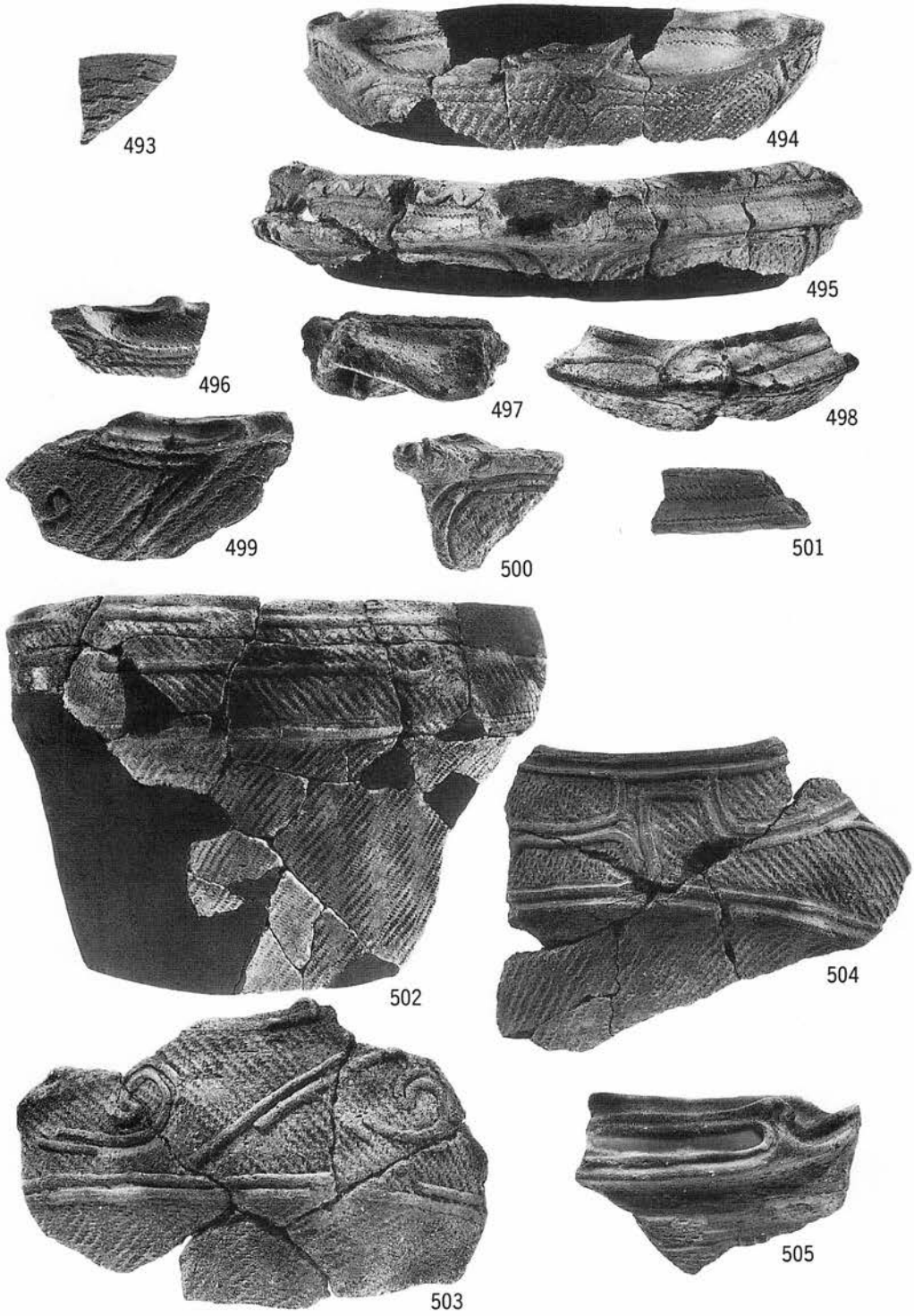
写真図版 82 出土遺物 (BF12工房跡)



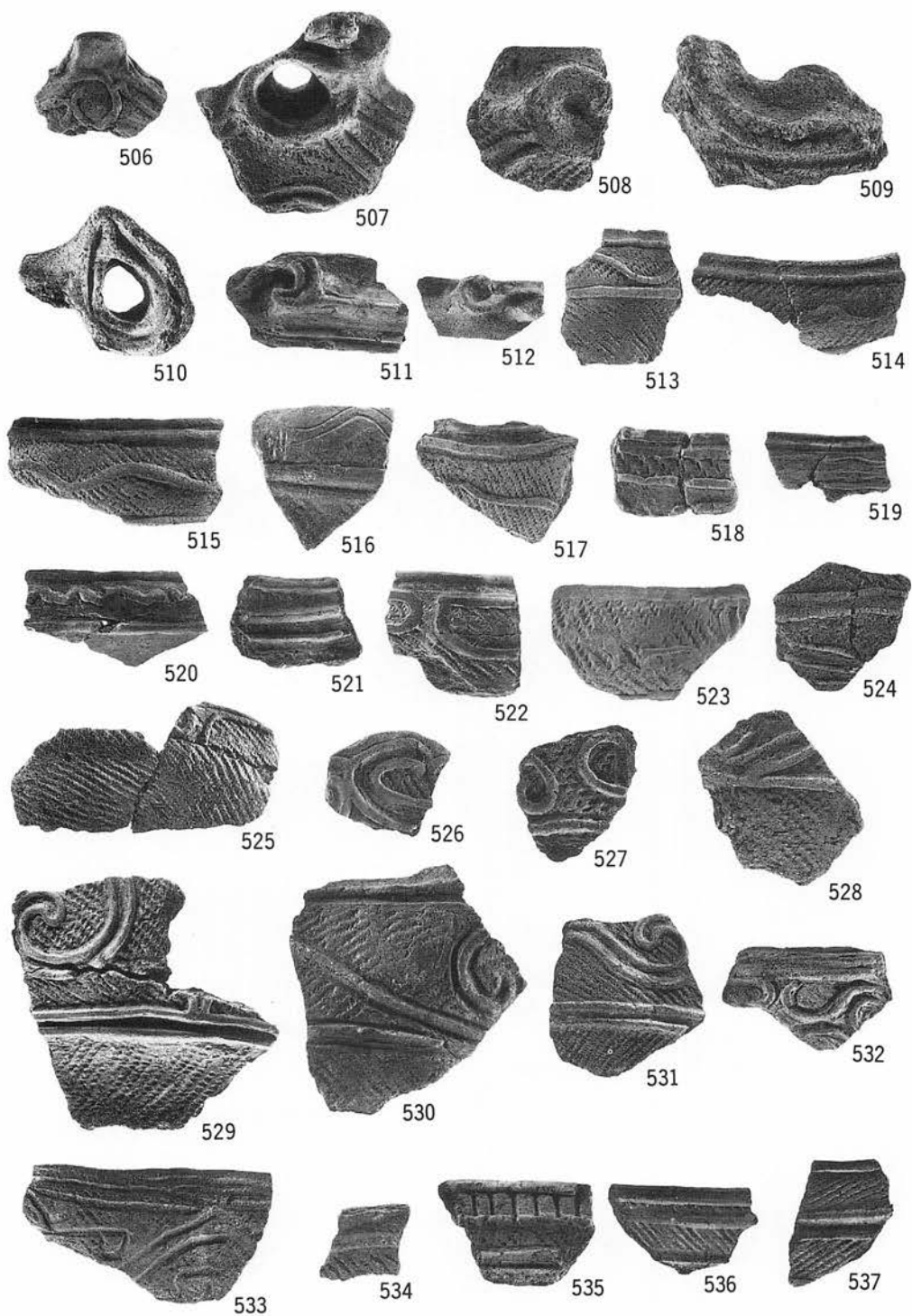
写真図版 83 出土遺物(BF12工房跡・AE5・AC7・AG7・AH4・AL10・AM6 土坑)



写真図版 84 出土遺物 (AM7・BH11土坑)

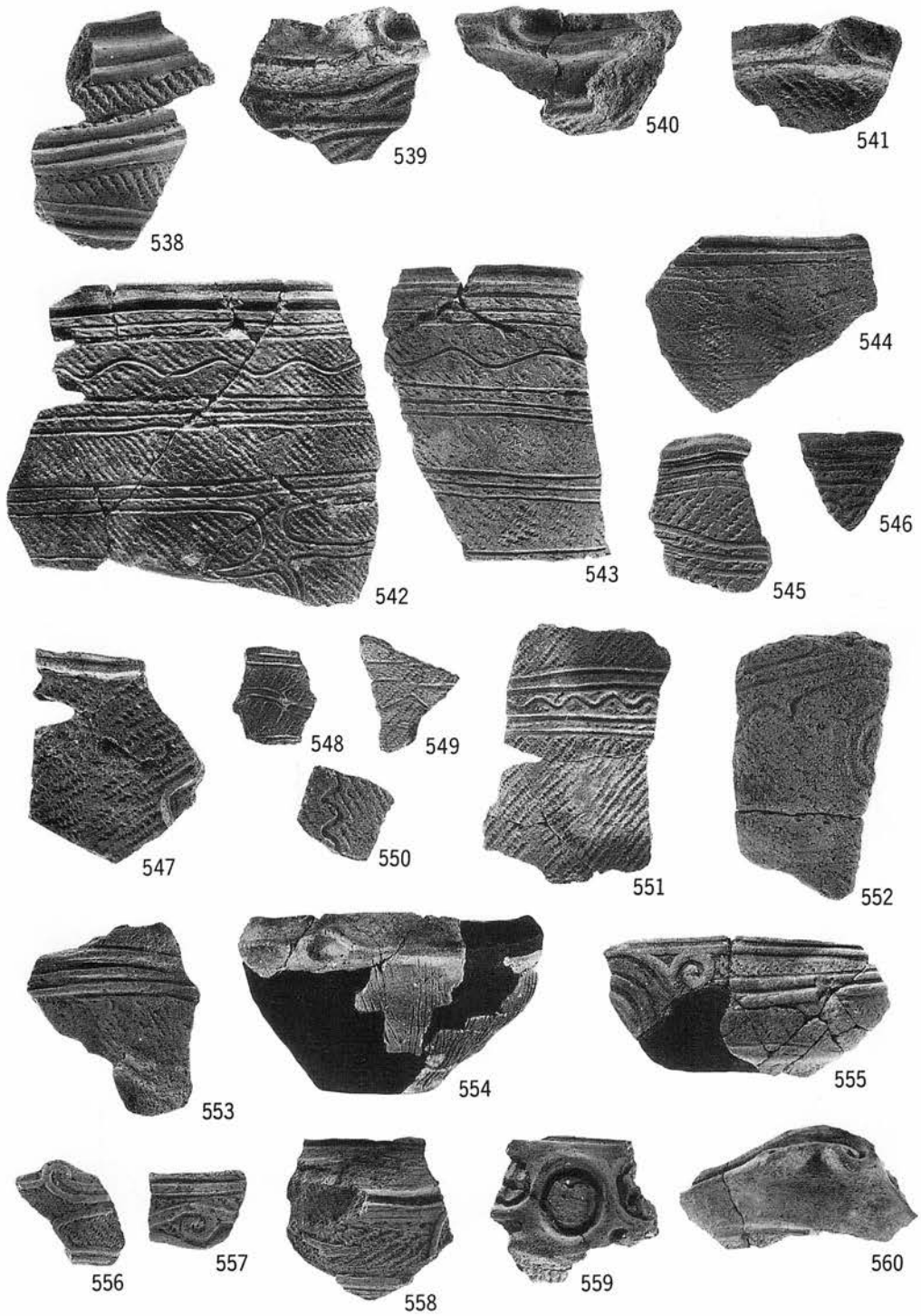


写真図版 85 遺構外出土遺物(縄文土器)

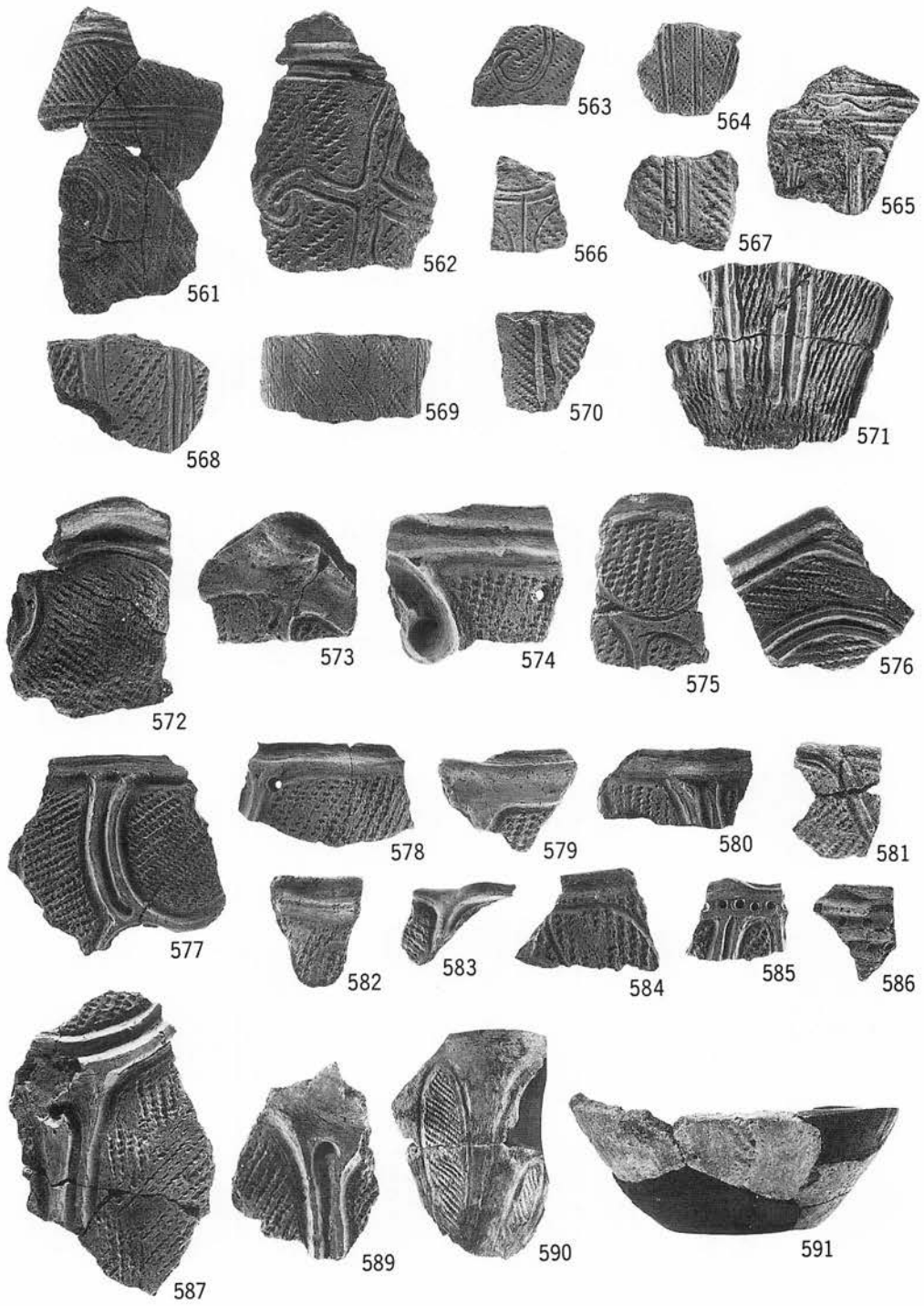


写真図版 86 遺構外出土遺物(縄文土器)

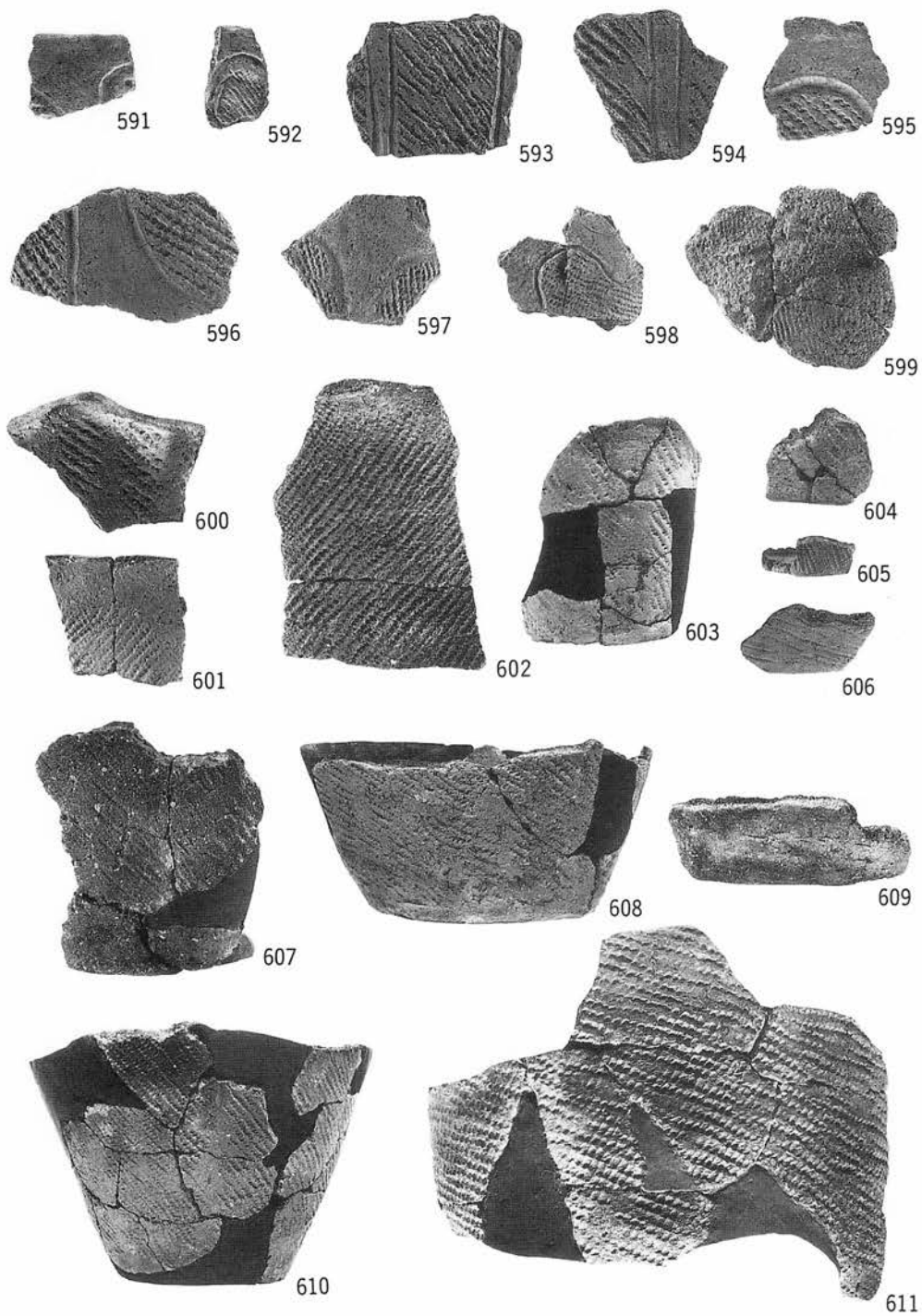




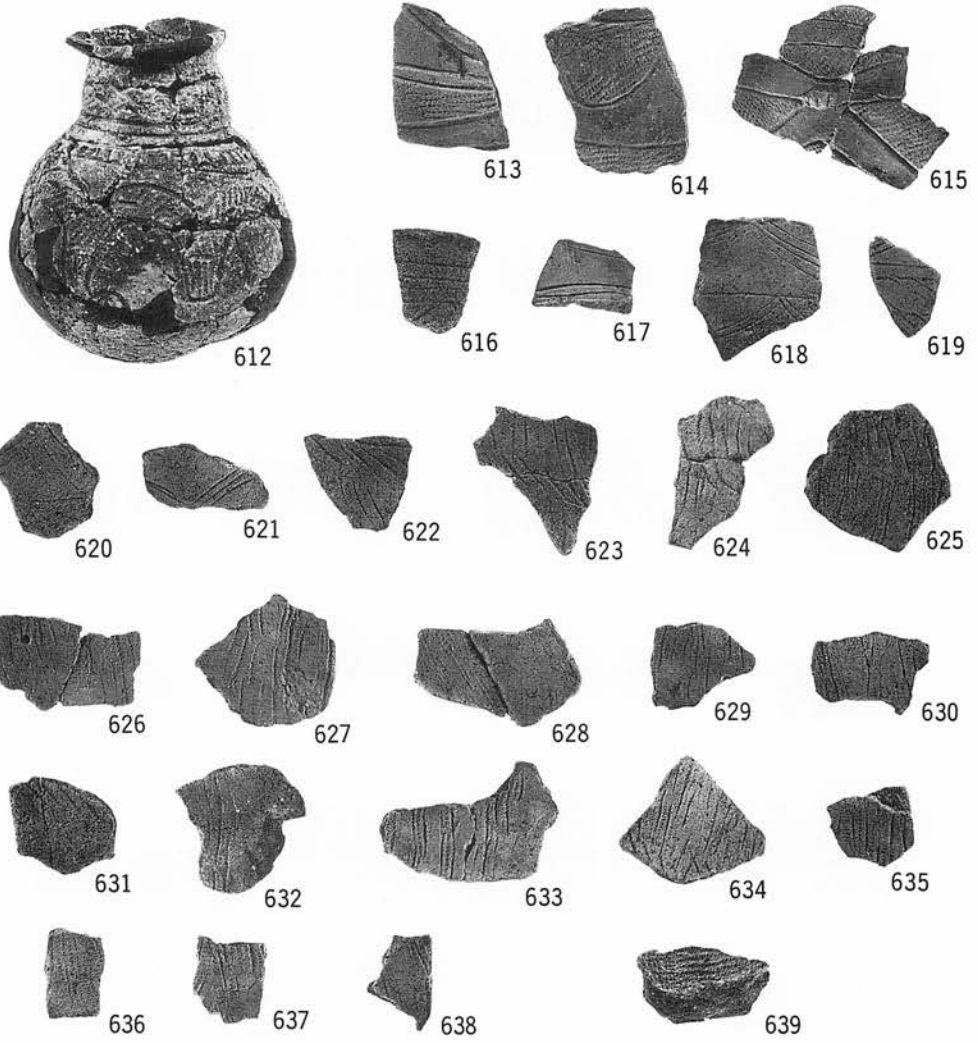
写真図版 87 遺構外出土遺物(縄文土器)



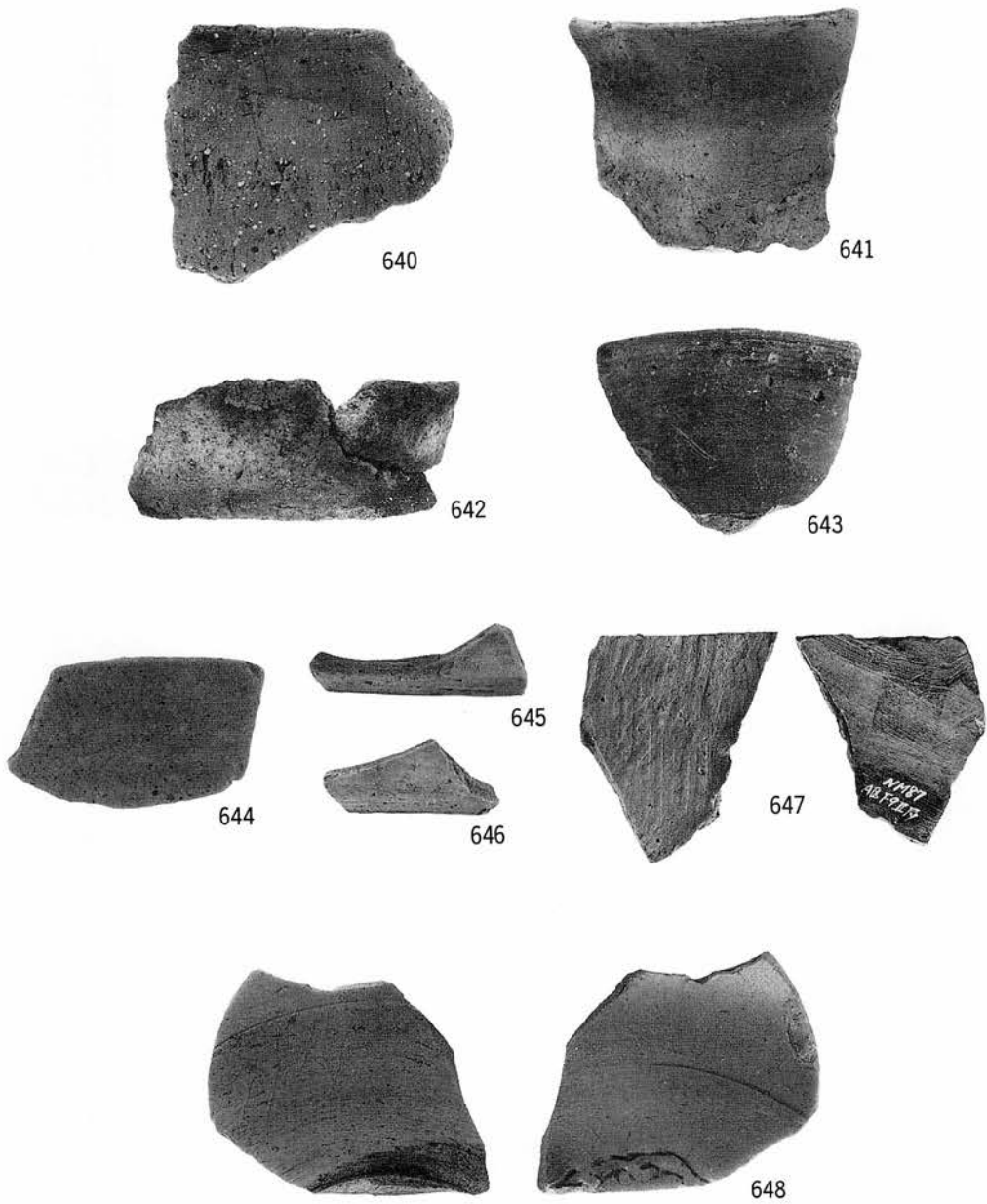
写真図版 88 遺構外出土遺物(縄文土器)



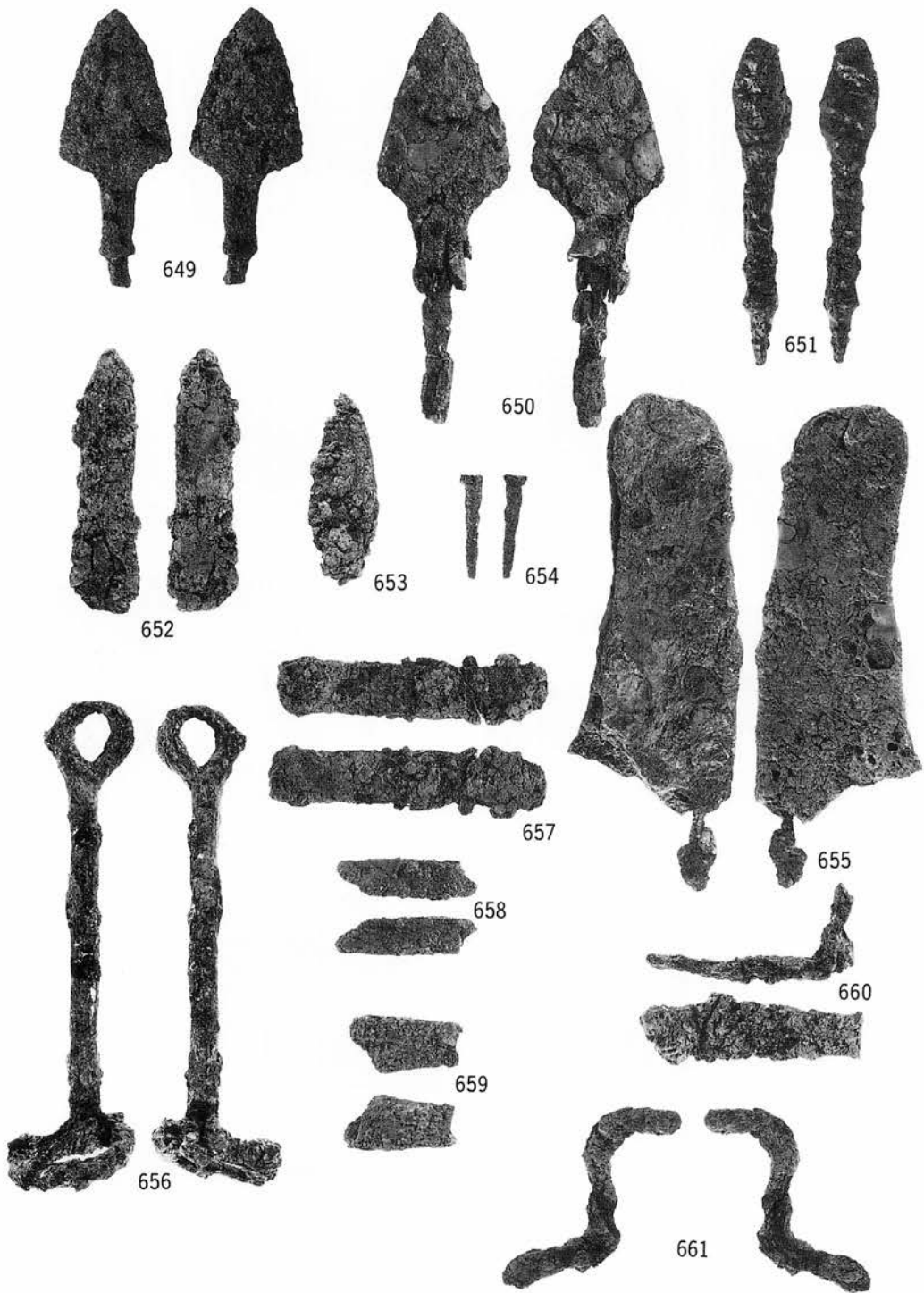
写真図版 89 遺構外出土遺物(縄文土器)



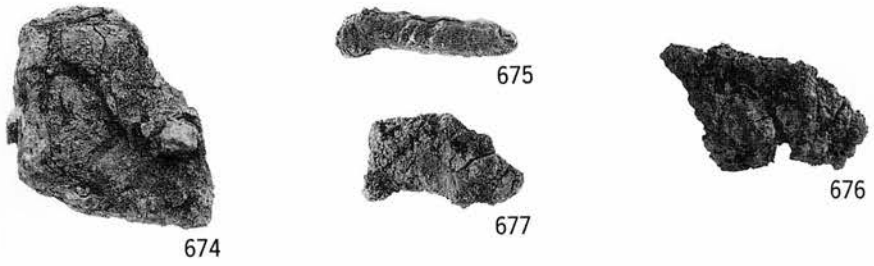
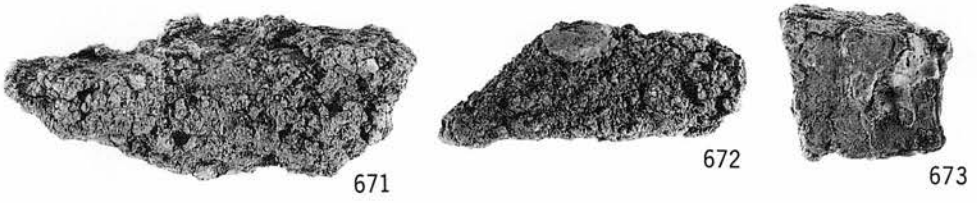
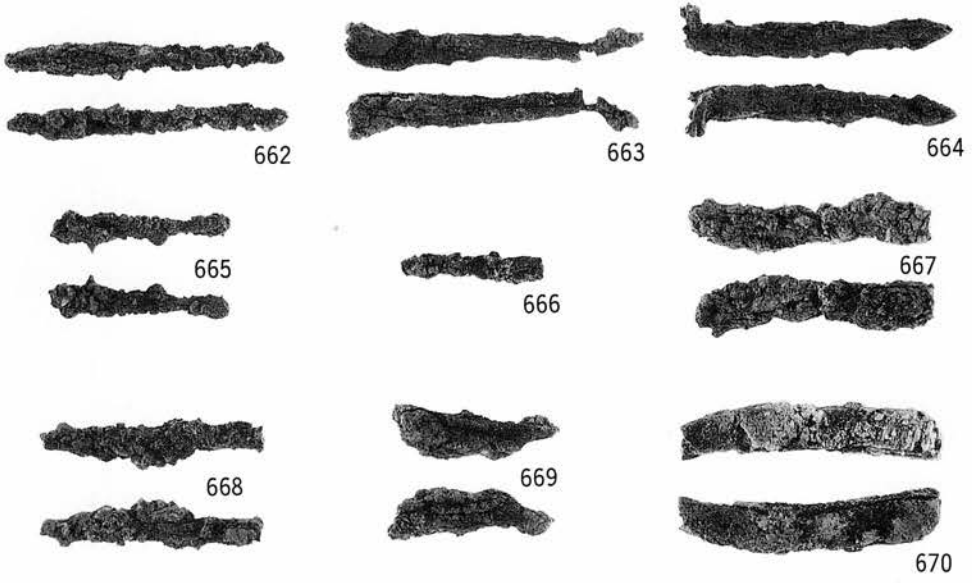
写真図版 90 遺構外出土遺物(弥生土器)



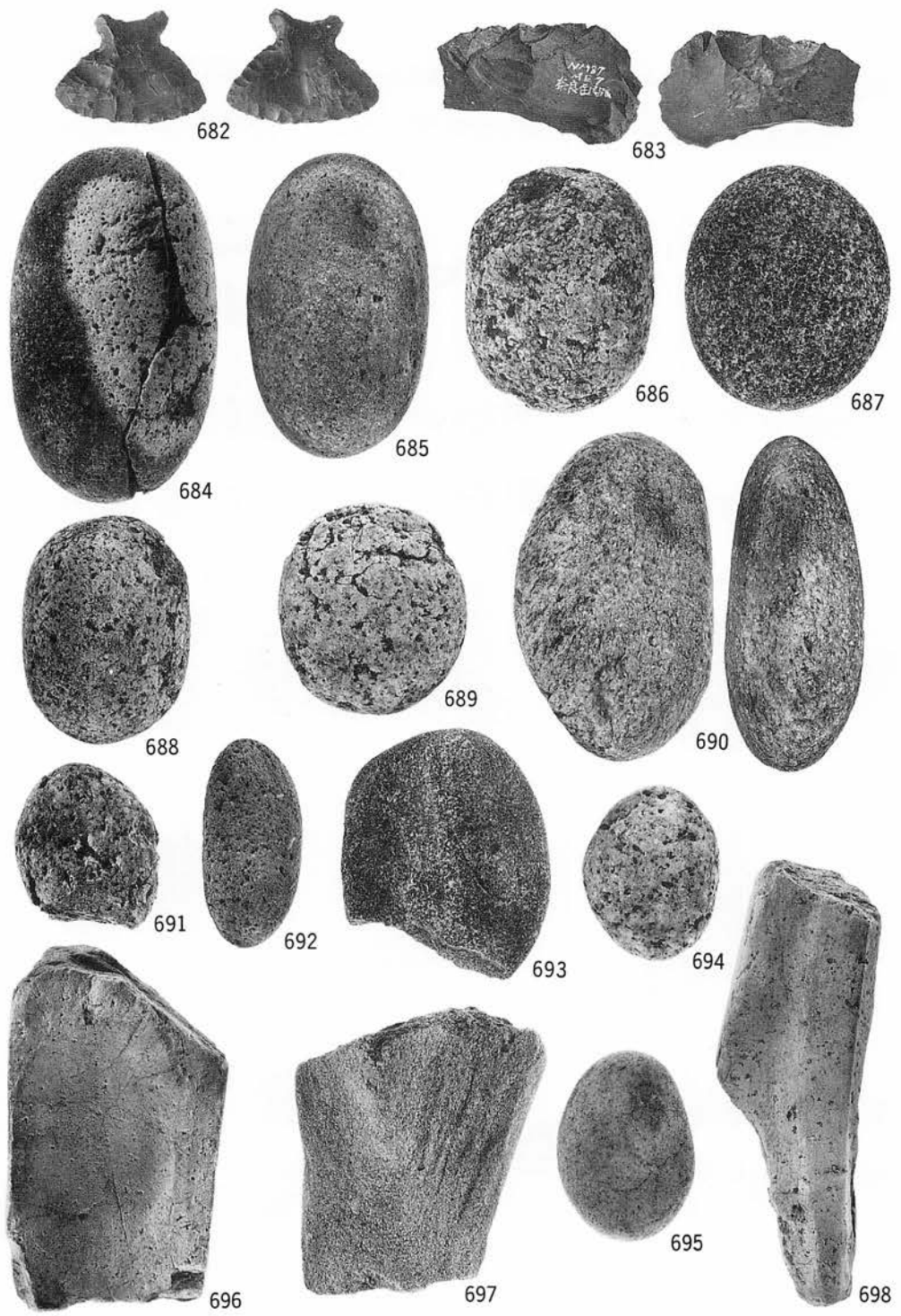
写真図版 91 遺構外出土遺物(土師器・須恵器・陶磁器)



写真図版 92 遺構外出土遺物(鉄製品)

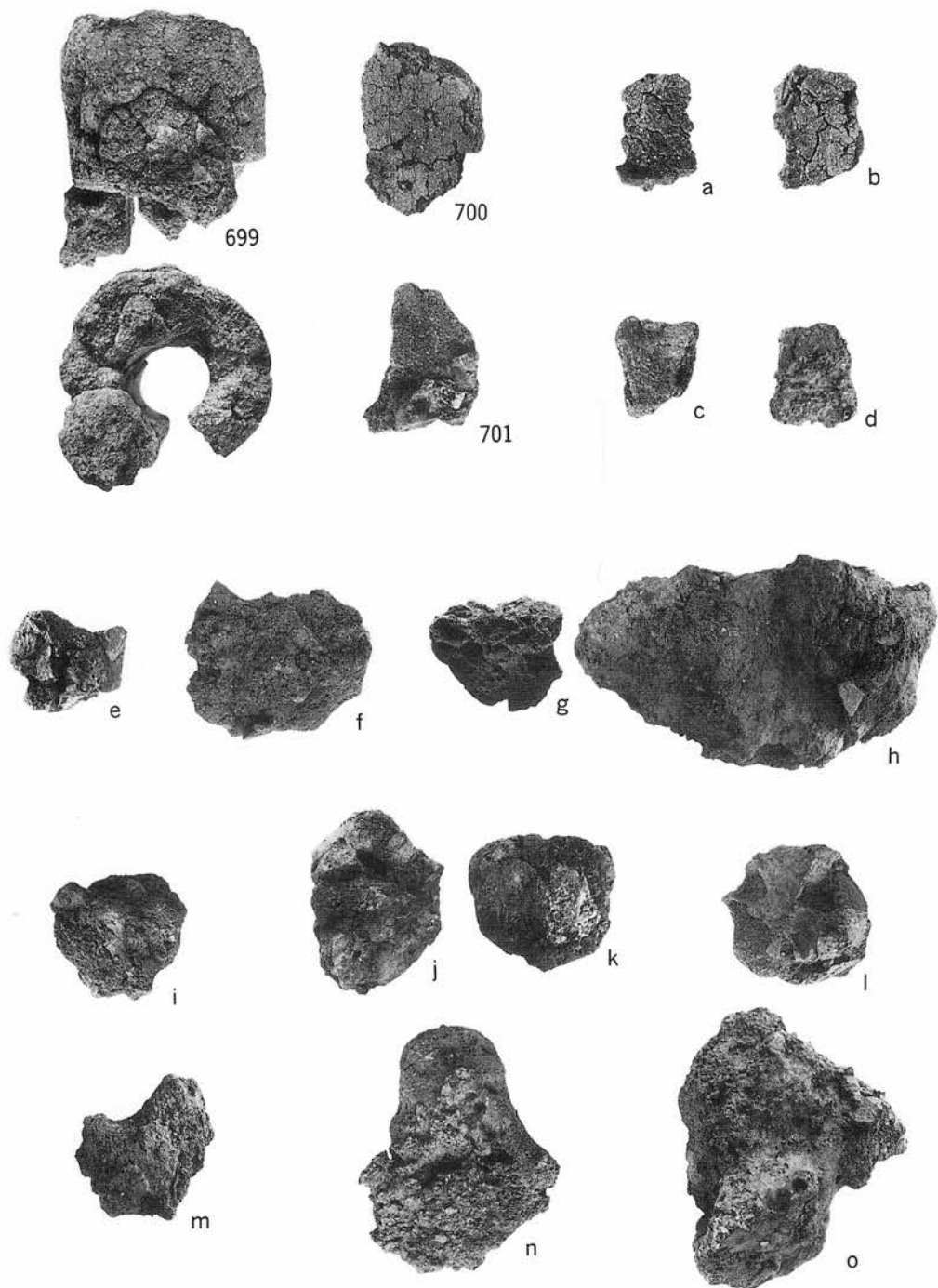


写真図版 93 遺構外出土遺物(鉄製品)



写真図版 94 遺構外出土遺物(石器)





写真図版 95 遺構外出土遺物(羽口・鉄滓)

# 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所 長 及 川 昌 二  
副 所 長 鎌 田 良 悦

〔管理課〕

管理課長(兼)	鎌 田 良 悦	嘱 託	似 内 喜 兵
課長補佐	伊 藤 吉 郎	運 転 技 術 士	兼 佐 藤 春 男
主 事	阿 部 隆 広		

〔調査課〕

調査課長	昆 野 靖		
主任文化財 専門調査員	三 浦 謙 一		
〃	工 藤 利 幸	文 化 財 専門調査員	佐 瀬 隆
〃	高 橋 与右エ門	〃	玉 川 英 喜
〃	田 鎖 寿 夫	〃	斎 藤 博 司
〃	佐々木 嘉 直	〃	東 海 林 隆 幹
〃	平 井 進	〃	遠 藤 修
〃	中 村 良 一	〃	斎 藤 邦 雄
〃	中 川 重 紀	〃	高 橋 義 介
文 化 財 専門調査員	光 井 文 行	〃	酒 井 宗 孝

〔資料課〕

資料課長	新 田 和 雄
主任文化財 専門調査員	小 田 野 哲 憲

---

---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第134集

## 夏本遺跡発掘調査報告書

国道45号大槌バイパス関連遺跡発掘調査

印刷 平成元年2月25日

発行 平成元年2月28日

発行 財団法人岩手県文化財振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 紫波郡都南村大字下飯岡11-185

TEL (0196) 38-9001

印刷 山口北州印刷株式会社

〒020-01 盛岡市青山四丁目10-5

TEL (0196) 41-0585